・ 教育研究業績

■人間学部 1
（人間）鈴木　公洋 1
（人間）李　　東彦 26
（人間）八木　一成 35
（人間）内之宮　則子 44
（人間）田中　秀生 53
（人間）長谷川　健司 65
（人間）猪池　雅憲 74
（人間）小高　恵 87
（人間）糸田　千鶴 126
（人間）黒川　正剛 134
（人間）高橋　清 157
（人間）金杉　高雄 169
（人間）笠井　昇 183
（人間）井手　裕美 196
（人間）池辺　晴美 201
（人間）雜賀　亮一 214
（人間）佐々木　豊 224
（人間）井野　よし子 234
（人間）尾島　重明 239
（人間）河上　俊和 253
（人間）藤田　英治 331
（人間）河合　篤史 381
（人間）山本　由紀子 393
（人間）新川　朋子 397
（人間）林　準平 419
（人間）伊藤　博 433
（人間）近藤　真理子 433
■経営学部 434
（経営）釣島　平三郎 434
（経営）村田　史之 447
（経営）松浦　宏之 451
（経営）若宮　達夫 477
（経営）金　　栄俊 494
（経営）吉川　博史 494
（経営）関戸　恒昭 503
（経営）嶋崎　裕志 506
（経営）工藤　英男 523
（経営）小倉　哲也 553
（経営）福田　真規夫 574
■看護学部 610
（看護）東出　崇 610
（看護）石澤　靖子 610
（看護）勝丸　博信 610
（看護）山口　眞由 611
（看護）三井　京香 617
（看護）吉岡　由喜子 617
（看護）屋敷　久美 631
（看護）城内　貴代美 643
（看護）福岡　珠美 663
（看護）江崎　薫世 677
（看護）西山　円 684
（看護）市森　裕章 691
（看護）柏原　米男 691
（看護）大熊　淳子 691
（看護）錦織　史子 701
（看護）田中　俊明 717
（看護）岡本　祐佳里 725
（看護）長田　律子 725
（看護）田山地　麻里 737
（看護）熊谷　桂子 742
（看護）広瀬　正和 754
（看護）大浦　清 754
（看護）肥後　恵美子 754
（看護）森下　尚美 754

■人間学部

（人間）鈴木　公洋

教育研究業績書

2018 年　3　月　16　日

氏名　鈴木　公洋　　印

研究分野	研究内容のキーワード	
心理学	実験心理学	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例	2008 年 1 月～	ウェブサイト「鈴木公洋　心理学研究室」を開設した。 http://www.eonet.ne.jp/~kimihiro/
	2016 年 4 月	学生の事前事後学習促進目的として，学内 HP 上に授業内容を公開した。
	2016 年 4 月	学生の事前事後学習促進目的として，学内 HP 上に授業内容を公開した。
2　作成した教科書，教材	2001 年 4 月	「心理学実験実習」において、観察条件を変えると同じ速度で運動している物体が、異なった速さで運動していると知覚すること(ブラウン効果)を体験(実験)できる装置を作成した。
	2001 年 9 月	「心理学実験実習」において、同じ明るさの刺激でも、並置する刺激の明るさが異なると、異なった明るさとして知覚すること(明るさの同時対比)を体験(実験)してもらうため、装置を作成した。
	2008 年 4 月	「心理学実験実習」において両側性転移：学習の転移・転移率・学習曲線等の検討をしてもらうため，鏡映描写の装置を作成した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価	2016 年 4 月	大学からの自己点検・評価での評価結果は以下のとおりである（2015 年度，5 段階評価）

		I ミッションを踏まえたビジョン実現のための基本方針に関する貢献目標:4 II 自らの担当する授業科目の教育効果・学生の学修意欲の向上のためのアクティブ・ラーニングに関する目標、および教育方法・教材開発等の資質向上目標:4 III 学内校務による貢献目標: 3 IV 学生に対する学修指導、学生生活指導、進路指導に関する教育目標、または学生の課外活動支援等学生支援に関する貢献目標: 3 V 学会誌・専門誌等への論文投稿、学術著書執筆などにおいて、授業科目を通して教育に還元できる研究活動に関する目標: 4 特記事項： 心理学検定資格 2 級、認定心理士、心理学検定資格 1 級取得につなげるために、該当授業科目シラバスに内容を盛り込んだことは高く評価できるので、さらに学生の学修意欲の向上につながるような授業改善に期待します。
4　実務の経験を有する者についての特記事項	2000 年 4 月 2004 年 3 月 2009 年 9-10 月	関西大学工学部から依頼を受け、講演を行った。内容は、平成 14 年度関西大学重点研究「人に優しい技術：操作環境における協調作業が人間に与える影響とその応用に関する研究」の実施に於いて行われる心理実験について講演を行った。 春秋会城山病院から依頼を受け，講演を行った。「看護研究について」という演題のもとで看護研究を行うにあたってデータの収集，処理について必要な事項を紹介した。 大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け統計解析について講義を行った。

	2010 年 9 月	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け統計解析について講義を行った。
	2011 年 3 月	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け統計解析について講義を行った。
	2011 年 6 月	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け看護研究について指導を行った。
	2011 年 8 月	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け看護研究について指導を行った。
	2012 年 6 月	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け統計解析について講義を行った。
	2015 年 7 月	大学公開講座 はびきの市民大学からの依頼を受け 「認知の仕組み」について講義を行った。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格，免許 博士（関西大学） （社博第３号） 日本心理学会認定心理士	2000 年 3 月 2004 年 12 月	論題「Wagon Wheel Effect に関する実験的研究」 登録番号 11989
2 特許等		特になし
3 実務の経験を有する者についての特記事項		特になし
4 その他	2010 年 11 月	第 2 回錯視コンテスト 入賞
	2016 年 8 月	Researchgate によると 1 Useful Information for Face Perception Is Described with FACS は 12 件の論文に引用されている。 2 Effects of visual-field inversions on the reverse-perspective illusion は 23 件の論文に引用されている。

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

（著書）				
1. 心理臨床大事典「改訂版」	共著	2004 年 2 月	培風館	氏原寛，成田善弘 ，山中康裕， 亀口憲治，東山 紘久（編） 心理臨床大事典「改訂版」において「代表値」「統計的検定」を担当した。 「代表値」は観察・調査・検査・実験等によって，測定されたデータ集団の分布において中心的な位置を表す測度と考えることができる。 無作為標本を抽出する際には当然母集団が想定されているはずであり，その母集団には何らかの特性が存在していることは仮説として挙げることができる。その仮説が客観的に妥当であるかどうかを無作為標本にもとづいて決定することを,「統計的検定」と呼ぶ。604-605 頁，618-619 頁（B5 総 4 頁）
2. 子供を育む心理学	共著	2007 年 4 月	保育出版社	小林芳郎編著「子どもを育む心理学」の 5 章 1 節「知覚の発達」を担当した。本節は 3 項から成る。「乳幼児の知覚（感覚も含む）の発達」では，乳児の各モダリティ（視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚）の発達と，幼児の「中心化」「相貌的知覚」を紹介した。「児童の知覚の発達」では，児童の「自己中心性」「混同心性」を紹介した。「知覚を育む支援と発達」では，先に解説した内容を踏まえて，子どもの環境の重要性を解説した。72-78 頁（B5 総 7 頁）
3. 高齢者のための心理学	共著	2008 年 4 月	保育出版社	小林芳郎編著「高齢者のための心理学」の 6 章 3 節「感覚と知覚の加齢変化」を担当した。本節は 2 項（「感覚の加齢変化」と「知覚の加齢変化」）から成る。「感覚の加齢変化」では「感覚」の定義，「加齢に伴う感覚の変化」について紹介し，「感覚の加齢変化がもたらす影響」について言及した。「知覚の加齢変化」では「知覚」の定義，「加齢に伴う知覚の変化」について紹介し，「知覚の加齢変化がもたらす影響」について言及した。78-81 頁（B5 総 4 頁）

4. 自然と科学の情報誌 milsil No.3	単著	2008年5月	国立科学博物館	親子で遊ぼう 科学冒険隊 #3 トリックアートを体験する 26-29頁 (A4 総4頁)
(学術論文)				
1. Wagon Wheel Effectに関する実験的研究(1)実験装置	単著	1994年9月	関西大学大学院『人間科学』第41号	Wagon Wheel Effect現象の定義，並びにMetzger(1953)によるWagon Wheel Effectを知覚するメカニズムについての研究の紹介をした。また，作製したWagon Wheel Effectを発生させる機械装置及び機械を作動させるためのプログラムを解説した。 111-130頁 (A5 総20頁)
2. Wagon Wheel Effectに関する実験的研究(2)	単著	1995年3月	関西大学大学院『人間科学』第42号	Wertheimer(1912)に始まるGestalt心理学の古典的仮現運動に関する研究史を紹介した。次にFineman(1981)；Ullman(1979)；Finlayら(1984)によるWagon Wheel Effectについての研究成果を紹介し，古典的仮現運動とWagon Wheel Effectとの関係について言及した。189-207頁 (A5 総19頁)
3. 視覚的持続について	単著	1995年9月	関西大学大学院『人間科学』第43号	刺激が消失しても直ちに見えは消失せず，しばらくの間残ることを視覚的持続という。本研究では視覚的持続の研究史を紹介した。 151-175頁 (A5 25頁)
4. Wagon Wheel Effectに関する実験的研究	単著	2000年3月	関西大学（博士論文）	学部卒業研究時から大学院博士過程修了時までになされたWagon Wheel Effectに関する研究を統括したものである。本論は4章で構成されている。1章では現象の仕組みをめぐる過去の論争から問題点の摘出がおこなわれた。2章ではその問題点を精査するために作製した機械装置の説明と，それを用いておこなった実験の結果が報告された。3章では，前章の実験で発見されたWagon Wheel Effectの特質には合致しない現象についての実験的な探索がおこなわれた。4章では2章と3章で得られた結論とそれに関連すると思われる神経生理学及び視覚計算理論の領域での知見との整合性が検討された。 A4 総190頁

5. へなへなエンピツ -視的撓い発生の条件-	共著	2002年3月	関西大学社会学部紀要　第33巻第2号	エンピツの端に近いところを親指と人差し指でゆるく支えて水平にし，波うつように上下に揺らすとエンピツがゴムの棒のようにへなへなと撓って見える。この錯視現象はRubber Pencil illusion(RPI)と呼ばれている。過去，本学において行われたRPIにかんする研究を紹介し，視的撓いの発生について考察した。＜共同研究者＞池田進　倉田純一　273-305頁　(B5　総32頁)
6. Effects of visual-field inversions on the reverse-perspective illusion	共著(査読付き)	2002年9月	Perception, vol. 31(9)	遠近反転図形を左右反転逆さめがね，上下反転逆さめがねを装着することにより，如何なる現象の変化が起こるかを実験的に検討した。＜共同研究者＞Norman D Cook, Takefumi Hayashi, Toshihiko Amemiya, Lorenz Leumann　1147-1151頁　(B5 総5頁)
7. Useful information for face perception is described with FACS	共著(査読付き)	2003年3月	Journal of Nonverbal Behavior, vol. 27(1)	基本6表情について，それぞれが無表情から最大表出まで時系列的に変化する11枚の刺激をランダムに提示し，表情判断させる課題を実施した。被験者の表情判断とFACS（表情の変化を強度も含め，記述する測定具）による刺激の評定との関係を検討した。その結果，表情判断はFACSの評定と非常によく対応していることが確認された。これは，静止刺激の中にFACSで記述されたような無表情からの表情の変化が情報として存在していることを示唆する。43-55頁（A5　総13頁）＜共同研究者＞Kenichi Naitoh
8. 保護剤とラップを併用した眼瞼保護	共著(査読付き)	2008年3月	第38回 日本看護学会論文集（成人看護Ⅰ）	本研究では，眼瞼保護剤を塗布しさらにラップで覆うことが，２次的障害の予防に有効であるかどうかを，過去の手法（眼瞼保護剤を塗布し，テープで閉じる）による２次的障害の発症と比較することによって検討した。閉眼する手法をテープからラップへと変更することで，2次的障害の発症率は減少した。238-240頁　(A4 総3頁)　＜共同研究者＞ 大野博美

9. 脳活動計測機器を用いた意識障害患者の認知リハビリテーション(2 例)	共著(査読付き)	2011 年 9 月	認知リハビリテーション Vol. 16(1)	本研究では,受傷後 3 年 6 ヶ月(慢性期)と 6 ヶ月(回復期)の意識障害患者を対象とし,脳活動モニタリングによる認知機能評価と認知リハビリテーションの開発について検討した。先ず,背面開放座位がとられ,患者の覚醒水準の上昇を確認した後,刺激が提示された。目視と脳活動計測機器により,患者の覚醒水準と認知活動を確認していく方法がとられた。刺激は,患者の反応を確認しながら,探索的に提示していく方法がとられた。その結果,脳活動モニタリングについては,その有効性が示され,リハビリテーション内容についての比較の可能性も示された。認知リハビリテーションについては,患者の趣味・嗜好(特に受傷時からあまり遡らない時期の)にかかわる刺激が,有効に認知活動を賦活させる可能性が高いことが示された。これは,認知リハビリテーションを有効に施行する上で,患者の記憶機能が大きな役割を担っていることを示唆するものと考えられる。25-34 頁 (B5 総 10 頁) 共同研究者>辻尾厚司・小渕恭輔・ 中村昌司・今井智弘

10. 格子縞の上の直方体の錯視に関する実験的研究	単著(査読付き)	2012 年 3 月	基礎心理学研究 vol. 30(2)	本研究では，格子縞の上の直方体の錯視に影響を与えると考えられる要因ついて実験的に検討した。実験の結果，図形の背景部位の要素が錯視に与える影響はみられず，格子縞は誘導図形ではないことが確認された。両眼網膜像差は，錯視現象を抑制する要因と考えられた。観察される直方体の高さは，単眼観察条件が両眼観察条件よりも有意に低くなった。本錯視が起きる主たる要因の一つは，平面上に描かれた直方体の絵画的奥行き手がかりであると考えられた。さらに単眼観察条件下で，平面上に描かれた直方体が立体的に見えるという新たな現象が発見された。176-180 頁（A4 総 5 頁）
11. 看護職者の学習ニードと教育ニードとの相関　－クリニカルラダーレベルによる検討－	共著(査読付き)	2016 年 4 月	第 46 回 日本看護学会論文集（看護管理）	本研究では，A 病院における看護職者の学習ニードと教育ニードの実態調査を実施し，両ニード間の相関の有無についてクリニカルラダー別に検討することを目的とした。その結果，1.有意な相関は全て負の相関であった。学習の要望が高い看護師ほど教育の必要性が低い，あるいは学習の要望が低い看護師ほど教育の必要性が高いことが示された。2.有意な相関がみられた学習ニードの質問項目と教育ニードの下位尺度との組み合わせの多くが，ラダーレベルによって異なっていた。60－63 頁（A4 総）
（国際会議論文） 1. Effect of Attention on Visible Persistence	単著(査読付き)	1996 年 2 月	Investigative Ophthalmology & Visual Science, Vol.37/3	視覚的持続の持続時間が能動的注意によって変化することを心理実験的に検討した。実験の結果，観察者が能動的注意によって視覚的持続の持続時間を変化させることが出来る刺激閾が存在し，その刺激閾は個体間によって異なっていることが明らかになった。　531 頁（A4 総 1 頁）

2. Effect of Attention on Visible Persistence (comparison with luminance)	単著(査読付き)	1996年8月	International Journal of Psychology, Vol. 31(3/4)	刺激の輝度を変化させた場合，能動的注意によって視覚的持続の持続時間を変化させることが出来る刺激閾がどのように変化するのかを測定した。実験の結果，刺激閾は刺激の輝度に対応して変化することが明らかになった。18頁 (A4 総1頁)
3. The relation of spatial area and the threshold which active attention effects on visible persistence	単著(査読付き)	1997年3月	Investigative Ophthalmology & Visual Science, Vol.38/4	刺激が投影される網膜上の位置を，刺激の大きさを変化させる方法で変化させた場合の視覚的持続について実験的に検討した。実験の結果，能動的注意によって視覚的持続の持続時間を変化させることが出来る刺激閾は，刺激が提示される網膜上の位置に対応して変化することが明らかになった。364頁 (A4 総1頁)
4. Perceived patterns of the wagon-wheel effect	単著(査読付き)	1999年8月	Perception, Vol.28, Supplement	Wagon Wheel Effectの図柄がどのような視覚的機能により出現したかを心理実験的に明らかにした。知覚される図柄は，視覚的持続時間内に提示された各々の刺激を一つのまとまりとして知覚したものであり，それらの刺激の図柄が時間的中間混色したものである。また，混色した図柄の模様や色は，図柄の空間部位間の（明るさ，色といった）対比の効果により決定される。120頁 (B5 総1頁)
5. Reverse perspective and the effects of visual field reversals	共著(査読付き)	2002年7月	Perception, Vol.31, Supplement	遠くあるべきものが手前に，近くにあるべきものが奥に描かれている立体的な図形（遠近反転図形）を観察すると如何なる現象が現れるかについて，実験的に研究した。＜共同研究者＞Norman D Cook, Takefumi Hayashi, Toshihiko Amemiya 159頁 (B5 総1頁)

6. Body width estimation is affected by the experience of walking through an aperture.	共著(査読付き)	2007年9月	Perception, Vol.36, Supplement	自分の身体が眼前にある隙間を通ることが出来るかどうかという見通しについては，いくつかの先行研究があるが，実際に通行することによってその見通しがどのように変化するのかという研究はあまり見られない。本研究は，実際にその隙間を通るという経験によって見通しがどのように変化するのか，またその見通しには年齢差がみられるのか。さらに，その経験による影響は2ヵ月後にはどのようになっているかを検討したものである。＜共同研究者＞ Mikari S Tada　15頁（B5　総1頁）
7. Texture patterns of background effect on the reverspective illusion.	単著(査読付き)	2007年9月	Perception, Vol.36, Supplement	リバースペクティブ図形の背景部位に描かれたテクスチャ勾配が，錯視現象の強さにどのように影響するのかについて検討した。 205頁（B5　総1頁）
8. Effects of background texture patterns on the reverspective illusion.	共著(査読付き)	2008年8月	Perception, Vol.37, Supplement	凹部分が無地のリバースペクティブ図形を用いて，背景部位に描かれたテクスチャ勾配が錯視現象の強さにどのように影響するのかについて検討した。＜共同研究者＞ Mikari S Tada　120頁（B5　総1頁）
9. Why Andrea Mantegna used an artistic technique 'foreshortening' in "Lamentation over the dead Christ"	単著	2010年2月	The 3rd International Workshop on Kansei 2010, proceedings	Andrea Mantegna作の "Lamentation over the dead Christ"という作品では線遠近法を歪めた形で表現できる「短縮法」と呼ばれる描画技法が用いられている。本研究では何故画家が「短縮法」を用いたのかという点について鑑賞者の眼球運動をもとに検討した。＜共同研究者＞ Nami Kumata 61-63頁（A4　総3頁）

10. Cognitive rehabilitation using a brain activation measuring instrument for patients with disturbance of consciousness (two cases)	共著(査読付き)	2011 年 6 月	program and summary of the ASSC 15 (Association for the Scientific Study of Consciousness)	本研究は、意識障害患者に対する認知リハビリテーションの開発を目的としたものである。受傷後 4 年と、4 か月の意識障害患者 2 例について紹介した。患者の覚醒の水準を上げた後、認知機能を賦活させると考えられる刺激を提示した。刺激は、受傷前の患者の趣味・嗜好などから個別に作成した。刺激に対応した脳活動が、確認された。＜共同研究者＞Kimihiro Suzuki, Atushi Tujio, Kyosuke Kobuchi , Aya Yoshida, Ai Shimozawa, Shoji Nakamura, Tomohiro Imai, Mana Kitera, Koki Ide, Yuko Okumura, Kiyoshi Hasegawa, Takeshi Ogino 81 頁 (A4　総 1 頁)
(科学研究) 1. 逆遠近錯視を利用した奥行き知覚メカニズムの解明と臨床医学応用に関する研究 研究課題番号:16300085	共同	2004 年～2007 年	平成 16 年度科学研究　(独立行政法人　日本学術振興会) 基盤 B	逆遠近錯視を用いて人間の奥行き知覚におけるボトムアップとトップダウンの情報処理メカニズムを解明し，その結果を臨床医学における精神疾患の診断に応用することを目的とする研究。平成 19 年度まで。＜共同研究者＞Cook N. D.，林武文，林勲，雨宮俊彦，乾敏郎，ピーター　ブルガー，ウド　シュナイダー
2. 実験心理学における古典的実験機器のアーカイブ化とその活用 研究課題番号 : 19330162	共同	2007 年～2008 年	平成 19 年度科学研究　(独立行政法人　日本学術振興会) 基盤 B	本研究では，国内で行われてきた実験心理学研究に関連した機器や資料の現状の把握，保管方法の検討及び活用方法に関して検討した。本研究活動の成果として,1) 国内の研究機関で保管されている機器の状態の把握,2) 廃棄予定の機器の移設,3) 機器・資料のデジタルアーカイブ化,4) 機器・資料の閲覧方法の検討の 4 つが挙げられる。これらの成果を通じて，日本の実験心理学の歴史的資料を残し，伝えるための手法に関する基盤を築いた。〈代表者〉長田 佳久 〈連携研究者〉石井 澄，行場 次朗，金沢 創，三浦 佳世，山口 真美 苧阪 直行，藤 健一，佐藤 達哉，箱田 裕司，鈴木 光太郎，櫻井 研三，西川 泰夫，鈴木 清重，増田 知尋，佐藤 隆夫，吉村 浩一，椎名 健，本間 元康，

				高砂 美樹，仁平 義明，和田 有史〈研究協力者〉大山 正，鷲見 成正，増田 直衛，松田 隆夫，辻 敬一郎，古崎 敬
3．訪問看護事業所数の減少要因の分析及び対応策のあり方に関する調査研究事業	共同	2008 年	平成 20 年度老人保険健康増進等事業　（社団法人　日本看護協会）	訪問看護に対する認知並びにサービスの活用、取り組みを把握し、活性のための広報戦略を検討。訪問看護の認知度、サービス内容の認知度、サービスを選択しない理由、市町村における訪問看護サービス周知への活動の実態等を調査。＜共同研究者＞日本看護協会政策企画部，藤澤由和
4．急性期リハビリテーションにおける認知機能障害の評価尺度ならびに回復ツールの開発研究課題番号：21700557	単独	2009 年～2010 年	平成 21 年度科学研究　（独立行政法人　日本学術振興会）若手 B	本研究では、意識障害を起こした患者の急性期リハビリテーション時における認知機能障害の評定尺度の開発、ならびに急性期リハビリテーションにおいて使用する認知機能回復ツールの開発を目的とする。平成 22 年度まで

5. 心理学の古典的実験機器に関するデータベース作成とその活用 研究課題番号：22330203	共同	2010年～2012年	平成22年度科学研究 （独立行政法人 日本学術振興会）基盤B	本研究では，実験心理学の古典的実験機器，及び関連史料の調査研究，収集・保管と効果的な公開方法を確立する。そのため、実験心理学研究者（心理学チーム）と資料作成管理法研究者（アーカイブ研究チーム）の連携を中心に組織編成する。心理学チームは当該分野の歴史資料的価値をもつ文書・機器の収集・研究・補修などの作業と，デジタルデータ化を行う。アーカイブ研究チームはそれらを受けて管理・保存・開示に必要な作業を行う。また，両チームが連携し，開示における効果的なメタデータの検討と作成を行う。さらに，これらの成果を活用した心理学の古典的実験機器の魅力的なWEBミュージアムを整備し稼働させることにより、ハード（機器）とソフト（体験）の関係を歴史的に学ぶ機会を広く一般に提供する。平成24年度まで
6. 家族とのICT利用による患者のストレス軽減と認知機能賦活の検討 研究課題番号:17K12432 （学会発表）	共同	2017年～2020年	平成29年度科学研究 （独立行政法人 日本学術振興会）基盤C	入院を契機とした患者のコミュニケーション機会の減少は，ストレス関連疾患，認知機能の低下等による様々な疾患の発症につながることが推測される。我々は，入院患者とその家族とのコミュニケーションの機会を増やすことが，患者のストレス軽減だけでなく，認知機能を賦活させることにもつながるのではないかと考えた。本研究は，患者とその家族とのICT（情報通信技術）利用による遠隔コミュニケーションが，患者のストレス軽減と認知機能賦活に有効であるかについて，患者の脳，生理，心理データから検討する。研究期間内には，コミュニケーションの相手，疾病の特性，コミュニケーションの継続期間の3点から効果の違いを検討する。また，ストレス軽減と認知機能賦活との関連についても検討する。＜代表者＞鈴木 公洋＜研究分担者＞井村 弥生，本多 容子

1. Wagon Wheel Effect に関する基礎的研究	共同	1994年10月	関西心理学会 第106回大会 （於　神戸女学院大学）	Wagon Wheel Effectの図柄を形成する刺激要因として，刺激図形に描かれたスポークの数，刺激図形の回転数，刺激図形を照射するストロボ光の周波数の3つを変数として取り出せると考えた。この仮説をもとに，Wagon Wheel Effectの図柄が刺激図形と同じ図柄で，しかも止まって見える現象にのみ焦点を当て，これらの図柄を3つの変数により記述した。＜共同発表者＞池田進
2. Wagon Wheel Effect に関する実験的研究(1)	単独	1995年10月	日本心理学会 第59回大会（於 琉球大学）	Wagon Wheel Effectの図柄が止まって見える現象の中でも，刺激図形に描かれているスポークよりも多い数のスポークが出現する場合を計測した。また，その際の刺激図形の回転数と刺激図形を照射しているストロボ光の周波数との関係を検討した。
3. 注意による視覚的持続への効果	単独	1996年4月	第29回 知覚コロキアム （於 大阪大学）	視覚的な機能である視覚的持続の持続時間をパラメータとして，（能動的）注意を数量化した。「見よう」とする能動的注意が，視覚的持続の持続時間を変化させることが出来ることを明らかにした。
4. Wagon Wheel Effect に関する実験的研究(2)	単独	1996年9月	日本心理学会 第60回大会（於 立教大学）	Wagon Wheel Effectの図柄が出現する際，視覚的持続の機能が関係していることが示唆された。出現するスポークは，刺激図形に描かれているものとは異なったものが多く，この問題について実験的に再検討した。
5. Wagon Wheel Effect に関する実験的研究(3)	単独	1997年9月	日本心理学会 第61回大会（於 関西学院大学）	Wagon Wheel Effectの刺激図形の模様の輝度差を無くした場合の図柄を観察し，図柄出現の仕組みを考察した。

6. 「同一平面輝度比原理」の再検討 -視野全体の輝度関係の視点から-	単独	2000年11月	日本心理学会第64回大会（於京都大学）	白さの知覚について，同一平面におかれていると知覚する平面間の輝度比が重要であるとするGilchrist(1980)の「現象的同一平面輝度比原理」と，視野全体の部位間の輝度比が重要であるとするGilchrist et al.(1999)の “anchoring theory”との矛盾点を指摘し，実験的に検討した。
7. Experimental testing on anchoring theory of lightness perception	単独	2001年6月	York Conference: Levels of Perception （於York大学）	白さの知覚にかかわる要因を詳細に探るため，様々な3次元配置の刺激を用いて実験した。実験の結果，“anchoring theory”において提示されている”local framework”間の関係が白さの知覚に影響する要因であることが示唆された。
8. Observer movement and the reverse perspective illusion	共同	2002年8月	17th Congress of the international association of empirical aesthetics: IAEA 2002 （於宝塚造形芸術大学）	左右反転逆さめがね，上下反転逆さめがねを装着した観察者が移動しながら遠近反転図形をすると，どのような現象が知覚されるかを実験的に検討した。＜共同研究者＞Norman D Cook, Takefumi Hayashi, Toshihiko Amemiya, Lorenz Leumann
9. The rubber pencil illusion	単独	2002年8月	17th Congress of the international association of empirical aesthetics: IAEA 2002 （於宝塚造形芸術大学）	実際には撓ることのないエンピツだと理解していても，撓って見えるというラバー・ペンシル・イリュージョンは，視知覚の中では剛体の法則の崩壊を意味する。なぜそのようなことが起こるのかということについて，実験的に検討した。

10. 「同一平面輝度比原理」の再検討2 -履歴効果について-	単独	2002年9月	日本心理学会第66回大会（於広島大学）	「現象的同一平面輝度比原理」と”anchoring theory” を提唱したGilchristとのパーソナルコミュニケーションにおいて，鈴木（日心 2000）の実験計画が乱塊法による一要因被験者内計画であったことは問題であるとの指摘を受けた。これを受け，同一の被験者からいくつかのデータを採取することにより発生する履歴効果について実験的に検討した。
11. ハプティック・インターフェイスの提示力覚量の調整条件	共同	2002年9月	日本機械学会2002年度　年次大会　（於　東京大学）	ハプティック・インターフェイスを介して情報を提示する際の提示力覚量について，心理実験的に検討した。＜共同発表者＞石川嘉之，倉田純一，内山寛信，池田進
12. 力覚による不可知情報提示デバイスの設計	共同	2002年9月	第3回　計測自動制御学会　システムインテグレーション講演会　（於　神戸大学）	電動車椅子での移動時に不可知情報を伝達するデバイスの開発について発表した。＜共同発表者＞石川嘉之，倉田純一，内山寛信，池田進
13. 遠近反転図形　「リバースペクティブ」	単独	2004年3月	第37回　知覚コロキウム　（於東北大学）	遠近反転図形のデモを行った。
14. 表情知覚に有用な情報はFACSによって記述できるか　－ターゲット情動の選択とAUの合計数との関係－	単独	2004年10月	関西心理学会第116回大会（於　京都ノートルダム女子大学）	FACSと呼ばれる,表情の変化を記述する機器が如何に有意なものであるのかについて，FACSを構成しているAUの合計数いう観点から検討した。
15. 「リバースペクティブ」	単独	2005年3月	第38回　知覚コロキウム　（於立命館大学）	錯視図形「リバースペクティブ」が意味するものは何か，そして明らかにするべき問題点は何であるのかについて，レビューを通しながら検討した。
16. 白さの知覚に及ぼす隣接性と平面同一性の効果(2)	共同	2005年9月	日本心理学会第69回大会（於　慶応大学）	知覚的同一平面関係からずれている領域間の白さの知覚について検討し，同一平面の定義を再検討する必要性を示唆した。＜共同研究者＞大倉正暉

17.　遠近反転図形に関する実験的研究	単独	2006 年 3 月	第 39 回　知覚コロキウム　（於 名古屋大学）	遠近反転現象が両眼視条件での知覚される理由について実験的に検討した。
18．ＯＰＥ開始までの流れをスムーズにするには	共同	2007 年 3 月	第 95 回近畿救急医学研究会	救急救命センターでのアンケート調査から，手術開始までの改善点・対応策を検討した。＜共同研究者＞井出由起子
19．遠近反転図形の背景部位に描かれたテクスチャ勾配の効果	単独	2007 年 3 月	第 40 回　知覚コロキウム　（於 法政大学）	遠近反転図形の背景部位に描かれているテクスチャ勾配によって，錯視現象が知覚される観察距離が異なるのかについて検討した。
20．逆遠近錯視図形の背景部位に描かれた絵画的要因が奥行反転に及ぼす影響　－テクスチャ勾配についてー	単独	2007 年 9 月	日本心理学会第 71 回大会（於　東洋大学）	逆遠近錯視図形の背景部位に描かれたテクスチャ勾配による奥行き知覚と錯視現象が知覚される観察距離との関係について検討した。
21．保護剤とラップを併用した眼瞼保護	共同	2007 年 10 月	第 38 回 日本看護学会－成人看護Ⅰ－　（於 北海道）	眼瞼保護剤を塗布しさらにラップで覆うことが，２次的障害の予防に有効であるかどうかを，眼瞼保護剤を塗布し，テープで閉じる手法による２次的障害の発症と比較することによって検討した。＜共同研究者＞大野博美
22．リバースペクティブ図形の背景部位に描かれたテクスチャ勾配の効果	単独	2007 年 11 月	関西心理学会第 119 回大会（於　関西大学）	リバースペクティブ図形の背景部位に描かれたテクスチャ勾配によって，一定時間内の錯視現象の出現の割合に違いがあるかどうかについて検討した。
23．「看護師は患者の前で泣いてもよいか，そして泣いているか」	共同	2008 年 3 月	第 97 回近畿救急医学研究会　第 70 回看護部会（於　和歌山）	救命救急センター在職の看護師を対象に，看護師として働き始めた頃と現在において「看護師が患者の前で泣く」ということをどう考え，行動しているのかを調査した。＜共同研究者＞河野純子

24. 逆遠近錯視図形の背景部位に描かれたテクスチャ勾配が奥行反転に及ぼす影響	単独	2008 年 9 月	日本心理学会第 72 回大会（於　北海道大学）	錯視現象の強さのパラメータとして，①観察時間内に錯視現象が出現する合計時間，②錯視現象が出現する一回あたりの時間，③観察時間内に錯視現象が出現する回数を採用し，逆遠近錯視図形の背景部位に描かれているテクスチャ勾配が錯視現象に及ぼす効果を検討した。
25. 「救急重症患者の家族ニーズ」の重要度と実践度	共同	2009 年 10 月	第４０回日本看護学会－成人看護Ⅰ－（於　埼玉）	年齢や看護師経験年数や救命センター勤務年数と家族ニーズの重要度や実践度とが関連しているのか、また家族対応経験の有無が家族ニーズの重要度に関連するのかについて検討した。＜共同研究者＞井出由起子
26. 急性期意識障害患者に対する背面解放座位の効果	共同	2010 年 7 月	第 19 回日本意識障害学会　（於　山口大学）	急性期意識障害患者を対象に背面開放座位を行い、意識覚醒の程度を GCS と瞬目回数によって評価することを試みた。遷延性意識障害と同様に、急性期意識障害患者に対しても背面開放座位は意識覚醒に有効である可能性が示唆された。＜共同研究者＞正木明子
27. 絵画的手がかりによる奥行き知覚 －逆遠近錯視に関する研究から―	単独	2010 年 9 月	日本心理学会第 74 回大会（於　大阪大学）	日本心理学会第 74 回大会　WS008「単眼性手掛かりによる奥行き知覚」において話題提供を行った。発表内容は、１絵画的手がかりについて　２両眼視条件での遠近反転知覚について　３知覚している現象についてであった。
28. 意識障害患者に対する認知リハビリテーション 2 例	共同	2010 年 10 月	第 20 回認知リハビリテーション研究会（於　慶応義塾大学）	受傷後 4 年と、2 か月の意識障害患者に対する認知リハビリテーション 2 例について紹介した。先ず背面開放座位により、患者の覚醒の水準を上げ、次に認知機能を賦活させると考えられる刺激を提示した。刺激は、受傷前の患者の趣味・嗜好などから個別に作成した。刺激に対応した脳活動が、小型頭部近赤外分光計測装置（HITACHI　HOT121）により確認された。＜共同研究者＞辻尾厚司・小渕恭輔・吉田彩・下澤愛・中村昌司・今井智弘・井手浩気・木寺真菜・奥村祐子・長谷川 清・荻野 武

29. 脳活動モニタリングによる意識障害の認知リハビリテーション	共同	2011 年 9 月	第 20 回日本意識障害学会（於 弘前大学）	意識障害患者の認知活動を脳活動モニタリングにより評価するリハビリテーションの開発を目的とした。受傷後 3 年 6 ヶ月と，6 ヶ月の意識障害患者を対象者とした。患者の臥位時と背面開放座位時に，その患者の認知リハビリテーションに適切と考えられる刺激を，反応を確認しながら探索的に提示した。脳活動モニタリングを用いた認知リハビリテーションの有効性が示された。リハビリテーション内容の善し悪しを計測値から相対的に比較することの可能性も示唆された。＜共同研究者＞辻尾厚司・小渕恭輔・吉田彩・下澤愛・中村昌司・今井智弘・木寺真菜・井手浩気・長谷川 清
30. 格子縞の上の直方体の錯視に関する実験的研究	単独	2012 年 11 月	日本基礎心理学会第 31 回大会（於　九州大学）	格子縞の上の直方体の錯視図は，格子縞の背景の上に直方体が描かれている平面図であるが，視線と図面との間の角度を変えると直方体の高さの変化が観察される。本研究では，この錯視に影響を与えると考えられる要因について実験的に検討した。実験の結果，図の背景部位の要素である格子縞が錯視に与える影響はみられなかった。従って，格子縞は錯視が起きるための誘導図形ではないことが確認された。また，観察される直方体の高さは，単眼観察条件の方が両眼観察条件よりも有意に低くなった。このことから，両眼網膜像差は，錯視現象を抑制する要因と考えられる。さらに単眼観察条件では，平面上に描かれている直方体が立体的に見えるという新たな特性を持つ現象が発見された。
31. 逆遠近錯視に線遠近法が及ぼす効果	単独	2015 年 3 月	第 48 回　知覚コロキウム　（於 九州大学）	本研究では，立体図形の奥行きが反転して知覚される逆遠近錯視に，線遠近法が及ぼす効果を検討した。錯視が知覚される最短の観察距離（錯視の強さの指標）を計測した。結果は，刺激の（実際の）奥行きが同じ刺激では，（線遠近法による）奥行きの表現が深いほど観察距離が短くなり，同じ奥行きが表現

				されている刺激では，刺激の奥行きが深いほど観察距離が長くなった。線遠近法による奥行き表現の深さによって錯視の強さが変わると考えられる。
32. 看護職者の学習ニードと教育ニードとの相関　－クリニカルラダーレベルによる検討－	共同	2015 年 9 月	第 46 回　日本看護学会－看護管理－　学術集会（於　福岡国際会議場）	看護職者の学習ニードと教育ニードをクリニカルラダー別に実施し、両ニード間の相関について検討を行った結果，１．相関がみられた学習ニードに対応することで，教育ニード（教育の必要性）を下げる可能性が示唆された。２．各ラダーレベルによって提供する院内教育の内容を調整する必要があると考えられた。３．ラダーⅢにおいては，有意な相関が認められる，別の観点による分類を検討する必要があると考えられた。
33. 逆遠近錯視の 3D 絵における脳活動と観察時間	共同	2016 年 7 月	3 次元画像コンファレンス 2016（関西大学）	逆遠近錯視絵の強さを測るために fMRI 実験と行動心理学の実験を行った。両実験共に，逆遠近錯視絵が他の錯視絵（ミュラーリアー錯視，『動く絵」 retinal motion illusion）よりも強いものであるとわかった。
34. Experimental study of disturbance in maintaining consciousness	単独	2016 年 7 月	ICP 2016 31st International congress of psychology	意識障害を対象とした研究によって意識の仕組みを明らかにすることを目的とした。覚醒レベル，認知レベルとそれぞれ違った形でのアプローチが意識障害の改善につながる可能性が示唆された。また，脳血流が意識の状態をモニターできる可能性が示唆された。
（講演） 1. 心理実験について	単独	2000 年 4 月	関西大学工学部	関西大学工学部から依頼を受け、講演を行った。内容は、平成 14 年度関西大学重点研究「人に優しい技術：操作環境における協調作業が人間に与える影響とその応用に関する研究」の実施に於いて、心理実験に直接携わる工学部学部学生や大学院生に対して実技を踏まえた心理実験の概要について講演を行った。

2. 表情知覚に有用な情報はFACSによって記述できるか　- 視覚の生態（柿崎 1989）に基づく実験的研究の 一試行 -	単独	2003年12月	サロンアルファー （於　京都大学）	柿崎(1989)で提起された「視覚ないし視知覚についての“生態学的アプローチ”に関して,人の顔の知覚の問題をGibson理論の線の上で扱う」という問題について，Suzuki & Naitoh (2003)を引用し，講演した。
3. 看護研究について	単独	2004年3月	春秋会城山病院	依頼を受け，講演を行った。「看護研究について」という演題のもとで看護研究を行うにあたってデータの収集，処理について必要な事項を紹介した。
4. 「表情知覚に有用な情報はFACSによって記述できるか -無表情から最大表出にいたる時系列的な表情刺激を用いた検討-」	単独	2005年11月	第17回　感情と情動の研究会（於　同志社大学）	依頼を受け，Suzuki & Naitoh (2003) “Useful information for face perception is described with FACS”について講演を行った。
5.　怪異学についての覚え書き　―心理学の立場から－	単独	2006年9月	第46回　東アジア怪異学会研究会　（於　園田学園女子大学）	依頼を受け，心理学から怪異学はどのように見えるのか，また心理学は怪異学にどのようにかかわることができるのかについて講演した。
6. 表情認知における不変項の抽出について ―FACSを用いた研究から―	単独	2009年1月	2008年度　RARC心理プロジェクト公開講演会	依頼を受け講演を行った。Suzuki & Naitoh (2003)　“Useful information for face perception is described with FACSをもとに、表情認知における不変項について講演した。
7. 太成学院大学にある古典的心理実験機器	単独	2009年2月	「実験心理学における古典的実験機器のアーカイブ化とその活用」特別講演会＆公開報告会（第3回会議）	科学研究費補助金（基盤研究B：課題番号19330162)からの依頼を受け講演を行った。現在太成学院大学にある古典的心理実験機器について説明し、古典的実験機器の存続に必要な点に言及した。
8. 統計解析について	単独	2009年9-10月	大阪府立泉州救命救急センター看護部	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け統計解析について講義を行った。

9. 心理学模擬授業	単独	2010年1月	守口東高校	「私たちは世界をどのように見るか」というタイトルで模擬授業を行った。
10. 心理学模擬授業	単独	2010年2月	大塚高校	「私たちは世界をどのように見るか」というタイトルで模擬授業を行った。
11. 心理学模擬授業	単独	2010年6月	太成学院大学高校	「私たちは世界をどのように見るか」というタイトルで模擬授業を行った。
12. 心理学模擬授業	単独	2010年7月	大阪府立福泉高校	「私たちは世界をどのように見るか」というタイトルで模擬授業を行った。
13. 心理学模擬授業	単独	2010年7月	常翔学園高校	「私たちは世界をどのように見るか」というタイトルで模擬授業を行った。
14. 統計解析について	単独	2010年9月	大阪府立泉州救命救急センター看護部	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け統計解析について講義を行った。
15. 心理学模擬授業	単独	2010年10月	奈良文化高校	「3Dイリュージョン」というタイトルで模擬授業を行った。
16. 心理学模擬授業	単独	2011年1月	太成学院大学高校	「3Dイリュージョン」というタイトルで模擬授業を行った。
17. 心理学模擬授業	単独	2011年2月	大阪府立平野高校	「3Dイリュージョン（視覚の心理学）」というタイトルで模擬授業を行った。

18. 統計解析について	単独	2011 年 3 月	大阪府立泉州救命救急センター看護部	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け統計解析について講義を行った。
19. 心理学模擬授業	単独	2011 年 5 月	太成学院大学高校	「エイムズの部屋（錯覚）」というタイトルで模擬授業を行った。
20. 看護研究指導	単独	2011 年 6 月	大阪府立泉州救命救急センター看護部	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け看護研究について指導を行った。
21. 心理学模擬授業	単独	2011 年 7 月	大阪府立福泉高校	「3D イリュージョン」というタイトルで模擬授業を行った。
22. 心理学模擬授業	単独	2011 年 7 月	大阪府立美原高校	「3D イリュージョン」というタイトルで模擬授業を行った。
23. 心理学模擬授業	単独	2011 年 7 月	大阪府立伯太高校	「3D イリュージョン」というタイトルで模擬授業を行った。
24. 看護研究指導	単独	2011 年 8 月	大阪府立泉州救命救急センター看護部	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け看護研究について指導を行った。
25. 心理学模擬授業	単独	2011 年 11 月	懐風館高校	「3D イリュージョン」というタイトルで模擬授業を行った。
26. 心理学模擬授業	単独	2012 年 1 月	大阪府立柏原東高校	「多くの仕事で活用される心理学」というタイトルで模擬授業を行った。
27. 心理学模擬授業	単独	2012 年 2 月	四条畷学園高校	「3D イリュージョン」というタイトルで模擬授業を行った。
28. 高大連携授業	単独	2012 年 4 月～11 月	太成学院大学高校	「イリュージョンワールド」というタイトルで模擬授業を行った。
29. 統計解析について	単独	2012 年 6 月	大阪府立泉州救命救急センター看護部	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け統計解析について講義を行った。
30. 心理学模擬授業	単独	2012 年 11 月	大阪市立中央高校	「3D イリュージョン」というタイトルで模擬授業を行った。

31. 心理学模擬授業	単独	2012年11月	懐風館高校	「モーション　イリュージョン」というタイトルで模擬授業を行った。
32. 心理学模擬授業	単独	2013年2月	大阪女子高校	「心理学科模擬授業」というタイトルで模擬授業を行った。
33. 看護研究指導	単独	2013年2月	大阪府立泉州救命救急センター看護部	大阪府立泉州救命救急センター看護部からの依頼を受け看護研究について指導を行った。
34. 心理学模擬授業	単独	2013年4月～6月	太成学院大学高校	「イリュージョンワールド」というタイトルで模擬授業を行った。
35. 心理学模擬授業	単独	2013年10月	泉大津高校	「3Dイリュージョン」というタイトルで模擬授業を行った。
36. 心理学模擬授業	単独	2013年11月	大阪商業大学堺高校	進学ガイダンスの心理分野を担当した。
37. 心理学模擬授業	単独	2014年1月	大阪府立堺東高校	進学ガイダンスの心理分野ディスカッションを担当した。
38. 心理学模擬授業	単独	2014年4月～6月	太成学院大学高校	「イリュージョンワールド」というタイトルで模擬授業を行った。
39. 心理学模擬授業	単独	2014年9月	天王寺学館高校	「発見！多くの仕事で活用される心理学」というタイトルで模擬授業を行った。
40. 心理学模擬授業	単独	2015年2月	大阪府立泉鳥取高校	「錯覚の心理」というタイトルで模擬授業を行った。
41. 心理学模擬授業	単独	2015年5月	太成学院大学高校	「錯覚の心理」というタイトルで模擬授業を行った。
42. 心理学模擬授業	単独	2015年11月	懐風館高校	「人の心はどうやって測れるのか？」というタイトルで模擬授業を行った。
44. 心理学模擬授業	単独	2016年5月	太成学院大学高校	「人の心はどうやって測れるのか？」というタイトルで模擬授業を行った。
45. 心理学模擬授業	単独	2016年6月	夢ナビ Live 2016 OSAKA（インテックス大阪）	「人の心はどうやって測れるの？」というタイトルで模擬授業を行った。
46. 心理学模擬授業	単独	2016年9月	天王寺学館高校	「人の心はどうやって測れるの？」というタイトルで模擬授業を行った。
47. 生体センシングを用いた意識障害患者への実験心理学的アプロ	単独	2017年1月	関西大学	第21回　関西大学　先端科学技術シンポジウム　にて　招待講演を行った。

ーチ				
48. 心理学模擬授業	単独	2017 年 5 月	太成学院大学高校	「VR：バーチャルリアリティ」というタイトルで模擬授業を行った。
（ワークショップ） 1. 知覚心理学の来し方 ・行く末	共同	2002 年 9 月	日本心理学会第 66 回大会（於 広島大学）	企画：鈴木公洋（太成学院大学）・関根道昭（交通安全環境研究所） 司会：鈴木公洋・関根道昭 話題提供者：野沢晨（聖心女子大学）・鳥居修晃（東京大学）・野口薫（日本大学） 指定討論者：大倉正暉（甲南女子大学）
2. 知覚心理学の来し方・行く末Ⅱ −柿崎知覚論再考−	共同	2004 年 9 月	日本心理学会第 68 回大会（於 関西大学）	企画：大倉正暉（甲南女子大学）・黒田健二（聖母女子短期大学）・鈴木公洋（太成学院大学） 司会：黒田健二・鈴木公洋 話題提供者：大倉正暉・池田進（関西大学） 指定討論者：秋田宗平（京都工芸繊維大学）
3. 知覚心理学の来し方・行く末Ⅲ −無意識的推論としての知覚−	共同	2005 年 9 月	日本心理学会第 69 回大会（於 慶応大学）	企画：鈴木公洋（太成学院大学）・関根道昭（交通安全環境研究所） 司会：鈴木公洋・関根道昭 話題提供者：大村敏輔（九州大学）・吉村浩一（法政大学） 指定討論者：黒田健二（聖母女子短期大学）
4. 「因果性の知覚」再考	共同	2009 年 8 月	日本心理学会第 73 回大会（於 立命館大学）	企画：鈴木公洋（太成学院大学） 司会：鈴木公洋 話題提供者：中村浩（北星学園大学）・長坂泰勇（理化学研究所）・梅津倫子（関西大学） 指定討論者：鷲見成正（慶応大学）・池田進（関西大学）
5. 単眼性手掛かりによる奥行き知覚	共同	2010 年 9 月	日本心理学会第 74 回大会（於 大阪大学）	企画：Cook, Norman D.（関西大学） 司会：鈴木 公洋（太成学院大学） 話題提供者：鈴木 公洋（太成学院大学）・林 武文（関西大学）・櫻井 研三（東北学院大学）・Cook, Norman D.（関西大学） 指定討論者：三浦 佳世（九州大学）
（講演企画） 1. 図形残効現象の時空力動性理論	単独	2004 年 9 月	日本心理学会第 68 回大会（於 関西大学）	企画・司会：鈴木公洋（太成学院大学） 講演者：野沢晨（聖心女子大学）

2.　知覚と思考をどう関係づけるか	単独	2006年11月	日本心理学会第70回大会（於　九州大学）	企画・司会：鈴木公洋（太成学院大学） 講演者：大村敏輔（九州大学）
（座長） 1. 口頭発表座長	単独	2003年3月	第36回　知覚コロキウム　（於　日本大学）	2日目，午前中の口頭発表のセッションにおいて，座長をつとめた。
2. 口頭発表座長	共同	2006年3月	第39回　知覚コロキウム　（於　名古屋大学）	2日目，午前中の口頭発表のセッションにおいて，座長をつとめた。
3. 口頭発表座長	共同	2007年3月	第40回　知覚コロキウム　（於　法政大学）	2日目，午前中の口頭発表のセッションにおいて，座長をつとめた。

（人間）李　東彦

教　育　研　究　業　績　書

平成29年　2月　20日

氏名　李　東彦　印

研究分野	研究内容のキーワード
経済史・経営史	農業経営・ビジネスマン養成

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材 『教養の政治学・経済学』	平成１７年 ４月	高等専門学校の科目「政治・経済」で使用する教科書で、主として経済の分野を担当し、「国民経済の構造」の中の国民所得と国富や景気循環と経済成長、「近現代日本経済史」の中の第２次世界大戦後の日本経済、および「国際経済」では国際経済の意義と国際取引、国際経済体制と国際協調を担当して執筆した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		

三田市史編集室主催　市史編さん講演会講師	平成１８年 ３月	主として三田市民に対して、明治時代の後半から大正時代前半にかけて、三田市域にどのようにして電気や電灯が普及して行ったか、収集した史料に基づいて市民に分かりやすく講演しました。
５　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 経済学修士	昭和５２年 ３月	
２　特許等		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 赤穂市史編さん委員会　特別執筆委員就任 相生市史編纂委員会　特別執筆委員就任 三田市史編集委員会　近代編執筆委員就任	昭和５６年 ７月 昭和５９年 ７月 平成１１年 ４月	赤穂・相生・三田各市の市史編集委員会において、執筆委員として主として近代の経済に関する部分を担当し、自分たちが住んでいる地域の歴史史料を解説し、どのような経済生活を送っていたか明らかにした。
４　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １．赤穂市史第６巻	共著	昭和５９年 ９月	赤穂市	赤穂市域における諸村を対象にして、明治前期の地租改正・物産取調関係および農業生産や個別の地主経営、さらに山論・水利紛争関係など近代移行期の農村社会の変容を明らかにする文書史料を整理しまとめた。
２．赤穂市史第３巻	共著	昭和６０年 １２月	赤穂市	明治前期赤穂市域を対象にして近代社会への移行にとって重要な土地制度改革である地租改正の実施過程やその歴史的意義を明らかにし、日本における本格的工業化の前提条件を準備した

				松方デフレ期の農村社会の実情を人口・農業生産・諸物価の変動・土地所有と地主小作関係などを検討した。
３．相生市史第６巻	共著	昭和６１年１２月	相生市・相生市教育委員会	相生市域を対象に、近代移行期である明治前期の地租改正・農業生産および物産取調関係や勧業報告、地主経営と小作関係など日本の近代社会への移行期における農村社会の変容を明確にする史料を整理した。
４．近代移行期における経済発展	共著	昭和６２年３月	同文館	神戸市域を対象にして、日本が本格的に工業化していく明治後期を中心に人口学の重要なテーマである人口転換について、都市地域・農村工業地域・純農村地域のそれぞれのケースでの人口動態を検討し、各地域の特徴を明らかにした。
５．相生市史第３巻	共著	昭和６３年２月	相生市・相生市教育委員会	相生市域に残存する農村史料によって、近代社会への移行期における土地改革の実施過程やそれが及ぼした農村への影響を明らかにし、地域別農業生産の状況や勧業会・農談会の活動状況を検討した。
６．新修神戸市史　産業経済編Ⅰ	共著	平成２年４月	神戸市	戦前期神戸市における農業経営や農産物流通の実態を、地域別に農業生産および経営状況・都市化による経営内容の変化、農村部の商品流通の形態、都市における農産物市場の動向を検討した。
７．新修神戸市史　歴史編Ⅲ	共著	平成４年４月	神戸市	神戸市域の村々における江戸時代の農業生産・農業経営・農業技術の具体的な内容を各地域別に検討し、その他に農間余業の展開状況や各村の人口動態について考察した。
８．神戸大学百年史通史Ⅰ　前身校史	共著	平成１４年３月	神戸大学	神戸大学の前身校の１つで、全国で第２番目に官立高等商業学校として設立された神戸高等商

				業学校について、その設立の経緯や教育の基本方針、教員組織や教育制度、入学者の動向、教育方法や教育施設の充実、具体的な学生生活の状況や卒業生の動向などについて、当時の状況を明らかにする貴重な史料に基づいて詳細に検討した。
9．三田市史第５巻　近代資料Ⅰ	共著	平成１７年３月	三田市	三田市における近代資料の中で特に地域経済関係の資料として、明治期の物産調査・同業組合・地主経営・勧業に関する諸会・銀行の営業状況・鉄道の普及などに関する資料、また大正期の電燈の普及状況、昭和期の自力更生・経済更生計画・国民貯蓄組合などの関する資料を翻刻し整理した。
10．教養の政治学・経済学	共著	平成１７年４月	学術図書出版社	高等専門学校の科目「政治・経済」で使用する教科書で、主として経済の分野を担当し、「国民経済の構造」の中の国民所得と国富や景気循環と経済成長、「近現代日本経済史」の中の第２次世界大戦後の日本経済、および「国際経済」では国際経済の意義と国際取引、国際経済体制と国際協調を担当して執筆した。
11．三田市史第６巻　近代資料Ⅱ	共著	平成１９年１２月	三田市	三田市における近代資料の中で特に地域経済関係の資料として、明治期の物産調査・同業組合・地主経営・勧業に関する諸会・銀行の営業状況・鉄道の普及などに関する資料、また大正期の電燈の普及状況、昭和期の自力更生・経済更生計画・国民貯蓄組合などの関する資料を翻刻し整理した。
12．１８・１９世紀の人口変動と地域・村・家	共著	平成２０年３月	古今書院	陸奥国西磐井郡狐禅寺村（現、一関市）の近世後期の年貢納入状

族				況について、年貢納入高の算定方法やその変化、寛政・文化期の具体的な納入状況、そして文政期の現物納や個々の農民の年貢納入状況を検討し、陸奥国西磐井郡狐禅寺村（現、一関市）を事例に、生活必需品である米・塩をめぐる問題を生産・流通およびそれに伴う貨幣の流通状況を検討した。
13. 日本における高等商業教育機関の経営史的研究	単著	平成２１年３月	私家版	日本における高等商業教育機関がどのようなユニークな戦略的マネジメントを実施して、後発の教育機関が先発の教育機関に挑戦しつつ発展していったか、神戸高等商業学校を事例にして詳細に検討した。
14. 三田市史第２巻通史編Ⅱ近代・現代	共著	平成２４年２月	三田市	三田市における近代社会の歴史の中で、特に地域経済関係について、明治期の物産調査・同業組合・地主経営・勧業に関する諸会・銀行の営業状況・鉄道の普及など、また大正期の電燈の普及状況、昭和期の自力更生・経済更生計画・国民貯蓄組合などについて市民にできるだけわかりやすく叙述した。
（学術論文）				
１．徳川後期石代納についての一考察	単著	昭和 55 年 10 月	六甲台論集第 27 巻 3 号 神戸大学大学院研究会	徳川後期の年貢納入形態である石代納の問題を中心に、農業生産の変化、在地農産物市場の展開、地主小作関係の進展、物価の動向など経済的要因との関連を考察し、農村における商品貨幣経済の展開状況を検討した。
２．幕末期河内国における一地主経営	単著	昭和 58 年 1 月	六甲台論集第 29 巻 4 号 神戸大学大学院研究会	幕末とくに天保期以降、先進地域に属した畿内河内国南部の農村の地主西山家の経営史料を使用し、農業経営の動向を様々な側

				面から検討し、同家の性格を生産者的ではなく地主・高利貸的であることを明らかにした。
３．幕末・明治前期北摂農村における農業生産と農業経営	単著	昭和 58 年 3 月	神戸の歴史第 8 号 神戸都市問題研究所	従来研究の手薄な北摂の農村を対象に、幕末・明治前期の農業生産、農業経営、農産物の流通について残存史料から具体的に明らかにした。
４．近世魚崎村における人口変動と経済発展	単著	昭和 60 年 2 月	神戸の歴史第１１号 神戸都市問題研究所	近世の農村工業の展開した村における人口変動の問題を、酒造業で著名な摂津灘地方の魚崎村を対象にして、人口趨勢、人口変動の自然的・社会的要因、世帯規模の変化、年齢別構成など、酒造業との関連について検討した。
５．資料『接収対策委員会記録』解説及び翻刻	単著	平成 3 年 3 月	神戸大学史紀要第１号 神戸大学百年史編集委員会	第二次世界大戦後まもなく神戸大学の前身校の一つである神戸経済大学にもたらされた G･H･Q による学舎接収の通告に対して、大学当局は勿論のこと学生・同窓会を巻き込んで全力を挙げて取り組んだ占領軍との熾烈な攻防の記録を紹介し、解説を加えた。
６．神戸高等商業学校における教育と人材養成	単著	平成 4 年 3 月	神戸大学史紀要第３号 神戸大学百年史編集委員会	東京に次いで官立で全国で二番目に設置された神戸高等商業学校が、外国貿易の中心地である神戸に設置された経緯や設立の目的、ユニークな入学試験制度と独自の予科教育内容、および同校における卒業者の輩出状況とその職業別分布について概括的に考察した。
７．神戸高等商業学校における入学者と卒業後の進学者について	単著	平成 6 年 3 月	神戸大学史紀要第４号 神戸大学百年史編集委員会	前掲６論文の続編をなすもので、神戸高等商業学校で独自に採用された予科の二部制度との関連で、中学校・商業学校の２つのルートから入学してくる生徒・学生について、出身地や出身階層および社会的出自など、また卒業者

				については、進学率の差異や進学動機、進学先での学生生活の内容などを明らかにした。
８．開港当初神戸居留地および雑居地に関する若干の土地関係史料	単著	平成９年４月	経済文化研究所年報第６号 神戸国際大学経済文化研究所	兵庫開港の実施とともに、外国貿易に伴って設置された神戸居留地および雑居地について、地所借地権の競売などを管掌した「兵庫県外国局地所掛」の日記や周辺村々の外国人との土地貸与関係の史料を紹介した。
９．兵庫開港と明治前期の神戸港貿易	単著	平成１１年３月	兵庫のしおり第１号 兵庫県県政資料館	兵庫（神戸）の開港が実施され、来住外国人のため居留地が建設されることになるが、この居留地建設が具体的にどのようになされ、その周辺農村の人々がどのような対応を示したか、開港当初の貿易事情や周辺地域の商人の活動、そして当時最も重要な輸出品であった製茶貿易について詳細に検討した。
１０．旧制専門学校における教育と人材養成	単著	平成１２年１０月	研究報告集第３７集 大阪私立短期大学協会	旧制専門学校の一つの神戸高等商業学校を中心にして、同校の設置の目的や教育内容の特徴、卒業生の社会での活動をその就職活動から職業分布などによって、検討した。
１１．神戸高商基督教青年会寄宿舎記録	共著	平成１２年４月	経済文化研究所年報第９号 神戸国際大学経済文化研究所	明治３６年に設置され、３９年に一時閉鎖された神戸高等商業学校寄宿舎は、４１年には米国青年会による寄附によって再スタートした。この寄宿舎に残された大正期の史料を翻刻し、当時の官立専門学校の基督教青年会所属の学生の課外活動の事情を具体的に明らかにした。
１２．明治後期～大正期神戸高等商業学校における学生の課外活動	単著	平成１４年４月	経済文化研究所年報第１１号 神戸国際大学経済文化研究所	神戸という国際貿易都市において、明治後期から大正期にかけて神戸高商の学生たちが、学内外において外国人とどのような交流を行ったのかを主として語学部・スポーツ関係の諸部など学生

				たちの課外活動を通して検討した。
１３．近世後期・一関藩領における年貢納入	共著	平成１８年３月	立命館大学人文科学研究所紀要８７号 立命館大学人文科学研究所	陸奥国西磐井郡狐禅寺村（現、一関市）の近世後期の年貢納入状況について、年貢納入高の算定方法やその変化、寛政・文化期の具体的な納入状況、そして文政期の現物納や個々の農民の年貢納入状況を検討した。
１４．一関藩領における米・塩をめぐる問題	単著	平成１９年３月	立命館大学人文科学研究所紀要８８号 立命館大学人文科学研究所	前掲論文同様陸奥国西磐井郡狐禅寺村（現、一関市）を事例に、生活必需品である米・塩をめぐる問題を生産・流通およびそれに伴う貨幣の流通状況を検討した。
１５．徳川後期・陸奥国一関藩領における年貢納入―狐禅寺村を中心としてー	共著	平成１９年６月	平成１５年度～１８年度科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告書『１９～２０世紀東北日本の前近代型出生・生存・移動・死亡パターンの歴史人口学的研究』（課題番号１５２０３０２３）	陸奥国西磐井郡狐禅寺村（現、一関市）の徳川後期の年貢納入状況について、年貢納入高の算定方法やその変化、寛政・文化期の具体的な納入状況、そして文政期の現物納や個々の農民の年貢納入状況を検討した。
１６．一関藩領における米・塩の諸問題― 近世後期の買米・塩専売制度と狐禅寺村―	単著	平成１９年６月	平成１５年度～１８年度科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告書『１９～２０世紀東北日本の前近代型出生・生存・移動・死亡パターンの歴史人口学的研究』（課題番号１５２０３０２３）	前掲論文同様陸奥国西磐井郡狐禅寺村（現、一関市）を事例に、生活必需品である米・塩をめぐる問題を生産・流通およびそれに伴う貨幣の流通状況を検討した。
１７．明治末商業学校と神戸高等商業学校における経営者の養成	共著	平成２０年３月	太成学院大学紀要第１０巻（通号２７号） 太成学院大学 Ｐ１９５－２０３	明治末期の日本に於ける各地の商業学校の設立の経緯を明らかにするとともに、その商業学校からの優秀な卒業生を多数入学させた神戸高等商業学校がどのようにして経営者を養成したか

				検討した。
（その他） 1 文政１２年狐禅寺村年貢関係文書	共著	平成１７年７月	兵庫県立大学経済経営研究所	陸奥国西磐井郡狐禅寺村（現、一関市）の文政１２年の年貢関係文書の中で、夏年貢金受取帳・秋年貢請取帳・御年貢勘定指引帳・御年貢金代貸帳という４つの史料を翻刻するとともに、詳細な解説を加えた。
2 史料翻刻『組頭仮御役勤方留帳』	単著	平成１９年６月	平成１５年度～１８年度科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告書『１９～２０世紀東北日本の前近代型出生・生存・移動・死亡パターンの歴史人口学的研究』（課題番号１５２０３０２３）	陸奥国西磐井郡二関村（現、一関市）の塩問屋である佐藤家の先祖が安永５年組頭に任命され、その後１８年間の公務を記録した史料を翻刻するとともに、解説を加えた。
3 学会・研究会発表				
１．陸奥国狐禅寺村における年貢納入の実態		平成１７年９月	立命館大学人文研・第１回社会開発人口モデル研究会	
２狐禅寺村の買米制度		平成１８年３月	立命館大学人文研・第６回社会開発人口モデル研究会	
３領主の年貢収取と農村・農民の対応		平成１８年９月	立命館大学人文研・第７回社会開発人口モデル研究会	
４パネルディスカッション「歴史人口学のバックグラウンドー陸奥国村落のマイクロデータ分析―」		平成１８年９月	第７５回社会経済史学会全国大会パネルディスカッション司会	
５．領主の年貢収取と農		平成１８年	第７９回日本社会学会	

村・農民の対応―一関藩における買米制度の展開を事例として― ６狐禅寺村における塩の流通と貨幣獲得機会について ７近世後期東北農村における年貢納入と米・塩の流通に就いて ４．その他 １．江戸時代後期はびきのの村の農業経営 ２．史料を読みながらはびきののむらの生活を知る		１０月 平成１９年３月 平成２２年１０月 平成２７年７月 平成２８年９月	大会報告 立命館大学人文研・第８回社会開発人口モデル研究会 社会経済史学会近畿部会報告（同志社大学） 平成２７年度はびきの市民大学　前期講座 平成２８年太成学院大学オープン・カレッジ公開講座	４．その他 １．江戸時代後期はびきのの村の農業経営 ２．史料を読みながらはびきののむらの生活を知る
:				

（人間）八木　一成

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年　3 月　16 日

氏名　　八木　一成　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
地域研究、環境学	有機農業、再生可能エネルギー、持続可能な社会システム、食料問題

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 ゼミでの指導	平成 19 年度	ゼミで環境教育の観点からエネルギー問題と食糧問題の研究指導を行った。特に食糧問題の研究グループには廃棄物として扱われている米ぬかを使ったお菓子を作り、大学祭で販売するまでに

		商品開発を進め、研究内容を学外へもアピールした。
ICT を活用した授業方法	平成 23 年度～	平成23年度より全学生に配布されたiPodを授業で活用した。プレゼンテーション基礎・応用の授業において学生の発表している様子を各自のiPod で動画撮影し、発表後自己分析させた。
資格取得を推進するための指導	平成 24 年度～ 平成 25 年度 平成 27 年度 平成 29 年度	Word 文書処理技能認定試験対策講座、Excel®表計算処理技能認定試験対策講座を学内で行い講師を担当した。
2　作成した教科書，教材	平成 16 年 2 月	・太成学院大学環境教育テキスト 「再生可能エネルギー導入地域におけるグリーン電力市場の趨勢」　太成学院大学紀要　第 6 巻第 4 号（通号 23 号）p.85-92 太成学院大学　より抜粋
	平成 16 年 4 月	・太成学院大学環境教育テキスト「恐竜はなぜ滅びたか」 環境問題を理解する上で必要な事項を解説した授業用テキストである。6500 万年前に恐竜が滅びた地球環境と対比させながら温暖化現象の仕組みを中心に解説している。授業ではこれをもとに永続的な地球環境を構築するには何が必要かを多角的に考える機会を与える。
	平成 19 年 8 月	・プレゼンテーション基礎・応用課題集 プレゼンテーション基礎、プレゼンテーション応用の授業で使用する課題集を作成した。毎回の授業内容を確認する教材として各授業の最後に提出させた。

	平成 19 年 9 月 平成 20 年 9 月～	・インターネット言語応用テキスト CGI スクリプト言語として Perl を取り上げ、インターネットの基本動作を Perl のプログラム作成を通して理解することを目的とした授業の課題集を作成した。 ・わかる数学テキスト 毎回の授業で配布する教材と授業中に実施する小テストを作成した。市販のテキストは使わずに学生の状況に応じた授業を展開している。
	平成 27 年 9 月～	ソフトウェアリテラシー応用の補助教材を作成 教科書の内容を補完し、理解を促すための教材を作成しほぼ毎回の授業で使用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
教員による相互評価の結果	平成 22 年 12 月～	全ての授業を公開し、他の教員からの意見をいただこうとしたが、平成 27 年度については授業参観に来ていただけなかった。
学生による授業アンケート結果	平成 27 年 9 月～	プレゼンテーション基礎、ソフトウェアリテラシー応用、わかる数学の各授業でアンケートを実施した。いずれの授業でも興味関心を持っている学生とそうでない学生との評価が分かれたように思われる。高い関心のある学生に対しては、積極的な学修の場を提供できたが、意識の低い学生に対してはさらに工夫の余地がある。学生が進路を決めるにあたり重要な科目であるので、彼らに対するさらなる動機付けが、今後の課題である。
4　実務の経験を有する者についての特記事項	平成 16 年 11 月	デンマーク環境対策視察研修に参加。 デンマークの環境対策の進捗状況を企業の研究、開発活動を通して確認することを目的とした。訪問した企業、官公庁は次の通りである。 ①ウェーブスター・エナジー社（波力発電）、②デンマーク・エネルギー庁（環境政策）、③アルコン・ソルヴェーメ社（太陽光収集と地域暖房システム）、④ヴェスタス社（風力発電機メーカー）、⑤ウェーブドラゴン社（波力発電）、⑥ホルステブロ市（バイオガス発電計画）、⑦グルンドフォス社（ポンプメーカー）、⑧環境情報センター（廃棄物発電に関する情報収集）

		平成 13 年の訪問時よりデンマークの環境に対する技術はさらに進歩しているように見受けられた。特に波力発電に関する技術は開発途上ではあるが、風力より安定した発電特性を持ち、次世代の自然エネルギー源として有望である。また、風力発電の最大出力も 3 年間の間に 2MW から 3MW へ増大し、2004 年度には国内電力供給の 18.5%が風力発電によるものである。 以上の海外研修の成果は環境問題に関する授業で学生に還元している。
太成学院大学公開講座講師	平成 26 年 9 月	「無農薬・無施肥によるおいしいサツマイモの栽培と調理法」（参加者 10 名） だれでもできる無農薬・無施肥によるサツマイモの栽培と長期保存の方法、甘味を引き出す調理方法について解説を行った。
はびきの市民大学講師	平成 27 年 5 月	「食べるのは人が先か動物が先か」 無農薬・無施肥によるサツマイモ栽培を通して、自然に負荷をかけずに食料を調達する方法や自然界での人と動植物の関わりについて講義を行った。
第 3 回地域公開健康講座（奈良新聞社主催）	平成 28 年 10 月	「介護、子育て、のらしごと」 介護と子育てのダブルケアの中で人と人のつながりについて学んだこと、家庭菜園の中で学んだ人と自然のかかわりについて講演を行った。
ＦＤ研修事例発表（学内）	平成 29 年 3 月	ＡＬＰ（アクティブラーニングパイロット）として子ども発達学科 2 年次配当の「理科概論」における取り組みを学内のＦＤ研修会において事例発表を行った。
太成学院大学オープンカレッジ（公開講座）講師	平成 29 年 8 月	「貝原益軒「養生訓」に学ぶ　－現代食べ物考－」 江戸時代の儒学者である貝原益軒が著した「養生訓」を紐解き、現代に生きる私たちの食べ物と健康について受講者とともに考えた。
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		

2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
デンマーク環境対策視察研修に参加	平成 16 年 11 月	デンマークの環境対策の進捗状況を企業の研究、開発活動を通して確認することを目的とした。訪問した企業、官公庁は次の通りである。 ①ウェーブスター・エナジー社（波力発電）、②デンマーク・エネルギー庁（環境政策）、③アルコン・ソルヴェーメ社（太陽光収集と地域暖房システム）、④ヴェスタス社（風力発電機メーカー）、⑤ウェーブドラゴン社（波力発電）、⑥ホルステブロ市（バイオガス発電計画）、⑦グルンドフォス社（ポンプメーカー）、⑧環境情報センター（廃棄物発電に関する情報収集） デンマーク独自の環境対策、再生可能エネルギーについての知見を広めることができた。以上の海外研修の成果はゼミや環境問題に関する授業で学生に還元している。
三重県名張市バイオマスタウン構想策定委員	平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月	三重県名張市バイオマスタウンとして審査を受けるための構想を検討する委員となった。
三重県名張市バイオマスタウン推進協議会専門部会委員	平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月	三重県名張市バイオマスタウンとして認定され、それを推進するための専門部会の委員となった。
4　その他		
エクステンション・センター長（学内業務）	平成 15 年度 ～ 平成 21 年 3 月	学内で資格取得対策講座を企画し学生の能力開発に寄与した。(平成 20 年度は資格支援センターへと改称) 資格例・・・日商簿記、販売士、福祉住環境コーディネータ、マイクロソフト　オフィス　スペシャリスト、TOEIC、色彩
情報センター長（学内業務）	平成 21 年度 ～ 平成 26 年 3 月	学生と教職員への情報サービスの統括者としての職務を遂行した。特に SA(Student Assistant)教育事業について尽力した。
情報リテラシー教育委員（学内業務）	平成 18 年度 ～ 平成 26 年 3 月	SA 教育事業の運営に関し年 2 回の情報リテラシー教育委員会に出席し、SA(Student Assistant)に対する指導も行った。
健康スポーツ学科 1 年 E ユニットアドバイザ、人間学部 1 年主任アドバイザ（学内業務）	平成 27 年 4 月～平成	健康スポーツ学科 1 年のアドバイザとしてアセンブリアワーを担当し学生の指導にあたるとと

健康スポーツ学科 2 年 E ユニットアドバイザ、 人間学部 2 年主任アドバイザ（学内業務） 兼好スポーツ学科 1 年 B ユニットアドバイザ	29 年 3 月 平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月	もに人間学部 2 年の主任アドバイザとしてアドバイザ間の連絡調整を行った。
資格取得促進プロジェクトチーム（学内業務）	平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月	資格取得促進プロジェクトチームのメンバーとして資格取得者による座談会の企画、実施の他、資格取得カルテの作成等にも関わった。
学生支援会議（学内業務） 退学・留年防止対策プロジェクト（学内業務）	平成 27 年 4 月～ 平成 28 年 4 月～	学生支援会議のメンバーとして、退学・留年防止対策プロジェクトのチーフとして会議に出席し、主に退学防止について検討した。
子ども発達教科分科会（学内業務）	平成 28 年 4 月～	子ども発達学科教科分科会のメンバーとして会議に参加し、ＦＤのパイロット授業として「理科概論」の授業を教員に公開した。
全学教養教育分科会（学内業務）	平成 28 年 4 月～	全学教養教育分科会のチーフとして本学の教養教育のあり方について検討した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 2 3 ：				
（学術論文） 1　再生可能エネルギー認証システムについての考察	単著	平成 17 年 2 月	太成学院大学紀要 第 7 巻（通号 24 号） p.81-86 太成学院大学	再生可能エネルギーによって発電された電力は，エネルギーそのものの価値とともに化石燃料，原子力に依存しないエネルギーとして環境面での付加価値を持つ。ヨーロッパでは再生可能エネルギー認証システム(Renewable Energy Certificate System:RECS)によりグリーン電力証書を発行し，電力そのものとは分離して証書を流通させる制

				度が導入されている。しかしながら，EU 各国のエネルギー政策の違いから制度そのものの方向性が変化しつつある。RECS の現状と問題点およびそれに代わる欧州エネルギー認証システム(EECS)について考察し，日本におけるグリーン電力認証システムについても言及した。
2　日本におけるバイオマスエネルギーと食糧問題についての考察	単著	平成 19 年 3 月	太成学院大学紀要 第 9 巻（通号 26 号） p.199-206 太成学院大学	日本では 1970 年代の石油危機を機にバイオマスエネルギーが注目されたものの，長期にわたる石油価格の安定と原子力政策により，バイオマスの利活用が国民生活に浸透することはなかった。しかし，近年の環境問題，とりわけ地球温暖化に対する国民の意識の変化や 2005 年 2 月に京都議定書が発効したことによる政策上の必要性から、日本でもバイオマスエネルギーが見直されつつある。本稿はエネルギーとしてのバイオマスのみならず，食糧問題とバイオマスの関連について考察を加えた。
3　小規模地域におけるエネルギーおよび食糧自給についての考察	単著	平成 21 年 3 月	太成学院大学紀要 第 11 巻（通号 28 号） p.141-148 太成学院大学	デンマークのサムソ島は 1997 年に再生可能エネルギーのみで島内のエネルギー需要を満たす試みに着手し、公約期間の 10 年が経過した。その結果、電力供給は 2002 年に 100%再生可能エネルギーでの自給を果たした。また、熱の供給においても 65%が再生可能エネルギーでまかなわれ、その中心はバイオマスエネルギーを熱源とする地域暖房システムである。本稿ではサムソ島の 10 年間の事例を検証することにより、小規模地域におけるエネルギ

				ー自給と食糧自給の関連性を考察した。
4　中等教育学校における食生活に関する調査についての考察	共著	平成 23 年 3 月	太成学院大学紀要 第 13 巻（通号 30 号） p.137-144 太成学院大学	2005 年に制定された食育基本法により食育という名のもとで教育現場においても食に関する様々な取り組みが行われている。本稿では全寮制の中等教育学校における食生活に関するアンケート調査の自由記述内容について分析を行った。その結果，食生活に感謝の念を抱いているグループ，自身の食生活を肯定しているグループ，食生活に何らかの目標を持っているグループでは残食が平均より少なく，自身の食生活を反省しているグループ，不満を抱いているグループ，心配しているグループでは残食が平均より多いことが明らかとなった。また，残食が皆無であるグループを分析することにより，食育のあるべき姿を考察した。
5 伊賀地方における有機農業の持つ可能性についての考察	単著	平成 25 年 3 月（予定）	太成学院大学紀要 第 15 巻（通号 32 号） p.101-107 太成学院大学	有機農業の特性と現在の日本の有機農業に関する法制度の問題点を指摘し、三重県伊賀地方における有機農家の集まりである伊賀有機農産供給センターを事例に取り上げ、生産者と消費者の提携の方策を考察した。

6　有機農業の認証制度に関する一考察	単著	平成 26 年 3 月（予定）	太成学院大学紀要 第 16 巻（通号 33 号） p.97-100 太成学院大学	日本の有機農業の現状とその問題点、とりわけ有機 JAS 認証制度の行き詰まりの検証と海外における参加型有機認証制度の事例から日本の有機認証の方向性について考察した。
7　有機農業推進のための生産者と消費者間の情報共有についての考察	単著	平成 27 年 3 月	太成学院大学紀要 第 17 巻（通号 34 号） p. 107-113 太成学院大学	日本において有機農業は数字の上では主たる農法ではなく，農家数 1.2 万戸で総農家数 253 万戸の 0.5%，栽培面積は 1.6 万 ha 農業全体で 461 万 ha のうちのわずか 0.4%[1]である。しかしながら，2006 年には有機農業の推進に関する法律（以下，「有機農業推進法」と呼ぶ）が制定され国として有機農業を推進することが方向性として打ち出された。また，日本各地に目を転じるとそれぞれの地域特性を生かしたオーガニックフェスタが開催されており，有機農産物への関心は地方でも高まりつつある。有機農業を発展させるためには生産者と消費者間の協力が必須である。そのために生産者と消費者の間にどのような情報が共有されるべきなのかを考察した。
8　「理科概論」におけるアクティブ・ラーニングについての一考察	単著	平成 30 年 3 月	太成学院大学紀要 第 20 巻（通号 37 号） p. － 太成学院大学	太成学院大学人間学部子ども発達学科 2 年次に配当されている「理科概論」において行っている授業内容を溝上慎一著『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』と対比しながらアクティブ・ラーニングの観点から分析を行った。能動的なアクティブ・ラーニングへ授業形態を変換する過程の分析から学生にとって有益な授業方法は何であるのかを考察した。
（その他）				

:				

（人間）内之宮　則子

教　育　研　究　業　績　書

平成 26 年 3 月 31 日

氏名　内之宮　則子　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1.イン・バスケット	平成 4 年 1 月～	イン・バスケットとは、例えば秘書が日常業務で処理すべき書類を入れた書類箱のことである。そして、秘書教育用に用いられる“イン・バスケット”とは、イン・バスケットの中の書類を所定の時間内で処理し、その処理の過程で基本的な実務知識、判断力、意思決定など、秘書としての総合的な実務能力を試すテスト、ないしは実習のことを意味している。 イン・バスケットの書類の上には、上司からのメモが置いてある。それに書かれている内容を念頭において、全ての書類に目を通し、指示に従って 60 分以内に問題を解く方法である。(1)至急しなければならないもの、(2)今日中にしなければならないもの、(3)明日以降でよいものとを判断し、その優先度、緊急度と理由を書いてから作業に入る。 学生は、今まで習ってきた内容と、実際のビジネスの場を疑似体験しながら、実務を体得できる。また、60 分以内という時間に対する感覚も養うことができるという利点がある。

2. ロールプレイング	平成 3 年 5 月～	ワークプレイスにおける接遇（来客応対・電話応対)、命令・指示の受け方、メモの取り方、報告の仕方等、上司・来客・社員などの役割を決め、課題（役割設定）を実演で実施する。 頭の中で理解していても、実際に動作として、また、どのような言葉遣いをすればもっとも効果があるのかなどを体得することができる。さらに、他のメンバーの実技を見ながら評価するなど、人の動きから学ぶこともできる。
3. プレゼンテーション	平成 3 年 5 月～	1 分間（約 300 字）で何を伝えることができるか、その都度テーマを与えて人前で話す訓練である。 例えば「りんご」について話す課題であれば、聞く側が「りんご」という果物は“知っている”という設定と“知らない”という二つの設定で行う。 限られた時間内でポイントを絞って話す大切さと、知らない設定の場合のようにどうすればわかってもらえるのか、“ことば”の表現の重要さを知ることができる。 同じテーマは 10 人程度で、各人がそれぞれ違う角度から話すことにより、自分一人の考えでは出てこない内容を知る機会も持てる。 人前でまとまりのよい話し方が苦手な現代の学生は、かなり苦痛にみえるが、回数を増やすことにより、だんだんうまくなってくる。
4.ペア・ワークによるケース・スタディ	平成11年 5 月～	「考える」ということを、第一義的に学ばせる教育法である。 課題（例 : オフィス内での上司と部下の会話など）をよく読んで分析し、二人で上司の性格分析、オフィス内の雰囲気、問題点などをあげ、その解決策、良い雰囲気のオフィスとはどういうものかを二人で考えられるだけ出し合う。 そのことより、実際のオフィスにおける現場での協調性、問題意識を持った働き方、問題の解決をお互いの協力で行うこと

		を学ぶ。 一人ではなかなか前に進めない学生は、ペアになった学生からヒントを得たり、人の意見を聞いたり、また自己の主張などを体験的に学ぶ。
5.グループ・ワークによるケース・スタディ	平成11年5月～	チームワークの重要性、結論の導き方、まとめ方等を学ぶ方法である。 グループ（５～６人）で意見を出し合う方がより効果が出るような課題（例：広範囲に及ぶ情報が必要な場合など）を与えて、授業内だけでなく、自宅学習も含めて一週間の準備期間と２コマの授業で実施する。必ず意見を一人二つは出す条件で行い、リーダーシップのとり方、各人の意見のまとめ方、自己主張の強過ぎる学生の意見に流されないよう、グループメンバーが協力することなどを学ばせる。 多人数の前では話すことが苦手という学生も、５～６人のメンバーの前では意見を述べられるという利点がある。グループメンバーの編成は、最初は学生にさせる。２回目からは指名で編成する
6.ブレーンストーミング	平成3年4月～	一つの科目について、ある程度内容を理解した時期に、どの程度の理解度かを測る事と、ブレーンストーミングの本来の目的であるアイデア会議を活用し、いろいろな角度のものの見方があることを学ぶ。 テーマの設定は、学生が関心を持つものを選択するので、各年によって違う。 長時間講義を聞くのは苦手な現代の学生も、参加型の授業は得意とするようで、自由にさせ過ぎないようコントロールする必要がある。そのため、細かなタイムスケジュールを組み、その時間通りに進行する。このことは、時間の管理にも役立ち、１分単位の自覚ができるようになる。
7.新聞の読み方	平成3年4月～	活字離れの進んでいる学生達に、手軽に情報と、時代の動きを知る手段としての新聞の活用について、各自持参する新聞を使い、比較しながら読み方を指導する。 日本経済新聞・朝日新聞・読売新聞・毎

		日新聞・産経新聞の５全国紙を使う。 １面、政治面(国際・国内)、経済面、家庭、社会面、株式の見方、社説、コラムの読み方を紙面を使いながら学ばせる。最後に、社説についてのコメントを書かせる。 社会人として、毎日の情報収集の手段であることを自覚させ、新聞を読むことは就職活動に不可欠である事を自覚させる。
8. 講義内容に出てくる用語についての説明（一覧表を配布）	平成11年4月～	講義内容に出てくる専門的な用語を一覧表にし、講義前に言葉の説明をしたり、講義の途中や講義後に解釈することにより、深く理解できるようにしている。 難しい内容をいかにわかりやすく講義するかが、最大の課題になっている。現在知っているだろうという前提で講義しても、ほとんど理解できないのが実状である。用語の説明をしてもわからないこともしばしばであり、身近な例をあげて説明することにより、わからせる一つの工夫である。
9. インターネットによる情報収集	平成11年4月～	各自のノートパソコンを使い、情報収集をさせる実習だが、情報源を必ず公開することを義務付ける。 インターネットの使用開始期は、ほとんどの学生が同じ情報源により情報を集めるため、全く同じ内容になってしまう傾向にあるが、いかに広く収集することができるか、工夫させる目的もある。 同じ内容を知る必要と、他と違う情報を収集することの意味と、情報の意義を知る機会を与える。
10. 企業に関するニュース記事を活用したケース・スタディ	平成2年6月～	各全国紙、日経ビジネス、日経ベンチャー、東洋経済、各週刊誌等の記事より（今までに松下電器・ダイエー・サントリー・サンリオ・ヤマト運輸・雪印乳業・アサヒビールなど)、話題のまた問題になっている企業のニュースを取り上げ、その時代的背景や企業が抱える経営的問題について考察する。 よく知られている企業を選ぶことにより、会社のしくみや消費者とのかかわりに

		ついて、具体的に理解させる。経営的理論の講義内容を理解させる一つの方法として使う。
11. 海外の現地取材による情報の提供他	平成16年9月18日～20日	台湾の取材（台北・花蓮・新北投温泉地区） 観光地、料理（四川・雲南・海鮮料理）、ホテル事情、日本人向けの温泉（かつて日本軍が造った温泉場を中心にしている）の開発、軍の施設、徴兵制度・軍事費、果樹栽培（パパイヤ・マンゴー・バナナ他）の現状、先住民族などについて、現地のガイドより説明を聞き、特に日本の統治を受けた時代を知っているガイドの日本に対する考え方は、非常に感慨深いものがあった。 この経験談は、後期の「マスコミユニケーション史」で早速講義し、学生は現実の話として理解しやすかったようである。 また、2006年後期の「ホスピタリティ・マネージメント」にも活用した。そして現在に至っている。
	平成17年3月6日～12日	ドイツの取材（ソウル経由フランクフルト→リューデスハイム→ハイデルベルグ→シュトウットガルト→ウルム→フユッセン→ローテンブルグ→フランクフルト→ソウル経由で関空） この取材旅行は、ドイツの観光事情、ダイムラーベンツ社のあるシュトウットガルトの車事情、さらに環境大国ドイツの環境に対する公共事情、国民の考え方、日本の衣食住に対して、住が一番重要と考える国民の考え方など、非常に参考になった。 2005年入学の学生より、「キャリア形成論」等にも役立てている。ホテルのロビーではたくさんの中国からの旅行者、ビジネスパーソンを見かけ、中国の台頭を実感した。
	平成18年4月28日～5月4日	南イタリアの取材（関空→ソウル経由でローマ→アルベロベッロ→マテーラ→ナポリ→ポンペイ→ローマ→ソウル経由で関空）

	平成22年2月22日～27日	イタリアの観光事情、北イタリアとの経済格差で貧しい南イタリアの現状、システィーナ礼拝堂他の美術・芸術の鑑賞、世界遺産（カゼルタ宮殿・アルベロベッロのトウルッリ・マテーラのサッシ住宅・ポンペイの遺跡・コロッセオ・フォロロマーノ・バチカン他）の見学などで撮影した写真を学生に見せながら、日本との比較で説明することにより、より理解を深めさせることができた。 韓国からの旅行者が非常に増えてきているとの現地のガイドの話であったが、このように体験した話は、学生にとっては特に関心を深めることができると確信している。 フランスの取材（関空→ソウル経由でパリ→ノルマンディ→モンサンミッシエル→ベルサイユ、パリ市内→ソウル経由で関空） フランスで一番美しい村といわれるヴブロン村の取り組み、観光客にやさしいノルマンディの文化、ユニクロのパリ店、パリの地下鉄事情、スーパーなど表のパリだけではなく、パリ市民の日常生活に触れる旅を中心に取材した。 この経験は、2010年入学の学生はもちろんだが、在学生にも授業、ゼミで役立てたい。
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成16年9月～平成22年3月	学生の授業にかかわるアンケート調査(年2回)によると、「キャリア形成論」「ビジネスコミュニケーション」「マスコミュニケーション」「秘書検定講座」「ホスピタリティ・マネージメント」の全科目に付き、85～90%以上の学生に高い評価を得ている。 「非常に役に立った」「興味深い内容であった」「社会に出た時役に立つと考える」「世の中の動き特に政治経済など関心を持つようになった」

		「考えながら講義を聞くようになった」などのコメントが多かった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許	昭和45年3月	京都府 高等学校教諭　社会2級 中学校教諭　　社会1級
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他	平成12年4月1日～平成16年3月31日 平成15年4月1日～平成21年3月	大阪短期大学学生部長 太成学院大学学生部長

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 2 3 ：				
（学術論文） 1 2 3				

:				
（その他） 1 研究発表 情報発信力を養うための参加型授業の試み	共著	平成 21 年 6 月	日本ビジネス実務学会第 28 回全国大会	共同発表者　大和里美 太成学院大学人間学部（心理学科、人間文化学科、2003 年創設）では、2005 年度より社会の要求が年々厳しくなっている現状に対応して、キャリア形成プログラムとして１年次より通常の授業で学生のキャリア形成に取り組んでいる。このプログラムは、就職活動の開始をスムーズにできるよう１年次春学期より３年次春学期までに取得するカリキュラムを提供しているが、その柱の 1 つである２年次秋学期の「キャリア・フィットネス論」における参加型授業の試みとその成果について報告した。
講演・セミナー 1. 進む少子化と家庭・地域のあり方	単著	平成 17 年 11 月 18 日	いわき市社会福祉協議会第 31 回いわき市社会福祉大会	20 世紀は大きな変化があった時代で、1986 年に男女雇用機会均等法が施行され、女性の権利は拡充し、社会進出も進んだ。しかし、課題はいくつか残したまま、女性の権利についての考え方も各国の文化の違いや多様性が理解されないまま先進国の視点からのみ語られたため、異なる文化圏には未だに理解されていない。 わが国では、女性の自立は進んできているが、実情は本来めざされたものとは少し違っているように思われる。たとえば、仕事と結婚、出産、子育てなど、まだまだ考え直さなければならないことは数多くある。ライフスタイルが多様化する中で、自己選択、自己責任の原則で互いに認め合うことが大切であるという内容で講演した。

2.人権問題「ハラスメントを考える」	単著	(1)平成18年11月17日 (2)平成19年2月22日 (3)平成19年2月23日 (4)平成19年2月24日 (5)平成19年3月2日 (6)平成19年8月24日 (7)平成21年1月21日	伊賀郡経営者研究会 長浜市経営者研修会 大阪市企業人権推進協議会中央区支部研修会 滋賀県西浅井町企業内同和問題研究集会 尼崎市社会福祉協議会小田支部人権問題研修会 大津市企業内人権啓発事業主及び窓口担当者研修会 静岡県袋井市職員研修（午前・午後の2回）	企業における経営者のモラルハラスメントに対する認識について、特に知っているつもりのセクシュアルハラスメント、パワーハラスメントなどのモラルハラスメントの課題を具体的に例をあげて説明する。 無意識の言動の中でも、ことばの暴力は被害者の心に深く残り立ち直ることのできないほどの心の傷を負わせることになる。 また、男性の立場、女性の立場、経営者、管理職と各々の立つ位置と心得、互いに尊重できる職場づくりのための具体的な提言をする。 この問題は、地域がかかえている問題もあり、研修後の相談も多いのが特徴である。学問的な視野での話ではなく、受講者は常に問題解決のヒントがほしいということもあり、毎回地域性など調査、情報収集は欠かせない。
3.企業におけるハラスメント対策	単著	(1)平成19年6月15日 (2)平成20年7月30日	阪神高速自動車株式会社　経営者・管理職研修 株式会社　日建設計経営者セミナー	両社ともほとんど男性社員という中で、1～2割の女性に対するモラルハラスメントについて講演する。 毎年人権問題、セクシュアルハラスメント等については研修を実施しており、意識は高いが、無意識にハラスメントになるような言動をおこしかねないこともあることの認識が必要。特に、ハラスメントをおこしやすいタイプや性格について述べた。 株式会社日建設計は、中国、フランス、ドイツ、アメリカ、韓国など、さまざまな国の人がおり、その国民性、各国の文化による考え方や宗教の違いなどから、パワーハラスメントになりうる面が

				少なくないことに言及した。
4.青少年育成	単著	平成 19 年 7 月 1 日	益子町青少年健全育成大会	「家庭が見失っている大切なもの」のテーマで、青少年の健全育成についての記念講演。 家庭における父親、母親、祖父母の役割を真剣に考えなければならない時代になっている。親と子のともだち化、親子のコミュニケーション、ケータイ、ゲーム等に対する親子の約束などについて、具体例をあげて説明した。
5.労働組合 グレードアップ 3 セミナー :	単著	(1)平成 16 年 4 月 (2)平成 17 年 3 月 (3)平成 18 年 3 月 (4)平成 19 年 5 月 (5)平成 20 年 3 月 (6)平成 21 年 5 月	松下電工労働組合 （平成 20 年 10 月よりパナソニック電工労働組合）	入社 3 年目の社員に労働組合が実施するセミナーである。 「総合力と創造力の時代に生きる」～競争と共生～のテーマで、21 世紀という多様化社会に求められる総合力と、どんな状況にも対応できる創造力をいかに養っていくかによってキヤリアゴールが見えてくる、という視点で講演した。

（人間）田中　秀生

教　育　研　究　業　績　書

2017 年 2 月 24 日

氏名　　田中 秀生　印

研究分野	研究内容のキーワード
社会思想、哲学、フランス地域文化研究、社会学	ルソー、18 世紀ヨーロッパ、フランス、社会理論

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 ・視聴覚教材を使用した授業	平成１６年～平成２５年	太成学院大学人間学部「人間学入門」などの授業において、学生の学習意欲の動機づけ、および視聴覚を通じた知識の定着を目的として、授業各回のテーマに沿ったビデオ

		（DVD）教材を学生に視聴させ、その内容に関する穴埋めプリントを実施する
・学外学習（フィールドワーク）	平成１７年５月、平成１８年５月、平成１９年５月	太成学院大学人間学部「社会思想史」の授業において、日本の司法組織および将来の裁判員制度に対する理解を目的として、大阪地方裁判所にて裁判の傍聴を引率する
２　作成した教科書，教材		
・確認テストの作成	平成１６年・平成１７年、平成２０年以降	太成学院大学人間学部「西洋史概論」「現代社会論」などの科目において、毎授業、前回授業の内容の理解度の確認、および扱う領域に関する学生のリテラシーの事前確認を目的とした小テストを実施する
・日本近現代文学作品のアンソロジーの作成	平成１６年以降	太成学院大学人間学部「思想と文学」の授業において、日本の近現代文学の代表的短編小説十数編を選定し簡易製本して学生に配布する
・一般常識試験の作成	平成１７年以降随時	太成学院大学人間学部における合同「アセンブリ・アワー」において、教師や公務員などを目指す学生に資することを目的として、一般常識の模擬試験問題を作成し実施する
・読書トレーニングのための日本語作品アンソロジーの作成	平成２１年４月（以後、毎年前期）	太成学院大学人間学部「人間学入門」の授業において、学生の日本語運用能力（読解力や表現力）の向上に資するために、良質の評論や随筆を選定し学生に配布する
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
・学生による授業評価	平成１６年以降、毎年半期毎	太成学院大学において、ファカルティ・ディベロップメントの一環として、担当するすべての科目につき受講学生による授業評価を受ける
・「歴史分科会」参加	平成１６年４月	太成学院大学人間学部人間文化学科における教育研究部会である「歴史分科会」において、授業内容の相互吟味
・「人間学・保健衛生学分科会」での授業内容の検討	平成２１年１２月	太成学院大学人間学部における教育研究部会である「人間学・保健衛生学分科会」において、授業内容の相互吟味

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他 ・補助業務 ・アドバイザ	 平成５年４月～平成６年３月 平成１７年４月以降	 東京大学教養学部外国語教室（フランス科）における雑務の補助（図書・資料の整理など） 太成学院大学において、アドバイザとして担当するクラスの学生の大学生活支援

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　危機に対峙する思考	共著	平成２８年１月	梓出版社	日本学術振興会科学研究費助成給付（2013-15 年度基盤研究（B））「ポスト３・１１的危機からみる＜理性＞＜欲求＞＜市民社会＞の再審」課題番号：２５２８４０２１）の成果物として編集された論文集。 担当部分：第二篇・第一章「政治体とルソー的＜中間＞」、概略：ルソーの著作『不平等起源論』『エミール』『告白』などに見られる特徴的な記述および論理構造からルソー的＜中間＞と呼称すべきものを抽出し、その内容に基づき『社会契約論』における「社会契約」概念およびその根幹部に存在す

				る「法」の特異な性質とその意味を分析した。
（学術論文） 1 ジャン=ジャック・ルソーにおける“法”と“自然”	単著	平成７年３月	東京大学大学院総合文化研究科（修士論文）	ルソー作品に様々の形態で出現する“不法”という問題から、ルソーの感性と思想の根幹を洞察しようと企図した論文である。まず、教育学的著作である『エミール』を題材に、法の外部者としての「子ども」=「自然人」の位相を、所有という経済的契機および禁止という法的契機の両面から検証し、それに基づいて、自伝『告白』における不法行為の文学的記述が、自然から社会への象徴的な抵抗と自然回帰の思想を包含していることを論証し、更に、こうした法(社会)と自然の乖離した状態を解決すべく著された『不平等起源論』と『社会契約論』を題材に、自然からの法の直接的導出の過程を分析した。
2 *De la recherche de la ≪vérité≫ chez Jean-Jacques Rousseau*	単著	平成９年９月	パリ第７大学大学院博士第三課程テクストと資料の科学科（DEA 論文）	ルソーの思想的営為のすべては、「真理 vérité」を明るみに出す、という一点に収斂するものであったと言える。三期に分類されるその著述活動において、前期『学問芸術論』『不平等起源論』では既存の諸理論が孕む虚偽の批判、中期『エミール』『新エロイーズ』『社会契約論』では人間社会における共同性の現実と理念、後期『告白』『対話』『夢想』では自己の感情と人格を通じた人間存在の真理の探究、をそれぞれ目的としていた。本論文では、真理の認識に関するルソー的方法論に論究対象を限定し、真理の感受を阻害する外的および内的障害の抽出、自然としての外的事物への完全な受動性による生の次元での一体化の記述の分析などを行うことによって、人間的要素を拒斥するルソー的「真理」

				概念の特質を明らかにした。
3　ルソー『社会契約論』における“自分自身の主人”と“譲渡”	単著	平成１１年３月	『年報 地域文化研究』第２号、89-104 頁	ルソーにおいて共同性一般に関する理論の最も純粋な表現は、後に世界史的な意味も持つことになった『社会契約論』という著作に見ることができる。そこで展開される独自の「社会契約」概念において要点として示されているのは、自己の「譲渡」であるが、自己を譲渡するためには自己を対象化し所有していることが前提条件である。この自己対象化と自己所有という極めて近代的な自己様態に基づく契約条件を、ルソーは古典古代の西欧思想より存在した「自分自身の主人」という概念に新たな内容を盛り込むことで表現しており、この論点については従来その意義が言及されていなかった。本論文は、この概念の内容を、占有／所有の区別、自由の質的区別、感性的水準における自己変容の問題、等と関係づけることによって明確化したものである。
4 『エミール』における教育の一特徴について―ルソー的徳の美学的方法（Ｉ）―	単著	平成１８年３月	『太成学院大学紀要』第２４号、39-54 頁	ルソーの社会理論において、最大の要諦となっているのは「徳（美徳）vertu」の問題であることは異論のないところであり、これがその民主制（共和制）理論の土台をなすことは明らかである。ルソーにあってこの徳は、美学化、即ち感性化=身体化=無意識化されたものでなければ「徳」とは呼称されない。本論文では、こうしたルソーにおける美学化された徳というテーマに関係する箇所のうち、教育学的著作である『エミール』を題材に、その議論の前提となる部分、即ち概念化された「子ども」および「教師」という形象に込められた内容の分析、またそれに基づいた「第二編」中の「そら豆」の挿話と「徳の訓戒」の対話のテキスト

				の分析を行い、これらを通じて、徳の美学化には徳の内容の言語による意識化が極めて大きな障害となる、というルソーの主張とそれに付随する問題点を考察した。
5　ルソーにおける「最初の約束」の成立様式について	単著	平成１９年３月	『現代社会学理論研究』第１号、100-114頁	社会学の根本問題の一つとされる所謂“ホッブズ問題”に関係する議論を、ルソーは“法の遵守を請け負う法”をその内容とする「最初の約束」の成立機序に注目することによって展開しており、分析的に法の根拠に遡行するその手続きの中に、ルソー解釈（ルソー的社会契約論の内実およびルソーの究極的な共同体観）に関する極めて重要な諸論点が含まれている。本論文では、利己的（意識的）行為としての「社会契約」の締結当事者の前意識的次元に「最初の約束」と呼称される更に基底的な共同化が事実として先行しているという思想を、「最初の約束」が成立する際の循環性の記述から読解し、その循環性を脱するために、個人性が発生する以前の徳の領域に必然的に突出するルソーの論理的探究の過程を論究した。
6　社会契約の基底と秩序問題―ルソー的徳の美学的方法（Ⅱ）―	単著	平成１９年３月	『太成学院大学紀要』第２６号、49-63頁	社会契約論は原子的個人を基本単位とし、それらの利己的振舞いから社会および国家の設立を説明する論理であり、ルソーも主要著作として『社会契約論』を著したが、これは未だ解明されるべき論点が残されている難解な著作である。また、この学説は後の20 世紀になり、その問題設定によって社会学における秩序問題と深く関係することになった。本論文は、『社会契約論』において「社会契約」と「最初の約束」は区別され、後者が前者に先行しつつその基礎になっているという仮説の論証、および、それに基づ

				いた「最初の約束」の成立様式の特徴の析出とその意味の解明を試みた。
7　ルソーにおける「信憑」の意味について―ルソー的徳の美学的方法（Ⅲ）―	単著	平成２０年３月	『太成学院大学紀要』第２７号、97-105 頁	ルソーの自伝的記述（とりわけ『マルゼルブ租税院長官への四通の手紙』）の中にルソー本人が「霊感 inspiration」によって真理を受け取ることを主題とした挿話があるが、ルソーの社会理論の内容に鑑みるとき、この挿話で語られた内容がその社会理論の基礎に接続していることは明らかであり、その社会理論の真意を理解するための重要な手がかりとなる。本論文では、この問題の全体に関係する「信憑 persuasion」という主題を取り上げ、徳の内面化（身体化）によって成立する美学的な真のルソー的社会体の核心に信憑という問題がいかに関係しているかを考察した。その際の要諦は、霊感による真理の信憑が＜身体＞という場の現象であり、こうした真理と体験者ジャン=ジャックの関係と特異な人物形象の造形によって語られる思想家ルソーの社会理論の内容との間にアナロジーの関係が存在するという点である。
8　不法行為に託されたもの（一）―ルソー『告白』「第一巻」「第二巻」における＜盗み＞の挿話のテキスト分析―	単著	平成２１年３月	『太成学院大学紀要』第２８号、97-107 頁	ルソーの自伝作品『告白』には、ルソー自身の過去の悪徳の数々が記述されているが、特に読者の注意を惹くのは、子ども時代を描いた巻において盗みのエピソードが数度回想されている事実である。ルソーによるこれらの挿話のディスクールは、自伝という形式の借り受けによるところのある種の思想の表明と考えうる。本稿は「第二巻」に現れるリボン盗みの挿話とそれに関係する周辺部分のテクスト分析を試み、主として盗みが発生する舞台としての共同体とそこを統制している法の性格を精査することを通じ

				て、ルソー思想の基本的構えとしての自然／社会の枠組みに接続する内容をそこから析出することを試みた。
9　不法行為に託されたもの（二）―ルソー『告白』「第一巻」「第二巻」における＜盗み＞の挿話のテキスト分析―	単著	平成２３年３月	『太成学院大学紀要』第３０号、97-103 頁	ルソーの自伝作品『告白』には、ルソー自身の過去の悪徳の数々が記述されているが、特に読者の注意を惹くのは、子ども時代を描いた巻において盗みのエピソードが数度回想されている事実である。ルソーによるこれらの挿話のディスクールは、自伝という形式の借り受けによるところのある種の思想の表明と考えうる。本稿は「第一巻」に叙述された「櫛」挿話と「リンゴ」挿話の間に観察される同一性と対称性の分析から、社会の反転としての自然の表現のされ方の特徴を把握し、ルソー思想の基本的構えとしての自然／社会の枠組みに接続する内容をそこから析出することを試みた。
10　『エミール』における＜中間＞の主題について―ルソー的徳の美学的方法（Ⅳ）―	単著	平成２３年３月	『太成学院大学紀要』第３０号、105-113 頁	ルソーの著作には、対象が三分され（多くは時系列が織り込まれた形で）、その中間部分（中間状態、中間項、中間期、等）が、その前後の部分それぞれの善きものの保存と悪しきものの廃棄によって価値あるものとしての属性を帯び、多くの場合、理想的なものにまで高められる、というパタンが観察される。人間の教育がテーマとされた作品『エミール』においても、個人の成長過程の中に「美しい幼年期」の「できあがった子ども」という独特の形象が造形されており、このルソー的＜中間＞と見做しうるものが出現し、自然状態の子どもとも完成された大人とも質的に区別された、一つの完結した理想状態が表現されている。本稿では、この『エミール』における＜中間＞性について、その内容の概略を呈示し、またその内容の政治

				思想における意味を敷衍して検討した。
11　不法行為に託されたもの（三）―ルソー『告白』「第一巻」「第二巻」における＜盗み＞の挿話のテキスト分析―	単著	平成２４年３月	『太成学院大学紀要』第３１号、117-124 頁	ルソーの自伝作品『告白』には、ルソー自身の過去の悪徳の数々が記述されているが、特に読者の注意を惹くのは、子ども時代を描いた巻において盗みのエピソードが数度回想されている事実である。ルソーによるこれらの挿話のディスクールは、自伝という形式の借り受けによるところのある種の思想の表明と考えうる。本稿は前々稿・前稿を承け、「盗み」およびそこに関係する要素としての「金銭」「些末な物」「くすね」「読書」等に関する記述から、ルソー的“不法”が本質的に意味しているものを総体的に明らかにし、ルソー思想の基本的構えとしての自然／社会の枠組みに接続する内容をそこから析出することを試みた。
12　＜問い＞に値するもの―初期柄谷行人の主題について―	単著	平成２６年３月	『太成学院大学紀要』第３３号、57-66 頁	柄谷行人の仕事は、初期の文芸批評から形式化および外部性の問題へ、そして 2000 年前後からの現実へのコミットメントへ、といくつかの転回を経ているが、その核となっているものは重心を移動させつつ連続していると思われる。本稿では、この核につながる一つの主題、即ち、本性的に欺瞞的でしかありえない＜意識＞に対し真正なる違和を突きつけるものとしての＜存在＞の次元を見定める、という視角の内容と意味について、主に初期の批評作品および当時に関する証言等を題材に照明を試みた。
13　政治体の成立とルソー的＜中間＞―社会契約における「法」の「強固さ」について―	単著	平成２７年３月	『太成学院大学紀要』第３４号、67-75 頁	ルソーの著作には、対象が三分され、その中間部分（中間状態、中間項、中間期、等）が、その前後の部分それぞれの善きものの保存と悪しきものの

				廃棄によって価値あるものとしての属性を帯び、多くの場合、理想的なものにまで高められる、というパタンが観察される。法および政治の視点から理想的な共同性が模索された諸作品においても、政治体の成立に関する論理展開のなかに、このルソー的＜中間＞と見做しうる要素が存在している。本稿は、『社会契約論』を中心とした政治理論の記述のなかに見られる＜中間＞性について、その内容を検討し、それがルソーの理論構成において果たしている機能を明らかにすることを試みた。より広い文脈においては、人間（人為・社会・文化）の断罪者、自然の賛美者としてのルソーにおいて、“人間の自然”および“自然な社会”という独特の領分に関するこの著作家の思想を解明する一つの試みとして位置づけられるものである。
14　『社会契約論（ジュネーヴ草稿）』「第一篇・第二章」で準備されたもの―ルソー的＜中間＞にもとづく一分析―	単著	平成２８年３月	『言語文化研究』第２２号、	『社会契約論』決定稿における「社会契約」概念というルソー的＜中間＞がその能動主として持つ「完成された人為」の人為性を準備するために、それに先立つ同書の「ジュネーヴ草稿」の「第一篇・第二章」ではあえて、本来トレードオフ関係の解消を担うものであったはずのルソー的＜中間＞が姿を現していないことを論証した。この人為性の確保により、『不平等起源論』などで黄金期として表象されていたにすぎなかった自然的＜中間＞を仮構することなく、逆説的に“自然な”社会という＜中間＞が生じる。

（その他） 1　公民科教育法における「権威」概念―デュルケム『道徳教育論』について―」（研究資料）	単著	平成１５年１２月	『太成学院大学紀要』第２３号	現在の日本の高等学校における教科としての「公民」科は、「現代社会」「倫理」「政治・経済」に下位区分されているが、このいずれにおいても広義の秩序の形成と維持が問題になっている。そこでの本質的な問題は、共同体構成員の従属の対象および従属の際の心的態勢である。本論文は、伝統からの拘束が弱まった結果としてアトム的諸個人の利己的な振舞いが肯定される近代社会において、秩序の支柱となる「権威」がいかに形成され機能するか、という点を、主にデュルケム『道徳教育論』で叙述される社会学的考察に基づき、個人の自由（主体性）の観点から検討したものである。
2　算数・数学、世界の教科書で見る比較文化―フランス編―（雑誌記事）	単著	平成１６年６月	『Math Math』第２号	数学雑誌『Math Math』（財団法人日本数学検定協会）における一特集として書かれた、日仏の小学・中学・高校の算数・数学の教科書比較を通じて見られる両国の教育と文化の差異と共通性に関する調査レポート記事。
3　諸悪の根源としての同族経営（教研集会発表）	共同	平成２４年８月	第23回全国私立大学教育研究集会	第４セッション「不当解雇・権利侵害・不当労働行為とのたたかい」における、所属大学の現状と問題点の説明と労組としての活動報告、および質疑応答。
4　日本学術振興会科学研究費助成給付（2013-15年度基盤研究（B））「ポスト３・１１的危機からみる＜理性＞＜欲求＞＜市民社会＞の再審」（研究代表者：鈴木宗徳（法政大学）、課題番号：２５２８４０２１）研究分担者	共同	平成２５年４月～平成２８年３月		本研究は、東日本大震災とそれに伴う原発事故が露呈させたところの、戦後日本社会に巣食い続けている深い病理を、思想史的側面から分析・把握するために企図されたものである。その際、＜理性＞＜欲求＞＜市民社会＞という概念がもつ両義的な価値について、個別の思想家のテキストに即した分析をおこなうとともに、現代日本の「危機」や「転換」に関する客観的・

				実証的な把握をおこなう。科学技術文明がひきおこす諸問題について再検討する「Ⅰ．科学技術的理性と欲求」、民主主義的正当性とその基盤について再検討する「Ⅱ．市民社会における合意形成と理性」、社会的な連帯と分断／排除の矛盾について再検討する「Ⅲ．社会空間の分断・排除と共感・連帯」の三つの領域について、＜理性＞＜欲求＞＜市民社会＞という三つの基本概念の意義と本質を再審する。
5 ＜自然な社会＞と人為の隠蔽について―『新エロイーズ』におけるルソー的＜中間＞―（研究会発表）	単独	平成２７年９月	言語文化研究会	発表者が概念構成したところのルソー的＜中間＞の紹介、およびこれに基づいた『新エロイーズ』「第四部」の「クララン」に関する記述の分析を通じて、個人的傾向（欲望・自発性）と社会的義務（正しさ）とが両立する「美しい魂」たちからなる「社会に生きる自然人」の＜自然な社会＞が持つ＜中間＞性と、それを可能にする条件としての人為の隠蔽が準備する身体（美学）的次元の必要性を報告した。

（人間）長谷川　健司

教　育　研　究　業　績　書

2018 年　3 月　19 日

氏名　　長谷川　健司　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
体育・スポーツ経営学、スポーツ社会学	生涯スポーツ、地域スポーツ、学校体育、プロスポーツ

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 授業内容の理解の確認と 復習の機会の確保	平成 19 年 10 月～	授業アンケートの結果より、多くの学生が授業の復習にはほとんど時間をとっていないことが明らかになった。そこで 3～4 回の講義につき 1 回は講義終了前に時間をとり、講義内容についての小レポートを課して、学生の復習機会の確保とともに、学生の講義内容の理解を確認する機会としている。
太成学院大学人間学部導入教育宿泊研修におけるプログラムの計画・実施	平成 24 年 3 月～ 平成 27 年 3 月	初年次教育の一環として行う導入教育宿泊研修を主担として実施した。卒業生を活用し、社会人・現職教員の方に仕事の魅力や大学時代の過ごし方、1 年次からの留意事項について講演をしていただき、新入学生が大学生活を目標と具体的なイメージをもって前向きに送ることができるようなプログラムを実施した。
笹川スポーツ財団主催　Sports Policy for Japan での発表	平成 28 年 10 月 平成 29 年 10 月	基礎ゼミ演習の学生を 2 グループに分け、半年以上の準備期間を経て、笹川スポーツ財団主催 Sports Policy for Japan にてスポーツに関する政策提言を実施した。
2　作成した教科書，教材 パワーポイント教材 プリント教材	平成 19 年 4 月～	各講義において、毎時間パワーポイント教材を作成している。流れの把握や、理解を進めるために整理した図を交えるなどの工夫をしている。また、授業の進行に合わせて参考になる資料をプリントにして配布し、教材として使用している。
模擬授業の実践のための授業評価シート、授業観察シート、	平成 22 年 9 月～ 平成 23 年 1 月	「保健体育科教育法」において、学生が模擬授業を行った際に学生の模擬授業に対する評価が客観的になされるよう、生徒役の学生が評価観点に基づき授業を評価するシート、授業観察者が期間記録法、相互作用記録法に基づき授業を記録するためのシートを作成した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		

太成学院大学学生による授業評価	平成 21 年 3 月 ～平成 22 年 3 月	学生の総合的な評価として「役に立ったと思うか」「後輩にすすめたいと思うか」の項目に着目すると、「保健体育科教育法Ⅰ・Ⅱ」「健康スポーツⅣ」では 8 割以上、「スポーツ行政の理論と実際」では 7 割以上、「健康管理概論」では 6 割以上の肯定的な評価が学生から得られた。なお、否定的な評価をした学生は全ての授業において 5%以下であった。
太成学院大学学生による授業評価	平成 23 年 3 月～ 平成 24 年 3 月	調査項目が一部変更になったため、学生の総合的な評価として「達成感を得られたか」「授業を受けてよかったか」の項目に着目すると、「保健体育科教育法Ⅰ」「保健体育科教育法Ⅱ（平成 22 年度のみ）」「スポーツ行政の理論と実際」「健康スポーツD」「スポーツ社会学（平成 23 年度のみ）」において、8 割以上の学生から肯定的な評価が得られた。
太成学院大学学生による授業評価	平成 27 年 4 月～ 平成 30 年 3 月	必修科目あるいは教職課程の要件科目である「スポーツ社会学」「スポーツ行政の理論と実際」「スポーツ経営学」「スポーツ実践実習 E(サッカー)」において、学生の総合的な評価として「授業を受け終えて、あなたはこの授業に満足していますか」「この授業を友人や後輩にすすめたいと思いますか」の項目において、全ての授業で肯定的な評価が 8 割は超えており、そのうちの大半は肯定的評価が 9 割を超えていた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 特記事項なし		
5　その他		
大阪工業大学高等学校(現　常翔学園高等学校) 模擬授業 大阪府立大和川高等学校　模擬授業	平成 19 年 7 月 平成 19 年 11 月	体育・スポーツとの関わり方について、「する」以外の「見る」関わり方に関する授業を行った。特にメディアとスポーツの関係、ドーピング問題に関する事例を用いて、ただスポーツの勝敗を「見る」のではなく、多様な視点でスポーツを「見て」、問題意識を持つようになることの必要性について授業を展開した。
大阪府立豊島高等学校　模擬授業 大阪府立泉尾高等学校　模擬授業 近畿大学泉州高等学校　模擬授業	平成 20 年 10 月 平成 20 年 10 月 平成 20 年 12 月 平成 22 年 1 月 平成 22 年 4 月 平成 22 年 6 月	体育・スポーツとの関わり方において、「する」「見る」以外の「支える・創る」という関わり方を取り上げ、スポーツを仕事にしたいと考える場合に「支える・創る」関わり方が中心となることを授業で確認し,その上で、スポーツとの多様な関わりを持つことの必要性について授業を展開した。

大阪商業大学堺高等学校　模擬授業	平成 23 年 1 月	
星翔高等学校　模擬授業		
大阪府立懐風館高等学校　模擬授業		
大阪府立みどり清朋高等学校　模擬授業		
大阪府立懐風館高等学校　模擬授業	平成 24 年 11 月	「スポーツの裏側」というテーマで、スポーツの発展における、「高度化」と「大衆化」の間で発生しうる課題について考える授業を展開した。
大阪市立桜宮高等学校　模擬授業	平成 25 年 11 月	「スポーツを考える」というテーマで、スポーツマンシップ・フェアプレーについて、実際のスポーツ場面を題材に検討する授業を展開した。
奈良県立大和広陵高等学校　模擬授業	平成 26 年 1 月	
大阪府立芦間高等学校　模擬授業	平成 28 年 11 月	「スポーツを仕事にする」というテーマで、スポーツ指導や地域クラブ運営を中心に、スポーツと関わる仕事のやりがいや魅力、難しさや苦労、スポーツ界で働くために必要なことについて考える授業を展開した。
大阪府立美原高等学校　模擬授業	平成 30 年 1 月	
HSN ネット「公開講座フェスタ 2017」 公開講座	平成 29 年 11 月	「スポーツの多様性を楽しむ」をテーマで、スポーツマンシップやフェアプレーといった考え方がぶつかる、スポーツの現場で起こる問題とのジレンマを通して、スポーツの魅力を改めて考える授業を展開した。
指導者研修会の実施	平成 21 年 8 月～ 平成 22 年 8 月	小・中学生年代を対象とする地域サッカークラブにおいて、指導者研修会を実施した。指導実践を通して、サッカーの練習メニューの立て方、選手への声のかけ方等指導法に関する研修を行い、アドバイスをした。
V リーグにおける観戦者調査	平成 27 年 12 月 平成 28 年 12 月 平成 29 年 12 月	V リーグ堺ブレイザーズホームゲームにおいて、学生も交えて、観戦者調査を実施した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 （財）日本サッカー協会公認Ｂ級コーチ	平成 20 年 5 月～	
日本体育協会公認コーチ	平成 20 年 5 月～	
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
茨城県立牛久栄進高等学校 運動部活動外部指導者	平成 14 年 4 月～ 平成 16 年 3 月	運動部活動におけるサッカーおよび部活動運営に関しての指導を実施
私立清教学園高等学校 臨時職員（部活動指導）	平成 16 年 4 月～	運動部活動におけるサッカーおよび部活動運営に関

	平成 19 年 3 月	しての指導を実施
大阪府クラブユースサッカー連盟理事	平成 21 年 4 月～ 平成 28 年 3 月	中学生年代を対象とする大阪府クラブユースサッカー連盟の事業運営に関する意見を述べる。
（一社）大阪府サッカー協会 技術委員会 大阪府セントラルトレセン U-16 技術指導員	平成 23 年 4 月～	大阪府内の U-16 年代の選抜された選手のサッカー指導を実施。
（一社）大阪府サッカー協会 国民体育大会 （第 66 回山口国体）少年の部役員	平成 23 年 4 月～ 10 月	国体 TSG として試合分析等の実施 （第 4 位）
（一社）大阪府サッカー協会 国民体育大会 （第 67 回岐阜国体）少年の部役員	平成 24 年 4 月～ 10 月	国体 TSG として試合分析等の実施 （第 3 位）
（一社）大阪府サッカー協会 国民体育大会 （第 68 回東京国体）少年の部役員	平成 25 年 4 月～ 10 月	国体 TSG として試合分析等の実施 （準優勝）
（一社）大阪府サッカー協会 国民体育大会 （第 69 回長崎国体）少年の部役員	平成 26 年 4 月～ 10 月	国体 TSG として試合分析等の実施 （ベスト 8）
大阪市港湾局指定管理予定者選定委員会 専門委員	平成 26 年 9 月～ 平成 26 年 12 月	指定管理予定者の選定。
大阪市公募型プロポーザル有識者会議委員	平成 26 年 12 月～ 平成 27 年 2 月	平成 27 年度市民レクリエーションセンタースポーツ教室企画運営業務及び平成 27 年度ウォーキングイベント企画運営業務を委託する事業者の選定に関して意見を述べる。
大阪市公募型プロポーザル有識者会議委員	平成 26 年 12 月～ 平成 27 年 4 月	平成 27 年度 OSAKA スポーツ大学企画運営業務及び平成 27 年度チャンピオンレッスン企画運営業務を委託する事業者の選定に関して意見を述べる。
（一社）大阪府サッカー協会 国民体育大会 （第 70 回和歌山国体）少年の部役員	平成 27 年 4 月～ 10 月	国体 TSG として試合分析等を実施 （ベスト 8）
（一社）大阪府サッカー協会 国民体育大会 （第 71 回岩手国体）少年の部役員	平成 28 年 4 月～ 10 月	国体 TSG として試合分析等の実施 （準優勝）
大阪市港湾局指定管理予定者選定委員会 専門委員	平成 28 年 6 月	指定管理者の評価
（一社）大阪府サッカー協会 国民体育大会 （第 72 回愛媛国体）少年の部役員	平成 29 年 4 月～ 10 月	国体 TSG として試合分析等の実施 （第 3 位）
4　その他 太成学院大学人間学部　学生副主事	平成 21 年 4 月～ 平成 23 年 3 月	学生生活における学生サポートおよび学生指導に関して、学生主事を補佐した。
太成学院大学人間学部　学生主事	平成 23 年 4 月～ 平成 27 年 3 月	学生生活における学生サポートに関する事業の企画・立案・周知・実行および学生指導に関する業務を実施した。
太成学院大学人間学部　教務副主事	平成 27 年 4 月～	教学運営に関して教務主事を補佐した。
太成学院大学サッカー部　監督	平成 23 年 4 月～	関西学生サッカー連盟に加盟し活動。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・	発行又は	発行所，発表雑誌	概　　要

	共著の別	発表の年月	等 又は発表学会等の名称	
（著書） （学術論文） 総合型地域スポーツクラブの有効性に関する研究 －クラブ入会後の会員意識の変容をもとに－	単著	平成16年2月	筑波大学体育研究科修士論文	総合型地域スポーツクラブの会員の「生活」に焦点をあて、クラブ入会後の会員意識・行動の変容という観点から、総合型地域スポーツクラブの有効性について分析している。4クラブの20歳以上の会員を対象に質問紙調査を行い、「スポーツ実施率の向上」、地域内での知人が増える「地域ネットワークの拡大」という点において高い成果が見られた。また複数種目への参加やクラブ運営など「多様なスポーツ参加」をしている会員においては、地域アイデンティティの形成、世代間交流に関する効果意識の変容が顕著に見られた。
企業スポーツチームの運営理念に関する分析	共著	平成26年7月	体育経営管理論集第6巻	企業スポーツチームの運営実態と運営理念の特徴について、企業から支援を受けているスポーツチームの代表者への質問紙調査を実施し、企業にとってのスポーツチーム所有の目的とその評価に向けての課題を提示した。
V・プレミアリーグ観戦者におけるファンコミュニティ・アイデンティフィケーション－チーム・アイデンティフィケーション，行動意図との関係性の検討－	共著	平成29年3月	太成学院大学紀要第19巻	田原 陽介、行實 鉄平、高岡 敦史、長谷川健司 ファンコミュニティ・アイデンティフィケーションが，チーム・アイデンティフィケーションや行動意図に与える影響を検討し、試合満足・サービス満足が行動意図に与える影響と比較し検討を行った。V・プレミアリーグ堺ブレイザーズのホームゲーム観戦者から収集したデータから、ファンコミュニティ・アイデンティフィケーションは，チーム・アイデンティフィケーションに対して，バレーボールへの愛着や選手への愛着よりも強い影響があり、行動意図に対しては，試合満足やサービス満足からは有意な影響が示されず，チーム・アイデンティフィケーションおよびファンコミュニ

				ティ・アイデンティフィケーションは有意な影響を及ぼしていることが明らかとなった。 長谷川 健司、清川 健一、出口 順子 （研究報告） Vリーグ観戦者から収集したデータを用いて、日本版顧客満足度指数（JCSI）の因果関係モデルが観戦者行動にも適用できるか、分析を行った。モデルはモデル適合の基準値を満たさず、因果関係を示すパス解析を行うことはできなかった。
日本版顧客満足度指数の観戦者行動への適用	共著	平成29年4月	体育経営管理論集 第9巻	
「豊かなクラブライフ」によるアウトカムとは何か：総合型地域スポーツクラブにおけるアウトカム項目の検討プロセス	共著	平成29年10月	体育・スポーツ経営学研究 第31巻	出口 順子、徳山 性友、井澤 悠樹、沖村 多賀典、長谷川 健司 総合型地域スポーツクラブでの会員のクラブライフによってもたらされるアウトカムについて、「豊かなスポーツライフ」が実現されていると考えられる全国10クラブにおいて調査を行い、7つのカテゴリーで構成されるアウトカムが明らかとなった。 関根 正敏、天野 和彦、石井 十郎、今宿 裕、岩月 基洋、川邊 保孝、木戸 直美、菅谷 美沙都、田原 陽介、西村 貴之、長谷川 健司、松橋 崇史、村田 真一、作野 誠一
（その他） 1総合型地域スポーツクラブの「運営参加」に関する研究 －会員行動、意識との関係をもとに－		平成16年3月	日本体育・スポーツ経営学会 第27回大会	４つの総合型地域スポーツクラブの会員を対象に行った質問紙調査をもとに、会員のクラブへの運営参加の状況を明らかにし、クラブ運営への参加が会員の行動、意識に与える影響について分析・検討した。
2講演「スポーツとともに生きる－地域スポーツの可能性－」	単著	平成20年7月	平成２０年度全国高等学校長協会体育部会近畿ブロック会議 全国高等学校体育学科連絡協議会近畿ブロック会議	体育科をもつ高等学校の保健体育科教員を対象に、「スポーツとともに生きる－地域スポーツの可能性－」と題し、地域スポーツが注目されている背景、地域スポーツクラブで得られる経験や学びの可能性、地域スポーツクラブが雇用の場として拡大しつつある現状、また地域スポーツクラブで働くために必要な資質と能力について、地域

				スポーツクラブの活動事例をもとに、講演を行った。
3 講演「『ボランティアマネジメント』を考える」	単著	平成 21 年 12 月	堺市市民人権局スポーツ部スポーツ推進課(堺市地域スポーツ指導者研修)	体育指導委員や地域スポーツ指導者、スポーツボランティアに興味をもつ市民を対象に、「『ボランティアマネジメント』を考える」をテーマに、スポーツボランティアの意義や重要性、ボランティアマネジメントの考え方、スポーツボランティアのモチベーションについて講演を行った。
:				企業による持続可能なスポーツ支援方策を可能にするため、企業におけるスポーツ支援活動の目的と方策の関係性を把握するための分析モデルについて検討し、現在スポーツ支援活動を行っている企業への量的・質的調査の実施に向けての課題を提示した。(p. 180) 田原 陽介, 行實 鉄平, 高岡 敦史, 長谷川 健司
4 企業におけるスポーツ支援活動の構造的把握,	共著	平成 24 年 8 月	日本体育学会第 63 回大会 予稿集	
5 企業におけるスポーツ支援活動の理念に関する分析,	共著	平成 25 年 8 月	日本体育学会第 64 回大会 予稿集	企業における持続可能なスポーツ支援方策を検討するため、スポーツチームを所有している企業への量的調査を行い、企業のスポーツ支援に対する理念と企業理念との関係性、企業内におけるスポーツ支援の位置づけ等を分析し、今後の企業スポーツ分野における課題を提示した。 (p. 234) 田原 陽介, 行實 鉄平, 高岡 敦史, 長谷川 健司
V リーグ観戦者のファンコミュニティ・アイデンティフィケーション	共著	平成 28 年 3 月	日本体育・スポーツ経営学会 第 39 回大会	V リーグ観戦者に質問紙調査を行い、ファンコミュニティ・アイデンティフィケーションが、スポーツ種目や選手への愛着よりもチーム・アイデンティフィケーションを高める要因となること、試合やサービスに対する満足よりも再観戦意図につながることが明らかとなった。 長谷川 健司、出口 順子、清川 健一
V リーグ観戦者の支援意図：支援意図の果たす役割の検討	共著	平成 28 年 3 月	日本体育・スポーツ経営学会 第 39 回大会	観戦者のエンゲージメントの１つとして「支援意図」に着目し V リーグ観戦者に質問紙調査から、再観戦意図に対してチーム・アイデンティフィケ

				ーションよりも「支援意図」が強く影響していることが明らかとなった。 出口 順子、長谷川 健司、清川 健一
サポーターズクラブ入会者というステークホルダーの特徴―態度的側面における未入会者との比較からー	共著	平成28年7月	日本スポーツ産業学会第25回大会	Vリーグ観戦者への質問紙調査から、サポーターズクラブ入会者は未入会者よりも、ファンコミュニティへの愛着がチーム・アイデンティティに与える影響が強く、また選手への愛着が観戦者のエンゲージメントの１つである「支援意図」に強く影響していることが明らかとなった。 出口 順子、長谷川 健司、清川 健一
自立経営チームファンのチーム支援意図－企業チームファンとの比較からー	共著	平成29年3月	日本体育・スポーツ経営学会　第40回大会	企業，地域，行政，ファンと多面的な支援を受けて自立経営を行っているプロスポーツチーム（堺ブレイザーズ）のファンと、企業が運営母体となっているプロチームのファンの間の、チーム支援意図に影響を与える要因の違いを検討した結果、堺ブレイザーズにおいてはチーム・アイデンティティと選手への愛着が影響を与えていたのに対し、他チームのファンはチーム・アイデンティティのみが支援意図に影響を与えていたことが明らかとなった。 出口 順子、長谷川 健司、清川 健一
Vリーグ観戦者の観戦動機－ホームタウン居住者を対象としてー	共著	平成29年7月	日本スポーツ産業学会　第26回大会	Vリーグ観戦者への質問紙調査から、ホームタウン居住者の観戦動機について、またチーム・アイデンティティの形成に結び付く要因について「競技の審美性」「地域への愛着」「選手への愛着」がチーム・アイデンティティ形成に影響を与え、チーム・アイデンティティが観戦動機に強く影響することが明らかとなった。 長谷川 健司、清川 健一、出口 順子
Vリーグ観戦者の支援意図規定要因－地域への愛着を踏まえたモデ	共著	平成29年7月	日本スポーツ産業学会　第26回	地域への愛着のチームアイデンティティへ

ルの検討―			大会	の影響、チームの支援意図への影響を含めた仮説モデルについて、V・プレミアリーグ観戦者への質問紙調査のうちホームタウン居住者でホームゲームチームを応援する観戦者から収集したデータをもとに検証を行ったが、地域への愛着からチームアイデンティティおよびチーム支援意図への影響はみられなかった。 出口 順子、長谷川 健司、清川 健一
チームアイデンティフィケーションの成果変数の検討 - エンゲージメントに着目して -	共著	平成 30 年 3 月	日本体育・スポーツ経営学会 第 41 回大会	チームアイデンティティの成果変数としてのエンゲージメント（マネジメントへの協力，向社会的行動，成績の寛容）について、V・プレミアリーグ観戦者への質問紙調査から収集したデータをもとに検証を行い、多様な愛着がチームアイデンティティの形成につながり、チームアイデンティティがエンゲージメントにつながる重要な概念であることが明らかとなった。 出口 順子、清川 健一、長谷川 健司

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教育研究業績書

平成　30 年　3 月　5 日

氏名　　猪　池　雅　憲　　印

研究分野	研究内容のキーワード
建　築　学 地　域　研　究	建築史・意匠、都市計画・建築計画 祝祭空間、非日常、地域遺産、教育観光

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
専門教育科目　観光分野でフィールドワークの実施	平成 20 年度	淀屋橋界隈における近代・現代建築の調査①（12 月 21 日） 新世界における賑わいの調査①（5 月 10 日）
専門教育科目　観光分野でフィールドワークの実施	平成 21 年度	阪堺電車（ちんちん電車）による観風開発①（5 月 10 日） 淀屋橋界隈における近代・現代建築の調査②（11 月 15 日） 新世界における賑わいの調査②（1 月 24 日） 伊賀上野観光地域研究､上野天神祭だんじり曳行に学生 35 名参加、観光調査（10 月 24・25 日）
専門教育科目　観光分野でフィールドワークの実施	平成 22 年度	どっぷり昭和町学生スタッフとしてゼミ生 5 名参加（4 月 29 日） 上町台地　真田幸村のゆかりのある社寺･場所の調査（5 月 23 日・7 月 4 日） 愛染まつり認知度調査　学生のべ 18 名参加（6 月 30 日・7 月 1 日・7 月 2 日） 津山観光地域研究､津山まつり曳行に学生 25 名参加、観光調査（10 月 23・24 日） 新世界における商店街調査（11 月 6 日） 枚岡神社の笑いの神事に参列（12 月 25 日）
専門教育科目　観光分野でフィールドワークの実施	平成 23 年度	上町台地　真田幸村のゆかりのある社寺･場所の調査（5 月 15 日・6 月 26 日）

		愛染まつり認知度調査　学生のべ22名参加（6月30日・7月1日・7月2日） 大垣・養老観光地域研究、23名の学生が調査票調査に参加（10月1・2日） 津山まつり曳行に学生10名参加､地域貢献(10月22･23日） 新世界における観光調査､観光プランニング（10月9日） 仁徳天皇陵（世界遺産国内暫定リストリスト登録）観光調査（11月27日）
専門教育科目　海外研修の実施	平成23年	中国 北京研修のプログラムを構築。3泊4日（9月2日～6日）、12名参加。
	平成24年1月	マレーシア・シンガポール研修プログラムを構築。3泊5日（1月29日～2月2日）、23名参加。
学内における資格支援講座の開講	平成23年7月	国家試験 国内旅行業務取扱管理者 特別講座開講｡平成24年度3名合格
専門教育科目　観光分野でフィールドワークの実施	平成24年度	・「どっぷり昭和町」学生スタッフとしてゼミ生15名参加（4月29日） ・上町台地　観風の旅研究（5月13日・6月24日） ・広島・厳島神社　世界遺産研究（5月26・27日）学生5名 ・愛染まつり調査研究（7月1日）学生18名 ・新世界観光研究（10月7日）学生17名 ・倉敷・児島観光地域研究、42名の学生が参加、倉敷の調査票調査及び児島の鴻八幡宮祭りの非参与調査を行う（10月13・14日） ・高取城址・高取城祭り観光研究（11月25日）学生10名
専門教育科目　海外研修の企画・実施・引率	平成24年9月	韓国 ソウル異文化体験研修プログラムの構築及び引率。3泊4日、22名参加。
	平成25年2月	マレーシア　ボルネオ島自然体験研修プログラムの構築及び引率。3泊5日（2月2日～6日）、17名参加。
観光福祉分野における資格取得の推進・企画・実施・引率	平成24年7月	ガイドヘルパー引率｡知的障がい者の余暇活動支援の資格。5名取得
観光分野で特別講座の企画・実施・引率	平成24年8月	太閤園にて施設見学、ドレス試着、テーブルマナー、メイクアップ講座他。（8月27日）13名受講。
専門教育科目　観光分野でフィールドワークの実施	平成25年	・上町台地　観風の旅研究（5月12日・6月23日）

	度	・出雲大社　世界遺産研究（6 月 1・2 日）学生 8 名 ・新世界観光研究（10 月 6 日）学生 14 名 ・津山観光地域研究、12 名がだんじり曳行及び調査票調査を行う（10 月 26・27 日） ・福島区観光研究（11 月 24 日）学生 10 名
専門教育科目　海外研修の企画・実施・引率	平成 26 年 2 月	イタリア異文化体験研修のプログラムを構築及び引率。5 泊 6 日（2 月 1 日～6 日）、24 名参加。
専門教育科目　観光分野でフィールドワークの実施	平成 26 年度	・上町台地　観風の旅研究(5 月 10 日・6 月 14 日) ・那智勝浦　熊野古道世界遺産研究(6 月 7・8 日)学生 3 名 ・新世界観光研究(10 月 4 日・11 月 22 日)学生 4 名 ・津山観光地域研究、5 名の学生が神輿曳行及び調査票調査を行う(10 月 25・26 日) ・下呂　温泉地研究(12 月 9 日・10 日)ゼミ学生 6 名
専門教育科目　グローバル研修の企画・実施・引率	平成 27 年 1 月	・世界自然遺産屋久島異文化体験研修プログラムを構築及び引率。5 泊 6 日(1 月 31 日～2 月 5 日)、学生 16 名参加
専門教育科目　観光分野でフィールドワークの実施	平成 27 年度	・宇奈月・黒部 温泉地研究(7 月 11 日・12 日)ゼミ学生 3 名 ・なばり旅コンテスト フィールド調査(10 月 24 日・25 日)学生 4 名 ・熱海 温泉地研究(12 月 5 日・6 日)ゼミ学生 10 名
専門教育科目　観光分野でフィールドワークの実施	平成 29 年度	・熱海 温泉地研究（12 月 5 日・6 日）ゼミ学生 10 名 ・京都世界遺産研究（9 月 12 日・13 日）ゼミ学生 7 名 ・堺まち歩き　観風の旅研究（10 月 14 日）ゼミ学生 4 名
２　作成した教科書，教材		
情報処理概論	平成 20 年	講義用教材（春学期）、B4 サイズ 26 ページ
情報の倫理	平成 20 年	講義用教材（秋学期）、A3 サイズ 16 ページ
情報処理概論	平成 21 年	講義用教材（春学期）大幅に改定、A3 サイズ 28 ページ
ものづくり実習Ⅰ	平成 21 年	実習用教材（春学期）椅子の模型製作と 3D ソフトの新規実施
CADⅠ	平成 21 年	講義用教材（春学期）、B3 サイズ 10 ページ
情報の倫理倫理	平成 21 年	講義用視聴覚教材（秋学期）
ものづくり実習Ⅱ	平成 21 年	実習用教材（秋学期）住宅の模型製作と 3D ソフトの新規実施
CADⅡ	平成 21 年	講義用教材（秋学期）住宅図面の製作
研究室ホームページ制作・更新	平成 21 年	研究室の活動の周知

研究室ブログ制作・更新	5 月～ 平成 21 年 12 月～	主に担当科目の連絡・掲示板として利用
観光概論	平成 23 年	講義用教材（春学期）
海外研修プロモーションビデオ制作	平成 23 年	中国北京（3 分 31 秒）
海外研修プロモーションビデオ制作	平成 24 年	マレーシア・シンガポール（9 分 47 秒）
海外研修プロモーションビデオ制作	平成 26 年	南イタリア(7 分 22 秒)
観光概論	平成 26 年	講義様教材(春学期)大幅改定
観光建築デザイン概論	平成 26 年	フィールドワーク(秋学期)内容の見直しにつき、教材を再構成
授業用教材を web 上で公開	平成 27 年 1 月～	観光に関する内容について掲載。主に観光概論、ゼミ等で活用。
観光概論	平成 27 年 度	講義用教材（春学期）学生参加型授業（アクティブラーニング）に大幅修正
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
近畿大学 日本文化センター 寺子屋塾	平成 21 年 9 月～平 成 21 年 12 月	日本の劇場・世界の劇場・これからの劇場をテーマに全 11 回の講義があり、その際ティーチングアシスタント及び資料作成を担当。また、（仮称）劇場の再生というタイトルで本の出版作業を進めている。
近畿大学 日本文化センター 寺子屋塾	平成 22 年 4 月	土曜日特別講座「日本型木造劇場の感性」山崎泰孝氏のティーチングアシスタントを務める。
西宮市大学交流協議会 イベントプロデューサー講座	平成 22 年 5 月	奥正孝氏のファシリテーターを務める。西宮市大学交流協議会主催。
太成学院大学 公開講座 講師	平成 22 年 9 月	パソコン講習会 3 日間。「年賀状の文面作成、年賀状の宛名書き」。　受講者 5 名
大東市生涯学習センター デジカメ入門講座 講師	平成 23 年 1 月	パソコン講習会　受講者 8 名 大東市立生涯学習センター主催
併設校：高大連携授業（出前授業）	平成 23 年 5 月	「住宅は建築でない」 受講者 34 名
大阪市総合生涯学習センター 市民講座 講師	平成 23 年 10 月	「探そう！私のまちのええところ」講座 受講者 15 名 関西まちづくり協議会＋大阪市総合生涯学習センター主催（大阪市総合生涯学習センターにて）
併設校:高大連携授業(出前授業)	平成 24 年	「写真から学ぶ高感度 UP」連続３講座×４クラス

	度	
大阪府立柴島高校 まちづくり講座 講師	平成 24 年 6 月	「写真から学ぶ高感度 UP」連続３講座×４クラス
大阪市立すまい情報センター まち紹介マップのつくり方講座	平成 24 年 8 月	「まち紹介のマップづくり」 生徒 31 名 ファシリテーターとして参加 受講者 50 名 一般社団法人関西まちづくり協議会＋大阪市立住まい情報センター主催（大阪市立住まい情報センターにて）
太成学院大学 オープン・カレッジ　公開講座 講師	平成 25 年 9 月	「デジカメのデータをパソコンに移す」講座。受講者 15 名。アシスタントとして学生 4 名が受講者のサポートに入る。
大阪市北区区役所 市民講座 グループワーク 講師	平成 26 年 3 月	「橋が語る大阪のまち」 受講者 25 名 まちづくりアドバイザーとして参加 大阪市北区役所、一般社団法人まちづくり協議会共催
太成学院大学 オープン・カレッジ　公開講座 講師	平成 26 年 9 月	「デジカメのデータをパソコンに移す（初心者向け）」講座。受講者 15 名。アシスタントとして学生 3 名が受講生のサポートに入る。
大阪市総合生涯学習センター 市民講座 講師	平成 26 年 12 月	「大学とまちづくり」講座　受講者 8 名 一般社団法人関西まちづくり協議会主催（大阪市総合生涯学習センターにて）
大阪府立柴島高校 まちづくり講座 講師	平成 27 年 6 月	「「協働」マップを作ろう！」講座。高校 2 年生全員対象（124 名）。アシスタントとして猪池ゼミ生 6 名が高校生のグループワークのサポートを行う。
太成学院大学 オープン・カレッジ　公開講座 講師	平成 27 年 8 月	「デジカメのデータをパソコンに移す」講座。受講者 5 名。アシスタントとして学生 4 名が受講生のサポートに入る。
５　その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
宅地建物取引主任者		
修士(工学)		
高等学校教諭専修免許状(工業)		
移動介護支援従事者		

国内旅行業務取扱管理者資格		
福祉住環境コーディネーター2 級		
情報処理技術者試験 IT パスポート試験		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
大多喜町庁舎建設設計業務プロポーザル　準佳作	平成 21 年 2 月	千葉県夷隅郡庁舎建設設計業務プロポーザル第 1 次提案審査結果において準佳作。AZ Institute 山崎泰孝のアシスタントとしてプロポーザルのプレゼンテーションを担当。主催千葉県大多喜町
「田屋リニューアル 2010」実施設計コンペ応募	平成 21 年 9 月	AZ Institute 山崎泰孝のもと、総合統括として設計図面、模型製作、プレゼンの構成などコーディネーターとしての役割を果たした。主催（株）マガジンハウス「カーサブルータス」
積水ハウス（株）　第 32 期基礎コース、第 32 期専科コース作品展に出展	平成 21 年 3 月	基礎コース、タイトルはスケルトンはシンプルに。副題はインフィルは好みの家具でお洒落に。 専科コース、タイトルは非日常の時間と空間。 積水ハウス（株）納得工房ギャラリースペースにて開催。
「京都市堀川団地再生にむけて」 提案	平成 22 年 2 月	堀川団地の再構築案をまとめ、京都大学大学院 工学研究科 都市環境工学専攻 居住空間学講座の高田光雄教授研究室にて研究発表を行った。これは、環境建築研究会（SI 研究会）の成果として京都府供給公社に提案するものである。
景観サポーター（大阪府）	平成 22 年 ～	192
大阪府地球温暖化防止活動推進委員	平成 28 年 10 月～	8-7
4　その他		
関西木造劇場研究会での活動	平成 20 年 5 月～平成 23 年 3 月	主に伝統芸能である能舞台の木造劇場の再構築を研究している。能役者や伝統芸能の研究者をゲストに会合を持っている。演者と観客との関係の研究、実際に観劇の鑑賞をし、意見交換をしながら、これからの木造劇場のあり方を探っている。 平成 20 年度の主な活動内容：能楽師味方玄氏の講演、福井工業大学教授横山氏による能舞台に関する研究発表、京都芸術劇場春秋座において初代坂

		田藤十郎氏の和事舞台復活実験上演鑑賞、日本伝統音楽センター准教授竹内有一氏の講演、芦屋市民センター（ルナホール）見学、京都府民ホール（アルティ）見学他。 平成 21 年度の主な活動内容：堂島リバーフォーラム・ABC ホール・サンケイブリーゼのホール見学、京都観世会館での能観賞、大江能楽堂見学、上七軒歌舞練場見学、五條楽園歌舞練場での舞踏鑑賞他。 平成 22 年度の主な活動内容：上七軒歌舞練場改修工事のアドバイスを行う。2005 年日本建築学会賞日建設計大阪設計室設計室長、大谷弘明氏設計の「積層の家」を訪問見学 スケルトンインフルに関する研究会を発足。定期的に会合をもち講師を招き講演をして頂いている。 平成 21 年 4 月より名称を環境建築研究会に変え、実際の敷地を設定し、京都市に提案していく予定。
環境建築研究会（SI 研究会）での活動	平成 20 年 6 月～平成 25 年 3 月	（設立メンバー） 平成 21 年度の主な活動：堀川団地の再構築案をまとめ、京都大学大学院 工学研究科 都市環境工学専攻 居住空間学講座の高田光雄教授研究室にて研究発表を行った。 平成 22 年度の主な活動：前年度引き続き SI の一般住宅への可能性を探る研究会を継続。 平成 24 年度公益信託エスペック地球環境研究・技術基金 助成金研究を代表で受託。
どっぷり昭和町実行委員での活動	平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月	毎年 4 月 29 日【昭和の日】に【昭和町】にある【昭和建築の文化財】で【昭和】を味わうお祭り、平成 18 年より実施している。第 4 回より参画。第 5 回より広報担当。ゼミ生活動の一環。
国際観風協会での活動	平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月	ありきたりの観光ではなく、地域の息遣いを感じて自ら楽しみを発見する「観風」の概念と環境整備を広めようと、町おこし団体やアーティストらが任意団体「国際観風協会」（大阪市阿倍野区）を設立。（設立メンバーおよび事務局担当）
森の劇場プロジェクトでの活動	平成 21 年	生駒いいもり里山を拠点にゼミ生と共に活動。大

	11 月～平成 24 年 12 月	東市の住宅街に隣接する荒廃した山、20 年ほど前からボランティアの人たちが手を入れ、人がふみ入れることができる森林になり始めた。2 万坪もの森からは、大阪平野を一望できる。まだまだ未開の場所もたくさんある。その一角にコンクリートの建造物を発見した。用途は全くの不明。その建造物を拠点に秘密基地をつくる。 人が集まる舞台や劇場、展望台など、何もない自然の地を開拓し、私たちの隠れ家、秘密基地を建築する。場所は里山の森。里山を管理する人達からは知恵と人力をお借りし、私たちの力で現代の里山空間をつくりだす。そこで、仲間が集まり、森を探険し、植物を観賞し、森と遊べる「森の劇場」を提案。
大東市提案公募委託事業 企画提案応募	平成 22 年 7 月	大東市の地域資源を生かした観光計画を提案・プレゼンを行った。
関西まちづくり協議会での活動	平成 22 年 7 月～	関西まちづくり協議会は、まちづくりをテーマに人のつながりを大切に考える仲間が集うボランティアグループです。まちづくり活動に関わる仲間の「ネットワークづくり」「情報発信」を通じ、活動してみたい人の実践の場を探し・創っていく団体。平成 25 年度から理事。平成 28 年度から事務局長。
イベント学会 2010 年研究大会実行委員	平成 22 年 9 月	大阪市中央公会堂（9 月 3 日）及び国立民族学博物館（9 月 4 日）にて研究大会を実施。その運営に携わる。大会テーマ「イベントが都市を創造する」
本町まちづくりを考える会での活動	平成 23 年 1 月～平成 24 年 3 月	岸和田本町のまちづくりについて考える会。毎年 4 月に「紀州街道にぎわい市」というイベントを実施している。「紀州街道にぎわい市」実行委員。平成23年のイベントは東北地方太平洋沖地震のため自粛中止。
イベント学会 2014 年研究大会実行委員	平成 26 年 5 月～ 平成 26 年 10 月	大阪府立大学 I-site なんば（11 月 14・15 日）開催の研究大会。企画から運営まで携わる。大会テーマ「イベントと観光立国 歴史・都市・フェスティバル」

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1　劇場の計画と運営 やわらかい建築へ	共　著	平成12年2月	鹿島出版会	著者山崎泰孝のアシスタントとして協力。主に劇場関係資料の収集および分析、図版・図面の作成。（編集） 出版後10年経過しても、なお教科書的存在として利用されている「ホールの計画と運営」の続編。まず第1・2章では、現在、日本各地の劇場事情と企画運営の様々な試みを紹介。3章ではその歴史の結果について言及しながら今後の展開を探り、そして第4章では「やわらかい劇場」を提唱する実践的な劇場論。近代化の過程で失われた人間本来の多様性と自由を奪還し、未来の表現芸術を育む現代劇場を目指して。
2　初めて学ぶ建築計画	共　著	平成21年3月	学芸出版社	4章　住宅のデザイン（27ﾍﾟｰｼﾞ）を執筆。 宇都直人、岡本展好、湯田充彦、矢倉鉄也、猪池雅憲 初学者のための建築計画分野に関する書籍で、図版を多用し基本的な知識を整理した教科書の構成になっている。 建築のテキスト「第二増補版」で、1996年秋に初回5点を発行し、2000年秋に追加企画6点、さらに翌年CADを発行した。現在までの累計使用冊数は30万冊に及ぶ実績がある。
（学術論文）				
・　観光地域研究・上野天神祭－観光動向調査について－	単　著	平成22年3月	太成学院大学紀要 第12巻（通号29号）、23-34頁	三重県伊賀市の上野天神祭において観光動向を調査し、845名の有効回答をえた。それらを分析し、伊賀市の観光振興への礎を提案を行った。
・　上野天神祭における調査研究－学生フィールドワークに関する一考察－	単　著	平成22年3月	太成学院大学紀要 第12巻（通号29号）、35-44頁	観光動向調査および参与観察調査を通して、学生の歴史文化の認識、伝統的祭りに対する理解をコミュニケーションという切り口で考察した。
・　ネット社会のイベントに関する一考察　－オフ会参加・開催経験を生かして－	共　著	平成22年9月	イベント学会2010年研究発表抄録	オフラインミーティングにおける出会いや人とのつながりなど、ネットをきっかけにしたリアルなイベントの事例を報告。執筆箇所については共同のため担当抽出不明。（井

			集、26-27頁	上浩史郎、猪池雅憲）
・　地域活性化のおまつりに関する一考察　－「どっぷり、昭和町。」2010における事例研究－	単　著	平成22年9月	イベント学会2010年研究発表抄録集、28-29頁	平成18年4月29日（昭和の日）に第一回目のおまつりの開催に始まり、現在までの地域コミュニティーに影響を与えてきた成果や課題を発表。
・　岡山県津山市における観光地域研究－観光認知度調査と分析	単　著	平成23年3月	太成学院大学紀要 第13巻（通号30号）、21-32頁	岡山県津山市における観光地の認知度調査を実施。479人からの有効回答を得ることができ、それらを分析し、津山市の観光振興への礎を提案。
・　観光地域研究におけるフィールドワークの実践と結果　－岡山県津山市のフィールドワークに関する一考察－	単　著	平成23年3月	太成学院大学紀要 第13巻（通号30号）、33-43頁	フィールドワークの満足度は92%と高かった。前年度のとのフィールドワークとの比較を交え、相違点などを考察。
・　ウエディングの演出における調査研究　－婚礼司会者インタビューを通じてー（2010年度イベント学会　助成研究）	共　著	平成23年7月	イベント学会 研究助成対象論文集〈2008年度～2012年度〉、139-144頁	平成23年度研究助成金による研究。昨今の結婚式・結婚披露宴での様々な演出を現役のウエディング司会者に取材しまとめ、流行の事象を考察。執筆については全て猪池が担当。奥はインタビューアーのコーディネート、阪岡はインタビューサポート。（奥正孝、猪池雅憲、阪岡裕貴）
・　愛染まつりに関する一考察　－認知度アンケート調査を通じてー	共　著	平成23年12月	日本観光研究学会全国大会学術論文集 229-232頁	愛染まつりの実態を来訪者アンケートを用いて調査、分析を行った。愛染まつりは地元に密着したまつりといえるが、主体の愛染堂の認知度との関係性は希薄している。地域資源としての役割を担うには、愛染堂との結びつきが求められる。執筆箇所については共同のため担当抽出不明。アンケート調査に関しては猪池が担当実施し分析を行う。（吉原大介、猪池雅憲）
・岐阜県大垣市観光地域研究　－観光	単　著	平成24年3月	太成学院大	岐阜県大垣市で実施した観光動向著差を分析。観光資源と

動向調査と分析－			学紀要 第14巻（通号31号）、13-23頁	しての芭蕉ゆかり地や俳句は観光教育をおこなうことが地域遺産として成り立つ一つであることを提案。
・学生フィールドワークの学びに関する一考察　－岐阜県大垣市と養老町のフィールドワークを通じて－	単　著	平成24年3月	太成学院大学紀要 第14巻（通号31号）、25-35頁	班行動を意識させたフィールドワークを実施。班行動での評価は高く導入の成果は認められた。一方で改善点も見出され今後の課題となった。
・海外研修の活性化に向けて	共　著	平成24年3月	太成学院大学紀要 第14巻（通号31号）、37-41頁	海外研修をさらに活性化させて行くには何が必要とされるのか。学生の参加を促すには学生にとって魅力があり、学生の嗜好に合わせた価値ある研修プログラムの構築が必要だとされる。そして、学内での広報活動を充実させ、海外に対する好奇心を喚起させ、海外へ行きたくなる雰囲気づくりが求められている。執筆箇所は、3章立てで2章中国北京研修、2章の1.広報活動について、2章の2.広報活動に思うこと、2章の3.研修プログラム、2章の4.学生レポートから、2章の5.「研修を終えて」、を担当。（金杉高雄、猪池雅憲）
・倉敷美観地区観光地域研究　－街頭アンケートによる観光動向調査－	単　著	平成25年3月	太成学院大学紀要 第15巻（通号32号）、19-28頁	倉敷美観地区の観光地の現状把握のための実態調査として調査票調査を実施し、調査票調査の分析を行った。倉敷美観地区のあり方、方向性の手立てとなる基礎データを示すことができたと考えている。調査票調査から得られたデータ分析で見えてきた事象に対して、現在の社会状況を加味しながら対応をしていかなければならない。倉敷美観地区がサステイナブルに維持、保存されていくことを望む。
・評価基準表を用いたフィールドワークの評価方法の改善	単　著	平成25年3月	太成学院大学紀要 第15巻（通号32号）、29-35頁	フィールドワーク時の評価を文書で提示することで，自ら学ぶ姿勢の部分を評価できる仕組みづくりを構築できるのではと考え、評価基準表を作成し実施した。その結果，学生にとってフィールドワークの目的が評価基準表で示されることで、評価されるにはどのような行動をすれば良いのかがよりわかるようになり。また，評価基準表によって採点されることで、到達目標を達成するように評価の上位を目指す姿勢が現れた。
・海外研修の活性化に向けて（2）	共　著	平成25年3月	太成学院大学紀要 第15巻（通号32号）、53-57頁	本学の海外研修のあり方について、参加者数の動向、アンケート調査、教育観光学の視点そして事前・事後学習から引率・指導を担当した教員の海外研修に対する見解をまとめている。大学生という感受性豊かな人生の1コマにおいてこそ収穫することができる財産とかしている。新しい自分を発見するきっかけとなったのは海外という異国の地であるからこそ洗練される協調性と連帯感がかなり育まれた

				ためであろうと考えられる。執筆箇所は、5 章立てで 2 章. 本学学生の海外研修参加者数の動向、3 章. 本学の取り組み、4 章. 海外研修から学ぶ教育観光学 を担当。（金杉高雄、猪池雅憲）
・スケルトン・インフィル型建築による漁村復興計画に関する基礎研究 －東日本大震災における津波被害を受けた漁村を対象にして －（平成 24 年度 公益信託エスペック地球環境研究・技術基金 助成金研究）	共 著（代表）	平成 25 年 10 月	エスペック株式会社	東日本大震災における津波被害をうけた漁村を対象にした住まい環境、再構築の提案である。提案は津波対策と同時に、職住一体型住宅を構築することで、従来の住まい環境を取り戻しながら、サステイナブルなエネルギー環境住宅兼職場である。エネルギー環境に負荷をできるだけ与えない建築を構築することで自立した住まい環境が形成されることになる。しかし、現地調査を実施した結果、津波による被災状況は回復不可能なほど深刻であったため、提案のサステイナブルなエネルギー環境住宅兼職場は他の地域で実現できるように研究を進めていくことになった。執筆はすべて猪池が担当。山﨑は南三陸町との連絡およびコーディネータを担当。（猪池雅憲、山﨑泰孝）
・岡山県津山市観光地域研究 －津山市在住者を対象とした観光地認知度調査と分析－	単 著	平成 26 年 3 月	太成学院大学紀要 第 16 巻（通号 33 号）、19-25 頁	前回、平成 22（2010）年に津山市の街頭にて調査票調査による観光地認知度調査 1）を実施した。調査結果は、10 歳代の回答者において他の年代とは著しく異なる結果が出された。今回、平成 25（2013）年は 20 歳以上の津山市在住者を対象者として調査を実施。調査対象の観光地は，観光地認知度が 70%を超える調査結果であった。しかし、観光資源として活用するならば、地元・地域の人が「知らない」と回答した割合の大きい観光地については、魅力ある施設として改善していくことが求められる。
・評価基準表を用いたフィールドワークの評価方法の改善（2）	単 著	平成 26 年 3 月	太成学院大学紀要 第 16 巻（通号 33 号）、11-17 頁	フィールドワークの評価は，学生の主体性や行動力を点数化することで表している。点数は学修成果の評価となり，学修成績として扱われる。昨年度よりフィールドワークの評価方法の改善を模索の中で、評価基準表を作成し試行錯誤的に活用して実施した。今年度は、前年度の評価基準表の問題点を改善して学生に取り組ませた。このことにより、前年度を上回る学生のパフォーマンスが期待された。しかし、例年より参加者が減少し、少人数でのフィールドワークであったため。改善された評価基準表では、教員が求めているパフォーマンスをうまく引き出せなかった。
・大学における地域イベント開催の現状と課題 －「関西子どもポエムフェスティバル in 太成学院大学」を通じて－	単著	平成 26 年 11 月	イベント学会 第 17 回研究発表抄録集、27-28 頁	大学に蓄積された知的資源を、地域社会に提供していく役割を大学は担っている。本学は、その役割を果たすべく、地域に根ざした大学として歩みつつあり、地域とのつながりをどのように持っていくのかを模索する過程で「関西子どもポエムフェスティバル in 太成学院大学」（以下イベント）を開催する運びとなっ

・　岡山県津山市観光地域研究－津山市在住者の観光スポットに対する意識調査と分析－	単著	平成 27 年 3 月	太成学院大学紀要第 17 巻（通号 34 号）、21-26 頁	た。しかしながら、本学では、一般の方々を学内にお招きし、「おもてなし」をするイベントは初めての試みであり、教職員の日常業務での負担も大きかった。前年度の調査結果から,津山市在住者における観光スポットの認知度があることは確認されている。次に,観光スポットが観光資源として「是非 PR したい」「PR したい」「それほど PR できない」「PR できない」の 4 段階法による PR 度の意識調査を行った。津山市在住者が「PR できない」観光スポットであるならば,観光客が訪れてみたいとは思わないであろう。それに,観光スポットとして成立しないのではないだろうか。そこで，津山市街地の街頭において，津山市在住者を対象に調査票調査を実施した。津山市の観光スポット 8 箇所の PR 度は，観光スポットとして「是非 PR したい」「PR したい」という意向が示された結果となった。
・　グローバル研修の活性化に向けて－学士課程教育と倫理観の養成－	共著	平成 27 年 3 月	太成学院大学紀要第 17 巻（通号 34 号）、11-19 頁	日本の大学は「研究大学」と「教育大学」の二つに大別される。本稿では最初に 3 大学の大学改革推進事業を概観。次に，近年，定着しつつある「旅育」という概念から学生の人間的成長を目的としたプログラムについて考察する。最後に，「教育大学」としてより発展していくためには,教育職員の教育への地道な努力・研鑽と共に，　高度に発展した大学事務への事務職員の対応・処理が大学発展への大きな推進力の一つとならねばならないことを述べる。担当部分は 8 章立ての内、3 章南イタリア異文化体験研修にみる学び事例（教育観光の視点から）、4 章感想文（データ）分析概要、5 章データ分析結果、6 章分析結果からみる特徴。（猪池雅憲、金杉高雄）
21　大阪府の観光情報発信についての調査研究 -自治体の公式 WEB からの分析と検討-	単　著	平成 29 年 3 月	太成学院大学紀要投稿	自治体における観光情報発信と観光情報への取り組み状況を調査した。背景には，大学のフィールドワークにおいて，学外活動を実施する際に，調査地の観光資源をはじめ，交通，食事，宿泊施設等を調べる機会がある。観光情報を WEB で調べるも肝要な情報が得られない場合がある。そこで，自治体からの観光情報の発信と観光情報の取り組みはどうなっているのかを，大阪府内 43 自治体の公式 WEB から調査した。その結果,自治体における観光情報発信と観光情報への取り組みは十分とは言えない現状であることがわかった。これにより，自治体は，これからの基幹産業となりつつある観光産業に十分に対応できるよう,自治体の公

				式WEBのさらなる改善が必要とされる。もっとも，自治体は,日本人観光客も訪れないような魅力的でない観光地にならないためにも,観光情報を発信できる観光資源等になる様,さらに磨きあげ高めることも課題として挙げられる。
（その他） 1　総合的な学習の時間における国際理解の教育方法 -アクティブ・ラーニングを取り入れた学習効果に着目して	共　著	平成 28 年 9 月	日本グローバル教育学会 第 24 回全国研究大会発表要旨集録 、 8-9 頁	グローバル化が進むことで、多くの外国人が様々な目的を持って日本にやって来るようになっている。多文化共生の重要性が認められるようになっている中で、日本人が外国人を迎え入れる意識を高めることが肝要であると考えられる。本研究では、質問紙調査により外国人を迎え入れる意識を高める教育方法のあり方を探っていくことを目的としている。口頭発表　（沼田潤、奥野浩之、猪池雅憲）

（人間）小高　恵

様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

平成　　年　　月　日

氏名　　篠原（小高）　　恵　　印

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
社会科学	親子関係　発達心理　青年

教　育　上　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年　月　日	概　要
1.　教育方法の実践例	平成16年4月～	学生の授業の理解度を確かめるために，毎回，授業の終わりに，簡単な問題を出題している。コメントシートに回答させ，次の授業で返却し，前の授業の復習を行い，学生の理解度を高めるように心がけている。 授業への関心を高めるために，いくつかのテーマに

		おいて，グループディスカッションを取り入れてている。
2. 作成した教科書・教材	平成 17 年 4 月～	人間関係論の授業の中の参考図書として，「青年心理学辞典（『反抗』の部分を執筆（再掲））」を使用した。
	平成 17 年 9 月～	発達心理学の授業において，参考図書として，「発達心理学エッセンス（再掲）」を使用した。
	平成 21 年 4 月～	発達心理学の授業において，参考図書として，「ワークショップ大学生活の心理学：ナカニシヤ出版（『社会性と共感性の発達』を平成 21 年 3 月に執筆）を使用した。
	平成26年4月～	人間学基礎演習Ⅰの授業において，参考図書として「新・青年心理学ハンドブック（『親子関係の時代差』」を使用した。
3 教育上の能力にする大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5その他 特記事項なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1.資格，免許		

中学校教諭専修免許状（社会） 高等学校教諭専修免許状（地理歴史，公民） 日本心理学会認定心理士 学校心理士 臨床発達心理士 博士（心理学）関西大学　心博第 16 号	平成 6 年 12 月 平成 6 年 12 月 平成 12 年 4 月 平成 15 年 1 月 平成 15 年 3 月 平成 27 年 9 月	
2. 特許等		
3. 実務の経験を有する者についての特記事項		
太成学院大学　人間学部　就職支援主担 太成学院大学　経営学部・人間学部就職支援主事	平成 25 年 4 月～平成 27 年 3 月 平成 27 年 4 月～平成 29 年 3 月	
4. その他		
日本テスト学会第 13 大会実行委員	平成 27 年 3 月	大会運営に携わる
教育システム情報学会学生研究発表会「2017 年度学生研究発表会」関西支部実行委員長	平成 30 年 2 月 26 日	JSiSE 学生研究発表会「2017 年度学生研究発表会」の実行委員長を務める

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所，発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
（著書） 1. 発達心理学エッ	共著	2000 年 4 月	小林出版	P.27-38 人間の認知の生涯的発達につ

センス（藤村邦博 大久保純一郎, 箱井英寿　(編))				いて概説した。まず人間の知覚がどのように成立するのか, 知覚のずれがどのようにして生じるのかという, 人間の知覚過程に関する基礎的な部分についての説明を行った。次に乳児期・幼児期・児童期・青年期・成人期・老年期についての一般的な認知の発達を概説した。具体的には乳児期の視覚刺激への反応, 奥行き知覚, 幼児期の認知的機能の発達, 児童期の思考の仕方, 青年期の思考様式, 成人期・老年期の認知機能を概説した。
2. 青年心理学辞典（久世敏雄, 齋藤耕二監修　福富護, 二宮克美, 高木秀明, 大野久, 白井利明（編))	共著	2000 年 11 月	福村出版	P.267 青年心理学の領域の「反抗」という用語の説明を行った。まず, これまで定説とされている 2 歳から 3 歳くらいに現れる「第一反抗期」と, 12 歳～15 歳くらいに出現すると言われる「第二反抗期」についての基礎的な部分を概説し, 次に最近, 注目されている白井利明氏が提案している「分離モデル」と「組み替えモデル」について紹介し, 小沢一仁氏の親に対する反抗の形態の 6 つのカテゴリーについて紹介した。さらに第一次心理的離乳と第二次心理的離乳の観点からも反抗を説明した。

3. ワークショップ 大学生活の心理学 （藤本忠明・東正訓編著）	共著	2009 年 3 月 20 日	ナカニシヤ出版	P.66-78 発達心理学領域の「社会性と共感性の発達」について執筆した。人が社会の中に生まれ，社会の中で育っていくということ，そして社会の成員になるまでの間に沢山の人とかかわり合い，その中で社会性や道徳性や共感性を身につけていくことについて説明した。また，社会性，共感性の発達にとって欠かすことのできない要因とし親子関係を取り上げ，これについて概説した。最後に情緒的に支持した受容的な養育行動は，子どものパーソナリティの発達や社会性，共感性の発達に非常に重要であることを記述した。
4. 新・青年心理学ハンドブック	共著	平成 26 年 1 月 15 日	福村出版	青年心理学領域の「親子関係の時代差」のトピックを担当した。これまでの親子関係の歴史について説明し，親子関係のあり方は，いつの時代においても普遍なものではなく，その時代のイデオロギーや社会的，経済的，文化的な状況によって変化する可能性があることを説明した。
5. 君の悩みに答えよう	共著	2017/11/30	福村出版	pp. 108-109 「どうしたら家族に目を向けてくれるでしょうか？」を執筆した。 青年期の親子関係について概説し，親離れ子離れ，心理的離乳について解説した。青年の親子関係での悩みや違和感について回答し，より良い親子のコミュニケーションができるようになる糸口を提案した。
（学術論文） １．親子関係の相互認	共著	1991 年 9 月	関西大学社会学部紀	親の養育態度はどのような構

知Ⅱ （小嶋氏の原資料の再分析）			要 第 23 巻　第 1 号 P.167-192.	造になっているのか，また子ども自身は親の養育態度をどのように認知しているのかということの分析を行った。その結果，親も子どもも 4 つの次元（情緒的支持の因子，感情的統制の因子，自律性の因子，同一化の因子）で認知されていることが明らかになった。また同一化の因子については，親と子とが同じ次元で認知しており，同一化の因子が親と子の「へその緒」的な役割を担っているのではないかということを提案し，考察した。 （辻岡美延，小高恵） （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
2. 親子関係の相互認知Ⅲ	共著	1992 年 3 月	関西大学社会学部紀要 第 23 巻　第 2 号 P.129-151.	親の養育態度を測定する質問紙を作成するために中学生の親子に調査を行い，その構造を分析した。その結果，親と子のそれぞれに情緒的支持の因子，感情的統制の因子，放任の因子，同一化の因子の 4 つの因子が認められ，4 つの次元で養育態度が認知されていることが明らかになった。特に同一化の因子については親と子とが同じ次元で認知されていた。そして，これらの次元を元にして，延長因子分析を用いて親子両用の親子関係の質問紙の作成を試みた。 （辻岡美延，小高恵） （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）

3. 親子関係の相互認知 Ⅳ	単著	1992･年 3 月	関西大学大学院人間科学 第 37 号 P.109-134.	25 年前の親の養育態度と現在の親の養育態度 がどのように変化したのかを検討するために，①平均値の比較　②分散の比較 ③因子構造の比較の 3 つの点から分析を行った。その結果，現在の子どもの方が親からの統制が強いと感じていること，また親の養育態度が多様化していることが明らかになった。さらに，25 年前 の養育態度の構造と現在の養育態度の構造とを因子分析，及びプロクラステス法により分析した結果，類似した因子が得られ，両者が類似した構造であることを考察した。
4.　親子関係の認知構造 （小嶋のデータと小高のデータとの群別比較）	共著	1993 年 3 月	関西大学社会学部紀要 第 24 巻　第 2 号 P.265-281.	親の養育態度を子どもがいかに認知しているかということを検討するために，小嶋氏によって中学生に実施されたデータと小高のデータとが因子分析，及びプロクラステス法によって分析された。それぞれのサンプルを息子→父，息子→母，娘→父，娘→母の 4 つの組み合わせに分け，合計 8 つの組み合わせに分類し，これら 8 群の間の構造を比較，検討した。その結果，類似した 4 つの因子（情緒的支持の因子，感情的統制の因子，放任の因子，同一化の因子）が得られた。 （辻岡美延，小高恵） （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
5. 親子関係の年代的推移 （25 年前と現在の親子関係についての正準判別構造と平均・標準偏差の比較）	単著	1993 年 6 月	教育心理学研究 第 41 巻　第 2 号 P.192 - 199.	親子関係の年代的推移を検討するために 25 年 前に小嶋氏が中学生を対象に収集したデータと 1990 年に小高が中学生を対象に収集したデータを用いて正準判別分析法によって分析を行

				った。その結果，どちらのデータにおいても類似した２つの正準変量が得られ，25 年前の親子関係の方が現在の親子関係と比較して，親の役割がより明確であったことを考察した。また平均値の比較を行った結果，現在の方が，感情的に統制されているという認知がより強くなっていることが明らかになった。
6. 大学生の充実感に関する報告	共著	1993 年 9 月	関西大学社会学学部紀要 第 25 巻　第 1 号 P.47 - 62.	大学生の充実感がどのような構造になっているのかを検討するために，大野氏が作成した充実感尺度をもちいて収集されたデータを多変量解析により分析した。その結果，大学生の充実感が６つの次元（無気力，依存，責任感，時間的展望，理想の拡散，自己存在の肯定）で構成されていることが明らかとなった。また，平均値を比較した結果，１回生から３回生においては，男女の間で差異が認められたが 4 回生においては，男女の差異は認められなかった。さらに得られた因子を元にして充実感モデルを提案した。 （辻岡美延，小高恵） （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
7. 対人関係価値尺度の因子構造	単著	1994 年 3 月	関西大学大学院人間科学 第 40 号 P.49 - 65.	ゴードンは様々な対人関係の価値領域の中から 6 つの価値領域（支持，同調，承認，独立，博愛，指導）を取り上げ，質問紙を作成している。本研究では，この 6 つの価値領域が再現可能なものかを検討するために，仮説行列を作成し，プロクラステス法を用いて，その構造を検討した。その結

				果，ゴードン の提唱する「承認」の価値領域については，リーダーシップ的な側面と，他者からの賞賛を求める側面の２つの側面があることが明らかとなった。
8. 親子関係と人格要因との関連性についての一考察	単著	1994 年 3 月	性格心理学研究 第 2 巻第 1 号 P.47 - 55.	親子関係と子どものパーソナリティとの関連性を検討するために，高校生とその親を対象に辻岡・山本が作成した親子関係診断尺度(EICA)と YG 性格検査を施行した。収集されたデータを因子分析，および延長因子分析を用いて分析したところ，次のような結果が得られた。①子どもの認知する，親の自律性を否定した養育態度は，親の社会的に適応した性格特性と関連していた。②父親の受容的な養育態度は父親の一般的活動性と関連していたが，母親の受容的な養育態度については母親の性格特性との関連性は認められなかった。③子どもに対する統制的な養育態度は親のネガティブな性格特性と関連していた。④情緒的に支持していると認知する子どもは抑鬱的でなく，活動的であり，その母親もまた抑鬱的でない傾向がみとめられた。
9. 親子間の認知構造の因子分析的研究	単著	1994 年 6 月	心理学研究 第 65 巻　第 2 号 P.95 -102.	親子関係の父・母・子の 3 者関係を調べるために，辻岡・山本が作成した親子関係診断尺度(EICA)を用いて，高校生の父・母・子に調査を行った。 収集したデータを因子分析，及びプロクラステス法により，構造分析した。その結果，男子と女子に類似した 8 つの 因子（1 母→子の受容の因子，2 親→子の自律性否定

				の因子，3 子→親の同一化の因子など）が得られた。また，興味ある点としては，父親と母親が同じ次元で認知している養育態度もあることが明らかになり，同調した養育が行われているのではないかということを考察した。また平均値についても比較検討した結果，男子の方が女子に比べ，自律性を重んじてもらっていると認知している傾向があること，母親に関しては，男子に比べ，女子の方がより情緒的に支持してくれていると感じているということなどが明らかになった。
10. 小・中・高校生における親子関係の認知構造の発達	共著	1994 年 9 月	関西大学社会学部紀要 第 26 巻　第 1 号 P.65 - 84.	親子関係の認知構造が年齢と共にどのように変化するのかを検討するために，辻岡・山本が作成した親子関係診断尺度(EICA)を小学生，中学生，高校生に施行した。そして因子分析，及びプロクラステス分析法により，その因子構造の比較を行った。その結果，各発達段階において，類似した 4 つの因子（情緒的支持の因子，同一化の因子，統制の因子，自律性の因子）が存在すること，またそれらの構造は，年齢が高くなるに従って，分化することを確認した。さらに発達段階ごとの平均値の比較を行った結果，年齢が上がるに従って，統制が弱まり，自律性が強くなっていくということが認められ，子どもの心理的離乳について考察した。 （辻岡美延，小高恵） （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難

				である。）
11. 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究	単著	1998 年 9 月	教育心理学研究 第 46 巻 第 3 号 P.333 - 342.	青年期後期の青年が親に対してどのような態度･行動を持っているのかを明らかにするために，青年の親に対する態度・行動に関する項目を収集し，大学生を対象に調査を行った。得られたデータの構造分析を因子分析，及びプロクラステス法により行った。その結果，青年の親に対する態度・行動は，「親からの影響の因子」「親との対立の因子」「親への服従の因子」「親との情愛的絆の因子」「一人の人間として親を認知する因子」の５つの次元で認知されていた。また二次因子分析を行った結果，「親への親和志向」と「親からの客観的独立志向」の２つの二次因子から構成されていることが確認され，この２つの因子を用いて心理的離乳モデルを提案した。

12. 親―青年関係尺度の作成の試み	単著	2000 年 11 月	南大阪大学紀要 第 3 巻第 1 号 P.87 - 96.	教育心理学研究で発表した論文「青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究」を元にして，青年の親への態度・行動についての尺度を構成することを試みた。それぞれの因子に高く負荷を示す項目を 5 項目ずつ選択し，これについて主成分分析を行い，それぞれの因子に該当する項目に 1，そうでない項目に 0 の因子負荷を想定し，これを標的行列として，斜交プロクラステス法により分析を行った。その結果，妥当性と信頼性の高い項目が選択された。さらに性（男子・女子）によって，また両親の性（父親・母親）によって，その尺度得点に差があるかどうかについても検討した結果，母親と娘の結びつきが強いことを確認した。
13. 山岸論文「女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係」へのコメント	単著	2001 年	青年心理学研究 第 13 号 P.65 - 68.	山岸論文「女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係」への意見論文の執筆を行った。山岸(2000)の論文は，女子青年を対象に調査を行い，彼女たちが幼少期から現在にいたるまで母親との関係をどのように認知しているのか，またその関係のとらえ方がどのように変化するのかということについて検討している。本論文では，山岸の結果を元にして，特性論的分析の提案を行った。また青年期の第二反抗期からみた青年期の親子関係の考察を行い，親子関係を回顧的にとらえることについての意義を記述した。

14. 共依存に関する因子分析研究の一報告	単著	2004 年 3 月	太成学院大学紀要 第 6 巻　P.35-41.	共依存についての探索的な研究である。共依存の概念を明らかにするために因子分析法を用いて分析を行った。その結果,「自己存在否定因子」,「他者中心因子」,「感情隠蔽因子」,「主体性の無さ因子」の 4 因子が得られた。それぞれの因子に高く負荷を示した項目を選択し, 尺度得点間相関係数を算出した結果,「自己存在否定因子」は「主体性の無さ因子」と「感情隠蔽因子」と弱い正の相関を示していた。また「主体性の無さ因子」は「他者中心因子」とも弱い正の相関を示していた。
15. 注意制御に関係する日常的経験と内田クレペリン精神検査の関連性の検討	共著	2004 年	人間工学 40 号（特別号） P.442-443.	これまでの研究で作成してきた注意コントロールや注意方略の特性を測定する日常的注意経験質問紙と, 認知課題の遂行成績の関連を検討するため, 内田クレペリン精神検査の結果と, 質問紙への回答の関連を検討した。その結果, 日常的注意経験質問紙について「注意制御不全感」,「多重課題遂行能力」,「ながら作業傾向」の 3 因子を見出した。またクレペリン検査との 関連は明確ではないが,「注意制御不全感」と「ながら作業傾向」についてはクレペリン検査の作業成績との関係を示唆する結果が得られた。 （篠原一光,神田幸治,臼井伸之介,中村隆宏,太刀掛俊之,小高恵）
16. 短期大学生の職業決定と内定との関連性についての一考察	共著	2005 年 3 月	太成学院大学紀要 第 7 巻　P.27-37.	短期大学生の職業決定と内定との関連性についての検討を行った。最初に現在の短期大

				学生・大学生が職業決定に対してどのような意識をもっているのかということについて分析を行った結果，未熟因子，猶予因子，不安・混乱因子，自信欠如因子，安直因子，慎重模索因子，優柔不断模索因子の７つの因子が得られた。次に職業決定と就職活動がどのような関係にあるのか，またそれが就職内定とどのような関係にあるかということについて検討し，同時に就職早期内定者がどのような職業決定への意識を持っているのかということについて検討した。その結果，職業決定が未熟で，先延ばしにし，慎重に探索している者ほど，会社の受験回数が少ないこと，また未内定者は早期内定者より，就職に対する意識がより未熟で，慎重に模索しているなどの結果が得られた。 (小高恵，黒川正剛，糸田千鶴) （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
17.　親から心理的・精神的に傷つけられることについての一考察	単著	2006 年 3 月	太成学院大学紀要 第 8 巻　P.49-58.	親子関係の中の共依存について焦点を当て，青年が過去に親から心理的・精神的に傷つけられたことについての調査を行った。本研究の目的は二つある。一つは青年が過去に親から心理的に，また精神的に傷つけられてきたことについての自由記述のデータを元にして,「親からの心理的・精神的に傷つけられたこと」についての分類を試みることである。もう一つは青年が

				心理的・精神的に傷つけられたという経験は，親からの被養育経験とどのような関連があるかということを検討することである。自由記述の分類を行った結果，親から心理的・精神的に傷つけられることには，①尊敬の欠如，②他者比較，③身体面，④無関心，⑤干渉，⑥夫婦・家族のこと，⑦叱責，罵り，理不尽な出来事，⑧進路・考え方の違い，⑨信用の無さ，⑩何気ない日常の出来事の１０個のカテゴリーが得られた。また親から心理的・精神的に傷つけられることと青年の被養育経験との関連性については，親からの統制的な被養育経験や情緒的な支持を欠いた被養育経験がそれと関連していた。
18.　親から心理的・精神的に傷つけられることについての一考察	単著	2006 年 3 月	太成学院大学紀要 第 8 巻　P.59-68.	心理的・精神的に傷つけられることについての自由記述のデータを元にして 85 項目からなる質問紙を作成し，これを用いて大学生を対象に調査を行い，青年が親から心理的・精神的に傷つけられることについての構造分析を行ったところ，①親からの干渉因子，②自己中心的な親因子，③愛情の欠如，④親からの暴力因子，⑤進路についての理解の無さ因子の５つの因子が得られた。またこれらの因子ごとの得点を算出し，父母別男女別の二要因の分散分析を行ったところ，親からの干渉尺度，自己中心的な親尺度，愛情の欠如尺度において有意な差が認められた。

19. 青年の親への態度についての発達的変化―心理的離乳過程のモデルの提案―	単著	2008 年 3 月	太成学院大学紀要 第 10 巻 P.31-48.	本研究の目的は，青年の親への態度の発達的変化を検討することである。小高（1998）は心理的離乳の過程を捉える一つの枠組みを提案しているが，これについての検討を試みた。中学 1 年生～大学 4 年生の 1740 名を対象に青年の親への態度についての調査を行った。その結果，青年は父親に比べ，母親からより多くポジティブな影響を受け，情愛的な絆も強く，一人の人間として認知していた。その一方で母親への反抗は強かった。また，青年の親への態度から２つの成分(親和と従属)を抽出し，密着した関係から矛盾・葛藤的な関係，離反的な関係を経て対等な関係へと移行する心理的離乳過程モデルと，密着した関係から矛盾･葛藤的な関係，離反的な関係をから，再び密着した関係に回帰した後，対等な関係へ移行する心理的離乳過程モデルの２つを提案した。
20. 大学生における親―青年関係について－7 因子での探索的因子分析の結果から－	単著	2010 年 9 月	関西大学大学院心理学研究科　心理学叢誌 第 4 号 P.55-64.	大学生(809 名)についての親―青年関係に関する項目(25 項目)を対象に因子分析を適用し，親―青年関係の因子構造について再検討した。その結果，青年の親への態度･行動が 7 因子(①親との情愛的絆の因子，②親からのポジティブな影響の因子，③親との対立の因子，④親に対する従順さの因子，⑤親に対する客観視の因子，⑥親とは別の独自の生き方の因子，⑦親の期

				待への応答の因子）が見出された。これらの因子は，これまで存在していた 5 つの因子のうち，2 つの因子がさらに二つに分かれるという結果になっていた。二次因子については，二次の第 1 因子（「親和志向（対 不和)」因子）は父－息子・父―娘・母―息子・母―娘の組み合わせで類似した二次因子が得られた。しかし，二次の第 2 因子（「服従 （対 独立志向)」因子）においては，組み合わせによってその構造が若干異なっていた。
21. 大学生の親―青年関係のモデル化－母子関係 7 因子についてのモデル－	単著	2011 年 3 月	関西大学大学院心理学研究科心理学叢誌 第 5 号　P.45-55.	本論文においては，母親との関係に焦点を当て，小高(2010)の結果を元にして，親―青年関係についての分析を，一次因子と二次因子を 1 つのモデルで，そして多集団において確認することができる構造方程式モデリング，（Structural Equation Modeling:以下 SEM）を適用し分析を行った。その結果，SEM を用いることで当てはまりの良いモデルを得ることができた。一次因子レベルにおいては，男子においても女子においても，小高（2010）で得られた構造とほぼ同じであった。しかしながら，二次因子レベルにおいては男子と女子との捉え方の違いが認められた。
22. アセンブリ・アワーによる初年次教育の取り組みについての一報告	共著	2011 年 3 月	太成学院大学紀要 第 13 巻　P.61-68.	本論文は，2010 年度にアセンブリ・アワーで取り組んだ初年次教育についての報告を行った。はじめに，アセンブリ・アワーの意義（①大学生活の充実

				と向上に関すること，②個人及び社会の一員としての在り方生き方,健康や安全に関すること，③学生生活の充実，将来の行き方と進路の適切な選択決定に関すること）についての報告を行った。次に，アセンブリ・アワーについての春学期と秋学期で取り組んだ具体的な内容についての報告を行い，アセンブリ・アワーで取り組んだ中から，清水・花井（2008）のキャリア意思決定尺度を用いて学生の将来の進路についてどのような態度を持っているかについての報告を行った。最後にアセンブリ・アワーの 4 年間の位置づけについての提案を行った。 （小高　恵・金杉高雄・田中秀生・池辺晴美・糸田千鶴） （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）

23. 山岸論文「成人期女性の現在の母親認知と青年期の母親認知の関連，及びその規定要因」へのコメント	単著	2011 年 4 月	青年心理学研究 第 23 号(掲載予定)	山岸（2009）の論文は，青年期から成人期への母親認知の変化を縦断的に分析し，母親認知の関連性と規定要因について検討している。山岸は短大在籍時に自由記述により生育史を書いてもらい，卒業後 10 年に面接調査を行い，現在の語りと，幼少期から短大時代までの生育史で記述された母親についての語りとの比較を行っている。 本論文においては，山岸論文を親子関係の発達的変化とそれをもたらす要因についての意見を述べた。また方法論の検討と質的データの分析についての提案を行った。
24. アセンブリ･アワーによる二年次教育の取り組みについての一報告	共著	平成 24 年 3 月	太成学院大学紀要 第 14 巻 P241-246.	本論文は，2011 年度にアセンブリ・アワーで取り組んだ初年次教育についての報告を行った。はじめに，小高ら(2010)を元にして，アセンブリ・アワーの意義（①大学生活の充実と向上に関すること，②個人及び社会の一員としての在り方生き方，健康や安全に関すること，③学生生活の充実，将来の行き方と進路の適切な選択決定に関すること）についての説明を行った。次に，2 年次のアセンブリ・アワーの春学期と秋学期で取り組んだ具体的な内容についての報告を行い，アセンブリ・アワーで取り組んだ中から，清水・花井（2008）のキャリア意思決定尺度を

				用いて学生の将来の進路についてどのような態度を持っているかについての報告を行った。 （小高　恵・金杉高雄・田中秀生・池辺晴美・糸田千鶴） （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
25. 2001年～2010年の親子関係研究の動向と展望　－発達心理学研究に掲載された論文を中心に－	単著	平成24年9月	関西大学大学院心理学研究科心理学叢誌　第8号 P 43-53.	本論文においては，2001年から2010年の発達心理学研究に掲載されている親子関係研究に焦点を当て，最近の親子関係研究の動向について検討した。次に，青年期に焦点を当て，2001年から2010年のAmerican Psychological Association（APA）が提供しているデータベース(PsycINFO)を利用して，親―青年関係に関する研究について検討した。さらに，我が国の青年心理学研究に掲載されている親子関係研究について検討した。
26.大学生の母―青年関係の相関分析	単著	平成26年3月	太成学院大学紀要 第16号 P37-48.	本論文では，母との関係に焦点を当て，青年の認知する「母の子に対する態度・行動」と「子の母に対する態度・行動」の構造分析を行った。その結果，「母の子に対する態度・行動」は「受容」「統制」の2因子が得られた。また「子の母に対する態度・行動」については，「母との情愛的絆」「母からのポジティブな影響」「母との対立」「母への服従」「母に対する客観視」「母とは別の独自の生き方」の6因子が得られた。さらに構造方程式モデリン

				グ（Structural Equation Modeling）を適用し，男女の2集団の同時分析により，両者の関連について検討した。
27.中学生の母娘関係の日々の相互作用の一分析　ー動的因子分析を適用してー	共著	2015年1月30日	青年心理学研究 第26巻 pp.109-128	″ 中学1年生の一組の母娘関係に焦点を当て，動的因子分析（DFA）により分析を行い，母と娘の日々の影響過程を明らかにした。母と娘それぞれが毎日，一日を振り返り，母娘関係の質問紙に，それぞれに回答するという形式の調査を144日間実施した。まず時間経過を入れない方法で，各尺度の下位尺度（小包）を因子分析法により構成し，因子と下位尺度の関係が成立することを母と娘，別々のSEMにより確認した。次に母娘関係の相互作用の分析を行い，最後に，時間経過の影響過程を検討するために,時間的な遅れ(ラグ）を入れたDFAを行った。その結果,その日の母娘関係が，次の日の母娘関係に影響することが確認され，また両者の影響過程については,その日の「母の統制の因子」から次の日の「娘の親和志向の因子」へ，またその日の「娘の親和志向の因子」から次の日の「母の受容の因子」へというように，娘と母の関係は独立した関係ではなく，日々互いに影響を及ぼしあうということが明らかとなった。 （小高　恵・紺田広明） （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）″
28.青年期における親子関係の実証的研究　―　母－青年関係を中心に　―（博士論文）	単著	2015年9月20日	関西大学大学院 心理学研究科（博士論文第１６号）	青年期の母ー青年関係を中心に，親子関係の実証的研究を行った。まず最初に，これまでの親子関係研究について概観し，最近の親子関係研究の動向について論じた。次に，母―青年関係の統合的な枠組みの概念的枠組みについて，大学生における青年の母への態度・行動が「母への親和志向」「母から

				の客観的独立志向」の 2 つの次元に集約されること，また母の青年の態度・行動は「受容」と「統制」の 2 つの次元に集約されることを明らかにした。また大学生の母子関係についての性差について，これまでの研究結果を支持するものであることを議論し，母娘関係が親密であることの理由について考察した。さらに，母―青年関係が青年の心理社会的適応と関係していることを議論し，母―青年関係が青年期後期においても青年の心理社会的適応に影響を及ぼしていることを明らかにした。次いで，中学生を対象にした母娘関係のペアデータの研究結果から，母と娘が日々互いに影響を及ぼしあっていることを明らかにした。最後に親―青年関係の今後の課題と可能性について議論し，本研究の限界と今後の研究の能性について論じた。
29.「中学生の母娘関係の日々の相互作用の一分析　－動的因子分析を適用してー」の平石氏・池田氏のコメントに対するリプライ	共著	2016 年 1 月 27 日	青年心理学研究 第 27 巻 pp. 165-169	本論文は,「中学生の母娘関係の日々の相互作用の一分析」の意見論文へのリプライ論文である。ダイナミック・システムズ・セオリーの視点から親子関係の発達変化を捉え直し，マクロな視点とミクロな視点双方を統合した見方が必要であることを述べた。また動的因子分析研究の意義について説明し，個を対象とした研究の重要性について述べた。
30.　水本論文「母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響」へのコメント	単著	平成 29 年 2 月 3 日	青年心理学研究 第 29 巻 pp.103-106	水本（2016）論文は，青年期後期の女性に焦点を当て，娘の母親への「親密性」と娘の母親からの「精神的自立」との関係を検討したものである。本論文では，これまでの青年期の親子関係研究で検討された親密性に関する概念と，水本論文で得られた因子とを比較し，親との親密性の概念についての意見を述べた。
31.　大学生の母子関係とパー	単著	平成 29 年 3 月 10	太成学院大学紀要	本研究は，青年期の母子関係に焦点

ソナリティとの関連性についての一研究		日	第 19 号 pp. 53-62.	を当て，青年が認知する母親の養育態度と青年のパーソナリティとの関連を構造方程式モデリングにより検討した。その結果，男女共に，母の受容的な養育態度の認知が，青年の「協調性」と有意に関連していた。また，母の養育態度の認知と青年パーソナリティとの関連について，男女の違いも認められた。
32. 日々の母娘関係のP技法による因子分析的研究 ― 3 組の中学生の母娘関係の因子構造の比較 ―	共著	平成 30 年 3 月	太成学院大学紀要 第 20 号	本研究においては，中学 1 年生の女子とその母親を対象に，日々の母娘関係について調査を行い，日々の母娘関係の変化から，それぞれの母娘関係に潜在する因子をＰ技法因子分析により検討した。その結果，日々の母娘関係の構造は，母と娘それぞれにおいて 3～4 因子の因子で構成されている結果となった。また，これらの因子には，3 組の母と娘に共通する因子とそうでない個別の因子があり，共通する因子として「母娘の親和的コミュニケーション」に関する因子と「娘の自己主張」に関する因子が存在していることを考察した。 （本研究は，科研費基盤研究（C）17K04389 の助成を受けたものである。）
（その他） 1. 親子両用の親子関係診断尺度の作成	共同発表	1992 年 9 月	第 56 回日本心理学会 P68	親の養育態度を測定する質問紙を作成するために Schaefer の質問紙を用いて中学生の親子に調査を行い，その構造を分析した。その結果，親においても子どもにおいても情緒的支持，感情的統制，放任，同一化の４つの次元で養育態度が認知されていることが明らかになった。特に同一化の因子については，親と子とが同じ

				次元で認知しており，親と子の絆を表す因子であることを考察した。そしてこれらの次元を元にして，延長因子分析を用いて親子関係の質問紙の作成を試みた。 （小高恵・辻岡美延） （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
2. CRPBI による親子関係の時代的推移	共同発表	1992 年 10 月	第 34 回日本教育心理学会 P.337	25 年前の親の養育態度と現在の親の養育態度がどのように変化したのかを検討するために１．平均値の比較，２．分散の比較，３.因子構造の比較の３点から分析を行った。その結果，現在の子どもの方が親からの統制が強いと感じていることや，親の養育態度が多様化していること等が明らかになった。また，25 年前の養育態度の構造と現在の養育態度の構造を因子分析，及びプロクラステス法を用いて分析した結果，類似した因子構造が得られた。 （小高恵，辻岡美延） （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
3. 青年期における親の養育態度と人格要因との関連性	共同発表	1993 年 9 月	第 57 回日本心理学会 P.33	親子関係と子どものパーソナリティとの関連性を検討するために，高校生とその親を対象に辻岡・山本が作成した親子関係診断尺度(EICA)と YG 性格検査を施行した。収集されたデータを因子分析，および延長因子分析を用いて分析したと

				ころ，次のような結果が得られた。①子どもの認知する，親の自律性を否定した養育態度は，親の社会的に適応した性格特性と関連していた。②父親の受容的な養育態度は父親の一般的活動性と関連していたが，母親の受容的な養育態度については母親の性格特性との関連性は認められなかった。③子どもに対する統制的な養育態度は親のネガティブな性格特性と関連していた。④情緒的に支持していると認知する子どもは抑鬱的でなく，活動的であり，その母親もまた抑鬱的でない傾向がみとめられた。 （小高恵，辻岡美延） （分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
4. 青年期における親の養育態度の認知構造モデル	共同発表	1993年10月	第 35 回日本教育心理学会 P.411	辻岡・山本が作成した親子関係診断尺度(EICA)を用いて，高校生の親子を対象に調査し，父親，母親，子どもの３者の間の親子関係の構造を分析した。因子分析，プロクラステス分析を用いて分析した結果，８つの一次因子が得られた。興味ある点としては，父親と母親が同じ次元で認知している養育態度が存在していることが明らかになり，同調した養育態度が行われているのではないかということを考察した。また平均値についても検討した結果，　男子の方が女子に比べ，自律性を重んじてもらっていると認知している傾向があること，母親

				に関しては，男子に比べ，女子の方がより情緒的に支持してくれていると感じているということなどが明らかになった。（小高恵，辻岡美延）（分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
5. 大学生の充実感モデル	共同発表	1994年10月	第58回日本心理学会 P.340	大学生の充実感がどのような構造になっているのかを検討するために，大野氏が作成した充実感尺度をもちいて収集されたデータを多変量解析により分析した。その結果，大学生の充実感が６つの次元（無気力，依存，責任感，時間的展望，理想の拡散，自己存在の肯定）で構成されていることが明らかとなった。また，平均値を比較した結果，１回生から３回生においては，男女の間で差異が認められたが４回生においては，男女の差異は認められなかった。さらに得られた因子を元にして充実感モデルを提案した。（小高恵，辻岡美延）（分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
6. 親の養育態度の認知構造の発達	単独発表	1994年10月	第106回関西心理学会 P.27	辻岡・山本が作成した親子関係診断尺度(EICA)を小学生，中学生，高校生に施行し，親の養育態度・行動の認知構造の比較を因子分析法，及びプロクラステス分析法により，行った。その結果，各段階において，類似した４つの因子（情緒的支持

				の因子，統制の因子，同一化の因子，自律性の因子）が認められ，それらの構造は，年齢が高くなるに従って，分化するという結果が得られた。また平均値の比較を行った結果，発達の主効果が認められ，子どもの心理的離乳の過程ついての考察を行った。
7. 青年期後期における親子関係についての一考察	単独発表	1995 年 9 月	第 23 回日本行動計量学会 P.220-223	青年期後期の青年が親に対してどのような態度･行動で接しているのかということを検討するために，広い範囲から項目を収集し，因子分析，及びプロクラステス法を用いてその構造分析を行った．その結果，１親からの良い影響の因子，２親に対する憎しみの因子３親への服従の因子４親への依存の因子５親とのコミュニケーションの因子６モデルとしての親因子７一人の人間としての親因子８親への反抗の因子の８つの因子が得られた．また一次因子間相関を用いて二次因子分析を行った結果，３つの二次因子（１子から親への承認，２親への反抗，３理想化された親）が得られた．
8. 青年の親への態度・行動からみた心理的離乳モデル	単独発表	1997 年 9 月	第 61 回日本心理学会 P.218	青年の親への態度･行動についての構造分析をプロクラステス法によって分析を行った。その結果，青年の親に対する態度・行動は，「１親からの影響の因子」「２親との対立の因子」「３親への服従の因子」「４情愛的絆の因子」,「５一人の人間として親を認知する因子」の５つの一次因子と「１親への親和志向」と「２親からの客観的独立志向」の２つの二次因子から

				構成されていることを確認した。さらに，二次因子分析で得られた２つの因子を用いて心理的離乳モデルを提案した。
9. 青年の親への態度・意識についての尺度作成の試み	単独発表	1997 年 9 月	第 39 回日本教育心理学会 P.174	青年の親への態度･意識についての尺度の構成を試みた。まずこれまでの研究で得られた５つの因子を元にして各因子 5 項目ずつ選択し，合計２５項目を選択した。この 25 項目を用いてプロクラステス法によって分析を行い，さらに信頼性係数（α係数）を算出した。その結果，因子的に妥当な，また信頼性の高い尺度を構成することができた。構成された尺度を用いてその尺度間相関について，因子分析を行った結果，高次の２つの因子が得られ，その因子を元にして心理的離乳過程を説明することを試みた。
10. 共依存的特性についての因子分析的研究	単独発表	1998 年 10 月	第 62 回日本心理学会 P.212	共依存的特性の構造を明らかにするために，共依存的特性に関する項目を収集し，大学生を対象にして調査を行った。そして，これらの項目を用いて因子分析を行い，６つの一次因子（１自己存在否定の因子，２他者からの評価への敏感さの因子，３生きがい因子，４主体性の無さ因子，５感情抑制の因子，６世話焼き因子）を得た。さらに，この６つの尺度を用いて，二次因子分析を行った結果，２つの高次の因子（自己肯定因子，自信のなさ因子）が得られた。

11. 被養育体験と共依存的特性に関する探索的研究	単独発表	1999 年 9 月	第 63 回日本心理学会 P.915	青年が体験した親子関係と共依存的特性との関連性を明らかにするために，親子関係及び，共依存的特性に関する項目を収集し，大学生を対象にして調査を行った。共依存的特性に関する項目について因子分析を行い，５つの因子を得た。また親子関係の項目について因子分析を行った。その結果，「受容因子」と「統制因子」が抽出された。さらに，両者の関連性をみるために，上記で得られた因子を元にして，父親，母親の被養育体験の因子得点を算出し，これと共依存的特性の因子得点との相関係数を求め，親子関係との関連性を検討した。
12. 青年の親への態度・行動の発達的変化	単独発表	2000 年 11 月	第 64 回日本心理学会 P.965	青年が両親に対してどのような態度や行動を持っているかを検討するために，小高が作成した親－青年関係尺度を用いて分析を行った。その結果，親への態度・行動は大学生も中学生も類似した５つの概念（「親からのポジティブな影響」「親との対立」「親への服従」「親との情愛的絆」「一人の人間として親を認知する」の５つの一次因子）が存在することを確認した。また大学生と中学生の平均値を組合せごとに比較した結果，多くの尺度において差が認められた。
13. 過去の親子関係が現在の青年の親への態度・行動に及ぼす影響	単独発表	2002 年 9 月	日本心理学会第 66 回大会発表論文集 P1027	青年の親への５つの態度・行動（①親からのポジティブな影響②親との対立，③親への服従，④親との情愛的絆，⑤一人の人間として親を認知する）を

				見出している。本研究では，過去の親の養育態度・行動が現在の青年の親への態度・行動にどのような影響を及ぼすかについて検討を行った。また尺度ごとに青年の性別，親の性別の２要因の分散分析を行った結果，多くの尺度で有意な結果が得られた。特に情緒的に支持された被養育行動については娘―母関係において有意な差が認められた。さらに，娘―母関係において，情愛的な絆が強い傾向が認められた。
14. 質問紙による日常的注意経験の構造に関する研究	共同発表	2002年9月	日本心理学会第66回大会発表論文集 P.641	日常生活の中での注意のコントロールに関する出来事の経験しやすさに基づいて，注意コントロールや注意方略の特性を測定する尺度の構成を行った。その結果，①注意切換不全感因子，②注意分割能力因子，③注意集中能力因子，④注意分割許容因子，⑤内向的注意因子の５つの因子が得られた。さらに因子間相関を算出したところ，「注意集中能力因子」は「注意切換不全感因子」と「内向的注意因子」と負の因子間相関を示す一方，「注意分割能力因子」と正の相関を示していた。 （篠原一光，小高恵，三浦利章）
15. 注意制御に関係する日常的経験についての研究	共同発表	2002年11月	平成14年度日本人間工学会関西支部大会講演論文集 P.74-77	日常生活の中での注意のコントロールに関する出来事の経験しやすさに基づいて，注意コントロールや注意方略の特性を測定する尺度の構成を行った。その結果，①注意制御不全感，②注意分割傾向・能力，

				③注意集中能力，④「ながら作業」傾向，⑤気づきの欠如　の５つの因子が得られた。 　さらに失敗傾向との関連性を検討した。そして，その結果，失敗傾向と日常的注意経験の多くの因子との間に相関が見られ，注意と失敗との関係が示された。 （篠原一光，小高恵，三浦利章）
16. 親から心理的に傷つけられるときⅠ	単独発表	2003年8月	日本教育心理学会第45回総会　発表論文集 P.546	親から心理的，精神的に傷つけられることに焦点をあて，「親からの心理的，精神的に傷つけられること」とはどういうことかということかを，青年自身が過去の被養育体験から検討した。過去の親子関係と「親からの精神的傷」との関連性を分析した結果，親からの心理的傷つけられることは，放任した養育行動や，干渉するといった養育行動よりも，親の情緒的に支持しない行動や，子どもの意志を否定した統制した養育行動が関係するということを考察した。
17. 親から心理的・精神的に傷つけられるときⅡ	単独発表	2003年9月	日本心理学会第67回大会発表論文集 P.1154	青年が過去に親から心理的に，また精神的に傷つけられてきたことに焦点を当て，自由記述のデータを元にして，「親からの心理的，精神的傷」についての父親・母親について分類を試みた。その結果，父親については，①尊敬の欠如，②身体面，③無関心，④他者比較，⑤干渉・おしつけ，⑥夫婦・家のこと，⑦理不尽な出来事，⑧進路・考え方の違い，⑨信用の無さ，⑩何気ない日常の出来事，

				⑪その他と分類された。また母親については，①他者比較，②干渉・おしつけ，③夫婦・家のこと，④理不尽な出来事，⑤進路・考え方の違い，⑥信用の無さ，⑦何気ない日常の出来事，⑧その他に分類された。
18. 親から心理的･精神的に傷つけられるときⅢ	単独発表	2004 年 9 月	日本心理学会第 68 回会　発表論文集 P.1064	青年が過去に親から心理的に，また精神的に傷つけられてきたことに焦点を当て，自由記述のデータを元にして，「親からの心理的，精神的傷つけられてきたこと」についての分類を試みた結果を元にして，85 項目からなる質問紙を作成し，大学生を対象に質問紙調査を実施し，このデータをクラスター分析法により分析した。その結果，青年が親から心理的・精神的に傷つけられる場面について 24 個のクラスター（1 親の家庭への愛情の無さ，2 冷えた夫婦関係,3 親の暴力的な行動,4 子どもの気持を無視した親の態度･行動,5 親の過度な期待,6 専制的な親の態度･行動,7 いい加減な親の態度・行動,8 子の人格を否定した親の態度･行動,9 試験での失敗に対する非難,10 親の子に対する非難,11 子への過度な干渉,12 友人関係についての口出し,13 親の束縛,14 自己中心的な親の姿,15 親の押し付け,16 外見についての干渉,17 子どもをけなす行動,18 親の無神経さ,19 幻滅した親の姿,20 親の勝手さ,21 夫婦関係のいざこざ,22 親からの罵り,23 子どもっぽい親の態度・行動,24 ささいなことで怒る親の態度･行動）が得

				られた。
19. 課題切り替えに伴うメンタルワークロードの測定に関する検討	共同発表	2004年9月	日本心理学会第68回大会　発表論文集　P.1219.	これまでの研究で作成してきた注意コントロールや注意方略の特性を測定する日常的注意経験質問紙と，認知課題の遂行成績の関連を検討するため，課題切換を含むストループ課題の成績と質問紙への回答の関連を検討した。その結果，反応時間や正答率と日常的注意経験質問紙との間に有意な相関が見られた。この結果から，自分自身の日常生活における注意の制御についての評価と，実験室実験であるストループ課題の遂行との間に何らかの関係性があることが示唆された。 （篠原一光，小高恵，三浦利章）
20. 親から心理的･精神的に傷つけられるときⅣ	単独発表	2004年8月	日本教育心理学会第46回総会　発表論文集 P.503	小高（2004）で得られた24クラスターごとに平均値を算出した。その結果，3点を超えるクラスターはなく，全体的にみて，心理的・精神的に傷つけられていると認知している青年は少ないという結果が得られた。また男子・女子，父親・母親の間で差があるのかを検討した結果，子ども性別（息子・娘）の間で差が認められたものは，父母の第16クラスター（外見についての干渉）と母親の第8クラスター（子の人格を否定した親の態度）のみであり，いずれも女性の方が傷つきやすい傾向であった。また親の性差は多くのクラスターにおいて認められるという結果が

				得られた。
21. 親から心理的･精神的に傷つけられるときV	単独発表	2005年9月	日本社会心理学会第　発表論文集 P.506-507.	心理的･精神的に傷つけられることについての自由記述のデータを元にして85項目からなる質問紙を作成し，これを用いて大学生を対象に調査を行い，青年が親から心理的・精神的に傷つけられることについての構造分析を行ったところ，①親からの干渉因子，②自己中心的な親因子，③愛情の欠如，④親からの暴力因子，⑤進路についての理解の無さ因子の 5つの因子が得られた。またこれらの因子ごとの得点を算出し，父母別男女別の二要因の分散分析を行ったところ，親からの干渉尺度，自己中心的な親尺度，愛情の欠如尺度において有意な差が認められた。
22. 親―青年関係の発達的変化についての一研究	単独発表	2006年9月	日本教育心理学会第48回総会　発表論文集　P.21	青年の親への態度の発達的変化のついての研究を行った。小高（1998）は心理的離乳の過程を捉える一つの枠組みを提案しているが，これについての検討を試みた。中学1年生～大学4年生の1740名を対象に青年の親への態度についての調査を行った。青年の親への態度から2つの成分(親和と従属)を抽出し，密着した関係から矛盾・葛藤的な関係，離反的な関係を経て対等な関係へと移行する心理的離乳過程モデルを提案した。
23. 親－青年関係とアイデンティティとの関連性についての一報告	単独発表	2006年11月	日本心理学会第70回大会　発表論文集 P.1209	小高（2006）の心理的離乳モデルを元にして，アイデンティティの発達と青年の親に対する態度との関連についての

				研究を行った。その結果，親－青年関係尺度とアイデンティティ尺度との間で相関がみられ，アイデンティティの危機の得点が高い者は親との対立も高いという結果が得られた。またアイデンティティの投入の得点の高い者は親を一人の人間として客観的にみているという結果が得られた。
24. 親から心理的に傷つけられた経験についての一研究（1）－アイデンティティとの関連性について－	単独発表	2009 年 8 月 28 日	日本心理学会第 73 回大会　発表論文集　P.1191	親から心理的に傷つけられた経験とアイデンティティ尺度（「アイデンティティの基礎の無さ尺度」「アイデンティティの確立尺度」）との相関係数を男女別・学校段階ごとに算出した。その結果，親から心理的に傷つけられた経験とアイデンティティの基礎の無さ尺度の間で有意な相関が多く認められ，対人場面における不安や孤独感などの情緒不安定性に関する事柄は，親から心理的に傷つけられた経験の影響を受けることが考察された。一方，主体性や個性といったアイデンティティの確立の尺度とは有意な相関を示す尺度は少なく，青年期の発達課題に関わる主体性や個性といった事柄は，親から心理的に傷つけられた経験と直接には関係してないことが考察された。

25. 親から心理的に傷つけられた経験 についての一研究（2） ―青年の親への意識との関連性について―	単独発表	2009 年 9 月 20 日	日本教育心理学会第 51 回総会　発表論文集　P.208	親－青年関係尺度（1 親からのポジティブな影響尺度 2 親との対立尺度 3 親への服従尺度 4 親との情愛的絆尺度 5 一人の人間として親を認知する尺度）を用いて，「親から心理的に傷つけられた経験」が，現在の親―青年関係とどのように関係するかを，男女別・学校段階別に検討した。その結果，親の干渉や自己中心的な親の態度は親との対立と正の相関を，また親からの愛情の欠如は，親からの情愛的な絆と負の相関を示しており，親から心理的に傷つけられた経験が，現在の青年の親への意識に影響を与えていることが考察された。
26. 親－青年関係尺度についての再検討（1）	単独発表	2010 年 9 月	日本心理学会第 74 大会発表論文集 P. 1046	大学生（809 名）についての親―青年関係に関する項目（25 項目）を対象に因子分析を適用し，親―青年関係の因子構造について再検討した。親―青年関係尺度の構造分析を探索的因子分析法により，再検討した結果，7 つの一次因子（①親との情愛的絆の因子，②親からのポジティブな影響の因子，③親との対立の因子，④親に対する従順さの因子，⑤親に対する客観視の因子，⑥親とは別の独自の生き方の因子，⑦親の期待への応答の因子）が得られた。また得られた因子を元にして二次因子分析を行った結果，「親和－不和」と「服従－独立」の 2 つの二次因子が得られた。

27.娘母関係の相互作用の分析 ―(1) ラグ０のP技法を用いて―	共 同発表	平成23年9月	日本心理学会第75回大会発表論文集 P.974.	中学生の娘とその母親を対象に，145日間の心理的な変化から，変数に潜在する因子を探索する方法（ラグ０の Cattell の古典的なP技法因子分析）を適用して，娘母関係の日々の親子関係と娘母の情動性についての構造と関連性について検討した。その結果，母娘関係では，５つの因子（娘側・親和的コミュニケーション因子，娘側・対立因子，母側・従順因子，母側・励まし受容因子，母側・気遣い因子）が得られた。また情動性については，母側・情動性因子と娘側・情動性因子の2因子が得られた。 親子関係の娘母の情動性の関連については，母親との親和的なコミュニケーションは娘のポジティブな感情と関係していた。また娘の情動性の因子は，母側の励まし受容因子と正の相関を示しており，娘のネガティブな感情が高い時は，母は娘に対して励まし，受容している様子が窺われた。 （小高　恵・紺田広明・清水和秋）（分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
28.娘母関係の相互作用の分析 ―（2）動的因子分析を二者関係に適用して―	共 同発表	平成23年9月	日本心理学会第75回大会発表論文集 P.975.	中学生の娘とその母親を対象に，145日間の心理的な変化から，変数に潜在する因子を探索する方法（ラグ０の Cattell の古典的なP技法因子分析）を適用して，娘母関係の日々の親子関係と娘母の情動性についての構造と関連性について検討した。その結果，母娘関係では，５つの因子（娘側・親和的

				コミュニケーション因子，娘側・対立因子，母側・従順因子，母側・励まし受容因子，母側・気遣い因子）が得られた。また情動性については，母側・情動性因子と娘側・情動性因子の 2 因子が得られた。 親子関係の娘母の情動性の関連については，母親との親和的なコミュニケーションは娘のポジティブな感情と関係していた。また娘の情動性の因子は，母側の励まし受容因子と正の相関を示しており，娘のネガティブな感情が高い時は，母は娘に対して励まし，受容している様子が窺われた。 （小高　恵・紺田広明・清水和秋）（分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）
28.娘母関係の相互作用の分析 ―（2）動的因子分析を二者関係に適用して―	共 同発表	平成 23 年 9 月	日本心理学会第 75 回大会発表論文集 P.975.	娘母関係の相互作用を明らかにするために，上記の研究で得られた母娘の二者の多変量時系列データに対して動的因子分析を適用した。その結果，娘の親和的コミュニケーションおよび母の情動性の時間的な相互作用が明らかになった。（紺田広明・小高　恵・清水和秋）（分担執筆をしなかったため，担当部分を抽出するのは困難である。）

29.大学生における母―青年関係についての一分析　―「母の子に対する態度・行動」と「子の母に対する態度・行動」との関連性について―	単 独 発表	平成 25 年 11 月.	関西心理学会 第 125 回大会 発表論文集 P.48	本論文では,母との関係に焦点を当て，青年の認知する「母の子に対する態度･行動」と「子の母に対する態度・行動」の構造分析を行った。その結果,「母の子に対する態度･行動」は「受容」「統制」の 2 因子が得られた。また「子の母に対する態度・行動」については,「母との情愛的絆」「母からのポジティブな影響」「母との対立」「母への服従」「母に対する客観視」「母とは別の独自の生き方」の 6 因子が得られた。さらに構造方程式モデリング（Structural Equation Modeling）を適用し，男女の 2 集団の同時分析により,両者の関連について検討した。その結果,「受容」の因子は「情愛的絆」の因子,「ポジティブな影響」の因子と正の相関が,「対立」の因子と負の相関が認められた。
30.大学生の母―青年関係と心理・社会的適応との関連について	単 独 発表	平成 26 年 3 月	発達心理学会 第 25 回大会 発表論文集 P. 637	本研究においては,青年と母親との関係に焦点を当て,青年の母に対する態度・行動が心理・社会的適応とどのように関係するのか,またその関連の性差について検討した。その結果,男女とも，母親への親和志向は,ポジティブな社会志向性と正の相関を示した。また母からの独立志向についてはポジティブ･ネガティブな個人志向性と正の相関を示した。このことから，母との親和的な関係は,他者との調和的共存や社会適応と，また母からの独立志向は,自他の差異性を強調する個性や独自性尊重することと関係していると考えられる。

31. 母―青年関係が心理社会的適応に及ぼす影響について	単 独発表	平成 26 年 11 月	関西心理学会第 126 回大会発表論文集 P82.	本研究においては，青年と母親との関係に焦点を当て，青年の母への態度・行動の男女差を検討し，青年の母親への態度・行動が心理社会的適応への影響過程について，構造方程式モデリングを適用し，男女の 2 集団の同時分析により検討した。 本分析においては，3 人の中学 1 年生の女子を対象に，Cattell の古典的な P 技法因子分析を用いて，日々の母娘関係についての構造分析を行った。その結果，娘の認知する日々の母娘関係は 3～4 個の因子で構成されていた。また 3 人に共通して 2 つの因子(「母との親和的コミュニケーションの因子」と「自己主張の因子」) が存在していること，さらに対象者独自の因子が存在していることが明らかとなった。 （本研究は，科研費基盤研究（C）17K04389 の助成を受けたものである）
32. 日々の母娘関係の一分析 ― 娘の認知する母娘関係の因子比較 ―	共同発表	2017 年 9 月 30 日	日本心理学会第 81 回大会発表論文集 p. 809	本分析においては，3 人の中学 1 年生の女子を持つ母親対象に，Cattell の古典的な P 技法因子分析を用いて，日々の母娘関係についての構造分析を行った。その結果，母親の認知する日々の母娘関係は 3～4 個の因子で構成されていた。また 3 人に共通して 2 つの因子(「母との親和的コミュニケーションの因子」と「自己主張の因子」) が存在していること，さらに対象者独自の因子が存在していることが明らかとなった。 （本研究は，科研費基盤研究（C）17K04389 の助成を受けたものである。）
33 日々の母娘関係の一分析 ― 母の認知する母娘関係の因子比較―	共同発表	2017 年 10 月 7 日	日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集 p. 269	

（人間）糸田　千鶴

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年　3 月　20 日

氏名　糸田千鶴　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
固体地球物理学	古地磁気学、岩石磁気、地球磁場

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 サーバーを利用した HTML 言語の実習	平成 16 年度～	Web ページを記述する HTML 言語の実習授業(インターネット言語基礎・応用）において，作成した課題を，サーバーにアップロードさせた。この作業を通じて，ファイル転送とは一つのコンピュータから別のコンピュータにデータを送ることである点を理解させた。また， インターネット言語応用では,Perl 言語を使ったプログラムを利用した Web ページの作成を実習した。ファイル転送から属性変更，プログラムの動作確認，ページの表示確認といった作業を通して，クライアントコンピュータとサーバーの関係を実感させると共に，Unix と Windows という OS の違いを理解させた。
iPod/iPad mini/iPad を利用した授業（地球の環境）	平成 23 年度～	プレート境界の種類について解説する際に、学生に i-pod で地図サイトにアクセスし、海底地形を確認させた。地形図を手元で確認しながら、プレート生成や運動の話をすることで、より理解させることができた。
iPod/iPad mini iPad を利用した授業（情報処理概論）	平成 24 年度～	数字コードや画像コードを学修する単元において、教員のサーバ上においたプログラムを利用した演習を取り入れた。
授業ごとの授業アンケートの実施（情報処理概論・地球の環境・インターネット言語基礎・インターネット言語応用）	平成 26 年度～	毎回の授業終了時に「興味」と「関心」を問うアンケートを実施し、それに基づいて次回の授業展開を考える方法を実施した。あわせて、コメントシートで意見を記入させた。授業評価をすぐに確認することで、理解度を計ることができ、コメントとあわせて復習のポイントを絞ることができた。アンケートの結果は受講学生にも示していた。 平成 29 年度は地球の環境・インターネット言語基礎・インターネット言語応用では、e-Leraning system を利用して授業アンケートの実施を行った。system を利用することにより、即時結果を確

		認することができる。
e-Learning system を利用した授業運営の工夫 （ソフトウェアリテラシー応用・情報処理概論・地球の環境）	平成 28 年度～	（ソフトウェアリテラシー応用）（平成 28 年度） 課題を掲載し、学生の授業外学修を促した。 （情報処理概論）（平成 28 年度～） 授業ノートを授業前に公開し、学生の事前学修を促した。 （地球の環境）（平成 29 年度～） system を利用して授業内小テストを実施した。解答・解説も掲載し、授業外学修の助けとなるようにした。
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 ・授業を履修した学生による授業評価アンケート結果	平成 29 年度	（情報処理概論） 教員の授業への取り組みは 83%以上の学生が肯定的に評価しており、6 割の項目で昨年度を上回った。特に「意欲を引き出す工夫」（85.5%）、「満足度」（86.2%）、「後輩にすすめたいか」（84.2%）の項目で平成 28 年度と比較して 7 ポイント上昇している。また「すすめたい理由」の「わかりやすい」が 7 ポイント上昇し、「進めたくない理由」の「わかりにくかった」が 7 ポイント低下した。学生が意欲的に学べる形に近づいたと評価できる。 （インターネット言語基礎） 授業アンケートの結果は肯定的評価が概ね 90%以上であったが、「わかりやすくする工夫」「受講態度への注意」「教科書を有効活用していたか」「満足度」の項目の肯定的評価が 83%であり、この科目の中ではやや低い。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 第二種情報処理技術者	昭和 61 年 6 月	コンピュータに関する基本的なスキルをもち，仕様書に基づいてプログラミングを行うことがで

		きる技術。コンピュータシステム，通信ネットワーク，ソフトウェア，ハードウェア，アルゴリズム，経営工学等の基本的な知識を持ち，それらの知識を利用して，プログラミングを行うことができることが要求される。
高等学校教諭一級普通免許状（理科）	平成 1 年 3 月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 日本第四紀学会広報委員 人間学部教務主事 太成学院大学教職課程長	平成 18 年 8 月～ 平成 21 年 4 月～ 平成 21 年 4 月 ～ 平 成 23 年 3 月	広報委員として第四紀学会ホームページの管理を担当。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 2 3 :				
（学術論文） 1. 松田式係数の地域性と断層タイプ依存性	共著	2004 年 6 月	活断層研究，24，33-34 活断層研究会	萩原・糸田（2003）で用いた断層データの改訂版を使って松田式の係数を再計算した。新しいデータセットでは，一度に地震破壊が及ぶ断層系全体の長さデータと，分割して活動する断層セグメント長データとが示されている。これらのデータを用いて断層タイプと地域ごとの松田式係数の存在

				範囲を推定した。係数は東北日本で相対的に大きく，西南日本で小さい。また，逆断層タイプに比較して横ずれ断層で大きくなっている。地震エネルギーは逆断層運動より水平断層運動に消費した方がより効率よく変位量に資することができるからであり，係数の大きい値をとる地域では水平変位が相対的に大きくなると結論できる。 データ解析全体を担当した。 （萩原幸男，糸田千鶴）
2. 伊豆半島東方沖群発地震に伴う傾斜変動の時系列データ解析	共著	2005 年 3 月	日本大学文理学部自然科学研究所「研究紀要」40, 55-65, 日本大学文理学部自然科学研究所.	伊豆半島東方沖で 1993 年から 1998 年までに発生した群発地震とそれにともなう傾斜変動を入力ー出力システムという視点から検討し，傾斜変動から群発地震回数の変化を予測する式を提案した。群発地 震の発生開始は，傾斜変動のリサージュ図形から容易に予測できる。しかし、傾斜変動と群発地震との間の先行性は顕著ではなく相互に入力となり出力となっているシステムであると考えられる。そこで両者が入力であり出力でもあるシステムを微分方程式で記述し，群発地震回数の変化の短期予測を試みたところ，予測式の有効性が確かめられた。 データ解析全体を担当した。 （萩原幸男，糸田千鶴）
3. 短期大学生の職業決定と内定との関連性についての一考察	共著	2005 年 3 月	太成学院大学紀要， 24, 27-27, 太成学院大学.	短期大学学生の職業決定と内定の関連性についての研究。短期大学生と大学生が職業決定に対しどのような意識を持っているかを調査・分析した結果えられた因子をもとに，それらが職業決定にどのように関係しているか，さらには実際の内定獲得とどのような関係があるかを調査した。その結果，職業決定が未熟で先延ばしにし，慎重に探索しているほど受験回数が

				少ないこと，未内定者は早期内定者より就職に対する意識が未熟で慎重に模索しているなどの結果が得られた。 調査準備から結果の考察にいたるまで共同で行った。 （小高　恵，黒川正剛，糸田千鶴）
4. 起震断層長のべき乗則分布モデル	共著	2005 年 6 月	活断層研究，25，1-7，活断層研究会	地殻の破壊に関連する断層長の分布は、被破壊物一般が示すべき乗分布ではなく指数分布的である。べき乗則に何らかの修正を加えることにより、断層長データに適合する「修正べき乗分布」の提案を目指した。モデルの適合の結果、「ＴＧＲモデル」および「ＭＧＲモデル」はデータの適合性において優れていることが示された。 （萩原幸男，糸田千鶴）
5. Millennial to submillennial-scale features of the Matuyama-Brunhes geomagnetic polarity transition from Osaka Bay, southwestern Japan	共著	2006 年 2 月	J. Geophys. Res, 111, B02103(15p), American Geophysical Union.	大阪湾堆積物の残留磁化から Matuyama 期から Burunhes 期への地磁気極性反転の記録を復元した。記録に残された千年あるいは千年弱のスケールの変動の特徴について論じた。 解析方法や結果のディスカッションを行った。 （Hyodo, M., Biswas, D.K., Noda, T., Tomioka, N., Mishima, T., Itota, C., and Sato, H.）
6. 宏観異常判定システムの構築	共著	2006 年 6 月	地震ジャーナル，41，43-46，地震予知総合研究振興会	観測機器によらず人間の感覚でわかるような地震前兆現象を「宏観異常」とよぶ。動物の異常行動や地鳴りなどであるがこれらのデータには一般にデータの不備や欠陥が多く、地震予知に結びつけることが難しい。個々の宏観異常に重みをつけることで、地震発生の判定を行いシステム構築の可能性について検討した。判定システム自体は有効に機能することが示された

				が、実際の宏観異常のデータ収集の方法についてはまだ多くの問題がある。計算を担当、システムの検討を共同で行った。 （萩原幸男，糸田千鶴）
7.セグメント化された起震断層帯の長さの統計モデル	共著	2006 年 6 月	活断層研究，26，1-6，活断層研究会.	Kumamoto(1999)が与えた Maxlen モデルと Segment モデルとガウス分布の適合性から、パラメータを減らし、簡単化した統計モデルを提案する。また得られたパラメータを用いて地震マグニチュードの統計分布式を導き、しれが修正グーテンベルク・リヒター式と調和的であることを指摘した。地震統計にこのモデルを組み入れることにより、マグニチュード分布についての新たな視野が開かれることが期待される。 データ解析全体を担当した。 （萩原幸男，糸田千鶴）
8.セグメント化された起震断層帯の長さのガンマ分布統計	共著	2007 年 6 月	活断層研究，27，1-6，活断層研究会.	萩原・糸田（2006）で Maxlen モデルと Segment モデルを結び付ける数理統計式を提案したが、この際のモデルパラメタを８個から４個に低減した「改訂統計モデル」を提案した。得られたモデルは原データによく適合することが示された。この改訂モデルの地震統計への応用性を検討した結果、実際のマグニチュード分布と良い一致が見られた。このような一致性は改訂統計モデルの有効性の重要な証拠と考えられる。 データ解析全体を担当した。 （萩原幸男，糸田千鶴）
９．アセンブリ・アワーにおける初年時教育の取り組みについて	共著	2011 年 3 月	太成学院大学紀要，13，61-67，太成学院大学	2010 年度太成学院大学における初年時教育の報告。１年次生の将来のキャリア意志決定についてどのような態度を持っているかについての報告。また、アセンブリ・アワーの４年間の位

				置づけについての提案を行った。 先般について議論した。特にアセンブリ・アワーの位置づけに関する提案部分を担当。 （小高恵，金杉高雄，田中秀生，池辺晴美，糸田千鶴）
１０．アセンブリ・アワーにおける二年次時教育の取り組みについての一報告	共著	2012 年 3 月	太成学院大学紀要，13,	2011 年度にアセンブリ･アワーで２年次生に対し取り組んだ内容の報告である。特に学生が将来のキャリア意思決定についてどのような態度を持っているかを分析した。その結果、半数以上の学生が将来について不安を感じていることが明らかになった。また、将来について積極的に考えていこうという態度を持っていることがわかった。 アンケートによる分析結果について議論した。 （小高恵，金杉高雄，田中秀生，池辺晴美，糸田千鶴）
１１．アセンブリ・アワーにおける三年次時教育の取り組みについての一報告	共著	2013 年 3 月	太成学院大学紀要，14，59-64.	2012 年度にアセンブリ･アワーで取り組んだ3年次教育についての報告である。春学期と秋学期で取り組んだ内容についての報告を行い、その中から、学生が将来のキャリア意思決定についてどのような態度を持っているかについて報告を行った。 アセンブリ・アワーで取り組んだ内容が、他の科目の勉学の動機づけとなり、学びの促進につながっていくと考えられる。学生の大学での学びを豊かにし、キャリア意識を発達させるような支援を行っていくことが、大学にとっての重要な課題になると考えられる。 主としてアンケートによる分析結果について議論した。 （小高恵，金杉高雄，田中秀生，池辺晴美，糸田千鶴）

（その他）				

（人間）黒川　正剛

教　育　研　究　業　績　書

2018 年 3 月 20 日

氏名　黒 川 正 剛 印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
西洋中・近世史、宗教史	魔女裁判、驚異、想像界、心性史

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例	平成 16（2004）年 4 月 1 日～平 成 25（2013）年 9 月 30 日	授業「西洋史の探究」：歴史・文化の学び方の基礎を習得するための授業であり、死や女性等、人間と切り離せない事象を題材に、学生の興味・関心を育てている。 ほぼ毎時間、補助教材（プリント）を作成・配布し学生の授業理解に役立てるよう努めている。多くの画像資料をパワーポイントで提示解説する方式を取り、学生が視覚的に授業内容を理解できるよう工夫している。また、授業内容を時間内に小レポート形式でまとめさせ、授業内容が学生に定着するような取り組みも行っている。
	平 成 16（2004）年 10 月 1 日～平 成 26（2014）年 3 月 31 日	授業「近代史の探究」：西洋における病（うつ病）の歴史を解読することにより、病認識にも歴史があることを学び、歴史・文化的理解の重要性を習得することを目指している。 ほぼ毎時間、補助教材（プリント）を作成・配布し学生の授業理解に役立てるよう努めている。多くの画像資料をパワーポイントで提示解説する方式を取り、学生が視覚的に授業内容を理解できるよう工夫している。また、授業内容を時間内に小レポート形式でまとめさせ、授業内容が学生に定着するような取り組みも行っている。
	平 成 16（2004）年 10 月 1 日～平 成 26（2014）年	授業「西洋史概論」：「世界史像の探究」をテーマに、西洋世界の歴史家や哲学者が各時代に考え出した世界史像を学ぶことにより、歴史学的な思考を習得することを目指している。 ほぼ毎時間、補助教材（プリント）を作成・配

	3月31日	布し学生の授業理解に役立てるよう努めている。多くの画像資料をパワーポイントで提示解説する方式を取り、学生が視覚的に授業内容を理解できるよう工夫している。また、授業内容を時間内に小レポート形式でまとめさせ、授業内容が学生に定着するような取り組みも行っている。
	平成 16（2004）年4月1日～平成 25（2013）年9月30日	授業「歴史地理学概論」：地誌を核に、歴史地理学への入門を行っている。土日に行われるフィールドワークを必修とし、実体験に基づく学びを実践している。学内の講義ではフィールドワークの内容に対応した文献講読・事前学習を行い、フィールドワーク終了後に、調査レポートの作成提出を課している。 パワーポイントによる画像資料提示と並んで、地図・表・資料解読作業を学生に指導し、資料読解能力が育つよう取り組んでいる。
	平成 17（2005）年4月1日～平成 25（2013）年9月30日	授業「世界の宗教と文化（キリスト教）」：近世の西欧で起こった魔女裁判を題材にして、キリスト教世界の歴史・文化を学び理解することを目的としている。 ほぼ毎時間、補助教材（プリント）を作成・配布し学生の授業理解に役立てるよう努めている。多くの画像資料をパワーポイントで提示解説する方式を取り、学生が視覚的に授業内容を理解できるよう工夫している。また、授業内容を時間内に小レポート形式でまとめさせ、授業内容が学生に定着するような取り組みも行っている。
	平成 17（2005）年10月1日～平成 26（2014）年3月31日	授業「世界の宗教と文化（イスラム教）」：イスラムの歴史・宗教・文化の基礎的知識を習得することと並んで、イスラム理解におけるオリエンタリズムの問題に関する理解を深めることを目的としている。 ほぼ毎時間、補助教材（プリント）を作成・配布し学生の授業理解に役立てるよう努めている。多くの画像資料をパワーポイントで提示解説する方式を取り、学生が視覚的に授業内容を理解できるよう工夫している。また、授業内容を時間内に小レポート形式でまとめさせ、授業内容が学生

		に定着するような取り組みも行っている。
	平 成 17（2005）年10月1日～平 成 26（2014）年3月31日	授業「教育史」：教職専門の授業であるため、教育史（授業配分：西洋教育史9割、日本教育史1割）の基本的な内容を理解させるとともに、教員採用試験も見据えた授業を実践している。 定期的に小テストを実施し、採点後、返却・解答解説を行うことによって、教育史の理解の深化・定着を目指している。
	平 成 18（2006）年4月1日～平 成 25（20123 年9月30日	授業「比較文化論」：西洋文化と日本文化に見られる「憑き物信仰」を題材にして、西洋と日本の比較を行い、自然観・宗教・文化の違いと類似点を理解させ、異文化理解を深めることを目的としている。 ほぼ毎時間、補助教材（プリント）を作成・配布し学生の授業理解に役立てるよう努めている。多くの画像資料をパワーポイントで提示解説する方式を取り、学生が視覚的に授業内容を理解できるよう取り組んでいる。また、授業内容を小レポートでまとめさせ授業内容が学生に定着するような取り組みも行っている。
	平 成 26（2016）年4月1日～平成 27（2017）年3月31日	○「西洋史の探究」（春学期）…毎回、授業に関する小レポートを授業支援システム(My TGU.net)を使用して提出させ授業で公開し、学生に内容を相互確認させる方法をとり、授業内容の理解度向上に努めた。 ○「歴史地理学概論」（春学期）…アクティブ・ラーニング・コモンズを使用して、グループ学習を実施し、その成果をふまえてフィールドワークを実施した。 ○「世界の宗教と文化（キリスト教）」（春学期）…小レポートを授業支援システムを使用して実施。また、グループ学習を実施した。 ○「比較文化論」（春学期）…学生自身に文化を比較させて調査してもらい、結果をプレゼンテーションさせた。グループ学習を実施（ワールド・カフェ方式）。 ○「近代史の探究」（秋学期）…毎回、授業に関する小レポートを授業支援システム(My

		TGU.net)を使用して提出させ授業で公開し、学生に内容を相互確認させる方法をとり、授業内容の理解度向上に努めた。 ○「世界の宗教と文化（イスラム教）」（秋学期）…ニュース記事からイスラムに関わる問題を取り上げ、学生と議論することを通して理解を深めた。 ○「教育史」中等・初等（秋学期）…毎回小テストを実施し、解答・解説を行い、授業内容の理解度の向上に努めた。 ○「人間学入門」(春学期)…グループワーク(ポスター制作、プレゼンテーション、学生相互ポスター評価、表彰など)、ジグソー法などアクティブラーニングを毎回取り入れた授業をもう一人の教員（糸田）と組んで実施した。e-learningシステムで課題を提出。 （平成 27（2015）年度
	平成 29（2017）年 4 月 1 日～平成 30（2018）年 3 月 31 日	○「西洋史の探究」（春学期）…絵画資料・文献史料を題材にグループワークとして読解、ディスカッションを行い、プレゼンテーションを行った。e-learning システムで課題を提出。 ○「歴史地理学概論」（春学期）…グループワークにもとづき、竹内街道の歴史や観光ルートをディスカッションし、プレゼンテーションを行った。その成果をふまえてフィールドワークを実施した。 ○「心性の歴史」（春学期）…恐怖、笑いに関する歴史資料をグループワークで読解・ディスカッションし、プレゼンテーションを行った。 ○「人間学基礎演習Ⅰ」･･･研究文献（論文）のレジュメ発表とディスカション・質疑応答を行った。 ○「人間学演習Ⅰ」･･･卒論作成に向けてレジュメ発表とディスカション・質疑応答を行った。 ○「近代史の探究」（秋学期）…ハンチントンの「文明の衝突」説に関する資料について、グループワークで読解・ディスカッションを行い、プレゼンテーションを実施した。e-learning システムで課題を提出。

		○「教育史」初等（秋学期）…主要な教育思想家に関する資料について、グループワークで読解・ディスカッションを行い、プレゼンテーションを実施した。反転授業を行った。e-learning システムで課題を提出。 ○「人間学基礎演習Ⅱ」･･･研究文献（論文）のレジュメ発表とディスカション・質疑応答を行った。 ○「人間学演習Ⅱ」･･･卒論作成指導。レジュメ発表とディスカション・質疑応答を行った。
2　作成した教科書，教材	平 成　16（2004）年 4 月 1 日～平 成　25（2013）年 9 月 30 日	授業「西洋史の探究」の教材 (1) 授業内容の理解を深めるための「課題プリント」の作成・配布。 (2) 授業理解を深めるために文献史料・グラフ・絵・図などが入った補助教材を作成・配布。 (3) 多量の画像資料を読み込んだパワーポイント・スライド資料
	平 成　16（2004）年 10 月 1 日～平 成　26（2014）年 3 月 31 日	授業「近代史の探究」の教材 (1) 授業理解を深めるために文献史料・グラフ・絵・図などが入った補助教材を作成・配布。 (2) 多量の画像資料を読み込んだパワーポイント・スライド資料
	平 成　16（2004）年 10 月 1 日～平 成　26（2014）年 3 月 31 日	授業「西洋史概論」の教材 (1) 授業理解を深めるために文献史料・グラフ・絵・図などが入った補助教材を作成・配布。 (2) 多量の画像資料を読み込んだパワーポイント・スライド資料
	平 成　16（2004）年 4 月 1 日～平 成　25（20132)年 9 月 30 日	授業「歴史地理学概論」の教材 (1) 授業理解を深めるために文献史料・グラフ・絵・図などが入った補助教材を作成・配布。 (2)　多量の画像資料を読み込んだパワーポイント・スライド資料。 (3)「フィールドワーク・ノートブック」の作成。調査地の関連資料と書き込み用紙面を一冊の本にしたもの。このノートブックは、学生に共同で作成させ、調査当日に携帯、資料確認させ

		るとともにメモを取らせることを目的としたものである。
	平 成 17（2005）年 4 月 1 日～ 平 成 25（2013）年 9 月 30 日	授業「世界の宗教と文化（キリスト教)」の教材 (1) 授業理解を深めるために文献史料・グラフ・絵・図などが入った補助教材を作成・配布。 (2) 多量の画像資料を読み込んだパワーポイント・スライド資料
	平 成 17（2005）年 10 月 1 日～ 平 成 26（2014）年 3 月 31 日	授業「世界の宗教と文化（イスラム教)」の教材 (1) 授業理解を深めるために文献史料・グラフ・絵・図などが入った補助教材を作成・配布。 (2) 多量の画像資料を読み込んだパワーポイント・スライド資料
	平 成 17（2005）年 10 月 1 日～ 平 成 26（2014）年 3 月 31 日	授業「教育史」の教材 (1) 西洋教育史、日本教育史に関わる資料作成・配布 (2) 小テスト
	平 成 18（2006）年 4 月 1 日～ 平 成 25（2013）年 9 月 30 日 平 成 26（2016）年 4 月 1 日～ 平成 27（2017）年 3 月 31 日	授業「比較文化論」の教材 (1) 授業理解を深めるために文献史料・グラフ・絵・図などが入った補助教材を作成・配布。 (2) 多量の画像資料を読み込んだパワーポイント・スライド資料 ○「西洋史の探究」（春学期）…プリント教材「西洋史を知る今日の一枚」：西洋絵画の解読を通じて西洋文化の理解を深める教材。15 回分。 ○「歴史地理学概論」（春学期）…グループ学習で使用するシート。 ○「世界の宗教と文化（キリスト教）」（春学期）…グループ学習で使用するシート。 ○「比較文化論」（春学期）…グループ学習で使用するシート。 ○「近代史の探究」（秋学期）…図版等プリント

		資料。 ○「世界の宗教と文化（イスラム教）」（秋学期）…ニュース、世界遺産のプリント資料。 ○「教育史」中等・初等（秋学期）…小テスト、教育史原典プリント資料。
	平 成　27（2017）年4月1日～平成28（2018）年3月31日	○「人間学入門」（春学期)･･･アクティブラーニングに使用するプリント教材、書き込みシート。（平成27（2015）年度） ○「西洋史の探究」（春学期）…プリント教材「西洋史を知る今日の一枚」：西洋絵画の解読を通じて西洋文化の理解を深める教材。15 回分。アクティブラーニングに使用するプリント教材、書き込みシート。 ○「歴史地理学概論」（春学期）…グループ学習で使用するシート。 ○「近代史の探究」（秋学期）…アクティブラーニングに使用するプリント教材、書き込みシート。 ○「教育史」中等・初等（秋学期）…アクティブラーニングに使用するプリント教材、書き込みシート。 ○「心性の歴史」（2017 年度春学期）…アクティブラーニングに使用するプリント教材、書き込みシート。
3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成16(2004)年11月	学生アンケートの集計結果：質問項目 問１)担当教員の話し方は、論理的で分かりやすかったと思いますか？ 問２)授業の進め方は、まとまりがあって一貫性があったと思いますか？ 問３)授業を通じて、担当教員の熱意を感じたと思いますか？ 平成16(2004)年4月～7月：西洋史の探究：回答者＝38名 問１）同上＝95%（84%） 問２）同上＝97%（79%） 問３）同上＝95%（76%）

		注１）％は、評価基準　1.思う　2.やや思う　3.普通の合計。 注２）（　）内の％は、評価基準の１と２の合計。 同年度同時期の大阪短期大学に開講されていた担当授業科目については省略。
	平成17(2005)年9月	平成17(2005)年4月～7月 ・アンケート評価項目「担当教員に対する評価」のうち、「話し方がわかりやすかったか」、「授業の進め方にまとまりがあったか」、「授業準備・教材の工夫」、「熱意」、「私語対応」について。 ・評価基準:思う（２）、やや思う（１）、普通（０）、あまり思わない（－１）、思わない（－２）のポイントで計算。 ・以下、この方式で計算。 「西洋史の探究」「比較文化論」「世界の宗教と文化（キリスト教)」「歴史地理学概論」 全科目平均＝１．２
	平成18(2006)年6月	平成17(2005)年9月～平成18(2006)年1月 「西洋史概論」「近代史の探究」「世界の宗教と文化（イスラム教)」「教育史」 全科目平均＝１．５
	平成18(2006)年9月	平成18(2006)年4月～7月 「西洋史の探究」「比較文化論」「世界の宗教と文化（キリスト教)」「歴史地理学概論」 全科目平均＝１．２
	平成19(2007)年6月	平成18(2006)年9月～平成19(2007)年1月 「西洋史概論」「近代史の探究」「世界の宗教と文化（イスラム教)」「教育史」 全科目平均＝１．０
	平成20(2008)年1月	平成19(2007)年4月～7月 「西洋史の探究」「比較文化論」「世界の宗教と文化（キリスト教)」「歴史地理学概論」 全科目平均＝１．０

	平成 20(2008)年 3月	平成19(2007)年9月～平成20(2008)年1月 「西洋史概論」「近代史の探究」「世界の宗教と文化（イスラム教)」「教育史」 全科目平均＝０．９
	平成 20(2008)年 10月	平成20(2008)年4月～7月 「西洋史の探究」「比較文化論」「世界の宗教と文化（キリスト教)」「歴史地理学概論」 全科目平均＝１．４
	平成 21(2009)年 6月	平成20(2008)年9月～平成21(2009)年1月 「西洋史概論」「近代史の探究」「世界の宗教と文化（イスラム教)」「教育史」 全科目平均＝０．９
	平成 21(2009)年 12月	平成21(2009)年4月～7月 「西洋史の探究」「比較文化論」「世界の宗教と文化（キリスト教)」「歴史地理学概論」 全科目平均＝１．１
	平成 22(2010)年 8月	平成21(2009)年9月～平成22(2010)年1月 「西洋史概論」「近代史の探究」「世界の宗教と文化（イスラム教)」「教育史」 全科目平均＝１．６
	平成 23(2011)年 2月	アンケート形式変更のため、Q19「総合的に見て、この授業を受けて良かったと思いますか」で算定。評価基準は、思う（２)、やや思う（１)、あまり思わない（－１)、思わない（－２)。 平成22(2010)年4月～7月 「西洋史の探究」「比較文化論」「世界の宗教と文化（キリスト教)」「歴史地理学概論」 全科目平均＝１．４
	平成 23(2011)年 12月	アンケート形式変更：Q19「総合的に見て、この授業を受けて良かったと思いますか」で算定。評価基準は、思う（4)、やや思う（3)、あまり思わない（2)、思わない（1)。

		平成 22(2010)年 9 月～平成 23(2011)年 1 月 「西洋史概論」「近代史の探究」「世界の宗教と文化（イスラム教)」「教育史」 全科目平均＝３．３
	平成 24(2012)年 1 月	アンケート形式変更：Q19「総合的に見て、この授業を受けて良かったと思いますか」で算定。%表示。「思う」＋「やや思う」の合計。 平成 23(2011)年 9 月～平成 24（2012)年 1 月 「西洋史概論」＝79% 「近代史の探究」＝80% 「世界の宗教と文化（イスラム教)」＝75% 「教育史」＝77% 「社会科教育法Ⅱ」＝100%
	平成 24(2012)年 6 月～9 月	Q19「総合的に見て、この授業を受けて良かったと思いますか」で算定。%表示。「思う」＋「やや思う」の合計。 平成 24(2012)年 4 月～平成 24（2012）年 9 月 「西洋史の探究」＝92% 「比較文化論」＝70% 「世界の宗教と文化(キリスト教)」＝100% 「歴史地理学概論」＝100%
	平成 24(2012)年 12 月 ～平成 25(2013)年 3 月	「西洋史概論」＝93% 「近代史の探究」＝89% 「世界の宗教と文化（イスラム教）」＝89% 「教育史」＝85%
	平成 25(2013)年 7 月～9 月	Q19「総合的に見て、この授業を受けて良かったと思いますか」で算定。%表示。「思う」＋「やや思う」の合計。 平成 25(2013)年 4 月～平成 25(2013)年 9 月 「西洋史の探究」＝76% 「比較文化論」＝73%

		「世界の宗教と文化（キリスト教)」＝70％ 「歴史地理学概論」＝100
	平 成　26（2016）年4月1日～9月31日	Q19「総合的に見て、この授業を受けて良かったと思いますか」で算定。％表示。「思う」＋「やや思う」の合計。 ○「西洋史の探究」（春学期）…81％ ○「歴史地理学概論」（春学期）…100％ ○「世界の宗教と文化（キリスト教）」（春学期）…79.5％ ○「比較文化論」（春学期）…80％ ○「人間学基礎演習Ⅰ」（春学期）…100％
	平成26(2014)年度秋学期	Q19「総合的に見て、この授業を受けて良かったと思いますか」で算定。％表示。「思う」＋「やや思う」の合計。 「西洋史概論」＝83％ 「近代史の探究」＝77％ 「世界の宗教と文化（イスラム教）」＝100％ 「教育史」＝96％ 「教育史（初等)」＝95％ 「人間学基礎演習Ⅱ」＝100％
	平成27（2015）年度春学期	Q19「総合的に見て、この授業を受けて良かったと思いますか」で算定。％表示。「思う」＋「やや思う」の合計。 ○「人間学入門」＝78％ ○「西洋史の探究」＝84％ ○「歴史地理学入門」＝100％ ○「ゼミ1」＝100％ ○「人間学基礎演習Ⅰ」＝67％ ○「人間学演習Ⅰ」＝100％
	平成29（2017）年度	「Ｑ１２．授業を受け終えて、あなたはこの授業に満足していますか」･･･「満足」、「まあ満足」の合計。 ＜春学期＞ 西洋史の探究＝100％ 歴史地理学概論＝86％ 世界の宗教と文化（キリスト教）＝85％ 心性の歴史＝100％

		基礎ゼミ演習Ⅰ＝100% 人間学演習Ⅰ＝50% ＜秋学期＞ 近代史の探究＝91% 教育史（初等）＝95% 基礎ゼミ演習Ⅱ＝100% 人間学演習Ⅱ＝71%
4　実務の経験を有する者についての特記事項	平成16(2004年)～平成24年(2012)年	「アセンブリ・アワー」担当、アドバイザ。新入生導入宿泊研修、引率
5　その他	平成16(2004)年5月 平成18(2006)年4月 平成19(2007)年9月～平成22(2010)年3月 平成19(2007)年12月 平成21（2009）年 2月 平成	JT 生命誌研究館の外部講師セミナー講演。5 月14 日、JT 生命誌研究館「西洋近世における驚異・自然・科学－魔女裁判の視角から」 NHK 新日曜美術館「魔女―ゴヤが見た闇の世界」（4 月 30 日放送，NHK 教育テレビ）におけるゴヤの魔女の絵の歴史的背景の説明。取材出演。 国立民族学博物館共同研究員。研究代表、白川千尋（国立民族学博物館准教授）。共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」 公開講座「怪異学セミナー―怪異学の愉しみ」(園田学園女子大学) 演題「西欧近世における魔女と＜怪異＞」 公開講座「怪異学セミナー―怪異学の可能性」(園田学園女子大学) 演題「西欧中・近世における驚異（怪異)」 公開講演「考古学クラブ・就実大学史学会共催講

	21（2009）年 12 月	演会」（就実大学） 演題「西欧近世における魔女狩り」
	平成 22(2010)年 6 月	ＴＢＳテレビ『スパモク!!教科書にのせたい!」』(6 月 24 放送)に取材出演。「動物裁判」についての解説。
	平成 23(2011)年 8 月	国立民族学博物館特別講師。研究代表、山中由里子（国立民族学博物館准教授)。共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相－中東・ヨーロッパを中心に」
	平成 24(2012)年 4 月～現在に至る	国立民族学博物館共同研究員。研究代表、山中由里子（国立民族学博物館准教授)。共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相－中東・ヨーロッパを中心に」
	平成 25（2013）年 2 月	西宮市　生涯学習大学「宮水学園」 題目「「怪異」の歴史学　西洋：西欧近世社会と増殖する怪異／驚異」
	平成 25(2013)年 4 月～現在に至る	人間文化研究機構（国立民族学博物館）連携研究員。研究課題「驚異と怪異の表象―比較研究の試み」
	平成 25(2013)年 11 月	公開講演「ヨーロッパにおける魔女と魔術　−魔女の図像学」（東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会）
	平成 26(2014)年 7 月	京都人類学研究会 7 月季節例会 シンポジウム「呪術的実践＝知の現代的諸相－科学／医療／宗教／その他の実践＝知との並存状況から」 （京都大学人文科学研究所） 発表題目「「呪術的実践＝ 知の歴史的諸相： 西欧近世における魔女信仰の視角から」
	平成 26(2014)年 10 月	研究フォーラム「驚異と怪異：想像界の比較研究に向けて」（国立民族学博物館） 発表題目「西洋中世・近世における驚異」

	平成 26（2014） 年 10 月 ～現在に至る	国立民族学博物館共同研究員。研究代表、川田牧人（成城大学教授）。共同研究「呪術的実践＝知の現代的位相――他の諸実践＝知との関係性に着目して」
	平成 27（2015） 年 2 月	ＮＨＫエンタープライズへの取材協力 ＢＳプレミアム「判事マツケン　一刀両断！？天才たちの破天荒人生」（2 月 28 日（土）放送）
	平成 27 （2015） 年 2 月	栄中日文化センター講座（栄中日文化センター）講義題目「魔女狩りから読み解く魔女の真実」
	平成 27（2015） 年 4 月	「魔女の秘密展」記念講演（毎日新聞社、朝日放送、東映主催。大阪文化館）演題「魔女は本当に存在したか―魔女狩りにみる近世ヨーロッパの闇」
	平成 27（2015） 年 7 月	朝日新聞（7 月 12 日朝刊）「文化の扉－はじめての魔女」取材協力。
	平成 27（2015） 年 7 月	「はびきの市民大学」講座「人間と歴史」講義題目「魔女狩りの歴史からみるヨーロッパ文化」
	平成 27（2015） 年 8 月	太成学院大学オープンカレッジ（太成学院大学）講義題目「鬱（うつ）から見る西洋史」
	平成 28（2016） 年 5 月	小シンポジウム「魔女研究の新潮流―メディア、領域侵犯、グローバル・ヒストリー―」、パネラー「表象としての魔女」、第 66 回日本西洋史学会大会（慶應義塾大学）

	平成 29（2017）年 3 月	栄中日文化センター講座（栄中日文化センター）講義題目「西洋キリスト教における悪魔」
	平成 29（2017）年 8 月	太成学院大学オープンカレッジ（太成学院大学）講義題目「地獄と極楽の比較文化」
	平成 29（2017）年 11 月	科研費公開シンポジウム「魔女とマス・メディア―ヨーロッパ近世の他者のイメージをさぐる」（太成学院大学）
	平成 30（2018）年 2・3 月	和泉市生涯学習センター市民講座「地獄・妖怪・魔女―奇想の歴史学」、「西欧近世の驚異」（2 月）、「魔女のイメージ」（3 月）担当。
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許	平成 5(1993)年 3 月	中学校教諭一種免許状（社会）（平四中一め第二五五一号） 高等学校教諭一種免許状（社会）（平四高一め第二七七九号）
	平成 7(1995)年 3 月	中学校教諭専修免許状（社会）（平六中専め第一二七号） 高等学校教諭専修免許状（地理歴史）（平六高専め第一五六号） 高等学校教諭専修免許状（公民）（平六高専め第一五七号）
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項	平成 22（2010）年 5 月～平成	資格支援主担

	23(2011)年3月	
	平成23(2011)年4月～平成24(2012)年3月	資格就職支援主担
	平成24(2012)年4月～平成25(2013)年3月	資格支援主担
	平成25（2013）年4月～平成26(2014)年3月	人間学部資格支援主担
	平成26(2014)年4月～現在に至る	メディアセンター長
4　その他		
	平成28（2016）年4月～現在に至る	科研費・基盤研究C・研究代表者「近世のヨーロッパとラテンアメリカにおける社会的周縁者の創出とメディア」、平成31（2019）年3月まで
	平成30年3月27日29（2017）年4月～現在に至る	科研費・基盤研究C・研究分担者「（研究代表者：大沼由布（同志社大学））ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承－中東及び古代・近世との関わり」、平成34（2022）年3月まで
研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項		

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 東アジア恠異学会編『怪異学の可能性』:論文集	共著	平成 21(2009)年 3 月	角川書店	第 4 章「西洋中世史研究と怪異学 - 前近代史の共通言語を目指して」(246－263 頁)を執筆。本書は、東アジア恠異学会の研究論文集の二冊目である。
2 池上俊一編『原典：イタリア・ルネサンス人文主義』: 翻訳書	共著	平成 22(2010)年 1 月	名古屋大学出版会	第 6 章「フラーヴィオ・ビオンド著『イタリア案内』(抄)」(271－314 頁、ラテン語原典から日本語への翻訳）を翻訳担当。本書はこれまで日本で見過ごされてきたイタリア・ルネサンスの人文主義者の諸著作の翻訳集である。
3 黒川正剛『図説魔女狩り』	単著	平成 23（2011）年 3 月	河出書房新社	全 127 頁。西洋中世末から近世にかけて起こった魔女狩りの通史である。多くの絵画・図版史料を使用しながら、魔女狩りの歴史を説明したものである。
4 黒川正剛『魔女とメランコリー』	単著	平成 24(2012)年 3 月	新評論	全 366 頁。西洋近世に激化した魔女裁判を医学思想と他者認識に関連づけ、裁判激化と終息の過程が他者表象の変容過程と軌を一にしていること、その基盤にメランコリー概念の変容があったことを明らかにした。魔女表象は西洋内部の他者＝貧民と外部の他者＝インディオの他者性をこの概念を通じて一身に具現するものであった。近世西洋人の他者の問題、近代的世界観の誕生と魔女＝他者表象の関係を論じた。

5 白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』	共著	平成24(2012)年4月	人文書院	担当部分：第3章「呪術と現実（ﾘｱﾘﾃｨ）・真実（ﾄｩﾙｰｽ）・想像（ｲﾏｼﾞﾈｲｼｮﾝ）－西欧近世の魔女言説から」（113-148頁） 国立民族学博物館共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」の論文集。西洋史の立場（西欧魔女裁判研究の視点）から、人類学における呪術研究の重要問題である「呪術とリアリティ」について検討した。
6 黒川正剛『魔女狩り―西欧の三つの近代化』	単著	平成26（2014）年3月	講談社	講談社選書メチエ。260頁。魔女狩りの歴史に人間研究・人間文化研究の立場からアプローチしている。「視覚の特権化」「科学的自然観の誕生」「他者・周縁者の排除」の三つの近代化を軸に論を展開している。
7 山中由里子編『＜驚異＞の文化史－中東とヨーロッパを中心に』	共著	平成27(2015)年10月	名古屋大学出版会	国立民族学博物館共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相－中東・ヨーロッパを中心に－」の論文集。2論文執筆。 ①「ヨーロッパ中世の奇譚集」（113-127頁）を執筆担当。章立て：「はじめに」「1古代から中世へ―奇譚集の誕生」「2『皇帝の閑暇』における奇譚」「3『アイルランド地誌』 における奇譚」「4三大百科全書と奇譚」「おわりに」 ②「ヨーロッパ近世の驚異― 怪物と魔女」(348－362頁)を執筆担当。章立て：「はじめに」「1ヨーロッパ近世における驚異・怪物の増殖」「2驚異と自然」「3魔女言説における驚異・奇跡・魔術と自然」「おわりに」

8　池上俊一監修『原典ルネサンス自然学（上）』 翻訳書	単独訳	平成 29（2017）年 7月	名古屋大学出版界	アンブロワーズ・パレ『怪物と驚異について』の全訳担当。
（学術論文）				
1 短期大学生の職業決定と内定との関連性についての一考察	共著	平成 17(2005)年 3 月	『太成学院大学紀要』第 7 巻、27-37 頁	太成学院大学所属の小高恵・糸田千鶴との共著論文。短大生指導の経験から、職業決定において何が重要であるのかを調査資料とデータ分析から明らかにした。
2 近代初期イングランドにおける魔女・驚異・幻覚：W・パーキンズの悪魔学論文（1608 年）を手がかりに	単著	平成 17(2005)年 3 月	『太成学院大学紀要』第 7 巻、13-25 頁	近代初期イングランドの著名なプロテスタント牧師ウィリアム・パーキンズの悪魔学論文を解読することによって、当時の人々の現実・想像認識の関係を解読しようとしたものである。
3「怪異」の歴史学についての一考察	単著	平成 18(2006)年 3 月	『太成学院大学紀要』第 8 巻、33－48 頁	「あやしい」「ふしぎ」という語義を持つ「怪異」は、時代地域を問わず人間が経験する事象であり、歴史学の重要テーマであると言える。本論文は「怪異の歴史学研究」を遂行していくにあたり考えるべき問題について検討している。
4　16 世紀末イングランドの魔女信仰における「真実」－「使い魔」信仰にみる心性のありよう	単著	平成 19(2007)年 3 月	『太成学院大学紀要』第 9 巻、15－30 頁	近世イングランドの魔女信仰における「使い魔」信仰の真実性の問題を検討した論文であり、真実という評価が下される際の権力

				について論じている。
5　西欧近世における魔女・供犠・エロス	単著	平成20(2008)年3月	『太成学院大学紀要』第10巻、63－77頁	魔女裁判は、供犠の視角から人類学的・宗教学的に考察されることがあるが、ルネ・ジラールの所論でも実証的にこの問題を解明しているとは言い難い。魔女裁判が供犠として捉えられるかどうかを、16世紀フランスの大知識人ジャン・ボダンの著作を手がかりに実証的に検討した。
6　Witches and Imagination in the Late Middle Ages and Early Modern Europe	単著	平成21(2009)年9月	*Soyang Chungsesa Yongu: Journal of Western Medieval History* (The Korean Society for Western Medieval History) 26, pp.97-122	第7回　韓日西洋中世史研究集会 The Seventh Korean-Japanese Symposium on Medieval History of Europe （高麗大学校）における研究発表論文。西洋中世末と近世における「魔女と想像」に関する史料を解読し、比較検討したものである。
7　「呪術的実践＝ 知の歴史的諸相－西欧近世における魔女信仰の視角から」	単著	平成28(2016)年3月	『コンタクト・ゾーン』(京都大学人文科学研究所、京都大学大学院人間・環境学研究科）第7号.	京都大学レポジトリ、WEB公開。京都人類学研究会 7 月季節例会（2014年7月、京都大学人文科学研究所）におけるシンポジウム「呪術的実践=知の現代的諸相： 科学／医療／宗教／その他の実践=知との並存状況から」参照。
8　「表象としての魔女―図像と生成されるリアリティ」	単著	平成29（2017）年12月	『思想』（岩波書店）、1125号、6-29頁.	特集「魔女研究の新潮流」
（その他）				
1　（書評）宮松浩憲著『金	単著	平成	『歴史学研究』（歴史学	中世ヨーロッパ世界において、

持ちの誕生：中世ヨーロッパの人と心性』刀水書房、2004 年		17(2005)年 6 月	研究会)、第 797 号、74-76 頁	「金持ち」がそれ自体の階層としてどのような経緯と背景のもとに出現してきたのかを、言語学的研究と社会史的研究から解明しようとした書物である。歴史学研究会の要請で書評を執筆した。
2 （小論）「連載③怪談 考古学（アルケオロジー） 骨の巻 西洋編」	単著	平成 18(2006)年 1 月	『幽』（メディアファクトリー）、Vol.4、352－357 頁	西洋中世の「骨」にまつわる怪異譚を、『黄金伝説』等の聖人伝から解読している。
3 （学会口頭発表)近世イングランドにおける悪魔と幻覚の関係について	個人発表	平成 18(2006)年 9 月	日本宗教学会学術大会（関西大学）	宗教上の幻覚体験について、近世イングランドの悪魔・魔女信仰を題材にして検討した。史料に現れる幻覚と神と悪魔の相関関係を検討することにより、合理主義的懐疑思考に関わる近代的思考の芽生えについて明らかにした。
4 （学会発表要旨)近世イングランドにおける悪魔と幻覚の関係について	単著	平成 19(2007)年 3 月	『宗教研究』（日本宗教学会)、第 347 号 319－320 頁	上記 3 の発表要旨
5 （書評)Callum G.Brown,Post-modernism for Historians, Harlow, 2005	単著	平成 19(2007)年 3 月	『太成学院大学紀要』第 9 巻、251－260 頁	日本語訳『歴史家のためのポストモダニズム』。歴史学におけるポストモダン思想の問題を論じた書で、大学生向けのテキストとして著されたものである。
6 （事典項目）島薗進ほか編『宗教学文献事典』	共著	平成 19(2007)年 12 月	弘文堂	担当項目「バーストウ著、『魔女狩りという狂気』」298 頁。本事典は、宗教学を学ぶにあたっての読書案内書であり、全 849 文献が紹介されている。翻訳書の訳者として解説・執筆を担当した。
7 （学会口頭発表） 西欧近世における魔女・供犠・エロス	個人発表	平成 19(2007)年 9 月	日本宗教学会学術大会（立正大学）	項目「学術論文 5」参照

8 （学会発表要旨）西欧近世における魔女･供犠･エロス	単著	平成 20（2008）年 3 月	『宗教研究』（日本宗教学会）、第 355 号 187－188 頁	上記 7 の発表要旨
9 （学会口頭発表）迷信・呪術・魔術 －西欧近世の魔女言説から	個人発表	平成 21(2009)年 9 月	日本宗教学会学術大会（京都大学）	宗教学・民俗学において迷信あるいは俗信として訳されてきた superstition が西欧世界でどのように解釈されてきたのかを呪術・魔術との関連性から検討したものである。
10 （学会発表要旨）迷信・呪術・魔術 －西欧近世の魔女言説から	単著	平成 22 （2010）年 3 月	『宗教研究』（日本宗教学会）、第 363 号、434－435 頁	上記 9 の発表要旨
11（学会口頭発表）Witches and Imagination in the Late Middle Ages and Early Modern Europe	個人発表	平成 22 (2010)年 5 月	第 7 回 韓日西洋中世史研究集会 The Seventh Korean-Japanese Symposium on Medieval History of Europe （高麗大学校）	学術論文 6 を参照
12（学会口頭発表）聖女／魔女考 －西欧中・近世の魔女言説から	個人発表	平成 23(2011)年 9 月	日本宗教学会学術大会（関西学院大学） 『宗教研究』（日本宗教学会）、第 371 号、2011 年 3 月、pp.284-285	西洋中・近世社会の女性イメージは聖女と魔女の両極に分かれる。その理由と内実を中世末の文献史料と近世初期の図像史料を解読することを通して検討した。
12(学会発表要旨) 聖女／魔女考 －西欧中・近世の魔女言説から	単著	平成 24(2012)年 3 月	『宗教研究』（日本宗教学会）、第 371 号、2011 年 3 月、284-285 頁	上記 12 の発表要旨

13（調査報告）太成学院大学における資格取得対策の現状と課題―2010 年度経営学部・人間学部卒業生対象アンケートから	単著	平成 24(2012)年 3 月	『太成学院大学紀要』第 14 巻(通号 31 号)、227-239 頁	学生アンケートにもとづいた報告書。
14（学会口頭発表）魔女とバロック	個人発表	平成 24(2012)年 9 月	日本宗教学会学術大会（皇學館大学） 『宗教研究』（日本宗教学会）、第 375 号、2013 年 3 月、pp.164-165	魔女裁判が激化した 16 世紀後半から 17 世紀の時代はバロック時代でもある。本発表は従来の研究では無関係のものとして看過されてきた魔女とバロックの関連性を明らかにしようとしたものである。カトリック＝イエズス会の影響下に進められた反宗教改革とバロックの関係をふまえたうえで、17 世紀初めにイエズス会系フランス人裁判官によって著された史料を解読し、魔女とバロックの関連性を明らかにした。
15(調査報告) 太成学院大学における資格取得対策の現状と課題―2010 年度経営学部・人間学部卒業生対象アンケートから	単著	平成 25 (2013) 年 3 月	『太成学院大学紀要』第 15 巻(通号 32 号)、211-218 頁	学生アンケートにもとづいた報告書。
16(学会口頭発表)魔女と驚異と好奇心	個人発表	平成 26(2014) 年 9 月	日本宗教学会第 73 回学術大会（同志社大学） 『宗教研究』88 巻別冊、2015 年、185-186 頁	西洋中・近世における魔女信仰と驚異概念における「好奇心」のはらむ問題について検討したもの。
17（書評）森田安一著『木版画を読む：占星術・「死の舞踏」そして宗教改革』	単著	平成 26(2014) 年	『西洋史学』（日本西洋史学会）252 号、pp. 301-303	日本西洋史学会の依頼により、書評。
18 『「魔女」の世界史』	監修	平成 27(2015) 年 12 月	『別冊宝島』宝島社	全 111 頁。
19 （学会口頭発表）魔女とメディア―西洋近世キリスト教社会の他者表象	個人発表	平成 29（2017）年 9 月	日本宗教学会第 76 回学術大会（東京大学）	科研費研究の一部。

20 「想像界の生物相―ハイブリッドな悪魔」	単著	平成 29（2017）年 11 月	『月刊みんぱく』（国立民族学博物館）、11 月号、14-15 頁	「想像界の生物相」シリーズ。
21 （調査報告）「魔女とマス・メディア―ヨーロッパ近世の他者のイメージをさぐる」	共著	平成 30 年 3 月 27 日 30(2018)年 3 月	『太成学院大学紀要』、第 20 巻（通号 37 号）、225-235 頁	科研費公開シンポジウムの報告。

（人間）高橋　清

（様式２）教育研究業績書

教育研究業績書

平成 30 年　4 月　1 日

氏名　高　橋　　清　　印

研究分野	研究内容のキーワード
体育方法学・体育教育学	バスケットボール

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 大阪市内２ブロック選抜チーム　特別講師	平成 17 年 8 月	大阪市立中学校２ブロックのバスケットボール選抜チームにおいてクリニックを行なう。内容は、フンダメンタルを中心に、オフェンスにおいては、ディナイディフェンスに対してのボールのもらい方、４５度ポジションからの１対１、１対１からの合わせのポイントを実施させる。その後、スクリーン・イメージを行いゲームでの対応が出来ように指導する。その結果、2 ブロックは市内ブロック大会で優勝し、大阪市選抜に４名の選手が選出される。
人間学部スキー実習における学生指導	平成 19 年 2 月	本学、人間学部におけるスポーツ特別実技（スキー

		実習）の引率者として、参加学生に集団活動を通じて、基本的行動様式の修得を目的とした取り組を実施させる。実施内容は①時時間の厳守、②挨拶の励行、③規律る行動、④集団の意義の内容を修得させることを目的と実施する。当初、学生は、普段指摘されない事柄にとまどいもったが、時間とともに理解が深まり、個人及び集団の意識の向上が見られ、実習の目的の基本的行動様式の修得が出来た。
看護学部フレッシュマンキャンプにおける学生指導	平成 19 年 4 月 ～ 平成 21 年 4 月	平成１９年度より本学に新設された、看護学部の新入生対象のフレッシュマンキャンプに全体指揮として引率する。このキャンプの目的は、新入生の学生生活の導入の場として本学の教育方針の基盤となる、基本的な生活行動様式を身につけさせ、心身の健全な発達や保持増進などについての理解を深め、安全な行動や規律る集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資する指導法を体得させることでる。その指導法として習慣形成のための指導原則でる、反復性と徹底の原則を基本にし、同一性と一貫性の原則、早期性と先手必勝の原則を駆使し、参加学生に集団の一員としての自覚を持たせ、自主的・実践的な修学意欲を芽生えさせることが出来た。
人間学部スポーツ実践実習Ｌ（水泳）における取り組み	平成 19 年 4 月 ～ 継続中	スポーツ実践実習Ｌ（水泳・水中運動）において、自由形・平泳ぎ・背泳ぎ・バタフライの各泳法の基本姿勢、キックのポイント、ストロークのポイント、コンビネーションのポイント等の模範演技の画像を学生に見せることにより、自分が実際に泳ぐイメージを養わせることで、昨年度の実技授業よりも正確な泳法を習得させることが出来た。映像を用いることで、今後、指導者として特別教育活動、運動部活動の指導にも活用することの出来る内容でることを学生に理解させた。
人間学部新入生導入教育宿泊研修における学生指導	平成 21 年 4 月 ～ 平成 23 年 3 月	平成２１年度より、人間学部学生主事の辞令を受け、新入生の宿泊研修において、全体の学生指導を行う。目的は本学の教育方針を理解させ、４年間の目

		標の明確化と自覚の形成でる。そのために各研修前後で全学生に基本的な生活態度、規律、時間的制約の中での敏速な行動等の修得と自主性・協調性・忍耐力とマナー、エチケットに対する認識を高めさせることを具体的に説明し理解させた。
堺市地域スポーツ指導者研修における講師	平成 21 年 12 月	堺市地域スポーツ指導者研修において、発達段階に応じたスポーツ指導についてという演題にて講演を行う。内容は幼年期から青年期初期までを 5 段階に分けて、それぞれの年代における望ましい指導方法について説明をするとともに、指導上の注意点について説明する。それ以降の年代は、3 段階に大別し、その年代に対した運動・スポーツへの取り組み方、及び年齢に応じた身体上の変化などについて説明する。
堺市地域スポーツ指導者研修における講師	平成 22 年 11 月	堺市地域スポーツ指導者養成講座において、「スポーツプログラムの実際について」という演題で講演を行う。プログラムの導入として、イスブレイクの説明と体験を講習者行い、プログラムの作成について年間計画・月ごとの計画・週の計画・1 日の計画を具体的な事例と指導者が注意しなければならないポイントを説明する。
看護学部新入生導入教育宿泊研修における学生指導	平成 24 年 3 月 平成 25 年 3 月	看護学部の新入生導入宿泊研修の学生指導総括として引率する。このキャンプの目的は、新入生の学生生活の導入の場として本学の教育方針の基盤となる、基本的な生活行動様式を身につけさせ、心身の健全な発達や保持増進などについての理解を深め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資する指導法を体得させることである。その指導法として習慣形成のための指導原則である、反復性と徹底の原則を基本にし、同一性と一貫性の原則、早期性と先手必勝の原則を駆使し、参加学生に集団の一員としての自覚を持たせ、自主的・実践的な修学意欲を芽生えさせることが出来た。
人間学部新入生導入教育宿泊研修における学生指導	平成 26 年 3 月 ～継続中	人間学部の新入生導入宿泊研修の学生指導総括として引率する。このキャンプの目的は、新入生の学生生活の導入の場として本学の教育方針の基盤となる、基本的な生活行動様式を身につけさせ、心身の健全な発達や保持増進などについての理解を深め、安全な行動や

		規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資する指導法を体得させることである。その指導法として習慣形成のための指導原則である、反復性と徹底の原則を基本にし、同一性と一貫性の原則、早期性と先手必勝の原則を駆使し、参加学生に集団の一員としての自覚を持たせ、自主的・実践的な修学意欲を芽生えさせせることが出来た。
２　作成した教科書，教材 スポーツトレーニングⅡテキスト	平成 18 年 6 月	スポーツトレーニングⅡ（水泳・水中運動）のテキストを作成する。４泳法に関する基礎技術を中心とした内容の部分と、この授業は本学系列高校の施設を使用するため、移動におけるマナー、高校内での注意事項、プール使用における注意事項などを記載したものでる。その内容を学生に把握させ、実行させることで、郊外における授業での注意点、集団行動の必要性と調和のとれた心身の発達と個性の伸長及び自主的・実践的な修学態度を育成する指導法を学生にわかりやすく理解させることが出来た。
教育実習の手引き	平成 21 年 3 月	本学、人間学部人間文化学科にて取得できる、保健体育高等学校・中学校教諭一種免許状取得のための教育実習において独自のてびきを作成するにたり、学習指導案事例として体育編及び保健編を担当する。体育編はバスケットボールのパスに関する内容でる。保健編に関しては、さまざまな保健活動と対策に関する内容で作成し、事例として記載する。
教育実習の手引き改訂版	平成 26 年 2 月	教職課程検討委員会にて、各実習における手引きの見直しを行うこととなり、中・高における教育実習の手引きの改訂を担当する。追記項目として「実習生の立場」[特別活動における留意点」「学習指導案作りのポイント」を新たに加え、それ以外の項目においても、新学習指導要領に則した内容を追加する。さらに、新たに指導案を改訂するとともに、単位時間の指導計画の作成として「科目体育」・「科目保健」を新規に作成する。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 大学実施の授業ンケートによる評価	平成 20 年 6 月	本学では、各学期毎に授業ンケートを実施する。 実施項目は自分に対する評価、授業内容に対する評価、担当教員に対する評価でる。健康運動論の講

		義において前年度の評価を分析し、授業において学生が興味を持つ具体的な事例を毎時間、資料を作成し配布することにより興味を引く授業内容の項目で、前年度度より平均値で0.275ポイント上回る。授業の内容の理解度では、毎時間、小レポートを提出させることで、各学生の理解度を把握することができ、学生も内容を文章にまとめることで理解度も0.15ポイント上回る結果でった。
大学実施の授業ンケートによる評価	平成21年6月	前年度の授業ンケートの評価を分析し、今年度の健康運動論の講義において、学生がより理解しやすい授業ができる取り組みを行う。講義において、健康運動実践指導者用養成用実技指導ＤＶＤの映像を視聴させることにより授業のねらい目的について理解できたという項目で0.2ポイント上回る結果でった。
大学実施の授業ンケートによる評価	平成22年6月	本年度より、授業ンケートの方法、ンケート項目がかわり前年度と比較することは出来なかった。健康スポーツⅣの授業において４時間担当したが、総合的に見て、この授業を受けてよかったと思いますかのポイントが平均で1.725ったことは、学生が授業に対して満足した結果でった。
教員による相互評価の結果	平成25年7月	健康スポーツⅢの従業において、授業参観をされた教員より次のような評価を受ける。学生が授業の流れを理解し、自分達から動くようになってると思われた。学生が教員を信頼してるよう感じられる。指示の出し方、信頼関係の構築を含めた指導法のあり方について勉強になった。
教員による相互評価の結果	平成26年7月	スポーツ指導法Ｄの授業において、授業参観された教員よ入り次のような評価を受ける。グループディスカッションの祭に、グループで交わされている言葉を拾って適切に声がけや解説、質問の投げかけが、作業を進めるために上手な声掛けは必要なことだとよくわかりました。発表の祭には、発表者以外の他のグループの意見も聞いて解説を加えることで、クラス全体の注意を引きつけ、まとまった授業になってると感心しました。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 大阪市内２ブロック選抜チーム　特別講師	平成17年8月	大阪市立中学校2ブロックのバスケットボール選抜チ

		ームにおいてクリニックを行なう。内容は、ファンダメンタルを中心に、オフェンスにおいては、ディナイディフェンスに対してのボールのもらい方、45 度ポジションからの１対１、1 対 1 からの合せのポイントを実施させる。その後、スクリーン・イメージを行いゲームでの対応ができるように指導する。その結果、2 ブロックは市内ブロック大会で優勝し、大阪市選抜に４名の選手が選出される。
堺市地域スポーツ指導者研修における講師	平成 21 年 12 月	堺市地域スポーツ指導者研修において、発達段階に応じたスポーツ指導についてという演題にて講演を行う。内容は幼年期から青年期初期までを 5 段階に分けて、それぞれの年代における望ましい指導方法について説明をするとともに、指導上の注意点について説明する。それ以降の年代は、3 段階に大別して、その年代に対した運動・スポーツへの取り組み方、及び年齢に応じた身体上の変化などについて説明する。
堺市地域スポーツ指導者研修における講師	平成 22 年 11 月	堺市地域スポーツ指導者養成講座において、「スポーツプログラムの実際について」という演題で講演を行う。プログラムの導入として、アイスブレイクの説明と体験を講習者行い、プログラムの作成について年間計画・月ごとの計画・週の計画・1 日の計画を具体的な事例と指導者が注意しなければならないポイントを説明する。
はびきの市民大学　講師	平成 26 年 7 月	はびきの市民大学において、長寿社会における医療と健康づくりという講座の 2 回を担当する。1 回目は「中高年が身につけたい運動習慣」というテーマで体の動くをよくする 15 の習慣をを中心に説明をする。2 回目は「中高年の体に筋肉が付く運動」というテーマでストレッチと負荷の少ない筋力トレーニングを説明しながら参加者に体験する内容で実施する。
太成学院大学　オープンカレッジ　講師	平成 26 年 9 月	太成学院大学のオープンカレッジにおいて、中高年における健康効果についてと中高年対象の超簡単運動の実践について説明をする。健康効果においては「ロコモティブシンドローを説明し、運動の必要性と効果を実施する。超簡単運動の実践では、ストレッチと負荷の少ない中高年向けの筋力トレーニングについて体験する内容で実施する。
公開講座フェスタ 2014　講師	平成 26 年 11 月	阪神奈の大学・研究機関が知力を終結したリレー講座において、”簡単に誰でも”若々しくなる運動というテーマで講演を行う。筋肉量の減少と老化について説明

		を行い、年齢にあった運動（負荷が少なく、足腰の筋肉量の増加につながる）を中心に、室内でもできる方法を紹介する。
太成学院大学　オープンカレッジ　講師	平成 27 年 9 月	太成学院大学のオープンカレッジにおいて、中高年を対象とした「下半身の筋肉を鍛えよう」を題材に講義と実技を行う。講義においては「サルコペニア肥満」について説明し、下半身の運動の必要性について説明する。実技は、体育館にてストレッチ・下半身を中心ととした運動・体幹トレーニングを体験する内容で実施する。
５　その他 公開講義の実施について	平成 18 年 6 月～ 継続中	平成１８年太成学院大学着任以降、公開講義企画に毎年参加する。講座内容としては、健康と運動に関する事項、バスケットボールに関する事項が主な内容でる。 太成学院大学着任以降の公開講座は以下の通り。 ・兵庫県立明石高等学校出張講座 （平成 18 年 6 月 19 日） ・奈良県関西中央高等学校出張講義 （平成 18 年 11 月 7 日） ・京都府京都翔英高等学校出張講義 （平成 18 年 12 月 9 日） ・大阪府堺女子高等学校出張講義 （平成 19 年 1 月 18 日） ・奈良県関西中央高等学校出張講義 （平成 19 年 1 月 26 日） ・大阪府立東百舌高等学校出張講義 （平成 19 年 2 月 1 日） ・兵庫県立伊丹高等学校出張講義 （平成 19 年 12 月 19 日） ・大阪府立東百舌高等学校出張講義 （平成 20 年 1 月 31 日） ・大阪学芸高等学校出張講義 （平成 20 年 12 月 15 日） ・大阪府立北かわち皐が丘高等学校出張講義 （平成 21 年 6 月 11 日） ・大阪府立咲洲高等学校出張授業 （平成 27 年 1 月 23 日）

		・大阪府立美原高等学校出張授業 （平成 28 年 1 月 28 日） ・大阪市立桜宮高等学校出張授業 （平成 29 年 11 月 6 日） 学内での学外向け講義 ・大阪府此花総合高等学校講座 （平成 19 年 7 月 11 日） ・奈良県関西中央高等学校講義 （平成 21 年 11 月 25 日） ・奈良文化高等学校講義 （平成 23 年 10 月 6 日）
	平成 24 年 4 月 ～11 月	高大連携講座 併設校の太成学院大学高等学校、総合人間力 3 年生を対象とし高大連携講座を実施する。 （4／28.5／12.5／19.6／2.6／9.6/16.6/30.9/8.9/15 11/10.11/17.11/24）
	平成 25 年 4 月 ～6 月	・高大連携講座 併設校の太成学院大学高等学校、総合人間力 3 年生を対象とし高大連携講座を実施する。 （4/27.5/11.6/1.6/29　計 4 回）
	平成 26 年 4 月 ～6 月	・高大連携講座 併設校の太成学院大学高等学校、総合人間力 3 年生を対象とし高大連携講座を実施する。 （4/19.4/26.5/10.6/7　計 4 回）
	平成 26 年 4 月 ～平成 27 年 6 月	・高大連携講座 併設校の太成学院大学高等学校、全生徒を対象とし高大連携講座を実施する。(5/23)
	平成 29 年 6 月	・高大連携講座 併設校の太成学院大学高等学校、全生徒を対象とし高大連携講座を実施する。(6/3)

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
基礎スキー技能テスト 2 級	昭和 61 年 1 月	
保健体育中学校教諭一級普通免許状	昭和 61 年 3 月	
保健体育高等学校教諭二級普通免許状	昭和 61 年 3 月	

日本バスケットボール協会　　日本公認審判	平成 2 年 1 月	日本バスケットボール協会審判部が公認する審判資格でる。2 年 1 度の更新義務がり、基本的には所属連盟の大会における審判を行うが、各協会主催の大会には所属連盟以外での大会でも審判を行う。また、JBL、WJBL におけるテーブルオフィシャル、サブスコとして試合運営、データー処理も行う。
日本バスケットボール協会　　公認Ｃ級コーチ	平成 16 年 10 月	日本バスケットボール協会は 2002 年に従来の強化体制を抜本的に見直す「JBBA 改革 21」を策定し、その３本柱として①日本代表チームの強化、②指導者の育成、③底辺の拡大と選手育成・強化を掲げた。その一つの指導者育成の一貫としてコーチライセンス制度を設けた。資格取得には基礎理論、実技、指導実習等、計 20 単位の講習を受講。C 級コーチは、指導対象が 15 歳～18 歳を対象としたものでり、2 年 1 回の義務研修がる。
日本体育協会公認スポーツ指導者 公認バスケットボール指導員	平成 16 年 10 月	日本バスケットボール協会公認Ｃ級コーチと同様の内容でるが、指導対象年齢は１２歳以下でる。資格取得にたり、スポーツ社会学、スポーツ心理学。スポーツ経営学、スポーツ医学、スポーツ生理学、スポーツ指導論、地域におけるスポーツ行政等の内容について受講する。４年に１回の義務研修がある。
２　特許等		特になし
３　実務の経験を有する者についての特記事項 太成学院大学男子バスケットボール部部長・監督	 平成 19 年 4 月 平成 20 年 10 月 平成 21 年 10 月 平成 22 年 9 月 平成 22 年 9 月	特になし 関西学生バスケットボールリーグ戦 5 部 B リーグ　準優勝 関西学生バスケットボールリーグ戦 5 部 A リーグ　準優勝 関西学生バスケットボールリーグ戦 入れ替え戦の結果　4 部 B リーグへ昇格 関西学生バスケットボールリーグ戦 4 部 B リーグ　優勝 関西学生バスケットボールリーグ戦 4 部 A リーグへ

		自動昇格
	平成 23 年 10 月	関西学生バスケットボールリーグ戦 4 部 A リーグ　第 3 位
	平成 24 年 10 月	関西学生バスケットボールリーグ戦 4 部　第 3 位
	平成 24 年 11 月	関西学生バスケットボールリーグ戦 入れ替え戦の結果　3 部リーグへ昇格
	平成 25 年 10 月	関西学生バスケットボールリーグ戦 3 部 第 11 位 関西学生バスケットボールリーグ戦入れ替え戦の結果　4 部リーグへ降格
	平成 26 年 9 月	関西女子学生バスケットボールリーグ戦 5 部 第 3 位
	平成 26 年 10 月	関西学生バスケットボールリーグ戦 4 部 第 4 位
	平成 26 年 9 月	関西女子学生バスケットボールリーグ戦 5 部 第 8 位
	平成 26 年 10 月	関西学生バスケットボールリーグ戦 4 部 第 12 位
	平成 27 年 9 月	関西女子学生バスケットボールリーグ戦 5 部 第 8 位
	平成 27 年 10 月	関西学生バスケットボールリーグ戦 4 部 第 12 位
	平成 28 年 9 月	関西女子学生バスケットボールリーグ戦 5 部 第 4 位
	平成 28 年 10 月	関西学生バスケットボールリーグ戦 4 部 準優勝 関西学生バスケットボールリーグ戦 入れ替え戦の結果　4 部リーグへ昇格
	平成 29 年 6 月	男子第 67 回西日本学生バスケットボール選手権大会　ベスト 32
	平成 29 年 9 月	関西女子学生バスケットボールリーグ戦 5 部 第 7 位
	平成 28 年 10 月	関西学生バスケットボールリーグ戦 4 部　11 位 関西学生バスケットボールリーグ戦 入れ替え戦の結果　5 部リーグへ降格
4　その他		特になし
研究業績等に関する事項		

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 図説高校保健体育学習 2 3 ：	共著	平成 12 年 2 月	東京書籍株式会社	高校保健体育学習ノートの作成に携わる。保健編における第 2 章の「環境と健康」の分野において「環境と生態系」「生態系と健康」を担当する。キーワード及び基礎・基本の内容のチェック問題の作成、発展的な内容としてコラムの作成を行う。
（学術論文） 2007FIBA ジバスケットボール選手権における全日本チームのゲーム分析 バスケットボールにおけるリバウンドボールが勝敗に及ぼす影響 大学男子バスケットボール競技におけるゲーム分析	単著 単著 単著	平成 21 年 3 月 平成 22 年 3 月 平成 23 年 3 月	太成学院大学紀要 太成学院大学紀要 太成学院大学紀要	2007 年 FIAB ジバスケットボール選手権大会における全日本チームのゲーム分析を行う。その方法として、全日本チームのサブスコを利用し、試合のビデオを分析し、オフェンスをフストブレイクとセットオフェンスの 2 つに大別し、シュートを 4 種類の動作に分け分析する。また、試合の勝敗を分けるといわれるターンオーバーとリバウンドを試合開始より選定項目別に集計を行い、比較研究を行う。 JBL2008－2009 の男子プレイオフ・フイナ 4 試試合をビデオにて分析する。試合の勝敗を左右するといわれるリバウンドボールについて試合試合開始より両チームについて各ピリオドごとにオフェンスリバウンド、ディフェンスリバウンドについてそれぞれ比較し分析を行う。また、各ポジションごとに集計し、次のプレイにつながっているのか、試合の勝敗にどのような影響がるのかについて比較研究を行う。 2009 年度、関西学生リーグ 5 部 A リーグにおける太成学院大学を含めた上位 4 チーム 12 試合のゲーム分析を行う。オフェンスの攻撃形態が試合にどのような影響をおよぼすのかを、フストブレイク、セットオフェンスについてそれぞれ比較し分析を行う。ま

				た、セットオフェンスについては 5 種類の動作に分類し集計することで、各チームの特徴を分析し、本学の競技レベルの把握を行った。
大学男子バスケットボール競技におけるゲーム分析-2	単著	平成 24 年 3 月	太成学院大学紀要	3010 年度、関西学生リーグ 4 部Ｂリーグにおいて昨年と同様に太成学院大学を含めて、上位 4 チームのゲーム分析を行う。各チームのオフェンス形態について、フストブレイクを 3 種類に分けて分類し、セットオフェンスは 5 種類の動作に分類し、それぞれのチームについてオフェンスの特徴を分析し、比較を行った。それにより、本学の競技レベルの把握を行った。
バスケットボールにおける競技変更に伴う課題	単著	平成 24 年 3 月	太成学院大学紀要	2011 年度に変更されたバスケットボールの競技規則について、健康スポーツⅢを履修した学生を教職履修者と全体で比較し、分析を行う。コートに関する内容では、制限区域とスリー・ポイント・ラインの変更に関しては高い数値を示したが、ノー・チャージ・セミサークルの追加に関しては低い数値を示した。時間に関する内容の 24 秒ルールの変更に関して低い数値を示した。
大学男子バスケットボール競技におけるゲーム分析-3	単著	平成 25 年 3 月	太成学院大学紀要	2011 年度、関西学生リーグ 4 部 A リーグにおいて昨年と同様に太成学院大学を含めて、上位 4 チームのゲーム分析を行う。各チームのオフェンス形態について、ファーストブレイクを 3 種類に分けて分類し、セットオフェンスは 5 種類の動作に分類し、それぞれのチームについてオフェンスの特徴を分析し、比較を行った。それにより、本学の競技レベルの把握を行った。
大学男子バスケットボール競技におけるゲーム分析-4	単著	平成 26 年 3 月	太成学院大学紀要	2012 年度関西バスケットボールリーグ戦 4 部リーグにおいて太成学院大学の「攻撃回数」、「2P ゴール成功率」、「3P ゴール成功率」、「リバウンド獲得数」、「ターンオーバー数」について分析を行う。その結果として現れた数値によりチームとしての特徴が明確になった。また、チームとしての課題も明確となり、今後のチームとしての目標設定も明確となった。

大学男子バスケットボール競技におけるゲーム分析-5 （その他） 1 2 3 ：	単著	平成 27 年 3 月	太成学院大学紀要	2013 年度関西バスケットボールリーグ戦 3 部リーグにおいて太成学院大学の「得失点率」、「攻撃回数、「2ｐゴール成功率」、「３ｐゴール成功率」、「リバウンド獲得数」、「ターノーバー数」について集計し分析を行う。その数値により、チームの特徴および課題が明確となり、今後の課題が明らかになった。

（人間）金杉　高雄

教　育　研　究　業　績　書

平成　28 年　3　月　1　日

氏名　金杉　高雄　印

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
1　教育方法の実践例 (a) 双方向的授業の試み	平成 14 年 4 月 11 日～現在	学生が既に習得している知識と講義での新知識との組み合わせることで、より体系的な知識として定着させることを目的としている．そのためには教員が一方向的に知識を提供するだけではなく、学生が既存知識を基礎に考えることが必要不可欠となり、その考え、意見をクラスの中で公表することになる．このような授業パターンを試行することを通して双方向的授業を実現した.この双方向的授業の予想できなかった側面は、学生が想像以上に自分独自の意見、見解を自信を持ちつつ公表することである．今までに、一般的に受け入れられている意見に対しても、必ずしもその一般論に捕われることなく主体的に自分の意見を公表する姿勢が見られることは指摘するに値する．当然、その水準には個人差が認められるものの授業に対する積極性が向上

		することは感じ取れる．また､このような授業パターンを継続することは学生が要求する授業レベルの引き上げにも通じることである．その所以は満足のいかないレベルのテキストを提示しても、集中力が上がらない点で分かる.当該授業の中で学生からのフィードバックを得ることは学生自身の理解度を即座に把握することが可能となる.一方では学生の目線に合わせた授業を可能にすることにつながる．この点は重要で､学生のレベルに応じた授業を行うことができるからである．双方向的授業の試みでは予想以上の動機付け効果があると認めることはできるが、その最大の要因は総括的に述べるとすれば教える授業から考える、学ぶ授業への転換にあると思う．
(b) アセンブリー・アワーの実施 (授業時間帯以外における個人指導の充実と人物把握の試み)	平成14年4月 10日～現在	授業では双方向的な教育方法の実践が益々必要となってくるが、果たして問題は決められた授業の時間帯以外では学生とのコミュニケーションは希薄になってよいのか、という疑問が残る．場合によっては、授業を離れたときの教員と学生とのコミュニケーションの方がより重要で親密になることが多々ある．各週 1 回の割合で教員と学生との間のコミュニケーション不足を補うことを目的としたアセンブリー・アワーでそのコミュニケーション不足を補足をすることが可能になっている．従来のオフィス・アワーに該当するアセンブリー・アワーでの教育上の指導効果として顕著であることは単位の修得率が極めて高くなったことである．単位の修得率とこの時間との関係は直接、教員が学生に向けて授業を通してどれだけ学生が努力し、知識を習得したかを図る一つのバロメーターが単位の修得という形となって表れる、という私、個人的な見解と経験を述べて、学生に単位修得に向けての動機付けをすることができた結果であると考える．全国的に､一般論として、学生に対する個人指導の必要性が高まっている．授業時間内だけでもそれ相当の個人指導が可能であるが、昔と現在の学生気質が異なるからより多くの個人指導の時間を設ける、というよりは、むしろ昨今の学生気質の問題ではなく、今も昔も教員と学生との関わりは人間と人間との関わりに他ならない．そうである

		からには両者の間にはより多くのコミュニケーションのための時間が必要とされるのは当然のことであると、考える．文部科学省の答申等でよく言及される事柄に学生気質の変化とあるが、個人的には冷静に見てみると、コミュニケーションのとり方が分からないだけで、気質は昔と変化していないと思える．ただし、学生気質の変化がコミュニケーションのとり方が分からないことに還元されるという考え方もあるかもしれないが、今の学生がコミュニケーションのとり方が分からないのであれば、教員側からそのやり方を指導すればよいので、教員側が自然に接すれば学生側も自然に接するようになるのは確かなことである．このような、授業ではなかなか実現することが難しいような事柄を個人指導を含めて、アセンブリー・アワーでその実現を試みている．3 年次生になると、卒業後、社会人としての意識をより鮮明に各自が持たなければならないと考える．教育上の指導が大切なことであると、同じように就職への意識を再認識させることをより重きにおいたアセンブリー･アワーでの指導はより効果的な結果を齎したといえる．アセンブリー･アワーでこのような内容のことを奨励して以来、学生が就職活動への取り組みを例年になく早く始めている様子がうかがえる．
(c) 学習意欲を向上させる試みとしての知識と情報の提供	平成 14 年 4 月 11 日～現在	授業の内容に入る前置きとしての話にはかなり重点的に毎回欠かさず、行った．この科目を受講するに当たっての学習意欲と目的意識を維持させることとさらなる向上を目指して科目との関連性の深い知識としての情報を新聞、雑誌あるいはメディアの記事を紹介しながら、10 分程度、各回の授業テーマにそくして実施した．前置きをせずに、いきなり、本題のテキストへ入る授業形態と比較すると、集中力と教員の話に対する注目度が愕然と向上する．何のために授業へ出席してこの科目を履修するのかを実例を紹介しながら認識させることを目標にすることは、学生側にとっても無意識ではあると思うが頭の中にある目的意識を鼓舞させるのに良い刺激剤となり質問、課題への集中力が向上する．このような実践の試みは授業を離れての時間帯で、例えば家庭での生活の中で科目に関連する情報が頭の中へ入ってくると相乗効果的に授業内容もしくは科目に関わることを想起させることに繋がる．このような知

		的刺激は前知識を所有している場合とそうでない場合とでは格段に前者の方が効果的に作用する．家庭学習での効果的な導入の方法論としては何気ない余暇の時間に知的刺激を受けることの方がより強い印象を受ける傾向にある．授業前のこの導入的な知識と情報の提供は家庭学習及び友人との何気ない余暇の時間帯においても、学習に対する目的意識を維持することと会話の話題として取り入れられることを希望するところが含まれる．
(d) 学生へのフィード・バックのためのテスト返却とその解説．	平成 14 年 4 月 11 日～現在	１期間での学習とその成果を問うことは極めて大切な作業と考える．学期の節目あるいは期末に行う課題及びテストの成果は学生各自がどのレベルまで到達することができたかを再認識させる機会を与える．学生各自が自分の成績を知る手段はそれぞれあるが、授業でのテストの返却は解説と同時にかつ学生全体に渡って一度にできることから合理的であると考える．自分の答案を見て、出来具合が分かるこの作業は各学生にとっては欠かせない学習の到達度把握の一手段となり得る．テスト返却とその解説を実施することを通して､学生の反応は教員側が想像している以上に熱心であることに気付かされる．テストの隅々まで分かるように細かい解説を求められることがよくある．一通りの解答例とその解説を提示するだけでは学生側としては不満であるようで、解答例も可能であれば複数提示するように心がけた．結局､テスト返却のための時間は学生側にとっては今後、いかに勉学を積み重ねて行くかという、指針を今現在の成績と問題への取り組み方の要領をより確実に習得しておきたいという気構えがヒシヒシと感じられる．テスト返却とその解説も学習することの動機付けとなることは間違いがなく、より学生自信が主体的に授業へ取り組むきっかけとなり得る．
(e) リメディアルクラスの実施	平成 14 年 4 月 11 日～現在	学生が授業内容を理解するする程度には個人差が付いてまわる．授業では重要な情報提供と相対的にそうでない情報とがある．この重要な部分を理解せずに授業期間を終了することは授業実施の意味がほぼ無くなってしまうみ等しい．リメディアルクラスではこの重要な知識の提供となる空白部分を作らないために、その埋め合わせをする目的での補習授業を実施した．授業

		には殆ど欠席することはないが、成績はそれに伴って向上することが困難なケースがある．このクラスでは前半に課題練習を行い、後半ではその課題と同じ内容の問題を行う取り組みを試みた．同じ問題を繰り返し、なおかつ独力で解くことによって、忍耐力の向上と自信の回復を目指すのが大きな目標となる．一般的に学力が低下しているので補習授業を行う必要性が高まっている、と言われているが学力の低下だけに責任を押し付けるのは少々､やり過ぎのように思える．可能な限り学生の興味に担う授業内容から連続する補習授業がより一層、望まれると考える．補習授業であるから、といって基本的な演習問題に留める必要はない．基本的な問題を理解した後ではその応用問題も多く解くように奨励をした．補習授業ということもあって集中度は正規の授業よりも高くなってくる．1、2 回の補習授業ではすぐには教員側が設定している水準までへの学習効果が表れないが、たとえ 1 回の補習授業であってもある程度の水準までの学習効果が著しく向上することは事実として報告するに値する．この他､補習授業を通じて得た事柄は該当する学生が応用問題に対してより積極的に取り組むことである．時間をかけて基本事項を理解させることができなければこのような積極性が出てこないと考えられるので、お互いが焦らずに取り組む必要性を感じた．
(f) 学生閲覧用ホームページの開設	平成 16 年 4 月 1 日～現在	授業を受けて学生側が何らかの達成感及び付加価値を獲得することは、学習意欲の向上と動機付けに繋がる．授業の付加価値を持たせる一つの手段は資格習得である．授業中にかかわらず､授業以外の時間帯においても情報を得ることができるように、担当授業科目に関連する資格習得について、その資格の種類と実施日を開設したホームページを見て認識できるようにしている．また模擬試験問題の紹介もおこなっている．この模擬試験問題を見ておくことも授業に対する動機付けの一環になると考えている．学内に複数存在する情報コンセントより､即座に閲覧することができる．このホームページの利点は最新の情報を掲載することで、学生に何らかの情報提供ができることである．以外とホームページを閲覧する学生はかなり多い．さらに日々の学習以外で、学生に最も身近な事柄となれば就職関係で

		ある．就職活動の主体は学生であり、それを支えるのが大学の当該機関であるが、それらに加えて、ホームページに就職状況を掲載することは就職活動への意欲を高めるためには、一つの効果的な手段となっている．就職内定が決定した学生の氏名を本人の許可を得てホームページに掲載することで、他の学生にも刺激と自信を与えることができる．現実にホームページに掲載することにより、それ以降学生の就職活動が活発になっていったことは事実である．また、ホームページに担当教員の経歴及び様々な情報を掲示することで、学生と教員との距離がより近くなることの効果を促すと思われる．授業外での学生とのコミュニケーションをより円滑にすすめるための適切な情報にもなり得る．このような授業外での蓄積が授業環境の向上へと結びつく．ホームページでは主に担当教員に関する情報と学生生活及び卒業後の進路について学生に刺激を与えることを目的に開設をした．
(g)ニュージーランド海外研修の引率と指導	平成 9 年 8 月 23 日 ～ 平成 9 年 9 月 13 日 平成 11 年 2 月 13 日 ～ 平成 11 年 2 月 28 日 平成 18 年 8 月 26 日 ～ 平成 18 年 9 月 15 日 平成 19 年 8 月 25 日 ～ 平成 19 年 9 月 15 日	国内のみならず、海外での語学学習はこれからの英語教育ではより重きに置かれるべきである．その重要性を学生自身に理解させることは実際に体験させることが肝要である．2011 年から小学校での英語学習が義務化されることが決定した現状を考えると、文部科学省は早期から、日本国民をグローバル化に通用する真の国際人に育成する試みがうかがえる．この研修に参加した学生に変化が見えるのは修了後の雰囲気である．全ての参加者に該当するわけではないが、3 週間という時間を英語に苦労、生活習慣の相違に戸惑い、またそれらを学習しながらも、3 週間という時間を乗り越えた充実感が自分自身に対する信頼感としてフィード・バックされているのが見て取れる．海外での社会勉強を終えて、心身共に大きく成長する姿が現地にいる引率担当の教員からは生き生きとしたそのプロセスを目の当たりにする． 研修の成果として、特に感銘を覚えてのは上記以外に看護学部の学生が現地の医療機関を特別に見学することができたことである．日本と現地との医療システムの類似点と相違点を実際に見て、大きな収穫をその学生たちは得ている．

2　作成した教科書・教材		
(a)『新しい視点から学ぶ言葉と文化』(共著) (英宝社)	平成 12 年 8 月 1 日	執筆担当部分は unit 4 と unit 6 である．学生の側に立って、学生が主体的に授業へ臨めるようにするために、演習問題を中心に構成されている．特色は著者の外国での経験を基にテキストが構成されているので日本国内では理解できないような異なった文化をも演習を通じて学習し、理解ができるようになっている．異文化理解に加えて、現代における様々な出来事を政治、経済そして文化・慣習の面から多角的に説明を施し、それに関わる演習問題を通じて理解した内容を確かな知識とすることができるように配慮されている．単なる英語の文法知識、発音の学習に留まらず、グローバル化の時代に則した国際人として通用することができるように、それぞれの内容を英文読解とリスニングとによって演習することができる．なお、英文は中級程度に留めている．
(b)授業用教材自作プリント	平成 17 年 4 月 11 日 〜 現在	(a) 該当科目：英文法概論 1 年次生配当の科目であり、春夏期のみの開講であることから高等学校 3 年間の総復習が中心となっている．学習のねらいは高等学校までの文法事項で最も重要な項目を特に学習の対象としている．また、TOEIC 問われやすい問題を演習形式で時間を決めて、毎回演習をし、誤った部分を重点的に再演習することにこころがけた．その結果、実力を本来備えている学生の成長は顕著ではあったが、基礎力が十分ではない学生にとっては到達度の相違もあって、もう少し教員の側が工夫を凝らす必要性を感じている． (b) 該当科目：ビジネス英語応用 テキストの学習内容に関連したプリントで、テキストだけでは不十分な部分を補うことを目的としている．テキストは比較的基本を充実させるために選定されていることから、プリントはかなり水準が上げられている．プリントでの使用言語は英語で、日本語は使用されていない．トピックとなっているのは前置詞である．前置詞の基本的な使用方法からより抽象的な意味の発展に至るまでを演習問題を通じて理解し、学習できるように配慮されている．この演習問題は独自に作成す

		ることが可能であったことから、TOEIC で頻出となっている重要な単語、語句に対応できるように構成されている. (c) 該当科目：世界の言語 市販のテキストは使用しないために、プリントは全面的に自作となっている. プリントはテキストの補助的な存在ではない. グローバル化の時代に適応させるために世界の各地域での言語を考察する構成になっている. 導入部は言語の発生と発達に深く関わる問題として各地域の文化について触れている. さらに、言語間の相互関係、世界の各地域に見られる言語の多様性、そして各大陸ごとに細かく言語の発生と発達を考察している. 内訳はヨーロッパ、ユーラシア、南アジア、東南アジア、アフリカ大陸、中東地域、太平洋地域、オーストラリア大陸そして南北両アメリカ大陸である. (d) 該当科目：英語学概論 市販のテキストは使用しないために、プリントは全面的に自作となっている. プリントはテキストの補助的な存在ではない. グローバル化の時代に伴い、世界の共通語となりつつある英語をその起源にまで遡り、現代英語にまで至る歴史的発展についての説明を自作のプリントによることで、演習の形式を取り入れて実施を試みた. 常に、学生が受身の授業ではなく、受講生が主体的に授業へ参加できるようにプリント作成に配慮した. 自作プリントの有用性は既版の一般書に比べると、最新の動向と発見をプリントに盛り込むことができる点にある. さらに、プリントの性質上、学生の意見を取りいれて授業を進めることが可能であったので対話中心の双方向的な学習環境を作り上げることが可能であった. (e) 該当科目：オーラルコミュニケーション I. II スピーキングでは極めて基本的な単語を正確に聞き分けることを最優先しながら演習を行った. 基本的な部分のリスニングの後、プリントと効果的に視聴覚機器を併用しつつ、学生の理解度を確認することができるようにプリントでは問題の程度を段階別に作成している.

		(f) 該当科目：英語史 英語の起源に始まり、フランス語のブリテン島支配そして英語の復権を語彙、音韻、統語、意味、形態の様々な分野から解説を試みるために、可能な限り最新の研究情報を取り入れるプリントを作成している．言語変化の研究分野は他の科学の領域と同じく、新しい発見には敏感に対応しなければならない．その目的からもプリント教材にして、そのような学会等の動向に対応できるようにしている．
3　当該教員の教育上の能力に関する大学等の評価		
学生による授業アンケート評価	平成14年4月 11日～現在	実施科目は「ビジネス外書購読 I, II」、「英会話中級 I, II」、「英会話上級 I, II」、「ビジネス英語基礎・応用」、「世界の言語」、「英語学概論」、「英語史」、「英文法概論」、「オーラルコミュニケーション I, II(再履修)」である．今までのアンケートの結果、相対的に安定して高い評価を受けた項目は質問事項のそれぞれ「Q 11：担当教員の話し方は論理的でわかりやすかったと思いますか」と「Q 12：授業の進め方はまとまりがあって一貫性があったと思いますか」であった．また、「I, II」類の該当科目を通して評価の改善が見られたのは、各項目について、春夏期よりも秋冬期の方であった．この点で特に顕著であった項目は「Q 7：興味を引く授業内容であったと思いますか」であった．
4　その他		
オープンキャンパスでの研究室の一般公開 内容 1．英語教育でのビジネス英語 2．言語変化、英語の歴史	平成16年7月 平成17年7月 平成17年8月 平成18年8月 平成19年8月	現在の大学での教育内容についての紹介を行った．中心となるのは英語教育で特にビジネス英語が英語教育の中でより実用的な分野として重要視されてきている点、及び日本と欧米諸国との間でのビジネスに対する考え方の類似点と相違点を踏まえた説明を行った．また資料として海外のニュースサイト、例えば、CNN, FOXから最新の記事を入手して簡単な解説を行った．最近の一般公開では、英語の歴史を基本的な段階からより複雑な段階に至るまで、パソコンで図と表を示し

		ながら解説を試みた．英語に興味を持ってもらうことが第一の目的であるが、質問を受けることが多く予想以上に反応はポジティブである．説明が進むにつれて内容も必然的に込み入ってくるので、説明する手段とその工夫が常に要求される．
(b) TGU ランチョンセミナー 題目:言語に反映される主体の視点	平成 16 年 6 月 30 日	学内で月に一度の割合で開かれる研究会．各教員が従事している研究テーマについて発表をする機会である．この研究会の主たる目的は研究分野はそれぞれ異なるものの、最新の専門知識をそれぞれ共有しておくことである．言語と文化との関係は深い関連性があるので数々の研究が既に成されてきている．当日の発表内容はこれから将来へ向けての言語学という名目で言語学と心理学との接点はどのような部分に認めることができるかを実例を紹介しながら図説と解説を交えながら考察を試みたものである．言語研究は今後､多分野にわたって様々な視点から研究される可能性を示した．
[社会貢献] はびきの市民大学講座 テーマ：民衆の歴史と文化― グローバル英語とは何か?	平成 27 年 6 月 17 日 (水)	「リンガフランカとしての英語」という言葉がある。この言葉には英語を母国語としない人々がお互いにコミュニケーションを取るための「英語」という意味が含まれている。現代の英語は国境を越えたボーダーレスな共通語として認識され，グローバル化されている。このようなグローバル英語が誕生した経緯を紐解くために，ブリテン島の諸民族による移住と征服の歴史を振り返り，今日のグローバル英語がここまで発達してきた要因について考えるものである。

著書・学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1. 英語学用語辞典	共　著	平成 10 年 8 月	三省堂	英語学の分野から重要となる専門用語を選定し、英語学の研究者及び学習者用に出版された解説書.
2. A Pragmatic and Functional Pressure in the Pronominalization of Relative that：17 th International Conference on Historical Linguistics: Conference Book	単著	平成 17 年 7 月	John Benjamins/Amsterdam・Philadeliphia	関係代名詞 that の機能について、歴史的に調査・研究を試みている。論点となるのは指示代名詞から関係代名詞への語用論的変化である。
3. A Reanalysis Completed and in Progress towards Fully Structural Extension: 10 th International Cognitive Linguistics Conference: Book of Abstracts-General Sessions	単著	平成 19 年 7 月	John Benjamins/Amsterdam・Philadeliphia	動詞と前置詞の結合度は熟語の高いレベルから、容易に分離できる低いレベルにまで、カテゴリー化できる。その結合度を歴史的そして認知的に考察を試みている
4. 書評「概念化と意味の世界―認知意味論のアプローチ」英語青年 10 月号	単著	平成 19 年 10 月	研究社	認知意味論の中核となる「概念化」について、豊富なデータに基づいて、言葉と心の仕組みを多彩な視点から論じている。
5. 「ゲシュタルト構造の段階的分析可能性」言葉と認知のメカニズム―山梨正明教授還暦記念論文集	単著	平成 20 年 3 月	ひつじ書房	語彙と語彙との結び付きは時代、時代によって、その結合度が異なるという非常に興味深い現象である。最も歴史の長い語彙と語彙との結び付きも持つ場合では、表面的にば語彙の意味だけからは予測

9. 日本語大事典	共著	平成 26 年 11 月	朝倉書店	言語学の分野から 18 項目の専門用語を解説している。
（学術論文）				
1. A Historical and Semantic Study of Preposition Stranding	単　著	平成 7 年 3 月	京都外国語大学外国語学部英米語学科	学位論文(文学修士)である．疑問文で前置詞をどの位置に置くことが可能であるかを前置詞の歴史的な個々の特性を調査することにより意味論的考察を行った．使用言語は英語で枚数は 78 枚である．
2. Preposition Stranding: A Cognitive Account of Multiple Foci	単　著	平成 14 年 12 月	言語科学論集第 8 号（京都大学)	「前置詞残留」の現象を従来の統語論の立場のみではなく、新たに心理学の知見を様々な角度から取り入れて認知意味論の立場からこの現象の考察を試みた.使用言語は英語で枚数は 11 枚である．
3. A Cognitive Exploration of Coordinate Structures	単　著	平成 15 年 10 月	KLS 23 (関西言語学会)	英語の等位構造制約について認知意味論の立場から分析を試みた．また、この現象に対して新たな考察方法を提案し検証を試みた．
4. Cognitive Factors in Categorization of Focus Structures	単　著	平成 16 年 9 月	日本認知言語学会論文集第 4 巻 (日本認知言語学会)	Wh-疑問文に付随する前置詞が文末に残ることができる現象は英語の歴史においてはそれほど古いものではないことを検証した上で、この構文がいかにある地域の中で慣習化され定着されたかについて歴史的に考察を試みた．使用言語は英語で枚数は 11 枚である． .
5. A Historical Extension of Relativizers in	単　著単著	平成 17 年 9 月	日本認知言語学会論文集第 5 巻 (日本認知言語学	

5. A Historical Extension of Relativizers in Acceptability of Preposition Placement	単　著	平成 17 年 9 月	本認知言語学会論文集第 5 巻 (日本認知言語学会)	前置詞と関係詞節構文との関係においては、that-関係詞がその直前に前置詞を置くことが可能な認知環境は現代英語では今のところ存在しない．このような認知的な原
6. 歴史的機能漂白による関係詞の選択	単　著	平成 18 年 3 月	言語科学論集第 11 号 (京都大学)	因を wh-関係詞との比較を通して歴史的に考察を試みた．使用言語は英語で使用枚数は 11 枚である．現代英語では関係代名詞と呼ばれているものは様々ではあるが、その中でも指示詞から意味・機能拡張された、関係代名詞、*that* についてその起源から現代に至るまでの重要な過程を他の疑問代名詞起源の関係代名詞と比較しながら考察を試みている．
7. 言語科学考察における哲学的意		平成 19 年 3 月	太成学院大学紀要第 8 巻	言語変化は認知主体が身体を環境に投入することから引き起こされる．ハイデガーの「存在と時間」が言語学に提供する哲学的意義は言語変化を動機付ける要因となる．この哲学思想から言語変化を捉えてみると、変化を遂げる時間、認知主体の存在そして、その後に現れてくる想像力の 3 要素によって変化は完遂される．
ii)焦点構造のカテゴリー化に及ぼす認知的要因		平成 14 年 10 月	関西言語学会	英語の等位構造制約について認知意味論の立場から分析を試みた．また、この現象に対して新たな考察方法を提案し検証を試みた
(iii) 前置詞定位の容認可能性に関わる関係詞の歴史的発達		平成 15 年 9 月	日本認知言語学会	関係詞節構文と前置詞との関係について歴史的に考察を試みた．この構文においては注目される部分は wh-関係詞と that-関係詞との際立った統語上の特質である．その統語的特質について歴史的事実を取り入れながら新たな知見に基づいて分析手法の提案を試みた．

(国際学会) 題目				
(i) Intrinsic Attention to Trigger the Orienting Reflex in Language Understanding		平成 17 年 1 月 (於：京都大学)	International Symposium: New Perspective in Affective Science (国際シンポジウム：New Perspective in Affective Science, 21 世紀 COE 京都大学心理学連合)	言語の産出と理解を考察するときに必然的な心理的要素としては聴覚器官からの刺激による神経系統への反応でる．よって、言語の産出と理解に関わる現象を刺激に伴う条件反射との関係から新しくその考察方法を提案したもので
(ii) A Pragmatic and Functional Pressure in the Pronominalization of relative *that*		平成 17 年 8 月 (於：ウィスコンシン大学(米国))	17th International Conference on Historical Linguistics (第 17 回国際歴史言語学会)	関係詞の代名詞性について歴史的な発達過程を考察を試みた．さらに、現代英語における関係詞の代名詞としての機能について認知意味論の立場から語用論と歴史的観点から新たな分析を試みた．発表での使用言語は英語でる．
(iii) A Reanalysis Completed and in Progress towards Fully Structural Extension		平成 21 年 7 月 (於：ヤギロニ大学(ポーランド))	10 th International Cognitive Linguistics Conference (第 10 回国際認知言語学会)	動詞と不変化詞との組み合わせについてその成立の過程を認知的な観点から分析を試みた．コーパスによる分析の結果、動詞と不変化詞との結合の強度は使用頻度と結合への歴史的拡張のプロセスの長短に依存していることが判明した．また、認知主体によってもその結合度には段階性が認められることも明らかになった．

教　育　研　究　業　績　書

２０１５年　４月　１日

氏名　笠　井　　昇　印

研　究　分　野	研究内容のキーワード

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例	2004年4月～2015年3月	「日本の文学」では、日本の古代の歴史風土と文学などについて、ＮＨＫの教育テレビなどを教材化し、視覚に訴えながら、講義をしている。又市販のビデオも許可を得て教材として使用した。具体的にはシラバスに載せたように「文学の発生」から「藤原京の文学」まで、各テーマごとにまずそれらの歴史的背景の説明に力をおくために、テレビ等の歴史関係の「ビデオ学習」から出発した。そして、文学の発生の歴史的風土を説明することから学生の興味を喚起しつつ後続の概ね２時間にわたる「神話」「万葉集」等の講義に連結させていく、といった方法である。 それぞれの回のビデオ学習については授業の終りにリアクションペーパを書かせ、毎回平常点に組み込んだ。このことによって、居眠り学生はいなくなり、授業態度は各段によくなった。 「文章作成法」では、基本的な事項を講義した後、実践に入るわけだが、「範例」（模範文）を提示してそれに「なねぶ」方法で、理想的な文章の何たるかを自覚させ、今後の文章作成の一助とするべく指導した。何度も書き直しているうちに集中力が養われ、結果には大変な達成感がもたらされたようである。

2　作成した教科書，教材 1『ｷｬﾘｱｱｯﾌﾟ国語表現法』 （４訂版）～（13 訂版） 2『キャンパスライフ−入学から卒業まで−』	2004 年 3 月 ～平成 2014 年 3 月 2013 年 3 月	今回の改訂版も、私語が多くなりがちな講義のみの授業形態をやめ、実践的興味をもたせるという意味で、講義のあと実践問題をこなさせる内容のものとした。又この形の教科書は予習復習という家庭での学習にも資することができる。 本学の「表現入門」ではこれを使用している。 内容については「著書」欄「１」を参照されたい。 初年次教育の教材を作成出版した。内容は「研究業績等に関する事項」欄の（その他）9 参照
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 高等学校教諭１級普通免許状（国語）　昭和５１高１普１９８５号	1976 年 3月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 南大阪大学教務副部長に就任 大阪短期大学教務副部長 兼務を兼務する	1999 年 4 月	大学・短大において、主として入学試験にかかわって、学生募集等の立案・活動に従事した。
大阪短期大学教務部長に就任	2000 年 4 月	短期大学における年間教育活動の計画立案や入学試験にかかわる募集活動等、教務全般についての仕事に従事している。
太成学院大学人間学部教務部長に就任 教職課程長、入試部長を兼務する	2003 年 4 月	人間学部の教育内容にかかわる年間計画等、短期、長期両面の視野に立った教育活動案の作成、あるいは成果をまとめ、教職課程を履修する学生や担当教員をとりまとめた。なお入試、学生募集についても入試委員会等で立案実践等にかかわ

		った。（平成 21 年 4 月まで）
学園企画室付学務室長	2008 年 11 月	学長・副学長を補佐し、大学の教学面や事務業務など教職員全般の職務の相談役を勤め、入試など学生募集の統括も行う。
太成学院大学学務長 太成学院大学学務長、同大学人間学部人間学部学部長(兼務)	2013 年 4 月 2015 年 4 月	学長・副学長を補佐する。 学長・副学長を補佐し、人間学部を統括する。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1．万葉集を学ぶ人のために	共　著	1992 年 1 月	世界思想社	中西進氏の編集により、全７章から成る。 第３章「風土と自然」の項を武庫川女子大教授清原和義氏、甲南女子大学助教授 神野富一氏の両氏と鼎談形式で担当する。（P. 86～P. 126）
2．日本語チェック 2000 辞典	共　著	1992 年 11 月	京都書房	高校生・大学生向きの「現代語表現辞典」ともいうべき内容で、教科書や文化庁現代語シリーズ等を資料として選択した２０００語について、語源や用法を解説したもの。 樺島忠夫氏、植垣節也氏、内田

				満氏、佐竹秀夫氏の４氏の編集に成り、P.113～P.123 の部分 を執筆協力した。
3.ﾜｰｸﾌﾞｯｸ国語表現法	共　著	1998 年４月	嵯峨野書院	丸山顯徳氏の編集により全 30 課から成る。第 23 課「レポート」の項を担当執筆した（P.115～P.122)。 調査、研究の報告書を書く際の重要事項や基本的な留意点について述べた上で、問題形式を通して知識を徹底させることを目的とした。 なおレポートの実践練習の為の演習項目も付した。 以下共同執筆者名 をあげる。 丸山顯徳、阿部奈南 笠井昇、佐々木聖佳 瀧本和成、田尻紀子 椿井里子、友田健次 原田信之、藤原亨和 三浦俊介、宮川久美
4.ｷｬﾘｱｱｯﾌﾟ国語表現法（3 訂版）	共　著	2000 年４月	嵯峨野書院	丸山顯徳氏の編集により全 30 課から成る。第 15 課「原稿用紙の使い方」並びに第 23 課「レポート」の項を担当執筆した。 なお改定に当たっては、主として、第 15 課「原稿用紙の使い方」並びに第 23 課「レポート」に加えて第 19 課「履歴書・エントリーシート②」の項を担当執筆した。就職難のおりから新しい時代の流れを汲み取り、企業への就職する場合に欠かせない第１次採用試験ともいえる「エントリーシート」の書き方について解説。いかに端的に、要を得た「自己表現」をするべきか、注意するべき事項など、口頭表現も含めて分かりや

				すく説明した。
5『ｷｬﾘｱｱｯﾌﾟ国語表現法』（4 訂版）～（15 訂版）	共　著	2004 年 3 月～ 2015 年 3 月	嵯峨野書院	丸山顯徳氏の編集による。レポートの実践練習の為の演習項目も付し、今回の改定は質、量ともに大幅なものとなった。私の場合、時代とともに生まれた「新語」の説明等「コラム欄」（13 訂版）に力を入れて、より現代的な装いを意識して改定した。問題の差し替えも行った。
2『キャンパスライフ−入学から卒業まで−』	共　著	2013 年 3 月	嵯峨野書院	初年次教育の教材を作成出版した。内容は「研究業績等に関する事項」欄の（その他）9 参照
:				
（学術論文） 1 近江荒都歌覚書	単　著	1989 年 3 月	『万葉文庫萬葉』 第１９号 P.2～P.16（奈良県立橿原図書館）	万葉集巻１所載の「近江荒都歌」長反歌３首について考察した。 初めに、作者・柿本人麻呂の長歌に見える創作意識の問題に的をしぼり、微妙な詩心にふれていかに表現上の工夫を要したかを述べた。 次に反歌２首に表れた人麻呂の叙情性に言及、それが極めて個性的なものの様相を帯びた作品で あることを具体的に述べ、さらに当面の長反歌とそれに後続する高市黒人の作品との関連についても若干の私見を述べた。
2. 志賀白水郎歌試論	単　著	1990 年 3 月	『千里山文学論集』 ４２号　P.23～P.45 （関西大学大学院）	万葉集巻 16 に収載されている「筑前国の志賀の白水郎の歌十首」について、主として十首の生

				成、排列、構成等を作品の意味、情調面を軸として明らかにしようとした。 併せて作者の問題に言及し、個々の作品に関して作者名を推定した。
3. 笠女郎作歌攷	単　著	1990年3月	『万葉文庫萬葉』 第２０号 P.15～P.35(奈良県立橿原図書館)	万葉集中屈指の女流歌人笠女郎の作品をとりあげ、主として巻４収載歌２４首の排列、構成の問題を考察した。 従来多くの説が提出されてはいるが、１首ずつの作品を詳細に吟味し論じたものはなく、本稿では作品内部の理解を通して連作の実体をつかもうとした。 また大伴家持の返歌２首との関係については、この贈答歌のありかたそのものについて、従来とは違った考えを述べておいた。
４．田辺福麻呂作歌の表現	単　著	1991年3月	『万葉文庫萬葉』 第２１号 P.8～P.20（奈良県立橿原図書館）	万葉集巻６所載の田辺福麻呂作２１首の長反歌をめぐって考察した。 従来平板かつ形式的で迫力を感じさせない作品群として評価は決して高くないが、その中に存在する人麻呂以来の儀礼歌の伝統的な表現を打ち破ろうとするひとりの詩人の営為について私見を述べ、福麻呂が、意図的に為し得た表現の特色について詳述した。
5. 赤人の表現 －吉野讃歌をめぐって －	単　著	1993年3月	大阪短期大学 『紀要』第５号 P.67～P.74	山辺赤人のいわゆる「吉野讃歌」の長歌は、その殆ど全ての表現を柿本人麻呂の「吉野讃歌」の句に負うている。 本稿では、その作品のあり方を、歴史的背景や和歌史の側からではなく、一詩人の心の問題として捉え、その創作動機

				を考えてみた。併せて集中屈指の叙景歌として名高い反歌２首についても、その成立要因に若干の考察を加えた。
6. 戦時下の短歌管見	単　著	1993 年 3 月	大阪短期大学 『紀要』第５号 P.55～P.65	近代詩歌についての研究を始めるにあたって 最初に時代の激動期に当たる戦時中の短歌について考察したもの。 アララギ派の若手歌人渡辺直己と宮柊二の若き頃の作品を比較検討してそれぞれの特色を論じ、真のヒューマニズムとは何か等、極限状態 に置かれた人間の創作行為の問題について考えてみた。
７．万葉集の学習法 ー視聴覚教材 を利用してー	単　著	1995 年 5 月	『解釈』第 41 巻 第５号　P.42～P.47 （解釈学会）	国語教育特集に掲載したもの。 高等学校勤務時代に万葉歌の指導を視聴覚教材を利用して行なった。その実践を通して、ビデオ視聴の効果と、特に正しい視聴態度の必要性について考え、視聴覚教育の今後の課題を示しておいた。 又併せて、そのような試みが、現在筆者の行なっている、短期大学や生涯学習の場などにおける初心者向けの教養講座などにも十分効果が期待でき、今後も視聴覚教材を大いに利用してしかるべきであることを、実践的効果をあげて述べておいた。
8.国語表現教育の一つの試み －基礎的な視座にかか	単　著	1995 年 9 月	『解釈』第 41 巻 第 9 号　P.18～P.22 （解釈学会）	国語学・国語教育特集に掲載したもの。 大学（短大を含む）の、飽くまで教養科目としての「文学」の授業が如何にあるべきかについて、

わってー				その基礎的な認識の問題を考察した上で、ひとつの在り方を考えてみた。 又その授業を、全面的にあるいは側面的に、教養科目のもうひとつの柱である「国語表現」の授業に絡ませながら指導することの有用性を述べながら、ひとつの指導方法を模索したつもりである。 なお、本学における実践例の一部を、わずかではあるが報告しておいた。
9. 山部赤人の表現 ー印南野行幸時の歌をめぐってー	単　著	1995年11月	『解釈』第41巻 第11号　P.5~P.11 （解釈学会）	.山部赤人が笠金村と共に、同じ聖武天皇行幸時に作った従駕歌のうち、年代の分明なものは神亀2年10月の難波宮行幸時(巻6･928番歌~934番歌)、同3年10月の播磨国印南野行幸時(巻6･935番歌~941番歌)の作品群である。 本稿では主として播磨国印南野行 幸従駕歌の作品群をめぐって考察し、赤人の表現の特徴を、その構成意識をも含めて述べたものであるが、その際赤人歌の表現を単独の作品について考えるのではなく、笠金村歌との関係を踏まえつつ時間的空間的な視座から捉えてみた。
10. .笠金村の表現 ―反歌の在り方をめぐってー	単　著	1996年6月	『解釈』第42巻 第6号　P.6~P.12 （解釈学会）	笠金村の作品のうち、長歌１１首とそれぞれ２首の反歌について、各長反歌の関係を、稿者なりの分析を通して、先達の意見を再確認や補正した上で、新しく何らかの関係を見出だせないかを模索してみた。 表現の分析は、いきおい主観的に陥りやすいことは否めないが、例えば、(巻6･930番歌)や(巻6･937番歌)等の歌については、赤人

				歌との関係において特別な意味を持たせることも可能ではないか、といったかねてからの稿者の主張についても再度確認した。
11. 赤人歌の性格　―神岳の歌のことなどー	単　著	1996年12月	大阪短期大学 『 紀要』第10号 P.73～P.82	宮廷歌人として従来の表現や様式にこだわりつつ作歌された赤人歌の、作品としての限界のようなものや、又逆に、その力量の発揮されている歌々の様相を検証することを通して、赤人の表現世界を垣間見ようとしたものである。 主として赤人の著名な長反歌「神岳の歌」･(巻3･32番歌4~325番歌)をめぐって考えてみた。 特に人麻呂歌との関係において、赤人歌の特徴を浮かび上がらせようとしたが、赤人が開放的かつ情緒的に未来に向かう若々しい心の持ち主であることを短歌を中心に述べた。
12.虫麻呂の表現 ーその幻想的 世界―	単　著	1997年3月	大阪短期大学 『紀要』第11号 P.67～P.76	高橋虫麻呂の作品から感じとれる「孤愁」の影や、逆に活気のある表現を稿者なりに分析し、そのの特色を述べた。 又併せて、よく指摘される彼の幻想的表現が如何なる心的世界に起因するかを考察した。 彼の作品のうち･「処女」を主題にしたものの中に、頻繁に表れる「妹」という表現を通して醸し出されてくる古代的聖女のイメージが、極めて幻想的な色合を作品に与えている。その古代的憧憬が虫麻呂の心的世界をとく鍵のひとつであろうことを、個々の作品に照らして考察した。
13.虫麻呂の作歌	単　著	1999年3月	『万葉文庫萬葉』	高橋虫麻呂作歌の中で「霍公鳥

態度 －「霍公鳥を詠む」歌をめぐって―			第 29 号 P.18～P.24（奈良県立橿原図書館）	を詠む」歌（巻第 9･1755 番歌）の長歌の素材の奇抜さや、反歌の素材の捉え方などをめぐり作者の作歌態度について考えてみた。 作品全般を見ると、それぞれの歌の題詞には「詠む」歌と「見る」歌とが明確に書き分けられてをり、歌の内容にも微妙な相違が見られる。そのことを一つの手がかりとして、作品論を為す場合、作者自身の個性の問題への接近の仕方と、純然たる作者の作歌意識の問題への接近の仕方との違いをどのように考えるべきかを論じた。
14. 赤人作吉野讃歌の性格	単　著	2001 年 4 月	『万葉文庫萬葉』 第 31 号 P. 22～P. 29（奈良県立橿原図書館）	万葉集中には柿本人麻呂の作品「吉野讃歌」に語句の殆どすべてを負う、巻６所載の山部赤人作「吉野讃歌」（923～925 番歌）と、同じ赤人作でも様子の異なった「吉野讃歌」（1005～1006 番歌）がある。 本稿ではその相違する両者の有り様について論じる中で、かつて発表した自説の補強をするとともに、（9・26～927 番歌）の成立意図についても歴史的に考察し、先達の諸説を批判しつつ「神代」などの表現についての見解を述べた。

15. 文章表現の 指導 －範例に学 ぶ（一）－	単　著	2001年11月	『南大阪大学紀要』第4巻第1号 P.125～P.133	昨今、大学・短大では、学生の表現力をつけるべく文章表現法(国語表現法)といった科目をもうけているところが多い。本学(短大)でも表現力をつけることを目的とした「文章作成法」という科目が設定された。 過日、「範例に学ぶ」というテーマを通して「書くことの意味」など、基本的な問題をめぐって授業を展開した。その実践報告もかね、文章表現の指導の在り方等について、若干の考察を加えたものである。
16. 高橋虫麻呂の作品 －伝説歌の女性たち－	単　著	2002年　3月	『南大阪大学紀要』第4巻第2号 P.133～P.141	高橋虫麻呂の作品のうち伝説歌の「処女」たちを主題にしたものを主として扱った。頻繁に表れる「妹」という表現を通して醸し出されてくる古代的聖女のイメージが、極めて幻想的な色合を作品に与えていることを述べたことがあるが、その不備を補う意味もあって、虫麻呂が伝説歌の各「処女」たちを描く場合の創作意図を軸にして、個々の作品について考察した。虫麻呂と伝説そのものとの距離についても考えたつもりである。
17. 遣新羅使人歌管見－「恋ふ」と「思ふ」―	単　著	2002年　4月	『解釈』第48巻 第3・4号　P.2~P.9 （解釈学会）	上代語の「恋ふ」と「思ふ」について、その具体的な現れ方の相違について考察した。万葉集巻第15の前半には「遣新羅使人歌」があるが、その作歌の「場」を検証することによって、場面の変化や風土的変化を詳細にとらえ、それに伴う作者たちの心境の変化と「恋ふ」と「思ふ」の語の使い分けとのあいだの因果関係が微妙に、しかし明らかに存在することを用例

				を挙げて考察した。
18. 赤人の表現小考	単　著	2006 年 12 月	『解釈』第 52 巻 第 11・12 号　P.2~P.4 （解釈学会）	山部赤人作歌のなかでもで著名な 4 首連作とされる作品(巻 8・1424～1427 番歌)をめぐり、赤人作の技法について考えてみた。すなわち、4 首すべての歌に讃歌的性格を見だしたうえで、それぞれがどういう表現的役割を持っているか、などについて私見を述べた。
19. 家持の連作 ―「独居の歌」小考―	単　著	2011 年 3 月	『太成学院大学紀要』第 13 巻（通号 30 号）	大伴家持のいわゆる「独居の歌」六首の連作について、その手法と内容の解釈を試みた。特に、第六首目の歌 かきつはた衣に摺り付けますらをの着襲ひ狩する月は来にけり　（三九二一） の存在意義をめぐって、このような表現にたどり着いた家持の精神構造の変遷を一首一首丁寧に吟味した。結果として、ひとつの仮説ではあるが、この狩猟は、「慣例としてますらを達が参加し、毎年再生されてゆく「不変」の行事」という認識のもと作歌されたもの、という結論を得た。

20. 日本語の表現 ―敬語の指導をめぐって―	単　著	2013 年 3 月	『太成学院大学紀要』第 13 巻（通号 30 号）	敬語表現指導をめぐる諸問題にふれた上で、本学の実践データをもふまえ、若者の敬語意識について考えて見た。敬語教育を教師の側から見てそのあるべき姿勢に言及し、さらに、今の若者が敬語の必要性をどう考えているか、言葉遣い全般についての意識の問題も取り上げながら具体的なデータをあげて考えてみた。	
（その他） 1 高齢者大学(生きがい創造課程)「古典講座」講師		1996 年 4 月～2003 年 3 月	(財)奈良県長寿社会推進センター主催	各 120 分	
2「万葉歴史講座 （４回ｼﾘｰｽﾞ）		2004 年 4、６、８、10 月	奈良市立京西公民館主催	各 90 分	
3「うたと歴史のあいだ―葛城周辺の歌をめぐって」		2005 年 10 月	御所市巨勢春野復興会主催	90 分	
4.「万葉集の世界―文学と歴史」		2006 年 8 月	堺市美原町図書館主催講演会	90 分	
5「悲劇の文学―大津皇子と大伯皇女」（3 回ｼﾘｰｽﾞ）		2006 年 10, 11 月	美原町読書友の会主催「文学講座」３回	各 90 分	
6「文学と歴史のあいだ―文学以前」		2009 年５月	太成学院大学公開講座	90 分	
7「文学と歴史のあいだ―国見・求婚歌の意味」		2009 年 6 月	太成学院大学公開講座	90 分	
8「万葉講座」（10 回ｼﾘｰｽﾞ）		2004 年 4 月～2013 年 3 月	奈良市生涯学習財団施設京西公民館自主グループ「さわらびの会」主催	各 120 分	

9. 「籠もよみ籠もち…」		20014 年 6 月	東京理科大学同窓会奈良県支部主催	
10. うたの発生とクニの誕生		2015 年 5 月	はびきの市民大学	90 分
11『キャンパスライフ-入学から卒業まで-』	共　著	2013 年 3 月	嵯峨野書院	【刊行趣旨】 ①　大学生活を豊かにする。 ②　目標を設定し、充実した学生生活を送る。 ③　卒業後の人生を歩んでいくために、問題意識をもつ。 ④　学生に羅針盤を持たせる。 ⑤　勉強を甘く見ず、実力をつけさせる。 ⑥　就職がないのは不況だからではなく、実力がないからであることを理解させる。 ⑦　『キャリアアップ国語表現法』の副読本として位置付ける。 第 3 課「授業出席」の項を担当執筆した（P.～P.）。以下共同執筆者名をあげる。 丸山顯德, 生駒正文, 江端豊和, 奥田玲子, 笠井　昇, 金子順一, 小谷裕実, 鈴井清巳, 丹治光浩, 辻　幸恵, 椿井里子, 師　茂樹, 山本慶子

（人間）井手　裕美

教　育　研　究　業　績　書

２０１８年3月１９日

氏名　井手　裕美　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
実用英語教授法 受験英語教授法	楽しんで学ぶ英語 合格するための英語

日本語教授法 英語教授法	日本語を学ぶ外国人のための日本語による日本語教授法 公立小学校・中学及び外国の中学校レベル使用英語教科書の分析と検討

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 担当科目： 英語教育法，英文法概論，オーラルコミュニケーション，コミュニケーション演習，リーディング，ライティング，ゼミⅠ/Ⅱ/Ⅲ/Ⅳ（ 卒業論文指導を含む），日本語入門/応用（留学生対象） 授業： 最初の授業で、プレイスメント　テストを行い授業構成のレベルのチェックを行う。その結果により使用テキストをどの程度噛み砕くか使い方を決めている。 オーラルコミュニケーションではディクトグロスを実施。また e-learning によって授業外で学生が自主的に勉強することを組み込んでいる。 授業外： 学習意欲のる学生を対象に、正規の授業外で特別な時間をもうけ、学生のレベルと目的に合わせての英語授業を行っている。	2006 年 4 月 ～現在	クラスの約３分の２レベルに合わせて授業内容の構成を決める。 学生は、易しすぎるか難しすぎるか興味のもてない内容か等が授業中の態度に現れる。学生一人一人を見つめることが授業運営に大切と思って授業を行っている。 学生によって英語学習のモチベーションは様々でる。再度１からやり直したい学生。教員採用試験を目的とする学生。英検等の資格を取りたい学生。それぞれの相談にのりながら、許される時間内で目的別に春学期、秋学期を通しての個別授業を行っている。
2　作成した教科書，教材 外国人のためのテキスト「貿易のしくみ　輸入編」	2002 年 1 月	日本語能力検定試験１級合格者るいは同等の力がり、日本の商社で働きたい、または日本とのビジネスに関わっていきたいと考える外国人留学生のために、本来難解な貿易業務の流れをテキストに「分かりやすく」という観点から作成した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
日本語教師歴：3 年（神戸 YMCA）	2002 年 4 月～2005 年 3 月	神戸 YMCA で２年間、外国人のための日本語教授法（演習・理論・実習）を学んだ後、同校で留学生、就学生、日本在住の外国人に日本語を日本語で３年間教える。「みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ」「中級から学ぶ日本語」他、ビデオ、副教材を使用。小テストの繰り返しにより学力の定着を図る。期末テストにより進級を決定。 他、PHD（国際協力団体）の招聘したアジア・南太平洋の国々の研修生への６週間の日本語集中授業を担当。
英語教師歴：8 年（パルモ学院）	1978 年 4 月～1984 年 3 月	パルモア学院土曜子供英語科非常勤講師 神戸カナディアンアカデミーの生徒達をアシスタントに使い、生の英語を聞かせながら行う授業形態。アシスタントには英語で指示、生徒には日本語で説明。受験英語ではなく実用英語習得を目的とする。
英語派遣講師：短期集中	1985 年 6 月～8 月	三菱重工株式会社 海外派遣社員のための短期英語集中講座
家庭教師歴（英語・数学）：33 年	～2007 年 3 月	主として英語を中学生、高校生、大学生、社会人に、数学を中学生、高校生に教える。目的は英語・数学の苦手な学生の成績を向上させ、志望する高校・大学への入学を実現させること。進路相談、進学指導、精神面のサポートがこれに付帯する。１年に複数名を受け、受け持った時から最終目標が達成されるまでの期間、指導。 2002 年 4 月～2007 年 3 月までの進学実績は、公立高校への進学を除き、神戸芸術工科大学（１）・流通科学大学（１）・京都女子大学（１）・関西学院大学（１）・同志社大学（２）・甲南高等学校（１）名。テキストは本人の希望するものを除いて特に限定しない。個々の事情に合わせて、各自所有のテキスト、問題集を使用。受験生には入学試験直前の総仕上げとして、センター試験の過去問題と志望校の入試過去問題を徹底追及指導する。

翻訳・通訳歴（英語・ドイツ語）：過去随時	1978年3月 ～4月	日本食糧新聞社主催、ドイツより招聘のマイスター製パン製菓日本講習会に同行。同時通訳　（ドイツ語）
	1973年10月	伴・阿部舞踊研究所： ドイツ　シュトットガルトバレー団視察同行通訳　（ドイツ語）
	1989年9月 ～10月	伴・阿部舞踊研究所： ドイツハンブルグ　パントマイムフェスティバル出演準備のための翻訳業務　ドイツ語・英語
	～1992年	阿部氏専属　コレスポンダンス翻訳（ドイツ語・英語）
企業勤務歴:25年　主たる業種/貿易：		輸出業務； INVOICE,PACKINGLIST, L/C等の作成。 輸入業務； 各種商品開発、取引条件の交渉、契約書作成、コレスポンデンス、ログハウスキット発注時の施工図等の打ち合わせ翻訳など（英語）。　主たる取引相手国/ドイツ，デンマーク，スウエーデン，中国，台湾，オーストラリア
有限会社あしぶえ　1988年創設 （同族会社/資本金壱千万円/本社:神戸，店舗：芦屋/雑貨輸入小売・卸販売/取引相手国：ドイツ/1995年阪神大震災のため休眠，現在に至る。）		西ドイツ，カタログ通販会社，ARNOLD H. W. BOTTJER社と提携。日本での独占販売許可取得。 極東貿易株式会社（本社　大阪）と販売提携。
総務・経理事務（～決算まで）	1979年4月 ～1984年3月	パルモア病院
	1987年3月 ～1995年	有限会社あしぶえ

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 日本語教師	2002年3月	

2　特許等		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 2 3 :				
（学術論文） 1　英語教育法　団塊世代とゆとり教育世代における公立中学英語教育の比較・検討と現在の英語教育の考察	単著	2008 年 3 月	太成学院大学紀要　第 10 巻	
2　英語教育法　（1）ドイツの英語教育　使用教科書の分析と検討	単著	2009 年 3 月	太成学院大学紀要　第 11 巻	
3　英語教育法（2）中国の英語教育　使用教科書の分析と検討	共著	2010 年 3 月	太成学院大学紀要　第 12 巻	
4. 英語教育法（3）日本の英語教育―その原点，明治初期　英語検定教科書以前の教科書の分析と検討:	単著	2011 年 3 月	太成学院大学紀要　第 13 巻	
5. 英語教育法（4）日本の英語教育―その原点，明治中期　邦刊本時代の英語検定教科書の分析と検討	単著	2012 年 3 月	太成学院大学紀要　第 14 巻	
6.英語教育法（5）日本の英語教育―小学校外国語活動新設に伴う英語テキストの分析と検討	単著	2013 年 3 月	太成学院大学紀要　第 15 巻	
7 英語教育法（6）日本の英語教育―新中学校学習指導	単著	2014 年 3 月	太成学院大学紀要　第 16 巻	

要領による英語テキストの分析と検討				
8. 日本における英語標識表記の認識度―147 の英語表記調査―	単著	2014 年 3 月	太成学院大学紀要　第 16 巻 （論説資料保存会採録）	
9. 英語教育法（7）日本の英語教育―英和辞書の変遷―明治初期　新たな日本語語彙の創造―	単著	2015 年 3 月	太成学院大学紀要　第 17 巻 （論説資料保存会採録）	
10. 英語教育法（8）日本の英語教育―オーラルコミュニケーション偏重教育の影響―	単著	2016 年 3 月	太成学院大学紀要　第 18 巻 （論説資料保存会採録）	
11. 英語教育法（9）日本の英語教育の方向性―昭和 37 年度全国中学校学力調査『英語』より一考察―	単著	2017 年 3 月	太成学院大学紀要　第 19 巻	
12. 英語教育法（10）－日本語教授法から見る日本の英語教授法と英語教育－	単著	2018 年 3 月	太成学院大学紀要　第 20 巻（予定）	
（その他） 1 2 3 ：				

（人間）池辺　晴美

教　育　研　究　業　績　書

平成 28 年　2 月　22 日

氏名　　池辺　晴美　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
健康・スポーツ科学	スポーツ科学、スポーツ傷害、スポーツ医学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 学校法人　平成医療学園　平成スポーツトレーナ	平成 17 年	スポーツトレーナーを目指す学生に対し、トレー

一専門学校　兼任講師（スポーツ医学担当）	4 月～平成 19 年 3 月	ナーとして選手と接する際の心構え、トレーナーの立場について指導を行うと共に、自身がこれまでにトレーナーとして活動を行った大会等での経験を基に、スポーツ現場で多発するスポーツ外傷・障害について講義を行った。
学校法人　三幸学園　大阪リゾート＆スポーツ専門学校　兼任講師（健康運動実践指導者　対策講座担当）	平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月	スポーツトレーナーを目指す学生に対し、健康運動実践指導者　認定試験のための対策講座を担当。
学校法人　天満学園　太成学院大学　陸上競技部・女子駅伝競技部監督	平成 18 年 4 月～	大学生活を心身ともに健全に過ごす上で重要である生活リズムを部活動を通して確立させるとともに、個々を尊重しながら集団活動の中でいかに積極的に動くかを考えさせ、自己の行動に対し、責任を持つことを指導。
学校法人　天満学園　太成学院大学　人間学部人間文化学科（担当：健康管理概論、トレーニング概論、トレーニング実習、体育測定評価法、体育測定評価法実習、健康スポーツ学概論、スポーツ実践実習 C；陸上競技）	平成 18 年 4 月～	専門知識を学修させ、講義では PC や動画を利用し、視覚から得られる情報を多く提示し、理解を促している。また、実技授業では専門的な知識のみではなく、グループごとで実施することにより他者との協調性を養うことについても目標としている。得られた結果をフィードバックすることにより、学生自身の反省点や課題を自覚させ、今後に活かすよう促す。
学校法人　天満学園　太成学院大学　人間学部人間文化学科（担当：卒業論文指導演習、卒業論文、ゼミⅠ、ゼミⅡ、ゼミⅢ、ゼミⅣ）	平成 18 年 4 月～	トレーナーの経験からスポーツにおける医学的な分野をより深めさせ、また学生が自主的に研究を進めるよう、文献等の提示、積極的に学内外への傷害調査を行っている。
学校法人　天満学園　太成学院大学　人間学部人間文化学科（担当：アセンブリー・アワー）	平成 18 年 4 月～	アセンブリー・アワーにおける学生指導については、平成 18 年より行っている。 1 年次には主に大学入学後の生活習慣を指導した。2 年次においては、引き続き生活習慣への指導とともに、基礎学力を向上させる目的で問題を作成し、実施した。3 年次においては、就職活動に向け、自己分析を中心に展開している。
健康運動指導士主任教員	平成 23 年 4 月～	公益財団法人健康・体力づくり事業財団の運動指導士養成校となり、その際、シラバスおよび実習

		施設の調整などを行う。 また健康運動指導士受験者のみならず健康運動実践指導者・トレーニング指導者の受験学生への筆記試験対策も行っている。
ICT を活用した授業方法	平成 27 年 4 月～	担当教科において、学生の理解度を把握するために、授業中、iPad mini を利用した課題の作成を行っている（アクティブラーニングの導入）。
スポーツ傷害論	平成 27 年 4 月～	授業はスポーツの現場で遭遇しやすい傷害についての内容である。教員からの一方向の講義スタイルではなく、学生自身が教科を学んで伝えたいことをテーマにポスター作りを行い、他者へ物事を伝えるという試みを行った（アクティブラーニングの導入）。
スポーツトレーニング概論	平成 28 年 4 月～	アクティブラーニングパイロット授業として展開。これまでの i Pod や i Pad mini を使用した授業を展開してきたが、それに加え、講義科目であるが、自身の身体を動かすなどの体験を交えて内容を理解する試みを行った。
TGU フェスタへの参加（人間学基礎演習Ⅱ、3 年ゼミ生）	平成 28 年 11 月	池辺研究室 3 年の成果発表の場として、TGU フェスタに体験ブースを設置。実施方法等も全て学生たちが自ら考え、行った。来場者の 107 名に足を運び、体験いただけた。
人間学演習Ⅳ（4 年ゼミ生）	平成 28 年 2 月～	池辺研究室のゼミ生は4年間の総まとめとして卒業論文を作成している。 テーマはゼミの内容に大きく逸脱しない範囲で学生自身が自由に設定し、取り組んでいる。平成 28 年より始まった人間学部総合演習成果発表会では、全員が口頭発表を行っている。
２　作成した教科書，教材 スポーツトレーニング概論 救急処置 スポーツ傷害論 体育測定評価法実習 スポーツトレーニング実習	平成28年4月～	担当教科の提示資料は学生が授業中に書き写せなかったもの、参考資料として提示したものは TGU net、e-Learning system にアップロードしており、いつでも参照できるようにしている。

3　教育上の能力に関する大学等の評価 学内授業アンケート	平成 18 年 ～	学生からの授業アンケートにおいて、授業内容に関する評価が高く、担当教員への評価についても高い傾向である。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 健康運動指導士　受験対策講座講師	平成 22 年 2 月	財団法人　日本健康スポーツ連盟より、健康運動指導士受験対策講座の講師を依頼され、運動生理学・機能解剖学の講座を実施した。
健康運動実践指導者　指導実技試験実技評価委員	平成 28 年 10 月	公益財団法人　健康・運動づくり事業財団より健康運動実践指導者　指導実技試験実技評価委員の委嘱を受けた。
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 ・特定非営利活動法人　日本ストレングス&コンディショニング協会　認定ストレングス&コンディショニングスペシャリスト（CSCS）取得	平成 14 年 10 月	
・財団法人　日本陸上競技連盟　医事委員会トレーナー部 A 級トレーナー	平成 16 年 4 月	
・中学校教諭専修免許状（保健体育）	平成 18 年 3 月	
・高等学校教諭専修免許状（保健体育）	平成 18 年 3 月	
・キネシオテーピング協会　キネシオテーピングトレーナー資格取得	平成 18 年 5 月	
・国際救命救急協会　救急心肺蘇生法（BASIC）修了	平成 18 年 7 月	
・特定非営利活動法人　日本トレーニング指導者協会　認定トレーニング指導者取得	平成 19 年 12 月	
・財団法人健康・体力づくり事業財団　健康運動指導士取得	平成 21 年 10 月	
日本赤十字社赤十字救急法基礎講座修了	平成 22 年	

	3 月	
日本赤十字社赤十字救急法救急員養成講習修	平成 22 年 3 月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 富山国体　陸上競技の部	平成 12 年 10 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
宮城国体　陸上競技の部	平成 13 年 10 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
2003 年国際グランプリ陸上大阪大会	平成 15 年 5 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
・長崎インターハイ陸上競技の部	平成 15 年 8 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
2004 年国際グランプリ陸上大阪大会	平成 16 年 5 月	京都府（陸上競技）にトレーナーとして大会へ帯同
島根インターハイ陸上競技の部	平成 16 年 8 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
2005 年国際グランプリ陸上大阪大会	平成 17 年 5 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
大阪インターハイ陸上競技の部	平成 18 年 8 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
兵庫国体　陸上競技の部	平成 18 年 10 月	京都府（陸上競技）にトレーナーとして大会へ帯同
2007 年国際グランプリ陸上大阪大会	平成 19 年 5 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
IAAF　世界陸上 2007　大阪大会	平成 19 年 8 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同

2009 年国際グランプリ陸上大阪大会	平成 21 年 5 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
奈良インターハイ陸上競技の部	平成 21 年 8 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
バレーボール　全日本シニア女子チーム第 4 回国内強化合宿	平成 21 年 11 月	全日本女子バレーボールチームアシスタントトレーナーとして帯同
バレーボール　ワールドグランドチャンピオンカップ 2009	平成 21 年 11 月	全日本女子バレーボールチームアシスタントトレーナーとして大会へ帯同
千葉国体　水泳の部	平成 21 年 9 月	大阪府選手団（競泳）にトレーナーとして大会へ帯同
山口国体　水泳競技の部	平成 23 年 9 月	大阪府選手団（競泳）にトレーナーとして大会へ帯同
第 19 回アジア陸上選手権大会　兵庫・神戸大会	平成 23 年 7 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
第 1 回大阪マラソン	平成 23 年 10 月	第 1 回大阪マラソンのメディカルスタッフ（トレーナー）として大会をサポート
第 96 回日本陸上選手権大会	平成 24 年 6 月	日本陸連トレーナーとして大会へ帯同
岐阜国体　水泳競技の部	平成 24 年 9 月	大阪府選手団（競泳）にトレーナーとして大会へ帯同
第 2 回神戸マラソン	平成 24 年 11 月	第 2 回神戸マラソンのメディカルスタッフ（トレーナー）として、大会をサポート
東京国体　水泳競技の部	平成 25 年 9 月	大阪府選手団（競泳）にトレーナーとして大会へ帯同
第 3 回神戸マラソン	平成 25 年 11 月	第 3 回神戸マラソンのメディカルスタッフ（トレーナー）として、大会をサポート
第 4 回神戸マラソン	平成 26 年 11 月	第 4 回神戸マラソンのメディカルスタッフ（トレーナー）として、大会をサポート

資格支援主担	平成 28 年 4 月～	学生の資格取得を推進
4　その他		
大阪商業大学堺高等学校への模擬授業	平成 22 年 1 月	1･2 年生を対象に、大学で実施される授業を展開。競技スポーツで必要とされる体力要素について講義を行った。
太成学院大学高等学校への模擬授業	平成 23 年 1 月	2 年生を対象に、競技スポーツにおいて必要とされる体力要素について講義を行った。
大阪府立懐風館高等学校への模擬授業	平成 23 年 11 月 10 日	1･2 年生を対象に、スポーツの現場で用いられることが多くなったスポーツテーピングについての理論を踏まえた実技授業を実施。
太成学院大学高等学校への模擬授業	平成 24 年 1 月	2 年生を対象に、スポーツ科学のうち、成長期に発生しやすいスポーツ障害と筋腱のトレーニングに関する内容を講義した。
大阪商業大学堺高等学校への模擬授業	平成 24 年 1 月	スポーツコースの 1・2 年生を対象に、体力要素の一つである柔軟性について講義を実施。
大阪府立東百舌鳥高等学校への模擬授業	平成 24 年 2 月	1･2 年生を対象に、スポーツの現場で用いられることが多くなったスポーツテーピングについての理論を踏まえた実技授業を実施。
星翔高等学校（スポーツコース）への模擬授業	平成 24 年 4 月	3 年生を対象に、救急処置にて実施しているスポーツテーピングについて講義を実施。
大阪府立大正高等学校への模擬授業	平成 25 年 9 月	2 年生を対象に、スポーツテーピングについて実践を行う。
大阪府立懐風館高等学校への模擬授業	平成 25 年 11 月	2 年生を対象に、スポーツテーピングについて実践を行う。
大阪市立文の里中学校（保健委員会）へ講師として	平成 25 年 12 月	中学校保健委員の生徒（1～3 年生）を対象に、スポーツ傷害を予防するための講義と実習を実施。
大阪市立高松小学校（保健委員会）へ講師として	平成 26 年 12 月	小学校保健委員の生徒（4～6 年生）を対象に、学校やスポーツ現場で発生しやすいケガを予防す

		るための講義と実習を実施。
夢ナビライブ 2015	平成 27 年 6 月	株式会社フロムページ主催の合同進学説明会で講義ライブ「スポーツする人を支えたい！」を実施。
阪神奈大学　公開講座	平成 27 年 11 月	阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット主催の公開講座に参加。「スポーツでケガをするのはなぜ？」をテーマに講義を実施。
大阪府立東百舌鳥高等学校への模擬授業	平成 27 年 10 月	2 年生を対象に「スポーツする人を支えたい！」をテーマに講義を実施。
大阪府立懐風館高等学校への模擬授業	平成 27 年 11 月	2 年生を対象に、スポーツテーピングについて実践を行う。
大阪府暁光高等学校への模擬授業	平成 28 年 1 月	2 年生を対象に、健康スポーツ学科の説明と模擬授業「スポーツ現場で発生するケガについて」を実施。
夢ナビライブ 2016	平成 28 年 6 月	講義ライブにて「スポーツする人を支えたい！」をテーマにランニング障害について講義。
はびきの市民大学　公開講座	平成 28 年 7 月	「健康を維持するための運動習慣」を講義。
太成学院大学　オープン・カレッジ	平成 28 年 8 月	「健康体操教室」を実施。
大阪府立懐風館高等学校への模擬授業	平成 28 年 11 月	2 年生を対象に、スポーツテーピングについて実践を行う。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文） 1. 陸上競技　投擲種目における上肢障害	共著	平成 15 年 5 月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌　Vol.12，p.35-36.　関西臨床スポ	関西学生陸上競技連盟に所属する大学陸上競技選手（209 名）を対象に、上肢傷害についての調

			ーツ医・科学研究会	査を質問紙にて行った。投擲種目には、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投の四種り、投擲方法の違いから上肢の傷害の特徴を検討した。結果は、やり投の肘内側の障害が最も多く、円盤投では肩関節前方、ハンマー投では肩甲骨周囲の傷害が特徴的でった。（池辺晴美、西林由佳、大里佳之）
2. 陸上競技　短距離選手におけるハムストリング筋腱損傷	共著	平成 19 年 3 月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.16 , p.35-37	筋腱損傷とはいわゆる肉離れのことでり、疫学的研究から陸上競技選手のうち特に短距離選手に多発するといわれている。そこで、大学陸上競技部に所属する男子短距離選手のうち、ハムストリングの筋腱損傷の経験回数別による大腿部および股関節（屈筋・伸筋）の筋力と柔軟性の差異を検討した。結果は、膝関節および股関節の屈筋、伸筋の群間の有意な差は認められなかったが、高速角速度における膝関節の屈筋/伸筋比において損傷回数が多い群は低値を示した。柔軟性については、損傷回数による差は認められなかった。（池辺晴美、廣橋賢次）
3 野球における投球障害肩と肩関節可動域について	共著	平成 20 年 6 月	第 18 回関西臨床スポーツ医・科学研究会	野球選手では、投球側の肩関節の内旋可動域が減少し、外旋可動域が増大すると報告されている。この肩関節の可動域の影響が、投球障害肩と関係しているのか、硬式野球チームに所属する中学生を対象に肩関節の可動域の測定とともにアンケート調査を行った。結果は、肩関節障害あり群は障害なし群よりも肩関節可動域の増減があった。また、投球側と非投球側の差を比較したところ、外旋可動域の増大よりも内旋可

				動域の減少の方が大きく、内旋可動域の減少が肩関節障害へ関与している可能性を示唆した。（坂本佳子、池辺晴美）
4. 体育実技受講学生の体力・運動能力―2007年度体力・運動能力調査について―	単著	平成 21 年 3 月	太成学院大学紀要 11 巻（28 号）	体育実技授業受講学生を対象に新体力テストを実施し、学生の体力・運動能力の傾向を調査した。結果は全国平均と比較した場合、男子では筋力が低値の傾向にり、筋持久力・敏捷性では高値の傾向でった。女子においては、筋持久力・持久力において高値の傾向が認められた。
5. 本学学生のスポーツ傷害発生に関する研究	単著	平成 21 年 3 月	太成学院大学紀要 11 巻（28 号）	健康スポーツコースに所属する学生を対象にスポーツ傷害に関するンケート調査を行った。結果は、男子において平均練習時間と傷害発生との関係に有意な差が認められた。
6. 大学運動部員におけるスポーツ傷害に関する調査―非接触型スポーツと接触型スポーツの比較―	単著	平成 22 年 3 月	太成学院大学紀要 12 巻（29 号）	大学運動部員を対象とし、特徴の異なる種目間における傷害発生の傾向や再発に対する考え方、競技復帰後の取り組みに差がるのかを検討した。結果は、接触型スポーツでは外傷、非接触型スポーツでは障害が多かった。両群とも、受傷後の取り組みに対し、ウォーミングップを長く行うなどでったが、非接触型スポーツでは、イシングを行うが多かった。
7. 体育実技受講学生の体力・運動能力―2007年度から 2009 年度の体力・運動能力調査について―	単著	平成 22 年 3 月	太成学院大学紀要 12 巻（29 号）	体育実技受講学生を対象に新体力テストを実施し、学生の体力・運動能力の傾向を調査した。結果は、体格において男子が肥満傾向でる者がわずかに増加したが、女子の低体重の傾向は減少した。体力・運動能力においては、握力が全国平均よりも低値にっ

				た。
8　体育実技受講学生の体力・運動能力（第 3 報）―2007 年度から 2010 年度における調査―	単著	平成 23 年 3 月	太成学院大学紀要 13 巻（30 号）	体育実技受講学生を対象に新体力テストを実施し、全国平均及び 2007 年度以降の学生間において、体力・運動能力と生活習慣の比較を行った。全国平均と比較すると筋力以外の項目が高値であった。また履修年度間における比較では、筋力及び筋持久力において低下傾向であった。また、朝食摂取状況においても低下傾向にある。
9．体育実技受講学生の体力・運動能力（第 4 報）―2012 年度受講学生について	単著	平成 25 年 3 月	太成学院大学紀要 15 巻（32 号）	体育実技受講学生を対象に新体力テストを実施した。全国平均値と比較したところ、男子において握力は低値を示し、女子においても握力と長座体前屈が低値を示した。日常生活においては、朝食の欠食、睡眠時間が短い学生が増加していることがわかった。
10．女子ソフトボール選手の傷害調査	共著	平成 25 年 6 月	第 23 回　関西臨床スポーツ医・科学研究会（関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.23，p.5-8）	大学女子ソフトボール選手を対象に傷害調査ならびに関節弛緩テストを行った。結果は、野球とは異なり、投手の肩への障害が少なかったが、先行研究と同様に手指への傷害が多く、足関節捻挫、腰痛なども多く見られた。（池辺晴美、照屋博康、北村哲郎）
11．休息時に用いるアイシングの効果について～動的筋力に着目して～	共著	平成 25 年 6 月	第 23 回　関西臨床スポーツ医・科学研究会（関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.23，p.31-34）	運動習慣のない健康な成人男子を対象に筋疲労後の休息中に行うアイシングが筋機能の回復にどのような影響を及ぼすのかを検討した。結果は、アイシングによって特異的にピークトルクの回復やピークトルクに至るまでの時間を短縮する影響を及ぼさず、仰臥位のみの休息の効果と同程度であった。（照屋博康、北村哲郎、池辺晴美）

12. 体育実技受講学生の体力・運動能力（第 5 報）―2015 年度受講学生について	単著	平成 28 年 3 月（掲載予定）	太成学院大学紀要 18 巻（35 巻）（掲載予定）	体育実技受講学生を対象に新体力テストを実施した。全国平均値と比較したところ、男子においては、握力・長座体前屈が低値を示したが、女子においては長座体前屈を除いた項目が有意に高値を示した。体格指数と総合評価の関係については、標準体重に該当する者は得点が高い傾向にあった。
13. 体育実技受講学生の体力・運動能力（第 6 報）―2016 年度受講学生について	単著	平成 29 年 3 月（掲載予定）	太成学院大学紀要 19 巻（36 巻）（掲載予定）	体育実技受講学生を対象に新体力テストを実施。その結果、2016 年度の受講学生は全国平均と比較したところ、男子は握力が有意に低値を示し，長座体前屈は差がなかった。女子においてもｎ握力・長座体前屈は差がなかった。日常生活活動を 2015 年度受講学生と比較をおこなったところ、朝食の有無については「全く食べない」と回答した学生は減少したものの、「時々欠かす」と回答した学生が 2015 年度学生よりも有意に増加した。1 日の睡眠時間も短縮している傾向にあり、今後は要因を含め、検討する必要がある。
（その他） 1 陸上競技　投擲種目における上肢障害	共著	平成 14 年 6 月	第 12 回関西臨床スポーツ医・科学研究会	上記（学術論文１）の口頭発表 関西学生陸上競技連盟に所属する大学陸上競技選手（209 名）を対象に、上肢傷害についての調査を質問紙にて行った。投擲種目には、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投の四種り、投擲方法の違いから上肢の傷害の特徴を検討した。結果は、やり投の肘内側の障害が最も多く、円盤投では肩関節前方、ハンマー投では肩甲骨

				周囲の傷害が特徴的でった。（池辺晴美、西林由佳、大里佳之）
2 陸上競技　短距離選手におけるハムストリング筋腱損傷	共著	平成 18 年 6 月	第 16 回関西臨床スポーツ医・科学研究会	上記（学術論文２）の口頭発表 筋腱損傷とはいわゆる肉離れのことでり、疫学的研究から陸上競技選手のうち特に短距離選手に多発するといわれている。そこで、大学陸上競技部に所属する男子短距離選手のうち、ハムストリングの筋腱損傷の経験回数別による大腿部および股関節（屈筋・伸筋）の筋力と柔軟性の差異を検討した。結果は、膝関節および股関節の屈筋、伸筋の群間の有意な差は認められなかったが、高速角速度における膝関節の屈筋/伸筋比において損傷回数が多い群は低値を示した。柔軟性については、損傷回数による差は認められなかった。（池辺晴美、廣橋賢次）
3 野球における投球障害肩と肩関節可動域について	共著	平成 20 年 6 月	第 18 回関西臨床スポーツ医・科学研究会	野球選手では、投球側の肩関節の内旋可動域が減少し、外旋可動域が増大すると報告されている。この肩関節の可動域の影響が、投球障害肩と関係しているのか、硬式野球チームに所属する中学生を対象に肩関節の可動域の測定とともにンケート調査を行った。結果は、肩関節障害り群は障害なし群よりも肩関節可動域の増減がった。また、投球側と非投球側の差を比較したところ、外旋可動域の増大よりも内旋可動域の減少の方が大きく、内旋可動域の減少が肩関節障害へ関与している可能性を示唆した。（坂本佳子、池辺晴美）

教　育　研　究　業　績　書

2018 年　3 月 20 日

氏名　　雑賀亮一　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
スポーツ方法学 スポーツ社会学	身体の使い方使 スポーツの社会的役割（貢献）

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 スポーツ場面にとどまることなく，スポーツで得た資質を日常生活に反映させるための取り組み	平成 14 年 4 月～	＜自ら考え行動する１＞ 体育実技を通して、実技のスキルアップと共に「大学で学問を学ぶ姿勢」を自らが考え行動し実践できるような授業展開を試みた。全体の前半を「基本姿勢修得期間」とし、厳しいルール（一般的には厳しいとはいえない）の下で、授業を受講する姿勢を形成した。ルールが守られていなければ、その都度説明を行い重要性を説いた。後半は、「修得した基本姿勢の実践期間」とし、授業の中で、決められたルールを自らが考え行動し実践する姿勢を形成した。実践できていないと思われる学生には、自ら考え行動するための助言を行い達成できるように工夫した。 **【関連授業科目：スポーツ方法学１、スポーツ方法学２】**
倫理観や社会性を促進するための取り組み	平成 14 年 4 月～	＜自ら考え行動する２＞ 昨今の学生は、単位を「取得」すればそれで善しとする傾向にあるが、「取得」ではなく「修得」であることの意味合いを、体育実技を通して考えていく姿勢が形成できるような授業展開を試みた。 １、 受講時のルールの設定 ２、 授業目標の明確化 ３、 目標達成の確認 ４、 コミュニケーションの徹底 **【関連授業科目：スポーツ方法学１、スポーツ方法学２】**
人間性や社会性を促進するための取り組み	平成 17 年 4 月～平成 18 年 3 月	1 年次アドバイザとして，人間性を高めるアセンブリ・アワーの展開を試みた。 目標設定，人生の目標設定を，スポーツメンタルトレーニングの手法から考える。春夏期において「心の在り方」，心の健康が，身体にどのように影響するのかを考える。ビデオ「鼓の家」を鑑賞して，道を極めるとはを考える。ビデオ「食べて治す」を鑑賞して，食事の大切さを考える。ビデオ「フリーター４１７万人の衝撃」を鑑賞して，定職につく事の意味合いについて考える。大学生とはどうあるべきかを考える。ビデオ「ゴルフ　江連　忠」を鑑賞して，プロとつく人達の努力を見

		る。 秋冬期においては，目標を明確にし，日々の学生生活の質の向上を目指す。ビデオ「伝説の赤ふん遠泳」を鑑賞して，過程を大切にすることや一生懸命何かに打ち込む事の意味を考える。本日の朝刊トップニュース関連記事を読んで，情報収集と自分の意見を明確に答える練習ビデオ「性犯罪・再犯をどう防ぐか」を鑑賞し，大学生の性犯罪ニュースから性犯罪について考える。ビデオ「四国アイランドリーグ」を鑑賞して，一つの物事を達成するには何が必要かを考える。ビデオ「高橋尚子　東京国際女子マラソン」を鑑賞して，物事の捉え方やメンタルの重要性を考える。単位を修得することの意味を考える。ビデオ「歴史の選択　赤穂浪士」を鑑賞して，決断力について考える（決断するには何が必要か）。基本の重要性を考え，1年次を振りかえる。 **【関連授業科目：アセンブリ・アワー１】**
人間性や社会性を促進するための取り組み	平成18年4月～平成19年3月	2年次生アドバイザとして1年次で行なった人間性を高める内容を生活の中に組み入れて実社会で実践できるよう，きっかけとなる内容で展開を試みた。 目標設定，ビジネス基本ルール１，就職ガイダンス，キャリアサポートセンター企画，新聞記事，春夏期の振りかえり。 秋冬期を迎えるにあたって，就活第一戦セミナー，ビデオ「大手コンビニ社長」「たまご型ゲーム機生みの親」「ユニセフ職員」「魂のりんご作り」 「会社を倒産から救う弁護士」，２年次の振りかえり。 **【関連授業科目：アセンブリ・アワー２】**
人間性や社会性を促進するための取り組み	平成19年4月～平成20年3月	３年次アドバイザとして，1・2年次で培ったものを，進路ガイダンスを通じて，再認識し，自分の意志で実践し実社会で通用する人材となれるような展開を試みた。 春夏期において，目標設定，進路ガイダンス「就職の心得」「大学で何を学ぶか」「ビジネスマナーの基本」「企業へのアプローチ」「提出書類作成１」「提出書類作成２」「模擬面接」「進路相談」，春夏期の振りかえり。 秋冬期において，進路ガイダンス「就職活動は始まっている」「就活ｽﾀｰﾄﾀﾞｯｼｭ講座」「就職に対しての心がまえ」「模擬ｸﾞﾙｰﾌﾟﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ」「会社を理解する為の基礎知識」「グループ模擬面接」「個人面接」「先輩と語る」「就活状況確認」，３年次の振りかえり。 **【関連授業科目：アセンブリ・アワー３】**
人間性や社会性を促進するための取り組み	平成20年4月～平成21年3月	4年次アドバイザとして，就職活動のために自らが考え有効に使う時間とした。質問などがある場合は，学生自身がアドバイザや他の教員

		の元を尋ね，問題を解決していく自発的な行動を求め，就職活動に繋がるような展開を試みた。 春夏期において，就職活動準備時間，春夏期及就職活動を振りかえって秋冬期において，進路ガイダンス「未内定者」，未内定者面談，社会人活動準備時間，未内定者面談進路ガイダンス「個人面接」，４年間の振りかえり。**【関連授業科目：アセンブリ・アワー４】**
人間性や社会性を促進するための取り組み	平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月	1 年次アドバイザとして，1 年次全体の取り組みとして，人間性を高めるアセンブリ・アワーの展開を試みた。大学の 4 年間を，社会人として活躍するための準備の期間と位置づけ，人間性を高める自己啓発の場とした。 春学期においては，大学生活に必要なスキルから自己を高める工夫を行った。秋学期においては，社会人基礎力を中心に，自己分析，傾聴力，社会性，倫理観，人間性，規律性，主体性，発信力，仕事に対する意識の高め方，仕事に対する責任感の高め方，1 年間の振り返りと 2 年瀬に向けての心構え。**【関連授業科目：アセンブリ・アワー】**
人間性や社会性を促進するための取り組み	平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月	2 年次チーフアドバイザとして，2 年次全体の取り組みとして，1 年次で行った人間性を高めるアセンブリ・アワーを就職活動につなげていく為の実生活の展開を試みた。大 **【関連授業科目：アセンブリ・アワー】**
自らが考え正確な判断で行動する社会人として実社会で活躍できる人材を育成	平成 17 年 4 月～	「硬式野球部活動」において，下記を実践し現在も継続している。 ①スポーツマンらしいキビキビした行動（挨拶・返事・態度） ②自分に厳しく（その場その場の切り替え） ③責任（集団に所属する事の責任，年齢に応じた責任） ④チームのために，出きる事，やらなければならない事を最優先 ⑤意図することを正しく理解して実践 ⑥反復練習の重要性を理解（正しい動作を身体に覚え込ませないと意味なし）ポイントを押さえることが出来るか出来ないかで，上達するかしないかが決まるスキルアップのためには，絶対に欠かせない練習 ⑦パワーポジションを意識 以上の基本姿勢を掲げ，野球というスポーツを通して人間性（感謝の気持ち・謙虚な心）を養い，大学での学修にも積極的に取り組み，「学び」と「野球活動」を両立させた4年間を過ごすことにより、自己の能力を最大限に発揮し，自らが考え正確な判断で行動する社会人として実社会で活躍できる人材を育成している。
心の在り方，物の考え方を促進する取り組み	平成 20 年 4 月～平成 22 年 3 月	「健康の科学」の授業において，下記を実践した。 ①健康を心の在り方から捉える授業内容とした。 ②スポーツメンタルトレーニングを用い，日常生活に活かせるように

		工夫した。 ③物を考え工夫することはとても大切なことであるが,「考えろ，考えろ」という言葉で終わってしまっているところが多いように感じていたので，どのように考えることが重要なのかを理解できるように工夫した。 心をプラスにする手法だけでなく，例えば,「意欲」「自信」「集中力」「感情」等，日常でもよく用いられる言葉の意味を正しく理解し，そこから「考える」という行動に入るように心掛けた。 この部分での理解が乏しいと，自分では集中力があると勝手に思い込んでいるなどの思い込みで正しい判断が実はできておらず成果が上がらないといったことが起こりうると考えた。 個々の認識で言葉の意味の理解にばらつきがあったので，修正することができた。 授業の終わりに,その時間の授業で感じたことを記入し提出させた。 **【関連授業科目：健康の科学】**
健康を保持増進していく上で，運動することの重要性を促進する取り組み	平成 20 年 4 月～	「スポーツ方法学１・２」の授業において，下記を実践した。 ①ウォーミングアップで，多方向の筋肉を使う複合的な動きを取り入れ，怪我の予防と主運動のスムーズな動作の構築を心掛けた。 ②パートナーストレッチをおこない，学生同士のコミュニケーションを図った。 ③スポーツを通して得れる資質の説明を行い，スキルだけでなく人間性を伸ばす要素があることを意識させた。 ④基本動作の重要性を意識させた。 多方向の筋肉を使うウォーミングアップを取り入れることにより，日常の動作では補えない筋力の強化や柔軟性を高めることができた。また，これを機会に，運動することの重要性を認識させることができた。 **【関連授業科目：スポーツ方法学１、スポーツ方法学 2】**
「社会性を身に付ける」という観点から，運動をおこなうことの重要性を促進する取り組み	平成 24 年 9 月～	「スポーツ方法学２」の授業において，下記を実践した。 ①スポーツの特性である,「スポーツマンシップ」「フェアープレー」の説明を行い，スポーツを通して公正な判断力を身につけることが，社会で必要とされる資質の形成につながることを意識させた。 ②特に,「規律性・責任感・協調性・チームワーク・相手を尊重する」という資質の向上を意識させるために，グループ活動を基本とし，課題を設定し，グループの者全員がその課題を達成するために工夫することを意識させた。 ③各時間の反省と次につながる課題を明確にした。 授業全体の課題として，全員が積極的におこなうことが，相手を尊重

		することにつながることを理解して参加する。積極的から自主的に行動できるようにする。最後まであきらめずにチャレンジすること。工夫をすることをあげた。 **【関連授業科目：スポーツ方法学 2】**
スポーツと他の分野との関わりを理解し社会性を促進するための取り組み	平成 20 年 4 月～	「スポーツ社会学」の授業において，下記を実践した。 ①スポーツは自らが楽しむことや，感動などだけでなく，スポーツを通して起こる社会的現象を理解し，そこからスポーツの役割や課題を考え，スポーツの文化的価値や社会的価値を高め，人間性を豊かにするためにも必要であることを理解できるように工夫した。例えば，集団に属することの意味合いや集団での役割など，日本の文化や伝統の中で育まれてきた自己鍛錬や精神修養，感謝の気持ちなど，技術だけに留まることなく発展してきた歴史が，日本のスポーツにはあるなど。 ②授業毎にその日に習った内容についてレポートと授業の感想を提出させ，その内容を，次の時間にフィードバックさせ他の人の意見を見聞きすることにより学生の視野を広める工夫をした 授業毎にその日に習った内容についてのレポートと授業の感想を提出させた。その内容を，次の時間にフィードバックさせ，他の人の意見を見聞きすることにより学生の視野を広める工夫をした結果，他の人の意見を聞いて自分を高めていく学生が増えた。 **【関連授業科目：スポーツ社会学】**
保健体育教師としての資質を高める取り組み	平成 23 年 9 月～ 平成 24 年 1 月	「保健体育科教育法Ⅰ」の授業において，下記を実践した。 ①保健体育教師を目指す上での自分のスキルや人間性と大学での授業との関連について確認。 ②授業毎にその日に習った内容についてレポートと授業の感想を提出させ，その内容を，次の時間にフィードバックさせ他の人の意見を見聞きすることにより学生の視野の拡大。 ③「なぜ保健体育教師を目指すのか」から「どのような体育教師を目指すのか」への意識向上。 ④教育における時事問題について，グループディスカッションおよび発表をおこなうことにより，学生の視野を広める工夫を行った。 ⑤教育における時事問題について，課題提出を求め，保健体育のスキルだけでなく，教育を見渡せる工夫をおこなった。 **【関連授業科目：保健体育科教育法Ⅱ】**
経営学部新入生導入教育研修指導	平成 23 年 3 月 ～平成 24 年 3 月	大学生活は，４年後社会に出て活躍できる人材に成長するための「準備」の期間とし，人間的な成長と技術的な成長を促すための研修をおこなった。

規律性と傾聴力を高める取り組み	平成27年4月～平成27年8月	「健康スポーツ学概論」の授業において,下記を実践した ①リテラシーを重視した授業展開を心がけた。特に書くことを重視し、授業での理解度の確認をおこなった。 ②毎時の学修内容を,時間を設定し小レポートにまとめ復習を行った。
アクティブラーンニングから指導法を高める取り組み	平成27年9月～平成28年1月	「スポーツ指導法Ｇ（野球･ソフトボール)」の授業において，下記を実践した ①ペアワークで模擬指導を取り入れた ②映像から技能のポイントをピックアップし、指導方法の発表を行った **【関連授業科目：スポーツ実践実習Ｇ（野球･ソフトボール)】**
	平成28年9月～平成30年1月	「スポーツ実践実習Ｇ（野球・ソフトボール」の授業において、毎時目標設定を明確にし、その目標にそった技能が高められるようルールに工夫を凝らし目標達成を促した。その目標達成の成果を自己評価他者評価シートに記述し次回の授業へつながるように工夫した。
	平成28年4月～平成28年8月	「体育科概論」の授業において、グループディスカッションからものを知ることの重要性を認識することにより、知識の必要性を高め、理解力の向上に努めた。
2　作成した教科書・教材		特記事項なし
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　その他		特記事項なし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許		
中学校教諭一級普通免許状 （保健体育）	昭和62年3月	
高等学校教諭二級普通免許状 （保健体育）	昭和62年3月 平成17年12月～	市町村消防署の管轄で実施される応急手当普及のための指導員

応急手当普及員		平成 21 年度から，学生への講習を実施し，毎年約 100 名の普通講習修了者を輩出している。 （平成 21 年度 160 名，平成 22 年度 113 名，平成 23 年度 85 名，平成 24 年度 89 名）
日本ＳＡＱ協会認定 レベル２インストラクター	平成 20 年 10 月 03 日	日本 SAQ 協会は、広くスポーツや健康を楽しみあるいは指導する人々に対し、SAQ［S：スピード(最高速度)A：アジリティ(敏捷性)Q：クイックネス(すばやさ)］トレーニングを通して正しいトレーニング処方を普及・教育する事業を行い、スポーツ選手の基礎体力の向上や一般の健康管理向上に寄与･貢献することを目的として活動している。会員数はおよそ 2600 名で，その内レベル２インストラクターは 71 名（2013.01 現在）である
スポーツリーダー	平成 29 年 12 月 7 日	「スポーツリーダー」は、公益財団法人日本体育協会の「公認スポーツ指導者制度」における基礎資格である。 スポーツ指導やボランティアに関する基礎的な知識を身につけ、地域におけるスポーツグループやサークルなどのリーダー的な存在として活躍できる。
国際レイキ普及協会 認定レイキヒーラー 認定レイキティーチャー	平成 30 年 2 月	レイキとは、健康法、ヒーリング、自己成長のテクニックでる。日本発祥のテクニックで手当療法ともいわれる。人間が本来備えている自然治癒力を高め心身を整えることができる癒しのテクニックである。
２　特許等		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
大阪短期大学・南大阪大学学務課長	平成 16 年 4 月～6 月	学務課長として，入試，教務，学生，就職業務全般を行う（00.04～02.04 学生課長，02.04 からの継続業務）
太成学院大学硬式野球部部長	平成 17 年 4 月～	2005 年 4 月から創部した硬式野球部の立ち上げから，近畿学生野球連盟への加盟申請と以下のような創部主旨で指導を行う。 硬式野球部主旨（「学び」と「野球活動」の両立）
太成学院大学硬式野球部監督	平成 17 年 4 月～ 平成 29 年 10 月	野球というスポーツを通して人間性（感謝の気持ち・謙虚な心）を養い，また，大学での学修に積極的に取り組み自己の能力を高めると共に，野球のスキルを高める中で，大学での「学び」と「野球活動」を両立させた4年間を過ごすことにより、自己の能力を最大限に発揮し，自らが考え正確な判断で行動する社会人として実社会で活躍できる人材を育成することを目指している。

		同大学硬式野球部部長・監督として上記主旨を踏まえ，最新スピード養成トレーニング（ＳＡＱ）を取り入れ，スピードと基礎体力の高い選手の育成に努めている 2005 年春季リーグ戦Ⅲ部 3 位 秋季リーグ戦Ⅲ部 2 位 2006 年度春季リーグ戦Ⅲ部 2 位 秋季リーグ戦Ⅲ部優勝 入替戦でⅡ部昇格 2007 年度春季リーグ戦Ⅱ部 3 位 秋季リーグ戦Ⅱ部 4 位 2008 年度春季リーグ戦Ⅱ部優勝 入替戦でⅡ部残留 秋季リーグ戦Ⅱ部 3 位 2009 年度春季リーグ戦Ⅱ部 2 位 秋季リーグ戦Ⅱ部 6 位 入替戦でⅢ部降格 2010 年度春季リーグ戦Ⅲ部優勝 入替戦でⅡ部昇格 秋季リーグ戦Ⅱ部 2 位 2011 年度春季リーグ戦Ⅱ部 4 位 秋季リーグ戦Ⅱ部 6 位 入替戦でⅡ部残留 2012 年度春季リーグ戦Ⅱ部 6 位 入替戦でⅢ部降格 秋季リーグ戦Ⅲ部 2 位 2013 年度春季リーグ戦Ⅲ部 3 位 秋季リーグ戦Ⅲ部 4 位 2014 年度春季リーグ戦Ⅲ部 2 位 秋季リーグ戦Ⅲ部 4 位 2015 年度春季リーグ戦Ⅲ部 2 位 秋季リーグ戦Ⅲ部 4 位 2016 年度春季リーグ戦Ⅲ部 2 位 秋季リーグ戦Ⅲ部 2 位 2017 年度春季リーグ戦Ⅲ部 2 位 秋季リーグ戦Ⅲ部優勝 入替戦でⅡ部復帰
健康運動実践指導者主任教員	平成 17 年 4 月～	財団法人健康体力作り事業財団健康運動実践指導者養成校認定に向けて，シラバス・施設等の調整を行ない養成校として認定を受け，主任教員として，健康運動実践指導者資格取得のサポートを行なっている。

健康運動実践指導者資格受験対策講座	平成 17 年 9 月～	健康運動実践指導者資格の受験にかかわる実技試験対策を行い，資格取得のサポートを行っている。
全日本リトルシニア協会橿原磯城リトルシニア　トレーニング講習会講師	平成 20 年 12 月	身体能力の向上を目的としたトレーニング指導
大阪府柏原市旭ヶ丘連合子ども会女子ソフトボール旭ヶ丘シャイニーガールズ（小学校 1 年生～6 年生）指導	平成 24 年 11 月～平成 25 年 7 月	身体能力の向上を目的としたトレーニング指導及びソフトボール技術指導
４　その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発行雑誌又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文等） 1．大学教育におけるアセンブリ・アワーの役割	単著	平成 21 年 3 月	太成学院大学紀要第 11 巻 28 号	大学全入時代を迎え，その約 10 数年前より，大学教育の様々な改革が叫ばれてきた。18 歳人口の減少にともない，既存の大学の考え方では対応できず，研究に重点を置く「研究を中心とする大学」から多様な学生への教育・指導に重点を置く「教育を中心とする大学」への転換という大きな波が押し寄せ，アドミッションポリシー，ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ　以降ＦＤと表記する），第三者評価等の言葉が大学教育界を賑わす中で，著者が太成学院大学[1]で担当したアセンブリ・アワーの取組みに焦点をあて，2005 年 4 月～2009 年 3 月を振り返り，「教育を中心とする大学」のアセンブリ・アワーの役割について考えた。

２．大学生のスキー実習参加による教育効果について	単著	平成22年3月	太成学院大学紀要第12巻29号	本研究では，大学女子学生が短期間のスキー実習参加を通して，どのような気づきや変化があるかを検討することである。分析方法は，５因子25項目からなる質問紙と，４因子40項目からなる質問紙調査を実習前後に実施した。実習前後に一部の項目に有意差が認められた。また，自由記述より，実習に参加することで，ライフスキル獲得が示唆された。 共同研究につき本人担当部分抽出不可能 （高山昌子，雜賀亮一）
３．高校野球の地方大会における先制点の考察	単著	平成22年3月	太成学院大学紀要第12巻29号	野球は,「各チームは，相手チームより多くの得点を記録して，勝つことを目的としている。正式試合が終わったとき，本規則によって記録した得点の多い方が，その試合の勝者となるである」（公認野球規則，2009）基本的には，1回から9回の間で相手チームよりたくさん得点し，勝つことを目的としておこなわれるスポーツであり，サッカーやラグビー等のように時間に制約されることなく，同じ条件で攻守が与えられる。本研究では，時間に制約されることのない野球において，先制点が試合の勝利に優位を示すかを調べた。先制点をあげたチームの勝率から，先制点が勝敗にどのような影響を及ぼすかを分析すると共に，勝つために望ましいゲーム展開を考えた。結果，先制点をあげたチームの勝率が高く，先に得点することが勝敗に影響を及ぼすことが判った。結果をもとに勝つために望ましいゲーム展開を考えると，前半（1回～3回）に全神経を集中させ，この間に先制点をあげる為の攻守の戦術をいの一番に考え，明確にして試合に臨むことが重要であるといえる。
４．高校野球の地方大会における先制点の考察 －第91回･第92回全国高等学校野球選手権大会地方大会結果から－	単著	平成23年3月	太成学院大学紀要第13巻30号	第92回全国高等学校野球選手権大会地方大会（以下，第92回地方大会とする）49地区の試合結果をもとに，先制点をあげたチームの勝率から，先制点が勝敗にどのような影響を及ぼすかを分析すると共に，勝つために望ましいゲーム展開を考えた。結果，第91回全国高等学校野球選手権大会地方大会（以下，第91回地方大会とする）と同様に，先制点をあげたチームの勝率が高く，先制点をあげることが勝敗に影響を及ぼすことが判った。
５．第92回全国高等学校	単著	平成23年3	太成学	第92回全国高等学校野球選手権大会（以下，第92回全国

野球選手権大会における先制点の考察		月	院大学紀要第13巻30号	大会とする）において先制点をあげたチームの勝率から先制点が勝敗にどのような影響を及ぼすかを分析した結果，先制点をあげたチームの勝率が高く，先制点をあげることが勝敗に影響を及ぼすことが判かった。第92回全国大会においては，先制点が勝利に結びつく割合が，第92回地方大会よりも大きく，改めて先制点の重要性を認識することとなった。全国大会における試合は，先制点をあげることで80%以上の勝率が得られる。先攻後攻においては，1回戦～準々決勝以前の試合は後攻を，準々決勝以降の試合は先攻を選ぶ。前半（1回～3回）で先制点を得点することがポイントとなるが，地方大会に比べ，初回における先制点のウエイトが小さくなっており，中盤（4回～6回）までの粘りが必要となり，地方大会に比べ接戦になる試合が多いと言える。 野球は「各チームは，相手チームより多くの得点を記録して，勝つことを目的としている。正式試合が終わったとき，本規則によって記録した得点の多い方が，その試合の勝者となるである」（公認野球規則，2009）ことから，早い段階から得点を重ねていくことが重要である。
（その他）				特記事項なし

（人間）佐々木　豊

平成30年　3月8日

氏名　　佐々木　　豊　　印

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 ・「大阪教育大学二部実地指導講師」	・平成2～3年の各1日	・大阪教育大学二部学生に対する実地指導（国語科教育方法論「児童詩教育の実際」）を大阪教育大学非常勤講師として、大阪教育大学・中西一弘教授（当時）、小田迪夫教授（当時）の依頼を受け実施。
・「小学校国語科」指導法の研修会講師	・平成15年6月25日 ・平成15年11月20日	・大阪府高槻市立真上小学校校内研修会講師 テーマ：「聞く・話す」について考える ・大阪府箕面市立豊川南小学校校内研修会 テーマ：「聞く・話す」について考える

	・平成 18 年 11 月 29 日	・大阪府茨木市立東奈良小学校校内研修会講師 テーマ:「話す・聞くの指導の在りかたについて」
	・平成 19 年 7 月 24 日	・大阪府茨木市立玉島小学校夏季教職員研修会講師 テーマ:「国語科の現状と今後の方向性について」
	・平成 22 年 8 月 28 日	・大阪府富田林市立久野喜台小学校夏季研修会講師 テーマ：豊かな言語力を育てるために
	・平成 22 年 9 月 22 日	・大阪府寝屋川市立木田小学校校内研修会講師 テーマ:「子どもの詩の書かせ方」
	・平成 22 年 12 月 9 日	・大阪府池田市立神田小学校校内研修会講師 テーマ:「学び合い、深め合う授業づくり」―聞き合い、話し合うことを通してコミュニケーション力を高める―
	・平成 23 年 6 月 28 日	・大阪府寝屋川市立木田小学校校内研修会講師 テーマ：指導要領上での「読むこと」の指導のポイン　　ト
	・平成 23 年 8 月 5 日	・大阪府寝屋川市立木田小学校校内研修会講師 テーマ：これからの時代に求められる読解力
	・平成 23 年 8 月 20 日	・大阪府寝屋川市立木田小学校校内研修会講師 テーマ：文学教材を通して、自分の思いを表現し、伝 え合う力を育てる
	・平成 23 年 9 月 21 日	・大阪府寝屋川市立木田小学校校内研修会講師 テーマ：文学教材を通して、自分の思いを表現し、伝 え合う力を育てる
	・平成 24 年 6 月 20 日	・寝屋川市立木田小学校校内研修会講師 テーマ:「国語科」の“自分の考えを持てる子どもを育てる―６年「風切るつばさ」（東京書籍）―
	・平成 24 年 9 月 26 日	・寝屋川市立木田小学校校内研修会講師 テーマ:「国語科」の“自分の考えを持てる子ども”を育てる―４年「ごんぎつね」（光村図書）―
	・平成 24 年 10 月 10 日	・寝屋川市立木田小学校校内研修会講師 テーマ:「国語科」の“自分の考えを持てる子どもを 育てる―３年「モチモチの木」（光村図書）―

	・平成 24 年 10 月 24 日	・寝屋川市立木田小学校校内研修会講師 テーマ:「国語科」の“自分の考えを持てる子どもを 育てる―５年「大造じいさんとガン」(光村図書)―
	・平成 24 年 10 月 25 日	・箕面市立北小学校校内研修会講師 テーマ:「国語科において表現し、交流することを通 して考えを深める授業づくり」―１年「くじらぐも」 (光村図書)―
	・平成 24 年 11 月 1 日	・箕面市立北小学校校内研修会講師 テーマ:「国語科において表現し、交流することを 通して考えを深める授業づくり」―６年「くじらぐ も鳥獣戯画を読む」(光村図書)―
	・平成 24 年 12 月 5 日	・寝屋川市立木田小学校校内研修会講師 テーマ:「国語科」の“自分の考えを持てる子ども育てる―２年「わたしはおねえさん」(光村図書)―
	・平成 25 年 10 月 31 日	・富田林市立高辺台小学校校内研修会講師 テーマ:健やかな「心」と「体」を育む―３年「すがたをかえる大豆」(光村図書)
	・平成 25 年 12 月 20 日	・富田林市立高辺台小学校校指導案検討会講師 テーマ:健やかな「心」と「体」を育む―５年「すいせんします」(光村図書)
	・平成 27 年 11 月 25 日	・阪南市立桃の木台小学校内研修会講師 国語科研究授業「モチモチの木」
	・平成 27 年 12 月 2 日	・吹田市小学校国語科研究会指導助言 於・吹田市立千里第三小学校
２　作成した教科書・教材 ・学校図書小学校国語教科書	・平成 4 年 4 月	・児童詩教材の選定および編集
・大阪書籍小学校国語教科書	・平成 4 年 4 月	・児童詩教材の選定および編集
・「みんなと学ぶ小学校国語」	・(平成 27 年度版) 平成 27 年 4 月	・著作者

学校図書版	・(平成 31 年度版) 平成 31 年 4 月発行版	著作権
太成学院大学佐々木豊講義テキスト1 3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成 28 年 9 月 1 日発行	講義テキスト「先生ってすばらしい」(「国語科教育」「「子ども発達学基礎演習」等で利用)
	平成 24 年 4 月 2 日	・教職支援センター委員 ・太成学院大学教職支援センター委員
	平成 26 年 4 月 1 日	・太成学院大学人間学部准教授
	平成 26 年 4 月 1 日	・太成学院大学教職支援センター長
	平成 28 年 4 月 1 日	・太成学院大学人間学部教授
4　実務の経験を有する者についての特記事項 ・大阪府公立小学校国語科教育研究会会長	・平成 19 年 4 月～平成 23 年 3 月	・大阪府公立小学校国語科教育研究会会長として、大阪府下の公立小学校の国語教育の指導に当たる。
・子育て支援推進会議講師	・平成 21 年 9 月 1 日	・大阪府池田市渋谷中学校区池田市地域子育て支援推進会議講師 テーマ：子どものことば・子どものこころ
・公開研究会国語科指導助　　言	・平成 23 年 2 月 11 日	・大阪教育大学附属池田小学校公開研究会国語科指導助 言 テーマ:「自立し協同する力を育む教育」ーコミュニケーション力を基盤としてー
・公開研究会国語科指導助　　言	・平成 23 年 2 月 19 日	・大阪教育大学附属天王寺小学校公開研究会国語科指導助言 テーマ:「創造性を育成する授業」
・国語教育研究大会講師	・平成 23 年 12 月 1 日	・国語教育者協議会主宰「国語教育研究大会」ワークショップ講師 テーマ:「詩を味わい創作させる授業づくり」

・公開研究会国語科指導助 言	・平成 24 年 2 月 24 日	・大阪教育大学附属池田小学校公開研究会国語科指導助　言 テーマ:「自立し協同する力を育む教育」ーコミュニケーション力を基盤としてー
・夢ナビライブ公開模擬授業	・平成 27 年 6 月 20 日	・夢ナビライブ 2015 於・インテックス大阪 「私のイメージ辞典を創ろう」
	・平成 28 年 6 月 18 日	・夢ナビライブ 2016 於・インテックス大阪 「私のイメージ辞典を創ろう」
・国語研修会講師	・平成 24 年 7 月 6 日	・吹田市教育研究会国語部研修会講師 テーマ:「子どものことば・こどものこころ」
	・平成 24 年 8 月 29 日	・箕面市立北小学校夏季校内研修会講師 テーマ:「国語科において表現し、交流することを通して考えを深める授業づくり」
	・平成28年11月11日	・寝屋川市立東小学校第８回国語科授業研究会 全体講演 会講師 演題:「先生ってすばらしい」
・あのね文庫審査員	・平成30年2月25日	・一般財団法人泉佐野市文化振興財団・むか新共催 「あのね文庫詩」コンクール審査員
・高大連携講師	・平成 24 年 9 月 13 日	・大阪府立貝塚高校「初等教育体験授業」 テーマ:「イメージ辞典」を創ろう
・高大連携講師	・平成 25 年 11 月 28 日	・大阪府立長野北高校「初等教育体験授業」 テーマ:「漢字の感じ」
・高大連携講師	・平成 27 年 1 月 22 日	・大阪府立信太高校「初等教育体験授業」 テーマ:「イメージ辞典」を創ろう
	・平成 27 年 2 月 5 日 ・平成 27 年 11 月 26 日	・大阪府立高石高校「初等教育体験授業」 テーマ:「イメージ辞典」を創ろう
	・平成 28 年 6 月 4 日	・大阪府立貝塚高校「初等教育体験授業」 テーマ:「イメージ辞典」を創ろう ・太成学院大学高等学校 テーマ:「先生ってすばらしい」
	・平成 29 年 5 月 20 日	・太成学院大学高等学校 テーマ:「先生ってすばらしい」

５　その他 教育文化功労賞受賞	・平成 23 年 11 月 3 日			・大阪府池田市教育文化功労賞受賞
研究業績等に関する事項				

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又発表の年月	発行所、発行雑誌又は発表学会等の名称	概要
・『私の児童詩教育入門』私家版	・単著	昭和 60. 3	・私家版	・これまでの私の児童詩論をまとめたもの
・表現学大系「各論篇１８『近代詩の表現２』」	・共著	・昭和 61.7	・第一法規出版	教育大学教育実践シリーズ２ 「国語科授業の課題と創造」 ・７.「詩の表現指導（5 年)」
・表現学大系「各論篇１７『近代詩の表現１』」	・共著	・平成 1. 8	・第一法規出版	・第 9 章「三好達治・中野重治。草野心平・中原中也・金子光晴・西脇項三郎・・村野四郎・小野十三郎の小・中・高の国語教科書に取り上げられた詩教材についての一考察
・表現学大系「各論篇１９『近代詩の表現３』」	・共著	・平成 3.9	・教育出版センター	・第 4 章「『詩と教育』の場合」「資料・小中高の詩教材一覧」
・「小学校授業づくりアイデア全書１・国語」	・共著	・平成 4.3	・教育出版センター	・第２部「自己表現力を育てる授業づくりのアイデア」 ３.「辞書利用の指導」
・「新版国語実践指導全集第 10 巻『言語事項の指導２・文字・漢字・表記』」	・共著	・平成 4.4	・教育出版センター	・第１章「小学校第１学年の実践指導」
・「コロンバスの夢風船」	・単著	・平成 14.7	・ぎょうせい	・在外教育施設北米オハイオ州コロンバス補習授業校派遣教員時代の学校経営論（日本図書館協議会選定図書）

＜学術論文＞ ・「イメージ辞典」作り	・単著	・昭和 50.3	・日本教育図書センター	・小学４年の児童に、辞書作りの手法で、詩を書かせる意味についての考察
・「自らを高める表現活動を求めて」	・単著	・平成 2.4	・創友社	・個が作る学級集団は、競争相手としての集団ではなく、互いに仲間として認め合い、学び合える学級集団でなければならない
・「子どもが生きる学級・学年経営」	・単著	・平成 6.11	・「国語と教育・９号」大阪教育大学国語教育学会	・宮沢賢治、大村はま、エドモンズを例に学級経営のポイントについて論述した
・「アメリカで学ぶ日本の子どものものの見方・感じ方」	・単著	・平成 11.3	・「大阪教育新潮・125号」大阪公立小学校教育研究会	・在外教育施設で学ぶ邦人子弟が、異文化の中で日本語を通して苦悩し、成長していく過程を論考
・「異文化の中で学ぶ日本の子どもたち―在外で学ぶ児童・生徒の言語表現から見えてくるもの―」	・単著	・平成 12.1	・「大阪教育新潮・142号」大阪公立小学校教育研究会	・大阪府教育弘済会教育論文・１９９９年度「入選」
・伝え合うって素敵だな」	・単著	・平成 17.7	・「国語と教育・２４号」大阪教育大学国語教育学会	・伝え合うことにとって、最も大切な事は共感する心。

「在外教育施設で学んだこと―北米補習授業校での学校運営―」	単著	平成 18.12	・大阪府教育弘済会教育論文	在外教育施設（補習授業校）の学校運営の考え方は、日本の公立学校での学校運営の考え方にとって有効である。 日本の公立学校の管理職にとって、在外教育施設の経営という考え方は学ぶ価値がある。 国内教員に比して圧倒的に採用条件（賃金等）の悪い現地採用教員が、邦人子弟のために頑張る姿勢に、国内正規教員も学ばなくてはならないのではないかと述べた。
「夢見る国語」	単著	平成 19.5	・「大阪教育新潮・182号」大阪公立小学校教育研究会	PISA 型読解力の弱点を克服するのは、人間理解の国語の追及にあるのではないかという論点。 これまでの日本の国語の授業の実際は、『考える』ことより、結果としては『主題の暗唱』に陥っているのではないか。
「スイスで鷗外の『高瀬舟』を読む」	単著	平成 20．2	「大阪教育新潮・186 号」大阪公立小学校教育研究会	欧州に在る派遣教員のいない在外教育施設に、財団法人『海外子女教育振興財団』より巡回指導のため出かけた。 スイス人と日本人の両親を持つ子弟に、鷗外の『高瀬舟』の師範授業を実施した。音読さえすらすらとできない現地邦人が＜尊属殺人＞＜足るを知る＞などの難解なテーマについて、自分の考え方を発表できた。 覚える学習習慣から、考える学習習慣への転換が急務と述べている。
「ベストセラー」	単著	平成 20.5	「国語通信・第３５号」大阪府小学校国語科教育研究会	詩人で編集者の水内喜久雄氏の編詩集「一遍の詩があなたを強く抱きしめることがある」の編集過程（詩集に入れる作品選びのため１日に１２時間ほど、何日も作品を読んで編集した）に、教師が教室で授業をするための準備に、その姿勢を学ぶべきではないかと、論述。
「心を伝え合うための力を求めて」	単著	平成 21.5	「ことばの学び」三省堂国語教育	現代の便利さを無視することはできない。それでも、技術や方法の習得だけが「心を伝え合う力」に適うものではない。 構造や仕組み、意図を理解するという学

				習の展開の向こうに、「理解できるが感じない子どもたち」の出現を期待しているわけではない。
「ＰＴＡの仕事」	単著	平成 21.6	「国語通信・第３７号」大阪府小学校国語科教育研究会	新しい学力観を定着さるためには、学校・地域・保護者の共通理解が必要と言う論調。親や教師も、感じ・考える子どもたちを育てる教育を大切にする風潮を起こし、支援してほしい。その親や教師の風潮・支援が、世界標準の学力に届く子どもたちを育てることになるのではないか。
「サプリメントでなく」	単著	平成 22.5	「国語通信・第３９号」大阪府小学校国語科教育研究会「池田のＰＴＡ」池田市立学校園ＰＴＡ協議会「国語通信・第４１号」大阪府小学校国語科教育研究会	活用型読解力の不足を、サプリメントを飲むがごとくに読むのではなく、常に文章全体・物語全体を読み味わう、ということが大切ではないか。
＜新聞連載＞「子どものことば・子どもの心」	単著・連載	平成 23 年 8 月 9 日～平成 24 年 7 月 3 日まで毎週火曜日に連載	「大阪日日新聞」大阪版・コラム	小学生の書いた詩作品を分析し、新聞読者(一般社会人)に、子どものことばを通して、子どもの物の見方・考え方を紹介している。
「先生ってすばらしい」	単著・連載	平成 24 年 7 月～平成 28 年 4 月 25 日（週刊）	「大阪日日新聞」大阪版・コラム	子どもと先生のかかわりを子どもや大人の詩や作文を通して示して、先生という職業の楽しさ、厳しさを伝え、読者〈学生・保護者〉に、教師という職業の素晴らしさを感じてもらい、学生が、一人でも、志のある教員に憧れたり、子を持つ保護者が、先生を理解したりすることができることに

コラム「澪標」		平成 28 年 7 月 11 日～12 月 26 日	「大阪日日新聞」大阪版・コラム「澪標」	少しでも貢献できることを目指します。そして、全体として「現代教育事情・現代教師事情」としている。 「『子どもの詩の会』で出会った人・ことば・心」を 5 回連載。
＜論文＞ 「子どもの詩の書かせ方」	単著	平成 25 年 3 月	太成学院大学紀要第１５巻３２号	小学校現場での児童詩の創作指導を振り返り，児童に詩を書かせる意義と，創作児童詩の特徴について行った一考察である。本考察は又,「小学生の詩の書かせ方」を求める一つの「児童詩教育私論」の追究でもある。
子どもの詩の教育「日本の小学校と外国の小学校(日本とイギリス)」	自由研究発表	平成 26 年 5 月 17 日	全国大学国語教育学会	36 年間、小学校で子どもに詩を書かせてきた。今般、大学で勤務する機会を得た。 この機会に、これまでの私の児童詩教育の実践を振り返り、児童に詩を書かせる意義について考えてみたい。　また、諸外国の小学校の子どもの詩の書かせ方との比較を、今後の新たな研究テーマとしていきたい。
「子どもの詩の書かせ方（2）」	単著	平成 27 年 3 月	太成学院大学紀要第１７巻３４号	これは, 筆者が 2013 年度版太成学院大学紀要で表した「子どもの詩の書かせ方」の 4 年生の子どもの詩の書かせ方の細案である。 これまでの日本の国語の教室では,結果として考えることより覚えることを強いる授業が主流となっていたのではないか。これからの国語の授業で大切にしなければならないことは,未来を想像し,新しい日本の文化を創造することに繋がる自分で思うこと，自分で考えることである。
＜研究会＞ 関西子ども詩の会主宰		平成 29 年 7 月 17 日（月・海の日）		・『吉永幸司・高丸もと子の「かんたん！詩の創作指導～子どもが喜ぶ詩の指導 」』の著者・高丸もと子さんを迎えての学び合い

		平成 29 年 9 月 9 日（土） 平成 29 年 11 月 23 日（木・勤労感謝の日）		・園田雅春（前・大阪教育大学教授）さんを迎えての学び合い ・詩集『ひかりあつめて』（第 40 回日本児童文芸家協会賞）の著者杉本美由起さんを迎えての学び合い

（人間）井野　よし子

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年　3 月　9 日

氏名　　井野よし子　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
乳幼児保育・家庭支援・地域資源の活用	乳幼児保育・子育て支援・社会資源・地域連携・実践教育・養育者の意識

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
「図画工作」・「総合保育内容」	1995 年 4 月	日本ビジネス福祉専門学院保育課程において担当。
「保育実習事前事後指導」	2001 年 4 月	大阪樟蔭女子大学人間科学部において担当。
「幼児臨床学」・「図画工作Ⅰ.Ⅱ」	2007 年 4 月	国立大学法人大阪教育大学教育学部教員養成課程において担当。また、同大学にて実地指導を担当。
「保育内容」・「教育実習指導」・「教育実習」・「家庭支援論」	2012 年 4 月	樟蔭東学園短期大学幼児教育学部において担当。
「障がい児保育Ⅰ.Ⅱ」・「乳幼児保育演習Ⅰ.Ⅱ」・「図工科概論」・「教育実習指導」・「保育実習指導」・「教育実習」・「保育実習」	2013 年 4 月	太成学院大学人間学部子ども発達学科において担当。
2　作成した教科書，教材		

「みみちゃんの冒険」（新風書房）	1991 年 3 月	子どもと保育者が作る絵本を制作・出版。
「幼児臨床学・図画工作のワークシート」 「保育実習ハンドブック」	2008 年 4 月	国立大学法人大阪教育大学乳幼児教育学部・教員養成実地指導のための教材を作成。
「保育実習ノート」	2014 年 3 月	太成学院大学人間学部子ども発達学科保育実習指導のための教材を作成。
「幼稚園実習の手引き」	2015 年 3 月	太成学院大学人間学部子ども発達学科幼稚園実習指導のための教材を作成。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
「現在の教育問題を考える」	平成 15 年 10 月	「実践教育学論文集－特集学校評価・授業評価を問う」を大学において
「特別支援における現状と課題」	平成 16 年 3 月	「大阪府下における聞き取り調査」―実践学校教育研究講座において
「幼稚園・保育園との連携プロジェクトの試み」（大学美術教育学会）	平成 23 年 9 月	学会にて発表し、研究論文集に修める
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
大阪府公立学校八尾市立幼稚園職員	1972 年 4 月～1996 年 3 月	八尾市立幼稚園にて幼稚園教諭として勤務。この間、府下の研究指定を受け八尾市立幼稚園試行園として「4 歳児の望ましい発達を促す保育のあり方」の実践研究を深める。
文化講座「児童画教室」 「子育て支援の今、協同子育てのとりくみ～地域の中で豊かな子育てを～」	1996 年 4 月 2001 年 8 月	住吉武道館文化講座にて幼児に絵の指導を行なう。 大阪保育子育て人権研究センター情報誌「ちゃいるどネット osaka」。第 18 号 8 月号 pp. 23～24（単著）
保育所民営化に伴う運営者選考委員	2008 年 1 月	大東市立の保育所民営化に伴う運営者の選考について、民間の運営者の選考委員を務める。
5　その他		
人と人とが繋がる MIZUKOSHI 里山プロジェクト	2006 年 4 月～	子育て支援の一環として里山をフィールドとした地域コミュニティづくりを大阪府八尾市水越を拠点に地域住民の方と共に、地域環境を生かしたイベントやワークショップを展開。
地域再生プロジェクト「アートによる創造のまち」シンポジューム	2008 年 2 月	文化庁主催による「文化芸術による創造のまち」支援事業において、「アートによる創造のまち」の企画に関わり、児童を対象にした地域の未来図を募集し審査員を担当。

「人間」と「歴史」～出会い・学びそして夢実現～地域社会の再構築をめざす	2015年5月	はびきの市民大学講座において、地域コミュニティづくりについて里山プロジェクトの実践データを基に、人の出会いや交流を通しての相互扶助を提言。
「和の文化」と地域社会	2016年2月	はびきの市民大学短期講座において、「日本の伝統行事と食の関わり」、「おいしく学ぼう郷土の味」、「伝統文化と食育」を3回シリーズで講座を担当。
日本の食文化の伝承「手前味噌作り」	2017年2月	堺市美原保健センターにおいて、地域住民を対象に食育講座を担当。 府立藤井支援学校において、通学する学童とその養育者を対象に食育講座を担当。
日本の食文化の伝承「なにわの伝統野菜	2018年1月	堺市中保健センターにおいて、地域住民を対象に食文化の伝承について　の講演を担当。
子どもの食育推進「食育と子育て支援」	2018年2月	堺市美原区役所大会議室において、地域住民を対象に食育推進の重要性と　子育て支援活動についての講演を担当。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
保育士資格証明書	昭和45年3月	
幼稚園教諭一種免許状	平成12年8月	
修士（教育学）	平成17年3月	
食育指導士認定証	2016年12月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
保育所民営化に伴う運営者選考委員	2008 年 1月	大阪府大東市立保育所民営化。
4　その他		
地域再生プロジェクト「アートによる創造のまち」シンポジウム	2008 年 2月	文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

（著書） （著書） 1.「保育所と子育て支援センターの利用者の比較」	単著	2002 年 5 月	第 56 回日本保育学会研究論文集	保育所、子育て支援センター各利用者の養育者の人的サポート体制及び生活習慣や姿勢の比較を通し、養育者に寄り添う子育て支援センターのあり方を検証する。pp. 89～90
2.「現代の教育問題を考える」学校評価・授業評価	共著	2003 年 10 月	「実践教育学論文集第 8 号」	第 55 回実践教育学論集。第 8 号 pp. 33～38（佐藤琢也らと共著） pp. 51～53 （単著）
3.「大阪府下の特別支援教育の現状と課題」	単著 共著	2004 年 3 月	大阪教育大学 「実践学校教育研究講座第 7 号」大阪教育大学	大阪府下における特別支援教育の現状と課題について概説。幼児教育における造形的な創造活動の基礎学習指導方法を中心に造形表現について実践例を紹介し、その中で学習方法の確立や再検討の重要性を提唱 pp19～21 井野よし子、高橋登他 4 名
4.「地域資源を活用した子育て支援の組織化」―K市 M 子育て支援センターの 7 年間の発展過程の分析からー	共著	2005 年 3 月	学校教育専攻修士論文抄録第 5 号	アクション・リサーチの方法論を用いて、保育園の子育て支援の活動を分析し、地域資源を生かした子育て支援のあり方を筆者も共に関わりを持ち追求する。Pp91
5.「小規模型地域子育て支援センターの社会資源を生かした子育て支援」―母親の意識調査からー	共著	2010 年 10 月	家政学研究（奈良） VoI. 57No 1 資料	子育て支援センターを利用する養育者（母親）に子育て環境に対するインタビュー調査を実施し、KJ 法で分析し子育て支援のあり方について纏める。ｐｐ 9～17
（その他） 1.「子どもと保育者が作る絵本」	単著	2001 年 5 月	第 55 回日本保育学会研究論文集	幼児期の体験を“つぎたし話”基に実践教材としての絵本制作に至った経緯と方法例を論述した。ｐｐ 39
2.「地域と共にある子育て支援をめざして」	単著	2003 年 5 月	第 56 回「日本保育学会」研究論文集	子育て支援センターを中核とした、民生児童委員の子育て支援センターへの関わりが地

				域のボランティア人材の発掘と育成と繋がった事例。
3.「地域における子育て支援」 ～出会い・触れ合い・支え合い～		2008 年 11 月	大阪府次世代育成支援室 口頭発表	「官民連携子育て支援推進フォーラム」シンポジュムにて～地域と親の願いを包括できる地域子育て支援センター～地域資源を積極的に活用するネットワークの創造をめざした取り組みの必要性を論述した。ｐｐ96～97
4.「幼稚園・保育園との連携プロジェクトの試み」	共著	2011 年 9 月	第 50 回大学美術教育学会 ポスター発表	これまで幼児教育に 26 年間務めた経験を生かし、教員養成講座の美術教育講座と地域の民間保育園や公立幼稚園と連携し、関連施設の幼児を対象とした幼児造形へのアプローチを実施、幼児期の発達段階を考慮した図画工作の指導法を担当。 P９５　井野よし子、加藤可奈衛
PBL を基にした大学と社会（地域）をつなぐ調査研究～若者の朝食調査	ゼミ学生との共著	2018 年 3 月	太成学院大学紀要第２０巻（通号３７号)	学外組織連携型 PBL の一環として、堺市美原保健センター管理栄養士や健康づくり食生活改善推進協議会と協働企画し、若者の朝食についてゼミ研究として調査。ｐｐ215～218
PBL を基にした大学と社会（地域）をつなぐ調査研究～学生の主体的な学びについての考察		2017 年 6 月	第 12 回日本食育学術会議学会　口頭発表	PBL 活動では担当制や役割分担を実施することで、自覚と責任が明確化でき主体的に活動できることが実証された。また、体験や仲間と共に協働してやり遂げたことへの充実感がやる気や自信へと繋がっている。地域のかかわりを通し、自身で考え行動できる人材育成の事例紹介。
（教育実践記録等） 1.「すくすく子育て支援プロジェクト」		2013 年 8 月		地域連携を視野に子育て支援活動を計画し、学生を主体とした菜園活動や大学構内にある自然材において、森林再生

				活動を実施。「すくすく子育ての森づくり」をテーマに里山再生活動を含めた地域の子育て支援の拠点づくりを目標として、ボランティア団体 Save ForestX と連携して進めることにした。当、実践事業について（社）国土緑化推進機構「緑の募金公募事業」を申請し、助成金が認められる。
（その他） 特記事項なし				

（人間）尾島　重明

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年　3 月　20 日

氏名　尾島重明　印

研究分野	研究内容のキーワード
教育学	教育基礎論・教育社会学・教育課程論・子育て支援・道徳教育

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例	平成 14 年 4 月 ～	●学生のキャリア発達の支援、実践。具体的には、就実短期大学幼児教育学科長、三重中京大学学生相談室所長、関西大学教職支援アドバイザ-、太成学院大学学生相談員として、学生一人一人にふさわしいキャリアを形成していくために必要とされる意欲・態度･能力を育てる指導､支援。 ●担当授業科目の学生に言語活動・コミュニケ-ションの充実を図る実践。具体的には､担当授業科目学生に小論文(共通課題)を課し「土光杯全日本青年弁論大会」に応募。平成 17 年～24 年まで毎年出場・入選(8 年連続産経新聞掲載) ●担当する全ての授業の終了時､受講生からミニレポ-トに質問、感想を書いてもらい、次回授業の導入時にその応答を行うなど、アクティブ・ラ-ニングを意識した授業を行っている。

2　作成した教科書，教材	平成１４　年４月 ～	●尾島重明編著『保育者の職能論』（再掲） 鈴木祥蔵監修岩堂美智子他編著『子どもの人権と保育・教育』（再掲）、押谷由夫他編『保育と道徳』（再掲）、石田美清編著『子どもと教師のための教育原理』（再掲）を分担執筆授業科目の教科書、副読本して使用。 ●参考になる資料をプリントにし、授業の進行に合わせて配布して教材として使用。
	平成17年4月	●鈴木祥蔵監修岩堂美智子他編著『子どもの人権と保育・教育』（再掲）を分担執筆授業科目の教科書、副読本して使用。
	平成18年4月	●尾島重明・田中亨胤他編著『保育者の職能論』（再掲）授業科目の教科書、副読本として使用。
	平成18年4月	●押谷由夫他編『保育と道徳』（再掲）を分担執筆授業科目の副読本して使用。
	平成22年4月	●石田美清編著『子どもと教師のための教育原理』（再掲）分担執筆授業科目の副読本して使用。
	平成29年3月	●石田美清編著『子どもと教師のための教育原理』改訂２版（再掲）分担執筆授業科目の副読本して使用予定
	平成29年3月	●横山真貴子編著『子どもと保育者でつくる人間関係ー「わたし」から「わたしたちへ」-』
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		●堺・泉北地区中学校体育連盟柔道専門委員長・部長（昭和63年4月～平成14年3月） ●堺市・中国、連運港柔道友好訪中団【中学柔道チーム帯同】（平成 5年7月） ●文部省海外派遣教員【ローマ日本人学校校園長/欧州日本人学校校長会長】（平成８年 1月～平成11年3月） ●大阪府中学校校長（平成11年4月～平成14年3月）

		●就実短期大学教授・幼児教育学科長(平成 14 年 4 月～平成 19 年 3 月) ●児童福祉施設第三者評価機関評価調査者認定研修終了(平成 14 年 10 月 20 日) ●三重中京大学、短期大学部教授・学生相談室所長(平成 19 年 4 月～平成 23 年 3 月) ●平成 20･21 年度 文部科学省『社会人の学び直しﾆｰｽﾞ対応教育推進プログラム』に採択。「同プログラム副センﾀｰ長」として、文部科学省と大学との調整、推進役。 ●羽衣国際大学　非常勤講師(平成 22 年 4 月～平成 26 年 3 月) ●関西大学　教職支援アドバイｻﾞｰ 兼 非常勤講師(平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月) ●大阪府立大学　非常勤講師(平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月) ●太成学院大学教授(平成 25 年 4 月～現在に至る)
5　その他		●「常陸宮杯受賞」交通安全優秀校 学校代表（昭和 54 年 1 月) ●「優良研究教員表彰」大阪府堺市教育委員会・大阪府堺市 PTA 協議会(平成 2 年 11 月) ●「教育功労表彰」大阪府教育委員会(平成 14 年 3 月) ●「教育振興功績表彰」大阪府堺市長(平成 16 年 7 月)
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	
1　資格，免許 ■小学校教諭専修免許状 ■中学校教諭社会専修免許状 ■高等学校教諭社会 1 種免許状	 平成5年8月21日 平成5年8月21日 昭和 54 年 3 月 31 日	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		

4　その他 ■法務省保護司(平成21年4月～) ・「保護司功績表彰」 ・「保護司功績表彰」 ・「保護司功績表彰」	平成25年 10月 平成26年 10月 平成28年 10月	 大阪府保護司会連合会長授与 大阪保護観察所長授与 近畿地方保護司連盟会長授与

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) 1.『特別活動研究』「学級の仕事さぼり問題の議題化」	単著	昭和63年2月1日	明治図書出版『特別活動研究 No.244』(pp.37－41)	本論では、「学級の仕事さぼり問題の議題化」という題で執筆。学級の生活問題を全員が生き生きと話合いに参加し、実践に結びつくにはどうすればよいかを授業実践、授業記録を分析するなどして明らかにした。(総頁数124頁)
2.『特別活動研究』 「生徒会活動の中で自 己を生かす」	単著	平成元年3月10日	明治図書出版『特別活動研究 No.258』(pp.140－143)	本論は、改訂学習指導要領にそって、「生徒会活動の中で自己を生かす」という題で執筆。生徒会活動の活性化の具体的方法について実態調査などで明らかにした。(総頁数198頁)
3.『特別活動研究』 「中学校の指導で何を おさえるか－作文分析 による活発化の糸口－ 」	単著	平成元年11月1日	明治図書出版『特別活動研究 No.268』(pp.47－49)	本論は、学級活動の集団決定の在り方について「中学校の指導で何をおさえるか－作文分析による活発化の糸口－」という題で執筆。生徒作文の分析を通して、有効な集団決定の方策を明らかにした。(総頁数115頁)
4.『学校生活の改善・向 上を図る活動』	単著	平成3年4月1日	特別活動実践講座 刊行会編『特別活動実践講座』㈱ニチブン (　)	全17巻の11巻『児童会・生徒会活動』の「5.児童会・生徒会活動の内容」を担当執筆。実態調査、活動事例などから生徒会活動の活性化の方策について明らかにした。(総頁数頁)
5.『特別活動研究』 「中学校で何を	単著	平成3年5月1日	明治図書出版『特別活動研究 No.286	学級生活ルールづくりを確立する指導の工夫について「中学校で何を重視

重視す るかー 学級のルール づくりは生徒の手でー 」			』 (pp.42－45)	するかー 学級のルールづくりは生徒の手でー」という題で執筆。(総頁数116頁)
6.『学級活動の指導過程 中学校』	共著	平成 3 年10月	明治図書出版(pp.87－94)	「友人関係の見直し」(第3章 1節 3項)を担当執筆した。本論では学級集団は、絶えず変化する。そのため観察など様々な方法で実態把握が必要であることを授業実践を通して明らかにした。(高橋哲夫編／共著者：高橋哲夫・杉田儀作・尾島重明ほか17名／総頁数193頁)
7.『特別活動研究』 「題材づくりの特色あ る実践」	単著	平成 4 年5月25日	明治図書出版『特別活動研究 №.300』(pp. 84－88)	本論は、「題材づくりの特色ある実践」という題で執筆。中学校学級活動がその成果をあげていくための最初の関所は題材として何を選び、構成するかにあることを実証研究した。(総頁数139頁)
8.『新学力観に基づく中 学校特別活動指導細案 学級活動2年』	共著	平成 5 年5月1日	明治図書出版(pp.85－94)	「期末テストに備えて・7月学級生活はこれでよかったか」(第3章12節13項)を担当執筆。本論では、中学2年のこの時期に、テストに向けて全員に学業生活を改善すべき点に気づかせるにはどうアプローチしていくことが必要か、授業実践事例を示し明らかにした。(渡辺邦雄編／共著者：渡辺邦雄・尾島重明ほか19名／総頁数209頁)
9.『特別活動選書中学校 学級話合い活動の実践 相談と指導技術』	共著	平成 6 年2月	明治図書出版(pp.70－77)	「意欲的に話合い活動を進めるための指導の技術」(第2章2節1～4項)を担当執筆。本論では、生徒の発言のまとめ方と司会への指導の技術など意欲的に話合い活動を進めるための方策を明らかにした。(井上裕吉編／共著者：桑原憲一・赤坂雅裕・尾島重明ほか15名／総頁数143頁)
10.『中学校学級活動フ ァックス資料	共著	平成 7 年4月	明治図書出版(pp.14－15、44－45)	「期末テストに備えて・1学期をふり返って」(第

集』				１章４節、第２章７節）を担当執筆。本論では、既共著（業績番号〈著書〉８）を生徒が実際に記入しやすいよう生徒配布用 FAX 頁を設けるなど資料化した。（渡辺邦雄編／共著者：渡辺邦雄・尾島重明ほか 17 名／総頁数 81 頁）
11.『小学校時報』「真の国際人の育成をめざして－ローマ日本人校の経営から－」	単著	平成10年7月10日	全国連合小学校長会編　第一公報社（pp.52－53）	本論では、海外の日本人学校は、次期教育課程の先駆的役割を担っていることを「真の国際人の育成をめざして－ローマ日本人校の経営から－」という題で論考した。（総頁数 54 頁）
12.『ローマ日本人学校副読本』（わたしたちのローマ）	共著	平成11年1月10日	ローマ日本人学校編	小学校中学年では、自分の住んでいる町や県などについて学ぶ。ローマを学び、総合学習にも使える本格的な副読本を作成した。編集代表者：尾島重明／総頁数 99 頁）
13.『子どもの人権と保育・教育』	共著	平成17年3月20日	保育出版社（pp.28－33、173－180）	「国連・子どもの権利条約を学ぶ」（第２章２節３節）、「世界の国の人権保育の取り組み－イタリア－」（第 11 章３節）を担当執筆。本論では、保育・教育の質的充実を目指し、将来子どもにかかわる仕事に就こうとしている学生の人権感覚をはぐくむための方策を明らかにした。（鈴木祥蔵監修／共著者：岩堂美智子・尾島重明ほか 16 名／総頁数 206 頁）
14.『保育と道徳』	共著	平成18年4月10日	保育出版社（pp.25－27、157－160）	「ピアジェの理論とその展開」（第２章１節）、「道徳性を育てる幼稚園・保育所と小学校の連携」（第７章６節）を担当執筆。本論では、今まで大切だとされながら、本格的に取り上げられることの少なかった保育における道徳教育について、全般にわたってまとめその指針を示した。（小田豊・押谷由夫編／共著者：尾島重明ほか 40 名／総頁数 213 頁
15.ミネルヴァ保	共著	平成18年10	ミネルヴァ書房	田中亨胤監修『ミネルヴ

育講座 第2巻『保育者の職 能論』		月25日		ァ保育講座全16巻』の第2巻『保育者の職能論』の編著。「保育者の存在と姿」（第1章1・2・3節）、「保育者の養成システム」（第11章1・2節）「保育者の人間性と資質」（第12章2節）を執筆。（編著者：尾島重明・田中亨胤・佐藤和順　共著者尾島重明ほか13名／総頁200頁）
16.『子どもと教師のた めの教育原理』	共著	平成22年4月1日	保育出版社 （pp.93－106）	第5章「学校の教育内容と方法」、第1節「学校教育の進展と教育内容（学習指導要領）の展開、第2節「平成20年小学校・中学校（学習指導要領）」を担当執筆。本論では、戦後の社会発展とそれに関連した数次の学習指導要領の改訂内容、新学習指導要領改訂の特徴・背景などの指針を示した。（石田美清編著／共著者：尾島重明ほか24名／総頁数202頁）
17.『子どもと教師のための教育原理』改訂増版2版	共著	平成29年3月1日	保育出版社（pp.94－107）	第5章「学校の教育内容と方法」、第1節「学校教育の進展と教育内容(学習指導要領)の展開、第2節「平成20年小学校・中学校(学習指導要領)」「平成30年～次期学習指導要領改正のポイント」を担当執筆。本論では、戦後の社会発展とそれに関連した数次の学習指導要領の改訂内容、新たに次期学習指導要領改訂の目指す姿、具体的な方向性などを示した(石田美清編著/共著者:尾島重明ほか/総頁数212。)
18.『子どもと保育者でつくる人間関係－「わたし」から「わたしたちへ」－』	共著	平成29年3月未定日	保育出版社()	全14章のうち、第1章2節「人間関係は、なぜ生まれるのか(発生)」、3節「人間関係は、どう育つのか(発達)を担当執筆。本論では、人間は、社会的な動物であるといわれる。その字の如く「人の間」に暮らし、人とのかかわり、「関係」をもちながら生きている。本章では、「人間関係」とは何なのか、なぜ大切なのか、その意味を考

				える。(横山真貴子編著/尾島重明ほか/総頁数 191 頁)
(学術論文)				
1.好ましい人間関係をつくるために―北八下小学校児童の校外における遊びの分析と考察―	単著	昭和54年3月10日	堺市教育会編『昭和53年度教育研究 奨励金交付研究報告書』(p.10)	本論では、児童の好ましい人間関係をつくるということをテーマにし、地域性をもふくんだ実態調査と考察した。(総頁数136頁)
2.充実した学校生活の創造－親・子どもの教育期待に関する調査研究－〈入選論文〉	単著	昭和54年12月	大阪府公立小学校教育研究会編 (p.-)	本論では、学校教育に対する親と子どもの教育期待や現実認識の実態を調査し親・子の期待の側面を分析して、充実した学校生活の創造に関する基礎資料を得ようとした。(総頁数17頁)
3.道徳・特別活動と生徒指導	共著	昭和57年3月1日	堺市教育委員会編『育てよう生きぬく力ー生徒指導のために(幼稚園・小学校)』ー (pp.161－186)	各学校で、生徒指導充実のための指導資料として刊行。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。道徳、特別活動は生徒指導上の実践と内面化に関わる教育活動であることを基本的観点とした。(共著者:尾島重明ほか3名/総頁数375頁)
4.一人ひとりの実践力を高める勤労体験学習－特別活動とを中心として－〈入選論文〉	共著	昭和58年12月1日	堺市教育会編『昭和58年度教育研究奨励金交付研究報告書』 (pp.35－60)	本論では、現代の学校教育の中で、勤労体学習に取り組むことにどのような意義、必要性があり、どんな課題があるのだろうか。実践してきたことをもとに解明を試みた。(共著者:尾島重明・山上清明／総頁数278頁)
5.体験学習が育てる子どもの道徳性に関する研究－幼稚園のしごと活動と小学校の特別活動を基にして－	単著	昭和59年12月20日	兵庫教育大学学位論文(修士論文)	本論では、学校教育の中で勤労体験をどう考え、どのような実践的対応が求められるのか、各学校や園で実施している勤労体験の実態と、それに取組む教師の意識を調査した結果をもとにカリキュラムの視点を考究した。(総頁数230頁)
6.イタリアの教育制度から学ぶ教育視座(I)	単著	平成14年3月31日	兵庫教育大学幼児教育講座編『幼年児童教育研究』第14号 (pp.15－24)	本稿はイタリアの教育制度・システムを通覧して、我々に与えてくれる教育視座の一端を明らかにした。(総頁数10頁)
7.イタリアの教	単著	平成15年3	兵庫教育大学幼	本稿は、イタリアの教育

育制度から学ぶ教育視座(Ⅱ)－道徳教育を中心に－		月31日	児教育講座編『幼年児童教育研究』第15号(pp.1－8)	システムのうち、道徳教育に照準をおいて論究した。(総頁数8頁)
8.イタリアの教育制度から学ぶ教育視座(Ⅲ)―AGAGGIの教育原理にふれて―	共著	平成16年3月31日	兵庫教育大学幼児教育講座編『幼年児童教育研究』第16号 (pp.1－12)	本稿は、AGAZZIの幼稚園教育を事例として、海外の「幼児教育」に焦点を置いて論究した。(共著者：田中亨胤・尾島重明／総頁数12頁)
9.教育・保育現場が教員・保育士養成校に求める像―三重中京大学短期大学部の実態調査の分析をもとに―	単著	平成20年3月15日	三重中京大学短期大学部学術研究会編『論叢 第45号』(pp.61－82)	本稿は、教員・保育士を養成するための課題や問題点を検証するために、三重県下の小学校・幼稚園・保育所・その他の施設が養成校に求める教育期待や現実認識の実態を調査・分析、論究した。
10.ボランティア活動に関する意識調査の検討―社会体験活動受講生へのアンケート調査を通して―	共著	平成21年1月31日	三重中京大学短期大学部学術研究会編『論叢 第46号』(pp.21－27)	本稿は、「文部科学省平成20年度社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」の一部に取り入れた「社会体験講座」、中でもボランティア活動を通して、受講生がどのようなことを学び、今後どのようなことを学ぶ必要があるかを考察、論究した。なお、本研究の一部は全国保育士養成協議会第47回研究大会で発表。(共著者：尾島重明・新川泰弘)
11.ボランティア学習(社会体験学習)活動の多様性とあるべき姿―教員・保育士に必要なコミュニケーション・コンピテンスを育てる－	単著	平成22年1月31日	三重中京大学短期大学部学術研究会編『論叢 第47号』(pp.15－28)	本稿は、多様化するボランティアの概念・原理・歴史・政策等について論究し、教員に必要なコミュニケーション・コンピテンスを育てる方策を探った。
12.キャリア教育をどう進めるか(Ⅰ)－大学リポートによる回想と評価－	共著	平成26年1月31日	太成学院大学紀要第17巻 (pp.101-112)	本稿は、青年期を迎えた大学生が、幼少期から現在に至るまで、それぞれの発達段階をどのように過ごしてきたのか、記憶に残る体験を想起し、それをどのように自己評価しているか、キャリア発達の過程を探りその効果や影響を検討した。なお今回は、幼少期に絞り論述した。(共著者：尾島重明・杉山佳菜子)
13.キャリア教育をどう進め るか(Ⅰ)－大	共著	平成27年1月15日	太成学院大学紀要第18巻 (pp.27-37)	本稿は、青年期を迎えた大学生が、幼少期から現在に至るまで、

学リポートによる小学校の回想と評価-				それぞれの発達段階をどのように過ごしてきたのか、記憶に残る体験を想起し、それをどのように自己評価しているか、キャリア発達の過程を探りその効果や影響を検討したなお今回は、小学校期に絞り論述した(共著者：尾島重明・杉山佳菜子)。
(その他) **（その他）**				
1.講演　児童が学級会活動に意欲的にとりくむために－話合い活動を中心に－	個人	昭和57年7月9日	昭和57年度泉北地区小学校教育課程説明研修会	学習指導要領の趣旨を生かした特別活動の創意工夫ある実践を願い、どのように機能していけばよいか、実践事例を通して明らかにした。
2.　学級会活動の実践	個人	昭和58年1月26日	大阪府小中学校特別活動研究会 (pp.1－2)	本発表は、堺市の小学校(90校)における学級会活動指導の実践状況、児童の学級会活動に対する意識、教師の指導上の問題点を明らかにし、学級会活動の望ましい在り方を考察した。
3.一人ひとりの勤労意欲を高め学級生活の向上をめざす学級会活動	個人	昭和60年8月2・3日	第29回全国特別活動研究協議会 (p.10)	本発表は、「日頃の清掃活動」を取り上げ、実践に結びつく、本物の話合い活動をするにはどうすればよいかを追求した。
4.体験学習カリキュラムの研究（Ⅰ）－幼小間における共通性と相違性（その１）－	共同	昭和60年5月18・19日	第38回日本保育学会 大妻女子大学 (pp.576－577)	本研究は、「幼稚園」や「小学校」の初等教育の段階での「体験学習」に照準を置き、両者の「体験学習の教育性」「指導構造」「取り組みの実態」の３つの側面から共通性と相違性について論究した。(共著者：田中亨胤・尾島重明)
5.体験学習カリキュラムの研究（Ⅰ）－幼小間における共通性と相違性（その２）－	共同	昭和60年5月18・19日	第38回日本保育学会 大妻女子大学 (pp.578－579)	本発表は、勤労体験学習の中味や手立取り組み方によって左右される。そこで労体験学習に関して、その取り組みの実態に対する教師の意識を小学校と幼稚園とを対比しながら、取り組みの傾向性を探った。(共著者：尾島重明・田中亨胤)
6.体験学習に関する実践的研究－「勤労体験学習」を中心にして－	共同	昭和60年9月5~7日	第44回日本教育学会　埼玉大学 (pp.32－33)	本研究は、学校教育カリキュラムにおける「体験」の中身を象徴的に表している「勤労体験学習」に照準を置き、小学校普通学級、小学校学習」の有効性、体験学習カリキュラムの開発のための基本的条件を事例的に論究した

				。(共著者:田中亨胤・尾島重明・山上清明)
7.体験学習カリキュラムの研究(Ⅱ)－6歳～16歳までの育ちの病理(その1)－	共同	昭和61年6月6・7日	第39回日本保育学会 日本福祉大学 (pp.110－112)	本発表では、「体験学習」の有効性をさぐり、そのカリキュラム開発に力点を置き、子どもの育ちの側面を「道徳性」や「行動意識」の発達、「性格」の傾向など、実践的意識・行動に限定し その育ちを縦断的視点から事例的に論究した。(共著者:田中亨胤・尾島重明)
8.体験学習カリキュラムの研究(Ⅱ)－6歳～16歳までの育ちの病理(その2)－	共同	昭和61年6月6・7日	第39回日本保育学会 日本福祉大学 (pp.112－113)	本研究では、高1の3人の子どもの「育ち」とその病理について、6歳時までの逆追跡調査により明らかにし、体験学習カリキュラムの視点を探った。(共著者:尾島重明・田中亨胤)
9.体験学習カリキュラムの研究(Ⅲ)－児童の作文にみられる体験学習の評価(その1)－	共同	昭和62年5月30・31日	第40回日本保育学会 東京家政大学 (pp.724－725)	本発表は、幼児期を経た子どもが、自分の幼児期の生活をどのように想起し評価しているのか、その一端を明らかにし、体験学習カリキュラム開発のための視点を探った。(共著者:田中亨胤・尾島重明
10.体験学習カリキュラムの研究(Ⅲ)－児童の作文にみられる体験学習の評価(その2)－	共同	昭和62年5月30・31日	第40回日本保育学会 東京家政大学 (pp.726－727)	本発表は、幼児期に刷り込まれたものがどのようにその子の将来や生涯につながっていくのか、小学校児童作文分析を試み、考察した。(共著者:尾島重明・田中亨胤)
11.体験学習カリキュラムの研究(Ⅳ)－中学生徒の作文にみられる体験学習の評価(その1)－	共同	昭和63年5月21・22日	第41回日本保育学会 広島大学 (pp.266－267)	本発表は、中学校 生徒が幼稚園・保育所、小学校で受けた教育や生活、「体験的学習」をどのように想起し評価しているのかについて明らかにし、体験学習カリキュラム化のための視点を探った。(共著者:田中亨胤・西田圭子・尾島重明)
12.体験学習カリキュラムの研究(Ⅳ)－中学生徒の作文にみられる体験学習の評価(その2)－	共同	昭和63年5月21・22日	第41回日本保育学会 広島大学 (pp.268－269)	本発表は、作文の中で小学校低学年の頃の「思い出」「体験的学習」をどう評価しているかを中学生徒作文分析を試み、考察した。(共著者:尾島重明・田中亨胤・西田圭子)
13.体験学習カリキュラムの研究(Ⅴ)－大学生のリポートにみられる幼年期の回想と評価(その1)－	共同	平成元年6月3・4日	第42回日本保育学会 十文字学園女子短期大学 (pp.286－287)	本研究は、大学生が、幼稚園、保育所、小学校で受けた教育や生活、「体験的学習」をどのように想起、評価しているのかを明らかにし、体験学習カリキュラム化のための視点を探った。(共著者:田中亨胤・西田圭子・尾島重明・瀬川千賀子)
14.体験学習カリキュラムの研究(Ⅴ)－大学生のリポートにみられる	共同	平成元年6月3・4日	第42回日本保育学会 十文字学園女子短期大学 (pp.288－289)	本研究は、大学生が、幼児期を自分の体験からどのように受けとめているかについて、各カテゴリー別に分析を試み、考察した。(共著者:瀬川千賀

幼年期の回想と評価（その２）－				子・西田圭子・尾島重明・田中亨胤）
15.シンポジウム　保育者研修の不易流行―多様な保育ニーズへの対応を視点として――	共同	平成18年5月20・21日	第59回日本保育学会　浅井学園大学（pp.s26－s27）	本ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑでは保育者の研修に焦点化し、保育所、幼稚園、就学前・小学校との連携の観点から保育者・小学校教員研修の現状把握と課題を抽出し、今後の研修の可能性を検討した。（共著者：尾島重明・田中亨胤・佐藤和順・三宅茂夫・多田琴子）
16 保育士養成における主体的な学びを目指した教育プログラム開発（その１）	共同	平成20年9月26日	第47回全国保育士養成協議会研究大会函館国際ホテル（pp.250－251）	本発表は、学生の主体的な学びのふりかえり事例を通して、今後の本学における保育士養成のあり方を探った。（共著者：尾島重明（代表）・新川泰弘・田島孝二郎・坪井守）
17.シンポジウム　発達障害のある子どもと親の育ちを応援する	共同	平成21年3月1日	文部科学省委託事業　三重県津市グリーンパークホテル	本シンポジウムは文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」で行ったもので、発達障害児と親への援助のあり方について専門職に求められることを検討した。（パネリスト：尾島重明・小林重雄・久野能弘・伊藤健次・杉田勝雄・新川泰弘）
18.講演　ボランティア学習の概念・原理・歴史・政策	個人	平成21年4月25日	文部科学省委託事業　三重県津市グリーンパークホテル	本講演は、文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」で行ったもので、今、なぜボランティアの必要性が叫ばれているのか、その背景と、多様化するボランティアの原理・歴史・政策等について論述した。
19.子どもの権利条約の国内発効後の地域を基盤とした取組み	共同	平成21年5月16・17日	第62回日本保育学会　千葉大学	本条約が批准され15年、その間この条約について行政・地域・自治体はどのような努力をしてきたのか、その取組状況について考察、検討した。（共著者：尾島重明〈代表〉・新川泰弘）
20.講演　子どもの未来のために…保育・学校教育のいまとあした―人間関係、集団作りの視点から―	個人	平成21年年7月18日	文部科学省委託事業　三重県津市グリーンパークホテル	本講演は、文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」で、小１プロブレムの増加する中、保育・教育者に必要な人間関係、集団作りについて考察した。
21.講演　これから保育・教育に求められるもの―キャリア発達理論からみた保育者の中長期的な育成―	個人	平成21年8月29日	平成21年度　三重県志摩市主任保育士研修会　講演会　志摩市生涯学習センター	本講演は、ＯＪＴ研修として、スーパーほかの職業的発達理論を踏まえ、保育者の初期・中期・後期のキャリアステージについて、年齢とキャリア段階、ライフ課題について講話した。
22.保育士養成における主体的な学	共同	平成21年9月9・10・11日	第48回全国保育士養成協議会研究	本発表は、子どもの自己肯定感の低さが指摘されている中、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ学習

びを目指した教育プログラム開発（その２）―ボランティア学習を通した自己肯定感の高まり―			大会 東北福祉大学	のカリキュラム化を通して学生の自己肯定感の高まりの可能性を探った（共著者：尾島重明〈代表〉・新川泰弘）
23.子どもを虐待から守る支援のあり方	共同	平成21年9月9･10･11日	第48回全国保育士養成協議会研究大会 東北福祉大学	本発表は、子ども虐待の枠組みについて、行政側の立場、児童相談所の「虐待防止ネットワーク」の視点からその実態を捉え、あり方について検討した。（共著者：尾島重明・東伸亮）
24.講演　ヨーロッパの教育事情について―イタリアの教育制度を中心に―	個人	平成22年6月1日	平成22年度　紀北国際交流協会総会記念講演会 東長島公民館	本講演は、ヨーロッパ、特にイタリアの教育システムに照準をおき、教育制度・教育方法・道徳教育・進路指導を中心に実践事例を通して明らかにした。
25.講演　子どもは変わったか―学校種間・社会との接続を捌めて―	個人	平成24年6月21日	関西大学教育推進部主催　講演会 関西大学	本講演は、小一プロブレム、中一ギャップ、高校ドロップアウト、そして新規学卒者の安易な離転職の増加、フリーター志向の広がりなどを踏まえ、現代青少年の就労観・職業観、学校文化・社会との差異、危機的移行などについて触れながら、キャリア形成の必要性について講話。
26.講演　イタリア（ヨーロッパ）の教育制度から学ぶこと	個人	平成25年10月26日	太成学院大学公開講座	本講演は、ヨーロッパ、特にイタリアの教育システムに照準をおき、教育制度・教育方法・道徳教育・進路指導を中心に実践事例を通して明らかにした。
27.キャリア教育をどう進めるか（Ⅰ）―大学リポートによる回想と評価―（原稿登録済）	共同	平成26年5月17･18日	第67回日本保育学会 大阪総合保育大	本発表は、青年期を迎えた大学生が、幼少期から現在に至るまで、それぞれに過ごしてきたのか、記憶に残る体験を想起し、それをどのように自己評価したのかキャリア発達過程を探りその効果や影響を検討した。なお今回は、幼少期に絞り論述した。（共著者：尾島重明・杉山佳菜子）
28.データで読む教育事情の真	個人	平成26年8月29日	太成学院大学公開講座	本講演は、いじめ、虐待、体罰、不登校など、様々な教育問題がデータとともに議論されているが、しばしば大きなまちがいやゆがみをはらんでいる。必要以上にそれらの情報に振り回されないようデータの本当に意味するところを

				読み解きながら明らかにした。
29. キャリア教育をどう進め るか(Ⅱ)－大学リポートによ　　る小学校期の回想と評価－	共同	平成 27 年 5 月 9･10 日	第 68 回日本保育学会椙山女学園大学	本発表は、青年期を迎えた大学生が、幼少期から現在に至るまで、それぞれの発達段階をどのように過ごしてきたのか、記憶に残る体験を想起し、それをどのように自己評価しているかキャリア発達の過程を探りその効果や影響を検討した。なお今回は、小学校期に必要な「キャリア教育」とはどんなものであるかを論述した。(共著者：尾島重明・杉山佳菜子)。
30. 講演 宗教って何だろうか	個人	平成 27 年 6 月 3 日	はびきの市民大学	本講演は、宗教多元主義の求められる中、世界の主要な宗教を理解するための基礎を講演した。あわせて変化しつつある葬送儀礼について考えた。
31. 講演 宗教って何だろうか―時代が変える葬送儀礼―	個人	平成 27 年 9 月 9 日	太成学院大学公開講座	私たちは日々、死に向かって歩き続けているといってよい。それなら死を潔く迎えたい。そこで登場するのが宗教である。本講座では、世界の宗教を概観し、あわせて変化しつつある葬送儀礼について考えた。
32. 幼児期の職業的発達についての検討	共同	平成 27 年 9 月 21・22・23 日	第 54 回全国保育士養成協議会研究大会ロイトン札幌・札幌市教育文化会館 (p. 253)	これまで古典的な職業発達理論は、幼児期は児童期と区別することなく、空想期に分類されてきた。本研究では、コレスポンデンス分析などを用いて、幼児期の希望職業選択傾向を小学校低学年期と比較することにより、幼児期のにおける職業発達を検討した。(共著者:尾島重明〈代表〉・宮田延実・杉山佳菜子・林美代)。
33. 発達障害のアセスメント	個人	平成 28 年 12 月 17 日	大阪千代田短期大学教員免許状更新講習会	本講演は、子どもへのアセスメントとは何のために行い、どのように生かすものなのか？また、発達検査や療育・保育の場で子どものことを保護者にどのように伝えることができるのか、など発達障害の理解と支援、家庭・幼稚園・保育園での接し方・支援のしかたなどを３コマにわたり講話した。
34. 講演　ホンマかいな教	個人	平成 29 年 7 月	堺市立東文化会館大ホール	本講演は、第６７回「社会を明るく

育問題		8 日		する運動」堺東美原地区大会（約 500 名）で行ったもので、教育問題に関してしばしば大きな間違いやゆがみがはらんだまま、解決策や対処法が決められている。教育に関していろいろな主張や理念、願望などがあふれているからである。教育問題があらぬ方向に向かわないよう注意すべき事柄、現状を正しく認識するスキルについてそれぞれの事象について実証的に解き明かした。
35. 講演　教育・福祉の立場から発達障害を考える	個人	平成 29 年 9 月 4 日	太成学院大学公開講座	平成１７年に発達障害者支援法が施行され、発達障害という言葉は、社会的に知られるようになったが、発達障害の本質が十分に理解され、適切な支援が行われるようになったとは言い難い。ここでは教育・福祉の立場、すなわち教育的な援助方法（療育、治療教育）から発達障害の「本当の理解」とは何かを明らかにした。

（人間）河上　俊和

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年　3　月　15　日

氏名　　河 上 俊 和　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
健康・スポーツ科学	運動、骨密度、骨細胞、脂肪細胞、組織学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1)　レクリエーション論（河﨑会看護専門学校　非常勤講師）	平成 15 年 4 月	看護専門学校の教養科目として、実技と講義を組み合わせた授業計画を立てている。実技では、ストレッチングやウォーキングをはじめとした健康づくり運動、アイスブレークゲームやグループエンカウンター、ニュースポーツを取り入れ、講義ではスポーツ生理学的知見を中心とした健康スポーツに関する講義内容を展開した。（平成 27 年 3 月迄）

2) 体育学演習 I（大阪体育大学 体育学部 コーチ教育コース ティーチングアシスタント）	平成 18 年 4 月	大阪体育大学 体育学部 コーチ教育コースの体育学演習 I の授業において、サッカーを中心としたコーチングやトレーニングに関する研究や教育課題についての講義用資料の作成や講義のアシスタントを担当した。（平成 19 年 3 月迄）
3）体育学演習 II（大阪体育大学 体育学部 コーチ教育コース ティーチングアシスタント）	平成 18 年 4 月	大阪体育大学 体育学部 コーチ教育コースの体育学演習 II の授業において、サッカーを中心としたコーチングやトレーニングに関する研究用資料の収集と作成、卒業論文課題と調査研究についてスポーツ生理学研究を中心に授業と学生の研究指導のアシスタントを担当した。（平成 19 年 4 月迄）
4）水泳 I（大阪体育大学　健康福祉学部 ティーチングアシスタント）	平成 19 年 4 月	大阪体育大学 健康福祉学部の学生を対象とした水泳実技授業において、授業用教材の作成と資料収集、実技授業での泳法指導の補助、アクアエクササイズやグループ学習と指導実践におけるアシスタントを担当した。（平成 20 年月迄）
5）大阪体育大学　助手	平成 20 年 4 月	体育学部では、衛生学（公衆衛生学を含む）及び健康指導管理論講義の助手、健康スポーツマネジメント学演習の卒業論文指導では、学部生に対するスポーツ生理学実験の指導を担当した。大学院では、健康運動科学特講（現・スポーツ生理科学特講）、スポーツ環境論（現・スポーツ生理学特論）の助手として講義資料作成や実験指導等を担当した。（平成 23 年 3 月迄）
6）卒業論文 大阪体育大学と大阪府立大塚高等学校との高大連携事業・講師（大塚高等学校 体育科）	平成 20 年 4 月	大阪体育大学と大阪府立大塚高等学校との高大連携事業として、大塚高等学校 体育科の卒業論文指導における特別講師として、スポーツ科学研究の概要やトレーニング科学についての最新知識を講義し、高校生でも実践可能なスポーツ生理学実験法と論文作成についての指導を担当した。（平成 21 年 3 月迄）

7）衛生学（公衆衛生学を含む）（大阪体育大学　健康福祉学部　非常勤講師）	平成 21 年 4 月	保健体育科教員免許に必修科目のため、学校保健やスポーツ活動現場に関連する衛生学的諸問題の事例を多く取り入れている。スポーツ生理学・医学に関する調査研究法や結果等を交え、講義毎に授業内容の理解度を図るレポート課題を実施し、学生の知識の整理を促すための講義を展開した。（平成 22 年 3 月迄）
8）卒業論文 大阪体育大学と大阪府立大塚高等学校との高大連携事業・講師（大塚高等学校 体育科）	平成 21 年 4 月	大阪体育大学と大阪府立大塚高等学校との高大連携事業として、大塚高等学校 体育科の卒業論文指導における特別講師として、スポーツ科学研究の概要やトレーニング科学についての最新知識を講義し、高校生でも実践可能なスポーツ生理学実験法と論文作成についての指導を担当した。（平成 22 年 3 月迄）
9）健康スポーツ学（帝塚山学院大学　人間科学部、リベラルアーツ学部　非常勤講師）	平成 22 年 4 月	教職並びに健康運動指導士、健康実践栄養士取得の必修科目として、実技種目と健康スポーツ科学に関する講義を組み合わせた授業内容を構成している。実技では、健康づくり運動や生涯スポーツとしての実践指導を目的とし、講義ではスポーツ生理学を中心とした健康スポーツ科学に関する講義を展開している。（平成 27 年 3 月迄）
10）スポーツ学（帝塚山学院大学　人間科学部、リベラルアーツ学部　非常勤講師）	平成 22 年 5 月	教職及びレクリエーションインストラクター、スポーツリーダー資格取得に必修科目である。実技では、キンボールやショートテニス、ドッチビー、フットサル等のニュースポーツを多く取り入れ、スポーツ指導者として豊富な実技を経験出来る内容である。講義では、スポーツプログラム計画に関する講義を展開した。（平成 27 年 3 月迄）
11）スポーツ生理学（大阪体育大学 健康福祉学部 非常勤講師）	平成 23 年 4 月	体育・スポーツ経験の豊富な体育専攻学生がスポーツ生理学をより深く理解し、スポーツ活動や保健体育科教育に応用すべき生理・生化学の基礎知識を養うため、スポーツ生理学・医学研究で得られた病理組織染色像

		や電子顕微鏡像等のビジュアルな教材を豊富に活用し、基礎的知識に基づいた講義を行った。（平成 24 年 3 月迄）
12）衛生学（公衆衛生学を含む）（大阪体育大学　体育学部　非常勤講師）	平成 23 年 4 月	保健体育科教員免許取得に必修科目のため、学校保健やスポーツ活動現場に関連する衛生学的諸問題の事例を多く取り入れている。スポーツ生理学・医学に関する調査法や研究結果等を交え、講義毎に授業内容の理解度を図るレポート課題を実施し、学生の知識の整理を促している。（現在に至る）
13）衛生学（公衆衛生学を含む）（大阪体育大学　健康福祉学部　非常勤講師）	平成 23 年 4 月	保健体育科教員免許取得に必修科目のため、学校保健やスポーツ活動現場に関連する衛生学的諸問題の事例を多く取り入れている。スポーツ生理学・医学に関する調査法や研究結果等を健康福祉分野での事例や課題等と関連させた教材を交え、講義毎に授業内容理解度を図るレポート課題や学生の知識の整理を促し、講義を行った。（現在に至る）
14）球技（種目別Ⅰ：サッカー）（奈良教育大学 教育学部　非常勤講師）	平成 26 年 4 月	保健体育科教員免許に必修科目（球技：サッカー）として、サッカーにおけるジュニア期からユース年代の指導理論や授業実践法を指導している。また、大学生サッカー強化の課題にも言及し、最新のスポーツ生理学の知見を交えたコーチング理論と競技規則に関する講義と実技指導を実践した。 （平成 27 年 3 月迄）
15）運動生理学 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年 4 月	健康スポーツを専攻する学生を対象として、身体の各組織や運動器の組織構造、構成細胞の生理メカニズムをイメージしやすいように組織学実験データや病理染色像をスライドに取り入れた。また、学修内容と運動・スポーツ実践現場との知識の接続を促すため、スポーツ場面の写真をスライドに取り入れ、学生の創造力と理解を深める工夫を行った。（現在に至る）
16）スポーツコーチング論 Ⅰ （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年 4 月	スポーツ指導者や保健体育科教員を志望する学生の学修課題として、学生がコーチング

		に関する知識や指導上の課題とスポーツ実践とのイメージを接続し、コーチング理論の理解を深められるようにプロスポーツや学生スポーツ、子どものスポーツ実践や指導場面の画像や事例を講義スライドに多く取り入れた。（現在に至る）
17）ジュニアトレーニング論 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年 4 月	子どもスポーツ指導法に関する知識を養うため、子どもの発育発達の特徴について生理学的な内容を多く取り入れ、トレーニング実践に伴う身体のトレーナビリティを理解するための基礎的知識の整理を促した。また、コーディネーション運動等の視聴覚教材を活用し、トレーニング指導における課題発見や想像力の養成を促した。（現在に至る）
18）高齢者健康スポーツ指導法 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年 4 月	健康運動指導や高齢者の健康スポーツ指導に携わることを目標として、講義内容には加齢に伴う身体機能の変化や運動器の構造変化について、スポーツ医学生理学研究で蓄積してきた病理組織学データを織り交ぜた。また、運動指導現場と基礎的知識とを融合するため、具体的な事例を解説に交え、定期的に知識の確認レポートを行った。（現在に至る）
19）スポーツ指導法（サッカー） （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年 9 月	サッカーのコーチや保健体育科教員を志望する学生のサッカー専門指導法の理論構築のため、競技規則に関する内容とサッカーコーチングにおける基本事項を中心に学修課題を設定し、広く育成年代を対象とした指導法に関する講義を行った。また競技規則と実践的指導法については、補足資料を作成し指導実践現場に役立てやすい講義内容の充実に努めた。（現在に至る）
20）高齢者健康スポーツ指導法演習 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年 9 月	高齢者健康スポーツの実践的な指導理論を養うことを目的として、加齢に伴う運動器の機能変化を中心にロコモティブシンドロームやフレイルの概念や病態、そして慢性疾患の予防における運動の役割や運動療法のあり方についてグループ学習や指導プログラム作成を行い、実践的な知識の構築を促した。（現在に至る）
21）機能解剖学	平成 27 年 9 月	健康スポーツ専攻学生が、身体の各組織や運

（太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）		動器の組織構造と関節機能、構成細胞の生理メカニズムについて組織学実験データや病理染色像をスライドに活用した。また、学修内容と運動・スポーツ実践現場との知識の接続を促すため、スポーツ場面の写真や事例をスライドに取り入れ、授業後半ではリメディアル学修課題を設定し、学生が知識の確認と整理を促すための講義内容を充実させた。（現在に至る）
22）ジュニアトレーニング実践実習 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年 9 月	ジュニアトレーニング指導法の基礎的知識をもとに、ジュニア期におけるコーディネーショントレーニングの実践法やランニングドリル、ストレッチング、姿勢制御の方法など実際に運動・スポーツ指導に取り入れやすい指導法を中心に学修課題を設定し、視聴覚教材を活用しながらの運動実践を取り入れた。（現在に至る）
23）人間学基礎演習 II（ゼミ） （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年 9 月	スポーツ科学研究法に関する講義を通して、授業中盤からは各自の研究テーマを設定し、授業毎の専攻研究や研究資料に関するプレゼンテーションを実施した。また、アンケート調査や統計処理、研究デザインについての計画書やアンケート作成法を紹介し、４年次に実験的研究や調査を進めるための研究手法を養うための講義内容を充実させた。（現在に至る）
24）衛生・公衆衛生学 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年 4 月	健康スポーツを専攻する学生を対象として、衛生・公衆衛生学の授業を担当した。授業内容は基礎および応用を含めた医学的知識を教授する事が中心となるが、課題に関連する視聴覚教材やグループワークもしくはペアワークによるアウティブラーニングを取り入れ、衛生学的知識の修得の促進を図った。（現在に至る）
25）人間学演習 I, II （太成学院大学 人間学部）	平成 27 年 4 月	人間学部の学生によるゼミである。春学期は、各自の課題設定と文献生理シートを導入し、研究課題の収集と要約を進めた。秋学期は、各自の研究課題のまとめ作業を進め適宜中間報告とプレゼンテーションの実践を通し、総合演習成果発表会での研究発表の指導

		を行った。（現在に至る）
2　作成した教科書，教材 1)　運動生理学のニューエビデンス	平成 22 年	身体運動やパフォーマンスの科学的基礎となる運動生理学について、最新の運動生理学のエビデンスをまとめた。「Section 6. 運動と骨格 1.メカニカルストレスと骨細胞」の項では、メカニカルストレスと骨細胞との関係を免疫組織化学及び形態学的研究成果をもとに、骨組織における骨細胞の生理機能と解剖学的特徴について知見をまとめた。
2）授業内容記録シート	平成 22 年	帝塚山学院大学「健康スポーツ学」、「スポーツ学」の授業では、授業毎に授業内容を記録し、各自の運動実践もしくは体育・スポーツ指導時の指導案作成の基礎資料となるため、毎時の授業ノート（レポート）として授業内容の記録シートを作成し学生教育に活用した。
3）健康スポーツ科学における運動処方としての水泳・水中運動	平成 28 年 9 月	水泳・水中運動研究の第一人者が参集し、最新の運動処方や指導法、コーチング法をまとめた。「３章 水泳・水中運動が身体にもたらす効果 ３）中高年「水泳・水中運動が骨密度に及ぼす影響」を執筆担当し、ヒトを対象とした骨密度や骨代謝マーカーに関する研究成果をもとに骨粗鬆症予防の運動処方をまとめた。 （出村慎一 監、滝瀬定文 佐藤 進、池本 幸雄 編 第３章 水泳・水中運動が身体にもたらす効果 3）中高年「水泳・水中運動が骨密度に及ぼす影響」（滝瀬定文、河上俊和）
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1)　平成 25 年度学生による授業評価アンケート	平成 25 年	帝塚山学院大学「健康スポーツ学」の学生による授業評価アンケートにおいて、授業総合満足度（満点：4）3.91 の高い評価を得た（全学平均：3.17）。
2)　平成 26 年度（前期）学生による授業評価アンケート	平成 26 年	帝塚山学院大学「健康スポーツ学」の学生による授業評価アンケートにおいて、授業総合

		満足度（満点：4）3.54 の高い評価を得た（全学平均：3.12）。
3） 平成 26 年度（前期）生による授業評価アンケート	平成 26 年	帝塚山学院大学「スポーツ学」の学生による授業評価アンケートにおいて、授業総合満足度（満点：4）3.80 の高い評価を得た（全学平均：3.12）。
4） 平成 26 年度（後期）学生による授業評価アンケート	平成 26 年	帝塚山学院大学「健康スポーツ学」の学生による授業評価アンケートにおいて、授業総合満足度（満点：4）3.38 の高い評価を得た（全学平均：3.17）。
5） 平成 26 年度（後期）学生による授業評価アンケート	平成 26 年	帝塚山学院大学「スポーツ学」の学生による授業評価アンケートにおいて、授業総合満足度（満点：4）3.83 の高い評価を得た（全学平均：3.17）。
6） 平成 26 年度（後期）学生による授業評価アンケート	平成 26 年	奈良教育大学「球技（種目別Ⅰ：サッカー）」の学生による授業評価及び学習効果の観点からの自己評価において全評価項目で学部全科目平均より高い評価を得た（当該授業平均：3.86、学部全科目平均：3.28）。
7）平成 27 年度 春学期・学生による授業アンケート「運動生理学」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年	平成 27 年度春学期「運動生理学」の学生による授業アンケートの結果、Q1,2 の高い評価を特徴として評価項目全体にわたり良好な評価を得た。
8）平成 27 年度 春学期・学生による授業アンケート「スポーツコーチング理論Ⅰ」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年	平成 27 年度春学期「スポーツコーチング論Ⅰ」の学生による授業アンケートの結果、受講生全体では知識や技能を得られたが多く、３年次生は特に論理的思考力が身についたとの評価を得た。
9）平成 27 年度 春学期・学生による授業アンケート「ジュニアトレーニング論」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年	平成 27 年度春学期「ジュニアトレーニング論」の学生による授業アンケートの結果、知識や技能、興味関心が広がったとの評価を得た。
10）平成 27 年度 春学期・学生による授業アンケート「高齢者健康スポーツ指導法」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 27 年	平成 27 年度春学期「高齢者健康スポーツ指導法」の学生による授業アンケートの結果、知識や技能を得られたに次いで学修意欲が得られたとの評価を得た。

11）平成 28 年度 春学期・学生による授業アンケート「運動生理学」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 28 年	平成 28 年度春学期「運動生理学」の学生による授業アンケートの結果、授業に満足している回答が 92%であり、授業内容がわかりやすく良かった役立つ事が学べたとの評価を得た。
12）平成 28 年度 春学期・学生による授業アンケート「スポーツコーチング理論 I」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 28 年	平成 28 年度春学期「スポーツコーチング理論」の学生による授業アンケートの結果、授業に満足している回答が 88%で、授業内容が良く、わかりやすかったとの評価を得た。
13）平成 28 年度 春学期・学生による授業アンケート「ジュニアトレーニング論」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 28 年	平成 28 年度春学期「ジュニアトレーニング論」の学生による授業アンケートの結果、授業に満足している回答が 91%で、授業内容がわかりやすく、役立つ事が学べ、学問的に興味深い内容であったとの評価を得た。
14）平成 28 年度 秋学期・学生による授業アンケート「機能解剖学」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 28 年	平成 28 年度秋学期「機能解剖学」の学生による授業アンケートの結果、授業に満足している回答が 93%で、授業内容がわかりやすく、役立つ事が学べ、学問的に興味深い内容であったとの評価を得た。
15）平成 28 年度 秋学期・学生による授業アンケート「衛生・公衆衛生学」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 28 年	平成 28 年度秋学期「衛生・公衆衛生学」の学生による授業アンケートの結果、授業に満足している回答が 91%で、授業内容が良く、わかりやすく、役立つ事が学べたとの評価を得た。
16）平成 28 年度 秋学期・学生による授業アンケート「スポーツ指導法 E（サッカー)」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 28 年	平成 28 年度秋学期「スポーツ指導法 E（サッカー)」の学生による授業アンケートの結果、授業に満足している回答が 95%で、授業内容が良く、わかりやすく楽しかったとの評価を得た。
17）平成 28 年度 学生による授業アンケート「アセンブリアワー」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 28 年	平成 28 年度「アセンブリアワー」の学生による授業アンケートの結果、授業に満足している回答が 88%で、授業内容が良く役立つ事が学べたとの評価を得た。
14）平成 28 年度 学生による授業アンケート「人間学基礎演習 I,II」 （太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 28 年	平成 28 年度「人間学基礎演習 I,II」の学生による授業アンケートの結果、授業に満足している回答が 78%で、授業内容が良く、役立つ事が学べ、学問的に興味深い内容であったとの評価を得た。
18）平成 28 年度 学生による授業アンケート「人間学演習 I,II」	平成 28 年	平成 28 年度「人間学演習 I,II」の学生による授業アンケートの結果、授業に満足してい

（太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）		る回答が 91%で、授業内容が良く、学問的に興味深い内容であったとの評価を得た。
19）平成 28 年度 春学期・学生による授業アンケート「運動生理学」（太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 29 年	平成 29 年度の授業評価アンケート結果では、受講生のうち若干名は授業内容や学問的興味についての要望を有しているものの、満足度が高い授業としての回答が 90%以上という結果を得られた
20）平成 28 年度 春学期・学生による授業アンケート「スポーツコーチング理論 I」（太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 29 年	平成 29 年度は、スポーツ指導の実践場面を想定した新たなレポートや小テストの実施方法を工夫した結果、学生の学びや問題解決といった興味・関心の刺激に繋がり、授業満足度が高い結果を得られた。
21）平成 28 年度 秋学期・学生による授業アンケート「機能解剖学」（太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 29 年	平成 29 年度は、スポーツ実践場面の事例を用いた学習課題を個人およびグループワークに加えたことから、入御満足度に加えて役立つことが学べたや学問的に興味部会内容であった殿評価を得られた。
22）平成 28 年度 秋学期・学生による授業アンケート「衛生・公衆衛生学」（太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 29 年	平成 29 年度は、アクティブラーニング・ワークシートを作成し授業に活用し、学校や体育、スポーツ指導現場を意識した事例を解説に加えた。これにより授業満足度に加えて役立つことが学べたという評価を得られた。
23）平成 28 年度 秋学期・学生による授業アンケート「スポーツ指導法 E（サッカー）」（太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 29 年	平成 29 年度は、前年度のアクティブラーニングパイロット授業の改善課題を踏まえた上で授業実践を工夫したことから、受講生のうち 98%の学生が授業内容に満足の回答で授業内容が良かったという評価を得られた。
24）平成 28 年度 学生による授業アンケート「アセンブリアワー」（太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 29 年	平成 29 年度は、アドバイザ間で授業前の参考資料準備や e-learning による情報や課題配信等を実践し、学生の主体的な学修態度の形成や学修内容の質の向上を図ったことから「役立つことが学べた」を中心に良好な回答を得られた。
25）平成 28 年度 学生による授業アンケート「基礎ゼミ演習 I,II」（太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）	平成 29 年	平成 29 年度の基礎ゼミ演習では、健康科学実験法に関連する実習課題の実践を多く取り入れたことにより、授業内容が良かった、わかりやすかった、楽しかったとの回答を得た。
26）平成 28 年度 学生による授業アンケート「人間学演習 I,II」	平成 29 年	平成 29 年度は、総合演習成果発表会へ向けて iPad を活用した文献検索や研究調査のス

（太成学院大学 人間学部 健康スポーツ学科）		ライド作成の指導に重点的に取り組んだことから、「役立つ事が学べた」や「授業内容が良かった」の前向きな回答が得られた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）　近畿身体障害者水泳競技大会　健康体力測定委員	平成 15 年	近畿身体障害者水泳競技大会における体力測定委員として競技会に参加し、出場選手並びに大会スタッフ、一般参加者を対象とした身体組成の測定と体力測定を実施した。測定結果をもとに、トレーニングやコンディショニング、そして健康づくり運動についての指導を担当した。
2）　近畿身体障害者水泳競技大会　健康体力測定委員	平成 16 年	近畿身体障害者水泳競技大会における体力測定委員として競技会に参加し、出場選手並びに大会スタッフ、一般参加者を対象とした身体組成の測定と体力測定を実施した。測定結果をもとに、トレーニングやコンディショニング、そして健康づくり運動についての指導を担当した。
3）　全日本身体障害者水泳競技大会　健康体力測定委員 4）　近畿身体障害者水泳競技大会　健康体力測定委員	平成 16 年	全日本身体障害者水泳競技大会における体力測定委員として競技会に参加し、出場選手並びに大会スタッフ、一般参加者を対象とした身体組成の測定と体力測定を実施した。測定結果をもとに、トレーニングやコンディショニング、そして健康づくり運動についての指導を担当した。
5）　近畿身体障害者水泳競技大会　健康体力測定委員	平成 17 年	近畿身体障害者水泳競技大会における体力測定委員として競技会に参加し、出場選手並びに大会スタッフ、一般参加者を対象とした身体組成の測定と体力測定を実施した。測定結果をもとに、トレーニングやコンディショニング、そして健康づくり運動についての指導を担当した。
6）　平成 21 年度 大阪体育大学国際交流事業「大阪体育大学および西安體育學院（中華人民共和国）の大学院若手研究者による研究発表会」 大阪体育大学大学院スポーツ健康・医	平成 21 年 3 月	体育大学と西安體育學院（中華人民共和国）との間の大学院若手研究者による研究発表会で、大阪体育大学大学院スポーツ健康・医科学領域を代表し、西安體育學院にて研究発

科学領域代表研究発表者		表を行った。
7） 平成 22 年度大阪体育大学国際交流事業「大阪体育大学および西安體育學院（中華人民共和国）の大学院若手研究者による研究発表会」 交流事業運営スタッフ	平成 22 年 6 月	平成 22 年度大阪体育大学国際交流事業として、大阪体育大学と西安體育學院（中華人民共和国）との間の大学院若手研究者による研究発表会のプロジェクト運営スタッフとして、西安體育學院大学院生の滞在期間中のコーディネータとして帯同。研究発表会の運営および抄録集、報告書作成を担当した。
8） 平成 23 年度 高槻市生涯スポーツリーダー育成講座 講師	平成 23 年 6 月	高槻市生涯スポーツリーダー育成講座の講師として、「いつまでも若々しく!エンジョイスポーツとしてのフットサル」を担当した。地域スポーツ指導者を対象に、フットサル競技の特徴とルール、発育発達に応じたスポーツトレーニング論に関する講義を行った。
9） 平成 23 年度 高槻市生涯スポーツリーダー育成講座 講師	平成 23 年 10 月	高槻市生涯スポーツリーダー育成講座講師として、 「サッカーで学ぶ審判法」を担当した。地域スポーツ指導者を対象にサッカー競技の特性と FIFA の公認ルールを解説し、ジュニアからシニアの試合に幅広く役立つ実践的審判法の実技指導を行った。
10） 平成 24 年度 高槻市生涯スポーツリーダー育成講座 講師	平成 24 年 6 月	実践トレーニング科学「地域指導者のためのサッカー・フットサル審判法」の講座として、地域スポーツ指導者を対象に J リーグ及び F リーグの公式ルールと判定のスタンダード、審判法についての講義と指導実践を行った。
11） 平成 24 年度 高槻市生涯スポーツリーダー育成講座 講師	平成 24 年 6 月	高槻市スポーツリーダー育成講座講師として、実践トレーニング科学「ボールを使ったトレーニング法」の講座を担当した。サッカー及び球技種目で必要な運動動作と運動方法を解説し、ボールを使用したコーディネーショントレーニングの実践法の指導を行った。

12）平成 25 年度 高槻スポーツ大学　講師	平成 25 年 6 月	高槻スポーツ大学講師として「ジュニア期の体力トレーニング（ボールトレーニング）」の講座を担当した。地域や民間スポーツクラブのスポーツ指導者を対象に、成長期の発育発達の特徴とトレーニング法を解説し、ボールを使った若年者の体力トレーニングや高齢者にも応用出来る体力づくり運動の指導を行った。
13）平成 25 年度 高槻スポーツ大学　講師	平成 25 年 9 月	高槻スポーツ大学講師として、「地域指導者のためのサッカークリニック」（ルール・コンディショニング）の講座を担当した。地域や民間スポーツクラブの指導者を対象に、サッカーの最新ルール解説及び選手のコンディショニング法のスポーツ生理学講義とコアスタビリティを中心としたコンディショニング法の実技指導を行った。
14）14）平成 25 年度 大阪体育大学大学院 海外学術交流事業　訪問団員	平成 26 年 3 月	大阪体育大学大学院と西安體育學院大学院との海外学術交流事業において、大阪体育大学大学院訪問団員のメンバーとして訪中し「大学院若手研究者研究発表会並びに西安體育學院学生の体力測定」による海外学術交流を行った。現地では、大学院生との研究懇談会での研究ディスカッションや大学院担当教員と大学院生に対して、体力測定法の指導と実践を行った。
15）平成 26 年度 高槻スポーツ大学　講師	平成 26 年 6 月	高槻スポーツ大学講師として「発育発達とスポーツ指導入門」講座を担当した。地域や民間スポーツクラブのスポーツ指導者を対象に、成長期の発育発達の特徴とトレーニング法について最新の生理学的知見を解説し、子どものコーディネーショントレーニング（動きづくり）を中心とした運動・スポーツ指導法の指導を行った。
16）平成 27 年度 高槻スポーツ大学　講師	平成 27 年 6 月	高槻スポーツ大学講師として「子どもと楽しむ運動あそび」講座を担当した。地域や民間スポーツクラブのスポーツ指導者を対象に、

		成長期の発育発達の特徴とトレーニング法を解説し、子どもとの運動遊びとして、ニュースポーツの紹介やコーディネーショントレーニング（動きづくり）を中心とした運動・スポーツの指導を行った。
17）第 17 回日本スポーツ整復療法学会大会 一般研究発表セッション　座長	平成 27 年 10 月	第 17 回日本スポーツ整復療法学会大会において、一般研究発表セッションの座長を務めた。
18）公開講座フェスタ 2016　健康スポーツ「10. スポーツ科学を知りたい」（HSN ネット）	平成 28 年 11 月	公開講座フェスタ 2016 の講師として、スポーツ科学の中から聴講者の年齢層とニーズに合わせて、フレイル予防やロコモ予防の考え方と予防のための運動療法について研究成果のエビデンスを交えながら講演を行った。
19））平成 28 年度 高槻スポーツ大学　講師（高槻みどりとスポーツ振興事業団）	平成 28 年 11 月	高槻スポーツ大学講師として「ジュニア期のスポーツ指導について」講座を担当した。地域や民間スポーツクラブのスポーツ指導者を対象に、成長期の発育発達の特徴とトレーニング法を解説し、子どもとの運動遊びとしてコーディネーショントレーニング（動きづくり）を中心とした運動・スポーツの指導を行った。
20）平成２８年度茨木市少年スポーツ指導者研修会（大阪府茨木市市民文化部スポーツ推進課）	平成 29 年 3 月（予定）	平成２８年度茨木市少年スポーツ指導者研修会において、競技を超えた幅広い分野で活躍するスポーツ指導者の資質向上と養成を目的とし、ジュニア期のスポーツ指導について講演を行った。
21)太成学院大学　第 6 回 FD 研修会「2016 年度 秋学期 アクティブラーニング・パイロット授業 事例発表」	平成 29 年 3 月	太成学院大学における FD への取り組みとして、第 6 回 FD 研修会において健康スポーツ学科を代表し「2016 年度 秋学期 アクティブラーニング・パイロット授業」の事例発表を行った。アクティブラーニング実践後の自己評価が高い学生は期末試験における成績評価が高い傾向が見られ、受講生全体として映像資料を用いたグループワークの効果は前向きな成果を得られたことを報告した。
22）太成学院大学 太成学院大学高等学校　平成 29 年度高大連携講座「オリエンテーション」	平成 29 年 5 月	
太成学院大学と太成学院大学高等学校との間で開	平成 29 年 7 月	

催した平成 29 年度高大連携講座において「高大連携講座オリエンテーション」を担当した。受講生には、高大連携講座の趣旨を説明するとともに大学での学びに関するアクティブラーニング型授業の体験を通して、広く大学での授業や進路選択に関する興味と関心、知見を深めて頂いた。(現在に至る)		
高槻スポーツ大学講師として「ジュニアスポーツのコーチング・クリニック」講座を担当した。地域スポーツクラブの指導者や民間スポーツクラブのトレーナー、スポーツ指導の初心者の方々を対象に、ジュニア期のコーチングにおけるポイントやチームマネジメント等についてアクティブラーニング型の体験授業やグループエンカウンターを意識したグループワークの実践方法の指導を行った。	平成 29 年 8 月	太成学院大学主催の公開講座 オープンカレッジ 2017 の講師として、「転ばぬ先の知恵 －健康づくりのサイエンス －」を担当した。講座では、中高年者の健康体力づくりに焦点を当て、フレイルの概念を紹介やロコモティブシンドローム予防の核となる骨粗鬆症予防の考え方や研究成果に基づいた知見を解説し、スロー・トレーニングの実践法の紹介を行った。
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
日本サッカー協会公認 サッカー審判員資格 2 級	平成 12 年 3 月	関西サッカー協会所属審判員としてＪリーグ関連マッチ、関西社会人、関西学生、大阪社会人リーグを担当。（現在に至る）
日本サッカー協会公認 フットサル審判員資格 2 級	平成 13 年 8 月	関西サッカー協会所属審判員としてＦリーグ関連マッチ、関西社会人、関西学生、大阪社会人リーグを担当。（現在に至る）
中学校教諭一種免許状 保健体育	平成 14 年 3 月	（平成 16 年３月迄）
高等学校教諭一種免許状 保健体育	平成 14 年 3 月	（平成 16 年３月迄）
中学校教諭専修免許状 保健体育	平成 16 年 3 月	（平成 26 年 1 月 更新講習修了）
高等学校教諭専修免許状 保健体育	平成 16 年 3 月	（平成 26 年 1 月 更新講習修了）
第一種衛生管理者免許証	平成 20 年 3 月	大阪体育大学にて衛生学（公衆衛生学を含

		む）非常勤講師を担当。（現在に至る）
日本サッカー協会公認 レフェリーインストラクター資格 3 級	平成 24 年 4 月	関西サッカー協会所属レフェリーインストラクターとして、３級および４級審判員の担当試合のアセッサー、審判講習会の講師を担当。（現在に至る）
日本サッカー協会公認 C 級コーチ （日本体育協会公認指導員）	平成 25 年 9 月	地域スポーツ指導者の講習会等で、育成・強化年代のコーチング法やフィジカルフィットネスのトレーニング法の指導に携わっている。（現在に至る）
日本サッカー協会公認　レフェリーインストラクター　２級	平成 29 年 2 月	関西サッカー協会審判委員会主催のレフェリー（審判）インストラクター2 級昇級講習会の試験に合格し、日本サッカー協会公認レフェリーインストラクター２級ライセンスに昇級することが認められた。
２　特許等		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）日本サッカー協会公認　サッカー審判員	平成 12 年 12 月	日本サッカー協会公認サッカー２級審判員として、関西学生サッカーリーグ並びに関西社会人リーグ、中・高体連主催大会等の審判員を務めている。(現在に至る)
2）日本サッカー協会公認　フットサル審判員	平成 13 年 3 月	日本サッカー協会公認 フットサル 2 級審判員として、関西社会人フットサルリーグ並びに大阪府社会人リーグ等の審判員を務めている。(現在に至る)
3）大阪体育大学サッカー部 コーチングスタッフ	平成 16 年 4 月	大阪体育大学大学院研究生で在籍中、コーチングスタッフとして関西学生サッカーリーグ（春季：3 位、秋期：7 位)、関西学生選手権大会(3 位)、内閣総理大臣杯に帯同した。（平成 17 年３月迄）
4）大阪サッカー協会会員	平成 23 年 4 月	大阪サッカー協会会員として、大阪サッカー協会主催大会、講習会等の運営業務等に審判委員会として携わっている。(現在に至る)

5）日本サッカー協会公認　レフェリーインストラクター	平成 24 年 4 月	日本サッカー協会公認レフェリーインストラクター（3 級）として、3 級、4 級審判員担当試合のアセッサーや講習会講師を務める。（現在に至る）
6）日本サッカー協会 プレジデンツ・ミッション M4 プロジェクト 講師	平成 25 年 2 月	平成 24 年度日本サッカー協会 プレジデンツ・ミッション M4 プロジェクト講師として、大阪府泉南地区の中・高体育連盟及びクラブチーム指導者を対象にユース及びジュニアユース年代の強化のためのコーチング法や競技規則の講義を担当した。
7）日本サッカー協会公認　コーチ（日本体育協会公認指導員）	平成 25 年 9 月	地域スポーツ指導者講習会等を通して、育成・強化年代のコーチング法やトレーニング法指導に携わる。（現在に至る）
9）大阪府サッカー協会　審判委員会（インストラクター部会　会計）	平成 27 年 4 月	日本サッカー協会公認 サッカーレフェリーインストラクターとして、大阪サッカー協会審判委員会インストラクター部会に所属し、審判員の指導育成、アセッサー業務を担当している。（現在に至る）
10）大阪府サッカー協会　4 級新規審判講習会　講師	平成 27 年 4 月	日本サッカー協会公認 サッカーレフェリーインストラクターとして、大阪サッカー協会審判委員会主催の 4 級新規審判講習会の運営ならびに講師を担当している。（現在に至る）
11）太成学院大学　ソフトボール部　顧問	平成 27 年 10 月	太成学院大学ソフトボール部顧問に就任し、コーチおよび監督と連携し、クラブ強化とともに学生生活の指導、支援に努めている。（現在に至る）
12）大阪府サッカー協会　審判委員会（インストラクター部会　大阪トレセン担当）	平成 28 年 4 月	日本サッカー協会公認 サッカーレフェリーインストラクターとして、大阪サッカー協会審判委員会インストラクター部会に所属し、審判員の指導育成、アセッサー業務を担当している。（現在に至る）
13）太成学院大学　ソフトボール部　顧問	平成 28 年 4 月	阪神オープン出場、第 10 回熊野市長杯大学女子ソフトボール大会 21 位、第 48 回春季関西大学ソフトボールリーグ戦大会 1 部 6 位、第 68 回全日本総合女子選手権大会大阪府予選会準優勝、第 68 回全日本総合女子選手権大会近畿予選会 1 回戦、第 48 回西日本大学

		ソフトボール選手権大会 1 回戦、第 51 回全日本大学ソフトボール選手権大会１回戦、第 48 回秋季関西学生ソフトボールリーグ戦大会 2 部 5 位、第 33 回関西学生ソフトボール新人戦 1 回戦
14）関西サッカー協会　サッカー審判インストラクター２級昇級講習会	平成 29 年 1 月	大阪府サッカー協会審判委員会委員長の推薦を受け、関西サッカー協会サッカー審判インストラクター２級昇級講習会を受験し、２級インストラクター試験に合格した。
15）太成学院大学　ソフトボール部　顧問	平成 29 年	平成 29 年度成績：第 11 回熊野市長杯大学女子ソフトボール大会総合 26 位、第 49 回春季関西学生女子ソフトボールリーグ戦大会１次予選１位・総合 2 部 4 位、第 49 回西日本大学ソフトボール選手権大会 2 回戦、第 49 回秋季関西学生女子ソフトボールリーグ戦大会１次予選１位・総合 2 部 4 位（現在に至る）
16）太成学院大学　高大連携主担	平成 29 年 4 月	太成学院大学における高大連携主担の役職を拝命し、関連高校との高大連携・接続事業等のコーディネート、特別講義を担当するとともに併設校である高等学校との間で連携を図り、大学の学びの体験をとして生徒が進路決定や将来のキャイア形成に繋げられる特別講座を高等学校の進路指導部と連携し、講座のコーディネーターと講師を担当している。（現在に至る）
４　その他		
1）日本体力医学会　若手奨励賞	平成 17 年 9 月	日本体力医学会大会において、研究発表「運動条件の違いが領域別骨密度に及ぼす影響」で、共同研究者として若手奨励賞を受賞した。
2）2008 Pre-Olympic Congress Scholarship 賞	平成 20 年 8 月	2008 International Convention on Science Education and Medicine in Sport において、研究発表[Influence of running on micromorphology of osteocytes in RIS-treated rats]で、筆頭発表者として 2008 Pre-Olympic Congress Scholarship 賞を受賞した。
3）2008 Pre-Olympic Congress Scholarship 賞	平成 20 年 8 月	2008 International Convention on

		Science Education and Medicine in Sport において、研究発表［Influence of aquatic walking on the blood leptin level in middle-aged to elderly women］で、共同研究者として 2008 Pre-Olympic Congress Scholarship 賞を受賞した。	
4）日本水泳・水中運動学会　研究奨励賞	平成 23 年 10 月	日本水泳・水中運動学会年次大会において、研究発表「フィンスイミングにおけるキック動作とビーフィンの動きの関係」で、共同研究者として研究奨励賞を受賞した。	
5）日本スポーツ整復療法学会　最優秀奨励賞	平成 23 年 10 月	日本スポーツ整復療法学会大会において、研究発表「ギプス固定が軟骨細胞及ぼす走査型電子顕微鏡による組織学的研究」で、筆頭発表者として最優秀奨励賞を受賞した。	
6）日本スポーツ整復療法学会　優秀奨励賞	平成 23 年 10 月	日本スポーツ整復療法学会大会において、研究発表「ラット腱コラーゲン線維の走査型電子顕微鏡的研究」で、共同研究者として優秀奨励賞を受賞した。	

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　運動生理学のニューエビデンス	共著	平成 22 年	真興交易（株）医書出版部	身体運動やパフォーマンスの科学的基礎となる運動生理学について、国際的なレベルで活躍する新進気鋭の研究者が集まり最新の運動生理学のエビデンスをまとめた。「Section 6. 運動と骨格 1.メカニカルストレスと骨細胞」の項を執筆担当した。メカニカルストレスと骨細胞との関係について、最新の免疫組織化学及び形態学的研究成果をもとに骨組織における骨細胞の生理機能と解剖学的特徴について知見をまとめた。 （宮村実晴 編、Section 6 運動と骨格 メカニカルストレスと骨細胞：滝瀬定文、河上俊和）
2.健康スポーツ科学に	共著	平成 28 年 9 月	（株）杏林書院	水泳・水中運動研究の第一人者が参集

おける運動処方としての水泳・水中運動				し、最新の運動処方や指導法、コーチング法をまとめた。「３章 水泳・水中運動が身体にもたらす効果 ３)中高年「水泳・水中運動が骨密度に及ぼす影響」を執筆担当し、ヒトを対象とした骨密度や骨代謝マーカーに関する研究成果をもとに骨粗鬆症予防の運動処方をまとめた。 （出村慎一 監、滝瀬定文 佐藤 進、池本 幸雄 編 第３章 水泳・水中運動が身体にもたらす効果 3) 中高年「水泳・水中運動が骨密度に及ぼす影響」(滝瀬定文、河上俊和）
（学術論文） １ バドミントン運動が骨量に及ぼす影響（査読付）	共著	平成 14 年	近畿職業能力開発大学校紀要 第 10 号 p.1 － 7	中高年女性の定期的なバドミントン運動が腰椎、撓骨や筋力に及ぼす影響について検討を行った。運動群の方が非運動群より腰椎、利き腕側の橈骨でいずれも有意に高値を示し、過重負荷だけではなく骨に捻転力が働くような負荷も重要であることを明らかにした。(中瀬義弘、大川得太郎、和田眞由子、小妻崇志、河上俊和、滝瀬定文)
２ 力学的ストレスの減少が廃用性骨萎縮に及ぼす影響に関する研究（修士論文）（査読付）	単著	平成 16 年	平成 15 年度大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科修士論文	力学的ストレスの減少が廃用性骨萎縮に及ぼす影響について領域別骨密度の測定と骨芽細胞及びコラーゲン線維の形態学的観察を行った。ギプス固定による力学的ストレスの減少では、大腿骨遠位骨端骨幹端部の骨密度の減少が大きく、力学的ストレス応答として骨芽細胞、コラーゲン線維の走行が大きく関わっていることを明らかにした。(河上俊和、研究指導 滝瀬定文 教授)

3　閉経後の水泳運動が骨密度に及ぼす影響（査読付）	共著（筆頭）	平成 17 年	スポーツ整復療法学研究 第 7 巻 第 1 号 p.1 － 8	閉経後の水泳運動が骨密度に及ぼす影響について水泳教室及び文化教室の体力と骨密度測定を行った。運動群では大腿骨近位部骨密度と脚筋持久力との間に相関が認められ、継続的な水泳運動が大腿骨近位部骨密度の維持に影響を及ぼすことを明らかにした（河上俊和、滝瀬定文、大川得太郎、儀満大輔、岩田勝、廣橋賢次）
4 脛骨骨折部の牽引が仮骨形成と骨折部骨密度に及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 18 年	中部日本整形外科災害外科学会雑誌 第 49 巻 第 5 号 p.859 － 860	ラット脛骨骨折牽引モデルの経日的な骨密度の分析と形態学的観察を行った。延長骨は、早期から外仮骨が形成、延長終了後は仮骨両端で肥大軟骨細胞が観察され骨折断端遠位部骨密度が高く、張力刺激が局所の骨密度に影響することを明らかにした。 （河上俊和、滝瀬定文、儀満大輔、廣橋賢次、河田弘）
5 廃用性骨萎縮後の運動が骨細胞に及ぼす影響	共著	平成 18 年	中部日本整形外科災害外科学会雑誌 第 49 巻 第 6 号 p.1133-1134	メカニカルストレス受容伝達細胞としての骨細胞の細胞突起を形態学的に観察した。メカニカルストレスの軽減は骨細胞を球状、ネットワークを粗にさせるが、外的なメカニカルストレは骨細胞または細胞間ネットワークを通じ骨芽細胞、破骨細胞へと伝達し骨形成、吸収を促進していることを明らかにした。(儀満大輔、滝瀬定文、河上俊和、廣橋賢次、河田弘)
6 バタフライ アジア・日本記録保持者の記録樹立要因を探る How to Coaching Butterfly	共著	平成 19 年	日本水泳・水中運動学会 2009 年論文集 p.66-69	バタフライ日本記録樹立者（2009 年）の過去 6 年間の記録と競泳スピードメーターを用い樹立要因を探った。50 秒の記録を越えるには、ストローク中の上半身と水面角度を 0 度に近づけ、ウェーブ及びインスイープ局面で重心移動を利用し膝曲り角度 180 度のキックを打つ。最大筋力プログラムを行わないことが世界トップ継続の可能性が高いことを明らかにした。(井出貴久、吉村豊、河本耕平、滝瀬定文、河上俊和)

７ 廃用性萎縮におけるラット腱コラーゲン線維の組織学的研究（査読付）	共著	平成 23 年	スポーツ整復療法学研究 第 12 巻 第 3 号 p. 155-161	ラット足関節底屈及び背屈モデルを作成し、後肢筋への伸張刺激が腱線維に及ぼす影響について組織学的研究を行った結果、骨腱付着部の ALP 反応細胞数は底屈群が背屈群に比べて有意に低く、コラーゲン線維径が小さい。エンテーシス石灰化軟骨層の球状石灰顆粒は疎な構造で、ギプス固定肢位は腱骨付着の構築に影響することを明らかにした。（細川賢司、滝瀬定文、河上俊和）
８ 骨折治癒過程における血管網の組織学的研究（査読付）	共著	平成 23 年	スポーツ整復療法学研究 第 13 巻 第 1 号 p. 27-32	ラット脛骨骨折モデルを作成し骨折直後、14 日後、28 日後の血管鋳型標本を作製し走査型電子顕微鏡観察を行った。骨折 14 日後から仮骨が形成され、28 日後には骨癒合が認められた。仮骨周囲は小動脈や毛細血管が分枝し一部の毛細血管は仮骨に侵入する像が観察され、軟骨基質の石灰化は血管侵入の方向決定に重要であることを明らかにした。（向井裕貴、滝瀬定文、河上俊和、川久保昭秀）
９ 運動が骨密度及び骨細胞に及ぼす影響に関する組織学的研究（博士論文）（査読付）	単著	平成 23 年	平成 23 年大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科博士論文	運動が骨密度及び骨細胞の微細形態に及ぼす影響を明らかにするため、ヒト及び実験動物を対象に研究を行った。水泳運動は閉経後の脚筋持久力維持と大腿骨近位部骨密度減少を抑制し尿中デオキシピリジノリン濃度低下に影響することを認めた。動物実験では、骨細胞は骨基質中に存在し細胞突起を通じて骨細胞及び骨芽細胞と連絡し、運動による骨への負荷は、骨細胞数の増加と細胞間の連絡網を密にすることを組織学的に明らかにした。（河上俊和、研究指導 滝瀬定文 教授）
１０ 唾液アミラーゼからみた水泳選手のストレスについて	共著	平成 23 年	日本水泳・水中運動学会 2011 年論文集 p. 150-151	大学女子競泳選手を対象に、合宿中における唾液アミラーゼの測定及び自覚的疲労の調査から、合宿中の水泳選手の精神的負担について検討を行った。合宿終了後に継続してアミラーゼ値が高い選手が多く認められ、主観的スト

				レスの変動と客観的ストレスの指標の変動は必ずしも一致しないことを明らかにした。(川久保昭秀、滝瀬定文、河上俊和、尾関一将、谷川哲朗)
１１ フィンスイミングにおけるキック動作とビーフィンの動きの関係	共著	平成 23 年	日本水泳・水中運動学会 2009 年論文集 p. 158 - 159	ビーフィン泳のキック動作とビーフィンの動きの関係を動作解析を行った。キック動作とビーフィンの動き関係を波形表出に成功し、波長毎の周波数、振幅、位相差を評価した結果、キック動作とビーフィン先周波数との間に関連性があることを明らかにした。（谷川哲朗、川久保昭秀、滝瀬定文、尾関一将、河上俊和、野村照夫）
１２ 骨折治癒過程における免疫組織化学的研究（査読付）	共著	平成 24 年	スポーツ整復療法学研究 第 13 巻 第 3 号 p. 161 - 169	水素イオン指数が角膜上皮細胞障害に及ぼす影響として、水泳後の眼障害の自覚的症状調査と基礎的実験を行った。ゴーグル未使用と眼の自覚症状発生との間に関連性が認めた。プール水の pH は､角膜の表層細胞と microvilli の形態に影響し、水道水の洗眼は角膜細胞辺縁の変形させるためゴーグル着用と水道水の洗眼に配慮が必要であることを明らかにした。(滝瀬定文、河上俊和、谷川哲朗)
１３ 水素イオン指数が角膜上皮細胞に及ぼす衛生学的研究（査読付）	共著	平成 24 年	スポーツ整復療法学研究 第 13 巻 第 1 号 p. 1 - 10	水素イオン指数が角膜上皮細胞障害に及ぼす影響として、水泳後の眼障害の自覚的症状調査と基礎的実験を行った。ゴーグル未使用と眼の自覚症状発生との間に関連性が認めた。プール水の pH は､角膜の表層細胞と microvilli の形態に影響し、水道水の洗眼は角膜細胞辺縁の変形させるためゴーグル着用と水道水の洗眼に配慮が必要であることを明らかにした。(滝瀬定文、河上俊和、谷川哲朗)

１４　プール水が水泳愛好者の皮膚及び毛髪に及ぼす影響	共著 （筆頭）	平成 24 年	日本水泳・水中運動学会 2012 年次大会論文集 p. 30 － 32	プール水が、皮膚及び毛髪繊維に及ぼす影響について、水泳愛好者の皮膚自覚症状調査及び毛髪の微細形態観察を行った。皮膚症状の訴えは、水泳後に発赤及び痒み､かさつきが多かった。水泳後の毛髪は、Cuticle の損傷と力学的特性が変化し毛根部は中間径フィラメントの泥状化し、プール水の pH 変化は皮膚角質層や毛髪 Cuticle 構造の損傷を引き起こす要因となることを明らかにした。(河上俊和、滝瀬定文、中原亮太、谷川哲朗)
１５　中高年女性における水中ウォーキングが血中レプチンに及ぼす影響	共著 （筆頭）	平成 25 年	日本水泳・水中運動学会 2013 年次大会論文集 p. 22 － 23	継続的な運動習慣を有する中高年女性を対象に 60 分間の水中ウォーキング実施前後の血液生化学検査を行い、水中ウォーキングが血中レプチンに及ぼす影響を検討した。安静時の血中レプチン濃度は正常値を上まわっており､運動後は血中 IL-6 濃度と血中レプチン濃度との間に相関が認められた。水中ウォーキング時の血中レプチン濃度を規定する要因として運動強度が深く関わることを明らかにした｡(河上俊和、滝瀬定文、古河準平、奥田修人、佐川光一、井出貴久)
１６　競泳スタート後の潜水局面が記録に及ぼす影響	共著	平成 25 年	日本水泳・水中運動学会 2013 年次大会論文集 p. 112 － 113	大学競泳選手を対象に整形外科的メディカルチェックによる肩及び股関節や膝関節を中心とした関節可動域、筋力測定から競泳選手の身体的特性について検討を行った。肩甲体の柔軟性は日本選手権出場レベル選手が優れ、種目別の比較では僧帽筋下部及び菱形筋、大殿筋の筋力は自由形選手が高く、短距離選手に腸腰筋タイトネスが高かった。関節可動域は、股関節の内旋と外旋との間で左右差が見られる選手が多く、その差は下肢傷害発症の要因となることを明らかにした。(川島康弘、滝瀬定文、尾関一将、河上俊和)

１７　整形外科的メディカルチェックからみた大学競泳選手の身体的特徴	共著	平成25年	日本水泳・水中運動学会2013 年次大会論文集 p.126 - 127	大学競泳選手を対象に整形外科的メディカルチェックによる肩及び股関節や膝関節を中心とした関節可動域、筋力測定から競泳選手の身体的特性について検討を行った。肩甲体の柔軟性は日本選手権出場レベル選手が優れ、種目別の比較では僧帽筋下部及び菱形筋、大殿筋の筋力は自由形選手が高く、短距離選手に腸腰筋タイトネスが高かった。関節可動域は、股関節の内旋と外旋との間で左右差が見られる選手が多く、その差は下肢傷害発症の要因となることを明らかにした。(川島康弘、滝瀬定文、尾関一将、河上俊和)
１８　ラット脛骨骨欠損後の運動が血管形成に及ぼす影響（査読付）	共著（筆頭）	平成26年	スポーツ整復療法学研究 第15巻 第３号 p.153 - 158	運動が骨欠損部の修復過程の血管形成に及ぼす影響を検討するため血管鋳型標本を作製し観察を行った。骨欠損 4 週後は、未発達な毛細血管の網工構造が観察され、Defect＋Ex 群は毛細血管が放射状に分枝し骨欠損部位に伸展する血管枝像が観察された。力学的負荷の強度や頻度は、骨基質の変形に影響し骨基質形成の促進や血管新生関わることを明らかにした。(河上俊和、滝瀬定文、古河準平、奥田修人、佐川光一)
１９　運動及びディナベーション筋によるラット腱コラーゲン線維の組織学的研究（査読付）	共著	平成26年	スポーツ整復療法学研究 第15巻 第4号 p.11－19	ラットディナベーションによる筋萎縮モデルを用い、腱コラーゲン線維について組織学的観察を行った。アキレス腱線維における FGF の発現と線維芽細胞の細胞膜に散在する接着タンパクによるⅠ型コラーゲン発現が観察から、腱組織は、ディナベーションによる筋組成変化に対し、コラーゲン線維の走行と形態に及ぼす影響が大きいことを組織学的に明らかにした。(古河順平、滝瀬定文、河上俊和、奥田修人、佐川光一)

２０　水泳授業に置ける受講生のストレス反応について	共著	平成 26 年	日本水泳・水中運動学会 2014 年次大会論文集 p. 132 － 133	保健体育科の水泳授業における実技指導法の実態と受講生の生理的負担との関係を明らかにするために唾液アミラーゼ測定による研究を行った。水泳授業時におけるストレス応答生理活性物質は,水泳の運動強度に依存せず、早期からの水泳経験と技術獲得の有無が学習者の精神的状態に影響を及ぼす。今後、水泳授業では、習熟度別の指導法や集団・個別の指導を詳細に検討する必要性があることを生理学的マーカーから明らかにした。(奥田修人、東山祐三、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、佐川光一)
２１　ランニングと骨リモデリング	共著	平成 27 年	ランニング学研究　第 26 巻 p. 17 － 23	第 26 回ランニング学会大会におけるキーノートレクチャーとして、加齢に伴う骨密度の変化やランニングが骨密度に与える運動効果に関連するフィールド研究、動物実験、さらに女性ランナーにおける骨密度と疲労骨折との関連性について最新の研究成果を網羅し、ランニングと骨リモデリングとの関係について総説をまとめた。(滝瀬定文、河上俊和)
22. 水中運動が閉経後女性の骨代謝マーカー及び骨密度に及ぼす影響に関する縦断的研究	共著（筆頭）	平成 27 年	日本水泳・水中運動学会 2015 年次大会論文集 p. 150 － 155	閉経後における骨粗鬆症の運動療法や予防戦略を検討するため、水中運動を継続している閉経後女性の大腿骨近位部および腰椎の骨密度と水中運動前後の骨代謝マーカーの測定を行った。骨密度と骨代謝マーカーの経年的な検討から、水中運動後は、BAP および P1NP の血中濃度が高まることが認められた。水中運動は大腿骨近位部や腰椎の海綿骨優位な領域での骨基質タンパク質合成に影響を与え、閉経後の骨密度減少の抑制に寄与することを明らかにした。(河上俊和、滝瀬定文、佐川光一、奥田修人.)

23. 筋損傷後の温熱刺激が筋再生過程初期に及ぼす影響	共著	平成 28 年	スポーツ整復療法学研究 第 16 巻 第 3 号 p. 149 - 159	筋損傷後の筋再生過程初期における筋再生に係る成長因子の発現と微細形態に着目し組織学的研究を行った。筋損傷再生過程において筋損傷部に HSP70 の反応が温熱刺激により強く観察され、温熱刺激群では HSP70 の誘導が促進されることを明らかにした。（佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、奥田修人）
24. ラット筋挫傷後の寒冷刺激が筋修復に及ぼす影響	共著	平成 28 年	スポーツ整復療法学研究 第 17 巻 第 3 号 p. 163 - 170	筋損傷後の寒冷刺激が筋損傷後の修復に与える影響について、筋サテライト細胞に着目し組織学的研究を行った。走査型電子顕微鏡の観察条件の設定を調整しパラフィン切片を用いることにより筋サテライト細胞の観察方法を確立した。また、筋損傷 72 時間後の免疫染色結果からマクロファージの浸潤は筋損傷後の再生に重要であることを明らかにした。（奥田修人、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、佐川光一）
25. 持久性運動が高齢ラットの筋組成及び筋形態に及ぼす影響	共著	平成 28 年	スポーツ整復療法学研究 第 17 巻 第 4 号 p. 1 - 8	持久性運動が筋組成及び筋形態に及ぼす影響に ついて、高齢ラットを用い筋組織の強度測定及び組織学的検討を行った。高齢ラットの持久性運動は、筋膜のコラーゲン合成を活性化させることでコラーゲン代謝の改善やコラーゲン線維量の低下をもたらし，筋破断値及び筋スティフネス値を高める要因となることが明らかになった。（佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、奥田修人）
26. 閉経後の水泳運動が血中アディポサイトカインと骨密度との関係に及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 28 年	日本水泳・水中運動学会 2016 年次大会論文集 p. 30 - 35	血中アディポサイトカインが閉経後女性スイマーの骨密度および骨代謝動態に及ぼす影響について、腰椎及び大腿骨近位部の骨密度測定と安静時および水中運動後の骨代謝マーカー、脂質代謝関連タンパク質の測定を行った。水泳・水中運動は,血中アディポネクチンと骨形成マーカーの動態に影響を与え,海綿骨優位な骨領域への運動効果

				として,腰椎骨密度の Z スコアに影響を与えることが明らかになった.（河上俊和、滝瀬定文、佐川光一）
27. スポーツ指導法（サッカー）におけるアクティブラーニング型授業の開発と効果の検証	単著	平成 30 年（In press）	太成学院大学紀要 第 39 巻	スポーツ指導法（サッカー）の授業において、学生が正しい競技規則の解釈とフェアなコンタクトプレーの理解を深め、実践的指導法の養成を図るためアクティブラーニングパイロット授業を実施した。授業では、サッカー競技中のコンタクトプレー映像を用い、ファウル判定をグループで規定時間内にディスカッションし、判定と根拠の発表を行った。授業終了後、アンケートの自己評価が高い学生ほど定期試験の成績評価が高い傾向が見られたが、数名は成績評価の向上に繋がらない学生が認められた。アクティブラーニングの実施を確かな知識として定着させ、学修効果を高められる実践法を開発することが課題として見出された。(河上俊和)
（学術論文・英文）				
1 Comparison of bone mineral densities between postmenopausal women who swam regularly and those who took art classes（査読付）	共著（筆頭）	平成 20 年	Japanese Journal of Sciences in Swimming and Water Exercise Vol.11, No.1, p.1-13.	閉経後の水泳運動が骨代謝に及ぼす影響について、全身骨及び大腿骨近位部の骨密度と骨代謝マーカー測定を行った。脚筋持久力は、水泳運動群が習い事手芸群に比べて有意に高く、大腿骨近位部骨密度が維持される傾向が見られた。尿中デオキシピリジノリン濃度は、水泳運動群の運動後の値が安静時に比べて有意な低下が認められ、閉経後の水泳運動は骨吸収の抑制に作用することを明らかにした。（Toshikazu Kawakami and Sadafumi Takise）

2 Effects of a Decrease in Mechanical Stress on Femoral Regional Bone Mineral Density and Osteoblast Microstructure: Comparison in a Model of Freely Mobile and Cast Immobilized Rats（査読付）	共著（筆頭）	平成21年	Japanese Journal of Physical Fitness and Sports Medicine. Vol.58, No.2, p.305 - 316.	力学的ストレスの減少が、大腿骨領域別骨密度の低下に及ぼす影響について、領域別骨密度の分析と骨芽細胞の微細形態について形態学的研究を行った。力学的ストレスの減少は、大腿骨遠位骨端・骨幹端部の骨密度の低下が大きく、骨芽細胞の微細形態が大腿骨遠位骨端・骨幹端部の骨密度の低下に及ぼす影響が大きいことを明らかにした。（ Toshikazu Kawakami, Sadafumi Takise and Daisuke Gima）
3 Effects of Masticatory Movement on Cranial Bone Mass and Micromorphology of Osteocytes and Osteoblasts in Developing Rats（査読付）	共著（筆頭）	平成21年	Asia Pacific Journal of Clinical Nutrition Vol.18, No.1, p.96 - 104.	発育期の咀嚼運動が骨細胞に及ぼす影響について形態学的研究を行った。頭蓋骨骨塩量は固形飼料群が高く、咬筋重量と骨密度との間に相関が認められた。骨芽細胞にTGF-βの発現が認められ、発育期の咀嚼運動は、頭蓋骨骨塩量の増加と頭蓋骨の骨細胞および骨小腔の微細形態に反映されることを明らかにした。（ Toshikazu Kawakami, Sadafumi Takise, Takafumi Fuchimoto and Hiroshi Kawata）
4 Effects of Reduced Knee-bend on 100 Butterfly Performance: A Case Study Using the Men ’ s Asian and Japanese Record Holder	共著	平成22年	Biomechanicsandmedicineinswimming Vol.11, p.270 - 271.	100 メートルバタフライアジア及び日本記録保持者を対象に、2002年ベストタイム53.22秒を2009年は51.00秒に改善した要因について分析した。バタフライキックは、深度 39%から 55%（170 度以下の角度で膝曲げ）の改善が、泳速度を 2.5m/sec から 2.7m/sec 高め、ストローク効率の増加要因となることを明らかにした。（ Takahisa Ide,Yutaka Yoshimura, Kohei Kawamoto,Sadafumi Takise and Toshikazu Kawakami）

５ Effects of Physical Exercise on Femoral Bone Mineral Density and Osteocyte Micromorphology in Young Ovariectomized (OVX) Rats（査読付）	共著（筆頭）	平成 22 年	Japanese Journal of Physical Fitness and Sports Medicine. Vol.59, No.4, p.395 - 406.	身体運動が骨粗鬆症（卵巣摘出）モデルラットの大腿骨骨密度に及ぼす影響について領域別骨密度の分析を行った結果、大腿遠位骨端部の骨密度への影響が大きい。そして、大腿骨内部の構造変化は、骨細胞の細胞突起を介した骨細胞間の様網状構造を密にし、骨細胞相互の情報連絡網を発達させることを形態学的に明らかにした。（ Toshikazu Kawakami, Sadafumi Takise and Hiroshi Kawata）
６ Straightness Knee Butterfly Kick Markes More Lactate Acid During Buterfly Swimming. A Case Study with a High-Level Swinner.（査読付）	共著	平成 24 年	Inter national Journal of swimming Kinetics. Vol.1, No.1, p.51 - 59.	バタフライアジア記録保持者の 2005 年と 2009 年とのストロークメカニクスの違いについて、スピードメーター及び水中カメラ、血中乳酸濃度の測定から検討を行った。ストレートニーキックは、血中乳酸濃度の上昇を抑え、1 ストローク速度、最大速度、ストロークあたりの距離を増加させることが認められ、ストレートニーキックテクニックは 100 メートルバタフライのレース後半での泳速度向上に重要な要因となることを明らかにした。（Takahisa Ide, Sadafumi Takise, Yutaka Yoshimura, Kohei Kawamoto, Steve Schaffer, William F. Johnson and Toshikazu Kawakami）
（その他・報告書）				
１ 西安體育學院・大阪体育大学大学院 スポーツ科学研究科特別企画 大学院若手研究者ジョイントミーティング 報告書	共著	平成 21 年	大阪体育大学 国際・地域交流委員会 報告書	大阪体育大学大学院と中国西安體育學院との国際交流事業として、大学院若手研究者ジョイントミーティングを行ない、基調講演、大学院研究発表、体操及びサッカー公開授業と交流試合、教職員会議、西安體行學院施設見学の内容について報告書をまとめた。（編集委員：大阪体育大学 国際・地域交流委員会委員、西安體育學院訪問団員）

2　大阪体育大学大学院・ 西安體育學院　大学院学術交流 報告書	共著	平成 22 年	大阪体育大学 国際･地域交流委員会　報告書	大阪体育大学大学院と中国西安體育學院との国際交流事業として、大学交流協定調印式ならびに大学院学術交流を行なった。基調講演、実技授業の研究会、大学院研究発表会を行なった交流事業の内容を報告書としてまとめた。(編集委員：大阪体育大学 国際・地域交流委員会委員)
3 第 4 回全国学生選抜合同合宿 (財) 日本水泳連盟学生委員会関西支部報告書	共著	平成 22 年	(財) 日本水泳連盟学生委員会関西支部競泳強化委員会　報告書	(財) 日本水泳連盟学生委員会主催の第 4 回全国学生選抜合同合宿について、学生委員会関西支部は合宿中の練習プログラム、合宿日誌、関西支部参加選手及び帯同役員の疲労調査（唾液アミラーゼの変化）結果を関西支部競泳強化委員会編集の報告書としてまとめ日本水泳連盟学生委員会へ報告した。 （編集委員：(財) 日本水泳連盟学生委員会関西支部競泳強化委員会）
4 西安體育學院の「体育・スポーツ教育課程」に関する現状調査	共著	平成 24 年	2011 年度　大阪体育大学 西安體育學院　国際交流報告書 p. 46 － 70.	2011 年度大阪体育大学と西安體育學院（中華人民共和国）との国際交流として、西安體育學院における西安體育學院の「体育・スポーツ教育課程」に関する現状調査を行った。西安體育學院における体育教員養成のための教育カリキュラムの調査結果を各種目別にまとめ報告した。(滝瀬定文、河上俊和、徐旻君)
5　平成 25 年度 大阪体育大学大学院 特別予算(海外学術交流・総合研究事業) 海外学術交流報告書	共著	平成 26 年	平成 25 年度 大阪体育大学大学院 特別予算(海外学術交流・総合研究事業) 海外学術交流報告書	平成 25 年度大阪体育大学大学院特別研究予算による海外学術交流事業として、西安體育學院との学術交流事業（2012 年体力測定結果報告および日本における体力の変遷や青少年の体力問題、西安體育學院生の体力測定と体力測定法の指導、中国武術研究室との懇談会、模擬授業、授業並びに体育・スポーツ施設視察）の成果を報告書にまとめた。　(編集委員：滝瀬定文、河上俊和)

6　大阪体育大学と西安體育學院との間の2012 年度体力測定結果報告および日本における体力の変遷や青少年の体力問題 （その他・科学研究助成）	共著	平成 26 年	平成 25 年度 大阪体育大学大学院 特別予算(海外学術交流・総合研究事業) 海外学術交流報告書 p.3 - 27	平成 25 年度大阪体育大学大学院特別研究予算による海外学術交流事業として「2012 年体力測定結果報告および日本における体力の変遷や青少年の体力問題」を報告用資料を作成し、西安體育學院体力測定研究室の教員ならびに大学院生を対象に講義した内容を報告書としてまとめた。（滝瀬定文、河上俊和）
1. 平成 30 年度科学研究費助成事業-科研費-「平成 30 年度若手研究」申請 （その他・国際学会発表）	単	平成 29 年（審査中）	独立行政法人日本学術振興会　平成 30 年度科学研究費助成事業-科研費-	平成 30 年度科学研究費助成事業-科研費-において、平成 30 年度（2018 年度）若手研究として「大学生競技スポーツ選手の骨密度特性と若年期からの骨粗鬆症予防の留意点の再検証」の研究計画調書の申請を行った（審査中)。（河上俊和）
1 Effect of postmenopausal exercise on the bone mineral density	共著	平成 16 年	Pre-Olympic congress 2004 Sport Science Through The Ages.	閉経後女性を対象として、水泳運動が骨密度及び骨代謝動態に及ぼす影響について検討を行った。大腿骨近位部の骨密度は運動群の方が高い傾向がみられ、運動群の尿中 D-pyr の値は運動後に有意な低下を示したことから、水泳運動は閉経後の骨密度を維持し、骨代謝動態に影響を及ぼすことを明らかにした。(Sadafumi Takise, Toshikazu Kawakami, Daisuke Gima and Masaru Iwata)
2 Effect of decreases in mechanical strees on disuse bone atrophy	共著（筆頭）	平成 16 年	Pre-Olympic congress 2004 Sport Science Through The Ages.	力学的負荷減少が廃用性骨萎縮に及ぼす影響について部位別骨密度測定及び形態学的研究を行った。大腿骨及び大腿骨遠位骨端骨幹端部の骨密度はギプス固定群の骨密度が有意に低く、骨表面を覆う骨芽細胞の規則性、コラーゲン線維走行が乱れることを明らかにした。(Toshikazu Kawakami, Sadafumi Takise, Daisuke Gima and Masaru Iwata)

3 Effect of Exercise on the bone mineral density and bone cells after unloading in rats	共著	平成16年	Pre-Olympic congress 2004 Sport Science Through The Ages.	ギプス固定後の運動が骨密度と骨細胞に及ぼす影響について検討を行った。再過重により遠位骨端骨幹端部の骨密度の増減が大きい。SEM 像では運動群の骨細胞は直径15μｍの球状、紡錘形の多様な形態あった。運動群の骨芽細胞及び骨細胞は、骨細胞の細胞突起は複雑に入り組んだ構造を呈することを明らかにした。(Daisuke Gima, Sadafumi Takise, Toshikazu Kawakami and Masaru Iwata)
4 Influence of running on micromorphology of osteocytes in RIS-treated rats (2008 Pre-Olympic Congress Scholarship受賞論文)	共著 (筆頭)	平成20年	2008 International Convention on Science Education and Medicine in Sport	骨の骨細胞は骨小腔内に埋没する特殊な形態を呈し、骨細胞の細胞外環境の変化が細胞体形成と細胞突起伸展に関わると考えられるため、ラットにリセドロネートを投与し、骨細胞の形態変化について形態学的研究を行った。骨細胞はRIS+EX群＜RIS群＜EX群の順にその大きさは異なり、EX群の網状構造に最も良く発達が認められ、骨に加わる力学的ストレスは骨細胞が多数の枝分かれした細胞突起と細胞性網状構造に影響を及ぼすことが明らかとなった。 (Toshikazu Kawakami, Sadafumi Takise and Daisuke Gima)
5 Influence of aquatic walking on the blood leptin level in middle-aged to elderly women (2008 Pre-Olympic Congress Scholarship受賞論文)	共著	平成20年	2008 International Convention on Science Education and Medicine in Sport	レプチンは脂肪細胞由来の摂食抑制とエネルギー代謝調節に関わることから、水中ウォーキングが血中レプチン濃度に及ぼす影響について検討を行った。血中レプチンは運動前後で大きな変動を示さなかったが、IL-6濃度と血中レプチン濃度との間には相関が認められ、血中レプチン濃度を規程する要因として体脂肪率だけでなく運動量及び運動強度などが関係することを明らかにした。 (Sadafumi Takise, Toshikazu Kawakamia and Daisuke Gima)
[その他・国際学会発表]				

6 Histological study of the age-related effects of exercise on osteocytes	共著 (筆頭)	平成 24 年	2012 International Convention on Science Education and Medicine in Sport	加齢現象に伴う骨密度減少の機序について骨細胞の微細形態及びサイトカインの発現について組織学的研究を行なった。骨への力学的負荷の減少は、骨小腔と骨細胞の減少を招き、骨小腔の calpain 発現が骨密度の減少に関与することを明らかにした。(Toshikazu Kawakami, Sadafumi Takise, Junpei Furukawa and Mitsuhiko Masuhara)
7 Histological study of the role of angiogenesis in adipocyte	共著	平成 24 年	2012 International Convention on Science Education and Medicine in Sport	脂肪細胞の肥大、増加における血管新生との係わりについて高脂肪餌摂取が脂肪組織における新生血管増殖因子に及ぼす影響を検討した。高脂肪餌群は、脂肪細胞膜近傍の微細血管に EPC として CD34 反応が認められた。骨髄由来の血管内皮前駆細胞は、内皮細胞による血管新生を促し、肥大化した脂肪細胞形成の進展に影響を及ぼすことを明らかにした。 (Sadafumi Takise, Toshikazu Kawakami, Junpei Furukawa and Mitsuhiko Masuhara)
[その他・学会発表]				
1 サッカー選手の体力と傷害に関する実態調査	共著 (筆頭)	平成 13 年	第 3 回日本スポーツ整復療法学会大会	大学サッカー選手 87 名を対象に、専門的体力測定と傷害発症の調査を行った。サッカーはボディコンタクトによる身体への過酷な負担と危険性が高いため、外傷や障害の頻発に対する医学的管理が試合成績に影響するものと考えられ、総合的体力養成、個々の体力のレベルアップ、経年変化による科学的分析と専門的トレーニングの必要性を明らかにした。(河上俊和,滝瀬定文,中瀬義弘)

2 水泳運動が閉経後女性の骨密度に及ぼす影響について	共著 (筆頭)	平成 14 年	第 57 回 日本体力医学会大会	水泳運動継続者及び文化教室参加者の全身骨骨密度を測定、比較検討を行った。水泳群は大腿骨頚部骨密度が高い傾向が認められ、水抵抗は骨密度付加効果が高いと考えられ、ストレインはインピーダンスとなり、骨形成の促進に影響することを認めた。(河上俊和,滝瀬定文,岩田勝、廣橋賢次、小妻崇志、中瀬義弘、大川得太郎)
3 脊髄損傷者における車椅子バスケットボール選手の骨密度について	共著	平成 14 年	第 57 回 日本体力医学会大会	スポーツセンターでスポーツを実施している脊髄損傷者 10 名,健常者 41 名を対象に全身骨骨密度を測定を行った。上肢骨密度は、健常者より脊髄損傷者の方が僅かに高い傾向を示すとともに、下肢の骨量を高める運動療法に関する運動内容を考慮することが重要であることを明らかにした。(小妻崇志、滝瀬定文、廣橋賢次、河上俊和、松下直史、小池達也)
4 体育専攻学生の健康管理における諸問題について	共著 (筆頭)	平成 14 年	日本体育学会 第 53 回大会	運動部所属の男子 339 名、女子 161 名の計 500 名を対象にアンケート調査、血液生化学検査を行った。Fe 値は、正常値以下の運動部が見られ、CK 活性値は、全クラブとも正常値を大きく上回っており、体育専攻学生は練習過多や十分な休養も含めた睡眠時間、朝食摂取不足から慢性的疲労傾向にあることを明らかにした。 (河上俊和、小妻崇志、河上陽子、岩田勝、滝瀬定文)
5 ラットギプス固定が血圧及び骨密度に及ぼす影響について	共著 (筆頭)	平成 14 年	第 4 回日本スポーツ整復療法学会大会	ラット廃用性萎縮モデルを作成し、骨組織への影響及びストレス要因として血圧測定を行った。長期間のギプス固定は精神的ストレスとなり、SBP、DBP を上昇させ、ギプス固定は、廃用性萎縮を進行と骨局所における骨密度を減少させることを明らかにした。 (河上俊和、滝瀬定文、岩田勝、小妻崇志、大川得太郎)

6 脊髄損傷者のスポーツ参加について	共著	平成 14 年	第 4 回日本スポーツ整復療法学会大会	スポーツセンターに通う脊髄損傷者 36 名を対象に調査を行い、参加規定要因の分析を行った。受傷前のスポーツ種目が現在の参加スポーツの種目に影響せず、スポーツ参加動機は「障害を持った友人に進められた」が多く、スポーツ不参加の理由では「スポーツが嫌い」、「仲間がいない」、「施設が遠い」が認められた。（小妻崇志、滝瀬定文、岩田勝、河上俊和）
7 運動制限が大腿骨骨密度に及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 15 年	大阪体育学会第 41 回大会	ラット廃用性萎縮モデルを作成し、運動制限が大腿骨骨密度に及ぼす影響の検討を行った。ギプス固定は、不動化による廃用性萎縮を進行させ、骨局所における骨密度を減少させることが明らかとなり、廃用性萎縮、力学的ストレスが、骨局所と骨細胞に及ぼす影響について形態学的に詳細な分析が必要であることを明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、廣橋賢次、岩田勝、小妻崇志、河上陽子）
8 脊髄損傷者のスポーツ実施が骨密度に及ぼす影響について	共著	平成 15 年	大阪体育学会第 41 回大会	脊髄損傷者の支援策の一助として、日常生活動作とスポーツ参加が骨密度に与える影響について検討を行った。セルフケア・排泄コントロール及び移動・移乗は、脊髄損傷者（スポーツ実施群）が高値を示し、社会認知においては、両群ともに低値を示した。形態計測結果及び全身骨密度では、スポーツ実施群が有意に高値を示した。（小妻崇志、滝瀬定文、廣橋賢次、岩田勝、河上俊和）
9 ラットギプス固定が大腿骨骨密度低下に及ぼす影響について	共著（筆頭）	平成 15 年	第 58 回 日本体力医学会	力学的ストレスの減少が,骨密度に及ぼす影響について部位別骨密度の測定及び光学顕微鏡、走査型電子顕微鏡による観察を行った。大腿骨遠位骨幹端部の骨密度は、運動群＞コントロール群＞ギプス固定群の順に有意な減少を示し、光顕では骨芽細胞の減少がみられることを明らかにした。（河上俊

				和、滝瀬定文、大川得太郎、儀満大輔、廣橋賢次、岩田勝、小妻崇志）
１０ 長期ギプス固定後の運動が骨密度に及ぼす影響について	共著	平成 15 年	第 58 回 日本体力医学会	ラット左後肢にギプス固定を 4 週間施した後、運動群及び非運動群に分けた。部位別の骨密度の測定及び走査型電子顕微鏡による骨組織の観察をおこなった。大腿骨遠位骨幹端部の骨密度は非運動群より運動群の方が有意に高かった。運動群の骨芽細胞及びコラーゲン線維が緻密な構造を成している像が観察された。 （儀満大輔、滝瀬定文、大川得太郎、河上俊和、廣橋賢次、岩田勝、小妻崇志）
１１ 水泳運動が骨密度に及ぼす影響について	共著 （筆頭）	平成 15 年	第 54 回 日本体育学会	閉経後の女性を対象として骨密度の測定と運動群の骨代謝マーカー（血清 Ca、尿中 D-pyr）の測定を行った。非運動群に比べて運動群の単位体重あたりの大腿骨近位部の骨密度は高い傾向がみられ、運動群の D-pyr は運動後に有意に低下を明らかにした。 （河上俊和、滝瀬定文、儀満大輔、小妻崇志、岩田勝、河上陽子）
１２ 脊髄損傷者のスポーツ実施が日常生活動作に及ぼす影響について	共著	平成 15 年	第 54 回 日本体育学会	脊髄損傷者のスポーツ実施が日常生活動作及び参加規定要因、身体機能に及ぼす影響について FIM 評価表と形態計測を行った。セルフケア・排泄コントール及び移動・移乗は、スポーツ実施群が高値を示し、社会認知では両群ともに低値を示し、上腕伸展囲、屈曲囲、前腕囲、握力ではスポーツ実施群の方が有意に高値を示した。 （小妻崇志、滝瀬定文、岩田勝、河上俊和、儀満大輔、河上陽子）

１３ 閉経後の運動が骨密度に及ぼす影響	共著 (筆頭)	平成 15 年	第 5 回日本スポーツ整復療法学会	閉経後女性を対象として水泳運動が骨密度に及ぼす影響について検討を行った。運動群では大腿骨近位部 Wsrd's の骨密度の増加が大腿骨近位部の骨密度を高め、水泳運動が Ward's の骨密度に及ぼす影響が大きいことが認められ、閉経後女性における水泳運動は骨粗鬆症予防の一助になることを認めた。 (河上俊和、滝瀬定文、大川得太郎、廣橋賢次、岩田勝、儀満大輔、小妻崇志)
１４ 脊髄損傷者のスポーツ参加が形態に及ぼす影響	共著	平成 15 年	第 5 回日本スポーツ整復療法学会	障害者のスポーツ参加が、日常生活や形態に及ぼす影響について検討を行った。セルフケア・排泄コントロール及び移動・移乗はスポーツ実施群に積極的かつ活動的な生活の充足度がみられ、スポーツ実施群は上腕伸展周経囲、屈曲周経囲、前腕周経囲は健常者及びコントロール群より高値を示した。 (小妻崇志、滝瀬定文、河上俊和、儀満大輔、岩田勝)
１５ 廃用性萎縮が骨密度に及ぼす影響	共著	平成 15 年	第 5 回日本スポーツ整復療法学会	ラットにギプス固定を施し、廃用性骨萎縮後の運動が骨密度に及ぼす影響について部位別に比較検討を行った。長期固定により SBP が上昇することが認められた。また、長期固定により大腿骨遠位骨幹端部の骨密度が減少し、最荷重により遠位骨幹端部の骨密度が高くなった。 (儀満大輔、滝瀬定文、大川得太郎、廣橋賢次、岩田勝、河上俊和、小妻崇志)
１６ 高コレステロール血症がカルシウムパラドックスに及ぼす影響	共著 (筆頭)	平成 16 年	第 59 回 日本体力医学会	ExHC ラットを用いてカルシウムパラドックスについて検討を行った。血管内皮においては単球の接着、平滑筋細胞への Ca 沈着が観察された。カルシトニン分泌の促進は骨芽細胞の働きを抑制、リモデリングに影響を及ぼし、動脈硬化を引き起こすものと考えられる。

				（河上俊和、滝瀬定文、廣橋賢次、岩田勝、儀満大輔、小松祐希
１７ 骨折治癒に関する形態学的研究	共著（筆頭）	平成 16 年	第 59 回日本体力医学会	ラット骨折モデルを用いて骨折治癒過程を経時的観察後、運動群と非運動群に分け、骨密度の測定、光顕及び電顕による形態学的観察を行った。骨折癒合後の運動群は、新生骨梁組織に隣接する細胞と重なり合う骨芽細胞が観察された。（儀満大輔、滝瀬定文、廣橋賢次、岩田勝、河上俊和、小松祐希）
１８ 水泳競技に参加する身体障害者の身体組成の特徴について	共著	平成 16 年	第 59 回日本体力医学会	水泳参加者を対象に、身体組成について障害別に検討を行った。体脂肪率は聴覚障害者の男女とも低値を示し、水泳運動が基礎代謝を向上させたものと思われる。水泳参加規定要因は「自ら何かスポーツに参加したかった」が認められた。（小松祐希、滝瀬定文、廣橋賢次、岩田勝、河上俊和、儀満大輔）
１９ スポーツクラブ参加者の体組成及び血中レプチン濃度について	共著	平成 16 年	第 59 回日本体力医学会	運動が血中脂質、血中レプチン濃度に及ぼす影響について検討を行った。水中歩行後のレプチンに有意な変化は認められなかったが、継続的な運動がレプチンとグレリンとのアンバランスの調整に重要であることを明らかにした。(若松美和子、滝瀬定文、河上俊和、儀満大輔、小松祐希、岩田勝、藤川眞仁)
２０ ラット脛骨の骨折治癒過程の形態変化について	共著	平成 16 年	日本体育学会第 55 回大会	ラット骨折モデルを用いて骨折修復過程の骨密度の測定、骨組織の形態学的観察を行った。骨改変は膜性骨化、内軟骨性骨化により形成された仮骨を次第に硬組織に置換し、骨の強度を高めるものと思われる。（儀満大輔、滝瀬定文、岩田勝、河上俊和、小松祐希）

２１ 水泳選手の身体組成について	共著	平成 16 年	日本体育学会第 55 回大会	水泳選手を対象に体組成の分析を行い、記録向上要因について検討を行った。男子の筋量、体脂肪、骨量は加齢に伴い増加する傾向がみられ、女子では筋量、骨量は加齢に伴い有意な増加はみられないことを明らかにした。（小松祐希、滝瀬定文、岩田勝、河上俊和、儀満大輔）
２２ 水中ウォーキングが血中レプチン濃度に及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 16 年	日本体育学会第 55 回大会	スポーツクラブ参加者を対象に、身体組成及びレプチン分泌に及ぼす影響について検討を行った。運動後の血中グレリン濃度の増加はレプチン分泌に影響を及ぼす事が推察された。IL-6 分泌量が多い者ほど血清レプチン濃度が高いことが認められた。（河上俊和、滝瀬定文、岩田勝、河上陽子、儀満大輔、小松祐希）
２３ 運動が骨細胞に及ぼす形態学的研究	共著	平成 16 年	第 60 回 日本体力医学会	メカニカルストレス受容伝達細胞としての骨細胞の形態学的観察を行った。メカニカルストレス軽減は骨内部構造の変化として骨密度低下させ、骨細胞間のネットワークの粗を引き起こしたが、運動群の細胞突起は三次元に分岐、突起にタンパク質集合体と思われる像が観察された。（儀満大輔、滝瀬定文、河上俊和、岩田勝、鄭鴻文、小松祐希、向井裕貴、木村和弘）
２４ 運動が成長期の骨成長に及ぼす影響	共著	平成 17 年	第 60 回 日本体力医学会	荷重負荷が成長軟骨の構造変化に及ぼす影響について、骨密度の測定と骨形成､骨吸収マーカーから検討を行った。運動群の骨幹端部の骨密度はコントロール群に比べて高く､BGP が高かった。また、軟骨細胞は長軸方向に規則的な配列を成すことを認めた。（小松祐希、滝瀬定文、儀満大輔、河上俊和、岩田勝、鄭鴻文、向井裕貴、木村和弘）

２５ 運動条件の違いが領域別骨密度に及ぼす影響（若手奨励賞受賞論文）	共著	平成 17 年	第 60 回 日本体力医学会	運動条件の違いが成長期の骨に対する影響について脛骨領域別骨密度と骨代謝マーカーの検討を行った。荷重軽減群では、海綿骨及び皮質骨の領域で骨密度が低下し、荷重運動群では骨幹端部に有意な増加を認めた。BGP 値の増加と CTx の低下は、骨幹端部で骨細胞刺激が骨芽細胞の活性化させ破骨細胞を抑制することを明らかにした。（木村和弘、滝瀬定文、儀満大輔、河上俊和、岩田勝、鄭鴻文、小松祐希、向井裕貴）
２６ 骨折治癒過程における軟骨形成の形態学的研究	共著	平成 17 年	第 60 回 日本体力医学会	骨折修復過程を領域別骨密度及び組織学的に検討した。修復 2w 後に骨膜肥大と軟骨細胞増殖、4w 後には、骨折部近傍に肥大軟骨細胞とその周囲に血管腔と球状顆粒 TGF-β の反応が観察された。（向井裕貴、滝瀬定文、儀満大輔、河上俊和、岩田勝、鄭鴻文、小松祐希、木村和弘）
２７ 骨折部の牽引が仮骨形成に及ぼす影響	共著 （筆頭）	平成 17 年	第 60 回 日本体力医学会	延長骨化の骨化様式を観察する目的でラット骨折牽引モデルを作成し、実験を行った。骨密度は、石灰化軟骨豊富な骨折断端遠位部が最も高く、軟骨細胞は長軸方向に伸展するような配列、延長中央部では線維性組織の細胞が配列していた。（河上俊和、滝瀬定文、岩田勝、儀満大輔、小松祐希、宮本岳人、向井裕貴、木村和弘）
２８ 運動が骨細胞に及ぼす形態学的研究	共著	平成 17 年	日本体育学会 第 56 回大会	EDTA-KOH による骨細胞露出法の確立により、ラット廃用性骨萎縮および運動の影響を骨細胞と骨密度に焦点を当て検討を行った。大腿骨遠位骨幹端部の骨密度はメカニカルストレス軽減により低下、骨細胞間ネットワークを粗にし、再荷重はこの部位の骨密度を増加させ、骨細胞突起を三次元的に複雑に分岐させることが認められた。（儀満大輔、滝瀬定文、岩田勝、河上俊和、小松祐希、向井裕貴、木村和弘）

２９ 骨折治癒過程における形態学的観察	共著	平成 17 年	日本体育学会第 56 回大会	骨折治癒過程における骨折局所の領域別骨密度についてラット骨折モデルを用いて骨密度の測定と免疫組織化学染色を行った。骨密度は、骨折と遠位部から高く、骨折 2w 後に軟骨細胞の増殖が見られた。また、4w 後には、骨折部近傍に肥大軟骨細胞の出現、TGF-βと VEGF の反応と骨内部に侵入する血管像が観察された。(向井裕貴、滝瀬定文、岩田勝、儀満大輔、河上俊和、小松祐希、木村和弘)
３０ ラット発育期の運動が領域別骨密度に及ぼす影響	共著	平成 17 年	日本体育学会第 56 回大会	運動の成長期の骨に対する影響について脛骨の７領域別骨密度の測定を行った。荷重軽減群では、海綿骨及び皮質骨のいずれの領域でも骨密度が低下したが、荷重運動群では骨幹端部に有意な増加を認めた。(木村和弘、滝瀬定文、岩田勝、儀満大輔、河上俊和、小松祐希、向井裕貴)
３１ ラット発育期の運動が軟骨細胞に及ぼす影響	共著	平成 17 年	日本体育学会第 56 回大会	運動が成長軟骨の形態に及ぼす影響について脛骨の領域別骨密度測定と組織学的観察を行った。運動群の脛骨長及び骨端部骨密度は他の群より有意に高く、軟骨細胞の肥大と石灰化が認められ、発育期の運動が骨芽細胞分化、骨成長を促進させることを明らかにした。(小松祐希、滝瀬定文、岩田勝、儀満大輔、河上俊和、向井裕貴、木村和弘)
３２ 脛骨骨折部の牽引が仮骨形成と骨折部骨密度に及ぼす影響	共著 (筆頭)	平成 18 年	第 106 回中部日本整形外科災害外科学会	延長骨の骨化様式を観察する目的でラット脛骨骨折牽引モデルの経日的に骨密度と形態学的観察を行った。延長骨は、早期から外仮骨が形成、延長終了後に仮骨両端で肥大軟骨細胞が観察され骨折断端遠位部の骨密度が高く張力刺激が局所の骨密度に影響を与えることが考えられた。(河上俊和、滝瀬定文、儀満大輔、廣橋賢次、河田弘)

３３ 廃用性骨萎縮後の運動が骨細胞に及ぼす影響	共著	平成 18 年	第 106 回中部日本整形外科災害外科学会	メカニカルストレス受容伝達細胞としての骨細胞の細胞突起を形態学的に観察した。メカニカルストレスの軽減は骨細胞を球状、ネットワークを粗にさせるが、外的なメカニカルストレは骨細胞自身または細胞間ネットワークを通じ、骨芽細胞、破骨細胞へと伝達し骨形成、吸収を促進しているものと思われた。（儀満大輔、滝瀬定文、河上俊和、廣橋賢次、河田弘）
３４ 仮骨組織の形態学的観察	共著	平成 18 年	日本体育学会第 57 回大会	ラット脛骨骨折モデルを作成し、修復過程について検討を行った。骨折修復期には線維性組織、線維軟骨形成とともに仮骨への修復過程をたどり骨再構築がなされるが、吸収面には明瞭な輪郭をもつ吸収窩が観察され、その周囲に TGF-β、VEGF の反応が認められた。（向井裕貴、滝瀬定文、岩田勝、河上俊和、儀満大輔、小松祐希、木村和弘）
３５ 連続負荷が骨細胞性ネットワーク形成に及ぼす影響	共著	平成 18 年	日本体育学会第 57 回大会	連続的な力学的負荷は骨基質に疲労減少を来すが、骨細胞に関する報告はないことから、ラット脛骨に反復性ストレスを負荷し、形態学的に骨細胞を観察した。骨細胞の形態は大小不同で歪な形態を呈し、細胞突起の断裂、減少像が認められた。（儀満大輔、滝瀬定文、岩田勝、河上俊和、小松祐希、向井裕貴、木村和弘）
３６ 咀嚼運動が頭蓋骨吸収窩に及ぼす影響に関する形態学的研究	共著（筆頭）	平成 18 年	日本体育学会第 57 回大会	咀嚼運動が頭蓋骨に及ぼす影響を検討する目的で、ラットを用い頭蓋骨の細胞を光顕、走査電顕的に検討を行った。頭蓋骨の吸収面には大小不同の吸収窩が観察された。個々の破骨細胞の吸収期が異なることを意味し破骨細胞は接触した吸収面に応じた機能を発揮すると思われる。（河上俊和、滝瀬定文、岩田勝、儀満大輔、小松祐希、向井裕貴、木村和弘）

３７連続負荷が骨細胞における情報伝達機構へ及ぼす影響	共著	平成 18 年	第 61 回 日本体力医学会	ラットを用いて反復性ストレスによる骨細胞の情報伝達機構への影響を検討した。脛骨 1/3 上前方面において骨師亜棒が大小不同の形態を呈し、変形した骨細胞周囲では conexin43 発現の低下が認められた。(儀満大輔、滝瀬定文、岩田勝、河上俊和、小松祐希、向井裕貴、木村和弘)
３８骨折修復過程におけるラット脛骨血管微細構築の形態学的研究	共著	平成 18 年	第 61 回 日本体力医学会	骨折修復過程の血管微細構築について血管鋳型標本の検討を行った。修復過程の早期には VEGF の反応がみられ、骨折部を架橋する骨膜血管網外層は洞様血管から管腔形成を有する血管により構成されていた。修復早期には内皮特異的な VEGF が中心的役割を担うことを明らかにした。(向井裕貴、滝瀬定文、岩田勝、河上俊和、儀満大輔、小松祐希、木村和弘)
３９ 咀嚼運動がラット頭蓋リモデリングに与える影響に関する形態学的研究	共著 (筆頭)	平成 18 年	第 61 回 日本体力医学会	咀嚼運動が頭蓋骨組織に及ぼす影響について、固形試料群と粉末試料群に分け、形態学的に検討を行った。箱津市亜棒が吸収を行った骨吸収窩は様々な形態を呈し、固形試料群の骨細胞の形態は、規則的な配列を呈し、咀嚼運動が吸収誘導から形成への転換および骨形成維持に重要な役割を演じることを明らかにした。(河上俊和、滝瀬定文、岩田勝、儀満大輔、小松祐希、向井裕貴、木村和弘)
４０ラットの継続的な走運動が骨細胞に及ぼす影響に関する形態学的研究	共著 (筆頭)	平成 19 年	日本体育学会第５８回大会	ラットの継続的な走運動が骨細胞に及ぼす影響について研究を行った。運動群の骨細胞は非運動群に比べて大きく､骨小腔に DMP-1 の反応が観察され、運動が骨細胞のネットワーク形成と骨内部での血管系と骨小腔を介した因子による骨細胞の形態形成の制御機構を明らかにした。 (河上俊和、滝瀬定文、儀満大輔、木村和弘、佐野祐樹、岩田勝)

４１ラット脛骨骨欠損後の運動が基質修復に及ぼす影響	共著	平成19年	日本体育学会第５８回大会	骨欠損部の再生過程に及ぼす影響を検討する目的でラット脛骨に円孔の骨欠損を作製した。Defect+Exercise 群は、骨芽細胞周辺に石灰化顆粒と骨芽細胞下に骨細胞突起の伸展像が観察された。局所的に力学的ストレスが集中する領域の周辺骨細胞は刺激を受け骨芽細胞、石灰化の活性化に働きかけることを明らかにした。（佐野佑樹、滝瀬定文、河上俊和、儀満大輔、木村和弘、岩田勝）
４２ レプチン投与が成長期ラットにおける軟骨細胞に及ぼす影響	共著	平成19年	日本体育学会第５８回大会	ラットに LP（recombinant human leptin）を投与し、成長軟骨細胞に及ぼす影響について検討を行った。LP 群における肥大軟骨細胞の縮小、骨形成率の低下及び走査電顕観察による石灰化基質の希薄化が認められ、成長軟骨の静止層から石灰化層までの一連の構造が短縮し、LP が成長軟骨の分化過程に抑制的に作用することを明らかにした。（儀満大輔、滝瀬定文、河上俊和、木村和弘、佐野祐樹、岩田勝）
４３ ラットのリセドロネート投与下の運動が骨細胞に及ぼす影響	共著（筆頭）	平成19年	第６２回日本体力医学会	骨吸収機能の獲得には多くの分子、複雑なネットワークの存在が考えられることから、骨の微細構造について検討を行った。RIS+EX 群の骨細胞は小さい細胞が多く観察された。RIS、RIS+EX が破骨細胞の抑制に作用するが、骨細胞の形態変化は骨小腔内のカルシウムイオンが影響をもたらすこと明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、儀満大輔、佐野佑樹、岩田勝）
４４ 加齢変化による骨細胞及び細胞突起の形態学的研究	共著	平成19年	第６２回日本体力医学会	幼若骨と老齢骨を用いて週齢に応じた骨リモデリングと骨細胞について形態学的に検討した。加齢に伴う骨細胞数の減少や細胞突起の疎は、骨細胞と骨芽細胞間のシグナル伝達低下を引き起こし、骨形成の低下を引き起こすことを認めた。（儀満大

				輔、滝瀬定文、河上俊和、佐野佑樹、岩田勝）
４５　ラット脛骨 Circular bone defect 後の骨形成について	共著	平成 19 年	第６２回日本体力医学会	骨欠損部の骨芽細胞と血管内皮細胞のサイトカインを介した相互作用について、酵素抗体法及び形態学的に検討した。脛骨への力学的ストレスの影響として VEGF の発現が認められ､骨形成に先駆け血管新生が起こるものと思われ、骨芽細胞と血管内皮細胞との間に TGF-β を介した相互作用が推察された。（佐野佑樹、滝瀬定文、河上俊和、儀満大輔、岩田勝）
４６　卵巣摘出ラット（OVX）の運動が骨細胞に及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 20 年	日本体育学会第５９回大会	卵巣摘出ラットを用い、骨細胞に及ぼす影響について形態学的研究を行った。OVX+EX 群の骨細胞は紡錘形を成し、ネットワークの形成は細胞突起の放射状の伸展が観察され、骨細胞は、骨基質にかかる運動刺激を細胞間のネットワークを通して骨芽細胞と連携し、骨へのカルシウム動員に深く関わる可能性を明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、佐野佑樹、小芝裕也、伊藤修宏、岩田勝）
４７ ラット脛骨欠損内の微細血管に及ぼす運動の影響	共著	平成 20 年	日本体育学会第５９回大会	ラット皮質骨欠損モデルを用い運動が骨基質の微細血管構築に及ぼす影響について形態学的研究を行なった。Defect+Exercise 群の骨欠損修復部では新たに形成された基質に VEGF の反応と、新生骨境界の骨芽細胞に TGF-β の反応が認められ、新生骨表面に顆粒状構造物と三次元的な網工形成像が観察された。(佐野佑樹、滝瀬定文、河上俊和、小芝裕也、伊藤修宏、岩田勝）
４８ ラット脛骨骨欠損後の運動が骨基質形成に及ぼす影響	共著	平成 20 年	第６３回日本体力医学会	皮質骨内部の血管構築や骨芽細胞の修復過程を形態学的に観察する目的でラット脛骨骨欠損モデルを作製し検討を行った。骨欠損 4 週後に骨内膜の基

				質表面に骨芽細胞の配列を認め、基質表面に多くの骨小腔と骨芽細胞様骨細胞が観察された。Defect+Exercise 群の骨欠損後においても骨細胞は骨組織維持に重要であることを明らかにした。　（佐野佑樹、滝瀬定文、河上俊和、小芝裕也、伊藤修宏、岩田勝）
４９ OVX ラットの運動が大腿骨骨密度と骨細胞の微細形態に及ぼす影響	共著	平成 20 年	第６３回日本体力医学会	運動が OVX ラットの大腿骨骨密度に及ぼす影響を骨師亜棒の形態学的観察から検討を行った。OVX 群の骨量減少を７領域に分け詳細に分析した結果、骨端部で顕著な低下を認めた。この部位の骨細胞の細胞間隙は一部断裂が観察され、TGF-βの発現が認められなかった。これは、骨芽細胞への物質輸送を余儀なくされることを明らかにした。 （河上俊和、滝瀬定文、佐野佑樹、小芝裕也、伊藤修宏、岩田勝）
５０ ラット脛骨欠損による骨再生の組織学的研究	共著	平成 20 年	第１０回日本スポーツ整復療法学会大会	骨欠損モデルを作製し、欠損後の骨再生を検討した。Defecth 群より Defect+Exercise 群の骨領域、骨基質の形成率が高く、骨基質産生と骨芽細胞に TGf-βの発現が見られ、内部に石灰化軟骨が観察され、欠損修復には骨芽細胞による基質形成誘導が重要であることが認められた。 （佐野佑樹、滝瀬定文、河上俊和、小芝裕也、伊藤修宏、岩田勝）
５１ ラット RIS 投与下の運動が骨細胞の微細形態に及ぼす影響 -走査型電子顕微鏡学的検索-	共著 （筆頭）	平成 20 年	第１０回日本スポーツ整復療法学会大会	骨吸収抑制下での運動が骨細胞に及ぼす影響について走査型電子顕微鏡により形態不学的に検討を行った。RIS 群は骨細胞が他の群より小さく、RIS+EX 群に骨細胞数の増加と細胞突起の網状構造の発達が認められ、運動を始めとする物理的な力を感受する機構として骨細胞が大きく関わることが明らかとなった。 （河上俊和、滝瀬定文）

５２ 関節固定がラット腱組織に及ぼす形態学的研究	共著	平成 21 年	日本体育学会第６０回大会	スポーツ活動では腱付着部は傷害発生頻度が高いが、腱の形態に関する情報は少ないためラットに底屈及び背屈の足関節固定を施し廃用性萎縮モデルを作成した。骨皮質表層での TGF-βの反応の違いから、骨芽細胞が基質小胞の析出を促し、腱骨付着部の骨密度及び石灰化に影響を及ぼすことが認められた。（細川賢司、滝瀬定文、河上俊和、松本賢次）
５３ 脊髄損傷者のテニスクラブ参加が全身骨骨密度に及ぼす影響	共著	平成 21 年	日本体育学会第６０回大会	スポーツが脊髄損傷者の骨密度に及ぼす影響を検討するため、車椅子テニス、車椅子マラソン及びスポーツ習慣歴のない脊髄損傷者の骨密度測定を行なった。車椅子テニス群のみに腰椎骨密度と全身骨骨密度との間に相関が認められ、コート内での素早い移動動作や腰部を中心とした回旋動作が皮質骨内の海綿骨に影響し骨密度を高めたことが示された。（松本賢司、滝瀬定文、河島英隆、河上俊和、細川賢司、小妻崇志）
５４ 運動が骨細胞に及ぼす形態学的研究	共著	平成 21 年	第６４回日本体力医学会	加齢現象に伴う骨密度減少の抑制を探る目的で、骨小腔中の骨細胞形態及びサイトカインに及ぼす影響について検討を行なった。非運動群は細胞突起の著しい減少、骨小腔に calpain の反応が観察されたことから、力学的負荷の減少は骨細胞ネットワーク形成に影響することを明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、岩田勝、細川賢司、松本賢次、小芝裕也、伊藤修宏）
５５ 運動が骨梁形成に及ぼす影響ついて	共著	平成 21 年	第６４回日本体力医学会	骨の応力減少は、吸収窩と海綿骨の 3 次元的網工形成に影響すると考えられるため骨梁脆弱に及ぼす影響を形態学的に検討した。荷重軽減+Ca 餌群の凹凸は顕著で骨小腔は拡大し、荷重軽減は骨吸収の形態に影響し骨量調節に大きく関わることが認められた。(松本賢次、滝瀬定文、河上俊和、細川賢司、

				小芝裕也、伊藤修広、井出貴久）
５６ 荷重軽減による腱・骨組織の形態学的研究	共著	平成 21 年	第６４回日本体力医学会	荷重軽減による腱・骨萎縮が骨基質に及ぼす影響について腱付着部の形態学的研究を行った。荷重軽減群は腱付着部の骨芽細胞でのオステオカルシン反応が弱く、荷重軽減は骨端部の骨密度低下と腱・骨の廃用性に深く関わることを明らかにした。（小芝裕也、滝瀬定文、河上俊和、細川賢司、伊藤修広、松本賢次、井出貴久）
５７ ラット後肢足関節固定が腱に及ぼす影響について	共著	平成 21 年	第６４回日本体力医学会	骨折などの治療として施される関節固定が、アキレス腱の構造変化及び血管伸展、退縮に及ぼす影響を形態学的に検討した.コラーゲン線維と骨膜との付着部近傍に小型石灰顆粒沈着が観察され、骨膜表層の血管網工は筋腱複合体の力学的条件に応じて腱と骨との石灰化を介した癒合促進に関わることが明らかとなった。（細川賢司、滝瀬定文、河上俊和、松本賢次、伊藤修広、小芝裕也、井出貴久）
５８ 車椅子スポーツに参加する脊髄損傷者の骨密度について	共著	平成 21 年	第１１回日本スポーツ整復療法学会大会	骨量減少予防として、車椅子スポーツ参加が脊髄損傷者の骨密度に及ぼす影響について検討を行った。車椅子スポーツ参加と骨密度との関係は上肢と腰椎、腰椎と全身骨、下肢骨との間に相関が認められ、骨への歪みや撓みの応力が骨密度に影響をもたらすことを明らかにした。（松本賢次、滝瀬定文、河上俊和、細川賢司）
５９ 廃用性萎縮におけるラット腱コラーゲン線維の組織学的研究	共著	平成 21 年	第１１回日本スポーツ整復療法学会大会	ラットに異なる足関節固定を施して廃用性萎縮モデルを作成し、アキレス腱線維の組織学的観察を行なった。腱に加わる力学的ストレスは腱マトリク

				スの組成変化、エンテーシス周囲のコラーゲン線維石灰化を保ち力学特性を維持していることが明らかとなり、スポーツ活動のリハビリテーションによる早期復帰、再発予防の一次となる知見を得た。　　（細川賢司、滝瀬定文、河上俊和、松本賢次）
６０ バタフライアジア・日本記録保持者の記録樹立要因を探る How to Coaching ～ Butterfly New Record ～	共著	平成 21 年	2009 年度日本水泳・水中運動学会	バタフライ日本記録（2009 年）者の過去 6 年間記録と競泳スピードメーターによる樹立要因を探った。50 秒の壁を越える為には、ストローク中の上半身と水面の角度を 0 度に近づけ、ウェーブ及びインスイープ局面では重心移動を利用し膝曲がり角度 180 度のキックを打つ。最大筋力プログラムを行なわないことは世界トップの現役を継続する可能性が高いことを明らかにした。　　（井出貴久、吉村豊、河本耕平、滝瀬定文、河上俊和）
６１ 運動がラット腱コラーゲン線維に及ぼす形態学的研究	共著	平成 22 年	日本体育学会第６１回大会	運動が筋腱複合体に及ぼす影響を検討するため、ラットをコントロール群とランニング群に分け実験を行った。免疫染色の結果、両群の間でエンテーシスでの II 型コラーゲンの反応に違いが認められ、筋腱複合体としての活動はコラーゲン組成の分布を変化させている事を明らかにした。（細川賢司、滝瀬定文、河上俊和、松本賢次）
６２ 運動条件の違いが成長期ラットの骨細胞に及ぼす影響	共著 （筆頭）	平成 22 年	第６５回日本体力医学会	ラットに異なる荷重運動を負荷し骨細胞微細形態に及ぼす影響について形態学的研究を行った。DMP-1 反応は、ジャンプ運動群がランニング運動群に比べて多く、メカニカルストレスが強い運動ほど骨細胞ネットワークと骨小腔構築が促進されることを明らかにした　　。（河上俊和、滝瀬定文、細川賢司、松本賢次、井出貴久、岩田勝）

６３ 免荷がラットアキレス腱エンテーシスに及ぼす影響	共著	平成 22 年	第６５回日本体力医学会	廃用性萎縮におけるエンテーシスのラット免荷モデルを用いてアキレス腱コラーゲン線維の形態に及ぼす影響について検討を行った。エンテーシスの構造変化は踵骨付着部の軟骨細胞の役割りが重要で、軟骨層の石灰化は腱のⅠ型コラーゲン造成による線維の走行を規定することを明らかにした。（細川賢司、滝瀬定文、河上俊和、松本賢次、井出貴久）
６４ 免荷がラット脛骨骨強度に及ぼす影響	共著	平成 22 年	第６５回日本体力医学会	力学的条件が骨強度に及ぼす影響について、ラット免荷モデルを作成し脛骨領域別骨密度と骨破断強度測定を行った。免荷群の骨密度と骨破断強度は、同骨領域において破断応力に差が認められ海綿骨梁の形状差異や低骨密度の骨梁の破壊機序に違いが生じることを明らかにした。（松本賢次、滝瀬定文、河上俊和、細川賢司、井出貴久）
６５ Effects of exercise on orexin expression in hypothalamus and adipocyte micromorphology in the rats	共著（筆頭）	平成 22 年	第１２回日本スポーツ整復療法学会大会	運動形態の違いが、エネルギー代謝に係る影響について、脳視床下部オレキシン発現と脂肪細胞微細形態の係わりについて形態学的研究を行った。運動形態が異なる条件では、脂肪細胞膜表面に VEGF の発現に変化が生じ、視床下部でのオレキシン発現がエネルギー貯蔵において重要な役割を演じていることを明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文）
６６ 関節拘縮が関節軟骨細胞の形態に及ぼす組織学的研究	共著	平成 23 年	第６６回日本体力医学会	ラット関節拘縮モデルを用い、成長軟骨層の細胞増殖の作用を VEGF 及びコラーゲンの免疫組織化学染色及び走査型電子顕微鏡による検討を行った。脛骨近位骨端軟骨層では、細胞増殖下層から成熟軟骨細胞、肥大軟骨細胞に VEGF 反応が観察され、関節腔内に II 型コラーゲン合成の促進と成長板の閉鎖が起こることを明らかにした。（川久保昭秀、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、谷川哲朗）

６７ 脂肪細胞における血管新生の役割に関する組織学的研究	共著 （筆頭）	平成 23 年	第６６回日本体力医学会	脂肪組織の血管新生機序として、内皮細胞の増殖・遊走と血管新生との係わりについて高脂肪摂取が脂肪組織の新生血管増殖因子に及ぼす影響について検討した。脂肪細胞の増加、肥大の際、骨髄由来の血管新生制御因子が既存の内皮細胞による生じる血管新生に作用する機序と VEGF とアディポサイトカインが間接的に微細血管構築し肥大化した脂肪細胞へ進展することを明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、川久保昭秀、古河準平、谷川哲朗）
６８ 坐骨神経切除によるラット筋・腱萎縮に及ぼす組織学的研究	共著	平成 23 年	第６６回日本体力医学会	ラット廃用性萎縮モデルを作製し、アキレス腱コラーゲン線維の組織学的観察を行った。腱線維での FGF 発現に伴い、線維芽細胞の細胞膜に散在する接着タンパクによるⅠ型コラーゲン発現を認め、腱組織は筋組成変化に対しコラーゲン線維の形態が影響を受ける事を明らかにした。（古河準平、滝瀬定文、河上俊和、川久保昭秀、谷川哲朗）
６９ 静水圧が競泳選手の呼吸機能に及ぼす影響	共著	平成 23 年	第６６回日本体力医学会	水の特性である静水圧による負荷を与え、肺気量及び呼吸時の胸郭・腹部の運動パターン変化について検討を行った。死腔肺気量の減少は、有効肺胞換気の増加を惹起させ、一般学生に VC 減少が認められた。腹部圧は腹部臓器を押し上げ、胸郭内容積減少させ、呼吸機能として肺・胸郭弾性力に一般学生が競泳選手に比べて劣ることを明らかにした。（川島康弘、滝瀬定文、川久保昭秀、河上俊和）
７０ ギプス固定が軟骨細胞に及ぼす走査型電子顕微鏡による組織学的研究 （最優秀奨励賞授賞論文）	共著 （筆頭）	平成 23 年	第 13 回日本スポーツ整復療法学会大会	ラット関節拘縮モデルを用い関節拘が軟骨細胞に及ぼす影響について組織学的に検討を行った。ギプス固定２週後は、軟骨下層から石灰化軟骨層への血管様構造の出現と VEGF の発現が観察された。ギプス２週後から解除は正常軟骨に血管は認められないことか

				ら、関節運動は軟骨基質の構造、機能に重要であること明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、古河準平、谷川哲朗）
７１ ラット腱コラーゲン線維の走査型電子顕微鏡的研究（優秀奨励賞授賞論文）	共著	平成 23 年	第 13 回日本スポーツ整復療法学会大会	ラット廃用性萎縮モデルを用い、アキレス腱コラーゲン線維の微細形態変化について走査型電子顕微鏡的研究を行った。除神経による不動化は、腱マトリクスへの刺激を軽減し、腱線維のコラーゲン線維の走行とエンテーシスでの ALP 発現を抑制し、腱の廃用性萎縮の進行に影響を及ぼすこと明らかにした。（古河準平、滝瀬定文、河上俊和、川久保昭秀、谷川哲朗）
７２ 唾液アミラーゼからみた水泳選手のストレスについて	共著	平成 23 年	2011 年日本水泳・水中運動学会年次大会	大学女子競泳選手の合宿中の唾液アミラーゼの測定及び自覚的疲労の調査から、合宿中の精神的負担について検討を行った。合宿終了後に継続してアミラーゼ値が高い選手が多く、主観的ストレスの変動と客観的ストレスの指標の変動は必ずしも一致しないことを明らかにした。（川久保昭秀、滝瀬定文、河上俊和、尾関一将、谷川哲朗）
７３ フィンスイミングにおけるキック動作とビーフィンの動きの関係	共著	平成 23 年	2011 年日本水泳・水中運動学会年次大会	フィンスイミングにおけるビーフィン泳のキック動作とビーフィンの動作解析を行った。キック動作とビーフィンの動き関係を波形表出し波長毎の周波数、振幅、位相差を評価し、キック動作とビーフィン先周波数との関連性を明らかにした。（谷川哲朗、川久保昭秀、滝瀬定文、尾関一将、河上俊和、野村照夫）
７４ ラット廃用性骨萎縮が骨細胞に及ぼす影響に関する組織学的研究	共著（筆頭）	平成 24 年	日本体育学会第 63 回大会	骨リモデリング制御の機序について骨細胞に係るサイトカインの発現と微細形態変化を検討した。コントロール群の骨細胞は、骨細胞及び骨表面の骨芽細胞と細胞突起を介して接していたが、廃用性骨萎縮群は、骨細胞突起の

				網状構造が観察されなかった。骨小腔のプロテアーゼ発現は、骨細胞突起の構成タンパク質に影響することを明らかにした。　（河上俊和、滝瀬定文、古河準平、谷川哲朗、尾崎卓宏）
７５ 筋損傷後のアイシングが筋修復に及ぼす組織学的研究	共著	平成 24 年	日本体育学会第 63 回大会	ラット筋損傷モデルを作成し、アイシングが損傷筋組織に及ぼす影響について組織学的に検討を行った。筋損傷５日後のアイシング群はマクロファージの発現が観察されるが、筋線維の基底膜と形質膜の間に筋衛星細胞が観察されなかった。筋損傷後のアイシングは、損傷筋の筋衛星細胞の活性化に影響を及ぼすことを明らかにした。（尾崎卓宏、滝瀬定文、河上俊和、谷川哲朗、古河準平）
７６ ラット廃用性筋萎縮筋における腱コラーゲン線維の組織学的研究	共著	平成 24 年	日本体育学会第 63 回大会	腱組織の萎縮機序について、アキレス組織の組成やコラーゲン原線維の検討を行った。腱細線維での b-FGF 発現は、コントロール群に比べて坐骨神経切除群が弱く、エンテーシス部の ALP 反応が異なった。坐骨神経切除では、アキレス腱のコラーゲン線維の組成と微細形態に影響が生じることを明らかにした。（古河準平、滝瀬定文、河上俊和、谷川哲朗、尾崎卓宏）
７７ フィンスイミングにおける日本人トップ選手のレース特徴	共著	平成 24 年	第 67 回日本体力医学会	フィンスイミングは、レース中の泳速度の増減が大きいことから、日本人トップ選手のレース特徴について分析を行った。フィンスイミングは、スタートやターン局面の巧みさにより、順位が覆る可能性が明らかとなった。個人内や個人間の比較と日本の競技レベル動向を検索することが重要であることが認められた。（谷川哲朗、野村照夫、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、尾崎卓宏）

７８ 骨量減少が骨細胞の微細形態に及ぼす影響ル選手の骨密度について	共著 (筆頭)	平成 24 年	第 67 回日本体力医学会	骨量減少が、骨細胞の微細形態に及ぼす影響を明らかにするため、ラット坐骨神経切除モデルを用いて検討を行った。坐骨神経切除群の骨小腔に calpain 反応が強く、形態学的特徴として、骨細胞細胞突起の網状構造は粗な形態を呈し、calpain の発現が骨細胞ネットワークの脆弱化に影響を及ぼすことを明らかにした。 (河上俊和、滝瀬定文、古河準平、谷川哲朗、尾崎卓宏)
７９ ラット廃用性筋萎縮における腱筋の組織学的研究	共著	平成 24 年	第 67 回日本体力医学会	ラット坐骨神経切除モデルを用い、廃用性筋萎縮が腱筋に及ぼす影響をアキレス腱に着目し検討を行った。神経切除によるシグナル伝達の遮断と後肢不動化は、腱線維での b-FGF の抑制、FGFR1 の低下を生じさせ、それに伴う Collagen Type1 の発現に影響を与えることを明らかにした。 (古河準平、滝瀬定文、河上俊和、谷川哲朗、尾崎卓宏)
８０ プール水が水泳愛好者の皮膚及び毛髪に及ぼす影響	共著 (筆頭)	平成 24 年	2012 年日本水泳・水中運動学会年次大会	水泳愛好者の皮膚自覚症状調査及び毛髪微細形態の走査型電子顕微鏡観察を行った。水泳後の毛髪は、Cuticle の損傷と力学的特性が変化し、毛根部は中間径フィラメントの泥状化することを認め、プール水の残留塩素による pH 変化は皮膚角質層や毛髪 Cuticle 構造の損傷を引き起こすことを明らかにした。 (河上俊和、滝瀬定文、中原亮太、谷川哲朗)
８１ジャンプ及び走行運動がラットヒラメ筋のスティフネスに及ぼす影響について In vitro 実験による筋膜の組織学的研究	共著	平成 24 年	第 14 回日本スポーツ整復療法学会大会	ラット廃用性筋萎縮モデルを用い、ヒラメ筋の筋破断張力及び筋膜、筋線維束の微細形態とコラーゲン線維の破断張力について組織学的に検討した。廃用性筋萎縮による筋内膜変化は、筋膜線維の破断張力に重要で、筋膜線維は、密な線維構築を成すことが筋組織の粘弾性の維持に重要であることを明らかにした。

				（佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、古河準平）
８２ 除神経がプロテアーゼ発現と骨細胞微細形態に及ぼす影響に関する組織学的研究	共著（筆頭）	平成 24 年	第 14 回日本スポーツ整復療法学会大会	ラット除神経モデルを用い、メカニカルストレスの減少が骨細胞微細形態に及ぼす影響について組織学的研究を行った。廃用性骨萎縮群の骨細胞は細胞突起が細く減少していた。骨細胞及び骨小腔は calpain の反応が強く、骨細胞での calpain の発現は細胞突起の構成タンパク質に影響を及ぼすことを明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、古河準平、佐川光一）
８３ ラット腱コラーゲン線維に関する免疫組織化学的研究	共著	平成 24 年	第 14 回日本スポーツ整復療法学会大会	腱のコラーゲン細線維に着目し、メカニカルストレスが線維芽細胞の成長因子に及ぼす影響について組織学的研究を行った。コラーゲン線維径は、コントロール群に比べて坐骨神経切除群が有意に低く、不動化による筋腱複合体へのストレスの消失が考えられた。また、腱圧受容器における成長因子の発現は、腱のマトリクスの形成に重要であることを明らかにした。（古河準平、滝瀬定文、河上俊和、佐川光一）
８４　運動がラットヒラメ筋の微細形態に及ぼす影響	共著	平成 25 年	日本体育学会第 64 回大会	運動が筋組織の形態に及ぼす影響について筋破断値の測定と組織学的研究を行った。筋スティフネスはジャンプ運動群で最も高く、筋周膜には FGF、Col1 の反応が監察された。ヒラメ筋の筋周膜は筋線維に加わる張力に対し密な線維構築を成すことを明らかにした。（佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、奥田修人）

８５　筋挫傷後のアイシングが筋修復に及ぼす影響	共著	平成 25 年	日本体育学会第 64 回大会	ラット筋損傷モデルを用い、アイシングが筋修復過程に及ぼす影響について組織学的研究を行った結果、損傷部のマクロファージ及び b-FGF の反応はノンアイシング群に強く、アイシング群では瘢痕化した線維性組織が観察された。筋の変性組織の貪食作用が筋再生に重要であることを明らかにした。（奥田修人、滝瀬定文、河上俊和、佐川光一、古河準平）
８６　ラット坐骨神経切除が骨芽細胞における calpain 発現に及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 25 年	第 68 回日本体力医学会	メカニカルストレスの骨芽細胞に対するサイトカインの制 御特性を検討するため、ラット坐骨神経切除モデルを用い、骨 芽細胞のシグナル伝達物質とプロテアーゼの局在について組 織学的研究を行った。坐骨神経切除では、骨細胞、骨芽細胞におけるオステオポンチンの反応が低下し、カルパインの反応が誘導され、骨芽細胞の形態変化と骨密度減少を引き起こす要因となる事を明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、古河準平、奥田修人、佐川光一）
８７　坐骨神経切除がラットアキレス腱の血管形態に及ぼす影響	共著	平成 25 年	第 68 回日本体力医学会	坐骨神経切除が ラットアキレス腱組織に及ぼす影響を明らかにするため、アキ レス腱組織のコラーゲン線維、血管について検討した。不動化による筋腱複合体へのストレスの消失は、b-FGF の抑制、FGFR1 の低下を生じさせ、それに伴 いCollagen Type1の発現に影響を与えたことが明らかになった。（古河準平、滝瀬定文、河上俊和、奥田修人、佐川光一）
８８　筋挫傷後の修復過程に関する組織学的研究	共著	平成 25 年	第 68 回日本体力医学会	ラット筋挫傷モデルを用い、筋挫傷後の修復 過程について免疫組織学染色と走査型電子顕微鏡観察を行った。筋挫傷後において、筋線維近傍に FGF の発現が見られ、血管新生が修復に係るものと思われた。また、細胞間隙には瘢痕形成が見られたことから、修復

				過程のプロセ スを組織学的に観察する必要性がある事が明らかになった。（奥田修人、滝瀬定文、河上俊和、佐川光一、古河準平）
８９　坐骨神経切除がラット廃用性筋萎縮に及ぼす影響に関す る組織学的研究	共著	平成 25 年	第 68 回日本体力医学会 p587	運動負荷の減少が、廃用性筋萎縮に及ぼす影響についてラット坐骨神経切除モデル、運動モデルを作成し、筋組織の組織学的検討を行った。ヒラメ筋組織におけるCol Ⅰ及びFGFの発現は、廃用性筋萎縮による筋周膜の微細形態に影響し、筋組織の破断強度低下の要因になることを明らかにした。（佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、奥田修人）
９０　国際比較からみた体力測定項目の妥当性について	共著	平成 25 年	第 68 回日本体力医学会	国際間の体力比較を行う目的で、 0体育大学がこれまでに実施してきた体力テストを用いて、中国西安體育學院学生の体力特性 を明らかにするとともに、国際体力比較を行う際の問題点と測 定項目の妥当性の検証を行った。西安體育學院の運動 部所属、無所属において、敏捷性を反映する種目に相関がみられなかった。両国間比較において、論理的、内容的、基準性、 構成概念の妥当性について検討する必要性を明らかにした。（川島康弘、滝瀬定文、中井俊行、曽根純也、河上俊和）
９１　中高年女性における水中ウォーキングが血中レプチンに及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 25 年	日本水泳・水中運動学会 2013 年次大会	継続的な運動習慣を有する中高年女性を対象に 60 分間の水中ウォーキング実施前後の血中レプチンに及ぼす影響を検討した。運動後は血中 IL-6 濃度と血中レプチン濃度との間に相関が認められ、水中ウォーキング時の血中レプチン濃度を規定する要因として運動強度が深く関わることを明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、古河準平、奥田修人、佐川光一、井出貴久）

９２　競泳スタート後の潜水局面が記録に及ぼす影響	共著	平成 25 年	日本水泳・水中運動学会 2013 年次大会	関西学生選手権水泳競技大会を対象に、スタート後の潜水局面が記録に及ぼす影響について、男子 100m 自由形及び 100m バタフライを検討した。潜水局面では 1 部校に比べて 2 部校及び 3 部校との間に潜水距離と速度に違いを有し、大学競泳選手にとって潜水局面の技術向上が記録向上に重要であることを明らかにした。（奥田修人、滝瀬定文、井ノ坂大樹、河上俊和、古河準平、佐川光一、井出貴久）
９３　整形外科的メディカルチェックからみた大学競泳選手の身体的特徴	共著	平成 25 年	日本水泳・水中運動学会 2013 年次大会	大学競泳選手を対象に整形外科的メディカルチェックによる肩及び股関節や膝関節を中心とした関節可動域、筋力測定から競泳選手の身体的特性について検討を行った。肩甲体の柔軟性は日本選手権出場レベル選手が優れていた。大殿筋の筋力は自由形選手が高く、短距離選手に腸腰筋タイトネスが高かった。関節可動域は、股関節の内旋と外旋との間で左右差が見られる選手が多く、その差は下肢傷害発症の要因となることを明らかにした。（川島康弘、滝瀬定文、尾関一将、河上俊和）
９４　ラットヒラメ筋の筋内膜コラーゲン線維網の構築に及ぼす影響	共著	平成 25 年	第 15 回日本スポーツ整復療法学会大会	ラットモデルを用い、ヒラメ筋の筋破断張力及び筋膜、筋線維束の微細形態とコラーゲン線維の破断張力に及ぼす影響の検討を行った。走運動群は速筋線維の割合がコントロール群に比べて 2.9%増加し、ジャンプ運動群は 4.7%の増加が認められた。筋萎縮は、骨格筋を短縮位での弾性低下を進展させる事が推察された。（佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、奥田修人）

９５　ラット坐骨神経切除による後肢組織の血管像	共著	平成 25 年	第 15 回日本スポーツ整復療法学会大会	血管造影剤を腹大動脈より急速に注入し筋･腱部の造影形態を観察する dynamic-study で血管網を観察すると同時に毛細血管網の伸展及び退縮について免疫組織化学的手法を用いて検討を行った。坐骨神経切除群において、アキレス腱の長軸に沿って毛細血管の蛇行した形態が失われた像が観察されたことから、血管新生の制御による周辺組織への毛細血管ネットワークが退行することを明らかにした。　（古河準平、滝瀬定文、河上俊和、佐川光一、奥田修人）
９６　骨量減少が骨芽細胞及びサイトカイン発現に及ぼす組織学的研究	共著（筆頭）	平成 25 年	第 15 回日本スポーツ整復療法学会大会	メカニカルシグナルの細胞に対するサイトカインとしての制御特性を検討する目的で、骨基質に存在するオステオポンチン、カルパインの局在について組織学的に検討を行った。廃用性骨萎縮群ではカルパインの発現が認められた。骨の局所的な骨形成、骨吸収の促進には、カルパインの過度な活性化は骨のホメオスタシスの破綻を引き起こすことが明らかになった。（河上俊和、滝瀬定文、奥田修人、佐川光一、古河準平）
９７　ラット筋挫傷後におけるアイシングが組織修復に及ぼす影響	共著	平成 25 年	第 15 回日本スポーツ整復療法学会大会	筋挫傷部の修復に用いられるアイシングが線維芽細胞増殖因子に及ぼす影響を検討した。炎症期以降ではアイシング群はノンアイシング群と比較して、FGF の反応が弱く、筋損傷 72 時間後のノンアイシング群の損傷部には、空胞形成が観察され、走査型電子顕微鏡像では、両群ともに血球成分が観察された。筋の崩壊によって筋細胞間のコラーゲンによる線維化が生じる可能性が明らかになった。　（奥田修人、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、佐川光一）

９８　高齢ラットの運動が筋組織に及ぼす影響	共著	平成 26 年	日本体育学会第 65 回大会	高齢ラットにおける運動が筋組織の形態に及ぼす影響について検討を行った。筋破断値は走運動群が非運動群に比べて有意に高く、筋周膜にエラスチンの濃染像と FGF 及び COL Ⅰの反応が観察された。高齢ラットの運動は、骨格筋の粘弾性などの力学的特性に係る筋膜構成タンパク質との関連性が明らかになった。（佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、奥田修人）
９９　坐骨神経切除が高齢ラットの踵骨エンテーシスに及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 26 年	第 69 回日本体力医学会	高齢ラットを用い坐骨神経切除が踵骨骨密度とエンテーシス構造に及ぼす影響について検討した。踵骨骨密度は、コントロール群が坐骨神経切除群に比べ有意に高く、石灰化軟骨層から骨層領域でオステオポンチン及びオステオカルシン、1 型コラーゲン反応が観察された。メカニカルストレスの減弱化は、踵骨の石灰化領域の骨基質タンパク質を分解することが明らかになった。（河上俊和、滝瀬定文、奥田修人、佐川光一、古河準平）
１００　水泳授業に置ける受講生のストレス反応について	共著	平成 26 年	日本水泳・水中運動学会 2014 年次大会	水泳授業における実技指導法の実態と受講生の生理的負担との関係について唾液アミラーゼ測定を行った。水泳授業時におけるストレス応答生理活性物質は,水泳の運動強度に依存せず、早期からの水泳経験と技術獲得の有無が学習者の精神的状態に影響を及ぼす。今後、水泳授業では、習熟度別の指導法や集団・個別の指導を詳細に検討する必要性があることを生理学的マーカーから明らかにした。（奥田修人、東山祐三、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、佐川光一）

１０１　高齢期のサルコペニアは筋線維あるいは筋膜が関与するのか	共著	平成 26 年	第 16 回日本スポーツ整復療法学会大会	筋線維あるいは筋膜の変化を高齢期のラットを用い筋組成変化の検討を行った。SEM では、非運動群が走運動群に比べ筋膜の肥厚している像が観察され、運動負荷がコラーゲン線維のリモデリングに重要であることが伺えた。高齢ラットでは、筋線維の萎縮に伴い筋線維間組織のコラーゲン合成を低下させ、運動は活性化させることが明らかになった。　　（佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、奥田修人）
１０２　ディナベーションによる筋腱複合体の組織学的変化	共著	平成 26 年	第 16 回日本スポーツ整復療法学会大会	筋萎縮の毛細血管の適応変化について、ラットディナベーションモデルを用い、筋腱複合体の血管構造を検討した。筋腱複合体近傍では、ディナベーション群は血管内皮増殖因子の反応が弱く、アキレス腱に向かう血管走行の蛇行像が観察され、血管新生において骨格筋内の血流変化が減弱化すると血管新生因子の発現が減退することを明らかにした。　　（古河準平、滝瀬定文、河上俊和、佐川光一、奥田修人）
１０３　若齢ラット及び高齢ラットにおける骨格筋損傷後の修復に関する組織学的研究	共著	平成 26 年	第 16 回日本スポーツ整復療法学会大会	ラット筋損傷モデルを用い、筋再生過程における筋線維、筋膜の構造について検討した。高齢の損傷 24 時間後は再生像が観察されず、筋衛星細胞は 168 時間後も依然として観察されなかったが、若齢ラットはマクロファージや傷害周辺細胞からの刺激因子がきん再生を促すことが明らかになった。（奥田修人、東山祐三、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、佐川光一）
１０４　骨芽細胞の形態が骨折治癒過程に及ぼす影響に関する組織学的研究	共著（筆頭）	平成 26 年	第 16 回日本スポーツ整復療法学会大会	骨折治癒過程における骨芽細胞の微細形態について検討した。骨折 3 週後は、軟骨細胞が肥大し、近傍に軟骨再暴走が形成され、骨内膜面には単層に配列する骨芽細胞が観察された。新生骨基質では、局所的に骨修復の遅延した像も観察されたことから、骨修復には骨芽細胞の形態が重要な押印となること

				を明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、古河準平、奥田修人、佐川光一）
105. 水泳運動が中高年女性の骨密度に及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 27 年	日本体育学会第 66 回大会	継続的に水泳運動を実施している中高年女性を対象に大腿骨近位部および腰椎の骨密度測定を行った。両部位とも日本人の年齢別平均値より高く、ワード三角部のZスコアは1.25±1.58であり、中高年期の骨密度減少予防には水抵抗による骨内の歪みや撓みが骨気質に作用し、海綿骨優位な領域の骨密度維持に貢献することが明らかになった。（河上俊和、滝瀬定文、友金明香、池島明子、川島康弘）
106. 高脂肪餌摂取がラット骨格筋組織における脂肪蓄積に及ぼす影響	共著	平成 27 年	日本体育学会第 66 回大会	生体における余剰脂肪は、脂肪組織のみならず骨格筋での脂肪蓄積や種々の代謝性疾患の要因となることから、ラットの高脂肪餌の摂取が脂肪細胞の形態に及ぼす影響について検討を行った。走査型電子顕微鏡観察の結果、高脂肪餌群では筋線維間と筋線維内に小型の脂肪滴が観察され、高脂肪餌摂取は筋線維内の脂肪形成を引き起こすことが明らかになった。（佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、奥田修人）
107. 水中ウォーキングが閉経後女性の骨代謝マーカーに及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 27 年	第 70 回日本体力医学会大会	水中ウォーキングが骨代謝動態に及ぼす影響を明らかにするため、閉経後女性の大腿骨近位部及び腰椎の骨密度測定と水中ウォーキング前後の骨代謝マーカーの測定を行った。TRACP-5b の高値は骨吸収亢進状が伺えた。水中ウォーキング後の P1NP が安静時に比べて有意に高く、水中ウォーキングにより骨基質タンパク質合成が促進されることが明らかになった。（河上俊和、滝瀬定文、前島悦子、友金明香、池島明子、川島康弘）

108. 持久性運動がラット筋線維組成と筋膜の形態に及ぼす影響	共著	平成 27 年	第 70 回日本体力医学会大会	若齢ラットと老齢ラットを用い、持久性運動が筋線維組成と筋膜の形態に及ぼす影響について検討を行った。免疫染色結果では、両群とも筋内膜および筋周膜に b-FGF の反応が観察され、この成長因子の発現はⅠ型コラーゲンの発現とともに筋膜構造の変化を惹起し、筋機能の維持に影響を及ぼすことが明らかになった。(佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、奥田修人)
109. 閉経後の骨密度減少は水泳運動で防ぐことができるか	共著 (筆頭)	平成 27 年	第 17 回日本スポーツ整復療法学会大会	閉経後の骨密度減少の特徴を明らかにし、骨粗鬆症予防の運動療法を検討するため、大腿骨近位部および腰椎骨密度の経年変化について研究を行った。大腿骨頸部及び大腿骨近位部は測定２年目に骨密度減少が認められたが、年齢別基準値との比較では高い Z 値を維持していたことから、閉経前からの水泳運動が骨密度減少の抑制に影響を与える可能性が明らかになった。(河上俊和、滝瀬定文、佐川光一)
110. 高齢ラットの運動が筋組成及び結合組織に及ぼす影響	共著	平成 27 年	第 17 回日本スポーツ整復療法学会大会	筋萎縮に対する予防・治療法の一助として、ラット座骨神経切除モデル及びランニングモデルを用い、廃用性筋萎縮について筋組成及び結合組織の検討を行った。筋破断値の測定結果、結合組織の割合との間に関係性と免疫染色の結果からコラーゲン線維を主成分とする結合組織が張力に対する抵抗性に重要であることが明らかになった。(佐川光一、滝瀬定文、河上俊和)
111. 水中運動が閉経後女性の骨代謝マーカー及び骨密度に 及ぼす影響に関する縦断的研究	共著 (筆頭)	平成 27 年	日本水泳・水中運動学会 2015 年次大会	水泳・水中運動が閉経後女性の骨密度および骨代謝動態に及ぼす影響について、2 年間にわたり大腿骨近位部および腰椎の骨密度測定と水中運動前後の骨代謝マーカーの測定を行った。大腿骨近位部の骨密度は、同年齢の骨密度基準値に比べて Z スコアが高く、骨形成マーカーは、インタクト 1 型プロコラーゲン-N-プロペプチド (P1NP) が水中運動後に高い傾向を呈することが明

				らかになった。(河上俊和、滝瀬定文、佐川光一、奥田修人)
112. 血中アディポサイトカインが閉経後女性の骨代謝動態に及ぼす影響	共著(筆頭)	平成 28 年	第 24 回日本運動生理学会大会	血中アディポサイトカインが閉経後女性の骨密度および骨代謝動態に及ぼす影響について生化学的に検討を行った。血中アディポネクチン濃度と腰椎骨密度との間に負の相関を認め、血中アディポネクチンは腰椎における骨吸収と骨密度の減少を惹起させることが伺えた。血中アディポネクチン濃度は、骨芽細胞の機能と TNF-α の動態に影響を与え、閉経後女性の骨吸収の亢進に関わる可能性を明らかにした。(河上俊和、滝瀬定文、佐川光一)
113. 高脂肪餌摂取が脂肪細胞の形態と微細血管構築に及ぼす影響	共著(筆頭)	平成 28 年	日本体育学会第 67 回大会	ラットの高脂肪餌摂取が、脂肪細胞の形態に及ぼす影響について血管内皮増殖因子の係りに着目し組織学的に検討した。高脂肪餌群は、大型脂肪細胞の細胞膜表面に小型の脂肪滴が出現し、細胞膜の表面にコラーゲン繊維と微細血管が観察された。また両群間で VEGF と AP 染色に対する反応が変化し、高脂肪餌群の細胞間隙でのマクロファージの浸潤は、炎症反応による血管新生と小型脂肪滴の形成要因となることが考えられた。(河上俊和、滝瀬定文、佐川光一)
114. 閉経後の水泳運動が血中アディポサイトカインと骨密度との関係に及ぼす影響	共著(筆頭)	平成 28 年	日本水泳・水中運動学会 2016 年次大会	血中アディポサイトカインが閉経後女性スイマーの骨密度および骨代謝動態に及ぼす影響について、腰椎及び大腿骨近位部の骨密度測定と安静時および水中運動後の骨代謝マーカー、脂質代謝関連タンパク質の測定を行った。水泳・水中運動は,血中アディポネクチンと骨形成マーカーの動態に影響を与え,海綿骨優位な骨領域への運動効果として,腰椎骨密度の Z スコアに影響を与えることが明らかになった.(河上

				俊和、滝瀬定文、佐川光一)
115. 骨粗鬆症予防としての運動療法を探る	共著 (筆頭)	平成 28 年	第 18 回日本スポーツ整復療法学会	骨代謝はエストロゲンやアディポサイトカインの内分泌因子が複雑に関わるため、閉経後女性の骨粗鬆症予防の運動療法を検討した。閉経後骨粗鬆症予防の運動療法として、血中アディポサイトカインの調節と骨代謝、骨密度の維持を図るために有効であることを明らかにした。(河上俊和、滝瀬定文、佐川光一)
116. 上り坂及び下り坂運動が筋組織に及ぼす影響	共著	平成 28 年	第 18 回日本スポーツ整復療法学会	上り坂及び下り坂運動が筋線維組成タイプの移行や筋組織局所における乳酸輸送体の制御因子の発現に及ぼす影響を検討した。上り坂及び下り坂運動の筋収縮様式の違いが筋タンパク質の変性をもたらすことが明らかになった(河上俊和、滝瀬定文、佐川光一)
117. 剣道競技が若年男性の全身骨骨密度に及ぼす影響	共著 (筆頭)	平成 29 年	第 19 回日本スポーツ整復療法学会大会	大学剣道部に所属する男子大学生 を対象として、剣道競技が若年男性の全身骨骨密度に及ぼ す影響について検討を行った。両上肢と全身(r=0.79) との間に相関が認められ(図 1)、打突時の竹刀を介した 衝撃力や体幹のしなり、捻りが連動した動作は、両上肢から体幹および全身への力学負荷として骨密度に影響を及ぼすことかを明らかにした。(河上俊和、神﨑浩、 村上雷多、滝瀬定文)
[その他・掲載抄録]				
1 水泳運動が閉経後女性の骨密度に及ぼす影響について	共著 (筆頭)	平成 14 年	体力科学 第 51 巻 p. 722	水泳運動継続者及び文化教室参加者の全身骨骨密度を測定した。水泳群に大腿骨頚部全体の骨密度の高い傾向が認められ、水抵抗は骨密度付加効果が高いと考えられ骨形成を促す影響があることが示唆された。(河上俊和、滝瀬定文、岩田勝、廣橋賢次、小妻崇志、中瀬義弘、大川得太

				郎）
2 脊髄損傷者のにおける車椅子バスケットボール選手の骨密度について	共著	平成14年	体力科学 第51巻 p.795	スポーツセンターでスポーツを実施する脊髄損傷者10名,健常者41名を対象に全身骨骨密度を測定した。上肢骨密度は、健常者より脊髄損傷者の方が僅かに高い傾向を示した。下肢において有意に結果であり、下肢への骨量を高める運動療法に関する運動内容を考慮することが重要であると示唆された。 （小妻崇志、滝瀬定文、廣橋賢次、河上俊和、松下直史、小池達也）
3 ラットギプス固定が大腿骨骨密度低下に及ぼす影響について	共著（筆頭）	平成15年	体力科学 第52巻 p.864	力学的ストレスの減少が,骨密度に及ぼす影響について部位別骨密度の測定及び光学顕微鏡、走査型電子顕微鏡による観察を行った。大腿骨遠位骨幹端部の骨密度は、運動群＞コントロール群＞ギプス固定群の順に有意に低く、光顕では骨芽細胞の減少がみられた。（河上俊和、滝瀬定文、大川得太郎、儀満大輔、廣橋賢次、岩田勝、小妻崇志
4 長期ギプス固定後の運動が骨密度に及ぼす影響について	共著	平成15年	体力科学 第52巻 p.865	ラット左後肢にギプス固定を4週間施した後、運動群及び非運動群に分けた。部位別の骨密度測定及び走査型電子顕微鏡による骨組織の観察を行った。大腿骨遠位骨幹端部の骨密度は非運動群より運動群の方が有意に高く、運動群の骨芽細胞及びコラーゲン線維が緻密な構造を成している像が観察された。 （儀満大輔、滝瀬定文、大川得太郎、河上俊和、廣橋賢次、岩田勝、小妻崇志）
5 継続運動が血中脂質及びレプチン濃度に及ぼす影響について	共著	平成16年	体力科学 第53巻 p.837	運動が血中脂質、血中レプチン濃度に及ぼす影響について検討を行った。水中歩行後のレプチンに有意な変化は認められなかったが、継続的な運動が

				レプチンとグレリンとのアンバランスの調整に重要であると考えられた。（若松美和子、滝瀬定文、河上俊和、儀満大輔、小松祐希、岩田勝、藤川眞仁）
6　高コレステロール血症がカルシウムパラドックスに及ぼす影響	共著（筆頭）	平成16年	体力科学 第53巻 p.845	ExHC ラットを用いてカルシウムパラドックスについて検討を行った。血管内皮においては単球の接着、平滑筋細胞へのカルシウム沈着が観察された。カルシトニン分泌の促進は骨芽細胞の働きを抑制、リモデリングに影響を及ぼし、動脈硬化を引き起こすものと考えられる。（河上俊和、滝瀬定文、廣橋賢次、岩田勝、儀満大輔、小松祐希）
7 骨折治癒に関する形態学的研究	共著	平成16年	体力科学 第53巻 p.878	ラット骨折モデルを用いて骨折治癒過程を経時的観察後、運動群と非運動群に分け、骨密度の測定、光顕及び電顕による形態学的観察を行った。骨折癒合後の運動群は、新生骨梁組織に隣接する細胞と重なり合う骨芽細胞が観察された。（儀満大輔、滝瀬定文、廣橋賢次、岩田勝、河上俊和、小松祐希）
8 水泳競技に参加する身体障害者の身体組成の特徴について	共著	平成16年	体力科学 第53巻 p.878	水泳参加者の身体組成について障害別に検討を行った。体脂肪率は聴覚障害者の男女とも低値を示し、水泳運動が基礎代謝を向上させた。水泳参加規定要因は「自ら何かスポーツに参加したかった」が認められた。（小松祐希、滝瀬定文、廣橋賢次、岩田勝、河上俊和、儀満大輔）
9　力学的ストレスの減少が廃用性骨萎縮に及ぼす影響に関する研究	共著（筆頭）	平成16年	大阪体育大学紀要 第35巻 p.187 学位（修士）論文要旨	力学的ストレスの減少が廃用性骨萎縮に及ぼす影響について骨密度測定と形態学的観察を行った。大腿骨遠位骨端骨幹端部の骨密度の減少が大きく、力学的ストレス応答として骨芽細胞、コラーゲン線維の走行が大きく関わっていることが認められた。　（河上俊和、研究指導 滝瀬定文 教授）

１０ 運動が骨細胞に及ぼす形態学的研究	共著	平成 17 年	体力科学 第 54 巻 p.471	メカニカルストレス受容伝達細胞としての骨細胞の形態学的観察を行った。メカニカルストレスの軽減は骨細胞間のネットワークの粗を引き起こし、運動群の細胞突起は三次元の分岐像が観察された。 （儀満大輔、滝瀬定文、河上俊和、岩田勝、テイコウブン、小松祐希、向井裕貴、木村和弘）
１１ 運動が成長期の骨成長に及ぼす影響	共著	平成 17 年	体力科学 第 54 巻 p.549	荷重負荷が成長軟骨の構造変化に及ぼす影響について、骨密度の測定と骨形成、骨吸収マーカーから検討を行った。運動群の骨幹端部の骨密度はコントロール群に比べて高く、BGP が高かった。また、軟骨細胞は長軸方向に規則的な配列を成すことを明らかにした 。（小松祐希、滝瀬定文、儀満大輔、河上俊和、岩田勝、テイコウブン、向井裕貴、木村和弘）
１２ 運動条件の違いが領域別骨密度に及ぼす影響	共著	平成 17 年	体力科学 第 54 巻 p.585	運動条件の違いが成長期の骨に対する影響を脛骨領域別骨密度と骨代謝マーカーから検討した。荷重軽減群では、海綿骨及び皮質骨のいずれの領域でも骨密度が低下したが、荷重運動群では骨幹端部に有意な増加を認め、BGP 値の増加、CTx の低下が認められた。（木村和弘、滝瀬定文、儀満大輔、河上俊和、岩田勝、テイコウブン、小松祐希、向井裕貴）
１３ 骨折治癒過程における軟骨形成の形態学的研究	共著	平成 17 年	体力科学 第 54 巻 p.676	骨折修復過程を領域別骨密度及び組織学的に検討した。修復 2w 後に骨膜肥大と軟骨細胞増殖、4w 後には、骨折部近傍に肥大軟骨細胞とその周囲に血管腔と球状顆粒 TGF-β の反応が観察された。 （向井裕貴、滝瀬定文、儀満大輔、河上俊和、岩田勝、テイコウブン、小松祐希、木村和弘）

１４ 骨折部の牽引が仮骨形成に及ぼす影響	共著 (筆頭)	平成 17 年	体力科学 第 54 巻 p.676	延長骨化の骨化様式を観察する目的でラット骨折牽引モデルを作成し、実験を行った。骨密度は、石灰化軟骨豊富な骨折断端遠位部が最も高く、軟骨細胞は長軸方向に伸展するような配列、延長中央部では線維性組織の細胞が配列することを明らかにした。 (河上俊和、滝瀬定文、岩田勝、儀満大輔、小松祐希、宮本岳人、向井裕貴、木村和弘)
１５ 連続負荷が骨細胞における情報伝達機構へ及ぼす影響	共著	平成 18 年	体力科学 第 55 巻 p.635	反復性負荷により皮質骨中に骨疲労を生じさせ、組織学的に検討した。脛骨は、骨密度増加は認められず、脛骨上 1/3 部位に血管侵入、空砲骨小腔が認められ、骨細胞の細胞突起は破綻し細胞体からの分布は不均一で、反復負荷は骨芽細胞の骨形成に障害を生じさせることが明らかとなった。 (儀満大輔、滝瀬定文、岩田勝、河上俊和、小松祐希、向井裕貴、木村和弘)
１６ 咀嚼運動がラット頭蓋リモデリングに与える影響に関する形態学的研究	共著 (筆頭)	平成 18 年	体力科学 第 55 巻 p.742	咀嚼運動が骨細胞に及ぼす影響について形態学的研究を行った。頭蓋骨骨塩量は固形飼料群が高く、咬筋重量と骨密度との間に相関が認められた。骨芽細胞に TGF-β の発現が観察され、骨形成カップリングファクターとして咀嚼運動が重要であることが明らかとなった。 (河上俊和、滝瀬定文、岩田勝、儀満大輔、小松祐希、向井裕貴、木村和弘)
１７骨折治癒過程におけるラット脛骨微細血管構築の形態学的研究	共著	平成 18 年	体力科学 第 55 巻 p.859	ラット脛骨骨折モデルを用いて仮骨形成と微細血管構築再生について検討を行った。骨折 28 日後では内軟骨性骨化の進行、石灰化軟骨細胞周辺部に血管侵入と軟骨基質上に TGF-β 反応が認められた。さらに骨表面は凹凸が観察され、骨吸収窩形成は骨基質中制御因子の遊離、周辺部細胞に作用し骨改変を促進することを明らかにした。 (向井裕貴、滝瀬定文、岩田勝、河上俊和、儀満大輔、小松祐希、木村和弘

１８　ラットのリセドロネート投与下の運動が骨細胞に及ぼす影響	共著 (筆頭)	平成 19 年	体力科学 第 56 巻 p.628	ラットにリセドロネートを投与し、破骨細胞機能の抑制が骨細胞の微細構造に及ぼす影響を検討した。RIS+EX 群の大腿骨遠位骨端部の骨密度は他の群よりも高く、RIS の骨細胞は小さく RIS+EX 群は骨細胞の増加と細胞突起の網状構造が発達し、外的刺激に対して骨細胞が情報伝達にかかることが明らかとなった。 (河上俊和、滝瀬定文、儀満大輔、佐野佑樹、岩田勝)
１９ 加齢変化による骨細胞及び細胞突起の形態学的研究	共著	平成 19 年	体力科学 第 56 巻 p.629	幼若ラットと老齢ラットを用い、加齢に対する骨細胞の特徴を形態学的に検討した。老齢群は、楕円形や紡錘形の不規則な携帯が多く、細胞突起は細く粗な走行を呈していた。細胞突起の減少は骨細胞が感知したシグナルを隣接する骨細胞への伝達が制限されるものと思われ、骨芽細胞に対して骨形成の低下を引き起こすことが明らかとなった。　(儀満大輔、滝瀬定文 河上俊和、佐野佑樹、岩田勝)
２０ラット脛骨 Circular bone defect 後の骨形成について	共著	平成 19 年	体力科学 第 57 巻 p.972	力学的ストレスが骨再生に及ぼす影響を検討するため、骨欠損モデルを作製し欠損領域に再生された骨芽細胞の観察を行なった。骨に生じた修復過程で欠損部の石灰化、骨芽細胞の形態及び TGF-β発現から内因性の因子のみならず運動負荷が影響を与えることを明らかにした。 (佐野佑樹、滝瀬定文、河上俊和、滝瀬定文、儀満大輔、岩田勝)
２１ ラット脛骨骨欠損後の運動が骨基質形成に及ぼす影響	共著 (筆頭)	平成 20 年	体力科学 第 57 巻 p.972	力学的ストレスの減少が,骨密度に及ぼす影響について部位別骨密度の測定及び光学顕微鏡、走査型電子顕微鏡による観察を行った。大腿骨遠位骨幹端部の骨密度は、運動群＞コントロール群＞ギプス固定群の順に有意に低く、光顕では骨芽細胞数の減少が観察された。 (河上俊和、滝瀬定文、大川得太郎、

				儀満大輔、廣橋賢次、岩田勝、小妻崇志
２２ OVX ラットの運動が大腿骨骨密度と骨細胞の微細形態に及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 20 年	体力科学 第 57 巻 p.696	運動が OVX ラットの大腿骨骨密度に及ぼす影響を骨梁亜棒の形態学的観察から検討を行った。OVX 群の骨量減少を７領域に分け詳細に分析した結果、骨端部で顕著な低下を認めた。この部位の骨細胞の細胞間隙は一部断裂が観察され、TGF-βの発現が認められなかった。これは、骨芽細胞への物質輸送を余儀なくされることを明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、佐野佑樹、小芝裕也、伊藤修宏、岩田勝）
２３ Influence of running on micromorphology of osteocytes in RIS-treated rats	共著（筆頭）	平成 20 年	2008 International Convention on Science Education and Medicine in Sport. Proceedings. p.173 - 174	骨の骨細胞は骨小腔内に埋没する特殊な形態を呈し、骨細胞の細胞外環境の変化が細胞体形成と細胞突起伸展に関わることから、ラットにリセドロネートを投与し、骨細胞の形態変化について形態学的研究を行った。骨細胞は RIS+EX 群＜RIS 群＜EX 群の順にその大きさは異なり、EX 群の網状構造に最も良く発達が認められ、力学的ストレスは骨細胞が多数の枝分かれした細胞突起と細胞性網状構造に影響を及ぼすことが明らかとなった。（ Toshikazu Kawakami, Sadafumi Takise and Daisuke Gima）
２４ Influence of aquatic walking on the blood leptin level	共著	平成 20 年	2008 International Convention on Science Education and Medicine in Sport. Proceedings. p.210 - 211	レプチンは脂肪細胞由来の摂食抑制とエネルギー代謝調節に関わるアディポサイトカインであることから、水中ウォーキングが血中レプチン濃度に及ぼす影響について検討を行った。血中レプチンは運動前後で大きな変動を示さなかったが、IL-6 濃度と血中レプチン濃度との間には相関が認められ、血中レプチン濃度を規程する要因として体脂肪率だけでなく運動量及び運動強

				度などが関係することを明らかにした。 （Sadafumi Takise, Toshikazu Kawakami and Daisuke Gima）
２５ 運動が骨梁形成に及ぼす影響について	共著	平成21年	体力科学 第58巻 p.604	運動条件の違いが海綿骨梁の３次元的網工に及ぼす影響について形態学的に検討を行った。トリプシン消化法による骨梁の観察結果、運動群は骨小腔が多く、骨基質中の骨芽細胞は力学負荷による影響が大きいことが明らかになった。 （松本賢次、滝瀬定文、河上俊和、細川賢司、小芝裕也、伊藤修広、井出貴久）
２６ 荷重軽減による腱・骨組織の形態学的研究	共著	平成21年	体力科学 第58巻p.604	荷重軽減モデルを用いて皮質骨の骨芽細胞及び腱付着部組織の形態学的観察を行なった。荷重軽減群は、骨芽細胞の細胞面積は大型で不規則な形態を呈し、腱・踵骨のオステオカルシン反応を変化させ、荷重軽減は線維組成や骨端部の骨密度低下に関わることを明らかにした。 （小芝裕也、滝瀬定文、河上俊和、細川賢司、伊藤修広、松本賢次、井出貴久）
２７ 運動が骨細胞に及ぼす形態学的研究	共著 （筆頭）	平成21年	体力科学 第58巻 p.609	加齢に伴う骨密度減少を探る目的で、骨細胞及びサイトカインに及ぼす影響について形態学的研究を行った。運動群と非運動群との間にDMP-1とcalpainの反応に違いが認められ、力学負荷感知の反応は骨細胞骨格、細胞性ネットワークに影響することが明らかとなった。 （河上俊和、滝瀬定文、岩田勝、細川賢司、松本賢次、伊藤修広、井出貴久）

２８ ラット後肢足関節固定が腱に及ぼす影響について	共著	平成 21 年	体力科学 第 58 巻 p.946	関節固定の違いが廃用性萎縮及び腱コラーゲン線維構造に及ぼす影響について、腱と微細血管構築を形態学的に検討した。関節固定による腱力学的条件は、Enthesis 周囲の細胞に影響しコラーゲン石灰化を亢進させ、腱骨付着部の線維軟骨成分の組成並びに機能低下の要因となることを明らかにした。（細川賢司、滝瀬定文、河上俊和、松本賢次、伊藤修広、小芝裕也、井出貴久）
２９ 免荷がラットアキレス腱エンテーシスに及ぼす影響	共著	平成 22 年	体力科学 第 59 巻 p.632	ラット免荷モデルを用いてアキレス腱コラーゲン線維とエンテーシスの微細形態について組織学的に検討を行った。アキレス腱エンテーシスの構造変化は、踵骨付着部の軟骨細胞が重要で、軟骨層の石灰化は腱のⅠ型コラーゲン合成による線維走行を規定することを明らかにした。（細川賢司、滝瀬定文、河上俊和、松本賢次、井出貴久）
３０ 運動条件の違いが成長期ラットの骨細胞に及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 22 年	体力科学 第 59 巻 p.637	ラットに異なる荷重運動を負荷し、脛骨の骨細胞微細形態に及ぼす影響について形態学的研究を行った。骨小腔の DMP-1 反応は、ジャンプ運動群がランニング運動群に比べて多く、メカニカルストレスが強い運動ほど骨細胞ネットワークと骨小腔の構築が促進されることを明らかにした。（河上俊和、滝瀬定文、細川賢司、松本賢次、井出貴久、岩田勝）
３１ 免荷がラット脛骨骨強度に及ぼす影響	共著	平成 22 年	体力科学 第 59 巻 p.638	ラット免荷モデルを作成し、脛骨領域別骨密度と骨破断強度の測定を行った。免荷群の脛骨骨密度と骨破断強度は、同じ骨領域においても破断応力に差が認められ、海綿骨梁の形状差異や低骨密度の骨梁の破断機序に違いが生じることを組織学的に明らかにした。（松本賢次、滝瀬定文、河上俊和、細川賢司、井出貴久）

３２ 関節拘縮が関節軟骨細胞の形態に及ぼす組織学的研究	共著	平成 23 年	体力科学 第 60 巻 p.717	ラット関節拘縮モデルを用い、成長軟骨層の細胞増殖を VEGF 及びコラーゲンの免疫組織化学染色及び走査型電子顕微鏡による検討を行った。脛骨近位骨端軟骨層では、細胞増殖下層から成熟軟骨細胞、肥大軟骨細胞に VEGF 反応が観察された。関節腔内は、II 型コラーゲン合成と成長板閉鎖が起こることを明らかにした。（川久保昭秀、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、谷川哲朗）
３３ 坐骨神経切除によるラット筋・腱萎縮に及ぼす組織学的研究	共著	平成 23 年	体力科学 第 60 巻 p.734	ラット廃用性萎縮モデルを用い、腱コラーゲン線維の組織学的観察を行った。腱線維での FGF 発現と線維芽細胞の細胞膜に散在する接着タンパクによるⅠ型コラーゲン発現が観察された。腱組織は、筋組成変化に対しコラーゲン線維の形態が影響を受けることを明らかにした。（古河準平、滝瀬定文、河上俊和、川久保昭秀、谷川哲朗）
３４ 静水圧が競泳選手の呼吸機能に及ぼす影響	共著	平成 23 年	体力科学 第 60 巻 p.769	水の静水圧による負荷を与え、肺気量及び呼吸時の胸郭・腹部の運動パターン変化の検討を行った。死腔肺気量の減少は、有効肺胞換気の増加を惹起させ、一般学生に VC 減少が認められた。腹部圧は腹部臓器を押し上げ、胸郭内容積減少させ、呼吸機能として肺・胸郭弾性力に一般学生が競泳選手に比べて劣ることを明らかにした。（川島康弘、滝瀬定文、川久保昭秀、河上俊和）
３５ 脂肪細胞における血管新生の役割に関する組織学的研究	共著（筆頭）	平成 23 年	体力科学 第 60 巻 p.802	脂肪組織の血管新生機序として、血管新生との係わりに着目し、高脂肪摂取が脂肪組織の新生血管増殖因子に及ぼす影響について検討した。脂肪細胞の増加、肥大の際、骨髄由来の血管新生制御因子が既存の内皮細胞による生じる血管新生に作用し、VEGF は微細血管を構築し、肥大化した脂肪細胞の進展に影響することを明らかにした。

				（河上俊和、滝瀬定文、川久保昭秀、古河準平、谷川哲朗）
３６　体育学関係　博士・修士学位論文要旨 大阪体育大学大学院 博士論文 「運動が骨密度及び骨細胞に及ぼす影響に関する組織学的研究」	単著	平成24年	体育の科学　第 62 巻 7号 p.547	運動が骨密度及び骨細胞の微細形態に及ぼす影響を明らかにするため、ヒト及び実験動物を対象に研究を行った。1.水泳運動が閉経後女性の骨密度及び骨代謝マーカーに及ぼす影響についての検討。2.閉経後骨粗鬆症モデルとして、身体運動が卵巣摘出ラットの大腿骨領域別骨密度測定と EDTA-KOH 法による骨細胞の微細形態観察。3.ラットギプス固定モデルによる大腿骨領域別骨密度測定と骨芽細胞の微細形態観察。4.ラット咀嚼運動モデルによる頭蓋骨骨密度測定と骨細胞の組織学的検察を行った結果、運動による骨への負荷は、骨細胞数の増加や細胞間の連絡網を密にすることを組織学的に明らかにした。 （河上俊和、指導教員：滝瀬定文）
３７　ラット坐骨神経切除が骨芽細胞における calpain 発現に及ぼす影響	共著 （筆頭）	平成25年	体力科学 第62巻 p484	メカニカルストレスの骨芽細胞に対するサイトカインの制御特性についえ t ラット坐骨神経切除モデルを用い、骨芽細胞のシグナル伝達物質とプロテアーゼの局在を検討した。坐骨神経切除では、骨細胞、骨芽細胞のオステオポンチン反応が低下し、カルパイン反応が誘導され、骨芽細胞の形態変化と骨密度減少を引き起こす要因となる事を明らかにした。　（河上俊和、滝瀬定文、古河準平、奥田修人、佐川光一）
３８　坐骨神経切除がラットアキレス腱の血管形態に及ぼす影響	共著	平成25年	体力科学 第62巻 p.486	坐骨神経切除がアキレス腱組織のコラーゲン線維、血管に及ぼす影響を検討した。不動化による筋腱複合体へのストレスの消失は、b-FGF の抑制、FGFR1 の低下を生じさせ、それに伴 い Collagen Type1 の発現に影響を与えた

				ことが明らかになった。(古河準平、滝瀬定文、河上俊和、奥田修人、佐川光一)
３９　筋挫傷後の修復過程に関する組織学的研究	共著	平成 25 年	体力科学 第 62 巻 p.532	ラット筋挫傷モデルを用い、筋挫傷後の修復 過程について免疫組織学染色と走査型電子顕微鏡観察を行った。筋挫傷後において、筋線維近傍に FGF の発現が見られ、血管新生が修復に係るものと思われた。細胞間隙には瘢痕形成が見られたことから、修復過程を組織学的に観察する必要性を明らかにした。　(奥田修人、滝瀬定文、河上俊和、佐川光一、古河準平)
４０　坐骨神経切除がラット廃用性筋萎縮に及ぼす影響に関す る組織学的研究	共著	平成 25 年	体力科学 第 62 巻 p.587	運動負荷の減少が、廃用性筋萎縮に及ぼす影響についてラット坐骨神経切除モデル、運動モデルを作成し、筋組織の組織学的検討を行った。ヒラメ筋組織における Col Ⅰ及び FGF の発現は、廃用性筋萎縮による筋周膜の微細形態に影響し、筋組織の破断強度低下の要因になることを明らかにした。(佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、古河準平、奥田修人)
４１　国際比較からみた体力測定項目の妥当性について	共著	平成 25 年	体力科学 第 62 巻 p.627	国際間の体力比較で、0 体育大学がこれまで実施した体力テストを用い中国西安體育學院学生の体力特性 を明らかにするとともに、国際体力比較を行う際の問題点と測 定項目の妥当性の検証を行った。西安體育學院の運動部所属、無所属において、敏捷性を反映する種目に相関がみられなかった。両国間比較において、論理的、内容的、基準性、構成概念の妥当性について検討する必要性を明らかにした。(川島康弘、滝瀬定文、中井俊行、曽根純也、河上俊和)

４２　坐骨神経切除が高齢ラットの踵骨エンテーシスに及ぼす影響	共 著（筆頭）	平成 26 年	体力科学 第 63 巻 p. 572	メカニカルストレスと廃用性骨萎縮との関係に着目し、高齢ラットを用い坐骨神経切除が踵骨の骨密度とエンテーシス構造に及ぼす影響について組織学的研究を行った。坐骨神経切除群は線維性軟骨層のカルパイン反応が強く、タイドマークと非石灰化領域との境界が不明瞭で石灰化基質表面の粗な構造が観察された。踵骨エンテーシスを介した骨へのメカニカルストレスの減弱化は、踵骨骨密度低下と石灰化領域の骨基質タンパク質分解を引き起こすことを明らかにした。 （河上俊和、滝瀬定文、佐川光一、奥田修人、古河準平）
43. 水中ウォーキングが閉経後女性の骨代謝マーカーに及ぼす影響	共著（筆頭）	平成 28 年	体力科学 第 64 巻 p. 686	継続的に水泳運動を行なっている閉経後女性の骨密度及び骨代謝動態の特徴を明らかにするため、大腿骨近位部及び腰椎の骨密度測定と水中ウォーキング前後の骨代謝マーカーの測定を行った。大腿骨および腰椎の骨密度は年齢別平均値より高く、水中ウォーキング後の P1NP が安静時に比べて有意に高く、水中ウォーキングにより骨基質タンパク質の合成が促進されることが明らかになった。 （河上俊和、滝瀬定文、前島悦子、友金明香、池島明子、川島康弘）
44. 持久性運動がラット筋線維組成と筋膜の形態に及ぼす影響	共著	平成 28 年	体力科学 第 64 巻 p. 628	若齢ラットと老齢ラットを用い、持久性運動が筋線維組成と筋膜の形態に及ぼす影響について検討を行った。免疫染色結果では、両群とも筋内膜および筋周膜に b-FGF および I 型コラーゲンの強い反応が観察された。この部位における成長因子の発現は、コラーゲン線維の構築とともに筋膜構造の変化を惹起し、筋機能の維持に影響を及ぼすことが明らかになった。 （佐川光一、滝瀬定文、河上俊和、奥

				田修人)
45. Effects of adipocytokines in the blood on bone metabolism in postmenopausal women	共著 (筆頭)	平成28年	Advances in Exercise and Sports Physiology Vol.22, No.4, p.109	血中アディポサイトカインが閉経後女性の骨密度および骨代謝動態に及ぼす影響について生化学的に検討を行った。血中アディポネクチン濃度と腰椎骨密度との間に負の相関を認め、血中アディポネクチンは腰椎における骨吸収と骨密度の減少を惹起させる。血中アディポネクチン濃度は、骨芽細胞の機能と TNF-α の動態に影響し、閉経後女性の骨吸収亢進に関わることを明らかにした。 (Toshikazu Kawakami, Sadafumi Takise and Koichi Sagawa)

(人間) 藤田　英治

教　育　研　究　業　績　書

平成30年　3月　12日

氏名　**藤田　英治**　印

研　究　分　野	研究内容のキーワード
・教育学 ・算数教育 ・生活科 ・総合的な学習の時間 ・特別活動 ・進路指導（キャリア教育） ・教職教育（学校組織，学級経営，生徒指導　等）	・情意面を重視した問題解決 ・対話の組織化 ・アクティブラーニング ・豊かな心を育む算数教育 ・メタ認知 ・「面積」における理解の階層 ・指導困難教材「分数÷分数」 ・「白銀比」の学習モデル化 ・カリキュラムと評価 ・単元・領域・教科等の関連

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 **１．　教育方法の実践例**		
(1) 大阪教育大学　数学教育講座　算数科教育法の実地指導講師としての講義内容 ・新学力観に沿った指導のあり方	平成 16 年 4 月 ～平成 19 年 3 月	算数科の評価の 4 観点を「見えやすい学力」と「見えにくい学力」に範疇分けし，子どもの内面が見え信頼される教師になるために，「見えにくい学力」である関心・意欲をはじめ，「感じたこと」や「イメージ・発想」等の情意面や「考え方」などを表出させる方法やそれらを読み取るための授業の進め方について，乗法九九の構成や決まりを発見・活用・発展させる展開をもとに，指導方法を追究させた。
・量の数値化における概念形成とその学習展開		子どもにとって獲得しにくい量の概念について，「重さ」の学習において，量の段階的な指導（①直接比較，②間接比較，③数値化，④公式化）の学習過程を経た後，「はかりづくり」の学習を設定し，はかりにメモリをつけていく等の算数的な活動を行い，数値化する意味を再認識させるための学習展開について追究させた。
・指導困難教材の指導のあり方（その１） ― 数量関係の指導について ―		関数についての基礎的な理解を図るための講義を行い，特に，「変わり方」の学習について，問題解決的な学習の模擬授業を行い，子どもの多様な解決方法を提示し，その指導をどう進めていくのかについて，グループによる討議を中心に具体的な指導方法を追究させた。
・指導困難教材の指導のあり方（その２） ― 数と計算の指導について ―		2 年から 6 年に至るまでの分数の意味（分割分数，量としての分数，割合分数，商としての分数，数としての分数　等）について講義し，実際に学生に「分数÷分数」の問題を解決させ，液量図や面積図の使い方も含めて，その指導についての困難性を，グループ討議をもとにまとめさせ，具体的な指導方法を追究させた。

・算数科における評価と個に応じた指導の方法		算数科の４観点における評価，特に「関心・意欲・態度」と「数学的な考え方」の評価方法とその評価を生かした指導方法について，実際に学生に「台形の求積」から子どもの内面を表出させ評価するための資料や授業中の子どもへの具体的な指導方法について追究させた。
・大学における講義のアンケート分析		講義ごとに学生からとったアンケートを分析し，明らかになった学生の課題「教師になりたいという情熱の欠如や具体的な指導方法を身につけようとする意欲の欠如」について，グループ討議をさせたり，実際の「教師のやりがい」について講義したりした。また，学生から具体的に出てきた質問(学生のニーズも含む)を「教材開発」，「内容研究」，「指導方法」に範疇分けし，質問に答えた。
(2) 大阪教育大学（二部）「教育実践研究Ⅰ」講師としての講義内容 ・「アクティブラーニング」の基礎的な理論について	平成 27 年 4 月 ～平成 29 年 3 月	アクティブラーニングに関係する文献からキーワード（主体的，協働的，対話的，問題解決，メタ認知，深い学び等）を調べさせ，算数科における問題解決的な学習や言語活動の活性化に向けて，どのように関係付けることができるかについて，また，その意味や重要性を認識させるために学生にセッションさせた。
・「アクティブラーニング」の具体的な指導について		アクティブラーニングの基礎的な理解をもとに，安易なペアやグループ学習に落ちいいている現状 を把握し，「協働」と「深い学び」について，対話の組織化と学力向上という視点から，「体積」についての実験を中心とした問題解決的な学習と言語活動の活性化を測った模擬授業をも来ないその意味について考えさせた。
(3) 太成学院大学　算数科概論・教科教育法（算数）の講義内容 ＜算数科概論・教科教育法（算数）について＞ ・算数科の目標の分析	平成 28 年 4 月 ～	算数科の目標を項目ごとに分け，その意味について，具体的な事例をあげながら解釈していく。 その後，学生が具体的な操作を提示しながらプレゼンテーションさせた。
・算数的活動の具体的なまとめ		算数的活動について，学習指導要領に記述され

		ている事柄をもとに具体的な事例を調べ，算数新聞としてまとめていく。
・算数科の目標と観点別評価（4 観点）との関係		算数科の目標と評価の 4 観点の関係，教科によって観点が違うこと（生活科や特別活動と対比して）や観点別評価の重要性について考えさせた。
・「数と計算」領域の学習内容と指導方法		「数と計算」領域について，1 年から 6 年までの学習内容と系統について調べさせる。そして，十進数や位取り位置記数法の原理やそのよさについて，具体的な事例を示しながら理解できるようにした。また，2 年から 6 年までの分数の意味（分割分数，量としての分数，割合分数，商としての分数，数としての分数　等）について講義し，実際に学生に「分数÷分数」の問題を解決させ，液量図や面積図の使い方も含めて，その指導についての困難性を，グループ討議をもとにまとめさせ，具体的な指導方法を追究させる。
・「量と測定」領域の学習内容と指導方法		「量と測定」領域について，1 年から 6 年までの学習内容と系統について調べさせる。そして，量の段階的な指導（①直接比較，②間接比較，③数値化，④公式化）の学習過程を経た後，「はかりづくり」の学習を設定し，はかりにメモリをつけていく等の算数的な活動を行い，数値化する意味を再認識させるための学習展開について追究させる。
・「図形」領域の学習内容と指導方法		「図形」領域について，1 年から 6 年までの学習内容と系統について調べさせる。そして，学習方法として，「頂点や辺，面の数」，「辺や面の垂直・平行」，「合同」，「対称」，「相似」等，基本図形を観点を変えて調べていくカリキュラムがあることや大まかな学習過程（①定義を知る，②定義を持って弁別する，③抽出した図形の性質や特徴を調べる④見つけた性質や特徴を活用して作図する，⑤敷き詰め等をして，概念の拡張や図形の美しさに感じる）があることを学修させる。

・「数量関係」の学習内容と指導方法		「数量関係」領域について，1年から6年までの学習内容と系統について調べさせた。その中で関数についての基礎的な理解を図るための講義を行い，特に，「変わり方」の学習について，問題解決的な学習の模擬授業をもとに，大まかな関数の学習過程（①変われば換わるものを見つける，②順序よく並べる，③対応や変化の決まりを見つける，④決まりを活用して式化する，⑤グラフ化する，⑥関数的な考え方を活用して問題を解決する）について考えさせる。
・評価方法と形成的な評価		算数科の４観点における評価，特に「関心・意欲・態度」と「数学的な考え方」の評価方法とその評価を生かした指導方法について，実際に学生に「台形の求積」をさせ，子どもの内面を表出させ，評価するための資料や授業中の個々の子どもへの指導方法について具体的な算数科の指導方法について追究させた。
＜生活科概論・教科教育法（生活）について＞ ・生活科の目標と評価の観点（3観点）		生活科の目標を項目ごとに分け，その意味について，具体的な事例をあげながら解釈していく。 特に，「知的な気づき」や「自立への基礎」について，調べさせ，具体例をあげて評価の観点や規準についてまとめさせる。
・生活科の具体的な指導内容・方法とカリキュラム		生活科における24ヶ月のカリキュラムと書く単元内容を7社の教科書から分類・分析させ，それぞれの単元内容や季節等の単元のつながりについて調べさせ，プレゼンテーションさせる。
＜特別活動指導法について＞ ・特別活動の目標と評価の観点（3観点）		特に「望ましい集団の育成」に焦点をあて，特別活動の目標と評価の観点や規準について，調べさせた。
・特別活動の内容と指導方法		特別活動と道徳，生活科，総合的な学習の時間との目標や内容の共通点や相違点について，学習指導要領をもとに調べまとめさせる。また，

		特別活動の各活動・学校行事の内容と目標について，具体的な事例をあげてカテゴリー分けをさせる。
＜進路指導の理論と方法について＞ ・キャリア教育について		キャリア教育の趣旨とその背景について，「小学校キャリア教育の手引き（文部科学省）」を参考資料として調べ，まとめさせた。
・キャリア教育の指導内容と方法について		キャリア発達に関わる諸能力（４領域８能力）の意味について追究させ，具体的な指導と結びつけて，その内容を理解させる。
＜現代徳育論＞		本学の教育目標である「教育は徳なり」の理念を達成するため、それは、まさしく「生きる力」知・徳・体のバランスの取れた学生を育成するために、心の教育を中心に、人との関わりをはじめ、社会への貢献を意図した授業を展開する。 一例として、学生に自分の過去を振り返らせ、「座右の銘」を決めさせ、大学生活から将来の夢（進路）等について考えさせ、プレゼンテーションさせていく。
＜教職実践演習（初等）＞		現代の学校の状況や教員の仕事、児童保護者への対応をはじめ、子ども同士のトラブルや怪我、いじめ、不登校等への対応について、具体的な事例をあげて、学校組織としての対応について、ワークショップ形式で学修を進める。
2　作成した教科書，教材 (1) 大阪教育大学　数学教育講座　算数科教育法の実地指導講師としての講義内容） ・「乗法九九」の指導の新展開とその教材	平成 16 年 4 月 ～平成 19 年 3 月	暗記することに偏りがちな「乗法九九」の学習について，乗法の仕組みや九九に内包するきまりについて，九九の構成や教材（スターパターンズ等）を用いて見つけ，それを活用して問題解決する学習モデル
・重さを数値化するための教材と指導方法		具体的な体験の欠如から，中には，秤の中に「重さ」が存在していると考えている子どももいる。その意識を生かし，量の指導の 4 段階に加え，「秤づくり」という算数的活動を設定し，

		目に見えない重さを数値化するための教材の活用とその指導方法
・「関数」における指導内容と指導方法の関連を図った学習展開（モデル）		関数の学習の流れ（①変われば変わるものを見つける→②順序よく並べる→②変化のきまりや対応のきまりを見つける→③式化する→④グラブに表す：問題解決に活用する）に沿った指導方法についての理解を深め，それに沿った問題解決的な学習と言語活動の活性化ため野教材と学習モデル
・「分数」の概念形成と系統性を重視した指導方法の あり方		分数のわり算「分数÷分数」を指導するための分数の種類やその系統性について整理し，数直線等を用いた子どもの解決方法をどう結び付けながら問題解決していくかについての指導モデル
・「台形の求積と公式化」における指導モデル		台形の求積方法として，平行四辺形，三角形，長方形に変形するために，「分割」，「等積変形」，「倍積変形」，「補完」の考え方を駆使する子どもの解決方法をまとめ，子どもにとって難しい公式化の過程をまとめた指導モデル
・算数科指導法についての講義のまとめの教材化		講義ごと（毎回）に学生からとったアンケート（質問やニーズも含む）について，「教材開発」，「内容研究」，「指導方法」に範疇分けした内容を教材化し，模擬授業に生かした。
(2) 大阪教育大学（夜間学部）「教育実践研究Ⅰ」 講師としての講義内容 ・「体積」についての実験中心とした算数的活動	平成 27 年 4 月 ～平成 29 年 3 月	４種類の直方体の展開図（蓋がない）の提示から，「体積（容積）」の大小についての学生の疑問・困惑を起こし，実際に展開図を組み立て，既習事項である「かさ」や「重さ」，「面積」の測定方法（①水を入れてメスシリンダーで量る，②砂を入れて秤で量る，③１立方センチの積み木を詰める）活動を行い，体積の意味や数値化の考え方から公式について考えさせる展開と教材
・「分数÷分数」の多様な解決方法		「なぜ，分数のわり算はひっくり返してかけるのか？」という疑問を証明させるために，多様な考え方をホワイトボードにかかせ，共通点や

		相違点を見つけさせる指導モデル
(3) 太成学院大学　算数科概論・教科教育法（算数）の講義内容 ・「カレンダーの秘密」の学習モデルと教材		カレンダーにある数の並び方，4つや9つの数字をたしたり，わったりする中で，規則性のおもしろさや不思議さに気づかせ，それを式化させることで一般化させる教材
・「分数ものさし」の学習モデルと教材		正方形の色紙を折って，１／２や１／４，１／３ つくる活動から，１／７を活動へ拡張させる場面で，平行線の性質を活用しながら，１／２から１／10をつくる活動をさせる展開と教材
・「乗法九九」の規則性を発見する学習モデルと教材（スターパターンズ）		暗記することに偏りがちな「乗法九九」の学習について，乗法の仕組みや九九に内包するきまりについて，九九の構成や教材（スターパターンズ等）を用いて見つけ，それを活用して問題解決する学習モデルと教材
・「立方体・直方体の展開図」に活用する教材		プラスチックの正方形のパネル（自作）を組み合わせて，立方体の展開図が何通りできるのかを調べ，さらに，長方形のパネルを組み合わせて直方体の展開図をつくらせる教材
・「わかる算数科指導法　改訂版」 － 学習指導の実際 － （書籍：大学教科書用）	平成30年～予定	新学習指導要領（H29.3公示）に準拠した算数科の指導に実際について，特に指導の構想と指導案の書き方，板書の仕方等，具体的な指導についてまとめた。 ※第3章 第3節「学習指導の実際」※P.P154～167
＜生活科概論・教科教育法（生活）について＞ ・「おもちゃづくり」の教材		身の回りのものを活用した動くおもちゃづくりのための指導モデルとおもちゃの設計図の教材
＜特別活動指導法について＞ ・「学級活動」における模擬授業の教材		学級活動や朝の会，終わりの会で活用する掲示物や指導モデル

＜進路指導の理論と方法について＞ ・自分のキャリア発達についてのプレゼンテーションモデル ＜現代徳育論＞ ・祖父母・父母、兄弟・姉妹、偉業を成し遂げた人の読 み物教材 ・「座右の銘」のプレゼンテーションモデル ＜教職実践演習（初等）＞ ・いじめ対応マニュアル ・「新しい視点から見た教職入門」 － 小学校教員の仕事 - － 小学校の学級経営 - － 小学校の生徒指導 - （書籍：大学教科書用）	平成 30 年 4 月～（予定）	自分のキャリア発達や教育実習におけるパワーポイントを活用したプレゼンテーションモデル 大学生向きの読み物を集め、教材化したもの 学生にプレゼンテーションさせるために、教員が実際プレゼンテーションし、モデルを提示する いじめが起こった時、教員として、学校組織としてどのように対応するかをフローチャート式で表したもの 教職に関わる具体的な内容について，小学校の教員の仕事内容（教員の一日等）や小学校における学級経営（学級経営デザイン作成等），小学校における生徒指導（いじめや不登校への具体的な対応等）について，新学習指導要領（H29.3 公示）に準拠しながらまとめた。 ※第 1 章 第 2 節「小学校教員の仕事」 P.P154～167 ※第 2 章 第 2 節「小学校の学級経営」 P.P154～167 ※第 3 章 第 2 節「小学校の生徒指導」
3　教育上の能力に関する大学等の評価 ・学生の授業に関するアンケート結果から	平成 28 年 4 月 ～平成 29 年 3 月	設問 12「授業を終えて，あなたはこの授業に満足していますか」に対する回答で，「満足」と「やや満足」の合計 ・算数科概論・・・・・・・・・96% ・教科教育法　(算数)・・・・・94% ・生活科概論・・・・・・・・・94% ・教科教育法　(生活)・・・・・85% ・特別活動指導法・・・・・・・93%

		・進路指導の理論と方法・・・・90% ・現代徳育論・・・・・・・・・91%
	平成 29 年 4 月 ～平成 30 年 3 月	設問 12「授業を終えて，あなたはこの授業に満足していますか」に対する回答で，「満足」と「やや満足」の合計 ・算数科概論・・・・・・・・・94% ・教科教育法 （算数）・・・・・93% ・生活科概論・・・・・・・・・100% ・教科教育法 （生活）・・・・・95% ・特別活動指導法・・・・・・・96% ・進路指導の理論と方法・・・・92% ・現代徳育論・・・・・・・・・96%
4　実務の経験を有する者についての特記事項 ・京都女子大学　平成25年度公開講座 「京女の教科教育を考える」 － 各教科における言語教育の現状とその具現化に向けて － 5　その他 **5．その他** 1．大阪府公立小学校算数教育研究会における発表 2．大阪教育大学附属平野小学校における研究発表及び公開研究授業	平成25年6月 昭和 58 年 11 月 昭和 61 年 10 月 昭和 63 年 10 月 平成 2 年 11 月	京都女子大学　平成25年度　公開講座「京女の教科教育を考える　－各教科における言語教育の現状とその具現化に向けて－」というテーマのもと，算数科，国語科，理科，図工科における言語活動の実際とその方向性について，発表・研究協議・講演が行われた。 藤田英治は，「基調提案２：算数科教育のことばの教育について」と「テーマについてのパネル討論」を行った。 第4回大阪府公立小学校算数研究会　発表大会「速さの意味及び表し方の学習指導に関する考察」 第8回大阪府公立小学校算数研究会　発表大会「乗除法の意味を深める指導過程の研究」 第10回大阪府公立小学校算数研究会　発表大会 「数値化の考え，観点変更の考えを育成するための指導過程の研究」 平成２年度　大阪教育大学 附属平野小学校研究発表会　公開授業第２学年「きろくとせいり」

	平成 4 年 11 月	平成3･4年度　文部省小学校教育課程研究指定〈教育課程一般〉大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会　「自己を発揮し自ら変容する子ども―学習の個性化における教師の役割―」 公開授業　第１学年「おおきなかず」
	平成 5 年 11 月	平成5年度　大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会「自己を発揮し自ら変容する子ども―学習の個性化における評価のあり方―」「算数に感じる学習」における評価のあり方 公開授業　第4学年「面積」
	平成 6 年 10 月	平成6年度　大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会「自己を発揮し自ら変容する子ども―学習の個性化を支える評価―」 公開授業　第2学年「長方形と正方形を調べる」 分科会発表　「一人ひとりが算数に感じる学習における評価と指導」
	平成 7 年 10 月	平成7年度　大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会　「自己を発揮し自ら変容する子ども―学習の個性化を支える評価―」 公開授業　　第５学年「図形の面積」 分科会発表　「一人一人が算数に感じる学習を支える評価と指導」
	平成 8 年 10 月	平成8年度　大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会「豊かな人間性を育む教育課程の創造」 －教科の本質と総合活動のあり方を探る－ 公開授業 第6学年「立体の特徴，表面積や体積を調べる」
	平成 9 年 11 月	平成9年度　大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会「豊かな人間性を育む教育課程の創造」 －教科・道徳・総合的学習の関連を図ったカリキュラムの構想－ 公開授業　第1学年「かたちづくり」
３．大阪教育大学数学会 「算数・数学科教育研究発表会」における公開研究授業及び研究発表	平成２年６月	第66回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属平野小学校にて 公開授業　　第2学年「1000までのかず」
	平成３年６	第67回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校にて

	月	「思考力の育成をめざして（3）－実践を通して新学習指導要領をみる－」 研究発表「高学年における思考力の育成をめざして　－実践を通して新学習指導要領をみる－」
	平成４年６月	第68回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属池田小学校にて 「意欲を高める授業」 公開授業　第４学年「式と計算」
	平成５年６月	第69回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属平野小学校にて 「意欲を高める授業（2）－導入段階において－」　研究発表「低学年における意欲を高める授業の工夫－導入段階において－」
	平成６年６月	第70回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校にて 「意欲を高める授業の工夫（3)」 公開授業　　第５学年「合同な図形」
	平成７年６月	第71回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属池田小学校にて 「意欲を高める授業の工夫（4)」発表 「中学年における意欲を高める授業の工夫」
	平成８年６月	第72回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属平野小学校にて 「意欲を高める授業の工夫（4)」 公開授業　　第2学年「三角形と四角形」
	平成９年６月	第73回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校にて 「教材・教具を工夫した算数・数学の授業」 研究発表 「子どもの活動を生かす教具の工夫」(高学年)
４．新算数教育研究会における公開研究授業・研究発表	平成５年２月	平成5年度小学校算数教育研究全国大会 大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校にて 「子どもの可能性を高める算数の授業」 公開授業　第１学年「おおきなかず」
	平成９年２月	第 22 回　新算数教育研究会　箱根セミナー 第３分科会「算数科における表現とコミュニケーション」における研究発表「学習の個性化における表現力とコミュニケーション能力の育成」

	平成 25 年 6 月	第36回　新算数教育研究会　箱根セミナー 「豊かな心を育む問題解決－情意面を重視した「変わり方」の学習を通して数学的な考え方を育てる－」新算研堺支部　問題解決グループ 共同研究：河野笑香，前田健吾，角野兼太郎，藤田英治，平尾美季，濱田幸廣，戸ヶ崎晋平　他
５．その他の研究大会，教育委員会における研究発表， 指導助言，講演等	平成 6 年 2 月	第55回初等教育全国協議会（広島大学附属小学校） 「一人ひとりが算数に感じる学習　－問題解決活動の個性化をめざす指導の構想－」研究発表
	平成 8 年 11 月	平成7･8年度 高槻市教育委員会委嘱 教育課程研究校　高槻市立西大冠小学校 教育課程研究発表会 研究全体会において，公開研究授業についての講評と「一人一人が算数に感じる学習指導のあり方」をテーマに講演を行った。
	平成 9 年 11 月	平成8･9年度 大阪府教育委員会委嘱 教育課程研究校　高槻市立西大冠小学校 教育課程研究発表会 研究全体会において，公開研究授業についての講評と「豊かな人間性を育む算数学習のあり方」をテーマに講演を行った。
	平成 11 年 2 月	平成10年度「堺市福祉教育推進校学習交流会」（社会福祉法人　堺市社会福祉協議会）実践発表のコメンテーターとして指導助言を行った。
	平成 11 年 6 月	平成11年度 堺市初等教育研究会 算数部 全体会 講演『生きる力を育む算数学習』
	平 成 11 年 11月	平成10･11年度　文部省特色教育振興モデル事業　指定　研究発表大会　大阪信愛女学院中学校 分科会１「メディア機器を利用したプレゼンテーションの実践」指導助言
	平 成 12 年 10月	平成12年度 堺市初等教育研究会 算数部 全体会 教材研究・近数教検討会 講演『総合的な学習と算数の接点』
	平成13年5 月	平成13年度 堺市初等教育研究会 算数部 全体会

		講演『生きる力をはぐくむ算数教育』
	平成13年11月	第9回　大阪府小学校生活科教育研究協議会研究大会　泉北大会第4分科会　「生活科から総合的な学習へ」指導助言
	平成14年2月	第11回 大阪府教育研究所連盟 研究発表大会 講演　（大阪府教育センターにて） 「総合的な学習におけるカリキュラムと評価」
	平成14年5月	平成14年度 堺市初等教育研究会 算数部 全体会 講演『数学化に向けた指導と評価』
	平成16年11月	文部科学省委嘱 大阪府「学力向上フロンティア事業」指定，堺市教委育委員会「学校カリキュラム開発研究事業」指定 堺市立浜寺小学校　研究発表会 研究全体会における指導助言
	平成18年2月	平成18年度 大阪教育大学 附属池田小学校研究発表会 「総合的な学習と道徳カリキュラム」指導助言
	平成25年11月	第2回　教師力向上研究会　講演 「思考力・判断力・表現力を育む言語活動」 （芦屋大学大阪キャンパスにて）
	平成26年8月	教師力向上研究会　第40回フォーラム　指導助言「情意面を重視した問題解決的な学習における言語活動の活性化」（内田洋行大阪オフィスにて）
	平成27年8月	第10回　教師力向上研究会　講演 「算数科におけるアクティブラーニング」 （箕面自由学園にて）
	平成28年8月	堺市教育委員会・教育研究講演会　講演 「なぜ、学力が向上しないのか？…その原因は？ 子どもの情意面を重視した問題解決的な学習と言語活動の活性化　－算数科におけるアクティブラーニングの構想(1)－」 （堺市総合福祉会館ホールにて）
６．大学における講師及び講演　等	平成16年4月 ～平成19年3月	大阪教育大学　数学教育講座　算数科教育法実地指導講師 平成18年度　第2回　大阪教育大学教員養成ＧＰプロジェクト「パワーアップセミナー」
	平成18年1	総合的な学習の今後のあり方についての討議

	月	を行い，最後に「総合的な学習における教師の役割」と題して講演を行った。
	平成19年9月	平成19年度　第1回　大阪教育大学教員養成ＧＰプロジェクト「パワーアップセミナー」 パネリスト及び指導助言 大学院生が発表した論文の討議会において，パネリストとして参加し討議を深め，最後に，論文に対する今後の方向性について指導助言した。
	平成25年6月	京都女子大学　平成25年度　公開講座 「京女の教科教育を考える　－各教科における言語教育の現状とその具現化に向けて－」 基調提案２:算数科教育のことばの教育について（藤田英治）とパネル討論
	平成26年4月 ～ 平成27年3月	京都女子大学　入試問題作成委員・採点委員(数学)
	平成27年4月 ～ 平成29年3月	大阪教育大学（二部）「教職実践の研究Ⅰ」の授業における講師
	平成28年6月	京都女子大学 家政学部 キャリア開発Ⅱ における講義「職業観を育む」
	平成28年12月	ＮＰＯ和算問題教材化研究会　第３回総会 （大阪教育大学にて） 研究発表 ・「浪華二十八橋智彗渡の絵本化」 ・「摂南清水寺奉納算額三問」 についての指導助言
	平成９年11月	平成９年　第221回教職員等中央研修講座　終了
	平成28年5月	大阪府知事表彰（教育関係部門）

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 小学校教諭専修免許	平成16年3	

	月 31 日	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1．大阪教育大学附属平の小学校における教育活動 ・算数科主任	平成 2 年 4 月 ～平成 10 年 3 月	「一人ひとりが算数に感じる学習」を研究テーマに，学習の個性化における「教師の役割」と「評価と指導」について研究し，学校における研究発表会における算数科の分科会で，その理論について提案したり，公開研究授業を行ったりした。
・総合的な学習主任		「総合的な学習の時間」創設前の研究として，「共創的実践力の育成」を研究テーマとして，総合的な学習についての理論構成と具体的な活動について，経験カリキュラムやクロスカリキュラムの考えをもとに追究した。
・研究主任		教科及び総合的な学習の時間についての関連を図ったカリキュラムやその評価について追究し「総論」としてまとめ，学校における研究発表会の基調提案を行った。
・教育実習主任		教育実習主任として，教育実習生に対する全体のガイダンスを行ったり，模範授業を見せたりした。 教育実習中は，全教育実習生の職務態度や授業の様子について，参観したり，各担任から情報を収集したりし，実習生の問題・諸事に対応した。
2．堺市教育委員会・学校指導課・指導主事として ・算数・数学科指導担当	平成 10 年 4 月 ～平成 13 年 3 月	小・中学校の学校研修や堺市初等教育研究会・算数部，堺市中学校教育研究会・数学部会における指導助言や堺市をはじめ大阪府下の学校や大阪府公立小学校算数教育研究会や近畿算数・数学教育研究会，日本数学教育研究会等の研究発表会の研究支援や指導助言を行った。

・生活科・総合的な学習指導担当		小・中学校の学校研修や堺市初等教育研究会・生活・総合部における指導助言や堺市をはじめ大阪府下の学校や研究発表会の研究支援や指導助言を行った。
・特別活動指導担当		小学校の学校研修や堺市初等教育研究会・特別活動部における研究支援や指導助言を行った。
3．堺市教育委員会・教育センター・指導主事として	平成 13 年 4 月	
・算数・数学科指導担当	～平成 15 年 3 月	堺市教育センターにおける講座の開設や講演及び指導助言，小・中学校の学校研修や堺市初等教育研究会・算数部，堺市中学校教育研究会・数学部会における指導助言や堺市をはじめ大阪府下の学校や大阪府公立小学校算数教育研究会や近畿算数・数学教育研究会，日本数学教育研究会等の研究発表会の研究支援や指導助言を行った。
・生活科・総合的な学習指導担当		堺市教育センターにおける講座の開設や講演及び指導助言，小・中学校の学校研修や堺市初等教育研究会・生活・総合部における指導助言や堺市をはじめ大阪府下の学校や研究発表会の研究支援や指導助言を行った。
・初任者研修担当		堺市教育センターにおける初任者研修に対する実施計画案を作成し，ガイダンスをはじめ，算数・数学科，生活科，総合的な学習，学級経営，生徒指導等における講義を行った。
4．堺市教員採用試験における活動	平成 22 年 4 月	
・堺市教員採用試験面接官	～平成 28 年 3 月	堺市の教員採用試験において，個人面接，集団面接，模擬授業，場面指導等の面接・採点を行った。
5．教育団体における活動		
・大阪府校長会・理事	平成 23 年 4 月	大阪府校長会（堺市，大阪市，大阪府の各市町村の代表による団体）理事（堺市代表）として，

	～平成 25 年 3 月	大阪府教育委員会との対応（大阪府教委における事業改善と新規事業に対する話し合い）を行った。平成 25・26 年度の大阪府小学校校長会「共同研究発表会」の企画・研究支援及び運営を行った。
・堺市初等教育研究会・算数部 **堺市算数教育研究会・会長**	平成 23 年 4 月 ～平成 25 年 3 月	第 28 回　大阪府公立小学校算数教育研究会「ふさんけん」夏季研修会 堺市算数教育研究会・会長として，大会の研究内容及び全体指揮を行った。 第 32 回　大阪府公立小学校算数教育研究発表大会　堺大会 堺市算数教育研究会・会長として，主に大会の研究内容や公開授業についての計画と指導助言，算数部員の研究や運営についての全体指揮を行った。 第 3 回　「堺市思考力コンテスト」堺市算数教育研究会・会長として，問題作成の指導助言及び大会運営の立案・計画・実施を行った。 第 4 回　「堺市思考力コンテスト」堺市算数教育研究会・会長として，問題作成の指導助言及び大会運営の立案・計画・実施を行った。
・堺市初等教育研究会・算数部・代表部長	平成 25 年 4 月 ～平成 27 年 3 月	第29回　小学校算数教育研究全国大会（堺市立野田小学校）指導助言者、運営代表 初等教育研究会算数部・代表部長、新算研・堺支部長として，大会を計画し，実施にあたる算数部員の公開研究授業者の指導や仕事内容の計画を行った。 大会当日は，全体の指揮を行うとともに，分科会の指導助言も行った。 第 5 回　「堺市思考力コンテスト」堺市初等教育研究会算数部・代表部長として問題作成の指導助言及び大会運営の指揮を行った。 第 6 回　「堺市思考力コンテスト」堺市初等教育研究会算数部・代表部長として問題作成の指導助言及び大会運営の指揮を行った。

・堺市初等教育研究会・会長	平成 27 年 4 月 ～平成 28 年 3 月	第 6 回 「堺市初等教育研究全体会」に向けての立案・計画・実施に向けて， 全 17 部会（国語，社会，算数，理科，音楽，図画工作，家庭科，体育，生活科・総合的な学習，特別活動，道徳，外国語活動，学校図書館，特別支援，保健，食育，事務）の代表部長（理事）の意見を集約し，平成 27 年度は，図画工作，特別支援，事務部会の発表を中心に研究大会を実施した。 その研究の成果を「平成 27 年度　堺市初等教育研究会　研究のまとめ」として，全 17 部会の研究の成果と課題をまとめた。
・堺市校長会・副会長（校長会事業部長）	平成 27 年 4 月 ～平成 28 年 3 月	平成27年2月「政令指定四都市校長会研究発表会」における研究発表 学校経営について 「静謐な学校づくりをめざして」 －教職員の資質向上に向けた取り組み－ 第 35 回　大阪府公立小学校算数教育研究会「ふさんけん」夏季研修会
・大阪府公立小学校算数教育研究会・副会長	平成 27 年 4 月 ～平成 28 年 3 月	大阪府公立小学校算数教育研究会・副会長として，主に大会の計画・運営を行った。
・大阪府公立小学校算数教育研究会・参与	平成 28 年 4 月～	大阪府公立小学校算数教育研究会からの参与として委嘱を受け、本研究団体の研究推進のための取り組みを行っている。 （現在に至る）
＜研究発表，講演，指導助言，講義等＞		
1．大阪府公立小学校算数教育研究会における発表	昭和 58 年 11 月	第4回大阪府公立小学校算数研究会　発表大会「速さの意味及び表し方の学習指導に関する考察」
	昭和 61 年 10 月	第8回大阪府公立小学校算数研究会　発表大会「乗除法の意味を深める指導過程の研究」
	昭和 63 年 10 月	第10回大阪府公立小学校算数研究会　発表大

		会
２．大阪教育大学附属平野小学校における研究発表及び公開研究授業		「数値化の考え，観点変更の考えを育成するための指導過程の研究」
	平成 2 年 11 月	平成 2 年度　大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会　公開授業第 2 学年「きろくとせいり」
	平成 4 年 11 月	平成3･4年度　文部省小学校教育課程研究指定 〈教育課程一般〉 大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会　「自己を発揮し自ら変容する子ども―学習の個性化における教師の役割―」 公開授業　第 1 学年「おおきなかず」
	平成 5 年 11 月	平成5年度　大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会「自己を発揮し自ら変容する子ども―学習の個性化における評価のあり方―」「算数に感じる学習」における評価のあり方 公開授業　第4学年「面積」
	平成 6 年 10 月	平成6年度　大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会「自己を発揮し自ら変容する子ども―学習の個性化を支える評価―」 公開授業　第2学年「長方形と正方形を調べる」 分科会発表　「一人ひとりが算数に感じる学習における評価と指導」
	平成 7 年 10 月	平成7年度　大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会　「自己を発揮し自ら変容する子ども―学習の個性化を支える評価―」 公開授業　第５学年「図形の面積」 分科会発表　「一人一人が算数に感じる学習を支える評価と指導」
	平成 8 年 10 月	平成8年度　大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会「豊かな人間性を育む教育課程の創造」 －教科の本質と総合活動のあり方を探る－ 公開授業 第6学年「立体の特徴，表面積や体積を調べる」
３．大阪教育大学数学会 「算数・数学科教育研究発表会」における公開研究授業及び研究発表	平成 9 年 11 月	平成9年度　大阪教育大学 附属平野小学校 研究発表会「豊かな人間性を育む教育課程の創造」 －教科・道徳・総合的学習の関連を図ったカリキュラムの構想－

		公開授業　第1学年「かたちづくり」
	平成２年６月	第66回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属平野小学校にて 公開授業　　第2学年「1000までのかず」
	平成３年６月	第67回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校にて 「思考力の育成をめざして（3）－実践を通して新学習指導要領をみる－」 研究発表「高学年における思考力の育成をめざして　－実践を通して新学習指導要領をみる－」
	平成４年６月	第68回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属池田小学校にて 「意欲を高める授業」 公開授業　第４学年「式と計算」
	平成５年６月	第69回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属平野小学校にて 「意欲を高める授業（2）－導入段階において－」　研究発表「低学年における意欲を高める授業の工夫－導入段階において－」
	平成６年６月	第70回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校にて 「意欲を高める授業の工夫（3)」 公開授業　　第５学年「合同な図形」
	平成７年６月	第71回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属池田小学校にて 「意欲を高める授業の工夫（4)」発表 「中学年における意欲を高める授業の工夫」
	平成８年６月	第72回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属平野小学校にて 「意欲を高める授業の工夫（4)」 公開授業　　第2学年「三角形と四角形」
	平成９年６月	第73回　算数・数学科教育研究発表会 大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校にて 「教材・教具を工夫した算数・数学の授業」 研究発表 「子どもの活動を生かす教具の工夫」(高学年)

４．新算数教育研究会における公開研究授業・研究発表	平成５年２月	平成5年度小学校算数教育研究全国大会 大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校にて 「子どもの可能性を高める算数の授業」 公開授業　第１学年「おおきなかず」
	平成９年２月	第 22 回　新算数教育研究会　箱根セミナー 第３分科会「算数科における表現とコミュニケーション」における研究発表 「学習の個性化における表現力とコミュニケーション能力の育成」をテーマに、数学的な表現とコミュニケーションと子どものメタ認知との関係、言語活動の活性化のための理論と具体的な指導方法について、藤田が個人発表した。
	平成 23 年 12 月	第36回　新算数教育研究会　箱根セミナー 「豊かな心を育む問題解決－情意面を重視した「変わり方」の学習を通して数学的な考え方を育てる－」新算研堺支部　問題解決グループ 共同研究：平尾美季，濱田幸廣，河野笑香，前田健吾，角野兼太郎，戸ヶ崎晋平，藤田英治　他
	平成 27 年 12 月	第40回　新算数教育研究会　箱根セミナー 「豊かな心を育む問題解決－情意面を重視した「変わり方」の学習を通して数学的な考え方を育てる－」新算研堺支部　問題解決グループ 共同研究：稲本一彦，河野笑香，前田健吾，角野兼太郎，平尾美季，濱田幸廣，藤田英治　他
５．その他の研究大会，教育委員会等における研究発表，指導助言，講演等	平成６年２月	第55回初等教育全国協議会（広島大学附属小学校） 「一人ひとりが算数に感じる学習　－問題解決活動の個性化をめざす指導の構想－」研究発表
	平成 8 年 11 月	平成7･8年度 高槻市教育委員会委嘱 教育課程研究校　高槻市立西大冠小学校 教育課程研究発表会 研究全体会において，公開研究授業についての講評と「一人一人が算数に感じる学習指導のあり方」をテーマに講演を行った。
	平成 9 年 11 月	平成8･9年度 大阪府教育委員会委嘱 教育課程研究校　高槻市立西大冠小学校 教育課程研究発表会 研究全体会において，公開研究授業についての

		講評と「豊かな人間性を育む算数学習のあり方」をテーマに講演を行った。
	平成 11 年 2 月	平成10年度「堺市福祉教育推進校学習交流会」（社会福祉法人　堺市社会福祉協議会）実践発表のコメンテーターとして指導助言を行った。
	平成 11 年 6 月	平成11年度 堺市初等教育研究会 算数部 全体会 講演『生きる力を育む算数学習』
	平 成 11 年 11月	平成10･11年度　文部省特色教育振興モデル事業　指定　研究発表大会　大阪信愛女学院中学校 分科会１「メディア機器を利用したプレゼンテーションの実践」指導助言
	平 成 12 年 10月	平成12年度 堺市初等教育研究会 算数部 全体会 教材研究・近数教検討会 講演『総合的な学習と算数の接点』
	平成13年5月	平成13年度 堺市初等教育研究会 算数部 全体会 講演『生きる力をはぐくむ算数教育』
	平 成 13 年 11月	第9回　大阪府小学校生活科教育研究協議会 研究大会　泉北大会第4分科会　「生活科から総合的な学習へ」指導助言
	平成14年2月	第11回 大阪府教育研究所連盟 研究発表大会 講演　（大阪府教育センターにて） 「総合的な学習におけるカリキュラムと評価」
	平成14年5月	平成14年度 堺市初等教育研究会 算数部 全体会 講演『数学化に向けた指導と評価』
	平 成 16 年 11月	文部科学省委嘱 大阪府「学力向上フロンティア事業」指定，堺市教委育委員会「学校カリキュラム開発研究事業」指定　堺市立浜寺小学校 研究発表会・研究全体会における指導助言
	平成18年2月	平成18年度 大阪教育大学 附属池田小学校 研究発表会 「総合的な学習と道徳カリキュラム」指導助言
	平 成 25 年 11月	第2回　教師力向上研究会　　講演 「思考力・判断力・表現力を育む言語活動」
≪太成学院大学、勤務後≫		（芦屋大学大阪キャンパスにて） 教師力向上研究会　第40回フォーラム　指導

	平成26年8月	助言「情意面を重視した問題解決的な学習における言語活動の活性化」（内田洋行大阪オフィスにて）
	平成27年8月	第10回　教師力向上研究会　講演 「算数科におけるアクティブラーニング」 （箕面自由学園にて）
	平成28年8月	堺市教育委員会・教育研究講演会　講演 「なぜ，学力が向上しないのか？…その原因は？ 子どもの情意面を重視した問題解決的な学習と言語活動の活性化　－算数科におけるアクティブラーニングの構想(1)－」 （堺市総合福祉会館ホールにて）
	平成29年1月	堺市初等教育研究会　算数部　１月部会 ５年「円と正多角形」についての公開研究授業と協議会における指導助言を行った。 ※「新しい算数教育：3月号」に指導事例と協議会の全容を掲載するために，新算数教育研究会との共催で行われた。
	平成28年12月	ＮＰＯ和算問題教材化研究会　第３回総会 （大阪教育大学にて） 研究発表 ・「浪華二十八橋智彗渡の絵本化」 ・「摂南清水寺奉納算額三問」 についての指導助言
	平成29年6月	「夢ナビライブ」において、「算数嫌いはよい先生！九九の不思議に迫る！」をテーマに、教員に興味がある生徒を対象に公開授業を行い、その後、希望のあった高校生に対するガイダンスや相談に応じた。 （会場：インテック大阪にて）
６．他大学における講師及び講演　等	平成29年8月	堺市教育委員会・教育研究講演会　講演 『「深い学び」のある算数学習　－問題解決的な学習における「数学的な見方・考え方」の深まりとその評価』 （堺市西文化会館ホールにて）

	平成29年6月	高大連携として、大阪府立美原高校で開催された「職業人講話」で、教員の仕事内容、教員になるための進路等についての講話を行った。
		大阪教育大学　数学教育講座　算数科教育法実地指導講師
	平成16年4月～平成19年3月	平成18年度　第2回　大阪教育大学教員養成ＧＰプロジェクト「パワーアップセミナー」総合的な学習の今後のあり方についての討議を行い，最後に「総合的な学習における教師の役割」と題して講演を行った。
	平成18年1月	平成19年度　第1回　大阪教育大学教員養成ＧＰプロジェクト「パワーアップセミナー」パネリスト及び指導助言
	平成19年9月	大学院生が発表した論文の討議会において，パネリストとして参加し討議を深め，最後に，論文に対する今後の方向性について指導助言した。
		京都女子大学　平成25年度　公開講座「京女の教科教育を考える　－各教科における言語教育の現状とその具現化に向けて－」
	平成25年6月	基調提案２：算数科教育のことばの教育について（藤田英治）とパネル討論
≪太成学院大学、勤務後≫		京都女子大学　入試問題作成委員・採点委員(数学)
	平成26年4月～平成27年3月	大阪教育大学（夜間学部）「教職実践の研究Ⅰ」の授業における講師
	平成27年4月～平成28年3月	大阪教育大学（夜間学部）「教職実践の研究Ⅰ」の授業における講師として、教職に関することや小学校の実際の授業について、前期１回、後期１回講義を行った。（天王寺キャンパス）
		京都女子大学
	平成28年4月～平成29年3月	家政学部 「キャリア開発Ⅱ」の授業において、「職業観を育む・・・先生って、素晴らしい仕事」をテーマに、教員の仕事内容や教員になるための心構えについて講義を行った。
		大阪教育大学　算数科教育法　非常勤講師として、通年（前期・後期）講義を行っている。（柏原キャンパス）
	平成28年6	

	月	現在に至る
		大阪教育大学（夜間学部）　算数科教育法　教員養成実地指導講師として、前期 2 回、後期 2 回講義を行っている。（天王寺キャンパス）
		現在に至る
	平成29年4月～	「大阪教育大学 大学院 実践学校教育修了研究者による数学教育の会」における講演
６．学校等における講師及び講演　等 ≪太成学院大学、勤務後≫		算数について、今後、総合的な学習の時間をはじめ他教科との関連を図ったカリキュラムレベルの研究の必要性を述べた。さらに、「分数÷分数」等、指導困難単元の教材開発とアクティブラーニングとの関係について述べた。
	平成 29 年 4 月～	
		立命館大学　教職実践演習
		「キャリア教育」として、「先生って、素晴らしい仕事」をテーマに、教員の学校における仕事内容や保護者や児童との関係、教員になるために必要なこと等について講義を行った。
	平成 29 年 12月	
		堺市立福泉東小学校　校内研修研究授業指導助言
		６年「円の面積」の授業参観と研究協議会における指導助言を行った。
	平成 29 年 12月	堺市立浅香山小学校　校内研修研究授業指導助言
		４年「面積」の授業参観と研究協議会における指導助言を行った。
	平成28年6月	堺市立槇塚台小学校　校内研修研究授業指導助言
		１年「くらべかた（長さ，かさ，広さ）」の授業参観と研究協議会における指導助言を行った。
	平成28年9月	堺市立槇塚台小学校　校内研修研究授業指導助言
		４年「垂直・平行と四角形」の授業参観と研究協議会における指導助言を行った。

	平成28年10月	堺市立八上小学校　校内研修　講演 「算数科の学力向上に向けた学習指導のあり方」をテーマに、指導内容と指導方法、児童理解があっての学力向上で、特に、指導後の懸賞の重要性について講演した。
	平成28年11月	堺市立福田小学校　校内研修　講演 「問題解決的な学習や言語活動の活性化」のための理論と指導方法について、具体的な事例を実演しながら講演した。
	平成29年6月	堺市立八上小学校　校内研修　講演 「算数科の学力向上に向けた学習指導のあり方2」 をテーマに、深い学びに至る学習指導のあり方について、具体的な事例を参加体験型で講演した。
	平成29年6月	堺市立深阪小学校　校内研修　講演 「アクティブラーニング」に向けての教材研究のあり方と具体的な指導方法について、ワークショップ型での講演をした。
	平成29年7月	堺市立安井小学校　校内研修　講演 「学力向上と深い学び」について、教師の指導内容の理解と系統性の重要性について、具体的な実践を分析しながら講演した。
	平成29年8月	堺市立槇塚台小学校　校内研修研究授業指導助言 2年「たし算・ひき算」の授業参観と研究協議会における指導助言を行った。
	平成29年8月	堺市立浅香山小学校　校内研修研究授業指導助言 5年「三角形や四角形の角」の授業参観と研究協議会における指導助言を行った。
	平成29年8月	堺市立福田小学校　　校内研修研究授業指導助言

		3 年「分数」の授業参観と研究協議会における指導助言を行った。
	平成29年9月	堺市立槇塚台小学校　校内研修研究授業指導助言 3 年「三角形」の授業参観と研究協議会における指導助言を行った。
	平成29年9月	堺市立槇塚台小学校　校内研修研究授業指導助言 5 年「割合」の授業参観と研究協議会における指導助言を行った。
	平成 29 年 10月	堺市立浅香山小学校　校内研修研究授業指導助言 1 年「ひき算」の授業参観と研究協議会における指導助言を行った。
	平成 29 年 11月	堺市立福田小学校　校内研修　講演 今年度の研究のまとめと来年度に向けての研究の方向性についての講演を行った。
	平成 29 年 11月	
	平成 29 年 11月	
	平成30年2月	
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・	発行又は	発行所，発表雑誌等	概　　要

	共著の別	発表の年月	又は発表学会等の名称	
（著書） （著　書） 1．「子どもの内面に豊かな面積概念を構築するための学習過程の創造」 2．「新学習指導要領全面実施直前の教科指導」 3．「新学習指導要領全面実施直前の教科指導」 4．「新学習指導要領全面実施直前の教科指導」 5．「新学習指導要領全面実施直前の教科指導」 6．「新学習指導要領全面実施直前の教科指導」	共著※は単独 共著※は単独 共著※は単独 共著※は単独 共著※は単独 共著※は単独	平成2年7月 平成3年6月 平成3年9月 平成3年11月 平成4年3月 平成4年5月	明治図書 『算数教育 7月号 』 ※P.P40～45 小学館 『小五教育技術 6月号』 ※P.P 96～97 小学館 『小五教育技術 9月号』 ※P.P96～97 小学館 『小五教育技術 11月号』 ※P.P96～97 小学館 『小五教育技術 3月号』 ※P.P96～97 小学館 『小五教育技術 5月号増刊』 ※右項に記入	「たて×よこ」の公式を暗記し，面積を求めるのではなく，子ども自らが単位をつくり，それに名前をつけ，そのいくつ分で求積する学習 「小数のかけ算・わり算」：かけて答えが小さくなったり，わって答えが大きくなったりする場合がある小数のかけ算の理解を形式不易の考え等を活用し，深めていく学習の工夫。 「整数の性質」：整数を偶数や奇数，倍数という見方でとらえ，最小公倍数や最大公約数のよさを感じる学習の工夫 「単位量あたりの大きさ」：異種の２量のとらえ方を具体的な問題場面で学習し，さらに，単位量あたりの考え方を用い，速さの求め方を考える学習の工夫 「問題解決」：関数的な考えを用いた問題解決のための導入教材の工夫と指導の展開 新学習指導要領実施に向けた問題解決のための新たな教材

				の工夫と指導の展開 ※小数のかけ算　P.P70～71を執筆 ※整数の性質　　P.P76～77を執筆 ※単位量あたりの大きさ　P.P80～81を執筆 ※問題解決　　P.P88～89を執筆
7．「算数科・理科の学習カード」	共著※は単独	平成 4 年 5 月	小学館 『小四教育技術 5 月号特別編集』 ※P.P4～17	４年における算数科の学習で活用できる思考力を育成するための問題を作成した。
8．『算数授業をこう変えよう（3･4 年)』（書籍）	共著※は単独	平成 4 年 8 月	東洋館出版社 『算数授業をこう変えよう（3・4 年)』 ※P.P126～133	平行四辺形の性質を算数的な活動を通して見つける指導の工夫と子どものメタ認知の様相を追究した。
9．「学習の個性化における教師の役割」 ―自己を発揮し自ら変容する子どもをめざして― （書籍）	共著※は単独	平成 4 年 11 月	東洋館出版社 大阪教育大学教育学部付属平野小学校著 ※右項に記入	学習を個性化するための分有と共有の理論と複数並行学習の形態を ①低学年・・・解決方法を分有する ②中学年・・・課題を分有する ③高学年・・・学習過程を分有する の３段階に分け，その学習展開における教材開発と指導のあり方を追究した。 ※第４章　算数科（藤田英治，井上正人，廣瀬藤夫の共著） 一人ひとりが算数に感じる指導のあり方 ※P.P６５～８６を執筆
10．小学校算数教育研究会・全国大会	共著※は単独	平成 6 年 5 月	東洋館出版社 新算数教育研究会編集	小学校算数教育研究会，全国大会における藤田が行った公開授

における公開究授業の記録 第1学年 「おおきいかず」			『新しい算数研究　5月号』 東洋館出版社 ※P. P132～136	業１年「おおきい　かず」(一人ひとりの数え方で追究し，10のまとまりをつくることのよさに気づく場の構成）についての授業展開や指導の工夫，指導後の研究協議会について考察し，まとめた。
11. 「子どもが伸びる教科指導の展開と資料」	共著※は単独	平成 7 年 5 月	小学館 『小一教育技術 5 月号』 ※P. P124～127	「いくつといくつ」:玉入れボックスを用いた数の合成・分解の指導展開のあり方とその指導に活用する資料について述べた。
12. 「子どもが伸びる教科指導の展開と資料」	共著※は単独	平成 7 年 7 月	小学館 『小一教育技術 7月号』 ※P. P116～119	「２０までのかず」:旗立てゲームで数直線をつくり，数の大小や系列を学ぶ教材と指導の工夫及びその指導に活用する資料について述べた。
13. 研究事例：「工夫することが生かされる」学習をめざして	共著※は単独	平成 7 年 7 月	東洋館出版社 新算数教育研究会編集 『新しい算数研究　7月号』 ※P. P25～30	子どもが自分の考えやアイデアを生かし,試行錯誤しながら問題解決していくための教材とその展開を ①「工夫したい気持ちがもてる学習」②「工夫が生かされる学習」③「工夫したことに満足がもてる学習」④「さらなる工夫を生む学習」の４つの視点で追究した。
14. 「子どもが伸びる教科指導の展開と資料」	共著※は単独	平成 7 年 10 月	小学館 『小一教育技術 10 月号』 ※P. P116～119	「くりあがりのあるたしざん」:多くの子どもたちが戸惑いを示す繰り上がりのたし算を１０の合成・分解を表現する方法で解決していく指導の展開とその資料について述べた。
15. 「学習の個性化を	共著	平成 7 年 10	東洋館出版社	学習を個性化した場合の個々の

支える評価と指導」 ―自己を発揮し自ら変容する子どもをめざして― （書籍）		月	大阪教育大学教育学部付属平野小学校著 ※右項に記す	子どもの評価をどう進めていくのかについて，観点別評価を柱にしながら，「教師による評価」（１時点［発揮］での評価と２時点での評価［変容］）と「子どもによる評価」（１時点［発揮］での評価と２時点での評価［変容］）のマトリクスをつくり，その具体的な評価方法についても追究した。なお，子どもによる評価（自己評価）については，メタ認知的な様相を明らかにしようと追究した ※第４章　算数科（藤田英治，井上正人，當麻俊和の共著） 一人一人が算数に感じる学習を支える評価と指導　※P.P６５～８６
16. 「子どもが伸びる教科指導の展開と資料」	共著※は単独	平成 7 年 12 月	小学館 『小一教育技術 12 月号』 ※P. P116～119	「かたちづくり」:パズルを利用した形づくりで，図形の構成を学ぶ学習過程とその資料について述べた。
17. 「自己を見つめ直す子どもの育成を目指して」（自己評価能力の新たなとらえとその育成方法について）	共著※は単独	平成 8 年 1 月	明治図書 『算数教育１月号』 ※P. P50～53	自己評価能力の育成をメタ認知的な技能の高まりととらえ，ノート指導の工夫等具体的な指導法を追究した。 特集：算数を窓口にどんな子供を育てたいか
18. 「子どもが伸びる教科指導の展開と資料」	共著※は単独	平成 8 年 2 月	小学館 『小一教育技術 ２月号』 ※P. P116～119	「いろいろなもんだい」:買い物ゲーム等を用いたたし算・ひき算を構成していく学習の展開とその資料について述べた。

19.「子どもがいきる教科指導学習活動の支援とファックス資料」	共著※は単独	平成 8 年 5 月	小学館 『小一教育技術 5月　増刊号』 ※右項に記す	子どもの考えやアイデアが生きる算数科の教材や指導の工夫と学習展開に活用できる資料について述べた。 ※いろいろなもんだい　P.P188～189 を執筆 ※かたちづくり　P.P194～197 を執筆 ※くりあがりのあるたしざん　P.P202～205 を執筆 ※２０までのかず　P.P212～215 を執筆 ※いくつといくつ　P.P220～223 を執筆
20.「九九は暗記するもの？それとも・・創るもの，発見するもの」	共著※は単独	平成 9 年 5 月	明治図書 『算数教育　5月号』 ※P.P43～46	「暗記してよし」と考えがちな九九を子ども自らがつくり，九九に内包するきまりを見つけていく教材と指導展開の工夫について述べた。 特集：鍛錬を超え子供と創る学習「数と計算」
21.「新算数教育研究会 第22回セミナー集録」	共著※は単独	平成 10 年 3 月	東洋館出版社 『新しい算数研究　3月号』 ※P.P154～157	「学習の個性化における表現力とコミュニケーション能力の育成」:子どもの表現やコミュニケーションを活性化するための指導方法の工夫について述べた。
22.「算数科における授業研究の進め方と研究論文の書き方」（書籍）	共著※は単独	平成 11 年 3 月	東洋館出版社 ※P.P178～183	研究主題に迫るための研究協議の進め方を段階に応じて論述した。 第 3 章授業を通した研究をどう進めるか ４.研究協議会をどう進め，研究主題に迫るか（運営の仕方）
23.「算数的活動」をど	共著※は	平成 11 年 4	明治図書	算数的な活動を，①子どもの関

うと らえるか	単独	月	『楽しい算数の授業 4月号』 特集１：生きる力を育む算数的活動 ※P. P10～12	心を高める算数的活動，②子どもの思考力を高める算数的活動，③総合的な学習に生きて働く算数的活動に分け，展開を述べた。
24. 「 生きる力をはぐくむ 算数授業の創造」 －個性化学習における数学的な表現力とコミュニケーション能力の育成－ （書籍）	共著※は単独	平成 11 年 9 月	ニチブン 第６巻 『第４章　数学的なコミュニケーションへの態度形成と学級づくり』 ※P. P119～128	数学的な表現・コミュニケーションが育ちにくい原因を解明し，子どもの内面にある情意や思考過程を表出させ対話の組織化を図るための指導方法についてメタ認知的な手法を用いて追究した。
25. 「移行措置への対応のポイント」	共著※は単独	平成 12 年 5 月	東洋館出版社 『新しい算数研究　5月号』 ※P. P28～31	移行期における算数学習の進め方における第２学年についての解説や留意点をまとめた。 また，コンピュータを活用した図形学習の展開についても実践をまとめた。
26. 「個に応じた指導に生かすための評価」 ―教科と総合的な学習の時間の評価と指導のあり方―	共著※は単独	平成 15 年 7 月	大阪府公立中学校教育研究会『中学の広場１７６号』 特集：教育課程に対応した評価のあり方 ※P. P13～18	特集:「教育課程に対応した評価のあり方」の指導理論編で，特に教科と総合的な学習の時間における評価と指導のあり方について,「結果の評価から過程の評価」,「指導の結果の評価から指導に生かす評価」について述べた。
27. 「今月の指導コメント： ２年　たし算とひき算の筆算」	共著※は単独	平成 25 年 6 月	東洋館出版社 『新しい算数研究　6月号』 ※P. 51	今月の指導：２年「たし算とひき算の筆算」の実践報告に対する指導助言と今後の指導の方向性について指導助言としてまと

				めた。
28. 「今月の指導コメント： ４年　資料の整理」	共著※は単独	平成25年12月	東洋館出版社 『新しい算数研究　12月号』 ※P.61	今月の指導：４年「しりょうと整理」の実践報告に対する指導助言と今後の指導の方向性について指導助言としてまとめた。
29. 平成２５年度第２９回小学校算数教育全国大会堺大会集録公開研究授業，第１年「広さくらべをしよう」の指導助言の内容	共著※は単独	平成26年2月	東洋館出版社 『新しい算数研究　2月号』 ※P.P182～183	平成25年度　第29回小学校算数教育全国大会堺大会集録公開研究授業，第１学年「広さくらべをしよう」の指導助言の内容についてまとめた。
30. 「今月の指導コメント： ２年　かけ算(2)」	共著※は単独	平成26年12月	東洋館出版社 『新しい算数研究　12月号』 ※P.51	今月の指導：２年「かけ算（２）」の実践報告に対する指導助言と今後の指導の方向性について指導助言としてまとめた。
31. 「情意面を重視した問題解決的な学習と言語活動の活性化」	共著※は単独	平成26年7月	(株)ERP 『教育PRO No.16』 フロンティア ※P.P24～25	情意面を重視した問題解決的な学習と言語活動の活性化について，３年「分数のたし算」の実践事例をもとに，子どもへの問題意識のもたせ方と言語活動の活性化の関係について，追究した。
32. 「情意面を重視した問題解決的な学習における言語活動の活性化」 ―堺市立新湊小学校　宮岸洋	共著※は単独	平成26年9月	(株)ERP 『教育PRO No.21』 特集号 ※P.P16～17	特集：「教師力向上研究会（代表：梶田叡一　奈良学園大学学長）第６回フォーラムにおける実践集（算数科と理科を中心に，問題解決，思考力の育成，言語活動の活性化をキーワードに行った研究発表のまとめ）その中

先生の実践をもとに―				で，藤田は，算数科における指導助言と６年「分数のわり算」についての指導のあり方について述べた。
33．「情意面を重視した問題解決的な学習と言語活動の活性化」（書籍）	共著※は単独	平成 27 年 2 月	金子書房 『実践的思考力・課題解決力を鍛える』 ＰＩＳＡ型学力をどう育てるか 梶田叡一責任編集（人間教育研究協議会編） ※P. P98～110	「実践的思考力・課題解決力を鍛える」という研究テーマのもと，算数科における子どもの情意的な側面を生かした問題解決活動のあり方と言語活動の活性化について，指導難教材と言われている 6 年「分数のわり算」を事例に述べた。 その指導のためには，2 年から学習がはじまる分数の系統性，わり算（等分除）や小数，計算のきまりや数直線や液量図の用い方に至るまで，様々な単元内容が関わっている。それらを関係付けた指導のあり方について追究した。
34．「今月の指導コメント: １年 あわせていくつ」	共著※は単独	平成 27 年 6 月	東洋館出版社 『新しい算数研究　5 月号』 ※P. 98	１年「１位数＋１位数のたし算」における指導事例についての指導内容の考察と指導助言の内容をコメントとしてまとめた。
35．言語活動ＮＯＷ「算数科における心のコミュニケーションを育む言語活動のあり方」	共著※は単独	平成 27 年 10 月	東洋館出版社 『新しい算数研究　10 月号』 ※P. P98～99	数学的な考え方や数学的な表現・コミュニケーション力を育成するための言語活動の活性化のあり方について，話し方や聞き方のモデルを提示し，その指導を通して，筋道立てて発表することのよさや友達の考えを聞くことのよさなどを感じながら，心のコミュニケーションができるようにする過程を述べ

				た。
36. 今月の指導・協議会: ５年「円と正多角形」 ≪太成学院大学、勤務後≫	共著※は単独	平成 28 年 2 月	東洋館出版社 『新しい算数研究　2 月号』 ※P. 69	堺市初等教育研究会，算数部，1 月部会における 5 年「円と正多角形」の公開研究授業と協議会での指導助言の内容をまとめたものである。 ※開催は，新算数教育研究会との共催で行われた。
37. 今月の指導コメント: ６年「分数のかけ算」	共著※は単独	平成 28 年 6 月	東洋館出版社 『新しい算数研究　6 月号』 ※P. 69	６年「分数のかけ算」における指導事例についての指導内容の考察と指導助言の内容をコメントとしてまとめた。
38. 「今月の指導コメント: ５年 割合」	共著※は単独	平成 29 年 2 月	東洋館出版社 『新しい算数研究 2 月号』 ※P. 61	５年「割合」における指導事例についての指導内容の考察と指導助言の内容をコメントとしてまとめた。
39.「アクティブラーニングを位置づけた小学校算数科の授業プラン」 （書籍）	共著※は単独	平成 29 年 3 月	明治図書 『アクティブラーニングを位置付づけた小学校算数科の授業プラン』 ※右項（概要）に記す	アクティブラーニングの推進に向けての指導事例について，問題解決的な学習や言語活動の活性化について，主体的，対話的で深い学びに至る低・中・高学年の指導過程をまとめた。 ※1 年「かたちづくり」（P20～P25） ※2 年「長方形と正方形」（P38～P43） ※3 年「重さの単位とはかり方」（P56～P61）
40.「今月の指導:研究協議における指導助言	共著※は単独	平成 29 年 4 月	東洋館出版社 『新しい算数研究 4 月号』	今月の指導：５年「正多角形と円」の公開研究授業の研究協議における指導助言の内容をまとめた。

5年 正多角形と円」			※P.63	
41.「今月の指導コメント:5年 割合」	共著※は単独	平成 29 年 2 月	東洋館出版社 『新しい算数研究 2 月号』 ※P.61	今月の指導：5 年「割合」の実践報告に対する指導助言と今後の指導の方向性についてコメントとしてまとめた。
42.「算数科 深い学びを実現させる理論と実践」 －対話的な学びのための話 し合い活動において， 協働的に算数を創る方法 － （書籍）	共著※は単独	平成29年12月	東洋館出版社 『算数科 深い学びを実現させる理論と実践』 ※P.P130～137	アクティブラーニングにおける深い学びについて，4 年「変わり方」の指導について，問題解決的な学習における対話的な学びを深めるための対話の組織化について，指導のあり方をまとめた。
43.「今月の指導コメント：6 年 メートル法（いろいろな単位)」	共著※は単独	平成 30 年 3 月	東洋館出版社 『新しい算数研究 3 月号』 ※P.61	今月の指導：6年「メートル法（いろいろな単位)」の実践報告に対する指導助言と今後の指導の方向性についてコメントとしてまとめた。
44.「わかる算数科指導法 改訂版」 －学習指導の実際 － （書籍：大学教科書用）	共著※は単独	平成 30 年 3 月 発刊予定	東洋館出版社 『わかる算数科指導法改訂版』 ※右項（概要）に記す (株)大学教育出版 『新しい視点から見た教職入門』	新学習指導要領（H29.3 公示）に準拠した算数科の指導に実際について，特に指導の構想と指導案の書き方，板書の仕方等，具体的な指導についてまとめた。 ※第 3 章 第 3 節「学習指導の実際」※P.P154～167 教職に関わる具体的な内容について，小学校の教員の仕事内容（教員の一日等）や小学校における学級経営（学級経営デザイン作成等)，小学校における生徒

45.「新しい視点から見た教職入門」 －小学校教員の仕事－ －小学校の学級経営－ －小学校の生徒指導－ （書籍：大学教科書用）	共著※は単独	平成 30 年 3 月 発刊予定	※右項（概要）に記す	指導（いじめや不登校への具体的な対応等）について，新学習指導要領（H29.3 公示）に準拠しながらまとめた。 ※第 1 章 第 2 節「小学校教員の仕事」 P.P154～167 ※第 2 章 第 2 節「小学校の学級経営」 P.P154～167 ※第 3 章 第 2 節「小学校の生徒指導」 P.P154～167
46.「今月の指導コメント:3年 わり算」	共著※は単独	平成 30 年 4 月 発刊予定	東洋館出版社 『新しい算数研究 4 月号』 ※P.61	今月の指導：３年「わり算」の実践報告に対する指導助言と今後の指導の方向性についてコメントとしてまとめた。
（学術論文） １．子どもの主体的解決力の育成を目指す乗法(×純小数)の指導	共同	昭和62年8月	『日本数学教育学会誌』 第69巻　第8号	共同研究：武田政幸，辻本元男，藤田英治 藤田千津子，彦坂栄克 「かければ増える」という子どもの意識から，乗法(×純小数)についての子どもの理解は難しい。そこで，形式不易の考え方や場面把握を重視した「小数のかけ算」の理解を深める指導方法を追究した。
２．統計的な見方や考え方を伸ばす指導の研究－柱状グラフの作成を　通して－	共同	昭和62年8月	『日本数学教育学会誌』 第69巻 第10号	共同研究：小南亮，中野澄子，藤田英治，白石祥次，川坂雄行，奥川純子 子ども自らが棒グラフをもとに柱状グラフをつくっていく過程

				で，分布の様子を知り柱状グラフのよさを感得するための指導の工夫について論じた。
３．豊かな面積概念を構築するための学習過程の研究	共同	平成2年4月	『日本数学教育学会誌』 第72巻 第4号	共同研究：藤田英治，南香代子，平野年光，中野澄子，西岡孝文，福村徳子，山本滋基 豊かな面積概念を獲得するための「陣取りゲーム」をつくり，面積についての量感をもち，自分でつくった単位に名前をつけ，そのいくつ分で表していく学習モデルの構築とその実践について述べた。
４．自己を発揮し自ら変容する子ども －学習の個性化を図る－	共同 ※は単独	平成3年3月	『平成2年度究のまとめ』 （大阪教育大学教育学部附 属平野小学校） １１０ｐ．内	２年「きろきとせいり」：自分の目的に応じた記録と整理の仕方を認め，多様な表現方法でグラフの素地となる表をつくっていく学習過程の工夫。 ※P.P２５～２８
５．自己を発揮し自ら変容する子ども ―学習の個性化とその指導―	共同 ※は単独	平成4年3月	『平成3年度究のまとめ』 （大阪教育大学教育学部附属平野小学校） １１８ｐ．内	４年「変わり方を調べる」：調べたい2量を子ども自らに決定させ，多様な解決方法を考えながら問題解決していく教材や指導展開の工夫について追究した。 ※P.P２９～３２
６．理解の階層とその測定について	共同	平成4年11月	『数学教育論文発表会』 第25回論文集 （ｐ71～ｐ76） （岡山大学）	共同研究：藤田英治（筆頭），山本磁基 理解の階層について，スケンプの「道具的理解」と「関係的理解」やブラウンの「外的理解」「内的理解」の考えを先行研究としながら，子どもの様相から理解の階層（面積概念の形成をもとに）を構築し，より深い理

				解が得られるための指導のあり方と，子どもの理解の深まりを検証した。
７．自己を発揮し自ら変容する子ども ー学習の個性化における教師の役割―	共同 ※は単独	平成5年3月	『平成4年度研究のまとめ』 （大阪教育大学教育学部附属平野小学校） １１４ｐ．内	１年「おおきな数」：100までの数の数え方を子どもに考えさせ，10のまとまりのよさに感じる指導の工夫，特に子どもの情意面を重視した教師の働きかけについても論述した。「一人ひとりが算数に感じる指導のあり方」 ※P.P29～32
８．「THE STUDY OF UNDERSTADING IN ARITHMETIC EDUCATION UNDERSUTANDING PHASE AND LEARNING PROCESS MODEL」 ー IN CASE OF AREA-LEARNING FOURTH GRADERS ー	共同	平成5年7月	『第17回数学教育心理学会』 国際会議学会誌 （ PSYCHOLOGY OF MATHEMATICS EDUCATIONPROCEEDINGS OF 17 INTERNATIONAL CONFERENCE ） 論文集Vo.1 P236～P243 『	共同研究：藤田英治（筆頭），山本磁基 子どもが理解を深めていく過程について，スケンプの「道具的理解」と「関係的理解」やブラウンの「外的理解」「内的理解」の考えや佐伯氏の考えを関係付けながら，子どもの様相から理解の階層モデル（面積概念の形成をもとに）を構築した。そして，より深い理解が得られるための指導モデルを構築・実践し，子どもの理解の深まりを検証した。
９．自己を発揮し自ら変容する子ども ―学習の個性化における評価のあり方―	共同 ※は単独	平成6年3月	平成5年度研究のまとめ』 （大阪教育大学教育学部附属平野小学校） １２５ｐ．内	「算数に感じる学習における評価のあり方」：教師による評価と子どもによる評価，情意面と認知面の評価のマトリクスをつくり，その評価方法と個に応じた指導のあり方を追究した。※P.P３５～３６ ４年「面積を調べる」テトリス陣取りゲームを開発し，面積概念を深めながら，多様な解決方

				法で複合図形の求積を行う子どもの考えの評価とその考えに応じた指導のあり方を追究した。 ※ P.P42～48
10．第７０回記念　大阪教育大学　数学会 研究資料集	共同 ※は単独	平成6年4月	大阪教育大学 数学教室 数学教育研究 第23号 別冊	大阪教育大学数学会における公開研究授業の内容をまとめた。 （第66回：平成2年，第68回：平成4年） ※P.P92～93，P.P116～117
11．算数に感じる学習を支える評価 －自己評価能力（メタ認知的技能）の育成とその評価－	単独	平成7年2月	『日本数学教育学会誌』 第77巻　第2号	子どもの自己評価能力を育成するために低・中・高学年における自己評価能力の発達モデルを構築し，それに沿った指導の実際と子どものメタ認知的技能や自己評価能力の高まりを評価・検証した
12．自己を発揮し自ら変容する子ども －学習の個性化を支える評価―	共同	平成7年3月	『平成6年度研究のまとめ』 （大阪教育大学教育学部附属平野小学校） １３６ｐ．内	「一人一人が算数に感じる学習における評価 と指導」教師による評価と子どもによる評価 の一体化を図る評価方法や指導に生かす工夫 をまとめた。 P.P32～33（藤田英治（筆頭），井上正人，當麻俊和） ２年「長方形と正方形を調べる」：三角形と四角形でつくった２つの模様の感じ方の違いから長方形と正方形の特徴を調べる学習と評価の結果の考察をした。 P.P34～38（藤田英治（筆頭），井上正人，當麻俊和）
13．豊かな人間性を育	共同	平成9年３月	『研究紀要第１集』	総論：豊かな人間性を培うため

む教育課程の創造 －教科の本質と総 合活動のあり方 を探る－	※は単独		（大阪教育大学教育学部附属平野小学校） １５２ｐ．内	の教科の役割と総合活動のあり方を述べる。 P.P2～5（藤田英治（筆頭），萩原憲二，松永洋介） 算数科理論：「一人一人が算数に感じる学習を支えるカリキュラムの構想」について，低中高学年における子どもの情意の高まりと単元内，単元間，領域間，他教科との内容の関連について追究した。 P.P46～49（藤田英治（筆頭），井上正人，當麻俊和） ６年「柱体・錐体の特徴，表面積・体積を調べる」：パソコンを使って立体図形の見取り図をつくり，その特徴や関係を調べる指導の工夫を追究した。※P.P56～61
14. 豊かな人間性を育む教育課程の創造 －教科の本質と総合 活動のあり方を 探る －	共同 ※は単独	平成10年3月	『研究紀要第２集』 （大阪教育大学教育学部附属平野小学校） １７９ｐ．内	「教科・道徳・総合的な学習の関連を図ったカリキュラムの構想」：共創的実践力を育てたい学力とし，教科等と総合的な学習の関連を図ったカリキュラムについて述べた。 総論P.P2～7（藤田英治（筆頭），萩原憲二，松永洋介） 算数科理論：「一人一人が算数に感じる学習を支えるカリキュラムの構想」について，数量関係と他領域，領と測定と図形領域の統合を図るカリキュラム構築について追究した。 P.P42～45（藤田英治（筆頭），井上正人，當麻俊和） １年「形を調べよう」パソコンを使った模様づくりで「やり直しや保存ができる」等のよさを

				明確にした。※P.P46～50
15．総合的な学習の時間における実践や研究が教師に与えた影響 ―総合的な学習の時間における成果の検証と今後の方向性の探求― （修士論文）	単独	平成16年3月	大阪教育大学大学院 教育研究科 実践学校教育	総合的な学習の実践や研究を行うことで，教師の内面に何が構築されたかを探った。具体的には，５つの段階①学習活動を創造する能力②カリキュラムをつくる能力③評価の観点や規準を決定する能力④教科を横断する考え方⑤ＴＴや地域の人との協働による指導をデザインする能力の発展があったことを実践や指導案から明らかにした。また，今後の総合的な学習の進展の方向として，実践とカリキュラム評価のモデルを構築した。
16．情意面を重視した問題解決的な学習と言語活動の活性化における考察 ―数学的な考え方や数学的な表現・コミュニケーション力を育む学習モデルの構築―	単独	平成27年2月	大阪教育大学 実践学校教育研究	数学的な考え方や数学的な表現・コミュニケーション力を育む学習モデルの構築のために，まず，数学的な考え方についての歴史的背景を追究し諸研究の成果をまとめた。そして，数学的な考え方を育成するためのポリア氏の提唱以来，現在形骸化が見られる問題解決的な学習について，教師主導型の問題解決から，子どもの問題意識を重視した問題解決的な学習のモデル構築と実践検証を行った。
17．分数の概念形成における系統性についての一考察 －分数指導の困難性の解明と指導方法の構築－	単独	平成28年2月 （予定）	大阪教育大学 実践学校教育研究	第６学年で学習する「分数のわり算」における子どもの「つまずき」と教師の「指導の困難性」の根拠を明らかにし，第２学年から学習する分数の意味について，「量としての分数」から「数としての分数」に抽象化していく過程で，分割分数，単位分数，

				割合分数の系統性や指導方法について理論的な整理を行った。そして，第３学年から学習する小数の系統との関連を図った学習計画を構築し，「分数÷分数」の学習モデルを構築・実践し，その結果の考察を行った。また，この学習モデルの実践に至るまでの指導の系統性や関連性を図った回復授業についても追究した。
≪太成学院大学、勤務後≫ 18．豊かな心を育む算数教育 －子どもの情意面を重視した問題解決的な学習モデルの構築「コピー用紙の秘密（白銀比）」－	単独	平成30年3月 発刊予定	太成学院大学 研究紀要 第20巻 （通号37号）	算数・数学教育における「心の教育」を推進するために、子どもの情意面を重視した問題解決的な学習のあり方を追究し、学習モデル構成のための理論構築を行った。 実践研究では，「白銀比」についての教材化を行い，小学５・６年生に，学習モデル「コピー用紙の秘密」の実践を行った。その実践の結果を①「算数・数学に内包された美しさや不思議さに感じているのか」や②「問題解決のよさに感じているのか」という観点から評価・検証し，豊かな心を育む算数教育のあり方について追究した。
（その他） １．「すべての子を保育 に」 －町の施設と新しい町づくり－	単独	昭和61年11月	全国同和教育研究協議会編 『第41回全国同和教育研究大会報告集』 P. P138～139	堺市立大仙西小学校区における保育所設立に向けた地域の人々の努力について，保護者からの聞き取りをもとに地域教材を開発し，それを用いた学習における児童の変容について述べた。 ※

２．「生きる力をはぐくむ総合的な学習」 ―堺の実践と方向―	監修	平成11年11月	堺市教育委員会	理論編は，藤田英治が執筆したもので,「総合的な学習とはどのような学習なのか」,「その展開をどうつくっていくのか」等について述べた。 実践編は，藤田英治が指導・助言を行ったり，学習活動の構成に関わったりした学校の実践を環境，国際，福祉，情報に分類し，監修した。
３．「総合的な学習の時間の取組に向けて」	共同	平成１１年３月	大阪府教育委員会 泉北教育振興センター	小・中学校の総合的な学習実施に向けての参考資料として，泉北地区の実践をまとめた。 藤田英治は，堺市教育センター主催の「授業を創造する研究会」の指導助言者で，そのメンバーとともに，大阪府教育委員会泉北教育振興センターからの依頼で，作成に関わった。
４．「生きる力をはぐくむ総合的な学習Ⅱ」 －特色ある堺の実践－	監修	平成13年11月	堺市教育委員会	「生きる力をはぐくむ総合的な学習　―堺の実践と方向―」に続き，主に藤田英治が指導助言及び学習活動の構成に関わった小・中学校の堺の特色を生かした実践を監修した。
５．算数科「数学的な考え方の評価を含む自作単元テスト集（第1学年～第6学年全単元）」	監修	平成25年11月	堺市立槇塚台小学校	数学的な考え方を含んだ１年から６年までの全単元を網羅した単元テストを堺市立槇塚台小学校の教員と協働で作成した。作成した単元テストに関しては藤田英治が点検・指導・監修し，冊子にまとめた。
６．京都女子大学 平成25年度公開講	共同 ※は単独	平成２５年６月	京都女子大学 発達教育学部教育学科	京都女子大学　平成25年度　公開講座「京女の教科教育を考え

座のまとめ 「京女の教科教育を考える」 －各教科における言語教育の現状とその具現化に向けて－			教育学専攻	る　－各教科における言語教育の現状とその具現化に向けて－」というテーマのもと，算数科，国語科，理科，図工科における言語活動の実際とその方向性について，発表・研究協議・講演が行われた。 藤田英治は，「基調提案２：算数科教育のことばの教育について」と「テーマについてのパネル討論」を行った。 その内容をまとめて冊子にした。
７．豊かな心をはぐくむ算数教育 －子どもの情意を重視した問題解決的な学習モデルの構築「コピー用紙の秘密」－	単独	平成26年6月	全国数学教育学会　第40回 研究発表会	算数・数学が，今重視されている「心の教育」に欠かせない教科であることの理論構築を行った。実践研究では，「コピー用紙の秘密」と題し，白銀比についての教材化を行い，小学５・６年生に，①「算数・数学に内包された美しさや不思議さに感じているのか」や②「問題解決のよさに感じているのか」という観点から評価・検証し，豊かな心を育む算数教育のあり方について追究した。
（学会発表） １．子どもの内面に豊かな面積概念を構築するための指導過程の研究 －子どもの側に立った操作活動の充実を目指して－	共同	平成元年 8月	第71回日本数学教育研究大会　千葉大会	発表者：藤田英治，南香代子 豊かな面積概念を獲得するための「陣取りゲーム」をつくり，面積についての量感をもち，自分でつくった単位に名前をつけ，そのいくつ分で表していく学習モデルの構築とその指導方法について追究した。
２．理解の階層とその測定について	共同	平成 4 年 11月	第25回日本数学教育学会	発表者：藤田英治（理論），山本磁基（実践）

－面積学習（4年） を中心に－			数学教育論文 発表大会 岡山大会	子どもが理解を深めていく過程について，スケンプの「道具的理解」と「関係的理解」やブラウンの「外的理解」「内的理解」の考えや佐伯氏の考えを関係付けながら，子どもの様相から理解の階層モデル（面積概念の形成）を構築した。そして，より深い理解が得られる指導モデルを構築・実践し，子どもの理解の深まりを評価・検証した。
３．「THE STUDY OF UNDERSTADING IN ARITHMETIC EDUCATION UNDERSUTANDING PHASE AND LEARNING PROCESS MODEL 」 － IN CASE OF AREA - LEARNING FOURTH GRADERS －	単独	平成 5 年 7 月	第17回数学教育心理学会 国際会議（筑波大会） PSYCHOLOGY OF MATHEMATICS EDUCATION PROCEEDINGS OF 17 INTERNATIONAL CONFERENCE 論文集 Vo.1 P236～P243	発表者：藤田英治 子どもが理解を深めていく過程について，スケンプの「道具的理解」と「関係的理解」やブラウンの「外的理解」「内的理解」の考えや佐伯氏の考えを関係付けながら，子どもの様相から理解の階層モデル（面積概念の形成をもとに）を構築した。そして，より深い理解が得られるための指導モデルを構築･実践し，子どもの理解の深まりを検証した。 共同研究者：山本磁基
４．算数に感じる学習とその評価 －自己評価を生かした指導のあり方－	単独	平成 5 年 8 月	第75回日本数学教育研究大会　滋賀大会	発表者：藤田英治 「一人一人が算数に感じる学習における評価と指導」における教師による評価と子どもによる評価の一体化を図る評価方法や指導に生かす工夫について追究した。
５．算数に感じる学習を支える評価 －子どもによる評	単独	平成 7 年 8 月	第77回日本数学教育研究大会　東京大会	発表者：藤田英治 子どもの自己評価能力を育成するために低・中・高学年におけ

価の様相を「発揮」と「変容」の両面から追究する―				る子どもの自己評価能力の発達モデルを構築し，それに沿った指導の実際と子どものメタ認知的技能や自己評価能力の高まりを評価・検証した。	
６．日本の教師の指導法についての研究ー指導方法の日米比較の研究ー	共同	平成 12 年 8 月	INTERNATIONAL CONFERENCE ON MATHEMATICS EDUCATION 「 ICME Ⅱ 」 HANGZHOU CHINA 2000	発表者：森田英嗣（理論），藤田英治（実践） 日本の教師の指導法とアメリカの教師の指導法の違いについての研究（日米比較）分野に関して，日本の小学校の教師の指導方法について，①教材との出合わせ方と発問の仕方や②個と集団のかかわりの中での問題解決的なの進め方等について発表した。	
７．豊かな心を育む算数教育	共同	平成 18 年 8 月	第 88 回全国算数・数学教育研究会 東京大会	共同研究：角野兼太郎，辻井美希，前田健吾， 藤田英治，平尾美季，濱田幸廣，野山博史　他 豊かな心を育むのは全教科・領域だと言われているが，算数科がどのような役割を果たすのかについて追究し，算数科における確かな学力と豊かな心を育てるための授業について発表した。	
８．豊かな心を育む算数教 育	共同	平成 19 年 8 月	第 89 回全国算数・数学教育研究会 高知大会	共同研究：角野兼太郎，辻井美希，前田健吾， 藤田英治，平尾美季，濱田幸廣，野山博史　他 算数科において，豊かな心を育むためには，多様な考え方を練りあげ，みんなで原理や法則などを創りあげていく学習が不可欠であるという内容について発表した。	

９．豊かな心と考える力の育 成	共同	平成 20 年 8 月	第 90 回全国算数・数学教育研究会 福島大会	共同研究：角野兼太郎，稲本一彦，前田健吾， 藤田英治，平尾美季，濱田幸廣，伊藤晴久　他 「子どもたちが考えを創りあげる」という学習過程を問題解決ととらえ，一方，算数の不思議さや美しさに感じることが子どもの豊かな心を育むと仮説を立て，実践研究を行った。	
10．豊かな心と考える力の育 成 －考える力を育成するためには豊かな心が不可欠－	共同	平成 21 年 8 月	第 91 回全国算数・数学教育研究会 京都大会	豊かな心の育成を,「①みんなで考えを創りあげる問題解決，②算数の不思議さや美しさに感じる心の育成，③見つけたきまりや考えを抽象化・一般化すること」と捉え，数学的な考え方が子どもの内面に育まれることと，豊かな心が育まれることは，車輪の両輪のような関係であるという理論のもと，実践研究を行い，発表した。 共同研究：辻井美希，前田健吾，角野兼太郎， 藤田英治，平尾美季，濱田幸廣，戸ヶ崎晋平　他	
11．豊かな心を育む算数教 育 －子どもの情意を重視した問題解決モデルの構築「コピー用紙の秘密」－	単独	平成 26 年 6 月	第 40 回全国数学教育学会	発表者：藤田英治 算数・数学が，今重視されている「心の教育」に欠かせない教科であることの理論構築を行った。実践研究では,「コピー用紙の秘密」と題し，白銀比についての教材化を行い，小学５・６年生に，①「算数・数学に内包された美しさや不思議さに感じているのか」や②「問題解決のよさに感じているのか」という観点から評価・検証し，豊かな	

				心を育む算数教育のあり方について追究した。
12．豊かな心を育む問題解決 ー情意面を重視した問題解決的な学習 4 年「整理の仕方」・6 年「文字と式」の実践を通してー ≪太成学院大学、勤務後≫	共同	平成 26 年 8 月	第 96 回全国算数・数学教育研究会 鳥取大会	共同研究：松阪一樹，倍裕子，角野兼太郎，濱田幸廣，藤田英治，東濱和宏，前山かおり， 他 子どもの情意面を重視した問題解決的な学習を推進し，数学的な考え方のよさや問題解決のよさに感じることで，子どもの内面に豊かな心が育まれるという仮説に基づいた実践内容とその評価について追究した。
13．算数科における情意面を重視した問題解決と言語活動の活性化	単独	平成 28 年 6 月	数学教育学会 夏季研究会 （関西エリア）	発表者：藤田英治 子どもの情意面を重視した問題解決的な学習を推進するための授業モデルや指導方法について提案し，さらに，言語活動を活性化するための言語モデルと対話の組織化のあり方について発表した。
翻訳 なし				

（人間）河合　篤史

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年　4　月　1　日

氏名　　河　合　篤　史

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
心理学、教育学	学校臨床心理学、学校心理学、教育相談、スクールカウンセリング

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 ①環太平洋大学短期大学部・心理コース学生に対する演習授業	2014.4 ～2016.3	勤務短大の子ども教育専攻の学生は、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭を目指している。勤務短大の特色の一つとして、特に自分の強みを生かした

		保育士・幼稚園教諭になるため、「ヨコミネ教育法コース」「アートコース」「心理コース」の 3 コースを選択できる。心理コースの学生に対して、カウンセリングマインドを体験的に学べるよう、またその前提として自己理解・他者理解を深められるよう、1 年次は構成的グループエンカウンター・2 年次は交流分析を中心にしたワーク(アクティブラーニング)を取り入れ指導している。
②環太平洋大学短期大学部での担当講義 「発達心理学」「教育心理学」「臨床心理学」	2014.4 ～2016.3	保育士・幼稚園教諭・小学校教諭資格取得を目指す学生に対して、発達心理学・教育心理学・臨床心理学の心理学の講義を担当している。
③太成学院大学での担当講義 「教育相談の基礎」「教育心理学」 「心理カウンセリング」「心理学概論 A」	2016.4～	教員養成課程において、「教育相談の基礎」「教育心理学」講義を担当している。また、心理カウンセリング学科の「心理カウンセリング」「心理学概論 A」を担当している。講義内容の専門的知識を教えるだけではなく、講義のプロセスそのものが教員になるためのモデリング学習になるべく授業展開している。
④太成学院大学でのゼミ指導	2017.4～	自己理解・他者理解を深めるワークを継続的に行いながら、自他の成長を体感しながら、「教育相談」「スクールカウンセリング」をテーマとした自分自身の研究テーマを見出し、研究をすすめていく指導を行っている。
⑤大阪教育大学での担当講義 「進路指導Ⅰ」	2017.10～	教育養成課程において、「進路指導Ⅰ」を担当している。カウンセリングの起源は，アメリカにおける職業指導運動であり、カウンセリングの視点を中心に講義を行っている。
2　作成した教科書，教材		特記事項なし
3　教育上の能力に関する大学等の評価 学生による授業アンケート結果	2016 春学期	Q12「授業を受け終えて、あなたはこの授業に満足していますか」で算定。%表示。「満足」＋「やや満足」の合計。 「教育心理学」　・・・89% (回答数 169 名) 「教育相談の基礎」・・・84%(回答数 108 名)

	2016 秋学期 2017 春学期 秋学期	「人間関係論」　・・・89%(回答数 83 名) 「教育発達学概論」・・・91%(回答数 11 名) 「心理カウンセリング」・90%(回答数 19 名) 「教育心理学」　・・・87% (回答数 138 名) 「教育相談の基礎」・・・91%(回答数 87 名) 「心理学概論 A」　・・・92%(回答数 25 名) 「心理カウンセリング」・100%(回答数 23 名)
4　実務の経験を有する者についての特記事項 ①桃山学院中学校・高等学校スクールカウンセラー ②藤井寺市教育委員会初任者研修会講師 ③桃山学院高等学校教職員対象カウンセリング講演会講師 ④藤井寺市教育委員会フレッシュ研修会講師 ⑤関西国際大学「教育相談」講義・特別講師 ⑥大阪府私立小学校連合会新任教員研修講師 ⑦西日本私立小学校連合会新任教員研修講師 ⑧日本私立小学校連合会全国夏季教員研修会・学級経営部会講師 ⑨宇和島市立明倫小学校人権教育保護者対象講演会講師(宇和島市社会福祉協議会共催) ⑩宇和島市立障碍者福祉施設豊正園･職員研修会(虐待について)講師 ⑪コンソーシアムえひめ共同授業・講師 ⑫大阪府立懐風館高等学校(高大連携出前授業)講師 ⑬夢ナビライブ 2017(大学研究&学問発見のための国公私立大学合同進学ガイダンス)講義ライブ･講師	2006.06～ 2007.1 2007.3 2007.8 2008.12～ 2009.2 2010.8 2014.08 2015.01 2015.03 2015.09 2016.11 2017.06	

⑬大阪府立懐風館高等学校(高大連携出前授業) 講師	2017.11	
5　その他 ①心理臨床家による研究会での活動	2007.4～ 2014.3	兵庫教育大学大学院辻河ゼミＯＢ＆ＯＧで構成され、月に一度行われる IRP 心理臨床研究会において、年に一度事例発表をするとともに、学校臨床に関連する活動（SC や学生相談など）をしている後輩心理臨床家に対しては助言・指導を行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 ①司書教諭 ②小学校教諭専修免許状<学校心理学付記> ③学校心理士 ④臨床心理士 ⑤ガイダンスカウンセラー ⑥学校心理士スーパーバイザー	 2002.12 2003.03 2003.04～ 2017.12 2006.04 2012.03 2018.01	 文部科学省 大阪府教育委員会 (社)「学校心理士」認定運営機構 (財)日本臨床心理士資格認定協会 (社)ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ推進協議会 (社)「学校心理士」認定運営機構
2　特許等		特記事項なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項 ①大阪府臨床心理士会･教育部会運営委員 ②第 17 回学校臨床心理士全国研修会大会実行委員 ③大阪府臨床心理士会･教育部会運営委員 ③大阪府臨床心理士会第 9 期理事	 2007.4～ 2014.3 2012.8 2016.6～ 2017.6～	
4　その他 ①小学校教育実習生の指導	 1998.4～ 2014.3	 元勤務校(帝塚山学院小学校)にて、小学校教育実習生の指導に当たった。特に平成 20 年度以降、毎年 1 名の教育実習生を 4 週間自クラスで担当し、学級経営(教師としての姿勢・子ども理解・保護者支援等)・教科指導(授業の導入法・授業目

		標の達成・板書指導等)・実習記録のまとめの添削等の指導に当たった。
②メンタルサポートチームコーディネーター	2001.4～ 2014.3	元勤務校(帝塚山学院小学校)にて、教育相談システムを構築し、毎週１回、校内委員会（メンバーは、養護教諭・管理職・スクールカウンセラー・コーディネーター）を実施した。校内委員会では、学校生活で苦戦する子どもの把握と情報共有を行い、必要に応じて、当該の担任に対するコンサルテーションを行ったり、スクールカウンセラーに繋いだりしながら、担任一人ではなく、チームでの援助を促進してきた。
③「学級通信」を核にした学級経営	1985.4～ 2014.3	元勤務校(帝塚山学院小学校)において、子ども・保護者・教師の三者のコミュニケーションを図る目的で教職に就いて以来、担当したクラスにおいて「学級通信」を発行してきた。具体的内容は、子どもたちの日常生活・担任の考え・保護者の感想等からなる。学級通信発行により、三者の絆の強化が図られ、相互の信頼関係が増し、安定した学級経営に繋がっていた。
④教務主任、研修部主任	2008.4～ 2014.3	元勤務校(帝塚山学院小学校)にて、教務主任・研修部(教員の授業改善のための企画立案実施機関)主任を歴任しながら、教職員の授業力向上を目指して、月一回の教員研修会を実施、アクティブラーニング化にむけての研究授業や反省会を企画運営してきた。
⑤FD 委員会・委員長	2013.4～ 2014.3	前勤務短期大学(環太平洋大学短期大学部)において FD 研修を企画担当する業務に当たった。特に教員の授業改善を目的とした研修を企画担当したり、学生の心的理解のための研修を行ったりしながら教員の資質向上を促進した。
⑥学生相談室長	2013.4～ 2014.3	前勤務短期大学(環太平洋大学短期大学部)において当該年度より学生相談室を開設し業務を担当。4 月新入生に対して、心の健康調査(UPI)を実施し、今後学生生活で苦戦が予想される学生および希望学生に対し「心の健康相談」を実施した。また、学生相談室の主旨を説明して、必要に応じて

		相談に応じることができる体制を少しずつ整えてきた。筆者は教員との兼務であるので、純粋にカウンセラーとして援助できる訳ではないが、予防的な関わりを中心とし、必要に応じて他の教員や医療機関との連携を行ってきた。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				特記事項なし
（学術論文） 1 私立小学校における心理教育的援助サービス導入についての実践研究～教員および保護者とのｺﾝｻﾙﾃｰｼｮﾝ(作戦会議)を通して～	単著	2003.3	修士論文 ･兵庫教育大学	筆者は、研究校で行った審理教育的援助サービスのニーズ調査に基づき、図書室の教員の立場で、心的サポートを必要とする児童・保護者・教員に対するチーム援助を行った。図書室の教員は評価フリーな立場であり、また、図書室は学校での居場所を求めて苦戦する児童が来室しやすく、援助を行うには適していた。
2 私立小学校における心理教育的援助サービス導入についての実践研究 (査読付)	共著	2009.3	学校教育学研究・ 第 21 巻，pp.49-56	共著者…辻河昌登 図書室の教員(教師カウンセラー)の立場から，学校生活で苦戦する児童の事例を通じて，教員および保護者とのコンサルテーション（作戦会議）を行った。その結果，不適応を起こしている児童の援助の方法として，「援助チーム会議」を開き，チームとして援助していくことが有効であるという方向性が見出せた。
3 体育の授業でのけがをきっかけに体調不良	単著	2009.3	発達心理臨床研究･第 15 巻，pp.201-210	本事例は、高校２年の時、体育の授業でのけがにより、体調不良と

となった高校男子生徒との面接過程				なり、欠席がちになった高校男子生徒とのスクールカウンセラーとして関わった面接過程である。面接が進むにつれて自分のありのままの気持ちを少しずつ表現出来るようになり、欠席もなくなった。そして、学校行事にも積極的に参加できるようになり卒業に至った。
4 特別支援教育におけるICTの活用	共著	2012.3	平成 23 年度学生参加プロジェクト研究成果報告書, pp.19-28(兵庫教育大学大学院連合学校研究科)	共著者…大塚美菜子、高畑英樹、瀧井美緒、井上和久 学校における現代的な教育課題である教育の情報化は、その各要素が教育の質の向上において重要な位置づけにあると考えられる。本研究プロジェクトにおいて筆者のグループは、特別支援教育における ICT の活用についての現状と課題を報告した。
5 識字学級に通う中国人留学生が語るライフストーリーに関する考察～ライフストーリー研究を用いて～	単著	2015.3	環太平洋大学短期大学部紀要・ 第 26 号，pp.19-28	本研究では、識字学級で学ぶ中国人留学生がどのような思いで今までの人生や識字学級での学びを経験し、意味づけているかを分析・考察していくことを目的とした。方法としては、ライフストーリー研究を採用し、半構造化インタビューによって得られたナラティヴを分析した。 その結果、識字学級での筆者と共同された物語のプロセスは、留学生への心理的援助につながることが示唆された。
6 臨床心理士資格をもつ教師の活動をめぐって～教師の実践研究を通して～	共著	2016.3	環太平洋大学短期大学部紀要・ 第 27 号，pp.31-42	共著者…拝野佳生・大久保敏昭・柿 慶子 本研究は，2015 年の日本心理臨床学会第 34 回秋季大会における自主シンポジウムを基に，臨床心理士資格をもつ教師の活動の可

				能性を明らかにすることを目的とした。その結果，教育相談活動において，現場教師・校長・教育委員会，それぞれの立場で，教師のスタンスを保ちながら，臨床心理士の専門性を活かすことが可能であることを見出せた。
7 私立小学校における教育相談システム構築の試み―司書教諭の役割を持つ教師カウンセラーとしての活動を通して― (査読付)	単著	2016.12 掲載決定	学校心理学研究・ 16 巻 1 号	本研究では，司書教諭および教師カウンセラーとしての実践を通して，教育相談システムを構築していく試みを行った。その結果，教師カウンセラーとスクールカウンセラーが協働してチーム援助を促進していくことが有効であるという方向性が見出せた。また，以下の点が示唆された。①私立小学校独自の教育相談システム構築の重要性，②図書室による心理教育的援助サービスの可能性。
8 中国人渡日者の「渡日経験」と「識字学級での学び」の意味 - 一中国人の「喪失と再生」の語りを通して - (査読付)	単著	2017.1	学校メンタルヘルス・ Vol.19,No.2, pp.197-206	本研究では，識字学級に所属する一渡日者のライフストーリーを分析・考察していくことを目的とした。方法としては，ライフストーリー研究を採用し，半構造化インタビューによって得られたナラティヴを分析した。その結果，①「渡日に至るライフストーリー」，②「日本で生きていくライフストーリー」，③「未来へ繋がるライフストーリー」，という三つのまとまりを見出すことができた。そして，渡日者にとって識字学級が心安らぐ場所として機能していることが明らかとなった。さらに，聞き手と語り手の間で「喪失と再生」のライフストーリーが共同生成されていった。

9 臨床心理士資格をもつ教師の活動をめぐって(2)～特別支援教育と発達障害～	共著	2017.3	太成学院大学紀要 第 19 巻，pp41-52	共著者…吉川修司・拝野佳生・大久保敏昭・正木佐代子 本研究は，2016 年の日本心理臨床学会第 35 回秋季大会における自主シンポジウムを基に，臨床心理士資格をもつ教師の活動の可能性を明らかにすることを目的としたものである。前年に引き続き，本年度は特別支援教育と発達障害をテーマに議論した。その結果，教師と子ども，あるいは子ども同士の「関係性」を重視し，理解を深めていくアプローチは，従来から特別支援教育にある診断に基づく自立に向けたアプローチというスタイルにはない新たな視座を提供するものであることが見出せた。
10 識字学級に通う中国人渡日者の心理的援助の検討－転機の語りを通して－ (査読付)	共著	2017.3	教育実践学論集・ 第 18 号，pp.27-35	共著者…辻河昌登 本研究では，識字学級に通う中国人渡日者 4 名の面接調査を通して，彼らの人生の中で，識字学級をどのように意味づけるのかを検討し，渡日者の心理的援助の可能性を明らかにすることを目的とした。方法としては，ライフストーリー研究を採用し，半構造化面接によって得られたナラティヴを分析した。その結果，彼らの語りは，①「渡日の決心」，②「日本での生活」，③「識字学級への参加」の 3 つの転機に分けられた。そして，聞き手(筆者)と語り手(研究協力者)の間で共同生成された語りのプロセスは，渡日者への心理的援助につながる可能性が示唆された。
11 臨床心理士資格をもつ教師の活動をめぐって(3)～教育実践と	共著	2018.03	太成学院大学紀要 第 20 巻，pp.33-4	共著者…石田千晶・大久保敏昭・門原眞佐子 本研究は，2017 年の日本心理臨

世代継承性～				床学会第 36 回秋季大会における自主シンポジウムを基に，臨床心理士の資格をもつ教師の活動の可能性を明らかにすることを目的としたものである。一昨年，昨年に引き続き，本年度は教育実践と世代継承性をテーマに議論した。その結果，臨床心理士の資格をもつ教師の教育実践は，両者のアイデンティティを両方(ダブル)をもつ存在として，教育実践を積み重ねてきたことが明確になった。また，その世代継承性は，次世代に対し守りの場という枠組みをつくりながら，実践を通して，単にテクニックやスキルにとどまらず，技(アート)とも呼ぶべき教師としての人間的な成長を図るものであることが浮き彫りとなった。
（その他） 1 親のストレスと取り組み～保護者対象の読書会・ワークショップ活動を通して～	単著	2005.2	教育開発研究所刊・教職研修 2 月号増刊，pp.154-159	編集者…伊藤美奈子 学校現場では、子どもたちだけでなく、保護者もストレスにさらされている。保護者がうまくストレスを軽減でき、子育てに自信が持てるように、保護者支援として、子育てに関連する書籍を紹介しながら読書会という形でワークショップを実施した。この会は、保護者同士の子育ての自助グループとしての機能も果たすようになった。
2「教師役割とカウンセラー役割」～“みんなが資源、みんなで支援”をめざして～	単著	2010.3	帝塚山学院小学校刊「児童生活」第 184 号，pp.224-228	教員・保護者・スクールカウンセラーと連携しながら、心理教育的援助サービスの校内体制を構築する実践研究行った。筆者の立場は、チーム援助をマネージメントするコーディネーターであった。

				さらに併設大学院の人的資源（臨床心理学専攻の大学院生）を活用しながら、学校で苦戦する児童のチーム援助を促進していくことが可能となった。
（学会発表） 1 私立小学校における心理教育的援助サービス導入について	口頭発表	2004.9	日本心理臨床学会(第 23 回大会・東京国際大学)	指定討論者…伊藤美奈子 修士論文に基づく口頭発表を行った。
2 私立学校におけるカウンセリングの現状と展望	口頭発表	2008.11	全国私立大学附属併設中学校高等学校教育研究集会（第１３回大会・甲南中学校高等学校)	共同発表者…近森聡 私学におけるカウンセリングの可能性について、実践に基づいて、①専任のコーディネーター(筆者、教員と兼務)が常駐し、②校内委員会(SC・養護教諭・筆者による援助チーム会議を定期的に開催)によるチーム援助の強化を図り、③併設大学院臨床心理学専攻の大学院生をメンタルサポーターとして活用しながら、④オープンルームを設置等、多面的なチーム援助を提案した。
3 メンタルサポートチームによる心理教育的援助サービスの実践	ポスター発表	2008.11	日本学校心理学会 (第 10 回大会･埼玉会館)	教員・保護者・スクールカウンセラーと連携しながら、心理教育的援助サービスの校内体制を構築する実践研究行った。筆者の立場は、チーム援助をマネージメントするコーディネーターであった。さらに併設大学院の人的資源（臨床心理学専攻の大学院生）を活用しながら、学校で苦戦する児童のチーム援助を促進していくことが可能となった。
4 臨床心理士資格をもつ教師の活動をめぐって～教師の実践研究	自主シンポジウム	2015.8	日本心理臨床学会 (第 34 回秋季大会・神戸国際会議場)	日本心理臨床学会第 34 回秋季大会において，臨床心理士資格をもつ教師の活動の可能性を明らか

を通して～				にするため自主シンポジウムを開催した。その結果，教育相談活動において，現場教師・校長・教育委員会，それぞれの立場で，教師のスタンスを保ちながら，臨床心理士の専門性を活かすことが可能であることを見出せた。
5「"チームとしての学校"を機能させるためのマネジメント～教師カウンセラーに期待される役割～」シンポジウム	口頭発表	2016.8	日本教育相談学会(第 28 回総会・研究大会・岡山ﾋﾟｭｱﾘﾃｨまきび)	学校現場で複雑化・多様化する教育相談活動に対して、教師カウンセラーとしての実践を振り返りながら今後期待される役割について議論した。筆者はシンポジストの一人として"チーム学校"という観点から、「教師カウンセラーをベースとしたスクールカウンセリング活動」というテーマで実践報告を行った。
6 臨床心理士資格をもつ教師の活動をめぐって(2)～特別支援教育と発達障害～	自主シンポジウム	2016.9	日本心理臨床学会 (第 35 回秋季大会・パシフイコ横浜)	日本心理臨床学会第 35 回秋季大会において，臨床心理士資格をもつ教師の活動の可能性を明らかにすることを目的とし，前年に引き続き自主シンポジウムを開催した。本年度は特別支援教育と発達障害をテーマに議論した。その結果，教師と子ども，あるいは子ども同士の「関係性」を重視し，理解を深めていくアプローチは，従来から特別支援教育にある診断に基づく自立に向けたアプローチというスタイルにはない新たな視座を提供するものであることが見出せた。
7 臨床心理士資格をもつ教師の活動をめぐって(3)～教育実践と世代継承性～	自主シンポジウム	2017.11	日本心理臨床学会 (第 36 回秋季大会・パシフイコ横浜)	日本心理臨床学会第 36 回秋季大会において，臨床心理士資格をもつ教師の活動の可能性を明らかにすることを目的とし，シリーズ 3 回目となる本年は，教育実践と世代継承性について議論した。そ

				の結果，臨床心理士の資格をもつ教師の教育実践は，両者のアイデンティティを両方(ダブル)をもつ存在として，教育実践を積み重ねてきたことが明確になった。また，その世代継承性は，次世代に対し守りの場という枠組みをつくりながら，実践を通して，単にテクニックやスキルにとどまらず，技(アート)とも呼ぶべき教師としての人間的な成長を図るものであることが浮き彫りとなった。

（人間）山本　由紀子

教　育　研　究　業　績　書

2017 年　2 月　24 日

氏名　　山本由紀子　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
社会福祉　児童家庭福祉	子育て支援　社会的養護　相談援助

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 教育効果向上のための講義方法	2012 年～	パワーポイント、視聴覚教材（ＤＶＤ）、板書、補助教材（プリント）、小レポートを組み合わせた講義を行っている。実社会における問題との関連を意識して学ぶため、新聞記事等を講義の導入として活用している。また能動的に学ぶ姿勢を身につけ、主体性と実践力を養うため、ロールプレイ、グループディスカッション等を取り入れている。
社会資源マップの作成	2013 年～	「家庭支援論」において、マルチメディア実習室を活用し、卒後に就職を希望している地域の子育て支援に関する社会資源のマップを作成している。就職後、社会資源の紹介の際に資料として実際に活用できるレベルのものを学生には求めている。地域の社会資源の具体的な理解とともに就職への動機づけを目的としている。
学外学習（あいりん地区におけるフィールドワー	2013 年	大阪バイオメディカル専門学校医療福祉心理科

ク）		「地域福祉の理論と方法」の授業において、社会的排除の例としてのホームレスに対する援助を学ぶことを目的として、あいりん地区におけるスタディツアーを企画、引率した。
グループワーク、グループディスカッションの導入	2016 年～	「保育相談」「保育相談支援演習」において、子育てサポートアクティブラーニング演習室を活用し、アイスブレーク・自己覚知・コミュニケーション演習等を採り入れている。これらは対人援助に不可欠な学びであると同時に、学生が教員となった際に活用できるグループワーク技術の習得としても期待される。また学生の授業に対する能動的、自発的な学修態度の醸成にも効果をもたらすものと考えている。
2　作成した教科書，教材 講義テキスト 『科目重複ポイントスピードマスター講座』 『児童福祉法解読パーフェクト講座』	2007 年	東京リーガルマインド保育士講座のためのテキスト作成と通信教材用（DVD）講義収録 内容：保育士試験重要事項の科目横断的まとめ・児童福祉法と関連法の詳解
3　教育上の能力に関する大学等の評価 学生による授業アンケート結果	2012 年度～	「授業内容の理解度、講義の聞きやすさ、学生の授業への参加促進、進行状況、副教材の利用と活用状況」などの多項目にわたる評価において、4 点満点中おおむね 3 点もしくは 4 点の評価を得ている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 学生による授業アンケート結果	2012 年度～	「授業内容の理解度、講義の聞きやすさ、学生の授業への参加促進、進行状況、副教材の利用と活用状況」などの多項目にわたる評価において、4 点満点中おおむね 3 点もしくは 4 点の評価を得ている。
学生による授業アンケート結果	2012 年度～	「授業内容の理解度、講義の聞きやすさ、学生の授業への参加促進、進行状況、副教材の利用と活用状況」などの多項目にわたる評価において、4 点満点中おおむね 3 点もしくは 4 点の評価を得ている。
学生による授業アンケート結果	2012 年度～	「授業内容の理解度、講義の聞きやすさ、学生の授業への参加促進、進行状況、副教材の利用と活

		用状況」などの多項目にわたる評価において、4点満点中おおむね3点もしくは4点の評価を得ている。
学生による授業アンケート結果	2012 年度～	「授業内容の理解度、講義の聞きやすさ、学生の授業への参加促進、進行状況、副教材の利用と活用状況」などの多項目にわたる評価において、4点満点中おおむね3点もしくは4点の評価を得ている。
社会福祉士・保育士試験受験対策講座　講師	2006年1月～ 2008年3月	社会福祉士・保育士試験受験対策講座講師として、 ・厚生労働省就職支援講座における若年失業者を対象とした講義 ・梅花女子大学・神戸親和女子大学・光華女子大学・大阪人間科学大学・神戸女子大学・流通科学大学・神戸海星女子学院大学　学内資格取得講座における講義を行った。
介護職員初任者研修講師	2014年1月	大阪バイオメディカル専門学校より依頼を受け、介護職員初任者研修において「障害の理解」を担当した。
5　その他 東淀川高校　模擬授業	2017　年11月	2年生を対象に「子どもと家族にかかわる保育者の役割」をテーマに模擬授業を行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 保育士	1996 年 3 月	
精神保健福祉士	1998 年 10 月	
社会福祉士	2001 年 4 月	
	2012 年 3 月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 アジア民間社会福祉従事者研修修了生 視察	1997 年	全国社会福祉協議会アジア民間社会福祉従事者

		研修修了生視察スタディーツアーに参加し、修了生であるソーシャルワーカーの母国における活動・取り組み状況を視察した。フィリピン・インドネシア両国の乳児院、児童養護施設等を訪問、施設見学し、スラム街の貧困状態に対する支援、ストリートチルドレンに対する支援の現状を視察した。
実践事例報告「母子生活支援施設における特別な配慮を要する児童への処遇実践－母と子の日常生活と「虐待」について―」	1999 年	奈良県児童福祉課主催「特別な配慮を要する児童への処遇」をテーマとする研修会において実践事例を提出。ある母と子の日常生活の状況から「虐待」概念と効果的な援助方法の検討を行った。児童入所施設等職員研修報告書『まほろばならのこどもたち』（奈良県児童福祉課）収録
NPO 大阪精神医療人権センター　精神医療オンブズマン	2007 年	精神科病院における入院患者の権利擁護を目的とする精神医療オンブズマン活動に参加。利用者の置かれている状況、隔離室や病棟の療養環境の確認と入院者からの聞き取り等により、病院側に意見・要望を伝え、療養環境の改善を図る活動を行った。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 2 3				
（学術論文） 1.「遊び」をめぐる原風景（修士論文）	単著	1996 年 3 月	大阪市立大学	大学生を対象に子ども時代の「遊び」に関するアンケート調査を実施し、想起される「遊び」経験の内容と現在の自己評価得点との関連について考察した。
2.「子育ての社会化」と子どもの育ち	単著	2016 年 3 月	太成学院大学紀要 18	今日の家庭と地域社会との関係における「子育ての社会化」の実際は、保護者のニーズを満たすためのいわゆる「保育サービス」が

				多くのウェイトを占める状況となっている。このように子育て支援が市場原理に基づくサービスとして提供され消費されるとき、主体であるはずの子どもの育ちへ視点が希薄になることを本稿では指摘し、今日の「子育ての社会化」の目的と現状を子どもの育ちの視点から問い直した際の問題点について論じた。
（その他） 1.アルコール依存症者の状態と家族のＰＴＳＤ得点との相関について	共同	2004年7月	日本アルコール関連問題学会　第26回大会 （名古屋国際会議場）	アルコール依存症者の状態と家族のＰＴSD得点との相関を外傷性ストレス症状尺度を用いて調べ、本人の断酒期間、自助グループ参加期間、家族の家族教室参加期間が長くなるとＰＴSD得点は低くなるという結果を得た。 抄録集ｐ.50（森田由紀子　山本哲也　三好弘之　山田一郎　本村汎　小杉好弘）
2.小杉記念病院における入院患者に関する現状について	共同	2004年7月	日本アルコール関連問題学会　第26回大会 （名古屋国際会議場）	平成15年中の全入院患者を対象に、フェースシートならびに退院形態、転帰等の調査を行ない、現状の報告を行った。 抄録集ｐ.48（山本哲也　森田由紀子　三好弘之　山田一郎　小杉好弘）

（人間）新川　朋子

教　育　研　究　業　績　書

平成30年　4月　1日

氏名　　印

研　究　分　野	研究内容のキーワード
保育学	保育方法、保育内容、子ども子育て支援、専門職養成、発達支援
教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項	

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例	平成22年4月～現在に至る	学生自らが授業に参加している実感が持てるように、応答的な授業を心がけるようにした。 具体的には、学生自身の心と体が動きを伴うようロールプレイ、テキストをまとめ発表する、パワーポイントを使っての子どもの発達の発表、制作物を使っての模擬保育等、様々な発表を行ってきた。また、他の学生の発表を見て感想を書く等、新しく得た発想を言葉に書き表し、それをまた発表することで保育内容に関する視野を広げられるようにした。また、DVDで実際の保育場面や子どもの発達を学び、レポートしたものをまとめ、教員が感想のポイントを次回の授業内で学生に伝えるようにした。いずれの授業においても、学生の良いところを認めながら進めるようにした。
2　作成した教科書，教材 1）家族のための心理学	平成17年4月1日	身体的疾病、発達・精神障害、家族適応障害などの事例に対しての心理臨床について具体的な援助過程と方法、心理サポートについて論じており、本人は母子分離不安の節を担当した。 ・編集　小林芳郎 ・「母子分離不安と心理臨床」（5頁，173－177）を担当
2）子どもと保護者への効果的な声かけ応答	平成20年3月10日	保育援助場面での子どもと保護者への効果的な声かけについて論じている。保育園や幼稚園で行なわれる保育実践を中心に解説を行った。なお、本人は保育実践において児童の権利を踏まえつつ、保育士としての倫理観や保育観に基づいて、保育士、子ども、親の望ましい関係を構築するための具体的な言葉かけや援助内容、方法について論じた。 ・編集 横井一之、吉弘淳一 ・「第15章　児童の権利と職業倫理　3．保育者の職業倫理と保育の質を高める実践」（7 頁，209-215）を担当

3）おもしろく簡潔に学ぶ保育内容総論	平成20年3月31日	保育内容総論の領域と各年齢の発達、保育者に求められる資質、保育観、子ども観などを簡潔に論じた。なお、本人は3歳児、4歳児、5歳児の生活と保育内容の実際について、子どもへの具体的な保育実践事例を交えて子どもと親との望ましい関係の中で行われる具体的な言葉かけや援助内容、方法について論じた。 ・岸井勇雄監修、上野恭裕編集 ・9-3「3歳児の生活と保育内容の実際を確かめよう(5頁,143-147)」9-4「4歳児の生活と保育内容の実際を確かめよう(5頁,147-151)」9-5「5歳児の生活と保育内容の実際を確かめよう(4頁,151-154)」を担当
4）体験・実践・事例に基づく保育内容「環境」	平成20年4月1日	子どもを取り巻く環境の変化と子どもに及ぼす影響などを正しく理解するために、自然・社会環境を解説するとともに、環境への関わり方が実践的に記載されている。子どもたちの発達を促すための生活体験を重視した保育内容と方法を論じた。本人は体験、実践、事例に基づいた保育内容環境の課題とその方向性について展望し、論じた。 ・編集大澤力 ・「20 章保育内容環境の課題と展望」（3頁,194-196）を担当
5）保育内容・方法総論の理論と活用	平成22年2月28日	保育内容総論の各領域と子どもの発達や保育者に求められる資質、保育観、子ども観などを含めて保育の原理や方法について包括的に論じた。また、保育の原理や方法に加えて、幼児虐待と家庭格差問題、認定こども園の役割、家庭と園の連携など乳幼児を取り巻く課題と今後の保育のあり方について述べた。本人は「保育内容」と「保育方法」の関連及び保育活動と「保育評価」の関連について具体的な実践事例を交えて論じた。 ・上野恭裕編集 ・3章　保育活動における「保育対象」の分析（2頁,42-43）、9章　「保育内容」と「保育方法」の関連　考えてみよう（2頁,125-126）を担当

6）保育分野における相談援助・相談支援	平成23年5月10日	保育の実践現場における相談援助と相談支援の理論と実践について論じている。担当章では、障害のある子どもとその保護者への相談援助についてケーススタディーの必要性と意義を論じるとともに事例の概要及び発達臨床センターにおけるアセスメントセッションについて論述した。 ・監修　西尾祐吾　編集　立花直樹・安田誠人 ・「第3章 障がいのある子どもとその保護者への支援の事例分析」(9頁,234-243)を担当 ・分担執筆　新川朋子、小林重雄 ・共同研究のため本人担当部分抽出不可能
7）保育現場で役立つ相談援助・相談支援	平成25年4月10日	保育における相談援助と相談支援に関する理論と実践について論じている。担当章では、障害のある子どもとその保護者への相談援助について、事例の概要を述べるとともに、発達臨床センターにおけるアセスメントとトリートメントの詳細について論述した。 ・監修　西尾祐吾　編集　立花直樹・安田誠人 ・「第3章 障がいのある子ども・保護者支援の実際」(10頁:242-251)を担当
8)知識を生かし実力をつける子ども家庭福祉	平成 25 年12月1日	子どもと家庭を取り巻く今日の状況、子ども家庭福祉の定義、歴史、法制度と実施機関、保育サービスと地域子育て支援、母子の健康と子育て支援サービス、障害のある子どもへの福祉サービス、子どもの健全育成、社会的養護、少年非行、ひとり親家庭への支援、外国籍の子どもへの支援、学校でのさまざま問題、保育現場における子ども家庭福祉相談援助活動について述べている。本人は、子どもの保護者への相談援助の基本姿勢と原則の節を担当している。 ・監修　流石智子　編集　浦田雅夫 ・「相談援助の基本姿勢と原則」(3頁:166-168)を担当
9)家庭支援論	平成25年9月20日	家庭・家族の定義、家庭支援の必要性、現代家族の人間関係、地域社会の変容、男女共同参画社会、家庭支援の実際、子育て支援制度・サービス、関係機関や人との連携、子育て負担・不

		安を抱えた保護者への支援、発達が気になる子どもへの支援、ネグレクト・不適切な養育家庭への支援などについて述べている。本人は、家庭との信頼関係に基づいて、パートナーシップを形成し、緊密な連携に基づいて行われる保育実践について述べている。 ・監修　林邦雄　谷田貝公昭　編集　中野由美子 ・「第7章 家庭との緊密な連携・パートナーシップ」(11頁:84-94)を担当
10）事例で学ぶスーパービジョン-対人援助の基礎知識・技術を通して	平成27年3月5日	福祉・保育の実践現場における対人援助の専門的知識と技術について論じている。なお、本人は、子育て支援センターで行なわれるスーパービジョンの過程について解説している。また、スーパーバイジーとスーパーバイザーがどのようなやりとりを通して保育実践力を高めていくか、スーパーバイザーのコメントについて述べている。 ・編集吉弘淳一・横井一之 ・「事例 8 子育て支援センターにおけるスーパービジョン」（9 頁，145-153）を担当
11）障がい児保育の基本と課題	平成28年9月15日	障害児保育の中において、子ども同士のかかわりと育ち合いを論じている。まず、保育所保育指針第2章に示される子どもの発達について解説している。また、統合保育の中での子ども同士の育ちについて論じている。さらに、子ども同士がどのように関わり合い、育ち合っていくべきか、事例を通して解説するとともに、今後の課題について述べている。 ・編集井村圭壮・今井慶宗 ・「第 8 章　子ども同士のかかわりと育ち合い」(6頁，71-76）を担当
12）成長し続ける教育・保育実習	平成30年3月28日	幼保連携型認定子ども園で教育・保育実習を行う際には、2017 年告示の「幼保連携型認定子ども園教育・保育要領」の改訂のポイントを理解する必要があることを(1)学びの連続性(2)1 日の生活の流れの連続性から述べた。また、幼保連携型認定

		子ども園での教育・保育実習の意義と目的を(1)認定子ども園の役割の理解(2)「教育・保育」の自然な流れへの配慮(3)幼保連携型認定子ども園で行われる子育て支援に分けて述べた。 ・編集　浦田雅夫 ・「第3章－3　幼保連携型認定子ども園での教育・保育実習の意義と目的」(2頁、80－81）を担当
13）保育内容「人間関係」	平成30年4月1日	幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携認定子ども園3法令の同時改訂(定)の意味と、その中の幼児期に育てたい力(1)幼児期において育みたい脂質・能力と、(2) 幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿を述べた。次に3歳以上児の人間関係の育ちと内容の中で、「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」から領域「人間関係」に関連する部分を抽出し事例を交えて解説した。 ・編集　徳安敦 ・「第5章　3歳以上児の発達と人間関係の育ち」（14頁、63－76）を担当
3　教育上の能力に関する大学等の評価 四日市大学環境情報学部　非常勤講師　の授業評価	平成19年～平成27年3月	授業評価5段階評定における平均値4.1～4.6
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1．大学教育改革に関する団体等での活動	平成24年3月3日	大学教育改革フォーラム in 東海 2012 会場：名古屋大学 東山キャンパス ES総合館 ・新川朋子：生涯発達の視点に着目した対人援助専門職養成教育－自分自身の生き方を見つめ直してー，名古屋大学高等教育研究センター，FD・SDコンソーシム名古屋，P10.
	平成25年3月2日	大学教育改革フォーラム in 東海 2013 会場：名古屋大学 東山キャンパス ES総合館 ・新川朋子：実践事例を通して主体的に学び考える保育士・幼稚園教諭養成，名古屋大学高等教育研究センター，FD・SDコンソーシム名古屋，P31.

	平成28年3月12日	大学教育改革フォーラム in 東海 2016 会場：愛知大学 ・新川朋子：高等学校と短期大学の連携事業における保育基礎講座と保育体験の取組み，名古屋大学高等教育研究センターFD・SD コンソーシアム名古屋
2．保育実習（施設）における実習生の受け入れ指導	平成 4 年 4 月 ～ 平 成 10 年 3 月	知的障害児通園施設通園部及び療育部における保育実習生への実習指導業務
3．保育実習（保育所）における実習生の受け入れ指導	平成元年 4 月～平成 4 年 3 月 平成 10 年 4 月 ～ 平 成 19 年 3 月	保育所における保育実習生への実習指導業務
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 保育士資格 自閉症スペクトラム支援士	 平成24年7月20日 平成21年6月	
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）保育福祉小六法編集委員	 平成23年3月	 保育福祉小六法 2010 年版以降現在に至るまで、保育福祉小六法編集委員を務めている。
2）滋賀県、滋賀県社会福祉協議会主催　滋賀県民生委員児童委員のための新任研修会　講師	平成 25 年 12 月 平成 28 年 12 月	滋賀県内の民生委員児童委員を対象に「対人援助」について論じた。
3）保育士資格取得特例講座「乳児保育」講師	平成27年7月、平成28	幼稚園教諭を対象に、乳児の発達や支援の方法についてグループ討議などを加えながら講義を行

	月 1 月、7 月 平成 29 年 7 月、1 月	った。
4）教員免許更新講習会 選択講習「配慮が必要な子どもと保護者への支援のあり方」　講師	平成 27 年 8 月、12 月	小学校、幼稚園、保育所の教諭、保育士を対象に、発達障害の子どもへのアセスメントと保護者への支援の方法を講義した。
5）教員免許更新講習会 選択講習「発達障がいのアセスメント」　講師	平成 28 年 8 月、12 月 平成 29 年 8 月、12 月	小学校、幼稚園、保育所の教諭、保育士を対象に発達障害の子どもへのアセスメントの方法を、事例を取り入れながら講義した。
6）王寺町教育委員会　教育委員	平成 29 年 8 月（現在に至る）	定例教育委員会に出席し、町内の教育について討議する。
7）王寺町義務教育学校推進委員会　委員	平成 29 年 8 月（現在に至る）	義務教育学校推進委員として、義務教育学校施設設備プロジェクトチームに所属し、町内の学校長、教頭とともに義務教育学校について討議を進める。
8）王寺町障害者計画・障害福祉計画策定委員会委員	平成 29 年 12 月 1 日 平成 29 年 1 月 30 日 平成 29 年 2 月 26 日	王寺町障害者計画・障害福祉計画策定委員会に出席し、計画を策定する。
9）内閣府認定　公益財団法人　総合健康推進財団大阪府保育士等キャリアアップ研修【幼児教育】	平成 30 年 2 月 10 日、11 日、20 日	・幼児教育の意義・小学校との接続・幼児の発達に応じた保育内容・幼児教育の指導計画、記録および評価・幼児教育の環境について、中堅保育士を対象に研修を行った。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1．家族のための心理学	共著	平成 17 年 4 月 1 日	保育出版	家族システム、家族機能、家族円環論、家族心理学、家族構造、家族力動など家族理解の基礎理論とともに家族関係と生涯発達、家

				族と社会環境、面接、観察、検査、アセスメント、事例研究などの理解、家族療法などについて解説している。なお、本人担当節では、「母子分離不安と心理臨床」について家族適応障害事例を用いて具体的な援助過程について論じた。 ・編集　小林芳郎 ・「母子分離不安と心理臨床」（5頁，173－177）を担当
2. 子どもと保護者への効果的な声かけ応答	共著	平成 20 年 3 月 10 日	金芳堂	保育援助場面での子どもと保護者への効果的な声かけについて論じている。保育園や幼稚園で行なわれる保育実践を中心に解説を行っている。なお、本人は、保育実践において児童の権利を踏まえつつ、保育士としての倫理観や保育観に基づいて子どもと家族との望ましい関係性の中で行われる具体的な言葉かけや援助内容、方法について論じた。 ・編集 横井一之・吉弘淳一 ・「第 15 章　児童の権利と職業倫理　3．保育者の職業倫理と保育の質を高める実践」（7 頁，209-215）を担当
3. おもしろく簡潔に学ぶ保育内容総論	共著	平成 20 年 3 月 31 日	保育出版	保育内容総論の領域と各年齢の発達、援助者に求められる資質、保育観、子ども観などを簡潔に論じている。また、保育の多様化における課題、幼児虐待と家庭格差問題、認定こども園の役割、家庭と園の連携の実際と課題など乳幼児を取り巻く課題と今後の保育のあり方について述べている。なお、本人は3歳児、4歳児、5歳児の生活と保育内容の実際について具体的な保育実

				践事例を交えて、子どもと家族との望ましい関係の中で行われる具体的な言葉かけや援助内容、方法について論じた。 ・監修　岸井勇雄、編集　上野恭裕 ・9-3「3 歳児の生活と保育内容の実際を確かめよう（5 頁, 143-147）」9-4「4 歳児の生活と保育内容の実際を確かめよう（5 頁, 147-151）」9-5「5 歳児の生活と保育内容の実際を確かめよう（4 頁, 151-154）」を担当
4. 体験・実践・事例に基づく保育内容「環境」	共著	平成20年4月1日	保育出版	子どもを取り巻く環境の変化と子どもに及ぼす影響などを正しく理解するために、自然・社会環境を解説するとともに、環境への関わり方が実践的に記載されている。子どもたちの発達を促すための生活体験を重視した保育内容と方法を論じている。本人は体験、実践、事例に基づいた保育内容環境の課題について述べるとともに、今後の展望と方向性について論じた。 ・編集　大澤力 ・20 章「保育内容環境の課題と展望」（3 頁, 194-196）を担当
5．保育内容・方法総論の理論と活用	共著	平成22年2月28日	保育出版	保育内容総論の各領域と子どもの発達や保育者に求められる資質、保育観、子ども観などを含めて保育の原理や方法について包括的に論じている。また、保育の原理や方法に加えて、幼児虐待と家庭格差問題、認定こども園の役割、家庭と園の連携など乳幼児を取り巻く課題と今後の保育のあり方について述べている。本人は

				「保育内容」と「保育方法」の関連及び保育活動と「保育評価」の関連について具体的な実践事例を交えて論じた。 ・編集　上野恭裕 ・3 章　保育活動における「保育対象」の分析（2 頁,42-43）、9 章「保育内容」と「保育方法」の関連　考えてみよう（2 頁,125-126）を担当
6. 保育分野における相談援助・相談支援	共著	平成23年5月10日	晃洋書房	保育の実践現場における相談援助と相談支援の理論と実践について論じてある。担当章では、障害のある子どもとその保護者への相談援助についてケーススタディーの必要性と意義を論じるとともに事例の概要及び発達臨床センターにおけるアセスメントセッションについて論述した。 ・監修西尾祐吾　編集立花直樹・安田誠人 ・「第 3 章障がいのある子どもとその保護者への支援の事例分析」(9 頁，234-243)を担当 ・分担執筆　新川朋子、小林重雄 ・共同研究のため本人担当部分抽出不可能
7. 保育現場で役立つ相談援助・相談支援	共著	平成 25 年 4 月 10 日	晃洋書房	保育における相談援助と相談支援に関する理論と実践について論じている。担当章では、障害のある子どもとその保護者への相談援助について、事例の概要を述べるとともに、発達臨床センターにおけるアセスメントとトリートメントの詳細について論述した。 ・監修　西尾祐吾　編集　立花直樹・安田誠人 ・「第3章障がいのある子ども・

				保護者支援の実際」(10頁:242-251)を担当
8.知識を生かし実力をつける子ども家庭福祉	共著	平成25年12月1日	保育出版	子どもと家庭を取り巻く今日の状況、子ども家庭福祉の定義、歴史、法制度と実施機関、保育サービスと地域子育て支援、母子の健康と子育て支援サービス、障害のある子どもへの福祉サービス、子どもの健全育成、社会的養護、少年非行、ひとり親家庭への支援、外国籍の子どもへの支援、学校でのさまざま問題、保育現場における子ども家庭福祉相談援助活動について述べている。本人は、保護者に対して行う相談援助の基本姿勢と原則を担当している。 ・監修　流石智子　編集　浦田雅夫 ・「14-2相談援助の基本姿勢と原則」(3頁:166-168)を担当
9.家庭支援論	共著	平成25年9月20日	一藝社	家庭・家族の定義、家庭支援の必要性、現代家族の人間関係、地域社会の変容、男女共同参画社会、家庭支援の実際、子育て支援制度・サービス、関係機関や人との連携、子育て負担・不安を抱えた保護者への支援、発達が気になる子どもへの支援、ネグレクト・不適切な養育家庭への支援などについて述べている。本人は、家庭との信頼関係に基づいて、パートナーシップを形成し、緊密な連携に基づいて行われる保育実践について述べている。 ・監修　林邦雄　谷田貝公昭　編集　中野由美子 ・「第7章 家庭との緊密な連携・

				パートナーシップ」(11頁:84-94)を担当
10. 事例で学ぶスーパービジョン-対人援助の基礎知識・技術を通して	共著	平成27年3月5日	建帛社	福祉・保育の実践現場における対人援助の専門的知識と技術について論じている。なお、本人は、子育て支援センターで行なわれるスーパービジョンの過程について解説している。また、スーパーバイジーとスーパーバイザーがどのようなやりとりを通して保育実践力を高めていくか、スーパーバイザーのコメントについて述べている。 ・編集吉弘淳一・横井一之 ・「事例 8 子育て支援センターにおけるスーパービジョン」(9 頁, 145-153) を担当
11) 障がい児保育の基本と課題	共著	平成28年9月15日	学文社	障害児保育の中において、子ども同士のかかわりと育ち合いを論じている。まず、保育所保育指針第2章に示される子どもの発達について解説している。また、統合保育の中での子ども同士の育ちについて論じている。さらに、子ども同士がどのように関わり合い、育ち合っていくべきか、事例を通して解説するとともに、今後の課題について述べている。 ・編集井村圭壮・今井慶宗 ・「第 8 章　子ども同士のかかわりと育ち合い」(6 頁, 71-76) を担当
12)「福井の『幸せ』婚活マニュアル―指導と実践―」	共著	平成28年12月5日	エクシート	国の方針として2014年から婚活支援事業を推進している。各自治体がその地域に準じたイベントを企画した結婚支援事業に対

				して、国がその運営費用の一部を支援している。それを受けて各自治体においては様々な婚活事業での取り組みを行っている。本人担当箇所では、男性と女性が、どのような将来の自分の姿をイメージし、職業への意識を持っているか国の施策や調査データを用いて述べている。 ・編集吉弘淳一 ・「男性・女性の意識の違い―男性と女性で異なる将来の姿と職業意識」(2 頁，69-70)を担当
13)「成長し続ける教育・保育実習」	共著	平成 30 年 4 月 1 日	教育情報出版	幼保連携型認定子ども園で教育・保育実習を行う際には、2017 年告示の「幼保連携型認定子ども園教育・保育要領」の改訂のポイントを理解する必要があることを(1)学びの連続性(2)1 日の生活の流れの連続性から述べた。また、幼保連携型認定子ども園での教育・保育実習の意義と目的を(1)認定子ども園の役割の理解(2)「教育・保育」の自然な流れへの配慮(3)幼保連携型認定子ども園で行われる子育て支援に分けて述べた。 ・編集　浦田雅夫 ・「第 3 章－3　幼保連携型認定子ども園での教育・保育実習の意義と目的」(2 頁、80－81) を担当
14)「保育内容（人間関係)」	共著	平成 30 年 4 月 1 日	青鞜社	幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携認定子ども園 3 法令の同時改訂(定)の意味と、その中の幼児期に育てたい力(1)幼児期において育みたい脂質・能力と、(2) 幼児期の終わりまでに育って欲しい 10 の姿を述べた。次に 3

				歳以上児の人間関係の育ちと内容の中で、「幼児期の終わりまでに育って欲しい 10 の姿」から領域「人間関係」に関連する部分を抽出し事例を交えて解説した。 ・編集　徳安敦 ・「第 5 章　3 歳以上児の発達と人間関係の育ち」(14 頁、63－76)を担当
13)「成長し続ける教育・保育実習」	共著	平成 30 年 4 月 1 日	教育情報出版	幼保連携型認定子ども園で教育・保育実習を行う際には、2017 年告示の「幼保連携型認定子ども園教育・保育要領」の改訂のポイントを理解する必要があることを(1)学びの連続性(2)1 日の生活の流れの連続性から述べた。また、幼保連携型認定子ども園での教育・保育実習の意義と目的を(1)認定子ども園の役割の理解(2)「教育・保育」の自然な流れへの配慮(3)幼保連携型認定子ども園で行われる子育て支援に分けて述べた。 ・編集　浦田雅夫 ・「第 3 章－3　幼保連携型認定子ども園での教育・保育実習の意義と目的」(2 頁、80－81) を担当
14)「保育内容（人間関係)」	共著	平成 30 年 4 月 1 日	青鞜社	幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携認定子ども園 3 法令の同時改訂(定)の意味と、その中の幼児期に育てたい力(1)幼児期において育みたい脂質・能力と、(2) 幼児期の終わりまでに育って欲しい 10 の姿を述べた。次に 3 歳以上児の人間関係の育ちと内容の中で、「幼児期の終わりまでに育って欲しい 10 の姿」から領域「人間関係」に関連する部分を

				抽出し事例を交えて解説した。 ・編集　徳安敦 ・「第5章　3歳以上児の発達と人間関係の育ち」(14頁、63－76)を担当
（学術論文） 1. 育ち合い-子ども・親・保護者、ぶつかりを通して学んだこと-（査読有）	共著	平成2年3月	障害児教育実践研究，第15号, 障害児教育実践研究会	統合保育を行っている保育所における3年間の保育実践記録を縦断的に検討し、子どもたちの育ちをエピソード分析の手法を用いて検討している。その結果、障害をもった子どもと保育所の子どもたちが関わる中で、子どもたちの間でぶつかり合い、励まし合って、仲間となって成長していくプロセスを明らかにしている。 ・分担執筆　瀬古正美、大田千里、新川朋子 ・共同研究のため本人担当部分抽出不可能
2. 自閉症幼児のコミュニケーション行動に関する研究-行動論的アプローチによる事例研究を通して-	単著	平成22年3月	名古屋経済大学大学院人間生活科学研究科幼児保育学専攻修士論文	発達臨床センター、幼稚園、家庭の連携による療育を検討している。機会利用型訓練として、発達臨床センターにおいての個別指導による集中訓練と並行し、幼稚園場面での日々の生活を通した指導を行っている。幼稚園への定期訪問や担当者との協議、幼稚園職員の臨床センター見学やスーパーバイザーとの話し合い、文書のやり取りなどによって、臨床センターの個別訓練と幼稚園での指導効果を明らかにした。
3. 自閉症幼児のコミュニケーション行動の活発化への行動論的アプローチ(1)―自閉	共著	平成22年3月	幼児教育研究紀要, 第22号，名古屋経済大学・名古屋経済大学短期大学部幼児教育研究会.	自閉症の定義及び自閉症研究の歴史的変遷について論じた。また、自閉症幼児とクラスメート及び保育士との間で行われるコミ

症研究・援助の進め方の歴史的変遷を中心に―				ュニケーション行動の活発化を目的とした自閉症幼児のコミュニケーション行動を活発化させていくための事例研究の意義と必要性について述べた(6頁:21-26)。 ・分担執筆　新川朋子・小林重雄・共同研究のため本人担当部分抽出不可能
4. 自閉症幼児のコミュニケーション行動の活発化への行動論的アプローチ（2）―発達臨床センターにおけるセッションを通して―	共著	平成 23 年 3 月	幼児教育研究紀要,第 23 号，名古屋経済大学・名古屋経済大学短期大学部幼児教育研究会.	周囲の人々と適切な人間関係を築く上で深刻な困難さを生じさせる原因となる自閉症幼児のコミュニケーションの困難さを改善するために、本研究では、自閉症幼児に発達臨床センターにおいて行動論的アプローチに基づいたセッションを行った。発達臨床センターにおけるセッションによる指導効果とその成果についてコミュニケーションの力量レベルおよび学習レベルを中心に検討した(7 頁:9-15)。 ・分担執筆　新川朋子・小林重雄・共同研究のため本人担当部分抽出不可能
5. 心理社会的発達理論に基づいた学生の考える課題解決とは	単著	平成 24 年 9 月	四日市大学環境情報学論集,16(1)，四日市大学環境情報学研究会.	学生の考えるエリクソンの心理社会的発達理論による「発達課題」と「徳目」について、テキストマイニングの手法を用いて分析した。その結果、児童期の「勤勉性」、青年期の「同一性の確立」、成人期の「親密性」を課題だと考えていることが明らかになった。また、自分自身のこれまでの生き方を振り返り、心の内面にまで踏み込んで「自分とは何か」「自分の課題とは何なのか」という問いを持ち「親密性」を課題として「孤独」を乗り越えようと模索してい

				ることもわかった(8 頁:57-64)。
6. 岡村理論における社会生活の基本的要求に関する大学生の意識	単著	平成 25 年 3 月	四日市大学環境情報学論集,16(2), 四日市大学環境情報学研究会.	岡村理論における社会生活の基本的要求について学んだ後に提出したレポートを集計、分析、検討した。その結果、「経済的安定」「職業的安定」「家族的安定」に高い要求を感じていることがわかった。また、生活形態が家族と同居の学生の方が、それ以外の学生よりも「職業的安定の要求」（t=2.098, df=42, p<.05）が高く、留学生の方がそれ以外の学生よりも「保健・医療の保障の要求」（t=-2.828, df=45, p<.001）や「社会参加ないし社会的協同の機会の要求」（t=-2.068, df=43, p<.05）が高いことが明らかになった(11 頁:101-111)。
7. 自閉症幼児のコミュニケーション行動の活発化への行動論的アプローチ（3）―タイムサンプリング法による効果測定―	共著	平成 26 年 3 月	幼児教育研究紀要,第 26 号, 名古屋経済大学・名古屋経済大学短期大学部幼児教育研究会.	幼稚園における自閉症幼児のコミュニケーションの機能化を図るために、行動論的アプローチによる個別指導と並行して幼稚園で行った「機会利用型指導法」及び「スーパーバイザーによる助言」の効果についてタイムサンプリング法を用いて測定し検討した。分析の結果、クラスの変化にも適応し始め、ひとり言の減少に伴って、自分から行動したり、自分から他児へと接近する頻度が増加したことが明らかになった(9 頁,23-31)。 ・分担執筆　新川朋子・小林重雄・伊藤健次 ・共同研究のため本人担当部分抽出不可能
8.高短連携事業に基づ	共著	平成 28 年 3	大阪千代田短期大学紀	高短連携事業に基づいた保育基

いた保育基礎講座と保育体験による学びの定量化と内容分析		月	要，第 44 号，大阪千代田短期大学.	礎講座と保育体験による学びの定量化とそれに基づく内容分析を行った。分析の結果、保育基礎講座前半と 1 回目の保育体験後には、子どもの気持ち、子どもと自分、子どもと保育者という観点から学んでおり、保育基礎講座後半と 2 回目の保育体験後には、見学によって、絵本の読み聞かせや先生の子どもへの関わり、ゴムとびや給食の場面での活動という観点から具体的な保育実践について学んでいたことが明らかになった(10 頁,71-80)。 ・分担執筆　新川朋子・寄ゆかり ・共同研究のため本人担当部分抽出不可能
9. 小規模保育事業の推進要因と課題－子ども・子育て支援新制度の動向から－	単著	平成 29 年 3 月	大阪千代田短期大学紀要，第 45 号，大阪千代田短期大学.	国における待機児童対策、子ども・子育て支援法、小規模保育事業の先取り・前倒しである「待機児童解消加速化プラン」および，小規模保育事業の本格実施による「小規模保育事業を巡る法・制度の状況」「施設・事業等の利用手続きと市町村の役割」について整理，検討することで、子ども・子育て支援新制度における小規模保育事業がどのように推進されているか論じた。今後は、質的調査および量的調査を通して実証的に検討することが課題となった(10 頁,25-34)。
10. 子ども子育て支援新制度の小規模保育における先取り事業の実態調査	単著	平成 30 年 3 月	太成学院大学紀要, 第 37 号，太成学院大学.	子ども子育て支援新制度の小規模保育における先取り事業において保育環境の実態を把握した。本格実施に向けて小規模保育のあり方について検討した結果，行政からの巡回指導や施設長との会議の必要性が示唆された。ま

				た、短時間のパート保育士は有資格者でない者が保育にあたっていることが明らかになった。さらに，38施設のうち30の施設が卒園後の受け入れのない状態であり，これまでに議論されてきた通りであるという結果となった。そして、園庭については，無の施設が82%を占めていた(8頁，85-92)。
（その他） 1. 自閉症幼児へのコミュニケーションの機能化を目指した指導―発達臨床センターにおけるセッションを通して―	共著	平成 22 年 9 月	日本自閉症スペクトラム学会第 9 回研究大会発表論文集, 日本自閉症スペクトラム学会. （於栃木県教育会館）	自閉症幼児に対して発達臨床センターにおいて行動論的アプローチに基づいた個別指導を行い、コミュニケーションの力量レベルおよび学習レベルについての指導効果とその成果を検討した。その結果、本児の語彙の拡大、知覚運動系の知的発達は、顕著に認められた。また、語彙の拡大に伴い、要求言語が増加し、奇声を減少させる結果となり、家庭、また集団の中においても、家族や周囲の子どもたちとのコミュニケーションの困難さを軽減させることにもつながった。 ・分担執筆　新川朋子・小林重雄 ・共同研究のため担当部分抽出不可能
2. 自閉症幼児の幼稚園でのコミュニケーション行動の広がり―発達臨床センターにおける行動論的アプローチを通して―	共著	平成 23 年 9 月	日本自閉症スペクトラム学会第 10 回研究大会発表論文集, 日本自閉症スペクトラム学会. （於名古屋国際会議場）	自閉症幼児のコミュニケーション行動の活発化を目指した発達臨床センターにおいての行動論的アプローチと並行して行った幼稚園での指導の経過及び訪問ビデオ分析結果を報告した。分析の結果、ことばの増加はみられなかったものの、行動面では他児との関わりが増加し、それに伴うコミュニケーション行動の広がりが確認された。

				・分担執筆　新川朋子・小林重雄 ・共同研究のため担当部分抽出不可能
3.生涯発達の視点に着目した対人援助専門職養成教育－自分自身の生き方を見つめ直してー	単著	平成 24 年 3 月	大学教育改革フォーラム in 東海 2012,　FD・SD コンソーシアム名古屋, 名古屋大学高等教育研究センター,（於名古屋大学）	生涯発達の視点に着目した対人援助専門職養成教育を福祉系講義の中で行った。まず、視聴覚教材を用いて少子高齢化社会の実際について学生が学んだ。次に、21 世紀の福祉社会を学生自身が今後どのように生きていくか、自分自身の生き方をふりかえり、見つめ直した。その後、各自レポートにまとめて提出した。講義後に提出したレポートの内容を生涯発達の視点から整理し、学生自身がどのような点について自分自身の生き方を見つめ直していたか把握、検討した。
4.5 才児クラスに転園した子どもへの描画支援と心の育ち	単著	平成 24 年 5 月	日本保育学会第 66 回大会発表論文集,日本保育学会.（於松山東雲女子大学）	5 才児クラスに転園した子どもへの描画支援と心の育ちを検討した。転園前の保育所で絵を描く際に周りの子どもたちから中傷されて、心を傷めていた。そこで、楽しい雰囲気のなかで「曼荼羅」に色を塗るなど描画支援を行った。その結果、色を塗ったり、描いたりすることへの抵抗がなくなり、難易度の高い曼荼羅模様の作成にも自主的に曼荼羅作成に取り組むようになった。また、本児は鏡の中をのぞき込みながら、「目の中に黒いところあるなー」と語りながら自分の顔を観察し、自発的に自分の顔を描けるようになるまで成長・発達した。
5.実践事例を通して主体的に学び考える保育士・幼稚園教諭養成	単著	平成 25 年 3 月	大学教育改革フォーラム in 東海 2013,　FD・SD コンソーシアム名古屋,	中央教育審議会第 82 回総会において、「ディスカッションやディベートといった双方向の授業に

			名古屋大学高等教育研究センター(於名古屋大学)	よる主体的な学修を促す学士課程教育の質的転換が必要である」ことが示されている。そこで、主体的に学び、考え続ける力を持った保育士、幼稚園教諭を養成するため、保育所における保護者支援を学ぶ際、実践事例を提示して共通理解を深め、実践事例についてディスカッションを行い、学び合った成果を整理し、報告した。
6.高等学校と短期大学の連携事業における保育基礎講座と保育体験の取組み	単著	平成28年3月	大学教育改革フォーラムin東海2016, FD・SDコンソーシアム名古屋, 名古屋大学高等教育研究センター(於愛知大学)	大学、短期大学は、地域を支える専門人材の育成という社会的に大きな役割を担っており、各地域からの期待が寄せられている。そこで、高等学校と短期大学の連携事業における教育の改善・支援につなげるため、大阪千代田短期大学幼児教育科における高短連携事業に基づいた保育基礎講座と保育体験の内容とその成果を発表・報告した。
7.A Study by Pre Small-scale Childcare Services Enterprise Type of the Comprehensive Support System for Children and Child-rearing in Japan	共著	平成28年6月	The Joint World Conference on Social Work, Education and Social Development 2016. From 27 June, 2016 to 30 June, 2016. The Conference is hosted at the COEX Convention & Exhibition Center in Seoul, Korea.	This study analyzed pre small-scale childcare services enterprise of the comprehensive support system for children and child-rearing in Japan. A statistical analysis was applied by using “IBM SPSS statistics Version 21” for the reported answers. As a result, Facility type analytical results were as follows. The A type of cooperation destination, nursery school, kindergarten there were many. In addition, its own set of childcare fees was many. Then, B type was often garden-free facility. In

				addition, C-type of cooperation destination nursery there were many. In addition, the garden with no facilities there were many. The facility, which according childcare fee to municipalities there were many. ・Tomoko Niikawa, Toru Nakayama
8. 保育学生の「保育実習以外の保育経験」と「保育実習の学習課題」や「ソーシャルスキル」の関係性	単著	平成 29 年 3 月	大学教育改革フォーラム in 東海 2017, FD・SD コンソーシアム名古屋,名古屋大学高等教育研究センター (於金城学院大学)	保育学生の保育経験を活用した保育者養成教育を行うために、保育所でのボランティアなど「保育実習以外の保育経験」と「保育実習の学習課題」や「ソーシャルスキル」の関係性を検討した。その結果明らかになった保育実習以外の保育経験と関連している「保育士の資質」、「職員連携」、「地域の子育て家庭への支援」に関する学習を動機に対応した保育者養成教育の必要性が示唆された。また、保育実習以外の保育経験のない学生よりも経験のある学生の方が、「思考の柔軟性に弱さがあること」に対応した保育者養成教育を行う必要性を示唆した。

（人間）林　準平

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年　3 月　9 日

氏名　林　準平　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
健康・スポーツ科学	テニス、バイオメカニクス、動作解析、筋電図
教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項	

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例		
体育実技（大阪青山大学・短期大学　非常勤講師）	平成19年4月	大阪青山大学・短期大学の学部生を対象に、テニス・ディスクゴルフ・陸上運動・（歩行および走行）の指導を実施した。なお指導においては、高速度カメラを用いて、指導者と対象者が動作に対する共通理解を深めながら展開できるよう工夫した。（平成19年7月まで）
運動学演習 C、ゼミナールおよび卒業研究（横浜国立大学　ティーチングアシスタント・リサーチアシスタント）	平成22年4月	博士後期課程在籍者対象アシスタントとして、担当教員が実施する研究プロジェクトの一端を担うとともに、学部生および大学院生への講義に使用する配布資料や授業用スライドの準備を行った。また授業内においては、ファシリテーターとして参加し、学習者同士の活発な議論やアクティブラーニングによる課題解決型学習が展開できるよう工夫した。（平成24年3月まで）
国際共生とスポーツ（横浜国立大学　非常勤講師）	平成23年9月	本講義では、国際的に競技者・実践者が多く、かつ生涯スポーツとしても幅広く認知されている、ウォーキング・ゴルフ・テニスを題材に展開した。その際、合理的な動作とは如何なるものか、あるいは運動実践によって齎される生理学的・心理的変化とは如何なるものであるかを学ぶとともに、実際の運動実践でそれらを体感できるようにした。（平成25年3月まで）
健康運動Ⅰ・Ⅱ（高千穂大学　非常勤講師）	平成24年4月	スポーツ動作において、自らの主観的努力と客観的結果には少なからず誤差が存在しているがが、実技指導において対象者がこの誤差を認識できれば、技能向上に大きく貢献すると考える。そこで本授業では、高速度カメラで撮影した映像を動作解析ソフトにて分析し、そこから得られた知見を活用して、自らの動作に対する客観的な理解が深まるよう指導した。（平成25年3月まで）
球技Ⅳ　ターゲット型スポーツ（プール学院大学非常勤講師）	平成 26 年10月	当該授業は、数種類のスポーツをオムニバス形式で実施しているが、その中におけるテニスの内容を担当した。授業においては、自らの技能を向上させるだけでなく、それらを如何にして他者へ

		伝えるかといった目標を設定し、それを達成するため、学生による模擬授業形式での展開や相互に意見交換できる雰囲気作りを工夫した。（平成 28 年 3 月まで）
2　作成した教科書，教材 体育実技補助教材（特別支援学校（聾学校）在籍児童・生徒対象）	平成 25 年 4 月	自身が有する研究手法・知見を基礎に、物理的に回しやすく跳びやすい縄跳び（短縄）を作成した。これを活用することで、数回程度しか跳べなかった児童が､50 回以上跳び続けられるようになった。（平成 29 年 3 月まで）
視聴覚教材・内容記録教材（太成学院大学在籍学生対象、授業名：ジュニアトレーニング論、ジュニアトレーニング実践実習、ジュニアスポーツ指導者論、ジュニアスポーツ実践実習、高齢者健康スポーツ指導法、障がい者スポーツ指導法）	平成 29 年 4 月	視聴覚教材や内容記録教材は、学習者に対して学習効果を高めると考える。このため、自身が担当する授業においては、パワーポイントや編集した動画を用いた視聴覚教材を作成するとともに、それらを学内 HP から閲覧・活用できるようにした。（現在に至る）
3　教育上の能力に関する大学等の評価 授業内アンケート① （太成学院大学：ジュニアトレーニング論）	平成 29 年	アンケート回答者（11 名）の 82%が、授業をわかりやすくする工夫（配付資料、視聴覚教材、授業の進め方等）に対し、『満足・まあ満足している』との評価を得た。
授業内アンケート② （太成学院大学：ジュニアスポーツ実践実習）	平成 29 年	アンケート回答者（13 名）の 84%が、意欲を引き出し、積極的・主体的に授業に参加できる工夫に『満足・まあ満足している』との評価を得た。
授業内アンケート③ （太成学院大学：高齢者健康スポーツ指導法）	平成 29 年	アンケート回答者（12 名）の 92%が、『この授業を友人や後輩にすすめたいと思いますか』との問いに対し、『そう思う・まあそう思う』と解答している。
授業内アンケート④ （太成学院大学：障がい者スポーツ指導法）	平成 29 年	アンケート回答者（69 名）の 92%が、『教員は、学生のみなさんの質問、疑問、意見に丁寧に対応してくれましたか』との問いに対し、『そう思う・まあそう思う』と解答している。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 平成 30 年度太成学院大学公開講座　講座名：数値で読み解くテニスのサーブ	平成 30 年 8 月（実施予	当講座は、近隣地域在住の方を対象に、硬式テニスの試合で役立つ、サーブにおける効率的動作

	定）	や戦術を数値から読み解き、短時間の実践を通して、それらを実感するべく開講するものである。
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）　教員免許状 小学校教諭１種免許	平成 19 年 3 月	
中学校教諭１種免許（保健体育）	平成 19 年 3 月	
高等学校教諭１種免許（保健体育）	平成 19 年 3 月	
中学校教諭専修免許（保健体育）	平成 21 年 3 月	
高等学校教諭専修免許（保健体育）	平成 21 年 3 月	
2）　学位 修士（教育学）	平成 21 年 3 月	
博士（教育学）	平成 21 年 3 月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 NPO 法人　YNU スポーツアカデミー主催 親子テニス	平成 22 年 3 月	地域のスポーツ振興と青少年の健全な育成を目指して実施した、親子で参加するテニス教室の運営の一端を担ったと同時に、指導者として携わった。（平成 23 年 11 月まで）
NPO 法人　YNU スポーツアカデミー主催 社会人テニス指導者育成教室	平成 22 年 3 月	社会人を対象とした指導者育成教室の実施するにあたって、その運営の一端を担ったと同時

		に、指導者として参加した。（平成 23 年 11 月まで）
横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 硬式テニス部　外部指導者	平成 22 年 4 月	中学生の課外活動（硬式テニス部）の指導に、外部コーチとして携わった。練習には、動作解析などの研究手法を取り入れ、技術向上を目指した。（平成 24 年 7 月まで）
横浜国立大学体育会男子硬式庭球部 テクニカルコーチ	平成 22 年 4 月	横浜国立大学体育会硬式庭球部に技術指導担当テクニカルコーチとして携わり、練習に参加すると同時に、試合・遠征などにも帯同した。その際、動作解析やゲーム分析を実施すると同時に、それを基礎とした指導を実施した。（平成 25 年 3 月まで）
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 2 3				
（学術論文） 1．特徴的な各種平地歩行動作における下肢筋活動の分析（査読付）	共著	平成 19 年 12 月	日本ウォーキング学会 ウォーキング研究 11 p207-215	西島吉典、**林準平**、加藤達雄、吉澤正尹、宮下充正 本研究は、歩行動作に何らかの問題を有する者が、自らの歩行筋電図を視覚的に確認しつつ、提示された正常な筋電波形に近づけようと試みる、いわゆるバイオフィードバック・トレーニングの確立を目指し、その基礎資料の採取を目的とした。（データの収集と処理を実施するとともに、文章作成を担当した。）
2．下肢筋活動ならびに動作からみた玉砂利お	共著	平成 20 年 12 月	日本ウォーキング学会 ウォーキング研究 12	加藤達雄、西島吉典、小川雅史、福田慎吾、**林準平**、吉澤正尹、宮

よび砂路面上での歩行特性（査読付）			p147-153	下充正 本研究は玉砂利と砂路面での歩行をフォーム分析法と筋電図により分析し、板張り路面歩行との差異について検討した。その結果、玉砂利および砂路面における歩行は、大腿筋群の活動量を増すための方法の一つとして適応し得る可能性が示唆された。（データの収集と処理を実施するとともに、文章作成を担当した。）
3．テニスにおけるサーブ速度を高める要因に関する研究（修士論文：査読付）	単著	平成 21 年 3 月	大阪教育大学大学院 教育学研究科 修士論文	**林準平** 本研究はサーブ速度を高める動作要因を探るため、群間差と個体内差の観点から分析を行った。その結果、サーブの初期動作に関わる膝関節運動の善し悪しはサーブ速度に大きく関わることが示された。
4．効率的なテニスサービス動作の指導法	共著	平成 21 年 9 月	高千穂論叢 44(3) p1-11	新井健之、三澤幸雄、今野廣隆、**林準平**、蝶間林利男、西島吉典 本研究は、テニスのサービス動作を模倣した課題を、異なる所要時間で実施した際に生ずる下肢筋の筋放電量を検討し、如何なる動作所要時間が、より効率的な動作と成り得るかを明らかにしようとした。その結果、短時間で動作を実行することは、筋放電量の減少を導く要因であることが明らかとなった。この知見は今後サービスを指導する際の有益な資料になると考える。（データの収集と処理および文章作成を担当した。）
5. Determination of the Optimal Tempo for SWDM for Gait EMG Amplitude Normalization	共著	平成 23 年 3 月	大阪教育大学紀要、 第 4 部門、科学部 59(2) p187-194	Yoshinori Nishijima, Tatsuo Kato, **Jumpei Hayashi**. 本研究は歩行筋電図を標準化する際に必要な振幅の基準値を

歩行筋電図振幅波形を標準化する SWDM 法における至適動作テンポの確立				得る動作方法を検討した。その結果、テンポは毎分 30 回に設定する事が、比較的安定的で再現性の高い基準値が得られる事が示唆された。（実験補助およびデータの収集・解析を実施した。また文章作成の一部を担当した。）
6．ゴルフプレイヤーの主観的疲労に関する実態調査	共著	平成 24 年 12 月	プール学院大学紀要 第 53 号 p311-315	**林準平**、中村浩也、蝶間林利男、前田茂、寒川健二 本研究は、アマチュアゴルフプレイヤー201 名を対象にアンケート調査を実施し、ゴルフの実践によって如何なる身体部位へのストレスを生じさせるかを検討した。その結果、実践者の多くは、肩関節、腰部および下腿部に主観的疲労を生じていることが明らかとなった。疲労の蓄積はスポーツ傷害の発生と関連性が高いことから、同部位への日常的な疲労回復の手段を検討する必要性が認められた。（主執筆者としてデータの収集と処理、および文章作成を実施した。）
7．より効率的なテニスのサービス所要時間に関する研究（査読付）	共著	平成 25 年 3 月	東京学芸大学教育学研究科学校教育学研究論集第 27 号　p55-66	**林準平**、西島吉典、蝶間林利男 本研究は、サービスを打つ際に抗重力的な関節運動の起点となる膝関節の屈曲伸展動作時間をより短縮することが、サービス動作の効率性を高めるのではないかと仮説し、これを検証した。その結果、当該動作所要時間を短縮することは、打球速度を減ずることなく足底屈筋の筋放電量を減じたことから、動作の効率を高める要因であることが示された。（主執筆者としてデータの収集と処理、および文章作成を実施した。）

8．テニスサービスの打球速度を高める動作要因に関する研究：膝および肘関節動作に着目して（査読付）	単著	平成 25 年 3 月	日本テニス学会 テニスの科学第 21 号 p15-27	**林準平** 本研究は、個体内でサービスの打球速度を漸増させる課題に対し、左膝および右肘関節運動、協働関係、さらには床反力垂直成分の個体内変化を明らかにしようとした。その結果、当該課題に対し、概ね左膝関節屈曲角度の増大、右肘関節伸展角度を増大するとともに、短時間で伸展することによる角速度の増大で対応することが明らかとなった。
9．テニスの競技力を高めるサービス動作に関する研究 ―膝および肘関節に着目して―（博士論文：査読付）	単著	平成 25 年 9 月	東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科 博士論文	**林準平** 本研究は、テニスのサービスにおいて、打球速度の向上に強く関与する膝および肘関節に着目し、両関節の如何なる動作が競技力を高める要因であるかを明らかにしようとした。その結果、1：個体内で打球速度を漸増させる際、左膝関節屈曲角度を増大するとともに、右肘関節伸展動作に要する時間を短縮し、右肘関節角速度を増大させてサービスを実行すること、2：打球速度を減ずることなく筋収縮効率を高めるために、実行すべき動作が損なわれることなく、トスアップからインパクトまでの固有の所要時間を15%程度短縮してサービスを実行することが、競技力を高めるサービス動作であることを明らかにした。
10．Relationship between Stroop/reverse-Stroop interference and postural sway when	共著	平成 25 年 12 月	COMPREHENSIVE PSYCHOLOGY 2013，Volume 2，Article 9 URL:http://www.	Yoshifumi Ikeda, Shogo Hirata, Wataru Maeda, Hideyuki Okuzumi, Mitsuru Kokubun, Hisataka Ambe, Yoshiharu Fujieda, Kenichi Suijo, **Jumpei Hayashi** and

standing in elderly people 中高齢者における立位姿勢制御とストループ／逆ストループ干渉制御の関連（査読付）			amsciepub.com/doi/pdf/10.2466/22.25.CP.2.9 査読有	Misaki Iteya 近年、前頭前野の機能が、立位姿勢制御を行う際の安定性に強く関わっていると報告されている。しかしその詳細に関してまだ十分な研究がなされてはいない。そこで本研究は、これらの関連を検討することを目的とし、立位姿勢制御課題の身体動揺量と、前頭前野の機能を評価する代表的な課題の一つ、ストループ・逆ストループ課題の成績の関連を検討した。（実験補助およびデータの収集を実施した。）
11. ジャパニーズスタイルのノルディックウォーキングにおける下肢機能特性（査読付）	共著	平成 26 年 7 月	住友病院医学雑誌 第 41 号　p7-20	青木利彦、渋谷高明、**林準平**、加藤達雄、西島吉典 本研究では、健常者を対象にジャパニーズスタイルのノルディックウォーキングが通常歩行および従前から高齢者の歩行運動で多用されている一本杖歩行・二本杖歩行に比し、歩行時の左右への重心動揺が少なく、支持脚による荷重量は増え、下肢筋活動が促通されるかを検証したものである。（実験補助およびデータの収集を担当した。）
12. 男子テニスシングルスにおける異なる選手層間でのサービス関連統計データの比較　-関西学生男子選手のサービスゲームでの戦術構築を目指して-（査読付）	共著	平成 28 年 3 月	日本テニス学会 テニスの科学第 24 号 p 11-19	**林準平**、細川翔平、大原かのこ、吉山佳織、加藤達雄、西島吉典 本研究は、関西学生男子選手のサービスイン率とポイント取得率を世界のトップ選手、全日本選手、全日本学生選手のそれと比較し、それらの群間差を明らかにすることを目的とした。また得られた知見から、関西学生男子選手が、戦術としてサービスを如何に用いるべきであるかを提案することを目的とした。（主執筆者と

				してデータの収集と処理、および文章作成を担当した。）
13．三次元解析を用いたテニスのサービス速度を高める動作要因の検討	共著	印刷中	太成学院大学紀要	**林準平**、黒田岳志、西島吉典 本研究は，サービス速度を高めるための動作要因を導き出すため、三次元動作解析法を用いて、各種テニス選手権の上位群および下位群に大別した男性選手のサービス動作を検討した。その結果､打球速度の異なる2群間では、左股関節伸展角速度最大値が出現するタイミング、角速度最大値が出現する順序性、両肩右回旋角度および両膝左旋回角速度に有意な群間差が認められた。したがって、下位者のサービス速度を高めるには、膝および股関節運動の出現タイミングを改善するとともに、両肩右回旋角度および両膝左回旋角速度の増大を目指すことが重要であると示唆された。
（その他） 学会発表 1．各種歩行動作における下肢筋電図の比較 口頭発表	共同	平成 19 年 10 月	第 19 回日本体力医学会北陸地方会大会 （於金沢医科大学大学）	**林準平**、西島吉典、加藤達雄、吉澤正尹 平地歩行と 17 種の特徴的な各種歩行を行わせた際の筋電図を記録し、それらの波形の変動幅を定量すると共に各種歩行の動作特徴を明らかにすることを目的とした。その結果、後ろ歩行および踵歩行は平地歩行と比較して筋電図パターンが顕著に異なった。一方、筋放電量からみると、通常の平地歩行と比較して、特殊な各種歩行は主として大腿部で力の発揮を、下腿部では動作パターンの調整を担っていることが示唆された。（主発表者としてデ

				ータの収集と解析を実施するとともに、発表原稿を作成した。）
2．動作所要時間に着目したテニスサービス速度を向上させる指導法について ポスター発表	共同	平成 21 年 8 月	日本体育学会 第 60 回大会 （於広島大学）	**林準平**、新井健之、蝶間林利男、西島吉典 テニスのサービスにおいて動作に要する時間を変化させることが、より高い打球速度を得るための指導法となり得るかを明らかにした。（主発表者としてデータの収集と解析を実施するとともに、発表原稿を作成した。）
3．効率的なテニスサービス動作の指導法に関して ポスター発表	共同	平成 21 年 8 月	日本体育学会 第 60 回大会 （於広島大学）	新井健之、**林準平**、蝶間林利男、西島吉典 サービスを模倣した動作において、開始時から膝関節最大屈曲時までの時間を基準としてテンポを-0.3秒まで0.1秒ずつ速く行わせ、膝関節伸展に関わる筋の筋放電積分値を比較した。その結果、サービス動作のテンポを速くすることは筋放電積分値の減少に繋がり、より疲れにくい効率的な動作となりうる可能性が示唆された。（データの収集と解析を担当した。）
4．打ち込み動作における熟練者と未熟練者の動作特性 －大外刈り受け時の筋電図波形パターン－ 口頭発表	共同	平成 23 年 8 月	日本武道学会 第 44 回大会 （於国際武道大学）	佐藤康宏、矢嶋明、高根沢公一、木村昌彦、寺川勝、保科知彦、**林準平**、乙黒靖雄、田中力 打ち込み受け動作における筋活動パターンについて熟練者と未熟練者の差異を明らかにし、受け指導に用いる為の基礎データを得ることを目的とした。（実験補助およびデータの収集・解析を担当した。）
5．署熱環境下における	共同	平成 23 年 8	日本武道学会	保科知彦、木村昌彦、矢嶋明、佐

フィリピン人柔道選手と日本人柔道選手の発汗比較 口頭発表		月	第44回大会 （於国際武道大学）	藤康宏、吉鷹幸春、田中力、田中秀昌、寺川勝、**林準平** フィリピン人柔道選手の署熱特性を理解し、署熱環境下の適応傾向を明らかにすることにより、日本人の熱帯地域での練習・試合対策に役立てようとした。（実験補助およびデータの収集・解析を担当した。）
6. 中高齢者における立位姿勢制御と逆ストループ干渉制御の関連 口頭発表	共同	平成 24 年 3 月	第 10 回姿勢と歩行研究会 （於興和創薬株式会社本社）	池田吉史、前田航、平田正吾、安部久貴、藤枝賢晴、水上健一、**林準平**、奥住秀之、國分充、射手矢岬 前頭前野の機能が、立位姿勢制御を行う際の安定性に対して強く関わっていると報告されているが、その詳細に関して十分な研究がなされているとは言い難い。そこで本研究は、立位姿勢制御の安定性と前頭葉機能の関連を明らかにしようとした。（実験補助およびデータの収集を担当した。）
7. Vertical acceleration to the ground can be a greater component contributing to higher sprinting performance 垂直方向への加速度に着目したスプリントパフォーマンスに関する考察 口頭発表	共同	平成 24 年 6 月	American College of Sports Medicine Annual Meeting 2012	Takeshi, O., Yoshiharu, F., Hisataka A., **Jumpei H.**, Kenichi S., Hiroshi Y. and Kazuo U. 本研究は 100m 疾走中の加速度を 3 次元加速度センサーで評価することを目的とした。結果、より高い垂直方向の加速度は 100 m 疾走のタイムを速くすること明らかとなった。（データ解析を担当した。）
8. テニス男子シングルスにおけるサービス成	共同	平成 26 年 12 月	第 26 回テニス学会 （於東京理科大学）	**林準平**、細川翔平、吉山佳織、西島吉典

功率およびポイント取得率の群間差に関する研究 ポスター発表				本研究は、テニス男子シングルスのサービス成功率やポイント取得率、あるいは、ポイント決定までのラリー数をトップ・全日本・インカレ・関西学生の4群で比較・検討した。その結果、関西学生は、上位群に比しサービスの攻撃性が低く、これがショートポイントによるポイント取得の少なさに繋がることが示唆された。（主発表者としてデータの収集と解析を実施するとともに、発表原稿を作成した。）
9．テニス女子シングルスにおけるサービス成功率およびポイント取得率の群間差ならびに性差に関する研究 ポスター発表	共同	平成26年12月	第26回テニス学会（於東京理科大学）	吉山佳織、細川翔平、**林準平**、西島吉典 本研究では、女子シングルスにおけるサービス成功率・ポイント取得率あるいは、ポイント決定までに要したラリー数に関する群間差、勝者と敗者間差の有無を検討すること、さらにはそれらの結果と男子シングルスの結果との差違を明らかにしようとした。（データの収集・解析を担当した。）
10．テニスのサービスにおける前足の動作に関する研究 ポスター発表	共同	平成26年12月	第26回テニス学会（於東京理科大学）	細川翔平、**林準平**、吉山佳織、西島吉典 近年、筋活動の効率性という観点からStretch Shortening Cycleの作用が注目を集めている。これらの考えを基礎に、サービス動作において、トス時に前足をつま先立の状態で打球すれば、よりSSCを利用できる打球法になると考え、これを検証しようとした。(実験補助およびデータの収集を担当した。）
（その他）				

受託研究 胸骨部装着センサーによる歩行中および走行中のフォーム分析 （その他） 報告書	共同	平成 23 年 6 月	依頼者 カシオ計算機株式会社（東京） 研究実施期間 平成 23 年 6 月～ 平成 24 年 3 月	研究代表者：藤枝賢晴 共同研究者：大山健、安部久貴、**林準平**、水上健一 本研究では、学生陸上競技選手から健常中高齢運動愛好家までの広い属性を示す被験者の歩行・走行映像を解析・データ化すると共に、新開発の前胸部装着センサーにて計測された信号データとの相関性・整合性を検討した。（実験をデザインするとともに、データの収集・解析を担当した。）
平成 24 年度東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科「研究プロジェクト」 研究課題 中高齢者用レジスタンストレーニングプログラムの開発とその効果の多面的検討	共同	平成 23 年 6 月	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 研究期間 平成 23 年 6 月～ 平成 24 年 3 月 獲得資金 950,000 円	研究代表者：射手矢岬 院生代表者：**林準平** 共同研究者：安部久貴、水上健一 本プロジェクトは、中高齢者を対象として安全且つ効果的なレジスタンストレーニングプログラムを提案し、そのプログラム介入およびその後の脱トレーニングが運動器機能、認知機能、分子指標および自己概念に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。（院生研究代表者としてプロジェクトに携わった。また同時にバイオメカニクス分野の分析担当として被験者の歩容を動作解析によって分析・検討し、当該項目の文責者として執筆・報告した。）

（人間）伊藤　博
（人間）近藤　真理子

■経営学部

（経営）釣島　平三郎

教　育　研　究　業　績　書　　2018年3月12 氏名 釣島平三郎　　印		
教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
１　教育方法の実践例 ①ベンチャー企業論では学生が将来会社を起業することを目標に授業を行った ②フイナンシャルプラニング、経営分析、経営戦略などは実践を考えケーススタディーを重視した教育 ③企業経営論、、ビジネスプランニング論など学生により理解を深めてもらう授業 ④規律ある授業を実施する ⑤授業の最初に前回の復習を行う ⑥振り返り授業を行う	０３年４月～ ０５年３月 ０３年４月～ 14年4月～ 14年4月～ 15年4月～ 16年4月～	学生の人生計画書や会社の起業企画書を作成させたがその時にインナーネットをオンラインに接続して情報検索を行わせた。 毎回の授業では学生に課題を与え４,５名で討論してもらい、それを模造紙に纏めてもらい、彼らに前で発表してもらう演習を行った。 授業の前半10分は前回の復讐を行う 授業の開始のとき及び終了の時　規律・礼を学生に実施 学生により深く理解してもらう 学生に分かりやすい授業
２　作成した教科書、教材 毎回授業のレジメを作成、配布する 「これからの経営ニューモデル」 「経営ニューグローバルスタンダード」 「人を幸せにするニューグローバルスタンダード」 「人と人をつなぐグローバル経営」	03年4月～ 08年4月～ 10年4月～ 12年12月～	学生に授業が分かりやすいように講義内容のポイントをまとめて学生に配布してきた。 左記２冊をコスモ教育出版社で刊行し、「企業経営論」などの教科書として使用 コスモ教育出版社で刊行し、「中小企業経営論」などの教科書として使用 コスモ教育出版社で刊行し、「経営分析論」などの教科書として使用
「ご縁というビジネス最強の法則」	15年4月	講談社プラスα新書で出版し「ビジネスプラニング論」の教科書として使用

３　当該教員の教育上の能力に関する大学等の評価		
学生による授業評価	０３年４月～	各授業の最終講義のときに学生に授業のよかった点と悪かった点につきンケートを行い、学生の反応をフィードバックしてきた。毎回行う演習については高い評価が得られた。
	10 年 4 月～	各科目の試験の答案用紙にその科目の授業の①よかった点、②改善すべき点を書いてもらい、次年度以降の授業に反映している。
	15 年 9 月～	経営学部各教員の試験問題などを閲覧して、成績評価の公平性などをチェックした。
	15 年 9 月～	経営学部各教員から提出された教育目標記述書の内容をチェックしそれぞれコメントを書き教員に返却した。
	17 年 9 月	経営学部各教員の試験問題などを閲覧して、成績評価の公平性などをチェックした。 経営学部各教員から提出された教育目標記述書の内容をチェックしそれぞれコメントを書き教員に返却した。

４　実務家教員についての特記事項		
1.Industrial Education Award by Orange & UlsterCounty,NY	90 年 10 月	郡内の教師・生徒への学校教育において、ボランティでの職業教育の普及に貢献がったことで表彰された。
2.Orange County Community College Industry Business Educational Counsel	90 年~95 年	NY 州のコミュニティーカレッジでのビジネス教育の諮問委員
3.State University of NY New Paltz Business Advisory Board Member	95 年~97 年	NY 州立大学　New Paltz 校でのビジネス教育のカリュクラム作成の諮問委員
4.State University of NY New Paltz Foundation,Trustee	96 年~97 年	NY 州立大学　New Paltz 校財団の理事として同校の財政運営
5.OrangeCountyPartnership, Board of Director	88 年~97 年	NY 州、オレンジ郡の産業振興機構　理事
6.北加日本商工会議所理事	01 年～02 年	北カリフォルニ地区の日本人商工会議所の運営
7.和泉市大阪シリコンバレー研究会委員	02 年 9 月～03 年 3 月	テクノステージ和泉の活用と開発
8.大阪府社会起業家委員	03 年 4 月～ 09 年 3 月	大阪府下のコミュニティービジネスの振興と補助政策の審議
9. 中小企業診断協会大阪支部理事	03 年 5 月~ 11 年 5 月	中小企業診断士の情報・国際化の推進、国際派研究会の会長
10.日本生産管理学会関西支部　運営委員	04 年 5 月～	国際研究会　会長としての学会運営
11.（社）産業関係研究所理事	04 年 11 月～ 10 年 3 月	労使関係や会社組織の研究の公益団体の運営
12.関西ベンチャー学会　理事 常任理事	05 年 3 月～ 07 年 3 月～	「ベンチャーハンドブック」刊行の編集委員など
13.NPO 法人おおさか元気ネットワーク監事	05 年 4 月～	大阪府下コミュニティービジネスの NPO 法人 9 団体のネットワーク化した団体の監事
14.Rolex(スイス)財団レフリー	05 年 6 月	05 年度 Rolex 賞の選出のレフリー
15.中小企業診断協会本部　国際委員	05 年 7 月～06 年 10 月	タイ、台湾などの中小企業診断士制度導入の支援

16. 日本生産管理学会理事	06 年 4 月～ 13 年 5 月～	学会の運営 代議員に就任
17. 経済産業省地域開発支援事業評価委員	06 年 4 月～ 11 年 3 月	地域開発補助金の評価
18. 大阪府地域創造助成フンド評価委員	06 年 4 月～ 09 年 3 月	地域創造助成フンドの評価
19. 大阪府成長性企業融資評価委員	06 年 4 月～ 09 年 3 月	企業融資の評価
20. 南河内地域活性化助成審査委員 長	06 年 4 月～ 08 年 4 月～ 09 年 3 月	事業助成の審査 水道局の設備更新の審査
21. 富田林市水道局評価委員	10 年 12 月～	新学会の立ち上げと運営
22. （社）グローバル経営学会の設立発起人および理事	08 年 4 月～11 年３月	論文集の編集会議の諮問
23. 関西学院大学「人間学」学外編集委員	09 年 9 月～	財団からの奨学金授与の審査
24. (公財)小森記念財団評価委員 奨学生審査委員長 同財団評議員も兼務	09 年 9 月～ 13 年 5 月～ 17 年 5 月～	財団からの奨学金授与の審査 財団からの奨学金授与の審査の責任者 財団の運営
25. (社)国際ビジネス管理士協会理事	10 年 9 月	国際ビジネス監理士の資格授与の審議など
26. グローバル経営学会	15 年 6 月	副会長に就任
５　その他		
大阪府中小企業支援センター登録ドバイザー	2002 年～07 年	中小企業への支援
国際協力事業団(JICA)専門家	2002 年～	国際協力への支援
（財）海外職業訓練協会　登録ドバイザー	2002 年～	中小企業の海外進出に関して執筆、セミナー講師、など
（独）中小企業基盤整備機構　登録	2002 年～	中小企業の海外ビジネスについての経営相談

職務上の実績に関する事項	年　月　日	概　　要
1　資格、免許 ・高校教員　免許 ・中小企業診断士 ・日商簿記　1級 ・税理士試験　4科目合格 2. 表彰 ・中小企業診断協会会長表彰 ・大阪府商工関係表彰	 1965年3月 1969年4月 1970年6月 1976年 2009年9月 2012年1月	 商業　2種 簿記、財務諸表、事業税、固定資産税 中小企業診断協会への貢献 中小企業診断、各種委員などでの貢献
2　特許等		
3　実務家教員についての特記事項	1977年～81年 1988年～97年 1997 年～2001年 2002～	ミノルタのマイクロ写真機材の販売部門設立のため、アメリカニュージャージ州に駐在 ミノルタの現地生産会社設立しその運営（社長）のためアメリカニューヨーク州に駐在 ミノルタのソフト開発会社の設立とその運営(社長)のため シリコンバレーに駐在、その間多くのベンチャー企業と関わる 大阪産業機構コーディネイター、つるしま経営事務所代表としておおくのベンチャー企業に関わる。
4　その他		

研　究　業　績　書

著書，学術論文等の名　　称	単著，共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

（著 書） １．アメリカの教育に学ぶ	単著	01 年 3 月～ 06 年 3 月	平成社	アメリカの教育の良さについて雑誌「平成」30 号～44 号まで現在 14 回寄稿してきた。
2．中小企業の国際化と海外進出	編共著	02 年 6 月	中小企業診断協会	グローバル化に向けた中小企業経営支援のポイント。編集責任者として P13~24, P41~47,P202~212 を分担し執筆した。 共著者：市村保雄、瓜生貞行、鹿島啓、土肥謙三、福永栄一、村上謙治、吉武正彦、米永繁夫、若松敏幸
3.アメリカの教育に学ぶ	単著	04 年 8 月	致知出版社	雑誌「致知」8 月号の致知随想コラムでアメリカの教育の良さについて寄稿 P94~95
4．アメリカ最強のエリート教育	単著	04 年 12 月	講談社（新書）	米国をリードする人材は、こうつくられている。
５．事業再生の実務―経営・法務・会計・税務	共著	05 年 6 月	第一法規	事業再生のノウハウを経営・法務・会計・税務の視点から Q&A と事例で詳細解説 P9241~9246 を分担執筆した。 共著者　東秀一、新井信昭以下 42 名
６．ベンチャーハンドブック	編共著	05 年 12 月	ミネルヴ書房	内外のベンチャー企業に関する関西ベンチャー学会が編集した研究書、第Ⅱ章 3 節、第Ⅳ章 3, 4 節を 分担執筆した。
7.日本　学力回復の方程式	単著	06 年 8 月	ミネルヴ書房	バブル崩壊後、低迷する国力の背後にる教育＝学力崩壊を回復する方程式
８．これからの経営ニューモデル	単著	０８年２月	コスモ教育出版	日本でもないメリカでもない新しい経営モデルの提案
９．経営ニューグローバルスタンダード	単著	０８年２月	コスモ教育出版社	グローバルスタンダード経営の問題点とそれに変る日本からの経営ニューグローバルスタンダードの
10.人を幸せにするニューグローバル経営	単著	10 年 9 月	コスモ教育出版	これからの企業経営の在り方

１１．人と人をつなぐグローバル経営	単著	12 年 12 月	コスモ教育出版社	日本の「つながり文化」を解明し、グローバル時代の新しい経営の在り方
12.アメリカ日とが理解できない「ご縁」という日本最強のビジネス法則	単著	13 年 9 月	講談社	ビジネスにおけるご縁の重要性

（学術論文） 1.TotalQuality Management in Minolta	単著	93年6月	NY 州立大学 Administrator News Letter	ミノルタがアメリカでどのように TQM を実践したか。
２．アメリカ人の Because 好きを知っていますか	単著	96年6月	（財）海外職業訓練協会機関紙　５１	アメリカ人との異文化理解の実践について
３．What can Japan do for 21st Century	単著	96年9月	University of Virginia Asian Center	日本が環境問題で２１世紀には世界にどのように貢献できるか
４．アメリカの教育に学ぶこと	単著	01年6月	北加日本商工会議所会報	日米教育事情の違い
５シリコンバレー企業の人事政策	単著	02年11月	日本ベンチャー学会全国大会論文集	アメリカのベンチャー企業の戦略的な給与政策
6.中小企業のエコ活動　機械製造業	単著	03年1月	企業診断ニュース	日米の OA 機器のカートリッジリサイクル事業の事例
７.コミュニティービジネスとベンチャーによる日本経済の活性化	単著	04年1月	関西ベンチャー学会全国大会論文集	新しく台頭してきたコミュニティービジネスとベンチャー企業との 共生による経済の活性化
８．日米経済比較	単著	06年1月～	「理念と経営」誌	月刊誌に毎号寄稿、現在 50 回寄稿したが、これかも連載を続ける
９．グローバルビジネスで活躍できるエリート養成	単著	06年5月	グローバル人づくり誌（財）海外職業訓練協会	これからの国際的に通用するエリート養成など
9.シリコンバレーのベンチャー企業に学ぶ経営革新Ⅰ	単著	06年8月	国際経済研究誌８月号	シリコンバレービジネスモデルと日本企業の経営革新
10.シリコンバレーのベンチャー企業に学ぶ経営革新Ⅱ	単著	06年9月	国際経済研究誌９月号	同上
11. 日本の学力回復	単著	07年2月	関西ベンチャー学会全国大会論文集	日米欧の戦後の学力低下とその回復について
12.What can Japan work	単著	08年7月	日本生産管理学会	日本から提案するニューグローバルスタ

for the new global standard management?			全国大会論文集	ンダード経営
13.The deterioration of the two leading management model in the world	単著	09 年 3 月	太成学院大学紀要	世界を代表する経営モデルの制度疲労
14. .What can Japan work for the new global standard management?	単著	09 年 3 月	Production Management Vol.15,NO.3	日本から提案するニューグローバルスタンダード経営
15.人を幸せにするニューグローバル経営	単著	11 年 3 月	グローバル経営学会誌創刊号	世界金融恐慌後の新しい経営スタイル
16.人と人をつなぐグローバル経営	単著	12 年 9 月	グローバル経営学会年次大会論文集	人と人をつなぐ「つながり文化」とグローバル経営
17.ご縁というビジネス法則	単著	13 年 9 月	グローバル経営学会年次大会論文集	経営のグローバル化とご縁
8 21 世紀の.船場の経営学の視点	単著	1 4 年 7 月	「大坂春秋」第 150 号	大阪の船場の歴史と経営学てき変遷
19.アメリカ人が理解できないご縁	単著	14 年 11 月	グローバル経営学会年次大会論文集	日米の経済比較とご縁とネットワークの違い
20.人縁を基調にした日本式思考経営を世界に発信しよう	単著	14 年 11 月	「合理化」第 516 号大阪府経営合理化協会	これからの日本式思考経営の在り方
21. .日米経済比較	単著	06 年 4 月～	コスモ教育出版	月刊誌「理念と経営」の創刊号より毎月論文記事を掲載しているが 16 年に関しては、連載記事 120 回（4 月号）～ 連載記事 130 回（17 年 2 月号）
22.日米経済比較	単著	17 年 4 月～	コスモ教育出版	月刊誌「理念と経営」の創刊号より毎月論文記事を掲載しているが 17 年に関しては、引き続き 12 カ月連載した。

（その他）				
１．TQC Management in Minolta	講演	93 年	NY 州立大バサー年次総会	基調講演を担当
2.How Minolta was successful in production of America	講演	95 年	NY 州、アジア研究学会	ミノルタの現地生産はメリカでどのようにして成功したか
3. 中小企業の国際化	講演	02 年 8 月	（社）中小企業診断協会	法定登録更新研修の講師
4. シリコンバレーベンチャー企業	講演	02 年 8 月	大阪府経営合理化協会	協会員の研修会講師 登録更新研修
		02 年 10 月	日本プロジェクト・エンジニリング協会	中部地区　例会
5.アメリカでの職業経験	講演	03 年 3 月	産業学会	
		02 年 10 月	近畿大学	特別講義
6.日米教育事情	講演	03 年 4 月	大阪船舶倶楽部	会員研修会
		03 年 10 月	中小企業診断協会大阪支部	会員研修会
			三重県中小企業診断士会	会員研修会
7. 中小企業の IT 化	講演	05 年 6 月	職業訓練大学校	新入社員教育
8. これからの生き方	講演	03 年 4 月	兵庫県立西宮高校	文化教養講座
9. コミュニティービジネスについて	講演	03 年 5 月	（財）海外職業訓練協会	アドバイザー会議
10.アメリカのベンチャー企業状況	講演	03 年 12 月	財）ベンチャーエンタープライズセンター	会員研修会
11. 人と組織の共生	パネルデスカション	04 年 9 月 04 年 11 月	（社）産業関係研究所	04 年度年次シンポジュームで発表
12.製造業の空洞化対策	講演		日本生産管理学会	関西支部会員研修会
13.米国のキッズ教育	講演	04 年 11 月	千葉商科大学	キッズ夢教育の公開講座の基調講演
14.日本から発信する経営グローバルスタンダード	講演	05 年 3 月	広島国際会議場、(社)国際経済研究センター	日本的経営の優位性
15.アメリカのエリート教育	講演	06 年 5 月	広島大学高等教育研	アメリカのエリート教育について

			究所	
16.日本学力回復の方程式	講演	06 年 6 月	興国寺　夏期講座	日本の学力回復について、内容は小冊子として出版
17.欧米のコミュンニティービジネス	講演	06 年 8 月	箕面市　箕面市民センター	欧米のコミュニティービジネスの実態
18.経営のニューグローバルスタンダード	講演	06 年 3 月	大阪 CS 研究会	ニューグローバル経営について
19.シリコンバレーと日本から発信する経営ニューグローバル経営	講演	06 年 8 月	浜松、掛川、富士、沼津、島田　時事通信社主催	これからの日本的経営について
20.これからの社会起業家	講演	06 年 11 月～07 年 1 月	国際エンゼル協会研修所	これからの社会起業家のり方
21.世界ではばたけ「さいたま」	講演	07 年 11 月	さいたま中央青年会議所	さいたま市の創造都市としての活性化
22.日米英の社会事業家	講演	07 年 1 1 月 08 年 2 月 09 年 10 月	関西学院大学社会人大学院	これから話題の社会起業家
23.日本の学力回復	講演	07 年 2 月	全国専門学校大会	基調講演とパネル
24. 日本の学力回復	講演	08 年 1 月	商業学会兵庫支部	商業教育と学力回復
25.これからの社会起業家	講演	08 年 3 月	大阪府社会起業フォーラム	コミュニティービジネスなど
26.代替医療と機構	講演	08 年 4 月	舞鶴 NPO 法人	日米の医療比較
27.中国経済の動向	講演	08 年 7 月	アジア再生フォーラム	日中米の経済動向
28 これからの経営	講演	08 年 9 月	関西ﾆｭｰビジネス協議会	金融恐慌と経営
29.経営ニューグローバルスタンダード	講演	08 年 10 月	神戸商工会議所 JLP 研究会 中小企業診断士研	金融恐慌と経営のり方

			究会	
30.新入社員のり方	研修	09 年 4 月	三菱重工高砂	新入社員への期待
31.アメリカのベンチャー企業	授業	09 年 4 月	大阪市大社会人大学院	シリコンバレーの状況など
32.世界金融恐慌と経営	講演	09 年 6 月	箕面繊維協会	これからの経営のり方
33.D.パイク講演		09 年 6 月	関西学院大学	コメンテーター
34.ミノルタの海外進出	講演	09 年 8 月	経営史学会	販売、製造、開発のメリカ進出
35.海外拠点長研修	研修	10 年 10 月	シャープ(株)	海外拠点長の赴任研修
36.石田梅岩とメンタリングの精神	講演	11 年 3 月	心学明誠舎	総会での講演
37.日米の経営の視点	授業	10 年 4 月	大阪市立大学大学院	日米経営比較
36.人を幸せにする経営	講演	11 年 2 月	新宿プラザホテル	UBI 社研修会
37.グローバル経営の視点	特別講演	11 年 2 月	大阪工業大学	グローバル経営学会の年次大会
38.アメリカでのビジネス	研修	11 年 3 月	三ツ星ベルト本社	海外赴任研修
39.アメリカの代替医療	研修	11 年 4 月	舞鶴市公民館	NPO 法人研修
40.日米の経営の視点	講演	11 年 6 月	大阪市立大学大学院	日米経営比較
41.学生の社会貢献と教育制度の原点	基調講演	11 年 12 月	関西学院大学	社会起業総括フォーラム
42.コミュニティービジネスの原点	研修	12 年 1 月	A-ダッシュワーク創造館	NPO 法人研修
43.アメリカの最強のエリート教育	講演	12 年 2 月	インターグループ研修センター	通訳、翻訳者への講演
44.グローバル人材の育成	研修	12 年 1 月	国際ビジネス監理	初級コースの資格授与の研修

		より約 10 回	士協会	
45.人と人を結ぶニューグローバル経営	基 調講演	12 年 9 月	グローバル経営学会	学会の年次大会
46.アメリカでのビジネス	研修	12 年 9 月	三ツ星ベルト本社	海外赴任研修
47.アメリカのエリート教育と大学図書館	講演	12 年 10 月	太成学院大学	阪神地区大学図書館連絡会議
48.アメリカの代替医療と気功	講演	12 年 12 月	NPO 法人舞鶴愛の気	NPO 法人創立 10 周年記念大会
49.人と人をつなぐグローバル経営	講演	13 年 3 月	和潤会	政治家や実業家の研修会
50.中小企業の海外進出	講演	13 年 10 月	中小企業診断協会大阪支部	中小企業診断士のスキルアップ研修
51.関西の中小企業のグローバル化	講演	13 年 11 月	関西を元気にする会	テーマによるディスカッションのパネラー
52.ビジネスにおけるご縁の勘どころ	講演	14 年 1 月	船場経済倶楽部	ビジネスでのご縁の生かしかた
53.縁ありて花開く	講演	14 年 5 月	MTCA 例会	人と人をつなぐご縁
54.ビジネスでご縁を生かす	講演	14 年 6 月	アキナイクラブ	ご縁ビジネスについて
55.アメリカの代替医療と気功	講演	14 年 8 月	羽曳野市市民大学講座、太成学院大学公開講座	気功による健康法
56.中小企業の海外進出	研修	14 年 8 月、10 月、11 月	中小企業診断士登録更新研修	中小企業の海外進出への診断士としての指導法

57.ご縁とビジネス法則	講演	14年10月	大阪府中之島図書館	日米のネットワークの違い
58 気功と健康	講演	15年4月	舞鶴市市民会館	NPO法人への研修
59.「ビジネスに於けるご縁の法則」	研修	15年4月～9月	梅田グランドセンター	関西創発塾での3回に渡る研修
60.大阪地域創造ファンド	審査会	15年6月～16年3月	富田林商工会	企業への補助金交付の審査委員長
61.海外赴任者への心得	研修	15年8月	シャープ天理研修センター	シャープのアメリカに駐在される管理者への1日研修
61.情報交換サロン	講演	15年10月	大坂ガスホール	関西ベンチャー学会での講演会講師
62.ベンチャー企業の創業	講演	16年7月	甲南アッセットホール	神戸ベンチャー研究会の研修
63.ビジネスに於けるご縁の法則	講演	16年9月	シティープラザホテル	大阪市経営協会の研修
64. ビジネスに於けるご縁の法則	講演	17年6月	梅田西ホテル	ビジネス朝飯会
65.寺院経営の活性化	講演	17年7月	知恩院	僧侶の会

（経営）村田　史之

教　育　研　究　業　績　書

30　年　3　月　20　日

氏名　村　田　史　之　　印

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
地球惑星科学，環境創成学，教育学	固体地球惑星物理学，気象，持続可能システム，教育学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例	平成11年4月 平成15年4月	副情報センター長以来係ってきた学内 LAN（基幹部光フイバー、他 10BaseT のイーサネット）を構築し、学内ホームページ、教員サーバーを用いた学生への連絡など教育支援環境を整備（現在に至る） マルチメディ支援教室での授業においては、教卓 PC から手元の画面に説明を送信したり、逆に各

	平成 18 年 4 月	自の画面を取り込み進度を把握するなど双方向の活用を実践（現在に至る） 課題提出用サーバーを構築し、学生の課題提出時及び提出済課題確認の際の利便性向上を図った（現在に至る）
2　作成した教科書，教材	平成 16 年 4 月	教科書に沿った内容で、具体的手順、考え方、機器操作方法及び関連応用問題などを含む学習支援資料を毎時間作成し配付（現在に至る）
3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成 16 年 4 月	学生による授業評価を、試験時にンケート形式で実施し（現在に至る）、その結果を基に情報系及び一般基礎教育科目における授業内容の向上に役立てた 学生による授業評価を、全学共通ンケート形式で実施（現在に至る） 授業評価を基に、情報系基礎教育科目では使用言語を Basic から Java に変更し、HTML, JavaScript を取り入れ、親しみを増すよう試みた 直近の評価では、情報系専門科目で授業内容での満足度が向上したこと、総合基本科目では動画資料を充実させたため、理解度が向上したことが示され
4　実務の経験を有する者についての特記事項	平成 29 年 6 月	平成 29 年度 はびきの市民大学 前期講座 4「今そこにある危機～気象・地震・環境から～」担当
5　その他	平成 10 年 12 月 平成 11 年 2 月 平成 11 年 9 月 平成 12 年 3 月 平成 13 年 11 月 平成 15 年 10 月 平成 15 年 12 月 平成 16 年 7 月 平成 18 年 8 月 平成 19 年 2 月 平成 21 年 8 月 平成 26 年 6 月	極軌道衛星 NOAA-APT 雲画像受信システム作成 大阪短期大学東館屋上受信ンテナ設置。雲画像受信開始 受信機（AR5000）、パラボランテナ 1.2m、ウェザーリンク気象センサー導入 「静止気象衛星雲画像の分岐に係る申請」許諾 本館２階テラスへのンテナ仮設置。受信実験実施 東館北側屋上へンテナ移設設置。気象センサー設置。 受信システム構築。学内 LAN、環境観測研究室 Web、サーバーの作成、雲画像自動配信、気象データ表示 気象観測研究室設置 環境観測支援システム構築 リモートセンシング（気象環境観測解析システム）増設。 並列コンピューティング構築。ローカル気象解析システムの構築研究 関西地区４地点での気象観測システムを構築 学内ホームページに気象衛星受信画像を公開

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 修士（理学）	 昭和 58 年　3 月	 神戸大学 神戸大学

博士（学術）	平成元年　3 月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他	平成 14 年 7 月 平成 14 年 12 月 平成 11 年 4 月 平成 12 年 4 月 平成 12 年 10 月 平成 22 年 9 月 平成 26 年 4 月 平成 27 年 4 月	南大阪地域大学コンソーシム設立に参画 南大阪地域大学コンソーシム「情報交流・発信ホームページ部会」委員（現在に至る） 南大阪地域大学コンソーシム「大学連係教育プログラム」委員（平成 25 年 3 月 31 日まで） 南大阪地域大学コンソーシム「南大阪地域講座」委員（平成 25 年 3 月 31 日まで） NPO 法人南大阪地域大学コンソーシム個人会員として参加（現在に至る） 南大阪大学･大阪短期大学､副情報センター長（平成 12 年 3 月 31 日まで） 南大阪大学・大阪短期大学、図書館長（平成 14 年 3 月 31 日まで） 南大阪大学・大阪短期大学、公開講座運営委員長（平成 14 年 3 月 31 日まで） 第 7 回全国大学コンソーシアム研究交流大会ポスターセッション展示協力 南大阪地域大学コンソーシアム「産官学・地域連携委員会」委員 南大阪地域大学コンソーシアム「インターンシッププログラム部会」委員 南大阪地域大学コンソーシアム「企画運営委員会」委員（現在に至る）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1				
（学術論文） 1 気象データに関わるエコマネジメント	共著	平成 17 年 1 月	生産管理, vol11, No2, 209-214	リモートセンシング及び気象センサーによるデータ計測を総合的に行い、環境計測によるデータ解析及び蓄積を目的とするシステムの製作について論じた （担当　全体） （竹原明伸, 村田史之, 伊東和彦, 天川哲也, 下左近多喜男）
2 環境観測研究室の構築	共著	平成 18 年 3 月	太成学院大学紀要, 第 8 巻, 第 1 号, 79-86	静止軌道気象衛星 MTSAT と中高度極軌道気象衛星 NOAA によるリモートセンシング及び地上に設置した気象センサーによるデータ計測を行うハードウェと、データ管理、公開を目的とするシステムの構築について論じた （担当　全体） （竹原明伸, 村田史之, 伊東和彦）
3 大学コンソーシムの現在と未来　-個人会員の寄与するもの-	単著	平成 18 年 3 月	太成学院大学紀要, 第 8 巻, 第 1 号, 129-139	全国大学コンソーシム協議会のデータを集計し、重複加盟校や 9 系列事業の開始年度をまとめた。

				大学コンソーシムを形態面、規模などから分類した。また個人会員が果たすべき役割を論じた。
4 気象衛星の雲画像による気象現象の解析	共著	平成 19 年 3 月	太成学院大学紀要, 第 9 巻, 第 1 号, 41-48	気象衛星 NOAA と天気図から、2005 年 12 月 25 日に山形県酒田市庄内町第 2 最上川橋梁で発生した JR 奥羽本線での列車転覆事故と気象現象との関連を論じた （担当　全体） （竹原明伸, 村田史之, 伊東和彦）
5 大学コンソーシムは何を訴えたいのか	単著	平成 19 年 3 月	太成学院大学紀要, 第 9 巻, 第 1 号, 157-167	全国の大学コンソーシムが発信するホームページを調査し、構成や事業項目、事業対象者などを集計した。また今後競争的環境となる可能性を論じた。
6 気象衛星の雲画像による陸域集中豪雨の解析	共著	平成 20 年 3 月	太成学院大学紀要, 第 10 巻, 第 1 号, 79-84	気象衛星 NOAA と天気図から、2006 年 8 月 22 日に大阪府豊中市で発生した集中豪雨に関して、地形の解析と併せて、その発生過程を論じた。 （担当　全体） （竹原明伸, 村田史之）
7 並列コンピュータの試作と検証	共著	平成 25 年 3 月	太成学院大学紀要, 第 15 巻, 第 32 号, 239-243	様々な高速繰り返し演算が必要とされる領域において、並列コンピュータの必要性が高まっている。その原理と仕組みを大きな負担なく体験できる試作を試みた。 （担当　全体） （竹原明伸,村田史之）
8 大学における環境教育と ESD の果たしてきた役割：ゼミナールにおける例	単著	平成 27 年 3 月	太成学院大学紀要, 第 17 巻, 133-138	ESD（持続可能な開発のための教育）に至る環境教育の流れを概観し, 次に大学でのゼミナールにおける環境教育の実例と, ESD を始めとする環境教育の歴史とを重ね合わせ, 受講者の意識の根底に ESD に至る環境教育の概念が存在するかどうかを検討した。 （担当　全体） （村田史之）
（その他）				
1 なたは 19%？	単著	平成 18 年 ４月	サカイ経済新聞	スポーツの視聴率やオリンピックの勝負を例に挙げ、サカイ経済新聞の課題を論じた。
2 web 紀要創刊準備中	単著	平成 19 年 10 月	南大阪地域大学コンソーシムニュースレター	大学コンソーシム独自の紀要を創刊するにたり、その位置づけや内容、他のコンソーシムでの事例などを紹介した。

教　育　研　究　業　績　書

２０１８年　3月　２０日

氏名　　松浦　宏之　　印

研　究　分　野	研究内容のキーワード
ICT 活用の英語教育法 アメリカ合衆国地域文化研究	英米詩文学・インターネット・英語教育 アラスカ地域研究・先住民文化・持続可能社会・環境問題

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1.　外国語科目における学習モチベーション向上へのインターネット利用方法	平成 16 年 8 月 21 日	外国語科目、特に英語学習への学生の関心度や学習意欲のモチベーションを高めるための一手段として、インターネット上の E メールやグリーティングカード作成サイトを用いてみた。ネット上で季節の挨拶やバースディカード作成を英文で行い、英文の構築、タイピングを通じて英語学習への実用的モチベーション向上を目指す。
2.　英語運用能力を磨くインターネット活用法	平成 17 年 8 月 21 日	進歩のめざましいインターネットを活用した学習方法を実践してみました。費用をかけず、最新の情報を活用して「読む」、「書く」、「聞く」という基本能力向上を目指します。またさらには「調べる」「知る」「活用する」という情報処理能力の実践により、世界を知るためには英語が非常に重要なメディでることを具体的に再確認します。
3.　旅行日程表作成とハイパーリンクの活用	平成 19 年 9 月	バーチャルツを体験することをイメージした情報処理学習。インターネット上から世界各地の情報を集めて、プレゼンテーションソフトのパワーポイントを用いて、旅行日程表を作成していく。またそれに伴い、リンクを多用して英語情報処理と拡張性を学ぶ学習法

		を開発。
4.　IT を活用した多次元的英語教材プレゼンテーション	平成 20 年 9 月	学生の教育効果向上のために、拡張型情報としてのデジタル教材を多次元的プレゼンテーションする方法を開発。極力、費用のかかるソフトを使わず、従来のナログテキストだけでは提示できなかった教材をマイクロオフィス・ワードの機能を最大限に用いて、提示する方法を開発したもの。
2　作成した教科書，教材		
1. 語学研修 New Zealand ホームステイ英会話テキスト	平成 7 年 8 月	科目名「英会話特別演習」により、ニュージーランドにおいて、語学研修する学生らのために生活・学習に必要な会話と文化習慣を説明したテキストを作成。単著
2. Discovering Canada ビデオで周遊カナダ	平成 3 年 1 月	北星堂書店　p64～109 担当。 大学教養英語のための総合英語教材。ビデオ教材を用いて、聞く・読むという英語運営能力を養う目的として開発。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大阪狭山市文化協会講座 「アラスカの大自然と環境問題」	平成 25 年 2 月 24 日	大阪狭山市市民対象の「文化祭り」において、アラスカの大自然の素晴らしさと環境破壊の現状をスライドと共に講演したもの。また、東日本震災の津波の瓦礫がアラスカ南東沿岸部に漂着している現状に関するふぃールドワークを報告。
2. 大阪狭山市立南第二小学校 土曜参観出前講座講師として招聘	平成25年11月 16 日	小学校児童 3 年生から 6 年生を対象に、様々な職種・方面で活躍する社会人たちが、その仕事のおもしろさや厳しさなどを伝える講座を担当する社会活動のひとつ。「アラスカの環境とオーロラ」をテーマに、アラスカの素晴らしい大自然とその環境破壊に関するフィールドワークの現状、また地球から観測できる唯一の宇宙現象であるオーロラについて児童たちにスライドを交えて講演したもの。
3. 平成２５年度大阪狭山市社会教育委員会　課題研究会　講師「アラスカの環境問題」	平成 26 年 2 月 25 日	アラスカの雄大な自然と地理を解説するとともに、現在深刻になりつつある環境問題を特に一般廃棄物処理問題を中心に講演。また東

4. 大阪狭山市立西小学校 地域交流学習会「さんとまつり」にて講座講師として招聘。「アラスカの自然環境とオーロラ」	平成26年11月9日	日本大震災が起こした津波によって、津波瓦礫がアラスカ南東部へ漂着している現状を調査したフィールドワーク結果を報告講演したもの。 社会貢献の一環として、毎年地域恒例でおこなわれている学習会「さんとまつり」において講座講師に招聘。「アラスカの自然環境とオーロラ」をテーマにアラスカの素晴らしい大自然とその環境破壊に関するフィールドワークの現状、また地球から観測できる唯一の宇宙現象であるオーロラについて小学校児童たち（約40名）にスライドを交えて講演したもの。
5. 太成学院大学　公開講座　「アラスカの自然環境とオーロラ」	平成27年8月3日	一般公開講座。アメリカ合衆国アラスカ州の本当の姿を探る。一生に一度、誰でも観てみたいと言われているオーロラの発生の仕組み、悠久の大自然に忍び寄よる深刻な環境破壊について講演。
6. はびきの市民大学講座「極北の大地アラスカの自然と環境問題」	平成29年6月21日	羽曳野市主催の「はびきの市民大学講師」。誰でも一度は訪れたいと思う極北のアラスカ。その北の大地の雄大な自然を紹介すると共に、気候変動など深刻な環境問題についての講演。誰も知らないアラスカの本当の姿に迫る。
7.「和田重次郎顕彰　国際シンポジウム」開催参加	平成29年11月18日	和田重次郎の死後80年が経ち、資料の散逸も憂慮されることから、日本とアラスカ、カナダの各和田重次郎顕彰会が協力連携して、資料の収集保存と調査研究活動、また、世界各地にいる和田重次郎研究家の成果発表とイベント等の情報共有化を図るために、愛媛県松山市坂の上の雲ミュージアム2階ホールにて開催。戒田節子みかん一座座長の司会進行、松浦宏之国際コーディネーターのアシスト、菅　紀子グラパムコモン　カンパニー代表の通訳により、田中和彦和田重次郎顕彰会会長(南海放送社長)とトニー中澤カナダ顕彰会顧問(アラスカ顕彰会会長)、ティム・ミネザキアラスカ和田重次郎顕彰会副会長の三人がトークを交わした後、日本、アメリカ・アラスカ、カナダの三か国が協力連携を図るための

		調印式を行う。
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 修士（文学修士） 高等学校教諭１級普通免許状（英語） アラスカ文化遺産ガイド資格取得	 昭和 58 年 3 月 昭和 58 年 3 月 平成 23 年 4 月	 関西大学大学院 アメリカ合衆国アラスカ州　商務省認定　アラスカ先住民の民族文化ガイド検定合格、資格取得
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1. アラスカ大学図書館での資料調査および国際北極圏研究センターでの研修。ジュノーでのフィールドワーク	 平成 18 年 9 月	 アラスカ大学図書館での資料調査。所長赤祖父俊一博士の下でオーロラの伝説の調査をおこなう。その後、州都ジュノーに移動し、アラスカ大学サウスイースト校のトーマス博士とフィールドワーク。ハイダ族先住民会議議長へインタビュー実施。
2.アラスカ大学ネイティブ・ルーラルディベロップ学部に客員教授として招聘。	平成 19 年 9 月	アラスカ大学ネイティブ・ルーラルディベロップメント学部に客員教授として招聘される。経済学の授業において、アラスカの環境問題と経済発展の関係をゲストスピーカーとして講義する。またアラスカ大学と合同で、アラスカにおけるゴミ処理問題に関するフィールドワークを都市部とネイティブ・ビレッジの数カ所で実施
3.アラスカ大学ネイティブ・ルーラルディベロップ学部に客員教授として招聘。	平成 20 年 9 月	アラスカ大学ネイティブ・ルーラルディベロップメント学部に客員教授として招聘される。アラスカにおけるゴミ処理問題に関するフィールドワークを都市部とネイティブ・ビレッジの数カ所で実施。その現状と将来的方向を論文にまとめ、発表。
4.大阪狭山市教育委員会・社会教育委員着任	平成 21 年 4 月	大阪狭山市教育委員会社会教育委員に就任。同委員会副議長に任命される。
5.アラスカ大学ネイティブ・ルーラルディベロップ学部において、「ルーラルアラスカにおける持続可能社	平成 21 年 8 月-9 月	ルーラルアラスカの先住民コミュニティにおける継続可能な社会構築に関する環境問題と

会の構築に向けてのプロジェクト」に参加。		経済発展の接点を共同研究おこなう。
6. 大阪狭山市教育委員会　社会教育委員会議長に着任	平成 22 年 4 月	大阪狭山市教育委員会社会教育委員会議長に就任。大阪狭山市人権協会・青少年問題協議会・大阪狭山を明るくする会の各委員を兼任。
7. アラスカ大学ネイティブ・ルーラルディベロップ学部に客員教授として招聘。	平成 22 年 8 月-9 月	Nome におけるフィールドワークからルーラルアラスカにおける風力発電などの Renewable Energy の可能性と持続可能社会の構築における継続的調査研究。
8.「オーロラに駆けるサムライ和田重次郎シンポジウム」にて報告発表	平成 22 年 11 月 14 日	愛媛県松山市において開催されたアラスカ歴史上における和田重次郎の足跡とその意義についてのシンポジウムに招聘。アラスカ大学国際北極圏研究センター名誉所長・赤祖父俊一博士と愛媛大学宇宙進化研究センター長・谷口義明教授と共に参加。アラスカでの NPO 活動と研究の現状を報告発表。
9.愛媛出身の開拓者「和田重次郎顕彰活動報告会」にてシンポジュウム開催	平成 24 年 5 月 27 日	松山市総合コミュニティーセンターにおいて開催された報告会において、アラスカの環境問題に関する講演を行う。また日本人犬ぞりマッシャー探検家の舟津圭三氏と共に、アラスカでの和田重次郎メモリアル協会の活動と今後の展望におけるシンポジウムを開催。
10. アラスカ大学ネイティブ・ルーラルディベロップ学部に客員教授として招聘。	平成 24 年 8 月-9 月	国際北極圏研究センター赤祖父俊一博士、Tony Nakazawa 博士と国際交流合同プロジェクト会議に参加。Ph.D.取得に向けての資料収集。アラスカ Renewable Energy に関する調査。
11.アラスカ大学ネイティブ・ルーラルディベロップ学部に客員教授として招聘。東日本大震災津波瓦礫調査実施	平成 25 年 8 月-9 月	アラスカ南東部プリンスオブウェールズ島、Craig にて東日本大震災の津波によるアラスカへの漂着瓦礫の実態フィールドワークを現地研究者らと行う。
12. 大阪狭山市「特別職報酬等審議会」委員に着任	平成 25 年 10 月 9 日	大阪狭山市「特別職報酬等審議会」委員に着任
13.アラスカにおける 2015 和田重次郎ミュージカル公演に向けての最終プレゼンテーターとして渡米	平成 26 年 3 月 24 日～30 日	アラスカアジアンカルチャルセンター主催による Asian Night 2015 のメインイベントとして、愛媛県出身で 20 世紀初頭、アラスカで活躍した日本人和田重次郎の生涯を描いたミュージカル上演が予定されている。そのアラスカ現地での最終審査プレゼンテーターとして、松山市の和田重次郎顕彰会より依頼され渡米。

14.「NPO 法人和田重次郎顕彰会」の依頼により、アメリカ合衆国アラスカ州ワシラ市にて開催の和田重次郎殿堂入り記念式典に日本代表として出席	平成 26 年 7 月 18 日～24 日	明治時代アラスカ開拓時代にアラスカで活躍した日本人和田重次郎が、アラスカ州ワシラ市において犬ぞりマッシャーとして名誉ある殿堂入りを果たした。その記念式典に、日本代表として、日本領事らと参列し代表スピーチを行う。
15. アラスカ大学ネイティブ・ルーラルディベロップ学部に客員教授として招聘。NPO 和田重次郎顕彰会視察団のアラスカ視察団コーディネター兼通訳依頼任命	平成 26 年 8 月 10 日～9 月 4 日	アラスカ大学 Tony Nakazawa 博士と共にツーリズムの新概念としての Geo Tourism の確立と可能性を探る。また和田重次郎顕彰会視察団のアンカレッジ・スワード・フェアバンクス視察団のコーディネター及び通訳に任命される。
16.「友好都市提携」コーディネーターに着任	平成 26 年 9 月 25 日	アメリカ合衆国アラスカ州ワシラ市と愛媛県松山市内子町との「友好都市提携」コーディネーターに就任。
17.学術研究団体「言語文化研究会」会長に就任	平成 27 年 4 月 1 日	関西を中心とした英語教育研究に携わる大学教員らによる研究会言語文化研究会の会長に就任。
18.　和田重次郎の生涯を描いたミュージカルのアラスカ州アンカレッジ市での上演に向けて、国際コーディネーターとして渡米。	平成 27 年 4 月 29 日～5 月 8 日	国際交流基金からの助成を受けて、愛媛松山出身の和田重次郎のアラスカでの生涯を描いたミュージカルのアラスカアンカレッジ市での上演およびスワード市、フェアバンクス市での文化交流イベントにおける国際コーディネーターとして渡米する。
19. 愛媛県内子町とアラスカ州ワシラ市の友好都市提携コーディネーターとして渡米	平成 27 年 4 月 29 日～5 月 8 日	愛媛県松山市出身の和田重次郎が、アラスカで明治時代に活躍した縁により、愛媛県内子町とアラスカ州ワシラ市の友好都市提携のコーディネーターに任命され、日本領事館と共に、提携イベントを現地にて開催する。
20. 和田重次郎自ら記した金鉱の地図を発見。	平成 27 年 5 月 6 日	アメリカ合衆国アラスカ州アンカレッジ市内において、20 世紀初頭、和田重次郎自身が作成したとみられる、ユーコンデルタのカスコクウィム川流域における金鉱を記した地図を発見。アラスカ大学 Anthony Nakazawa 博士との共同研究。
21. アラスカ大学ネイティブ・ルーラルディベロップ学部に客員教授として招聘。	平成 27 年 8 月 4 日～8 月 26 日	愛媛県松山市出身の和田重次郎が、明治時代に金鉱を求めて、アラスカ州内各地を訪れている。その中でもルーラルコミュニティでの足跡調査が進んでいない。19 世紀に現地に滞在していた日本人たちとのコンタクトを手が

		かかりに、和田重次郎の足跡をたどる調査アラスカ大学 Anthony Nakazawa 博士らと行う。
22. Polar Bear Project オーガナイザーとして任命され渡米。	平成27年11月20日～27日	アラスカ大学ネイティブ・ルーラルディベロップ学部との Geo Tourism・環境問題共同研究および、地域社会貢献として、Polar Bear Project オーガナイザーとして、また NPO 団体「園でピース」からの依頼により渡米。アラスカ動物園と愛媛県立とべ動物園の姉妹提携を目指した交流の実現のための交渉を行う。
23. 「アラスカ動物園」と「愛媛県立とべ動物園」間の友好提携コーディネーターとして任命される。	平成27年12月10日～13日	気候変動による北極圏のシロクマを初めとする生態系の変化に対応して、既存の動物園が、国際協力を行い、野生生物保護への新しい機能を模索することを目指した提携の第一歩。アラスカ動物園園長と獣医らと共に、愛媛県立とべ動物園を訪問。日本初の人工哺育によるシロクマのピースの未来を模索するためのイベントを同時開催。
24. アラスカ州コディアック市と日本の地方都市と姉妹都市提携コーディネーターに任命される。	平成 28 年 1 月 10 日	日本領事館アンカレッジ出張所よりの依頼により、アラスカ州中南部に位置するコディアック島にあるコディアック市が、日本の地方都市との姉妹都市提携を希望、そのコーディネーターとして任命される。
25.アラスカ州スワード市における和田重次郎銅像建立計画委員に就任。	平成28年11月10日	アメリカ合衆国アラスカ州において、1900 年代初頭活躍した日本人和田重次郎の業績を称え、スワード市に銅像を建立する計画となった。アラスカ大学、スワード市教育委員会からの推薦により、建立実行委員となる。
26. International Green Energy Conference 2016 国際学会開催に向けて、国際実行委員に推薦され就任。	平成28年11月20日	2016 年 5 月 8 日から 11 日まで、アメリカ合衆国アラスカ州アンカッジ市におい開催予定の国際学会 Internationa Green Energy Conference 2016 の学会実行委員に就任する。また、同学会にぽいて研究発表およびシンポジウムにパネラーとして参加予定。
27. アラスカ州スワード市における日本人和田重次郎銅像除幕式に実行委員として参加。	平成 28 年 9 月 24 日	アラスカ州スワード市での和田重次郎銅像除幕式において、実行委員として参加するため渡米。日本側ナビゲーターを行う。
28.和田重次郎を紹介するニュース作成のため、NHK 国際報道部と同行取材で渡米。	平成 28 年 9 月 22 日～29	アラスカ州での和田重次郎の足跡を追うニュース取材にコーディネーターとして同行取材

	日	で渡米。2016 年 10 月ニュース番組の NHK WORLD において放送。および、12 月 18 日「これで分かった！世界は今」において放送。
29. 和田重次郎ドキュメンタリー作成のため愛媛の南海放送（日本テレビ系）に同行取材で渡米。放映番組にナビゲーターとして出演。	平成 28 年 9 月 22 日～29 日	アラスカ州において活躍した和田重次郎の足跡を追いかけて、アンカレッジ、フェアバンクス、ベセルへナビゲーターとして同行取材。12 月 31 日、60 分の TV 特別番組「オーロラのサムライ」として放送される。現地研究者として出演。現在、全国放送番組用として編集中。
30. 2017 Alaska Polar Bear Science Tour as GeoTourism Inisiative	平成 29 年 8 月 12 日-19 日	アラスカ大学フェアバンクス校、アンカレッジ校におけるジオツーリズム協会が中心となり、アラスカ動物園、Utqiagvik(ウキアビック)（旧バロー地域）先住民協会との共同調査としてのフィールドワークに研究員として招聘。Utqiagvik 地域と観光補完に関連する補完的側面の両方の SWOT (Strengths, Weaknesses, Opportunities, Threats) 分析を用いて旅行者の観点を取る。アンカレッジエリア-主にアラスカ動物園訪問と、フェアバンクスエリア-主にアラスカ大学フェアバンクス校の国際北極研究センターおよびチェナ・ホットスプリングを含む。そして、その SWOT 分析は、アラスカの入り口であるコミュニティにとっては、有益となるツーリズムを最大活用し、またより良い目的地債務原則を促進するために、経済的アプローチに焦点を当てるジオツーリズムに取り組もうとしているアラスカ州ウキアビック地域にとって、シロクマ生態調査を中心に、持続可能なツーリズムプログラムを構築する調査研究である。
4　その他		
1. 2013 Governor’s North Star Award for International Excellence 受賞	平成 25 年 6 月 7 日	東日本大震災直後より Japan Relief Fund of Alaska Foundation の一員として、アラスカ州内にて募金活動を初め、様々な救援・復興活動を企画運営。その国際活動対して、Sean Parnell アラスカ州知事より表彰される。
2. 2015 Bridge Builders "Samurai Musher" In Recognition for Excellence in Community Service 受賞	平成 27 年 8 月 25 日	国際交流協会 Bridge Builders Anchorage より同年 5 月にアンカレッジで上演した和田重

			次郎に関するミュージカル実現に対し、その国際交流への功績を表彰される。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1 極北先住民絵本翻訳「オーロラのひみつ」	単著	平成 16 年 12 月	新風舎出版	原書名：*The Northern Lights The soccer Trails* 先住民に伝わる様々なオーロラの言い伝えを基に現代のイヌイットの少女と母親の親子愛と人の死生観についての物語を翻訳したもの。親子のるべき姿が問題になりつつる日本の現代社会に親の愛とは何か、身近な人の死とは何かを表現した。
2 極北環境絵本の翻訳「山のささやき」	単著	平成 21 年 7 月	大阪教育図書	原書名：*Who Wants Rocks?* カナダ西北部からメリカ合衆国ラスカ州にかけて 19 世紀末ゴールドラッシュに沸き、それはまさに西洋社会の「一攫千金」という欲望渦巻く時代でった。そして同時に雄大な自然の破壊の幕開けでもった。この絵本は、価値観の方向転換を提起し、人間と自然の本来の距離を気づかせてくれる。現代の日本社会で生きる我々にも今、この意識の修正が、問われようとしているのではないだろうか、という思いから翻訳出版したもの。

（学術論文）				
1 インターネット英語情報を活用した英語教授法への一考察	単　　著	平成 19 年３月	伊藤孝治先生古希記念論文集	インターネットの普及は昨今非常にめざましく情報収集、ショッピング、通信などで幅広く我々の生活に浸透している。日常、我々はその情報を日本語で処理しているが、実際は、全世界のサイトの約７０％が、英語という言語によって作成されている。この溢れんばかりの情報をいかに利用するか、インターネットを用いた２１世紀のるべき英語教授法について考察したもの。
2 *A Commentary on Solid Waste as it Impacts Alaska Community Sustainability : Some Ideas from Japan and Alaska*	共　　著	平成 21 年 1 月	Journal of Rural and Community Development in Canada Vol.3, No.3	p. 108-122 （共同研究ではるが、主著者は松浦宏之） 環境問題が重要視される極北のラスカ州において、都市部および先住民コミュニティーにおけるゴミ処理の現状とその政策を検証。都市部としてはラスカ最大の都市ンカレッジの Landfill と呼ばれるゴミ処理地にて調査し、Tyonek, Tanana, Buckland, Bethel というネイティブのコミュニティーにおいて２年間に渡るフィールドワークを行った。日本のゴミ処理政策との比較をも行いながら、その将来的方向を考察したもの。カナダの Brandon

				University の専門研究会学誌に提出。査読後、受理されたもの。ラスカ大学フェバンクス校、経済博士　Anthony Nakazawa 氏らとの共同研究。
3. *Who is Jujiro Wada? Alaska Prospector and Blazer of the Iditarod Trail*	共　著	平成 23 年 3 月	The Alaska Miners Journal March 2011	明治時代、ラスカに渡った愛媛県・松山市出身の日本人、和田重次郎は、ラスカにおけるそのパイオニ時代（1890 年代 1920 年ごろ）において、犬ぞりを用いラスカ全土を走破。数多くの金鉱を発見して、ラスカにおけるゴールドラッシュを引き起こす原因を作った。また各地で様々な逸話を残しており、その生涯の足跡をラスカ全土に渡り調査を行いまとめたもの。
4.*The Alaska Food Policy Council offers a new voice*	共　著	平成 23 年 9 月 5 日	*Tundra Drums* -CAUYAT- “The Best of the Yukon Kuskokwim Delta” Vol. 39, No. 24	With the high cost of fuel, another important consideration for village sustainability is a realistic consideration of the full cost of commercially purchased food in rural Alaska villages. The village food prices for the most part do not take into consideration the direct costs of dealing with the growing accumulation of packaging waste in village solid waste sites and the impact

				on the local environment. By Hiroyuki Matsuura and Dr.Anthony Nakazawa
5.*Information offered on how to utilize the media*	共　著	平成 23 年 9 月 5 日	*Tundra Drums* -CAUYAT- "The Best of the Yukon Kuskokwim Delta" Vol. 39, No. 24	Media represents a powerful force in any community. It influences who affects our government, how money is spent, the opinions we form and how we spend our free time. The many forms of media all have the potential to become valuable tools in publicizing ideas and in generating public support. Organizations, groups or individuals using these tools should begin with a well-defined issue, which is then supported by a Plan of Action. by Edgar Blatchford, Hiroyuki Matsuura, and Dr.Tony Nakazawa
6. Can we Address Village Alaska's Solid Waste Problem? Rural Development Management Strategies to address a Vital Element of Rural Alaska Sustainability	共　著	平成 26 年 3 月 10 日発行	太成学院大学紀要 第 16 巻	Alaska's small remote rural or "Bush" communities rely on barges from Seattle or airplanes from Alaska regional centers to bring in fuel and other supplies. Their solid waste problem is significantly impacted by high transportation costs for these off-the road system villages. It is too expensive for remote rural communities to ship solid waste out by barge or airplane. The situation in remote rural

				Alaska has been neglected and there are serious challenges to air and water quality. The focus on the global environment is also bringing international attention to their Solid Waste Problem. We will provide an analysis of Bush Alaska's solid waste problems based on facts gathered from our field work and presented are some possible technology transfer solutions with involving some evolving Japanese environmental technologies. The research for this article was presented at The 26th Annual Conference of the Applied Regional Science Conference (ARSC) at Aomori Public College, Japan in 2012. Hiroyuki MATSUURA を主著者とする。共著者は以下のとおの通り。 Anthony NAKAZAWA,Ted JACOBSON, Doug HUNTMAN, Edgar BLATCHFORD, Steve Hsueh Ming WANG
7. Who is Jujiro Wada? The Jujiro Wada Story as a Geotourism / Cultural Tourism Opportunity for Alaskan Communities	共　　著	平成 26 年 12 月発行	Studies in Science and Technology 科学・技術研究 第 3 巻 2 号 2014 年	明治時代にアメリカ合衆国アラスカ州で活躍した日本人和田重次郎のその人生の足跡をたどることは、まさにアラスカの歴史を紐解くことである。また現代アラスカにおける Geotourism の先駆けとして、新しいツーリズムによるアラスカ地域社会開発の糸口の可能性を提案し

				ている。（査読あり）
（その他） 1 外国語科目における学習モチベーション向上へのインターネット利用方法	共 同 研 究	平成 16 年 8 月 21 日	教育システム情報学会第 29 回全国大会	外国語科目、特に英語学習への学生の関心度や学習意欲のモチベーションを高めるための一手段として、インターネット上のＥメールやグリーティングカード作成サイトを用いてみた。季節の挨拶やバースディカード作成を英文で行い、英文の構築、タイピングを通じて英語学習への実用的モチベーション向上を目指す。また、学生の反応をンケートの形式で調査を試みた。
2 英語運用能力を磨くインターネット活用法	共 同 研 究	平成 17 年 8 月 27 日	教育システム情報学会 第 30 回全国大会	英語の運用能力を向上させる発展的手法として、昨今、進歩のめざましいインターネットを活用した学習方法を考案実践。また情報処理能力の実践により、世界を知るためには英語が非常に重要なメディでることを具体的に再確認する教育法を発表。
3 インターネットを用いた英語学習方法	共 同 研 究	平成 18 年 9 月 6 日	私学大学情報教育協会 大学教育・情報戦略大会にて	インターネットの普及は昨今非常にめざましく情報収集、ショッピング、通信などで幅広く我々の生活に浸透している。日常、我々はその情報を日本語で処理しているが、実際は、全世界のサイトの約７０％が、英語とい

				う言語によって作成されている。つまりネット上には、日本語から収集できるより遙かに多い英語によって作成された情報がふれんばかりに存在しているのでる。そこで、この膨大な情報をいかに英語を学ぶという観点から利用するか、インターネットを用いた英語学習利用法を発表。
4 英語学習へのハイパーリンク活用	共 同 研 究	平成 19 年 9 月 5 日	私学大学情報教育協会 大学教育・情報戦略大会にて	ツーリズムへの関心や英語という言語に興味を持たせる為のモチベーションとして、ハイパーリンク機能を活用した海外旅行日程表（イティナリー）作成を実践する。目的地の選択や現地情報の収集に際しては、学生自らの意志を尊重しながら、情報網の広がりの重要性と英語学習への目的意識を確立していくことを意図した。概して、ツーリズム学部や英文学科の学生を対象に、英語運用能力と同時に情報処理および活用能力の向上を目指す。
5 情報処理能力および英語運用能力向上のための Itinerary 作成	共 同 研 究	平成 19 年 9 月 14 日	教育システム情報学会 第 32 回全国大会	海外旅行の Itinerary（旅行日程表）を作成することにより、グローバル化が進む世界への関心を高め、同時にハイパーリンクを多用し、現地での情報の広がりと多様性を体感しながら、英語運用および情報処理能力の向上を目指す学習法を発表。

6　英語学習のための IT リテラシー活用法	共 同 研 究	平成 20 年 7 月 5 日	私立大学情報教育協会 全国大学 IT 活用教育法研究発表会	インターネット上の情報を生活の中で、道具としてまたメディとして認識し、使いこなすための教育指導の確立を目指した。ネット上の英語を現代英語コーパスと考と捉えて、それらを英語教材として活用する方法を考察した。一切特殊なソフトを用いず、オンライン環境下でれば、学習可能な英語運用能力と情報処理能力を高める学習方法を考案したもの。
7 IT を活用した多次元的英語教材プレゼンテーション	共 同 研 究	平成 20 年 9 月 3 日	私立大学情報教育協会 教育改革 IT 戦略大会	デジタル情報やＩＴが身近になってきた現代社会において、それらを活用すれば、多角度的な情報を組み込み込むことが可能でる。これにより、学生たちが、従来の活字テキストでは不可能でった、情報の拡張とさらなる知の探求を行える効果的なマルチインフォメーション教材提示を考案。
8　情報拡張型のデジタル英語教材作成	共 同 研 究	平成 20 年 9 月 5 日	教育システム情報学会 第 33 回全国大会	従来の活字によるナログテキスト英語教材をより効果的にプレゼンテーションするために、デジタル化した教材に、オフィスワードを用いて、フレーム作成・リンク・吹き出しなどを用いて、多角度的な情報を組み込むことを可能にし、マルチインフォメーション提示のための教材提示の開発を試みた。

9 「アラスカの環境問題と経済発展」	単　著	平成 20 年 9 月 16 日	Alaska Academy 第 20 回研究会	アラスカ大学と共同研究を行い、ラスカ州の都市部とネイティブコミュニティにおけるゴミ処理問題を比較検討。地域的な問題点と経済に結びつく将来的解決法を提案。日本およびメリカの他の州とも比較しながら、ラスカが抱える独自な環境問題を調査したものを発表。
10 *The Role of Technology in Fostering a Recycling Society for Rural Alaska*	共　著	平成 22 年 5 月 6 日	Solid Waste Association of North America Annual Conference Anchorage, Alaska USA	アラスカ大学地域開発学部・農学部研究者と EPA 環境専門家との合同研究発表。メリカのラスカ州の地域社会において深刻になりつつるゴミ処理問題について、その現状と環境に配慮した処理方法を提示。また最新の日本の環境技術の導入の可能性を焼却処理・リサイクル・肥料作りなどに分けて提案。完全なる循環型社会のチャートを提示し、ラスカ地域社会における地域社会発展のための農業をとり入れた未来像を提案。
11.「地域研究アラスカ」 －大自然と環境問題－	単　著	平成 23 年 3 月 20 日	言語文化研究会 第 29 回例会	知られざるラスカの大自然とその地に住む人々を取り巻く環境問題についての現状報告。特に、ルーラルラスカにおけるエスキモー・コミュニティにおける深刻なゴミ処理の現状とその持続可能社会の構築のための解決策に関するラスカ大学との合同研究を発表。

12. Can we Address village Alaska's Solid Waste Problem? *-Some comments on a vital element of rural Alaska sustainability-*	共　著	平成 24 年 11 月 17 日	The 26th Annual Conference of the Applied Regional Science Conference (ARSC) Aomori Public College, Japan	Alaska's small remote rural or "Bush" communities rely on barges from Seattle or airplanes to bring in fuel and other supplies. The Solid Waste Problem for these remote villages is especially impacted by high transportation costs for these off-road system communities. It is too expensive for remote rural communities to ship solid waste out by barge or airplane. The situation in remote rural Alaska has been neglected and there are serious challenges to the residents of these communities and to their air and water quality. Hiroyuki Matsuura, Ted Jacobson, Edgar Blatchford and Tony Nakazawa
13. *Geotourism as a New Concept: Sustainability and Rural Tourism: Comments from Japan*	共 同 研 究	平成 25 年 3 月 27 日	The International Tourism Exchange Special Meeting of the Bristol Bay Borough Chamber of Commerce at the Naknek Native Village Council in Naknek, King Salmon, Alaska US	A presentation focused on ideas to consider using the natural environment of the region and other aspects that appeal to the Japanese tourist/visitor. Also, the unique link of the Bristol Bay region to Japanese, Chinese, and others as in-migrant workers in the early Alaska salmon industry were valuable links for international tourists. Many people in Japan link Bristol Bay with the salmon that they have enjoyed for generations. With Steve Wang, UAA and Anthony Nakazawa UAF

14. *Tourism as a Positive Force in Public Process/ Natural Resources Education*	共 同 研 究	平成 25 年 8 月 8 日	2013National Extension Tourism Conference Detroit, Michigan, USA	This will be a panel discussion The focus of the panel discussion will be on the varied applications involved with the tourism development process (in Japan and Alaska) as means of mitigating the (widely known) negative impacts associated with environmental pollution in the respective locations of Teshima Island and Minamate; and potential negative impacts associated with Alaska's Pebble Mine development and exploration/development activities associated with or related to recent and continuing experiences with the Arctic National Wildlife Refuge. These experiences and lessons learned have direct implications for other communities/regions across the world as minerals and oil are needed to feed the development of international economies.
15. *Co-ops and Cooperative Approaches as a Heritage Tourism Strategy for your Community*	共 同 研 究	平成 25 年 9 月 7 日	Prince of Wales Biennial Visitor Summit Craig, Alaska USA	The cooperative business model, in contrast to a non-profit association, is a method for organizing economic activities that is particularly well suited to serving the civic needs of communities. The purpose of cooperatives is complementary to the purpose of communities in that they seek to bring

				people together to serve a common need. They are well suited to aggregating community resources to achieve a community goal. And they can be effective in distributing benefits to serve civic purposes as well as private interests. How does a community select the approach that best fits its needs regarding Heritage Tourism as a potential method for economic development? One important first step is for the community to think of "economic development" as "community economic development." This theme provides a more focused approach to understanding how communities can serve the diverse interests of citizens. With Community Economic Development as the theme, the fit of a cooperative model of economic organization to achieving communal goals becomes evident.
16 *The Technology Transfer Role of Cooperative Extension Model in Remote Rural Communities: The Alaska Experience*	共 同 研 究	平成 26 年 3 月 10-12 日	8th International Technology, Education and Development Conference Valencia, Spain	This presentation will have a discussion of the various Alaska educational, information, communication, and demonstration technologies along with their relative "successes" and "limitations" in the educational process, both formal and informal. The focus initially will be through the experiences of the United

				States Department of Agriculture's Cooperative Extension system in Alaska as it relates to technology transfer and to educational delivery (primarily agriculture and home sciences). The experiences presented will include the University of Alaska which will celebrate its 100th anniversary in 1917 and its statewide network of local community campuses; and, various governmental, NGO, and private sector experiences in utilizing various educational technologies (to include organizational management approaches) to connect and move forward Alaska's communities, both large and small.
17.The challenges of Alaska Geo-Tourism.	共同研究	平成 26 年 11 月 18 日	2014 Geotourism Workshop, Naknek Village Council Building (Dolly's Hall) Naknek, Alaska USA	Japanese people think that Alaska is a country and 4 times bigger than Japan. Many Japanese tourists want to visit Alaska, but most people in Japan think Alaska is an icy world with bears walking around year round. The whales are very famous in Japan, since they eat whales. Some of the same wild plants that grow in Japan also grow in Alaska, since they are at the same latitude. Some examples are Mums, Fireweed, Forget-Me-Not, and the Chocolate Lilly. Many people in Japan would like to try dog sledding. Most Japanese think

				the Aurora is spiritual. On the other hand, The Pipeline and the Gold Rush Era have done some environmental damage. The new Anchorage landfill filled up in 5 years and permafrost makes it hard to bury garbage. Showing a picture of black smoke rising out of the South Naknek Landfil and bag forests, we try to display many other landfills across Alaska that need much attention.The state of Alaska has not only many attractive essences of New tourism but also many challenges to solve.
18. *The Alaska/Japan Polar Bear Collaboration as a Geo Tourism Initiative*	共同研究	平成 28 年 5 月 9 日	International Green Energy Conference 11th Annual Conference in Anchorage, Alaska, USA	The Alaska/Japan Polar Bear Collaboration is a Geotorism Initiative involving the Alaska Zoo in Anchorage Alaska and the Tobe Zoo in Ehime Japan. The effort is to highlight the vital role of the zoos in these two communities to realize the new evolving role of Zoos regarding climate change and the role that Zoos can have in educating their respective communities, regions and hence respective nations in our changing world and the importance of community sustainability. Recently this last December 2015 the Tobe Zoo and their international Japan-Alaska Bridge builder Professor Hiro Matsuura invited representatives of the Alaska Zoo and the University of Alaska to come and participate in the 16th Birthday Celebration of Peace, who is the Polar Bear in residence at the Tobe Zoo, Ehime.

				This panel presentation will include the highlights of this event and the future collaborations envisioned by the Tobe Zoo in promoting public education and in support of sustainability. Hiroyuki Matsuura, Taisei Gakuin University, Osaka Japan Anthony Tadashi Nakazawa, University Alaska of Fairbanks Patrick S. Lampi Executive Director Alaska Zoo Riley Wilson Veterinarian Alaska Zoo
19. *An Idea about a Sustainability Research Center in Alaska*	共同研究	平成 28 年 5 月 9 日	International Green Energy Conference 11th Annual Conference in Anchorage, Alaska, USA	Sustainability is a critical issue in the future development of the rural Alaska. The climate changes will make the rural communities to adapt their economic activities such as fishing and hunting. On the other hand, using the new technology such as internets and telecommunication systems drive people to move to the municipality areas of Alaska. In order to make the rural Alaska sustainable, Geotourism may be a solution for the rural communities. This research surveyed the current tourism industry in Alaska and the global trends for tourism development. We also studied the other strategy development in the Nordic areas, the northern States such as Montana, etc. as well as Hawaii and analyzed how their tourism industries have been developed and cooperated with the academic systems. After a SWOT analysis, we found that establishing a sustainability research center at

				University of Alaska Anchorage which including the development of Geotourism systems in the rural Alaska may be a good solution. Steve Wong, University Alaska of Anchorage Hiro Matsuura, Taisei Gakuin University Japan Anthony Nakazawa University Alaska of Fairbanks
20. Bristol Bay Geotourism Collaboration - 2025	共同研究	平成 28 年 5 月 9 日	International Green Energy Conference 11th Annual Conference in Anchorage, Alaska, USA	Empowering communities, families and individuals of Bristol Bay by providing research, education and training through viable and sustainable economic development, GeoTourism and green energy. By 2025, 100 Bristol Bay Village Families and Individuals own and operate geotourism businesses that are intricately connected to our Katmai NP hub. Our Geo-visitors will experience our region's rich cultural heritage, along with applications of green energy, zero waste, resilient homes, infrastructure and equipment, and food security systems, both traditional and modern. Panel Participants: • Adelheid Hermann, Moderator/Introductions, former Alaska State Representative and lifelong resident of the Bristol Bay region • Mike Oniel – Alaska Geotourism Collaboration Secretary • Paul Hanson – Bristol Bay elder from Naknek (invited) • Hiro Matsuura - Alaska Japan Bridgebuilder/Professor Taisei Gakuin University

				• Dar Kawenna:ron Johnson – Alaska Geotourism Conference Tour Guide • Daisy Alfaro, Owner of Daisy's Tours and UAA MA-Project Mgt grad student • Edgar Blatchford, UAA Communications and former Commissioner of the Alaska Department of Commerce and Economic Development • Tony Nakazawa, UAF Coop Extension and AlaskaHost Educational Advisor
21.The Alaska/Japan Polar Bear Collaboration As a Geotourism Initiative	共同研究	平成 28 年 8 月 9 日	2017 National Extension Tourism Conference in Princeton, New Jersey, US	The Alaska/Japan Polar Bear Collaboration is a Geotourism Initiative involving the Alaska Zoo in Anchorage Alaska and the Tobe Zoo in Ehime Japan. The effort is to realize the new evolving public education role of Zoos regarding climate change and the role that Zoos can have in educating their respective communities, regions and hence respective nations in our changing world and the importance of community sustainability. This panel presentation will include highlights of this event and the future collaborations envisioned by theTobe Zoo and the Alaska Zoo in promoting public education and in support of sustainability issues as they relate to the changing climate, and the evolving topic of climate change. Alaska's community-based tourism initiative, such as this initiative involving this international zoo exchange has embraced the concept of Geotourism – quoting

				founder Jonathan Tourtello, “An economic approach for maximizing beneficial tourism and good destination stewardship.” H Matsuura, Associate Professor at Taisei Gakuin University Japan and Alaska-Japan Bridgebuilder Edgar Blatchford, Associate Professor, University of Alaska Anchorage Judy Hargis, Travel Writer and Web Editor for AlaskaGeotourism Tony Nakazawa, Professor, University of Alaska Fairbanks
（翻　訳） 1　極北環境絵本の翻訳 *Who Wants Rocks?*	単　　著	平成 18 年 3 月	太成学院大学紀要 第 8 巻	p. 165-171 カナダ西北部からメリカ合衆国ラスカ州にかけて 19 世紀末ゴールドラッシュに沸き、それはまさに西洋社会の「一攫千金」という欲望渦巻く時代でった。そして同時に雄大な自然の破壊の幕開けでもった。この絵本は、価値観の方向転換を提起し、人間と自然の本来の距離を気づかせてくれる。
（翻　訳） 2. 英語翻訳詩集 言葉の花火 FIREWORK POEMS Ⅳ	単　　著	平成 21 年 12 月	関西詩人協会 竹林館	和田杳子詩編「胃袋」の英訳を担当
3. 南海放送製作番組（90 分 Ver.）「オーロラのサムライ」の英訳	合　同	平成 29 年 2 月	愛媛南海放送（日本テレビ系）製作	南海放送製作番組「オーロラのサムライ」（90 分番組）のアメリカ合衆国放映のための英語版製作。
（研究補助費取得） *1.　The 3-Country (Alaska-Japan-Yukon) Jujiro Wada*	合　　同	平成 22 年 12 月	Alaska Humanities Forum	アメリカ・カナダ・日本の３国合同によるラスカのパイオニ時代に活躍した日本人、

Global Archiving Program Project".				和田重次郎の調査研究に対する研究補助費を取得。 Grant number G11-0029 補助額：**$5,000** 期間:2010年12月6日～2011年6月7日
2. 平成26年度国際交流基金 文化芸術交流海外派遣助成事業 みかん一座『オーロラに駆けるサムライ～和田重次郎物語～』(演劇)	合同	平成27年4月 29 日～5月8日	平成 26 年度国際交流基金	国際交流基金からの助成を受け、愛媛県松山出身の和田重次郎が、19世紀から20世紀初頭にかけて、アメリカ合衆国アラスカ州において活躍した、その半生をミュージカルにして、現地アンカレッジ市にて上演したもの。主催： NPO法人 和田重次郎顕彰会

（経営）若宮　達夫

教　育　研　究　業　績　書

平成30年3月19日

氏名　若宮　達夫　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
電子制御	マイクロプロセッサ、電子回路、プログラミング

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1 教育方法の実践例	平16.4	具体から抽象へ。ロボットシステム工学や生産システム工学などエンジニリング関連の授業を担当しているが、体験重視に加えて「具体から抽象へ」という授業展開を試みた。理工学の分野においては、最初は現象の発見から始まり、のち、これに対して理論付けがおこなわれ、続いて応用が論じられる。すなわち、具体から抽象という流れを経てひとつの学問体系ができがる。 ところが多くの場合、この逆の順序で教授がおこなわれる。初学者はいわゆる白紙の状態でるゆえ、抽象的な理論から入った場合、概念がじゅう

		ぶん形成されず、ために理解が滞りやがて興味を喪失することになる。なぜそれが発明されたか、どのようにして発見されたか、どのように応用展開されてきたか、ということを折り込みながら授業を進めるよう留意した。さらに回路見本や機構見本、模型などを製作・準備してそのつど提示るいは回覧し実際に触れさせた。これにより学生の興味・関心を喚起・継続することができ、意欲的に学ぶようになった。以後、この実践を継続する。
	平 16.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。これら３つのイテムをキーワードにセミナー生を募ったところ、39 名の学生がこれに応じた。セミナーではロボット研究所の設備を駆使し、実験・実習・製作など一人 30 テーマを１年間かけて実施する形式を採った。 油に汚れることをいといもせず、はんだづけの煙に目をしばたたかせながらも学生が作業に集中する。ひとつのテーマを完成し終えたとき、例外なくだれもが目を輝かせ感動する。全員が自発的に出席し、だれ一人として進捗を促される者もなく、また一人の落伍者もなく全員が合格した。 若年層の無気力、無関心が叫ばれて久しいが、このように機会と適切な指導が与えられれば彼らは意欲的にものごとに取り組む。本セミナーにおいて、学生はものごとを完成したときの達成感、成就感をおおいに学んだ。実験のテキスト作り、
	平成 17.4	実習・製作の部品材料集めに奔走した一年間でったが、学生のいきいきとテーマに向かう姿に報われる思いでった。 具体から抽象へ。昨年度に続いてこの観点に立ち、授業を展開する。ロボットシステム工学や生産システム工学、ソフトウェリテラシーなどエンジニリング関連科目、コンピュータ関連科目の授業を担当している。今年度は、エンジニリング関連科目には視聴覚教材を用いるべく計画している。これによって、ふだん見ることのない機械や装置の仕組みや実際の生産現場などを知ることができる。

		また、コンピュータ関連科目では教材として身近な題材を取り上げることを計画している。ややもすると煩雑・難解になりがちなコンピュータの扱いを少しでも親しみるものにすることを目的としている。以後、この実践を継続する。
	平成 17.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのイテムをキーワードにセミナー生を募ったところ 68 名の学生がこれに応じた。
	平成 18.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのイテムをキーワードにセミナー生を募ったところ 65 名の学生がこれに応じた。
	平成 19.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのイテムをキーワードにセミナー生を募ったところ 54 名の学生がこれに応じた。
	平成成 19.9	科目『ロボット製作』を担当する。ロボットシステム工学でメカニズムについての基礎を学修しているが、この授業ではそれらを実際に製作する。ただし、教室での授業ゆえ実際に機械や工具で材料を加工工作することができない。そのため、ペーパークラフトによるメカニズムの製作・組み立てを行なう。学生は、実際に手を動かすことで積極的に授業に取り組み、かつ仕組みやその動作についてより理解を深めることができる。以後、この実践を継続する。
	平成 20.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのイテムをキーワードにセミナー生を募ったところ、じつに 58 名の学生がこれに応じた。 科目『情報と職業』を担当する。さまざまな職業の中に浸透するコンピュータ。そして氾濫する情報。高度情報化社会にあって、コンピュータやソフトウェア開発、通信ネットワークなど情報産業に携わる職業人として求められる資質について

		学ばせる。授業を行なうにあたって、社会の中でどのようなところで、どのようにコンピュータが活躍しているか実際の場面をビデオ教材を用いて広範囲に紹介する。これにより、コンピュータと職業の関わりが具体的に結びつき、より授業に対する理解が深まる。以後、この実践を継続する。
	平成 21.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのイテムをキーワードにセミナー生を募ったところ 46 名の学生がこれに応じた。
	平成 22.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのイテムをキーワードにセミナー生を募ったところ 37 名の学生がこれに応じた。
	平成 23.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのイテムをキーワードにセミナー生を募ったところ 29 名の学生がこれに応じた。
	平成 23.9	科目『人間社会とコンピュータ』を担当する。ＡＴＭや列車運行管制システムなど、幅広く社会基盤を支えるコンピュータについて学ばせる。授業を行なうにあたって、その仕組みと、社会との関わりについての説明に注力する。また、コンピュータがどのように活躍しているか、その現場をじかに見る機会がないため、ビデオ教材を用いてそれを紹介することにした。これによりコンピュータに対するイメージが具体化し、授業の理解を深めることができる。以後、この実践を継続する。
	平成 24.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのイテムをキーワードにセミナー生を募ったところ 27 名の学生がこれに応じた。
	平成 25.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのアイテムをキーワードにセミナー生を募ったところ 13 名の学生がこれに応じた。

	平成 25.9	科目『ものづくり経営学』を担当する。技術立国日本を支える製造業。将来、その経営者や幹部社員になり企業の舵取りを行なう、あるいは社員として企業の発展に貢献する場面を想定し、ものづくりの現場について広く学ばせる。学生諸君は、職業人としての経験がまだない。また、企業ノウハウの関係にて製造現場である工場内の様子を実際に見る機会もないところから、ものづくりの様子をビデオ教材を用いて紹介。擬似的ではあるがこのような現場体験を通して授業に対する理解を深めていく。以後、この実践を継続する。
	平成 26.4	科目『情報通信ネットワーク』を担当する。インターネットやＬＡＮのみに留まることなく、『みどりの窓口』やＡＴＭ、ＰＯＳなどネットワーク技術を用いた身近なシステムについても広く学ばせる。ひじょうに広範囲にわたる、かつ高度な内容であるため一足飛びに情報通信ネットワークに踏み込むことは避け、情報および通信についてまず学び、続いてこれを統合した情報通信を、そしてコンピュータ技術と連動したテクノロジーとしての情報通信ネットワークについて、というように段階的に学修を進める。また、理解を補完するために提示実験も行なう。以後、この実践を継続する。
	平成 26.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのアイテムをキーワードにゼミ生を募ったところ 23 名の学生がこれに応じた。
	平成 27.4	科目『情報処理演習１』を担当する。授業内容はワープロソフト『ワード』の操作である。演習形式の授業につき、課題を日常生活や将来のビジネスの場で使うことができる身近なテーマとした。授業方法は、テキストと自作プリントを併用。
	平成 27.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのアイテムをキーワードにゼミ生を募ったところ 12 名の学生がこれに応じた。
	平成 27.10	科目『情報処理演習２』を担当する。授業内容は

		表計算ソフト『エクセル』の操作である。演習形式の授業につき、課題を日常生活や将来のビジネスの場で使うことができる身近なテーマとした。授業方法は、テキストと自作プリントを併用。
	平成 28.4	科目『販売管理論』を担当する。授業方法は、自作プリントおよび実習教材を併用。知識のみに偏ることなく、店舗設計やパッケージデザインなど、将来、ビジネスの場で応用可能な実習教材を各種開発した。
	平成 28.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのアイテムをキーワードにゼミ生を募ったところ 13 名の学生がこれに応じた。
	平成 29.4	科目『わかる数学』を担当する。授業への動機づけに力点を置くため、講義だけでなく演習、実験を取り入れた授業構成とした。教材プリント 15 回分を作成する。
	平成 29.4	科目『基礎統計学』を担当する。授業への動機づけに力点を置くため、講義だけでなく演習、実験を取り入れた授業構成とした。教材プリント 15 回分を作成する。
	平成 29.4	科目『医療情報演習Ⅱ』を担当する。授業内容は演習であるが、医療分野のＩＴ化が進む現在、コンピュータテクノロジーにも触れた授業構成とした。
	平成 29.4	ロボット・ものつくり・コンピュータ。昨年度同様、これら３つのアイテムをキーワードにゼミ生を募ったところ 18 名の学生がこれに応じた。
	平成 29.10	科目『医療情報演習Ｉ』を担当する。授業内容は演習であるが、医療分野のＩＴ化が進む現在、コンピュータテクノロジーにも触れた授業構成とした。教材プリント 15 回分を作成する。
2 作成した教科書，教材	平成 16.6	カラムスキャンドットマトリクスＬＥＤ点灯実験回路の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 16.8	プリント基板露光装置の製作。（セミナー教材）
		ＭＴ管を用いた単球式再生検波ラジオの設計・製作（セミナー教材）
	平成 16.12	専用ＬＳＩを用いたメロディボックスの設計・製作（セミナー教材）
	平成 17.1	サブミニチュ管を用いた単球式再生検波ラジオ

		の設計・製作（セミナー教材）
	平成 17.4	４ビットバイナリカウンタ実験回路の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 17.4	８ビットバイナリカウンタ実験回路の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 17.8	専用ＬＳＩを用いた復刻版ブロックくずしゲームの製作（セミナー教材）
	平成 17.9	ＲＳ－ＦＦ実験回路の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 17.9	Ｄ－ＦＦ実験回路の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 17.9	４ビットラッチ実験回路の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 17.90	８ビットシフトレジスタ実験回路の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 17.11	モーターダイレクトドライブカー（ロボット関連教材）
	平成 18.3	１石レフレックス検波ラジオの設計・製作（セミナー教材）
	平成 18.4	アセンブリー教材（23 テーマ）を作成
	～	
	平成 19.2	惑星の運動（プログラミング関連教材）
	平成 18.4	衛星の運動（プログラミング関連教材）
	平成 18.4	マイクロコントローラを用いたユニバーサルタイマーの設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 18.5	マイクロコントローラを用いたバイナリ・ヘキサ変換回路の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 18.8	マイクロコントローラを用いたゼロサプレス４桁数字表示回路の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 18.8	マイクロコントローラ PIC・16Ｆ819 汎用実験基板の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 18.9	マイクロコントローラ PIC・16Ｆ84A 汎用実験基板の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 18.9	マイクロコントローラ PIC・16Ｆ675 汎用実験基板の設計・製作（システム制御関連教材）

		４ビットオペレーションＬＣＤ制御実験回路の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 18.10	２足静歩行ロボット「ビッグフット」の製作（ロボット関連教材）
	平成 18.10	トライックを用いたスピードコントローラの設計・製作（セミナー教材）
	平成 19.4 ～ 平成 20.2	アンブリー教材（11 テーマ）作成
	平成 19.4 ～ 平成 19.7	ＣＡＤ教材（15 テーマ）制作
	平成 19.5	マイクロコントローラを用いた電子スロットマシンの設計・製作（セミナーおよびシステム制御関連教材）
	平成 19.6	ＡＭ波の表示（プログラミング関連教材）
	平成 19.8	PIC・16Ｆ627/628 汎用実験基板の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 19.8	ＬＥＤ交流点灯実験回路の設計・製作（セミナー教材）
	平成 19.9	機械のしくみについての工作教材１回め：４節リンク機構（ロボット関連教材）
	平成 19.10	機械のしくみについての工作教材２回め：ロボットハンド（ロボット関連教材）
	平成 19.10	機械のしくみについての工作教材３回め：ローラチェーン（ロボット関連教材）
	平成 19.10	機械のしくみについての工作教材４回め：パンタグラフ（ロボット関連教材）
	平成 19.10	機械のしくみについての工作教材５回め：シャッター機構（ロボット関連教材）
	平成 19.10	機械のしくみについての工作教材６回め：両開き単動ド（ロボット関連教材）
	平成 19.11	機械のしくみについての工作教材７回め：揺動テーブル（ロボット関連教材）
	平成 19.11	機械のしくみについての工作教材８回め：昆虫の脚の機構（ロボット関連教材）
	平成 19.11	機械のしくみについての工作教材９回め：ワイパー機構（ロボット関連教材）
	平成 19.11	機械のしくみについての工作教材 10 回め：ピス

		トン機構（ロボット関連教材）
	平成 19.12	機械のしくみについての工作教材 11 回め：３輪駆動機構（ロボット関連教材）
	平成 19.12	機械のしくみについての工作教材 12 回め：多輪駆動機構（ロボット関連教材）
	平成 19.12	機械のしくみについての工作教材 13 回め：一輪車模型（ロボット関連教材）
	平成 20.1	機械のしくみについての工作教材 14 回め：平行リンク機構（ロボット関連教材）
	平成 20.1	機械のしくみについての工作教材 15 回め：直線運動機構（ロボット関連教材）
	平成 20.1	マイクロコントローラ AVR･ATtiny2313 汎用実験基板の設計・製作（システム制御関連教材）
	平成 17.2	ひずみ波 167 波形についてそれぞれフーリエ解
	～	析をおこない、波形再現のためのプログラムを作
	平成 21.5	成（プログラミング関連教材）
	平成 20.3	リサージュ図形の表示（プログラミング関連教材）
	平成 20.3	三角関数の表示（プログラミング関連教材）
	平成 20.4	アセンブリー教材（25 テーマ）を作成
	～	
	平成 21.2	
	平成 20.4	減衰振動モデル（プログラミング関連教材）
	平成 21.2	３相交流波形の表示（プログラミング関連教材）
	平成 21.6	マグネットロック機構（システム制御関連教材）
	平成 21.7	ロボット搬送制御（システム制御関連教材）
	平成 21.9	ムーブマスター用汎用入出力内の設計・製作（ロボット関連教材）
	平成 22.3	Z80 スィッチ式トレーニングマイコンの製作（プログラミング関連教材）
	平成 22.3	無安定マルチバイブレータ実験回路の製作（システム制御関連教材）
	平成 22.12	７セグメントＬＥＤ表示回路の製作（プログラミング関連教材）
	平成 22.4	ｱｾﾝﾌﾞﾘｰ教材（春学期用 15 テーマ）を作成
	～	
	平成 22.8	
	平成 22.10	ｱｾﾝﾌﾞﾘｰ教材（秋学期用 15 テーマ）を作成
	～	
	平成 23.2	

	平成 22.71 ～ 平成 23.2	ひずみ波８波形についてそれぞれフーリエ解析をおこない、波形再現のためのプログラムを作成（プログラミング関連教材）
	平成 23.4 ～ 平成 23.7	ｱｾﾝﾌﾞﾘｰ教材（1 年生春学期用９テーマ、２年生用 10 テーマ）を作成
	平成 23.9 ～ 平成 24.1	ｱｾﾝﾌﾞﾘｰ教材（1 年生秋学期用９テーマ、２年生用 12 テーマ）を作成
	平成 23.8	ＲＳ２３２Ｃテストボードおよびサンプルプログラムの製作（セミナー教材）
	平成 23.12	ＬＥＤ電飾の製作（セミナー教材）
	平成 23.12	コンデンサ蓄電実験装置の製作（セミナー教材）
	平成 24.1	押しボタン式モーターブリッジ回路の製作（セミナー教材）
	平成 24.1	リレー式モーターブリッジ回路の製作（セミナー教材）
	平成 24.1	モーター正転・逆転制御回路およびサンプルプログラムの製作（セミナー教材）
	平成 24.1	断線検知付き警報回路の製作（セミナー教材）
	平成 24.3	液晶表示装置用主導書き込みスィッチパネルの製作（セミナー教材）
	平成 24.4 ～ 平成 24.7	ｱｾﾝﾌﾞﾘｰ教材（春学期用 15 テーマ）を作成
	平成 24.6	電磁誘導現象実験回路の製作（「情報と職業」教材）
	平成 24.6 ～ 平成 24.7	ＰＩＣマイコン用実習教材（15 点）の製作（セミナー教）
	平成 24.7 ～ 平成 24.9	ハンダ付け教材（15 点）の製作（セミナー教材）
	平成 24.8 ～	Ｚ８０マイコン用実習教材（15 点）の製作（セミナー教材）

	平成 25.10 平成 24.9 ～ 平成 25.1 平成 25.1 平成 25.1 平成 25.1 平成 25.1 平成 25.1 平成 25.1 平成 25.1 平成 25.1 平成 25.1 平成 25.1 平成 25.8 平成 25.10 平成26年５月 平成26年５月 平成26年６月 平成26年８月 平成 26 年 10 月	 ｱｾﾝﾌﾞﾘｰ教材（秋学期用 15 テーマ）を作成 ｅ－ｍａラジオ（ものづくり実習用教材） NAND-RS ﾌﾘｯﾌﾟﾌﾛｯﾌﾟ（論理回路説明用教材） NOR-RS ﾌﾘｯﾌﾟﾌﾛｯﾌﾟ（論理回路説明用教材） Ｄフリップフロップ（論理回路説明用教材） ４ビットラッチ（論理回路説明用教材） ８ビットシフトレジスタ（論理回路説明用教材） ラジオ実験回路（電子工作実習用教材） 16 進数データバスモニター（マイコン制御教材） 改良電子サイコロ（電子工作実習用教材） 改良電子ルーレット（電子工作実習用教材） ＲＯＭ式マイコン回路（マイコン制御教材） リレー式電子ﾌﾗｯｼｬｰ（電子工作実習用教材） 樽形スピーカーの設計・製作（ものづくり実習用教材） データ通信可視化装置の設計（「情報と職業」教材） 摺動推進移動体『ちょこまか３号』の設計・製作（夏休み工作教室用教材） Z80 スィッチ式トレーニングマイコンの改良（プログラミング関連教材） 静電気ベルの製作（ものづくり実習用教材）
	平成28年６月	電子工作『Ｌ同調ラジオ』の設計・製作（夏休み工作教室用教材）
	平成28年８月	スマートホンを利用した２軸サーボモーター駆動実験回路の製作（「ロボットシステム」教材）
	平成28年９月	図面上における傾斜角度を求めるための三角関数教材の制作（「ＣＡＤ」教材）
	平成 28 年 10 月	ＰＩＣマイコンを用いた３桁アップダウンカウンタの製作（電子工作実習用教材）
	平成 28 年 11 月	オムニホイールを用いた移動体模型の製作（「ロボットシステム」教材）
	平成 29 年 6	電子工作『アイスさいころ』の設計・製作（夏休

	月	み工作教室用教材）
	平成 29 年 10 月	電子体温計原理回路の設計・製作（「医療情報演習Ⅱ」教材）
	平成 29 年 10 月	ＡＥＤ動作原理装置の設計・製作（「医療情報演習Ⅱ」教材）
	平成 29 年 11 月	ヒステリシスオシレータ実験回路の製作（紀要執筆）
	平成 29 年 11 月	非常用自家発電装置の原理模型の製作（「医療情報演習Ⅱ」教材）
３ 教育上の能力に関する大学等の評価		
学生による授業アンケート結果	平成 20 年 11 月	ソフトウェアリテラシー基礎・応用、ロボットシステム工学、ロボット製作、システム制御、生産システム、情報と職業のいずれにおいても「この授業が役に立った」という回答が多かった。
学生による授業アンケート結果	平成 21 年 10 月	ソフトウェアリテラシー基礎・応用、システム制御、生産システム、情報と職業のいずれにおいても「この授業が役に立った」という回答が多かった。
学生による授業アンケート結果	平成 22 年 10 月	ソフトウェアリテラシー基礎・応用、ロボットシステム、情報と職業のいずれにおいても「この授業が役に立った」という回答が多かった。
学生による授業アンケート結果	平成 23 年 10 月	ソフトウェアリテラシーＡ・Ｂ、人間社会とコンピュータ、ロボットシステム、生産システム、情報と職業のいずれにおいても「この授業が役に立った」という回答が多かった。
学生による授業アンケート結果	平成 24 年 10 月	ソフトウェアリテラシー基礎・応用、ロボットシステム、生産システム、情報と職業のいずれにおいても「達成感が得られた」という回答が多かった。
学生による授業アンケート結果	平成 25 年 10 月	ソフトウェアリテラシー基礎・応用、ロボットシステム、ロボティクス、生産システム、情報と職業、ものづくり経営学のいずれにおいても「この授業を受けてよかった」という回答が多かった。
学生による授業アンケート結果	平成 26 年 10 月	ロボティクス、生産システム、情報通信ネットワークのいずれにおいても「この授業を受けてよかった」という回答が多かった。
学生による授業アンケート結果	平成28年２	情報処理演習１・２、ロボットシステム、生産シ

	月	ステム、情報と職業、ものづくり経営学のいずれにおいても「この授業に満足している」という回答が多かった。
学生による授業アンケート結果	平成 29 年 9 月	わかる数学、基礎統計学、医療情報演習Ⅱ、生産システムのいずれにおいても「この授業に満足している」という回答が多かった。
４ 実務の経験を有する者についての特記事項		
公開講座オープン・カレッジ	平成21年８月	本学にて地域の小学生対象に『キッズものづくりランド』を開催する。
公開講座オープン・カレッジ	平成22年８月	本学にて地域対象に『ＣＡＤ入門』の講習を行なう。
夏休み工作教室サイエンストライ 2012	平成24年８月	本学にて地域の小学生対象に『イヤホンラジオ』の製作を行なう。
公開講座オープン・カレッジ	平成24年８月	本学にて小中高校の教員対象に『ＣＡＤを使った授業教材の制作』を開催する。
夏休み工作教室サイエンストライ 2013	平成25年８月	本学にて地域の小学生対象に、振動推進移動体『動くへびブラシ』の製作を行なう。
公開講座オープン・カレッジ	平成25年９月	本学にて小中高校の教員対象に『ＣＡＤを使った授業教材の制作』を開催する。
夏休み工作教室サイエンストライ 2014	平成26年８月	本学にて地域の小学生対象に、摺動推進移動体『ちょこまか３号』の製作を行なう。
公開講座オープン・カレッジ	平成26年９月	本学にて小中高校の教員対象に『ＣＡＤを使った授業教材の制作』を開催する。
夏休み工作教室サイエンストライ 2015	平成27年８月	本学にて地域の小学生対象に、電子ゲーム『タッチ&ブー』の製作を行なう。
公開講座オープン・カレッジ	平成27年９月	本学にて小中高校の教員対象に『ＣＡＤを使った授業教材の制作』を開催する。
夏休み工作教室サイエンストライ 2015	平成28年８月	本学にて地域の小学生対象に、電子工作『Ｌ同調ラジオ』の製作を行なう。
はびきの市民大学	平成29年７月	本学にて受講者を対象に『現地講義：ものづくり―その楽しさと感動体験―』のテーマで授業を行なう。
夏休み工作教室サイエンストライ 2017	平成 29 年 8 月	本学にて地域の小学生対象に、電子工作『アイスさいころ』の製作を行なう。
５ その他		
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要

1 資格，免許	昭和 42 年 12 月	電話級アマチュア無線技士取得
	昭和 42 年 12 月	電信級アマチュア無線技士取得
	昭 43.3	電気工事士取得
	昭和44年４月	電話級無線通信士取得
	昭和44年８月	第２級アマチュア無線技士取得
	昭和45年８月	特殊無線技士（レーダー）取得
		特殊無線技士（甲種無線電話）取得
	昭和51年４月	中学校教諭１級普通免許（技術）取得
		高等学校教諭２級普通免許（工業）取得
	昭和54年８月	中学校教諭１級普通免許（数学）取得
		高等学校教諭２級普通免許（数学）取得
	昭 58.2	第２種情報処理技術者取得
	昭 61.2	マイクロコンピュータ応用システム開発技術者取得
	平 10. 1	第３種電気主任技術者取得
	平 12.10	職業訓練指導員免許（電気）取得
	平 13.8	乙種第４類危険物取扱者免状取得
	平 14.8	乙種第１類危険物取扱者免状取得
	平 14.12	乙種第６類危険物取扱者免状取得
	平 15.2	安全衛生特別教育（産業用ロボット）受講
	平 15.4	乙種第５類危険物取扱者免状取得
	平 15.8	乙種第２類危険物取扱者免状取得
	平 15.11	乙種第３類危険物取扱者免状取得
2 特許等	平 8.10	Ｉ線式絶縁電熱線応用制御装置及び制御方法（特開平８－２５５６７１）

3 実務の経験を有する者についての特記事項	平1.12	異径管粉体塗装ロボット制御システム。地下埋設の水道本管でるが、防錆のため管面内壁に粉体塗料を塗布する。鉄管を炉にて高温に焼き、管内に人が入って塗料を噴射・溶融して塗膜を形成。分岐、曲直等さまざまな形状や口径の管がる。この作業を自動化。パソコン上で塗装ロボットの軌跡を作成、運動データをモーションコントローラに転送し、ロボット各軸のサーボモータや噴射バルブを駆動。運動データの転送にはマイクロプロセッサを用いた専用インターフェースを設計した。このシステムにより危険を冒すことなく、かつ均一な塗膜を得ることができ安全性、信頼性とも飛躍的に向上させることができた。
	平7.7	パソコンによる電線自動検査システム。出荷検査に際し、製品電線の電気抵抗、絶縁抵抗、耐電圧をそれぞれ計測する。従来これを人手でおこなっており、滞留が発生することが多かったため自動化した。電気抵抗算出のための気温データを得る専用デジタル温度計を設計する。絶縁抵抗計、耐電圧試験機は既成のものを使用した。これら機器をパソコンで制御し、諸データを取り込んで演算、良否自動判定させるシステムでる。これにより慢性的な滞留が解消し、迅速な出荷が可能となった。
	平16.4	本学ロボット研究所の設備充実。ロボットシステム工学などの授業でおこなう実験実習や、セミナーでのロボット研究に供する工作機械、実習用ロボット、測定器、各種工具、什器類、実験実習材料等の充実を図った。
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				

（学術論文） 1.ＴＲＩＡＣ波形についてのフーリエ解析	単著	平22年3月	太成学院大学紀要 第12巻(通号29号) pp.151-160	半導体電力素子でるＴＲＩＡＣの出力波形に含まれる高調波成分を解析する。
2.Die Zeta-Funktion in dem elektrischen Stro-mkreis	単著	平23年3月	太成学院大学紀要 第13巻(通号30号) pp.185-193	交流を扱うる種の電気回路計算にみる「バーゼル問題」の別解法について。
3.スィッチ式8ビットマイクロコンピュータの再現設計	単著	平25年3月	太成学院大学紀要 第15巻(通号32号) pp.245-255	機械語プログラミングを通じてＣ言語におけるポインタを理解するためのマイクロコンピュータを設計・製作。
4 電子実習用モーター制御 回路の設計	単著	平成 27 年3月	太成学院大学紀要 第17巻(通号34号) pp.231-240	製造現場で使われている機械にはモーターが多用されており、その起動・停止や回転数、回転方向が電子的に制御されている。学生諸君が実際に工場に入り、機械の動作を眺めることはできない。このためゼミでモーター制御をテーマとするにあたり、小規模な機械模型と、それに組み込まれたモーターを制御するための回路を設計・製作した。回路にはマイクロコンピュータを搭載。モーターの動作制御をＣ言語あるいはアセンブラ言語でプログラミングする。これによりゼミ生は、体験を通してコンピュータによるモーター制御を学ぶことができる。回路設計からプログラミングテクニックに至るまでの過程をまとめた。

5 電子実習用液晶表示装置 制御回路の設計	単著	平成 28 年３月	太成学院大学紀要 第 18 巻(通号 35 号) pp. 105-110	家電用品をはじめ事務機器、各種計測器などには液晶表示装置（以下、ＬＣＤ）が多用されている。これは、部品として比較的容易かつ安価に入手できるところから、これをゼミにおける実習テーマとした。ＬＣＤ画面に文字を表示する回路を実習用に設計製作。回路にはマイクロコンピュータを搭載。文字表示をＣ言語あるいはアセンブラ言語でプログラミングする。これによりゼミ生は、体験を通してコンピュータによるＬＣＤの文字表示制御を学ぶことができる。回路設計からプログラミングテクニックに至るまでの過程をまとめた。
6 電子実習用ＬＥＤ制御回 路の設計	単著	平成 28 年３月	太成学院大学紀要 第 19 巻(通号 36 号) pp. 141-150	家電用品をはじめ事務機器、サインボードなどには発光ダイオード（以下、ＬＥＤ）が多用されている。これは、部品として比較的容易かつ安価に入手できるところから、これをゼミにおける実習テーマとした。ＬＥＤを任意のパターンで点灯表示あるいは点滅表示させる回路を実習用に設計製作。回路にはマイクロコンピュータを搭載。制御プログラムをＣ言語でプログラミングする。これによりゼミ生は、体験を通してコンピュータによるＬＥＤ表示制御を学ぶことができる。回路設計からプログラミングテクニックに至るまでの過程をまとめた。

7 草創期のビデオゲームの 再現設計	単著	平成 29 年 3 月	太成学院大学紀要 第 20 巻(通号 37 号) pp. 243-247	1975 年、テレビテニスゲーム（以下、テレビテニスと略す）が製品として世に登場した。当時、筆者はこれを自作。専用ＬＳＩにてボール、ラケット、コート、スコアがテレビ画面に表示され、ボールを打ち合うことができる。これらの映像信号は、ＬＳＩ内部の論理回路により作り出される。初学者にとって論理回路は身近な例がなくイメージしにくい、という特徴がある。これを契機として、論理回路が実際に使われていることを説明するための教材として、このテニスゲームを利用することを思いつく。かかるＬＳＩは、現在すでに製造されていないのであるが、偶然これを入手することができ、当時の体験を元にテレビテニスを再現設計・製作した。
（その他）				

（経営）金　栄俊

（経営）吉川　博史

教　育　研　究　業　績　書

2018 年 3 月 12 日

氏名　吉 川 博 史　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド

教育工学	情報処理、情報教育	
教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例		
汎用計算機における課題提出用システムの開発（教授用、学生用）	平成 2 年 4 月 ～ 平成 11 年 3 月	ＣＯＢＯＬ言語学習において学習者の提出物を汎用計算機上に提出できるようにして、後日担当者が回収するシステムを開発する。特徴としては、学習者からのメールの回収、学習者の個別指導が容易になった。
情報演習科目の演習に関する教授方法の改善	平成 11 年 4 月 ～ 平成 27 年 3 月	以前より情報演習科目には、一斉授業でなく毎回の演習にステップごとの細かいサブテキストを配布して、学習者個々の進捗で演習ができるように心がけてきた。また、毎回の演習には課題提出をおこない評価の対象にしてきた。平成 17 年度よりシチューデントシスタント（ＳＡ）の配置が 1 年生の演習科目で実施され、よりいっそう学習者の理解度が増すようになった。
「情報の倫理」教授方法	平成 16 年 4 月 ～ 平成 27 年 3 月	毎回の講義の中、できる限り市販のＤＶＤや報道番組・ニュースを使い実世界における出来事を利用した講義形態をとっている。また、学習者に毎回の講義内容を授業内レポートと感想を提出させ、毎回の評価対象とした。このことにより学習者の文書力や問題解決能力を少しではるが身につけることができた。教授者も学習者の理解力を把握できるようになった。
2　作成した教科書，教材		
［教科書］		
ＢＡＳＩＣによるプログラミング工学(改訂版)	平成 14 年 4 月	ＢＡＳＩＣの入門書で特に問題解決のルゴリズムを重点に説明している教科書
ＣＯＢＯＬノート２（新改訂版）	平成 15 年 4 月	事務処理のプログラム設計・定石、ＣＯＢＯＬの文法　等の演習用教科書（出版社なし）
［教材］		
プログラミング設計論演習	平成 16 年 10 月	Ｂｃｃ5.51 のグラフィツク、フイル関連の教材開発

データベース論Ⅱ	平成17年 4月	レンタルＣＤショップの貸出管理システムの構築、ＳＱＬ演習、統計関係等の教材開発
データベース論Ⅰ プレゼンテーション技法Ⅰ 情報処理演習１・２ プログラミング基礎・基礎演習 情報の倫理	平成18年 4月	各科目の教材の表示方法として、パワーポイントを使用して学習者の理解力を高めるように教材の開発を行なった。
情報処理演習１、情報処理演習２ プログラミングⅡ、プログラミングⅡ演習 データベース論Ⅱ システム設計論Ⅰ、システム設計論Ⅰ演習(新規)	平成22年 8月 ～ 平成24年 3月	演習室の環境条件（Windows7、Office2010）に伴う新教材の作成およびﾌﾟﾘｹｰｼｮﾝｿﾌﾄのテスト、新規科目に伴う教材の開発と作成（各科目15週分の新規作成と評価テスト）を行なった。
システム設計論Ⅱ 、システム設計論Ⅱ演習(新規)	平成24年 8月	新規科目に伴う教材の開発と作成(各科目15週分の新規作成と評価テスト）を行なった。
プログラミングⅡ、データベース論Ⅰ	平成 27 年 3月	各科目の使用テキスト販売中止のために、新テキストに合わせた教材を作成する。
情報の倫理	平成28年8月	教材の編成と再編成をする。
データベース論Ⅱ	平成28年12月	教材の編成と再編成中。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
５　その他 大学設置審査会教員資格審査判定	平成 4 年 8月 平成 8年 8月 平成 9年 8月	摂南大学 経営情報学部　　（非常勤講師） プログラミング言語Ⅱ、情報資源管理論の科目担当で可と判定 大阪経済大学 経営情報学部 （非常勤講師） 情報処理基礎演習、情報処理演習Ⅰの科目担当で可と判定 南大阪大学 経営学部　（助教授） 情報処理概論、データベース論Ⅰ・Ⅱ、プログラム設計論・設計論演習、

		セミナーⅢ・Ⅳ の科目担当で可と判定
	平成 16 年 2 月	太成学院大学 経営情報学部　（教授） 教員免許状の課程申請　高等学校 1 種免許状（情報） データベース論Ⅰ、データベース論Ⅱ、 情報の倫理　の科目担当で可と判定
	平成 24 年 2 月	大阪経済大学 経営情報学部を情報社会学部への改組・転換(平成 24 年 4 月)による科目として データベース論、データベース実習 が届出にて可と判定（非常勤講）
学会活動 情報処理学会	昭和 46 年 4 月	会員（平成 25 年　終身会員）　現在に至る
教育システム情報学会（旧ＣＡＩ学会）	昭和 57 年 12 月	会員（平成 7 年 4 月に教育システム情報学会に名称変更になる）現在に至る
教育システム情報学会	平成 27 年 5 月	関西支部より「貢献賞」を受賞する

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 高等学校教諭２級普通免許（工業） 統計官、統計主事　資格習得	昭和 44 年 3 月 昭和 63 年 9 月	免許番号：昭四四高二普　第 107 号 免許番号：第 8840458 号
2　特許等 な　し		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 情報産業勤務時	昭和 44 年 4 月 ～ 昭和 46 年 3 月	（株）日本ビジネスコンピュータ、（株）日本計算センターでは、オペレータ、プログラマー、システムエンジニとして受託計算業務（給与計算、在庫管理、財務管理、塾の成績管理等）、商業ベースでの東京と大阪のオンラインシステムの開発に従事する。

	昭和 46 年 6 月 ～ 昭和 50 年 5 月	日本電子計算（株）では、オペレータ、プログラマー、システムエンジニとして受託計算業務（給与計算、売上管理、在庫管理、財務管理、市町村の住民税業務　等）、石油販売管理システムの開発、ジョブコントロールプログラムの開発、大型汎用機の業務移行およびＣＯＢＯＬ言語のベンチマークテスト、コンピュータのスケジュール管理、各種受託業務のシステムメンテナンスとシステムレベルップの業務に従事する。
学校法人　大阪電気通信大学勤務時	昭和 50 年 6 月 ～ 昭和54年 10月	高等学校勤務時は、情報処理科目の教諭と共に計算機室管理、入試システム、成績管理システム、保健室管理システムの開発を担当する。
	昭和 54 年 12 月 ～ 昭和 57 年 10 月	大学・法人本部勤務時は、事務電算化推進室にて、大学事務業務の業務分析からシステム構築（入試、教務、学生、就職　等）を担当し、初期の大学事務業務のデータベース化に従事する。
	昭和 57 年 11 月 ～ 平成 2 年 3 月	大学・技術指導員勤務時は、電気実験室で学生の電気実験の準備および技術指導に従事する。 短期大学部非常勤講師および講師勤務時は、電気実験担当で勤務する。
学校法人　天満学園勤務	平成 2 年 4 月 ～	大阪短期大学、南大阪大学、太成学院大学として勤務する(継続中)。
教職課程の初期マニュル作成	平成 16 年 4 月	教務部長就任中、教職課程に関わる初期の作業に携わり、初期マニュル作成をする。
インターンシップ（高校）の初期マニュル作成	平成 17 年 4 月	教務部長就任中、高大連携のためのインターンシップ（高校）の初期マニュル作成と実施をする。
シチューデントシスタント（ＳＡ）の配置	平成 17 年 4 月	教務部長就任中、1 年生の情報処理演習の科

		目に2年生以上のＳＡを配置して、学習者に対して教育のサポートをする。
4　その他		
教育システム情報学会　関西支部	平成17年 7月 ～ 平成21年 3月	評議員　委嘱　をする。
教育システム情報学会	平成20年 7月 ～ 平成20年 8月	第33回全国大会　事務局長代理をする。
教育システム情報学会　関西支部	平成21年 4月 ～ 平成24年 3月	監事　委嘱　をする。
太成学院大学　高大連携情報教育主事	平成22年 4月 ～ 平成23年 3月	インターンシップ（高校）の担当として活動をする。
太成学院大学　資格就職支援主担	平成23年 4月 ～ 平成24年 3月	主に就職支援とインターンシップ（高校）の担当として活動をする。
学校法人　大阪電気通信大学	平成24年 3月 ～	法人評議員　就任 をする。
教育システム情報学会　関西支部	平成24年 4月 ～	評議員　委嘱　をする。
太成学院大学　就職支援主担	平成24年 4月 ～ 平成27年 3月	主に就職支援の担当として活動をする。
太学院大学　経営学部　教務主事	平成26年11月 ～平成27年3月	経営学部　教務主事　委嘱

教育システム情報学会関西支部	平成 27 年 3 月	学生発表大会　ポスターセション　審査委員
教育システム情報学会関西支部	平成 28 年 2 月	学生発表大会　ポスターセション　審査委員

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				平成 16 年以前の著書件数７件
（学術論文） 1.インターネットにおける情報倫理に関する意識の変化（２）	共　著	平成 20 年 3 月	大阪成蹊大学研究紀要 第６巻　第１号 （ｐ７７～ｐ９０）	学生に対するインターネットと情報倫理のンケートを４月と９月に実施した。そのデータを比較し、学生の意識の変化を調査した結果の報告。 共同執筆者：工藤英男、福永栄一、吉川博史 担当部分：解析と考察の部分
2.インターネットにおける情報倫理に関する調査分析	共　著	平成 23 年 3 月	大阪成蹊大学研究紀要 第８巻　第１号 （ｐ２１～ｐ３１）	大学での情報教育を進めるに当たり学生の意識調査として、インターネットの利用と情報にかかわる倫理の意識に関するンケートを６年間実施してきた。６年間の４回のデータを比較して、意識の変化を分析した総括の調査報告。 共同執筆者：工藤英男、福永栄一、吉川博史 担当部分：解析と考察の部分
３．Ｗｅｂを用いたエゴグラムシステムの構築	共著	平成 23 年 3 月	太成学院大学紀要 第１６巻　第３３号	習者が Web システムの構築を学習する課題の一つに「エゴグラム」を用いた Web プログラムの学習システムを構築した。この「エゴグラム」は、学習者が「ありのままの自分を知る」手がかりとして、

				「交流分析 」の一技法である。 共同執筆者：冨島磨由美、工藤英男、 小高　恵、吉川博史 担当部分：解析と考察の部分
４．グローバル化と上流工程に注目した新たな情報処理教育の研究	共著	平成 29 年 3 月	太成学院大学紀要　第２０巻　第３７号	ICT 産業のグローバル化を進めていくためには、特に大学などの高等教育機関におけるソフトウエアの開発教育の改善が必要と考え、今日行くん内用および実践についての研究内容である。 共同執筆者：福田真規夫、吉川博史、　工藤英男 記載以外の　著書数 7 冊 論文数 24 件
（その他） 1. ネットにおける情報倫理に関する意識調査（８）	共　著	平成 19 年 9 月	教育システム情報学会 第32回全国大会 (p198-p199)	大学での情報処理教育を進めるにたり学生の意識調査として、インターネットと情報倫理に関するンケートを複数の大学で実施している。今回は、3年前のデータとの比較し、学生の意識がどのように変化しているかを分析した概要について報告する。 共同執筆者：工藤英男、吉川博史 担当部分：分析と評価の部分
2. ネットにおける情報倫理に関する意識調査（９）	共　著	平成 20 年 9 月	教育システム情報学会 第 33 回全国大会 (p474-p475)	大学で情報教育を進めるに当たり学生の意識調査として、インターネットと情報倫理に関するンケートを複数の大学で実施してきた報告。 共同執筆者：工藤英男、福永栄一、吉川博史 担当部分：分析と評価の部分
3. ネットにおける情報倫理に関する意	共　著	平成 20 年 12 月	平成 16 年度情報処理教育研究集会講演論文集	大学で情報教育を進めるに当たり学生の意識調査として、インタ

識調査（１０）			(p49-p52)	ーネットと情報倫理に関するンケートを複数の大学で実施してきた報告。 共同執筆者：工藤英男、福永栄一、吉川博史 担当部分：分析と評価の部分
4. ネットにおける情報倫理に関する意識調査（１１）	共　著	平成 21 年 8 月	教育システム情報学会 第 34 回全国大会 (p424-p425)	「情報倫理」の授業により、学生に意識がどのように変化するかを分析した報告。 共同執筆者：工藤英男、福永栄一、吉川博史 担当部分：分析と評価の部分
5. ネットにおける情報倫理に関する意識調査（１３）	共　著	平成 22 年 8 月	教育システム情報学会 第 35 回全国大会 (p187—p188)	「情報倫理」教育で学生の意識がどのように変化をするかを分析するために、記名式で授業の１回目と１５回目に同じンケートを実施した。その分析結果の報告。 共同執筆者：福永栄一、工藤英男、吉川博史 担当部分：分析と評価の部分
6. 大学におけるタブレット端末を用いた演習について	共　著	平成 24 年 8 月	教育システム情報学会 第 375 回全国大会 (p50-p51)	大学の情報処理教育で利用するパソコンの環境は、学内ＬＡＮに接続されたWindowsパソコンが一般的でる。スマートフォン、タブレット端末がインターネットを利用する主要な端末になってくると、大学における情報処理教育はタブレット端末を利用した演習をも考えていかなくてはいけない。その演習の一考察についての報告。 共同執筆者：桝井　猛、梶木克則、那須靖弘吉川博史 担当部分：分析と評価の部分
7. モバイル端末を用いた演習について	共　著	平成 25 年 9 月	教育システム情報学会 第 38 回全国大会	大学におけるパソコンを利用した演習も時代とともに変化し、携

			(p423-p42451)	帯、スマフォ、タブレット端末などのモバイル端末を用いた演習も利用し始めている。今回は、タブレット端末を用いた演習についての調査をしたアンケートについての報告。 共同執筆者：桝井　猛、梶木克則、 那須靖弘、吉川博史 担当部分：分析と評価の部分
8. エゴグラムのためのＷｅｂシステムの構築と試用	共　著	平成 26 年 3 月	情報コミュニケーション学会　第１１回全国大会 （投稿中）	学習者がWebシステムの構築を学習する課題の一つとして「エゴグラム」を用いたWebプログラムの学習システムを構築した。この「エゴグラム」は、学習者が「ありのままの自分を知る」手がかりとして、「交流分析（Transactional Analysis）」の一技法である。そこで、今回構築したシステムの概要とそのシステムを試用した結果について報告。 共同執筆者：冨島磨由美、小高　恵、 吉川博史、工藤英男、 担当部分：システムの構築と考察の部分 記載以外の口頭発表　等 （その他）の件数91件

（経営）関戸　恒昭

教　育　研　究　業　績　書

平成３０年３月３１日

氏名　関戸　恒昭　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
東南ジ日系企業の経営	アセアン、日系企業、インドネシ、ベトナム

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例	26 年春秋 27 年春秋	英語学力の低位学生に対する効果る教育実践。 ビジネス場面を映像で見ながら、カラオケ修得方法による英語理解力向上。「わかる英語（ビジネス編・日本文化編」 インドネシア語（入門&応用）インドネシア事情を織り交ぜながら、映像をも使って、実践的な第二外国語学習を提供（経営・人間・看護）。
2　作成した教科書，教材		15 回授業全てでレジュメを毎回配布し、それに学生が夫々心の留まったことをメモする。16 回試験の前にそれを見れば、内容が蘇り単位修得に結びつくことを狙っている。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項	昭 47 年～平 16 年（銀行勤務）	銀行の国際部門及び海外駐在経験（4 カ国 13 年）それに加えて銀行・金融実務 〈英語、西語及びインドネシ語の実務経験有〉
5　その他	平成 22 年 4 月～平成 26 年 3 月	太成学院大学経営学部長（2 期 4 年）

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　要
1　資格，免許	昭 46 年 11 月	文部省認定実用英語検定試験１級合格 「貿易政策」、「現代企業論」などの講義で有効
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 ①(財)関西産業活性化センター	平 3 年 9 月 ～5 年 10 月	「関西のプロジェクト動向調査」の企画立案 「関西活性化白書」(毎年発行・販売中)の企画立案

調査部長		「関西地域への産業誘致方策に関する調査」企画立案 「企業の東京一極集中是正促進調査」企画立案 「関西地域振興計画策定調査」企画立案 「大阪湾ベイエリの機能整備調査」企画立案など 「マクロ経済学」、「ミクロ経済学」、「地域産業論」の講義で有効
②㈱大和銀総合研究所ジオセニ研究部次長	平5年10月 ～6年1月	アジア地域の政治経済動向の研究と分析 「貿易政策」、「キャリア開発入門」などの講義で有効
③神戸学院大学ジ太平洋センター研究員 （５年間）	平14年4月 ～19年3月	“Asian values against European & American values”を主テーマに国際的なネットワークで調査・研究・シンポジウム・研究発表・論文提出などに携わった。（文科省のオープンリサーチセンター事業）＊公用語は英語と日本語
④講演会講師及び大学講師 1)「金融論 JA」	平 15 年 12 月～16 年 3 月	立命館アジア太平洋大学で講義（非常勤講師）
2)「国際ビジネス事情」	平17年4月 ～21年3月	神戸学院大学経済学部で講義（客員教授）
3）経済産業省の「地域技術開発事業に係る事前評価委員」委嘱	平18年度～現在に至る	全国各地から経済産業省に支援申請がる案件を専門家の立場から評価を行うもの。
4)「日本経済の現状と課題」	平19年6月 平21年6月	放送大学・大阪学習センター・面接授業（非常勤講師） 放送大学・大阪学習センター・面接授業（非常勤講師）
４　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １．「インドネシアの土地基本法並びに不動産担保徴求方法とその留意点」	共著	平10年10月	大和プルダ二ア銀行ジャカルタ	インドネシアにおける土地を銀行担保にする場合の法令と実務。

2．「ベトナム投資ガイド」	共著	平成 6 年 1 月	大和銀総合研究所	銀行取引先向けベトナム投資案内（投資の規則など解説）
（学術論文）				
1．「インドネシの日本企業経営」～ジャカルタ証券市場からのルピ資金調達に触れて～	単著	平 16 年 5 月	証券経済学会年報（第３９号）	旨く運営されている日系合弁企業にも種々経営課題はり、その中でも現地通貨ルピの度重なる切下げの歴史は、合弁企業の損失の歴史でもった。その解決策としてジャカルタ証券市場からのルピ調達を考察した。（3 ページ）
2．「日系ベトナム企業経営の一考察」	単著	平 18 年 12 月	近畿大学経済学会生駒経済論叢（第 4 巻第 2 号）	ベトナムへ進出している外国企業でストライキがかなり発生しているが、日系企業では、皆無に近い。何故、日系企業でストライキが発生しないかを考察した。
3．「大証・外国部」～株式公開を目指さない企業～	単著	平 19 年 3 月	太成学院大学紀要（第 9 巻通号 26 号）	関西経済復権を目指す大阪証券取引所が諸方策を打ち出した中で、「外国部」創設に注目した。同部に上場を検討した企業を実地に訪問調査し、何故、それら企業が公開に至らなかったかを分析した。
4．「大阪証券取引所・外国部」	単著	平 19 年 7 月	証券経済学会年報（第４２号）	新興市場へラクレス創設に成功した大阪証券取引所が、関西経済の活性化を狙って、へラクレス市場創設に先駆けて、「外国部」を設置したが、期待外れに終わった。その原因を調査した。
5．「インドネシアの日本企業経営」～アジア的価値の共有～	単著	平 15 年 10 月	神戸学院大学アジア太平洋研究センター 平成 14 年度研究活動報告書（文部科学省ｵｰﾌﾟﾝﾘｻｰﾁ事業）	現地日系企業 10 社を訪問し、実戦される日本式経営を分析・評価した。
6．「円高がアジアの産業構造を変える」	単著	平成 5 年 10 月	関西産業活性化センター 産業活性化ニュースＮｏ72	プラザ合意後の円高が誘発した日本企業の東南アジア進出と日本国内の空洞化を解説。

（経営）嶋崎　裕志

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年3月　20　日

氏名　　嶋崎裕志　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
心理学	感覚心理学、知覚心理学、実験心理学、心理検査法、健康心理学、人格心理学、生涯発達、カウンセリング産業心理学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
・　新入生ゼミナール	平成15年4月～平成19年3月	・新入生に対して、大学における授業への取り組みを理解してもらうだけでなく、授業形式の中でどのように自分の考えや調査・研究を発表するかを修得してもらうと同時に他の発表を聞いていかに討議するかを修得してもらう。各受講生の発表に入る前に全員にまずレポートを提出してもらい、それを素材にして発表を行ってもらう。各自２回の発表終了後、それぞれの要約をレポートとして提出するが、その時には新たな小論文を与え、その理解と各自の考えをレポート課題として追加する。
・行動科学への招待「心理学編」（講義）	平成15年4月　～平成19年3月	・心理学は、カウンセリングがメインと考える１年生が多いの　　で、その誤解を解く。そのため、心理学の基本は、生理学と哲学であることを理解してもらう。しかし、カウンセリングの実践と理論は、やはり心理学の基礎であるので、その本来の原理的な考えを理解してもらう。講義を通してだけではなく、自習により心理学の理解を受講生は深めて欲しいので、学期の中間においてレポート課題を与え、レポートを提出してもらい、その返却と同時に解説を行う。
・行動科学への招待・ゼミ「心理学編」	平成15年4月　～平成19年3月	・・ゼミで取り上げる教材は、「心理学の認識　/ミラーの心理学入門」(原典 : Psychology　The science of Mental Life, by G. A.　Miller）　である。心理学は、the science of mental life（精神活動の科学）であるので、実際に精神活動がどのような仕組みで機能しているかを理解してもらう。全体が２２章から成るので、初回の受講アンケートの結果を考慮して、読み進む章と受講生の分担を決めて、逐次発表をしてい

		く。討議が大切であるので、質問者（指定討論者）を発表前にきめておく。
・心理学概論	平成15年4月～平成19年3月	・ドイツの Wundt により創始された現代心理学は、生理学を父、哲学を母として生まれた、という背景が心理学を履修したい受講生に理解されていない場合が多いので、その理解を深める。他方、現代心理学は、神経科学（ニューロサイエンス）の重要な一翼を担っているので、認知心理学等を含めた実験心理学の基礎を理解してもらう。　　講義を通してだけではなく、受講生は自習により心理学の理解を深めて欲しいので、期末試験に入る１ヶ月以上前に試験課題を呈示し、その中から試験問題の半数は出題するようにしている。
・　心理学史	平成15年4月～平成19年3月	・現代心理学における主要な理論を「縦糸」、その心理学における諸研究、諸領域を「横糸」として、講義を進める。心理学の中心となる５つの理論（意識心理学、精神分析学、行動主義心理学、ゲシュタルト心理学、認知心理学）を中心に、広範囲に分かれている心理学の諸領域を概説する。講義だけでなくvideo を活用し、視聴覚教材を生かしながら授業を進める。講義を通してだけではなく、受講生は自習により心理学の理解を深めて欲しいので、期末試験に入る１ヶ月以上前に試験課題を呈示し、その中から試験問題の半数は出題するようにしている。
・行動科学演習 I	平成15年4月～平成19年3月	・心理学において古典と考えられてきている原書（英語）を取り上げ、その研究において展開されている独創的な諸点が心理学的な知覚実験などの研究の発想にどのように生かされているかを確認するとともに、現在のわれわれの心理学の諸研究にどのように関わってきているかを理解してもらう。授業外における学習促進の試みとして、レポート課題に、授業では取り上げない英語文献の英訳を課し、さらに簡単な観察実験を課して（前期は研究室などの一隅で可能な実験、後期は実体顕微鏡を使用するため、理学部の協力のもとで、その実習室での観察）、それをまとめることをおこなってもらう。また、後期には学外の企業研究所に出掛け（セイコーエプソン）、そこでの基礎研究の講演を

		聴き、企業展示も見学させてもらう。
・行動科学特殊講義Ⅰ	平成15年4月～平成19年3月	・錯視に関する好著“SEEING IS DECEIVING: The Psychology of Visual Illusions”（目は騙されている： 錯視の心理学）(by Stanley Coren and Joan Girgus）を教材にして講義する。原著には、図表が多いので、それらを活用する。我々は身の回りの環境を客観的に把握していると信じているが、厳密な実験的な事態において、我々の知覚は実測される客観的な条件から逸脱する場合が少なくないことが示されていることを理解してもらう。講義を通してだけではなく、受講生が自習により錯視の理解を深めて欲しいので、学期の３分に１の段階においてレポート課題を与え、レポートを提出してもらい、その返却と同時に解説を行う。
・心理検査法	平成15年4月～平成19年3月	・受講生が卒業論文その他の在学中の諸課題に取り組む場合、そして将来心理学に関連して臨床現場にて活躍する場合を考え、多様な心理検査の基礎知識を修得し、代表的な検査の実施方法を身につけてもらう。具体的には、交流分析、知能検査、クレペリン精神作業検査、ロールシャッハ、ＢＧＴ（ベンダー・ゲシュタルト・テスト）などである。検査の意義、検査の効用と限界など、心理検査全般に共通する諸点を取り上げ、現在我が国において使用されているいくつかの代表的心理検査を各受講生に実習してもらう。また、講義・実習を通してだけではなく、受講生が自習により心理検査の理解を深めて欲しいので、学期中に２回レポート課題を与えて提出してもらい、その返却と同時に解説を行う。
・行動特殊実験	平成15年4月～平成19年3月	・「行動基礎実験」を履修し終えた学生（３年生）が、その履修を踏まえて、研究論文をまとめることを修得してもらう。心理学専攻生の卒業論文執筆のための前段階として必要である。各受講生は、まず始めに自分の研究テーマを決定するため、それに関連する文献講読と発表をおこない（各自２回）、次に仮説検証的に各自の実験・調査の計画を立て計画書を提出し、それに基づき実験・調査を実施し（先行研究の追試でもよい）、結果を小論文としてまとめ、最後にその発表をお

		こなう。各受講生は、授業時間以外にも各ステップにおいて教員の指導を受けながら、履修を進める。
・卒業論文	平成15年4月～平成19年3月	・「行動特殊実験」を履修し終えた学生（４年生）が、その履修を踏まえて、研究論文をまとめる。「行動特殊実験」の小論文とは異なり、卒業論文では、受講生は各自独自の研究テーマ（実験心理学という大枠の中で）を設定し、３年次の「行動特殊実験」において修得した実験手法を駆使してデータを集め、仮説検証的に結論を引き出す。さらに、得られて結果に対して考察を加えて、全体をまとめる。
以上、信州大学人文学部分		
・健康心理アセスメント	平成19年4月～平成25年3月	・健康知識、健康行動は、複雑かつ多面的であり、しかもさまざまな要因に影響される。しかし、健康心理学においても、伝統的な心理検査は多用され、それらの基礎を包括的に理解することは重要である。アセスメント（査定）は、「被検者のさまざまな特徴を総合的に評価すること」であり、アセスメント実施の目的、「誰」の「何」を対象に査定するか、実施上の留意点等を講義する。健康行動を知識、態度のような個人的な要因だけでなく、社会的要因（教育・環境の診断と評価）にも焦点をあてる。
・健康心理アセスメント実習	平成19年4月～平成23年3月	・健康心理アセスメントの基礎を踏まえて、各種の心理検査を中心としたアセスメントを実習形式でおこなう。具体的には、エゴグラム（TEG)、内田クレペリン精神検査、POMS（ポムス、profile of mood states)、ライフスタイル指標（ＬＳＩ）の実習をおこなう。また、検査の実施法だけでなく、採点、判定・解釈、さらに検査所見の書き方についても習得できるように指導する。
・　人格心理学	平成19年4月～平成30年3月	・人格心理学は、パーソナリティ研究とも考えられ、大別して３つの問題領域をもっている。その第１は人格を理論的に扱う領域であり、第２は性格形成に関して、実践的に素質や環境を視野に入れながら考察する領域であり、第３は性格・パー

		ソナリティの診断・測定を考察する領域である。具体的には、ウイリアム・ジェームズの自己、エリック・エリクソンのライフサイクル、エリック・バーンの交流分析を中心に講義を進める。
・心理学概論Ⅱ	平成19年4月～平成25年3月	・心理学は多くの細分化されている領域を抱えているので、この概論の目的は心理学の全体像を理解できるように講義の内容をアレンジしたいと考える。人間の感覚、知覚、そして認知をヴント以来の古典的な考えと神経科学の最新の知識を織り交ぜて講義し、受講生は身近な経験を連想してもらいながら、理解してもらいたい。さらに、心理学の基礎は、記憶、学習、思考にあるので、人間の中枢神経系である脳と、その反映である心の関係を講義し、心が機能する社会との交互関係にも講義する。
・健康心理カウンセリング	平成19年4月～平成30年3月	・健康心理カウンセリングは、「健康増進、健康維持、健康回復に必要な生活習慣を形成することを主目的として、心理学的な立場から、個人あるいはグループを対象として行なわれる実践的な援助活動」であり、この授業では、健康心理カウンセリングの基本的な考え方や技法などを講義する。具体的には、臨床心理学の基礎である、フロイトの精神分析学、カール・ロジャーズのクライエント中心療法、アルバート・エリスの理性感情行動療法などを取り上げ、それらとの相違点をあげながら健康心理学的カウンセリングのアプローチを説明する。
・生涯発達と健康教育	平成19年4月～平成30年3月	・エリック・エリクソンのライフサイクルの考えに示されるように、生涯発達、生涯学習、生涯教育は発達心理学の中軸となり、人間は常に前向きに日々の活動に取り組んでいると考えることが重要になってきている。そのことを理解するとともに、日々の健康にも気を配り、高齢者のみではなく若年層の社会人も陥りやすい生活習慣病を理解し、普段の健康維持・増進とともに疾病の予防・治療に正しい理解をもつことが健康心理学の重要な目的となってきている。このような健康心理学、健康教育について講義するとともに、ストレスマネジメントのスキルなどをとりあげ、現代人の陥りやすい問題を講義する。

・行動カウンセリング	平成28年4月～平成30年3月	・行動カウンセリングは、スキナーを頂点とする新行動主義を踏まえて、新しい認知心理学を取り入れたカウンセリングである。前任者がテキストとして「認知行動療法」を取り上げているので、それを継続して使用する。「健康心理カウンセリング」で学修した内容の確認、そして不適応行動の確認と改善を行動次元で分析することを修得していくことを学ぶ。行動を引き起こす「認知」の役割、Bandura のモデリング、セルフ・エフィカシーなどの理解を目指す。
・産業心理学	平成30年3月（集中講義）	・「職場のコミュニケーション」「仕事の能率」などの心理学的側面を取り上げ、「industry 産業」は明治時代に日本に導入された翻訳語であり、その語義が持つ意味を改めて理解し「産業」の学際的側面を学修する。当面する諸問題は多種多様であり、原点である労働の理論とマーケティングや消費行動など実際場面の諸問題を授業ではカバーする。
・ゼミ	平成20年4月～平成25年3月	・ゼミ 1、2、3、4（1 と 2 は 3 年次生、3 と 4 は 4 年次生）では、テーマを健康心理学と人格心理学に絞り、これらの 2 領域の文献、特に「健康心理学研究」（日本健康心理学会）と「人間性心理学研究」（日本人間性心理学会）の研究論文をテーマ選択の候補とするようにした。各受講生が自ら選ぶテーマは、卒論を考えながら選び、それに関連する論文を取り上げてゼミの授業でパワーポイントを使い発表する。春学期、秋学期に各自が 1 回ずつ発表し、学期末ごとに、そのまとめをレポートとして提出する。残りの時間では、関連する領域の英語文献を講読をおこなう。
・卒業論文	平成21年4月～平成25年3月	・卒業指導はゼミ 3 と 4 という形で進行する。つまり、ゼミ 1 と 2 の続きであり、卒論のテーマは多くの場合、ゼミ 1 と 2 の中で方向づけされている。ゼミの 3 と 4 では、前半で卒論の計画を具体的に作成提出し、後半では計画に従いながら調査・実験を実施し（場合によっては、卒論を論述でまとめる）、学期末までに論文を完成させる。

2　作成した教科書，教材 平成 16 年 4 月から平成 22 年 3 月のあいだ、何もなかった。		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 ・信州大学全学委員会委員（カリキュラム編成・実施部門/情報教育科目分科会）	平成 16 年 4 月～平成 18 年 3 月	
4　実務の経験を有する者についての特記事項 ・信州大学全学委員会（ヒト環境科学研究支援センタ） ・信州大学全学委員会（治験審査委員会） ・太成学院大学人間学部学部長	平成 16 年 4 月～平成 18 年 3 月 平成 16 年 4 月～平成 18 年 3 月 平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月	
5　その他 1　はびきの市民大学　講師 「地域と健康教育」	平成 29 年 5 月 24 日	日本の健康教育は、超高齢化社会の日本といわれているように、目ざましい展開を続け世界の注目の的と考えられている。その成果の分析、そしてそれを支えている日本の実情を紹介し、さらに大学における健康教育の授業内容も、欧米の知識が中心となっているが、講演する。
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　学位、資格，免許		

・農学士 ・ ・文学修士 ・ ・Bachelor of Arts ・ ・Master of Arts ・ ・Ph.D. (Psychology)	昭和 40 年 3 月 昭和 44 年 3 月 昭和 53 年 6 月 昭和 55 年 6 月 昭和 58 年 2 月	名古屋大学農学部農芸化学科卒業 名古屋大学大学院文学研究科 心理学専攻修士課程修了 イギリス・ケンブリッジ大学 実験心理学部卒業 上記大学卒業後自動的に アメリカ・ジョージア大学心理学部 大学院博士課程修了
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 上記に記入	1 1	
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） なし				
（学術論文） 1．女子学生における親子関係と摂食障害傾向	共著	平成 16 年 12 月	健康心理学研究	・Vol．１７、 No．２、 ３２－４１。 青年期の女子学生を対象に、摂食障害傾向を検討した結果、主に子どもから捉えた親子関係との関連において、その関係性が認められたが、親から評定された親子関係はほとんど影響を与えないことが明らかとな

				った。摂食障害傾向の原因を「親」と「子」の家族関係のとらえ方の両側面から明らかにした本研究結果は、他に類を見ないという点のおいて意義深い。 著者：嘉手納悟,今井章,嶋崎裕志
2.自動運動と眼球活動との関係、	共著	平成 17 年 3 月	人文科学論集［信州大学人文学部〈人間情報学科編〉］	・第３９号, １－９。自動運動が観察されているとき、眼がどういう眼球運動をおこなっているか、赤外線照射した瞳孔の中心をＣＣＤカメラにより捕捉・追跡して眼球運動を分析した（被験者４人）。９０秒の観察時間において、自動運動が報告されている平均時間比は約４８％であった。平均頻度は６．０、平均持続時間は９．４秒であった。眼球運動との関連では、自動運動の生起、非生起に関わらず、９０%以上の割合で眼は動いていなかった（固視、fixation)。従って、小飛越運動（saccadic movement）と瞬目（eye blink）が自動運動に影響を及ぼすことは非常に少ないことが明らかとなった。今後は、固視微動の検討が必要をなる。 著者：今井章,嶋崎裕志
3.仮現運動と眼球活動との関係、	共著	平成 18 年 3 月	人文科学論集［信州大学人文学部〈人間情報学科編〉］	・第４０号, １－１３。仮現運動と眼球活動との関連を検討するため、凝視の条件と提示刺激に連動して眼球を動かしサッケードを誘導しながら観察する条件（追視）を設定し、赤外線照射した瞳孔の中心をＣＣＤカメラにより捕捉・追跡して眼球運動を分析した（被験者４人)。そ

				の結果、仮現運動と実際運動のどちらの条件でも、運動印象と追視率とのあいだに、有意な相関関係は認められず、追視時には凝視時に比較して全般に運動印象が低下した。しかも、この低下傾向は、刺激の点滅周波数が高い場合ほど顕著であった。相殺説をはじめ、これまでの運動知覚の諸結果と、今回の結果が比較検討された。
4. 仮現運動と眼球活動との関係（2)、	共著	平成 19 年 3 月	人文科学論集［信州大学人文学部〈人間情報学科編〉］	著者：今井章,嶋崎裕志 第４１号, ４７－６０。今回の研究では、６人の被験者に対して、仮現運動と眼球活動との関連を検討するため、視野の中心点を凝視する条件と視標を追視し意図的にサッカードを生起させる条件を設定し、これらの事態において得られる３種類の運動印象（段階的―なめらか、分離的一体的、２次元的―３次元的）に及ぼす眼球運動の影響を検討した。その結果、光点の軌跡を追視する条件では、追視の失敗（逸脱率）がいずれの運動印象にも影響すること、さらにその影響の程度は、なめらかさ、一体感、奥行き感という運動印象をそれぞれについて異なって現れたことが示された。この結果は、相殺説で仮定されている相殺過程の不全が運動印象の変容をもたらしている可能性を示唆している。
5.Psychopathic traits And cardiovascular Responses to emotional stimuli	共著	平成 19 年 7 月	Personality and Individual Differences	著者：今井章,嶋崎裕志,本田仁視 ・42, 1391－1402 日本語版一次性・二次性サイコパガシー（冷酷性、衝動性、逸脱行動などを持つ人格障害）尺度を用いて、大学生の心理傾向を調査し、被験者が不快な映像

				をみているとき、その心拍数などの変化を測定した。サイコパシーの程度が高く反社会的行動に高い共感を覚える被験者は、低い被験者に較べて心拍数の変化が少なく自律神経系の活性も少なかった。従って、サイコパシー傾向を持つ被験者は、情動的な映像に対しても定位反応（ＨＲ定位反応）も比較的小さいので、不安や恐怖が欠落していることが問題となる。 ・Takahiro Osumi,Hiroshi Shimazaki, Akira Imai, Yoshinori Sugiura,Hideki Ohhira
6.方向づけ課題における処理の深さと処理数が顕在記憶に及ぼす効果	共著	平成20年3月	基礎心理学研究	第26巻、第2号, 顕在記憶の符号化に「おいて、処理水準と精緻化は重要な変数であり、この研究では両方を度王子に操作した。実験1では自由再生テストと再認テストを行ない、実験2では自由再生テストと手がかり再生テストを用いて、処理水準と精緻化の相互作用を検討した。単語の音韻や形態に関連する浅い物理処理より、単語の意味が関わる深い処理の方が記憶成績が良いことが確認された。特に、課題の処理数という変数が精緻化処理としての物理処理においても有効であることが明確に示された。 著者：徳増和佳乃,今井章,嶋崎裕志,
7.人格の研究　1	単著	平成21年3月	太成学院大学紀要	第11巻（通号28），47－60. 人格・パーソナリティをどのように理解し、それを日常場面・臨床場面に生かして、どのように実践していくかは、現代心理学の主要テーマである。従来の理論とその

				実践をまとめ、さらに新しい視点を取り上げ、その良否を論じたい。心理学と人格・パーソナリティとの関わりは古くから続いてきたと考えられているが、現代心理学と人格・パーソナリティと関わりは複雑な様相を展開してきていると考えられる。今回発表する、「人格の研究 1」では、全体で 10 章を予定しているうちの最初の 1 章をまとめる。その内容は、序論で心理学における人格・パーソナリティの論議を概括し、次に 1 章では人格のひとつの要素である「知」について論ずる。
8. 人格の研究　2	単著	平成 22 年 3 月	太成学院大学紀要	・第 12 巻（通号 29），57－65. まだ済んでいなかった「人格の研究　1」の「1 章 知」の結論をまとめた。つまり、「知」は、人間の中枢神経系の中に形成される新しい痕跡であり、「知」だけでなく、人間の人格の三要素・知情意も同じように、神経系に形成される新しい痕跡と考えられる。 次に、「情」は、三次元性を持つという、現代心理学者ヴントの理論、そしてその理論を実践に移したアメリカの心理学者オスグッド Osgood の SD 法の三次元性を論議し、さらに 4 番目の次元として、「情」には時間という次元を取り上げたいという試論を論議した。
9. 人格の研究　3	単著	平成 23 年 3 月	太成学院大学紀要	第 13 巻（通号 30 号）、69-77. 人格の要素「意」について論議した。W. James は、「意志」「注意」を考えるとき、注意の対象は神経の状態によって決定され、いかなる対象も神経作用による以外にわれわれの注意を捉えることはできないと論述した。本

				論文では、意識が 4 区分されると提案され、「意」は、generativity 生成性と「本能」の中の「開示」に対応すると提案された。人間の人格と意識は、中枢神経系により維持され、「意」に相当する「今現在明らかでないことを既知の枠を広げて理解していきたい、言語化していきたい、という人間の取り組み」は、常に少しでも先に伸びようとする神経細胞の突起 process の成長と考えられ、神経細胞の不断の成長が「意」と考えられる。
10. 人格の研究　4	単著	平成 24 年 3 月（刊行予定）（この部分削除）	太成学院大学	第 14 巻（通号 31 号）、75-84. ・人格を心理学的に考える場合、精神分析学において、心的エネルギーという概念を用いて、内向性と外向性に分類することが、ユングによって提案された。この心的エネルギーは、精神分析学創始者フロイトにより、リビドーと命名されたものと同等と考えられている。本論文では、このリビドーに焦点を当てて、リビドーに至るまで、どのように関連する概念が変遷してきたかを、霊気説、骨相学、進化論、と辿り、次にリビドーを巡ってフロイトとユングは、どのように論争したかを概説した。最後に、現代の言語研究における、生成文法を取り上げ、人間の言語活動における、生成文法が持つ生得性に注目した。以上のリビドーに関連する諸概念の概説の結論として、生成文法の研究と人格の研究を比較し、生成文法に関する最新の研究が実体を伴って成果をあげ、そこにはリビドーと置き換え可能な生得性がキー概念として使われているので、心

				的エネルギーによって概念的に論議されている人格研究にも、言語研究の実体に即した研究が貴重な研究指針を提供する、と結論した。
11.人格の研究　5	単著	平成 25 年 3 月	太成学院大学	第 15 巻（通号 32 号)、65-73. ・ひとりの人間の内面には、「私」が個別に複数想定されることが提案されており、James の場合と Berne の交流分析における構造分析の場合が、論議された。つぎに、Tulving による 5 つの記憶の階層性、Sullivan による精神医学における対人関係の習熟度の多少の問題と自己組織、そして Rasmussen によるプログラム化され得る、人間の情報処理プロセスの提案を総括した。結論として、流行が社会によって作られるように、個人の行動も、人格という総合力によって生み出されていると考えられ、全体としての大きな意識すなわち人格は機能の観点から細分化され、それらの階層性が定義され、より低位のものは無意識化、シグナル化され、より上位のものは意識・無意識の混在化した処理過程であり（シグナル、サイン、シンボル)、その中位には、Sullivan の提案する自己組織、それは巨大な神経組織であろうし、やがて大人の人格へ変身していく対人関係の生成 manner 集とも呼べるものであるのではないか。
12.人格の研究 6	単著	平成 26 年 3 月	太成学院大学	第 16 巻（通号 33 号)、49-56. ・文化は,人間の精神的・内面的な生活にかかわるもの,文明は,人間の技術的・物質的所産と考え,「近代合理主義」の担い手で

				ある,デカルトとカントの主張である,「神の存在の実証性」の問題点を取り上げ,カントの「神の存在の証明は不可能である」という提案,そして「文化を支えている宗教の実証性の問題点」を確認した。このカントの論証は,近代合理主義を後ろ盾として,人間の意識と人間の人格を支える,人間の文化と文明を一段上に止揚したと考えられる。文化だけでなく,文明,そして文明の利器により,人間の意識は変容を遂げるので,人類の狩猟期における「矢じり」,そして現代における「電磁気」が,具体的な実体をもったものとして,人間の日常的な意識レベルと人格の形成過程において,強力なサポーターとして働きかけている。
（その他） 1．音韻的特性と音韻的プライミング効果	共著	平成 16 年 9 月	日本心理学会	・第 68 回大会発表論文集 P452 著者：林佐和,今井章,嶋崎裕志,
2．自動運動と眼球運動	共著	平成 16 年 9 月	日本心理学会	・第 68 回大会発表論文集 P537 著者：今井章,山田一宣,嶋崎裕志,
3．説明文章からの連想率が新情報の学習に与える影響	共著	平成 16 年 9 月	日本心理学会	・第 68 回大会発表論文集 P770 著者：今井章,山田一宣,嶋崎裕志,
4．方向づけ課題と課題処理数が顕在記憶に及ぼす効果	共著	平成 16 年 9 月	日本心理学会	・第 68 回大会発表論文集 P823 著者：徳増和佳乃,今井章,嶋崎裕志,
5.映像刺激が視聴者の認知・感情・生理反応に及ぼす効果	共著	平成 17 年 5 月	日本生理心理学会	・第 23 回大会, p143 著者：今井章,奈良原光隆,嶋崎裕志,
6．眼球運動と仮現運動	共著	平成 17 年 12	日本基礎心理学会	・第 24 回大会, p222

の関係―固視と追視の影響―		月		著者：今井章,嶋崎裕志, 徳増和佳乃,,
7. フィードバックエラー関連電位に及ぼす文脈の影響	共著	平成 18 年 6 月	日本基礎心理学会	・第 25 回大会, p146-147 著者：今井章,嶋崎裕志,白宇
8. サイコパシー特性と情動反応の関係	共著	平成 18 年 11 月	日本心理学会	・第 70 回大会, p431 著者：今井章,嶋崎裕志, 大隈尚広
9. 仮現運動と眼球運動（2）	共著	平成 18 年 11 月	日本心理学会	・第 70 回大会, p582 著者：今井章,嶋崎裕志,本田仁視,
10. 刺激映像が視聴者の感情・認知・生理反応に与える効果	共著	平成 18 年 11 月	日本心理学会	・第 70 回大会, p 1056 著者：今井章,奈良原光隆,嶋崎裕志
11. インクジェット用写真用紙における白さの好ましさに関する研究（4）	共著	平成 19 年 5 月	日本色彩学会	・第 38 回大会, p92-93 著者：高橋信也,中村信次,嶋崎裕志
12. 単語認知は意味関連画像への眼球運動を促進するか	共著	平成 19 年 5 月	日本認知心理学会	・第 5 回大会, p96 著者：今井章,藤江順子,嶋崎裕志
13. 仮現運動と眼球運動（3）－アルファー運動の運動印象の分析－	共著	平成 19 年 9 月	日本心理学会	・第 71 回大会, p501 著者：今井章,嶋崎裕志,本田仁視
14. 報酬予期の不確実性とエラー関連電位との関係	共著	平成 19 年 9 月	日本心理学会	・第 71 回大会 p424 著者：今井章,嶋崎裕志,白宇
15. 継続的音楽聴取による生理的および心理的変化	共著	平成 19 年 9 月	日本心理学会	・第 71 回大会, p948 著者：今井章,嶋崎裕志,荒木千晴
16. インクジェット用写真用紙における白さの好ましさに関する研究（5）：日豪間の国際比較	共著	平成 20 年 5 月	日本色彩学会	・第 39 回大会, p132-133 著者：高橋信也,中村信次,嶋崎裕志
17. The effect of Repetitive music Listening for days on anxiety reduction	共著	平成 20 年 8 月	日本音楽知覚認知学会	The 10th International Conference on Music and Cognition, p88 ・Chiharu Akaki, Akira Imai Hiroshi Shimazaki

（経営）工藤　英男

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 16 日

氏名　工 藤　英 男　印

研　究　分　野	研究内容のキーワード
総合・新領域系、総合領域、情報学、ソフトウェア（1002）	(F) ソフトウェア工学、情報倫理

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材		
1.　平成 24 年度卒業研究論文集（第 7 期生）	平成 25 年 3 月	大阪成蹊大学マネジメント学部工藤英男研究室 総 34 ページ（A 4 版）
2.　平成 25 年度卒業研究論文集（第 8 期生）	平成 26 年 3 月	大阪成蹊大学マネジメント学部工藤英男研究室 総 35 ページ（A 4 版）
3.　平成 26 年度卒業研究論文集（第 9 期生）	平成 27 年 3 月	大阪成蹊大学マネジメント学部工藤英男研究室 総 175 ページ（A 4 版）
4. 平成 27 年度卒業研究論文集（第 10 期生）	平成 28 年 3 月	大阪成蹊大学マネジメント学部工藤英男研究室 総 112 ページ（A 4 版） ＜平成 25 年 2 月以前　6 編＞
3　教育上の能力に関する大学等の評価 （省略）	（省略）	（省略）
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		
		＜平成 25 年 2 月以前　8 編＞

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		
		＜平成 25 年 2 月以前　4 編＞

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.＜情報科学シリーズ(5)＞SE(System Engineer)をめざして	共著	昭和 60 年 3 月初版 平成 3 年 1 月訂正版	パワー社	情報化社会において，情報システムを舞台裏から技術的に支えるシステムエンジニア(SE)について，SE をめざしている人達を対象に解説した。第 2 編における「教育機関で活躍する SE」を担当し，第 1 章では学校・大学の中でのコンピュータにおいて情報処理の具体的な事例を，第 2 章ではオペレーティングシステムとのかかわりにおいてはプログラミングとの関わりについて，第 3 章では私の経験から事例を含めて解説した。 共同執筆者：石桁正士編，森　和明，工藤英男，村松英和，岩藤　誠 Ａ５、総 104 ページ担当部分：第 2 編　pp21～50
2. 日本語 OS－2 と C 言語	共著	平成元年 11 月	工学図書	パソコンにおけるオペレーティングシステム(OS)に関して，従来の MS-DOS と関連づけて新しい OS である日本語 OS/2 の特徴や機能について解説した。第 1 章では日本語 OS/2 の基礎知識においては情報処理の基礎について,第 2 章では日本語 MSOS/2 の構成ファイルにおいては情報処理のファイル操作について,第 5 章では日本語 OS/2 のコマンドについて具体的に解説した。 共同執筆者：植田一廣，吉川博史，工藤英男 Ａ５、総 180 ページ 担当部分：pp1～28，pp73～116
3. 情報社会と情報基礎－情報学入門－	共著	平成 2 年 3 月初版 平成 6 年 4 月改訂版	第一法規出版	情報化社会で生きていくために必要な情報活用能力について，問題解決の視点から不可欠な事項や法則を解説した。第 3 部の「私たちを取り巻く情報システム」の中の第 4 章「通信」において，電話機の多機能化，通信機器としてのパソコン，社会における通信，近未来における通信について，情報処理の具体例を解説した。 共同執筆者：情報学教育研究会編著 Ａ５、総 186 ページ 担当部分：pp110～120 を川野智と共同執筆
4.ネットワーク社会における情報の活用と技術	共著	平成 15 年 2 月初版 平成 18 年 3 月改訂版	実教出版	平成 15 年度から実施の高等学校の普通教科「情報」には，「情報 A」「情報 B」「情報 C」という 3 つの科目が設定されている。この 3 科目の学習目標や内容は，情報教育の目標（情報活用の実践力，情報の科学的な理解，情報社会に参画する態度）に基づいている。筆者ら（高等専門学校の情報処理担当者で組織する情報基礎教育標準化部会）は，高等学校の新教科「情報」ならびに具体的な学習指導案の分析を行い，高専における情報基礎教育の標準化の検討を行い，

				高専における具体的な教科書作りに着手した。執筆担当は，個人による情報の管理とセキュリティ，ネットワークでのネチケットに関する内容である。 共同執筆者：高専情報基礎教育研究会編著 Ａ５版総 266 ページ 担当部分：1.5 節「利用者とセキュリティ」６１～７４ページを担当
5. 『ＩＴ社会の方と倫理 第２版』	訳本	平成 19 年 12 月	株式会社ピアソン・エデュケーション	Sara Baase ：「A Gift of Fire: Social, Legal, and Ethical Issues in Computing」サラ・バーズ著/日本情報倫理協会訳「IT 社会の法と倫理」 共同執筆者：日本情報倫理協会 Ａ５版総４３８ページ 担当部分：第４章(Can we trust the computer) pp.127-178 を江澤，工藤で担当
6.『インターネットの光と影－被害者･加害者にならないための情報倫理入門－Ver.5』	共著	平成 12 年 9 月 初版 平成 26 年 2 月 改訂版	北大路書房	共同執筆者：情報教育学研究会(IEC) 情報倫理教育研究グループ編著　Ａ５版総 218 ページ 担当部分：4.5 節 インターネットとワークスタ イル、8.2 節 コンピュータウィルスとスパイウ エア、8.6 節 電子認証と電子 pp.82-83,156-159,170-173 を担当
1.『インターネットの光と影－被害者･加害者にならないための情報倫理入門－Ver.6』	共著	平成 30 年 2 月 改訂版	北大路書房	共同執筆者：情報教育学研究会(IEC) 情報倫理教育研究グループ編著　Ａ５版総 218 ページ 担当部分：4.5 節 インターネットとワークスタ イル、8.2 節 コンピュータウィルスとスパイウ エア、8.6 節 電子認証と電子 pp.84-85,150-153,168-171 を担当
（学術論文） 1.わが国の大学における教育用電子計算機の現状	共著	昭和 54 年 4 月	共立出版,bit, Vol.11,No.4	日本の大学におけるプログラミング教育の現状を調査する目的で，昭和 52 年度に 256 大学に対してアンケート調査を行った。回答のあった 138 校について分析した結果について解説した。 共同執筆者：的場裕司,工藤英男 担当部分：アンケート調査の分析 pp330～345
2. 理工系情報学科における教育用電子計算機の現状と問題点	共著	昭和 55 年 3 月	情報処理学会,情報処理,Vol.21,No.3	情報工学科を中心とする情報関連専門学科における教育用電子計算機に関して，理工系情報学科協議会によるアンケート調査の結果を分析したものを基にして，その現状と問題点を報告した。章構成は，情報関連専門学科の出現，教育用電子計算機の現状分析と問題点（ハードウェア，利用環境，ソフトウェア，付帯設備，維持費，現状における意見，メーカに対する希望，リプレースに関して）

				であった。 共同執筆者：田中幸吉,工藤英男 担当部分：アンケート調査票の作成とその分析 pp246～254
3. 連結編集過程を考慮したソフトウェア教育用ツール（TSE）	共著	昭和 56 年 9 月	情報処理学会論文誌 Vol.22, No.5	従来のアセンブリ言語によるプログラミング教育の方法では，原始プログラムのアセンプラによる処理からその実行までの過程における目的モジュールやロード・モジュールの性質やそれらを処理する連結編集プログラムや絶対ローダの機能については考慮されていない。そこで，原始プログラムから実行という処理過程をはっきりさせ，より良い教育効果を得るために TSE（A Tool for Software Education)をFACOM230-45S上に作成し，その機能および利用結果を述べた。プログラミングの基礎教育において飛躍的な効果があった。 共同執筆者：的場裕司，工藤英男，松浦敏雄，吉岡信夫 担当部分:TSE の設計および作成に関する部分　pp458～464
4. Error Life Span and Programmer Performance	共著	昭和 62 年 10 月	Proceedings of The 11th Annual International Computer Software & Applications Conference -COMPSAC	プログラミング教育において基本となる人的側面の視点から，エラー寿命（設計，コーディング，デバッグの各過程においてエラーがソフトウェア中に具体化してから，取り除かれるまでの時間）の概念を示し，プログラマ性能との関係について議論した。 共同執筆者：Kenichi Matsumoto, Katsuro Inoue, Hideo Kudo, Yuji Sugiyama, and Koji Torii 担当部分：実験データの収集に関する部分 pp259～265
5. Quantifying a Design Process Based on Experiments	共著	昭和 63 年 1 月	Proceedings of The 21th Hawaii International Conference on System Science	情報工学科のシステムエンジニア専門教育において，プログラム開発を対象にして，プログラム設計過程の定量的評価に関する 2 つの実験を行った。実験 1 では初期設計書とプログラムとの関係について考察し，実験 2 では設計法の比較として，自己流と複合設計によるプログラムを分析した結果，設計手法による有意性を明らかにした。 共同執筆者：Hideo Kudo, Yuji Sugiyama, Mamoru Fujii, and Koji Torii 担当部分：実験の計画と実施及び分析に関する部分 pp285～292
6. Quantifying a Design Process Based on Experiments	共著	平成元年 2 月	The Journal of Systems and Software No.9	情報工学科のシステムエンジニア専門教育において，プログラム開発を対象にして，プログラム設計過程の定量的評価に関する 2 つの実験を行った。実験 1 では初期設計書とプログラムとの関係について考察し，実験 2 では設計法の比較として，自己流と複合設計によるプログラムを分

				析した。 共同執筆者：Hideo Kudo, Yuji Sugiyama, Mamoru Fujii, and Koji Torii 担当部分：実験の計画と実施及び分析に関する部分　pp129～136
7. プログラム設計過程の定量的評価の試みー初期設計書の品質から見た評価ー	共著	平成3年3月	奈良工業高等専門学校研究紀要,第26号	大学の学部教育におけるプログラム開発を対象にして，設計過程の評価に関する試みを行うために，学生に共通課題の要求仕様を与えて，この問題に対する設計書を作成させ，その設計書に基づいてプログラムを作成させた。そこで，初期段階の設計書における品質と最終的に完成したプログラムにおける品質の間の因果関係を分析した。 共同執筆者：工藤英男，菊野　亨，鳥居宏次 担当部分：実験の計画と実施及び分析に関する部分 pp69～76
8. PASCALプログラムの定量的評価の試み	単著	平成4年3月	奈良工業高等専門学校研究紀要,第27号	学生が作成したPASCALプログラムを対象に定量的評価の準備段階の試みとして，評価の省力化とプログラムの良さを分かりやすさの面から考察した。　pp69～74
9. ソフトウェア開発における要求分析のDFD作成支援ツールの試作	共著	平成5年3月	奈良工業高等専門学校研究紀要,第28号	本稿では，ソフトウェア開発における初心者向けの要求分析を支援するためにユーザインタフェースを配慮した要求分析を支援するDFD(Data Flow Diagram)作成過程のツールについて述べた。なお，このツールの設計・実現はオブジェクト指向を採用し，その構成は要求仕様書の入力，編集とその文字列を取り出す部分，DFDの描画とマウスの処理をする部分からなる。 共同執筆者：工藤英男，八木靖二，松村崇史 担当部分：ツールの基本設計の部分 pp45～52
10.分散環境における教育支援用ハイパーテキストシステムの構想	共著	平成5年3月	奈良工業高等専門学校研究紀要,第28号	複数のワークステーションをネットワークで接続した分散環境における教育支援用ハイパーテキストシステムの基本構想を述べた。本システムの特徴は，ネットワーク対応マルチユーザ化によりサーバとの通信に加えて教師学習者間あるいは学習者同士間で直接通信を行い，学習者の学習状況の把握や成績の集計，教師による遠隔操作や教材の一斉提示などが行える点である。 共同執筆者：山井成良，工藤英男，鈴木忠二，下條真司，中野秀男，久保　登，中西義郎 担当部分：システム基本設計の部分 pp71～74
11.ソフトウェア設計教育の支援システムにおけるガイド機能	単著	平成6年3月	奈良工業高等専門学校研究紀要,第29号	複数の設計法を学生が主体的に学習でき，演習まで含んだCAI(Computer Assisted Instruction)システムの構築を進めている。本稿では，ソフトウェア設計の部分における教育支援の

				ための CAI システムのガイド機構における基本設計の構想を述べた。 pp61～64
12.オブジェクト指向によるソフトウェア設計教育の支援システムの実現と問題点	共著	平成 7 年 3 月	奈良工業高等専門学校研究紀要,第 30 号	学習者が自由な学習や簡単な演習ができる仕組みを取り入れ，初心者がオブジェクト指向によるソフトウェア設計（OMT 法）の学習を支援するシステムを Macintosh 上の HyperCard を用いて試作した。本稿では，システムの実現における機能と試用での問題点について述べた。 共同執筆者：工藤英男，城間順一，長橋雅明 担当部分：システムの構成の部分 pp83～87
13. An Integrated Supporting System for Learning Different Kinds of Software Design Methods	共著	平成 7 年 3 月	Proceedings of The Software Education Conference (SRIG-ET94)	本稿では，異なる種類のソフトウェア設計手法を学ぶためのシステムについて述べた。システムの構成は，次の 6 つの機能を統合したものである。SA や OMT 等のソフトウェア設計手法で用いる DFD，STD，ERD が作成できるドキュメントエディタに，ドキュメント管理，教材ビューア，教材エディタ，学習プロセス管理，学習プロセスモニタ，学習プロセス解析である。 共同執筆者：Hideo Kudo，Kenichi Matsumoto，and Koji Torii 担当部分：システム基本設計の部分 pp34～41
14.オブジェクト指向による手話表現ツール	共著	平成 8 年 3 月	奈良工業高等専門学校 研究紀要,第 31 号	情報処理の具体例として，手話学習における入門対象とした挨拶に関する手話を表現するツールを，オブジェクト指向の機能を用いたツールの設計と実現について述べた。 共同執筆者：工藤英男，杉山絵美，吉川博史 担当部分：システムの構成の部分 pp61～66
15.白地図 CAI システムの開発	共著	平成 8 年 3 月	大阪短期大学,紀要, 第 9 号	情報処理の一例として，社会科の地理分野に着目し，資料教材作成の容易なデータベース化と学習者の学生句集行動パターンの把握を取り入れた白地図 CAI システムの構築を試みた。 共同執筆者：吉川博史，工藤英男，松永公廣 担当部分：システム構築の部分 pp19～27
16.オブジェクト指向に基づくアセンブリ言語の学習支援ツール	共著	平成 9 年 3 月	奈良工業高等専門学 校,研究紀要,第 32 号	プログラミング教育の基礎となる Z80 を対象にしたアセンブリ言語の修得を支援する学習ツールについて報告した。このツールはオブジェクト指向（OMT 法）に基づいて分析・設計ならびに実現を行った。 共同執筆者：工藤英男，大西　仁，若宮　栄，的場裕司 担当部分：ツール構築に関する基本構想の部分 pp55～60
17.プログラム開発に関す	共著	平成 10 年 3 月	奈良工業高等専門学	情報工学科の学生としては，プログラム開発における問題の分析や設計

る学生実験の考察			校,研究紀要,第 33 号	に関する手法を体験することが，将来のソフトウェア技術者として必要不可欠と考えている。そこで，4 年次の「情報工学実験」の 1 テーマとして,「プログラム設計に関する実験」を行っている。この実験の概要と事例を示し考察を行った。 共同執筆者：工藤英男，吉川博史 担当部分：実験の設計と実践および考察の部分 pp77～81
18.定期的なインタビューを取り入れたデバッグプロセスの実験と分析	共著	平成 10 年 6 月	ソフトウェア技術者協会,ソフトウェア・シンポジウム'98 論文集	デバッグ作業者が立てる仮説のうち，特にバグ位置についての仮説に注目して，定期的なインタビューにより追跡する実験を行い，各モジュール間のデバッグ作業者の視点の移動を分析した。 共同執筆者：内田真司，工藤英男，門田暁人 担当部分：実験計画及び分析の助言 pp53～58
19.リスク要因を考慮した生活設計学習システムの試作	共著	平成 10 年 7 月	摂南大学経営情報学部,経営情報研究,Vol.6,No.1	情報処理の具体例として，経済的側面から見るリスク要因（世帯主に関わるリスクによる収入の減収，交通事故などによる怪我，火災による家財の消失）を考慮した生活設計学習システムのパイロットシステムを試作した。 共同執筆者：松永公廣，工藤英男 担当部分：基本的構想に関する部分 pp61～72
20.学内 LAN を用いたプログラミング学習支援システムの構築	共著	平成 11 年 3 月	南大阪大学，紀要，第 1 巻，第 2 号	学内 LAN（Windows NT）と学生ノートパソコン(Windows95)を用いた COBOL プログラミング学習支援の仕組みと実践について報告した。 共同執筆者：吉川博史，寺本光雄，工藤英男 担当部分：基本的構想に関する部分 pp17～23
21.インターネットにおける情報倫理教育に関する考察	共著	平成 11 年 3 月	奈良工業高等専門学校,研究紀要,第 34 号	高専の情報工学科や短大の経営情報学科の情報処理教育，特にコンピュータリテラシー教育を進めるに当たって，学生のインターネットと情報倫理に関するアンケートを実施し，分析結果について報告した。調査対象は高専の 1・2・4・5 学年と短大の 1・2 学年の計 264 名であった。学生と学校間において，情報の倫理観に差があることが判明した。 共同執筆者：工藤英男，吉川博史 担当部分：高専生のアンケート調査と分析の部分 pp79～84
22.保守工程におけるデバッグ作業者のバグ特定プロセス分析	共著	平成 12 年 3 月	奈良工業高等専門学校,研究紀要，第 35 号	デバッグ対象プログラムを構成するモジュールを，その中にバグが存在するとデバッグ作業者が仮定するか否かで 3 つの集合に分類し，それらの集合間でのモジュールの移動によってバグ特定プロセスを表現できる。本実験では，このモデルに基づくデバッグ能力とデバッグ戦略の分析を行い，バグ特定プロセスの共通

				点や作業者によるデバッグ戦略の違いが確認した。 共同執筆者：工藤英男，内田真司，門田暁人，松本健一 担当部分：実験の分析の部分　pp75～80
23. WWW と IRC の連動に基づく大規模なコミュニティウェアのためのプロトコル“VICE”の提案	共著	平成 12 年 6 月	ソフトウエア技術者協会ソフトウエア・シンポジウム 2000 論文集	本研究では，コミュニティウェアの基礎環境を構築することを目的としている。分散型 CSCW のシステムは，ネットワークを介して意思疎通を行う「コミュニケーションシステム」と，その円滑なコミュニケーションを補助する「共有情報空間」から構成する。本稿では，WWW を共有情報空間と位置付け，そのブラウジング動作をコミュニケーションシステムの IRC と連動させる方法を考案した。 共同執筆者：大杉直樹，浅井文男，工藤英男 担当部分：論文構成の助言　pp83～89
24. Debugging Process Models based on Changes in Impressions of Software Modules	共著	平成 12 年 8 月	International Symposium on Future Software Technology 2000 (ISFST2000)	我々が提案しているデバッグ作業者のバグ特定プロセスのモデルに基づき，異なるプログラムで実験した分析結果を示す。この実験では，カレンダーのプログラムを用い，5 名の被験者により，このモデルに基づくデバッグ能力とデバッグ戦略の分析を行った。 共同執筆者：Shinji Uchida,Akito Monden, Hajimu Iida, Ken-ichi Matsumoto, Katsuro Inoue, Hideo Kudo 担当部分：実験の分析の部分 pp 57～62
25. ObjectFlow による分散ソフトウェア設計手法	共著	平成 13 年 3 月	奈良工業高等専門学校,研究紀要，第 36 号	ネットワークに接続された多くのコンピュータに分散したソフトウェアが，協調して 1 つの処理を実行する分散ソフトウェアの設計手法を提案する。ObjectFlow をベースとした設計環境を提供し，相互にビジネス・オブジェクト形式のコンポーネントを交換しながら，分散ソフトウェアを設計するものである。分散オブジェクト指向に基づくアプリケーションの設計に ObjectFlow を適用した例を示し考察した。 共同執筆者：工藤英男，臼井義美 担当部分：論文の構成　pp73～78
26.インターネットにおける情報倫理に関する調査―練習問題による教育前の学校間での相違―	共著	平成 13 年 12 月	近畿大学工業高等専門学校紀要，第 17 号	情報倫理教育研究グループ編著の「インターネットの光と影」の練習問題を複数の工業高等専門学校や短期大学および大学で実施した。本稿では 2 つの高専について比較検討をする。また，従来のインターネットと情報倫理に関するアンケートを併用したの で，インターネットの知識と倫理意識との関係についても考察した。 共同執筆者：内田眞司，工藤英男 担当部分：調査の実施と分析 pp15～20

27.スライシングを用いたデバッグ支援ツールに関する一考察	共著	平成 14 年 3 月	奈良工業高等専門学校,研究紀要, 第 37 号	ソフトウェア開発において，最も時間がかかる作業がデバッグであり，全工程の 5 割程度を占めると言われている。しかし，現在でも，デバッグを効率的に行う完全な方法論は提案されておらず，実務上ではプログラマの技量に頼っているのが実状である。そこで，本研究では，デバッグにかかる時間を短縮し，短期間でのソフトウェア開発を可能とするため，スライシング技術を利用したデバッグ法を提案する。そのデバッグ支援ツールの実現と有用性について検証した。 共同執筆者：工藤英男，中井伸郎，内田眞司 担当部分：論文の構成 pp37～43
28. A Multiple-View Analysis Model of Debugging Processes	共著	平成 14 年 10 月	Proceedings of the 2002 International Symposium on Empirical Software Engineering	本論文では，デバッグ作業者のバグ特定プロセスのモデルを提案する。このモデルは，プログラムを構成するモジュールを，その中にバグが存在するとデバッグ作業者が仮定するか否かで 3 つの集合に分類し，集合間でのモジュールの移動によってバグ特定プロセスが表現できる。5 名の被験者による実験により，このモデルに基づくデバッグ能力とデバッグ戦略の分析を行った。その結果，バグ特定プロセスの共通点や作業者によるデバッグ戦略の違いをモデル上で確認することができた。 共同執筆者：Shinji Uchida,Akito Monden, Hajimu Iida, Ken-ichi Matsumoto, Hideo Kudo 担当部分：実験の構想と論文の構成 pp. 139-147
29. Analysis of program reading process in software debugging based on multiple-view analysis model	共著	平成 15 年 4 月	Proc. 6th Joint Workshop on System Development (JWSD2003),	共同執筆者：Shinji Uchida, Akito Monden, Hajimu Iida, Ken-ichi Matsumoto and Hideo Kudoh 担当部分：実験の構想と論文の構成
30.インターネットにおける情報倫理に関する意識調査－ 2 大学のアンケート調査－	共著	平成 16 年 3 月	大阪成蹊大学現代経営情報学部研究紀要，第 1 巻第 1 号（創刊号）	情報リテラシー教育において、コンピュータ操作、インターネット活用、情報技術の応用など教えている。それゆえ、学生は、学校の情報処理設備からインターネットを自由に利用できる。しかしながら、インターネットの情報倫理に関する題点もいくつか話題となっている。本稿では、大学の経営情報学科系での情報処理教育を進めるに当たって、学生のインターネットと情報倫理に関するアンケートを実施した。その結果について報告する。なお、アンケートの設問は、情報倫理教育研究グループにおいて作成されたものを利用させて頂いた。 共同執筆者：工藤英男，吉川博史 担当部分：A大学のアンケート調査と分析の部分 pp. 71-80

31. 先端的ソフトウェア開発技術の適用状況と問題点	共著	平成 17 年 3 月	大阪成蹊大学現代経営情報学部研究紀要,第 2 巻第 1 号（通巻第 2 号）	インターネット時代を迎え、コンピュータシステムの利用形態が一変するに伴い、コンピュータシステムの開発形態も大きく変わった。しかし、先端的なソフトウェア開発技術をもってしても、このシステム環境の激変に十分にキャッチアップできず、需要と供給側のギャップは拡大の一途を辿っている。納期の延長や稼動後のシステム障害による社会的損失の発生等の問題点ある。本稿では、このような現状と問題点を調査し、客観的なデータを用いて明らかにするための中間報告である。 共同執筆者：国友義久,加藤英雄,工藤英男 担当部分：５章の中間調査概要の部分 pp77～88
32. SOFTWARE ANALYSIS BY CODE CLONES IN OPEN SOURCE SOFTWARE	共著	平成 17 年春	JOURNAL OF COMPUTER INFORMATION SYSTEMS Volume XLV・Number 3	本論文では，Ｃ言語で書かれたオープンソフトウェア（125 パッケージ）について、ソフトウェア分析を行った結果 11.3%の部分にコードクーロン（部分的に複写された同じようなソースコード）が含まれていることが判明した。 共同執筆者：Shinji Uchida,Akito Monden, Naoki Ohsugi, Toshihiro Kamiya, Ken-ichi Matsumoto, Hideo Kudo 担当部分：実験の構想と論文の構成 pp1～11
33.インターネットにおける情報倫理に関する意識の変化	共著	平成 20 年 3 月	大阪成蹊大学現代経営情報学部研究紀要,第 5 巻第 1 号（通巻第 5 号）	大学での情報処理教育を進めるにあたり，学生のコンピュータに関する意識調査として，インターネットと情報倫理に関するアンケートを複数の大学で実施している。今回は，３年前のデータとの比較し，学生の意識がどのように変化しているかを分析した概要を報告した。 共同執筆者：工藤英男，吉川博史 担当部分：アンケート調査と分析の部分 pp. 99-108
34.インターネットにおける情報倫理に関する意識の変化（２）	共著	平成 21 年 3 月	大阪成蹊大学現代経営情報学部研究紀要,第 6 巻第 1 号（通巻第 6 号）	大学での情報処理教育を進めるにあたり，学生のコンピュータに関する意識調査として，インターネットと情報倫理に関するアンケートを実施している。今回は，本年度の 4 月と 7 月に実施したデータを比較し，学生の意識がどのように変化しているかを分析した概要について報告した。 共同執筆者：工藤英男，福永栄一，吉川博史 担当部分：アンケート調査と分析の部分 pp. 77-90
35.インターネットにおける情報倫理に関する意識の変化（３）	共著	平成 22 年 3 月	大阪成蹊大学現代経営情報学部研究紀要,第７巻第１号（通巻第７号）	大学での情報処理教育を進めるにあたり，学生のコンピュータに関する意識調査として，インターネットと情報倫理に関するアンケートを実施している。今回は，本年度の 4 月と 7 月に実施したデータを比較し，学生の意識がどのように変化しているかを分析した概要について報告した。 共同執筆者：工藤英男，福永栄一

				担当部分：アンケート調査と分析の部分　pp.47-65
36.インターネットにおける情報倫理に関する調査分析	共著	平成 23 年 3 月	大阪成蹊大学現代経営情報学部研究紀要,第 8 巻第 1 号（通巻第 8 号）	大学での情報処理教育を進めるにあたり，学生の意識調査として，インターネットの利用と情報にかかわる倫理に関するアンケートを実施してきた。本稿では，本学の学生について､6年間の4回のデータを比較して、意識がどのように変化しているかを分析した結果について報告し、2004年から続けてきた調査の総括とした。 共同執筆者：工藤英男，福永栄一，吉川博史 担当部分：アンケート調査と分析の部分 pp.21-31
37.Ｗｅｂを用いたエゴグラムシステムの構築	共著	平成 26 年 3 月	太成学院大学紀要,第 16 巻（通号 33 号）	学習者がＷｅｂシステムの構築を学習する課題の一つとして「エゴグラム」を用いたＷｅｂプログラムの学習を構築した。この「エゴグラム」は、学習者が「ありのままの自分を知る」手がかりの一手段として、「交流分析(Transactional Analysis)」の一技法で、その技法を用いたＷｅｂシステムを「エゴグラムシステム(Ego-Gram system)」という。 共同執筆者:冨島磨由美，工藤英男，小高　恵,吉川博史 担当部分:論文の構成　pp.177-182
2. 関西における「食文化産業」の現状と課題	共著	平成 30 年 3 月	太成学院大学紀要,第 20 巻（通号 36 号）	伝統的に長い間，「食は関西にあり」といわれてきた。そして，旅行者，訪問者にとって「食」は，魅力的なことの一つとして捉えられるのではないか。あるいはまた，「関西の食」は，旅行者にとって誘発する積極的に要因となるのではないか。 　したがって，このような今日的状況を本稿では，一般的歴史的に上記２つの視点に立ち，「食」あるいは「食産業」，「食関連産業」が取り巻く現状と課題を考察することは十分意味のあることと思われる。 　さらに加えて本稿おいて，関西におけるフードツーリズムの主たる目的をいくつか提案することにある。 共同執筆者:多方一成，工藤英男 担当部分:論文の構成　pp.45-52
3. グローバル化と上流工程に注目した新たな情報処理教育の研究	共著	平成 30 年 3 月	太成学院大学紀要,第 20 巻（通号 36 号）	我が国の産業界，特に機械や電気製品などのハードウェア産業においては，製品を企画，設計し，製造するという一連の工程を，国内だけでなく，海外の市場に近い場所で行うことが半ば常識的になっている。 　一方，コンピュータの特にソフトウェア産業においては，海外で製造する体制は，2017 年現在，一部の大手企業を除いて，まだまだ普及半ばである。そのため，ソフトウェアは，日本国内での製造がほとんどで，新興国に比べ，国内の人件費が高いことから，コスト競争力が低いままに置かれており，製造も市場も日本国内に限られている状況から，世界が

				グローバル化に突き進む中，明るい未来が見えてこない。 本研究は，このような状況を改善し，日本の得意分野である ICT 産業のグローバル化を進めていくためには，特に大学などの高等教育機関におけるソフトウェアの開発教育の改善が必要と考え，教育の内容および実践について研究するものである。 共同執筆者:福田 真規夫,吉川 博史，工藤英男 担当部分:論文の構成 pp. -

（研究報告書） 1.ソフトウェア作成時のエラー意味分析と高信頼化技法に関する研究	共著	昭和 62 年 3 月	昭和 61 年度科学研究費補助金(一般研究(C))研究成果報告書(60550265)	ソフトウェアの開発過程において，プログラマがソフトウェア・メトリクスを積極的に活用できるような環境を提案した。 共同執筆者:鳥居宏次(研究代表者)，藤井 護，杉山裕二，工藤英男 担当部分:プログラミングにおける設計作業の内容を実験により定量的に見直し，何が設計におけるところの本質的な項目であるかを明らかにする試みを行った部分 全 112 ページ
2. 大阪大学における一般情報処理教育の現状	共著	平成 2 年 3 月	平成元年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書「大学等における一般情報処理教育の推進体制の整備に関する総合研究」(01102047)	総合大学における情報処理教育の現状を，文科系を含む各学部の特徴を考慮しつつ，「教育の内容の多様性」と「学生のレベルの多様性」の 2 つの側面から分類して考える必要があることを報告した。 共同執筆者:西尾章治郎,増澤利光,工藤英男 担当部分:過去の授業における実施データの分析の部分 pp228～253
3. ハイパーテキストのネットワーク対応マルチユーザ化による CAI システムの開発	共著	平成 7 年 3 月	平成 6 年度科学研究費補助金(試験研究(B)(1))研究成果報告書(04559013)	ハイパーテキストのネットワーク対応マルチユーザ化による CAI システムの開発に関する 3 年間の研究成果報告書である。 共同執筆者:中西義郎(研究代表者)，鈴木忠二，工藤英男，山井成良，中野秀男，下條真司，久保 登(担当:システムの設計) 全 151 ページ
4.ソフトウェア設計教育に関する支援システムの構築	共著	平成 7 年 3 月	平成 6 年度科学研究費補助金(一般研究(C))研究成果報告書(05680188)	工藤英男(研究代表者) ソフトウェア設計教育に関する支援システムの構築についての研究成果報告書である。 全 92 ページ
5.画像入力装置の特性に基づく画像補正に関する研究	単著	平成 9 年 3 月	高機能パターン認識システムの開発,平成 7・8 年度文部省特定研究成果報告書	画像入力装置の特性に基づく画像補正に関する研究の一環として，筆圧情報を活用する書字学習システムについて紹介した。 pp88～89
1. 富良野における産業と観光の事例	単著	平成 30 年 3 月	太成学院大学紀要,第 20 巻（通号 36 号）	テレビドラマ「北の国から」でお馴染みの北海道富良野の近くの上富良野（ラベンダーの発祥地）での地域創造の事例紹介をする。富良野盆地では，米作中心から，玉葱，ニンジン栽培や付加価値の高い「ふらのメロン」やぶどう栽培への転作，さらには，果実や野菜の加工，ワイン醸造，インターネットでの販売，ファ

				ームレストランの経営などによる第６次産業化や地域創造の事例を紹介する。 pp199-204

（発表論文） 1．無彩色による３色配色の面積勘定の分析	共著	昭和 48 年 3 月	日本色彩学会, 関西支部大会講演予稿集（大阪・中央電気倶楽部）	面積比感情がより大きく抽出すると思われる5つの尺度を選定し，無彩色の3色配色のサンプルを用いて，61 名の被験者で実験を行った分析結果について考察をした。 共同執筆者:納谷嘉信，辻本明江，池田潤平，工藤英男，山崎勝弘 担当部分:実験の実施と分析 pp18～19
2．ジョブ制御マクロを用いたバッチ処理用エディタ	共著	昭和 49 年 7 月	電子通信学会,昭和 49 年度全国大会講演論文集 1734（北海道大学）	カード入力バッチ処理形態の計算サービスにおいて，利用しやすさとそれに伴うターンアラウンドタイムの短縮化について考察し，そのツールを作成した。 共同執筆者:虎谷英生，的場裕司，吉岡信夫，工藤英男 担当部分:ツールの構想 全 1 ページ（p1758）
3．使用済パンチ・カードの再利用	単著	昭和 50 年 3 月	電子通信学会,昭和 50 年度全国大会講演論文集 1307	紙不足の煽りを受けて，パンチカードが不足している事態を打開するために，使用済みパンチカードの再利用の方法を考察し，そのツールを作成して運用した成果について考察した。全 1 ページ（p1326）
4．大阪大学基礎工学部情報工学科教育用電子計算機のシステム評価	単著	昭和 51 年 1 月	情報処理学会関西支部ソフトウェア研究会（大阪市）	過去 3 年間の運用及び利用統計資料に基づき，学生実験，演習及び卒業研究等に利用された情報工学科の教育用電子計算機のシステム評価を分析した。 全 10 ページ(pp1-10)
5．我が国の大学における教育用電子計算機の現状について	共著	昭和 54 年 3 月	情報処理学会,第 19 回全国大会講演論文集 5H-1（東京）	大学における教育用電子計算機の利用実態を把握する目的で昭和 52 年度に256 大学に対してアンケート調査を行った分析結果について考察し，今後の情報処理に対する展望を述べた。 共同執筆者:的場裕司,工藤英男 担当部分:アンケート調査の実施と分析 pp685～686
6．プログラミング教育用擬似計算機システムについて	共著	昭和 55 年 3 月	情報処理学会,第 20 回全国大会講演論文集 4H-2	多人数の初心者教育に適した内部表現が 10 進数の教育用擬似計算機システムをFACOM230-45S を用いて構築したので，その概要を示した。 共同執筆者:的場裕司,工藤英男,吉岡信夫,高田司郎 担当部分:擬似計算機システムの構築 pp917～918
7．グラフィック・ディスプレイを用いた学生実験に関する統計データ	共著	昭和 56 年 3 月	情報処理学会,第 21 回全国大会講演論文集 3L-7	情報工学科では教育用電子計算機（FACOM230-45S）を情報工学実験に利用している。数あるテーマの中でも，ユニークな実験として学生に人気のある「図形処理」である。この実験ではグラフィック・ディスプレイを用いて行った。昭和 48 年度以来の実験における統計データを中心に分析した結果を公表した。 共同執筆者:工藤英男,的場裕司 担当部分:統計データの分析 pp1217～1218

8. 端末を用いたソフトウェア教育用ツール	共著	昭和 58 年 3 月	情報処理学会,第 26 回全国大会講演論文集 7M-5	大阪大学にも昭和 57 年度より情報処理教育センターが利用できるようになった。そこで,端末を用いたソフトウェア教育用ツールを MELCOM COSMO 900 Ⅱを用いて構築したので,その概要を発表した。 共同執筆者:工藤英男,松浦敏雄,森畑豊,的場裕司,吉岡信夫 担当部分:ソフトウェア教育用ツールの構築 pp1513-1514
9. 情報処理教育センターにおける初心者向け PASCAL 演習とエラー分析	共著	昭和 59 年 3 月	情報処理学会,第 28 回全国大会講演論文集 6Q-3	昭和 58 年に情報処理教育センターでの PASCAL 言語を用いた演習におけるコンパイル時のエラー分析について述べた。 共同執筆者:工藤英男,谷口健一,下條真司,松本壽一 担当部分:データの収集と分析 pp1601～1602
10. 初心者の PASCAL プログラミングにおけるエラー履歴について	共著	昭和 59 年 3 月	情報処理学会,第 29 回全国大会講演論文集 5L-3	昭和 59 年に情報処理教育センターでの PASCAL 言語を用いた演習における翻訳時及び実行時のエラー分析とプログラム完成までのエラー履歴の分析を行い考察した。 共同執筆者:工藤英男,東野輝夫,谷口健一,下條真司 担当部分:データの収集と分析 pp1797～1798
11. プログラム設計過程の定量化に関する一考察	共著	昭和 61 年 3 月	情報処理学会,第 32 回全国大会講演論文集 5J-2	プログラムを完成させるまでの作成過程の工数と最終ソースコードの評価の関係について分析し,問題を説明した後の 1 時間内でできた初期設計のでき具合と最終ソースコードから定量的に解析した。 共同執筆者:工藤英男,杉山裕二,鳥居宏次 担当部分:実験の構想と論文の構成 pp765～766
12. プログラム設計過程の定量化に関する一考察(その 2) -複合設計法の採用による効果-	共著	昭和 61 年 3 月	情報処理学会,第 33 回全国大会講演論文集 7E-3	プログラミングにおける設計作業の内容を実験により定量的に見直し,同一の課題を自己流で行った場合と設計手法を用いて行った場合の比較により明らかにしたい。そこで,複合設計法を用いた事例で定量的に解析した。 共同執筆者:工藤英男,野村研仁,杉山裕二,鳥居宏次 担当部分:実験の構想と論文の構成 pp571～572
13. プログラム作成能力の評価尺度とデータ収集ツール	共著	昭和 61 年 9 月	情報処理学会研究会報告,86-SW-50, Vol.86,No.62	ソフトウェアの生産性や品質の評価において,ソフトウェアの生産に直接かかわるプログラマの能力は考慮すべき重要な要素の一つである。しかも,プログラマの能力の定量的評価は,非常に困難であり,これまであまり試みられていなかった。そこで,「プログラム作成能力」をプログラマの能力と考え,それを定量的に評価する尺度(評価式)を提案し,この評価式を用いて,コンパイラの作成を行った学生のプログラム作成能力を求めた結果について示した。 共同執筆者:松本健一,大西 諭,井上克郎,工藤英男,杉山裕二,鳥居宏次

				担当部分:実験の構想 pp1～8
14. LAN を採用した情報処理教育用計算機システム	共著	昭和 62 年 6 月	情報処理学会「教育におけるコンピュータ利用の新しい方法」シンポジウム論文集（東京）	理工系学生のみでなく文科系学生に対する情報処理教育のための計算機システムとして，どのような環境を整えることが望ましいかについて考察した。さらに，当センターで導入した日本アイ・ビー・エムの IBM3090 システムとマルチステーション IBM5550 シリーズを中心とした情報処理教育支援環境の概要について発表した。 共同執筆者:工藤英男,東野輝夫,奈良真彦,荒木俊郎,大澤 豊,奥田公雄,豊泉謙一 担当部分:システムの構想 pp151～159
15. ソフトウェア信頼性モデルの比較とプログラム作成能力の評価基準について	共著	昭和 62 年 9 月	電子通信学会,昭和 61 年度総合全国大会講演論文集-1709	簡単なコンパイラを作成する学生実験からデータを集め，それをもとに，いくつかの信頼性モデルの比較検討を行った。また，プログラマの能力について 1 つの尺度を示し，検討を行った。 共同執筆者:松本健一,小田利彦,大西諭,工藤英男,杉山裕二,鳥居宏次 担当部分:実験の構想と論文の構成 pp7～41
16. プログラム設計過程の定量化に関する一考察(その 3)	共著	昭和 62 年 3 月	情報処理学会,第 34 回全国大会講演論文集 6T-3	プログラム作成過程を詳細設計(設計者)とそのコーディング(コーダ)とに作業工程を分割し，2 人の学生が担当する形で実験を行い，まず全員が設計者として各人の考えにより設計書を作成し，次にその設計書を別の学生に配布し，全員がコーダとして他人の設計書に基づきそのプログラムを完成させる手順を踏んだ。本稿では，実験の概要と得られた結果の一部について発表した。 共同執筆者:工藤英男,杉山裕二,鳥居宏次 担当部分:実験の構想と実施及びデータ分析 pp1159～1160
17. 実験に基づくプログラム設計過程の定量化の試み	共著	昭和 63 年 2 月	情報処理学会研究会報告,88-SW-58, Vol.88,No.7	本稿の目的は，ソフトウェアの設計過程を計量することにより，ソフトウェアの設計において何が重要な要因であるかを検証することである。ソフトウェアの設計過程とは，インプリメンテーションに先立つ仕様記述からコーディングにわたるソフトウェア開発の一連の段階を意味する。学生の被験者を用いた 2 つの実験を通して，仕様記述の質とプログラム作成者の努力が重要な要因であることを確認した。 共同執筆者:工藤英男,杉山裕二,藤井護,鳥居宏次 担当部分:実験の構想と実施及びデータ分析 pp81～88
18. 大阪大学情報処理教	共著	昭和 63 年 12	88ＶＭ教育システムワークショップ講演資料（別府温泉）	昭和 62 年 2 月に日本アイ・ビー・エムの IBM3090 システムとマルチステーション IBM5550 シリーズからなる計算機システムを導入した。このシステムの概要ならびに情報処理教育を円滑に行うために

育センターの現状－ＳＣＲＡＭＢＬＥの紹介－		月		開発した授業支援システム(SCRAMBLE:System on Class Room Assistance and Management Basis for Lectures)を紹介し，現状について示した。 共同執筆者:工藤英男,増澤利光,萩原兼一,大澤 豊 担当部分:システムの基本構想と運用管理 pp5～17
19. 利用者から見た授業支援システム SCRAMBLE	単著	平成元年 9 月	‘89ＶM教育システムワークショップ講演予稿集, VM WS89-01（六甲ホテル）	大阪大学情報処理教育センターの授業支援システムSCRAMBLE (System on Class Room Assistance and Management Basis for Lectures)を 2 年半の運用体験をもとに，利用者である授業担当教官はじめ学生の声を取り入れ，利用者の視点から見たSCRAMBLEについて考察した。 pp1～11
20. 多人数情報処理教育における授業支援システム	共著	平成元年 11 月	文部省平成元年度情報処理教育研究集会報告（東北大学）	大阪大学情報処理教育センターにおける少数の人員で情報処理教育の支援を実現した計算機環境である授業支援システム SCRAMBLE の 3 年の運用体験をもとに，情報処理教育の望ましい計算機環境について考察した。 共同執筆者:工藤英男,西尾章治郎 担当部分:システムの基本構想と運用管理 pp172～176
21. 高専におけるソフトウェア工学演習の試み	単著	平成 2 年 10 月	電気 4 学会, 関西支部連合大会講演論文集 S8-8（摂南大学）	本稿では，高専学生を対象として，筆者が担当しているソフトウェア工学の講義について，高品質ソフトウェア開発の試みについて述べた。 ppS22
22. 敬語学習システムの開発	共著	平成 2 年 11 月	教育工学関連学協会連合第 3 回全国大会講演論文集	本稿では，明石高専の平成 2 年度に 1・3 年生を対象にして「敬語表現力の調査」と「意識調査」を実施した結果の概要について述べた。次にその現状認識の上に「説明機能を持つパソコン支援の敬語学習システム」の構想について述べた。 共同執筆者:住本勝之,工藤英男,濱野正美,松永公廣 担当部分:システムの構想 pp343～344
23. メロディーを楽しもう	共著	平成 4 年 2 月	第 4 回屋台シンポジウム要旨集－学校教育におけるパソコン利用－（滋賀）	小中学校での音楽教育は，情操教育に重要であり本質的には画一性を望まない教科であるため，教育場面によってはコンピュータの積極的な個別教育が期待される。そこで，メロディー進行に合わせて和音をつけ演奏する機能を備えたパソコンベースの和音生成・演奏システムを構築したので，その機能について示した。 共同執筆者:工藤英男,吉川博史,東野勝治,松永公廣 担当部分:システムの構想 pp1～2
24. 教育現場で使う知識ベース型メロディーコンピュータの構成	共著	平成 4 年 3 月	兵庫県教育工学研究会研究大会論文集平成 3 年度（神戸）	メロディー進行に合わせて和音をつける知識の一部を知識ベースとして実現し，その知識を用いて適切な和音を推論し，推論過程も学習者の要求によって表示し，最後にメロディーと和音を一緒に演奏する機能を備えたパソコンベ

				ースの和音生成・演奏システムを構築し，その機能について発表した。 共同執筆者:松永公廣,吉川博史,工藤英男 担当部分:システムの構想　pp93～96
25. 情報処理教育における授業支援システムの運用と問題点	単著	平成 4 年 9 月	CAI 学会関西支部 EDBS 研究会研究発表資料（大阪大学）	情報処理教育における計算機環境の変遷について概要を述べ，多人数授業を対象とした授業支援システム SCRAMBLE での運用体験を含めて問題点について述べた。 pp1-8
26. 分散環境におけるハイパーテキスト CAI システムの基本設計	共著	平成 4 年 10 月	CAI 学会研究報告, Vol.92,No.4（神戸大学）	従来の CAI システムをネットワーク対応マルチユーザ化し，既に開発した教育支援通信システムAscent の機能を組み込み，個人学習だけでなくグループ学習へ対応した機能を盛り込んだ分散環境における CAI システムの基本設計について述べた。 共同執筆者:山井成良,工藤英男,下條真司,久保 登 担当部分:システム基本設計の部分 pp21～24
27. 分散型ハイパーテキストを用いた教育支援システムの設計	共著	平成 4 年 12 月	文部省平成 4 年度情報処理教育研究集会講演論文集（北海道大学）	複数のワークステーションをネットワークで接続した分散環境における教育支援用ハイパーテキストシステムの機能について述べた。 共同執筆者:山井成良,工藤英男,鈴木忠二,下條真司 担当部分:システム基本機能の部分 pp255～258
28. C言語におけるプログラミングスタイルに関する一考察	共著	平成 5 年 3 月	電子情報通信学会春季大会講演論文集分冊 6, D-77	プログラムの書き方に「プログラム書法」があるが，FORTRAN,PL/I を対象に書かれており，現在の主流であるC言語に対応していない。そこで，本稿では，「プログラム書法」の分析とC言語における書法で考慮すべき点について考察した。 共同執筆者:松村崇史,工藤英男 担当部分:書法における規則分類の部分 pp76-77
29. ソフトウェア設計教育の支援システムの構想	共著	平成 5 年 10 月	情報処理学会,第 47 回全国大会講演論文集 (1)5U-8（東京）	複数の設計法を学生が主体的に学習できる CAI システムの構築に関して，そのシステムの基本設計について述べた。 共同執筆者:工藤英男,多喜正城 担当部分:システム基本設計の部分 pp53～54
30. プログラム理解を助けるプログラミングスタイル	共著	平成 5 年 10 月	情報処理学会,第 47 回全国大会講演論文集 (5)7J-5（東京）	保守作業におけるプログラム理解を助けるプログラミングスタイルについて提案した。 共同執筆者:松村崇史,工藤英男 担当部分:理解容易性の関連の部分 pp283～284
31. ソフトウェア設計教育の支援システムの基本設計	共著	平成 5 年 10 月	CAI 学会研究報告, Vol.93,No.4（神戸大学）	ソフトウェア設計の部分における教育支援のための CAI システムについて，基本設計の構想を述べた。 共同執筆者:工藤英男,多喜正城,吉川博史 担当部分:システム基本設計の部分 pp11～14
			第 14 回ソフトウェア信頼性シンポジウム論文	機器組み込み型マイクロプロセッサ用ソフトウェアを対象とした生産性尺度のモ

32. 組み込み型ソフトウェアの生産性データに関する一考察	共著	平成 5 年 11 月	集（大阪・千里中央）	デル式作成のアンケート調査を基に，見積り工数誤差に関する分析，開発効率を用いた分析について考察した。 共同執筆者:工藤英男,和田喜久男,松本健一,鳥居宏次 担当部分:データ解析の部分 pp94～99
33. 分散型ハイパーテキストを用いた教育支援システムの開発	共著	平成 5 年 12 月	文部省平成 5 年度情報処理教育研究集会講演論文集（名古屋大学）	複数のワークステーションをネットワークで接続した分散環境におけるハイパーテキストを用いた教育支援システムの開発状況について述べた。 共同執筆者:山井成良,工藤英男,鈴木忠二,中西義郎,下條真司 担当部分:システム基本設計の部分 pp309～312
34. ソフトウェア設計教育の支援システムの設計	共著	平成 5 年 12 月	文部省平成 5 年度情報処理教育研究集会講演論文集（名古屋大学）	Macintosh 上の HyperCard を用いて，複数の設計法を学習および演習ができる CAI システムの基本設計について述べた。 共同執筆者:工藤英男,多喜正城,冨島磨由美,的場裕司 担当部分:システム基本設計の部分 pp321～324
35. ソフトウェア設計教育の支援システムにおける教材の構成	共著	平成 6 年 9 月	情報処理学会，第 49 回全国大会講演論文集 (1)5Q-4	複数のソフトウェア設計法の学習を支援するシステムの構築を進めている。本稿では分析および設計手法における教材の構成について述べた。 共同執筆者:工藤英男,多喜正城,吉川博史 担当:教材の構成 pp71～72
36. ソフトウェア設計教育の支援システムの試作	共著	平成 6 年 12 月	文部省平成 6 年度情報処理教育研究集会講演論文集（九州大学）	学習者が自由に学習や簡単な演習ができる仕組みを取り入れ，初心者が分析設計法の学習を支援するツールを Macintosh 上の HyperCard を用いて試作したので公表した。 共同執筆者:工藤英男,多喜正城,的場裕司 担当部分:システムの関連の部分 pp539～542
37. 異なる設計手法の統合学習支援システムの設計	共著	平成 7 年 1 月	CAI 学会研究報告，Vol.94,No.5（中京大学）	本稿では，異なる種類のソフトウェア設計手法を学ぶためのシステムについて述べた。システムの主なツールは，SA や OMT 等のよく知られたソフトウェア設計手法で用いる DFD，STD，ERD が作成できるドキュメントエディタに，ドキュメント管理，教材ビューア，教材エディタ，学習プロセス管理，学習プロセスモニタ，学習プロセス解析の６つの機能を統合したものである。 共同執筆者:工藤英男,城間順一,松本健一,鳥居宏次 担当部分:システムの構想と各機能の構成 pp9～14
38. 異なる設計手法の統合学習支援システムの構築	共著	平成 7 年 3 月	情報処理学会，第 50 回全国大会講演論文集 (5)7K-2（東京）	各種のソフトウェア設計手法が提案されているが，1 つの設計手法では全ての種類のソフトウェアを記述することが困難であるため，異なった種類の設計手法を学ぶ必要がある。そこで，異なる設計手法を，同一のユーザーインターフェースで学ぶ学習支援システムを設計した。本稿では，このシステムにおける学

				習プロセス解析について述べた。 共同執筆者:城間順一,工藤英男 担当部分:システムの構想と各機能の構成 pp207～208
39. 高専入学生のコンピュータに対する意識調査	共著	平成 7 年 8 月	教育システム情報学会,第 20 回全国大会（大阪電気通信学）	高専の情報工学科での情報処理教育を進めるに当たって，入学時における学生のコンピュータに関する意識の把握を目的としてアンケート調査を 4 年間行ってきた。そこで，その分析の結果について発表した。 共同執筆者:工藤英男,下村満子,多喜正城 担当部分:アンケート調査と分析 pp145～146
40. マルチメディアを利用したスポーツコーチングシステムの研究	共著	平成 7 年 8 月	教育システム情報学会,第 20 回全国大会（大阪電気通信大学）	効率の良いデータ収集と解析を行うための電子スコアブックの開発を行い，それをもとに映像と音声を用いて競技者を的確に指導を行うマルチメディアを利用したスポーツコーチングシステムの研究開発を行っている。本稿では，電子スコアブックのプロトタイプについて述べた。 共同執筆者:多喜正城,工藤英男,金堀進 担当部分:システム基本設計の部分 pp185～186
41. 情報処理における高専生の意識調査(1)―低学年にみられる意識と成績の関係―	共著	平成 7 年 12 月	文部省平成 7 年度情報処理教育研究集会講演論文集（大阪大学）	高専生の入学時におけるコンピュータに関する意識の把握を目的として，アンケート調査を行ってきた。本稿では，アンケート調査における意識と情報処理に関する成績との関係について分析した結果を述べた。 共同執筆者:工藤英男,下村満子 担当部分:アンケート調査と分析 pp351～354
42. 情報処理における高専生の意識調査(2)―コンピュータ不安尺度を用いた情緒的側面の検討―	共著	平成 7 年 12 月	文部省平成 7 年度情報処理教育研究集会講演論文集（大阪大学）	本研究では，1 年生から 5 年生までを対象にして縦断的に調査するとともに，前年度の調査結果と比較することによって，コンピュータに対する学生の意識や態度の変化について分析した。 共同執筆者:下村満子,工藤英男 担当部分:アンケートの分析 pp355～358
43. WWW による OMT 法の学習支援ツールの開発	共著	平成 8 年 3 月	電子情報通信学会 1996 年総合大会講演論文集 情報・システム 1,D-704（東京）	設計手法の一つである OMT 法について，初学者にも理解しやすい学習支援ツールの開発を試みた。誰にでも利用ができ，多くの利用者の意見が取り入れやすい WWW ページの作成について提案した。 共同執筆者:大西　仁,工藤英男 担当部分:ツールの構想と論文の構成 p263
44. 新入生のコンピュータに対する意識調査(2)―高専生と短大生との比較―	共著	平成 8 年 6 月	教育システム情報学会,第 21 回全国大会　（金沢学院大学）	高専の情報工学科及び短大の経営情報科での情報処理教育を進めるに当たって，入学時における学生のコンピュータに関する意識の把握を目的として，アンケート調査を行ってきた。本稿では，アンケート調査を分析した結果について述べた。 共同執筆者:工藤英男，下村満子，吉川博史

				担当部分:アンケート調査と分析 pp15～16
45. 実習課題回収システムを利用したプログラミング学習の実践	共著	平成 8 年 11 月	教育システム情報学会,研究報告, Vol.96,No.3	企業ではペーパレスが浸透し，情報を資源として扱うようになってきている。筆者らは，汎用計算機上で学習者が実習課題の提出をペーパレスで行える実習課題回収システムを開発した。それを利用したプログラミング学習の実践についての成果を発表した。 共同執筆者:吉川博史，前川 武，工藤英男，石桁正士 担当部分:システムの構想と論文の構成 pp15～16
46. 情報処理における高専生の意識調査(3)―高専 4 年生と短大 1 年生との比較―	共著	平成 8 年 12 月	文部省平成 8 年度情報処理教育研究集会講演論文集 （名古屋工業大学）	高専の情報工学科での情報処理教育を進めるに当たって，入学時における学生のコンピュータに関する意識の把握を目的として，アンケート調査を行ってきた。本稿では，高専 4 年生と短大 1 年生を対象に，性別を加味した意識の違いを分析した結果について述べた。 共同執筆者:工藤英男，吉川博史 担当部分:アンケート調査と分析 pp256～259
47. 情報工学科新実習システムの構成とその運用	共著	平成 9 年 8 月	平成 9 年度高専情報処理教育研究発表会講演論文集	平成 8 年度の予算で，情報工学科実習室システムの更新が行われた。このシステムは IBMPC 互換機から構成され，OS として Windows95 と FreeBSD が利用可能である。ネットワークはプライベートLANで構築されているが，防火壁を通したインターネットへのアクセスも可能である。本稿では，新情報処理システムの紹介と現在までのトラブル事例をまとめて議論した。 共同執筆者:武藤武士，工藤英男 担当部分:システムの構想 pp198～201
48. 情報工学科の新情報処理システムについて	共著	平成 9 年 10 月	文部省平成 9 年度情報処理教育研究集会講演論文集（室蘭工業大学）	平成 8 年度の予算で，情報工学科実習室システムの更新が行われた。このシステムはハードウェアとして IBMPC 互換機から構成され，基本ソフトウェアとして Windows95 と FreeBSD が利用可能である。ネットワークはプライベートLAN で構築されているが，防火壁を通したインターネットへのアクセスも可能である。本稿では，新システムの現在までのトラブル事例をまとめ，今後のシステム利用について述べた。 共同執筆者:武藤武士，工藤英男 担当部分:システムの構想 pp447～450
49 デバッグ作業者の思考を定期的なインタビューと視点の移動により追跡する実験	共著	平成 10 年 3 月	情報処理学会,第 56 回全国大会講演論文集(1)（東京）	実験では，各モジュール間のデッバグ作業者の視点の移動の分析を試みた。プログラムを読んでいく戦略は，バグ位置の推定結果に影響を与えると予想される。実験の結果は，バグのあるモジュールについては，初心者も熟練者もバグがありそうだと判断していることが分かった。ただし，バグがありそうだと判断するモジュールの個数に違いがあった。また，熟練者は，最初はプログラムを対極的に見るが，次第に局所的に見ていく

				ことが観測された。 共同執筆者:内田真司, 工藤英男, 門田暁人 担当部分:実験の構想と論文の構成 pp203～204
50. インターネットにおける情報倫理に関する意識調査(1)―高専生と短大生との比較―	共著	平成 10 年 8 月	教育システム情報学会第 23 回全国大会論文集（南山大学）	高専の情報工学科および短大の経営情報学科での情報処理教育を進めるに当たって, 学生のインターネットと情報倫理に関するアンケート(情報倫理教育研究グループ)を実施した。本稿では, 高専と短大に入学して1年経過した学生と高専の 4 年生を対象に比較分析した結果について考察した。 共同執筆者:工藤英男, 吉川博史, 安留誠吾 担当部分:アンケート調査と分析 pp277～280
51. 高専におけるインターネット活用と情報倫理教育	共著	平成 10 年 9 月	電子情報通信学会技術研究報告, Vol.98,No.259,ET98-55 （大阪電気通信大学）	高等専門学校では, 低学年の情報リテラシー教育で, コンピュータ操作, インターネット活用, 情報技術の応用など教えている。それゆえ, 高等専門学校の学生は, 高等専門学校の情報処理設備からインターネットを自由に利用できる。しかしながら, インターネットの情報倫理に関する題点もいくつか話題となっている。本稿では, 高等専門学校の学生に実施した情報倫理教育の実践例や学生の意識について考察した。 共同執筆者:工藤英男, 高橋参吉, 渡邊耕平 担当部分:アンケート調査と分析 pp7～14
52. インターネットにおける情報倫理に関する意識調査(2)―高専生と短大生及び大学生との比較―	共著	平成 10 年 10 月	文部省平成 10 年度情報処理教育研究集会講演論文集（九州工業大学）	高専の情報工学科, 短大および大学の経営情報学科での情報処理教育を進めるに当たって, 学生のインターネットと情報倫理に関するアンケートを実施した結果について報告した。なお, アンケートの設問は, 情報倫理教育研究グループにおいて作成されたものを利用させて頂いた。 共同執筆者:工藤英男, 安留誠吾, 寺本光雄, 吉川博史 担当部分:アンケート調査と分析 pp389～392
53. 定期的なインタビューを取り入れたデバッグプロセス実験の考察	共著	平成 10 年 11 月	電子情報通信学会技術研究報告, Vol.98,No.388, KBSE98-29（東京）	本研究は, 実験により熟練者のデバッグ戦略を明らかにすることを目的とする。実験では, デッバグ中の作業者に対して定期的にインタビューを行うことにより, 作業者がプログラム中のどの辺にバグがありそうだと考えているかを追跡した。また, 作業者が参照したモジュールの履歴を記録し分析した。その結果, デバッグの初心者と熟練者では, バグがあると推定するモジュールおよび個々のモジュールの参照時間に違いがあることが分かった。 共同執筆者:内田真司, 工藤英男, 門田暁人

				担当部分:実験の構想と論文の構成 pp9～15
54. ネットワーク市民と情報倫理の課題	共著	平成10年11月	情報処理学会研究報告, 98-CE-50,Vol.98, No.102（関西学院大学）	一部の専門家だけがコンピュータネットワークを利用した情報処理の恩恵を受けていた時代から，一般の市民までが同様の情報ネットワーク活用を行う時代に変化してきた。旧来の情報メディアを前提に構築されていた様々な社会ルール（憲法，条約など）では適切な処理ができ難い問題が山積している。ネットワーク市民の活動を促進する社会を支えるという意味での「情報倫理の課題」について述べた。 共同執筆者:江澤義典，安藤倬二，中條道雄，臼井義美，赤松辰彦，工藤英男 担当部分:情報倫理の啓蒙 pp109～115
55. 情報倫理教育を支援する社会的環境に関する考察	共著	平成11年7月	情報処理学会, 情報教育シンポジウム論文集，Vol.99,No.10（信州大学）	情報倫理教育の重要性は近年ますます広く認識されるようになってきている。今後の健全な情報化社会の構築のためには，情報倫理教育が学校にのみ任されるのではなく，家庭・地域社会における幅広い支援を提供する社会的インフラが構築され，有効に運用されることが重要となろう。この分野における先進国であるアメリカにおける最近の展開をも参考にし，我が国独自の社会的環境が整備されることが期待されることについて紹介した。 共同執筆者:江澤義典，安藤倬二，中條道雄，臼井義美，赤松辰彦，工藤英男 担当部分:情報倫理の啓蒙 pp175～191
56. インターネットにおける情報倫理に関する意識調査(3)-高専生と大学生における意識変化-	共著	平成11年8月	教育システム情報学会第24回全国大会論文集（園田学園女子大学）	高専の情報工学科4年生と同年齢の大学1年生における時間的経過による昨年と今年との比較と視覚教材を用いた前後においての意識変化について，情報倫理に関するアンケートを実施した結果について報告した。なお，アンケートの設問は，情報倫理教育研究グループにおいて作成されたものを利用させて頂いた。 共同執筆者:工藤英男，武村泰宏，吉川博史 担当部分:アンケート調査と分析 pp153～154
57. 学内LANを用いたプログラミング学習支援システムの構築とその評価	共著	平成11年8月	教育システム情報学会第24回全国大会論文集（園田学園女子大学）	コンピュータリテラシーのために，平成10年度より学内LANと学生全員が持っているノートパソコンを用いたプログラミング教育が開始した。特に，COBOL言語学習支援について，学習環境と実践及び評価について紹介した。 共同執筆者:吉川博史，寺本光雄，安留誠吾，工藤英男，前川　武 担当部分:システムの構想と論文の構成 pp137～138

58. 保守工程におけるバグ特定プロセスの分析	共著	平成 11 年 9 月	日本ソフトウェア科学会第 16 回大会論文集（和歌山大学）	本論文では，デバッグ作業者のバグ特定プロセスのモデルを提案する。このモデルは，プログラムを構成するモジュールを，その中にバグが存在するとデバッグ作業者が仮定するか否かで 3 つの集合に分類し，集合間でのモジュールの移動によってバグ特定プロセスが表現できる。5 名の被験者による実験により，このモデルに基づくデバッグ能力とデバッグ戦略の分析を行った。その結果，バグ特定プロセスの共通点や作業者によるデバッグ戦略の違いをモデル上で確認することができた。 共同執筆者:内田真司，工藤英男，門田暁人，松本健一，井上克郎 担当部分:実験の構想と論文の構成 pp185～188
59. 情報処理教育における学習者の意識調査	共著	平成 11 年 11 月	文部省平成 11 年度情報処理教育研究集会講演論文集（東北大学）	インターネットと情報倫理に関することを中心としたアンケート調査を行い，情報処理教育における学習者の意識調査をした。アンケート調査は，短期大学（語学系学科），高専(情報系学科)および大学(経営系学科)で行った。調査結果から，インターネットと情報倫理に関する学生の意識の差異について分析した。また，教育分野の違いによる調査結果と，そのカリキュラム等との関連についても考察した。 共同執筆者:武村泰宏,新井基祐,工藤英男 担当部分:調査の実施と分析 pp213～216
60. インターネットにおける情報倫理に関する意識調査(4) -高専生における学科間での相違-	共著	平成 12 年 12 月	文部省平成 12 年度情報処理教育研究集会講演論文集（京都大学）	高専での情報処理教育を進めるに当たり学生の意識調査として，インターネットと情報倫理に関するアンケートを奈良高専での専門の異なる 5 学科(物質化学，機械，電気，電子制御，情報)の 1 年で実施した。その結果の概要について報告した。 共同執筆者:工藤英男，武村泰宏，吉川博史 担当部分:調査の実施と分析 pp531～534
61. インターネットにおける情報倫理に関する意識調査(5)-高専間での相違-	共著	平成 13 年 8 月	教育システム情報学会第 26 回全国大会論文集（大阪大学）	情報倫理教育研究グループ編著の「インターネットの光と影」の練習問題を複数の工業高等専門学校や短期大学および大学で実施した。本稿では 2 つの高専について比較検討をする。また，従来のインターネットと情報倫理に関するアンケートを併用したので，インターネットの知識と倫理意識との関係についても考察した。 共同執筆者:内田眞司，工藤英男 担当部分:調査の実施と分析 pp151～152
62.インターネットにおける知識と倫理意識の関係	共著	平成 13 年 8 月	教育システム情報学会第 26 回全国大会論文集（大阪大学）	情報倫理教育研究グループ編著の「インターネットの光と影」の練習問題を複数の工業高等専門学校や短期大学および大学で実施した結果について比較検討をする。また，従来のインターネットと情報倫理に関するアンケートを併用したので，インターネットの知識と倫理意識との関係についても考察した。

				共同執筆者:武村泰宏, 内田眞司, 工藤英男 担当部分:調査の実施と分析 pp155～156
63.運動療法について学ぶシステムの開発（1）	共著	平成 13 年 8 月	教育システム情報学会第 26 回全国大会論文集（大阪大学）	本システムは, 運動療法を直接担当するトレーナーに対して, 運動療法の専門的かつ体系的な知識や手法を獲得させることを目的に設計した。トレーナーのみならず, 在宅にて患者自身で運動療法を行っている人々も学習者の対象としている。 共同執筆者:福田真規夫, 吉川博史, 工藤英男, 安留誠吾 担当部分:システムの構想 pp267～268
64.インターネットにおける情報倫理に関する意識調査(6)―練習問題による教育前の学校間での相違―	共著	平成 13 年 10 月	文部省平成 13 年度情報処理教育研究集会講演論文集（和歌山大学）	高等教育機関でのコンピュータリテラシーを進めるに当たり学生の意識調査として, 情報倫理教育研究グループ編著の「インターネットの光と影」の練習問題を複数の工業高等専門学校や短期大学および大学で実施した。その結果について, 大阪府立高専で情報倫理教育を行う前と行った後での報告をもとに比較検討した概要を示した。 共同執筆者:工藤英男, 内田眞司, 武村泰宏, 吉川博史 担当部分:調査の実施と分析 pp135～138
65.高等専門学校の特色を活かした情報基礎教育―普通教科「情報」から大学一般情報教育までを視野に入れた総合的取り組み―	共著	平成 14 年 10 月	文部科学省平成 14 年度情報処理教育研究集会講演論文集（東京大学）	全国高等専門学校の横断的な組織としての“情報基礎教育の標準化に関する調査研究部会”を立ち上げて、入学直後から学科によらず実施すべき情報教育である「情報基礎教育」の検討を行ってきた。これまでの情報関連教育の蓄積を活かしながら、普通教科「情報」と同等以上の教育が行えるよう検討を進めている。取り上げるべき項目を検討し、これに基づいた教科書作り、さらには情報教育を支えるための環境整備などを行っている。これら一連の総合的な取り組みの概要を報告した。 共同執筆者:長岡, 高橋, 工藤, 藤原, 高橋, 岡田 担当部分:取り上げるべき項目を検討 pp.83-85
66.情報通信環境を考慮した情報倫理に関する意識調査	共著	平成 15 年 10 月	文部科学省平成 15 年度情報処理教育研究集会講演論文集（北海道大学）	本稿では、短期大学と高等専門学校の情報倫理に関するアンケートと練習問題の調査結果を比較した。さらに情報通信環境と情報倫理に関する項目との相関から、情報通信環境に影響される情報倫理に関する意識・知識を導出し、情報通信環境と情報倫理の関連を考察した。共同執筆者:武村泰宏, 内田眞司, 工藤英男 担当部分:調査の実施と分析 pp.631-634
67.大阪成蹊学園情報教育ネットワークシステムの構築と現状	共著	平成 15 年 10 月	文部科学省平成 15 年度情報処理教育研究集会講演論文集（北海道大学）	大阪成蹊学園は創立 70 周年を迎えた。これを機に、本学円では、大阪成蹊大学とびわこ成蹊スポーツ大学を開学し、大阪府、京都府、滋賀県の3キャンパスに渡る情報教育ネットワークシステムを構築した。本発表では、今回構築し

				たシステムの特徴と運用開始後の問題点および今後の課題について報告した。 共同執筆者:井戸田博樹, 工藤英男 担当部分:全体構成 pp.345-348
68.インターネットにおける情報倫理に関する意識調査(7)	共著	平成 16 年 8 月	教育システム情報学会第 29 回全国大会論文集（香川大学）	情報処理教育を行う上では、学生の意識を把握し、授業計画に取り入れることが重要だと考えている。数年来、入学時におけるコンピュータに関する意識の把握を目的として、アンケート調査を行ってきた。本稿では、最近の社会情勢を考慮して、「にインターネットと情報倫理」に関する学生の意識を調査するために作成されたアンケートを利用して、専門の異なる高専と大学において、ほぼ同年代の学生を対象に比較分析した概要について報告した。 共同執筆者:内田眞司, 工藤英男, 吉川博史 担当部分:調査の実施と分析 pp.77 -78
69.情報通信環境を考慮した情報倫理に関する意識調査(2)	共著	平成 16 年 11 月	文部科学省平成 16 年度情報処理教育研究集会講演論文集（名古屋大学）	本稿では、大学と高等専門学校の情報倫理に関するアンケートの調査結果を比較した。さらに情報通信環境と情報倫理に関する項目との相関から、情報通信環境に影響される情報倫理に関する意識・知識を導出し、情報通信環境と情報倫理の関連を考察した。 共同執筆者:内田眞司, 工藤英男, 吉川博史 担当部分:調査の実施と分析 pp733～735
70.情報科教育法における一授業方法	共著	平成 18 年 8 月	教育システム情報学会第 31 回全国大会論文集（大阪経済大学）	情報科教育法では、情報教育について教育と学習の理論、指導方法を理解させる必要がある。しかしながら、学習者は、情報科に関する知識があまり豊富でなく、人に説明する機会や教える経験がないに等しいのが現状である。知識授業だけでなく、教材づくりや模擬授業を通して、自己評価、相互評価を活用し、限られた時間内で、学習者のスキルを向上させるために実践している一授業方法を紹介した。 共同執筆者:橋本はる美,佐野まゆ美, 工藤英男, 松永公広 担当部分:調査の計画と分析 pp111～112
71. 効率性評価手法の教育システムへの展開	共著	平成 19 年 3 月	日本知能情報ファジィ学会第 17 回ソフトサイエンス・ワークショップ	共同執筆者:植村芳樹, 工藤英男 担当部分:教育システムに関する部分
72. ネットにおける情報倫理に関する意識調査(8)	共著	平成 19 年 8 月	教育システム情報学会第 32 回全国大会論文集（信州大学）	大学での情報処理教育を進めるに当たり学生の意識調査として，インターネットと情報倫理に関するアンケートを複数の大学で実施している．今回は，３年前のデータとの比較し，意識がどのように変化しているかを分析した概要について報告した。 共同執筆者：工藤英男，吉川博史 担当部分：調査の実施と分析 pp. 198-199

73. ネットにおける情報倫理に関する意識調査(9)	共著	平成 20 年 9 月	教育システム情報学会第 33 回全国大会論文集（熊本大学）	大学での情報処理教育を進めるに当たり学生の意識調査として，インターネットと情報倫理に関するアンケートを複数の大学で実施している．今年度のデータについて，能力別クラスで，入学時と前期授業終了時とを比較し，学生の意識がどのように変化しているかを分析した概要について報告した。 共同執筆者：工藤英男，福永栄一，吉川博史 担当部分：調査の実施と分析 pp. 474-475
74. ネットにおける情報倫理に関する意識調査(10)	共著	平成 20 年 12 月	文部科学省平成 20 年度情報処理教育研究集会講演論文集（北九州）	大学での情報処理教育を進めるに当たり学生の意識調査として，インターネットと情報倫理に関するアンケートを複数の大学で実施している．本学の今年度のデータについて，能力別クラスで，入学時と前期授業終了時との比較し，学生の意識がどのように変化しているかを分析した概要について報告した。 共同執筆者：工藤英男，福永栄一，吉川博史 担当部分：調査の実施と分析 pp. 49-52
75. ネットにおける情報倫理に関する意識調査(11)	共著	平成 21 年 9 月	教育システム情報学会第 34 回全国大会論文集（名古屋大学）	大学での情報教育を進めるに当たり学生の意識調査として，インターネットと情報倫理に関するアンケートを複数の大学で実施してきた．昨年度，「情報倫理」の授業により学生の意識がどのように変化するかを分析するために，記名式で授業の 7 回目と 14 回目に同じアンケートを実施した．その結果を比較し，分析した概要について報告する． 共同執筆者：工藤英男，福永栄一，吉川博史 担当部分：調査の実施と分析 pp. 424-425
76.ネットにおける情報倫理に関する意識調査(12)	共著	平成 21 年 12 月	文部科学省平成 21 年度情報処理教育研究集会講演論文集（東北大学）	大学での情報処理教育を進めるに当たり学生の意識調査として，インターネットと情報倫理に関するアンケートを複数の大学で実施してきた．今回は，本学の学生について，今年度と昨年度の入学時を比較して，意識がどのように変化しているかを男女別に分析した概要について報告する． 共同執筆者：工藤英男，福永栄一 担当部分：調査の実施と分析 pp. 199-202

77.ネットにおける情報倫理に関する意識調査(13)	共著	平成 22 年 8 月	教育システム情報学会第 35 回全国大会論文集（北海道大学）	大学での情報教育を進めるに当たり学生の意識調査として，インターネットと情報倫理に関するアンケートを複数の大学で実施してきた．昨年度，情報倫理教育により学生の意識がどのように変化するかを分析するために，記名式で授業の 1 回目（欠席者は 2 回目）と 15 回目に同じアンケートを実施した．その結果を比較し，分析した概要について報告する． 共同執筆者：工藤英男，福永栄一，吉川博史 担当部分：調査の実施と分析 pp. 187-188
78. 可視化手法を用いた論文作成支援に関する一検討	共著	平成 23 年 8 月	第 7 回研究会、情報コミュニケーション学会（長崎大学情報メディア基盤センター）	論文を書くのには、論述の能力育成が必要である。だが、学校教育を通じて、論述能力を育成する教育は行われていないと考える。これらのことから、大学生のために、論述能力育成の何らかの支援が必要であると考える。そこで、論述の能力向上を支援する方法として可視化手法を用いた論文作成支援を検討した。 共同執筆者：中村州男、工藤英男 担当部分：論文の構成
79.小企業における人材育成を伴うソフトウェア開発手法	共著	平成 24 年 6 月	第 8 回研究会、情報コミュニケーション学会（長崎大学情報メディア基盤センター）	人材育成により情報システムの上流工程に経営者が参画して、コストと時間を削減し、短期間に部分的に単独で動作する小規模で情報システムを開発し、満足度の高い情報システムを漸進的に反復開発していく小企業におけるソフトウェア開発手法について論じた。 共同執筆者：中村州男、工藤英男 担当部分：論文の構成
80. 大学入学時における情報倫理関連知識の理解状況について	共著	平成 25 年 3 月	教育システム情報学会第 6 回研究会（山口大学）	スマートフォン等で日常的にインターネットにアクセスできる環境が既に整い，情報倫理教育の必要性がますます高まってきている。技術革新が早いＩＣＴ分野において，学生が激しい変化に追随できるように継続的に学習させる機会を設けることが重要である。著者らの授業では，情報倫理に関係する講義に加えて市販のｅラーニング教材を併用している。本稿では，この教材に付属している問題への正答率から把握できる理解状況の傾向について報告する。 共同執筆者：丹羽量久、工藤英男，藤井美知子 担当部分：調査の実施と分析

81. エゴグラムのためのＷｅｂシステムの構築と試用	共著	平成 26 年 3 月	第 11 回研究会、情報コミュニケーション学会（長崎大学）	学習者がＷｅｂシステムの構築を学習する課題の一つとして「エゴグラム」を用いたＷｅｂプログラムの学習システムを構築した。この「エゴグラム」は、学習者が「ありのままの自分を知る」手がかりとして、「交流分析(Transactional Analysis）」の一技法である。そこで、今回構築したシステムの概要とそのシステムを試用した結果について報告した。 共同執筆者：冨島磨由美、小高　恵、吉川博史、工藤英男 担当部分：論文の構成 pp.80-81
82. 感性を考慮した売場づくりに関する考察 - SD 法による売場のイメージ分析 -	共著	平成 26 年 9 月	第 14 回研究会、情報コミュニケーション学会（内田洋行九州支店）	売場づくりは、マーケティングの中のプロモーションの1つであり、同じ商品であっても、並べ方、テーマ性によって売上げは大きく変わる。本稿では、その売場について SD 法で印象評価を行った。実験データを因子分析したところ、「評価因子」、「活動因子」、「力量因子」の3つの因子が抽出された。それぞれを「第1印象」、「イベント性」、「本質・売場スキル」と解釈し、それぞれの売場を検討して買いたくなる売場づくりを提案する。 共同執筆者：小倉哲也、田中浩子、伴　みずほ、工藤英男 担当部分：論文の構成 pp.44-47
4. 学習者の自主的な学習をすすめる授業展開	共著	平成 29 年 11 月	第 23 回研究会、情報コミュニケーション学会（富士通株式会社北陸支社）	教員は、教科や学習者や教員の特性、社会の期待などの情報を総合的に分析し授業・学修コースを設計・実践する。授業では、「どうやって自主的に学習に取り込ませるか」を考えながら「定着させたい項目をどのように表現するか」「どのタイミングでどんなメッセージを送るか」を考えながら運用したが、実際は思い通りにいかないことが多かったと感じている。そうていしたようにいかなかった要因は、教員が授業学習コースの設計時に組み込めなかった場面に十分には対処できなかったためと考えている。そこで、本研究の目的は、2017 年度に実践している4つの事例と過去の実践事例から学生が自主的な学習をすすめるのに必要と考えられる授業支援システムのコースデザインと運用の知見と抽出し、デザインと運用に反映できるようにすることである。 共同執筆者：鴨谷真知子、工藤英男、松永公廣 担当部分：論文の構成 pp.13-16
（その他） 1. 教育支援機能の利用法	共著	昭和 59 年 11 月	大阪大学情報処理教育センター「広報」, 第 1 号	様々な学部で当センターを用いて情報処理教育に関する授業・演習が行われている。そこで, センター利用の先生方に, 当センターの計算機システムにおける教育支援機能の概要とセンターで作成した若干のコマンド・プロシージャについて説明した。 共同執筆者:工藤英男, 奈良真彦 担当部分:コマンド・プロシージャの作成とその説明

				pp79～86
2. 教養部の「情報処理演習」を担当してーアンケート調査から得た学生の声ー	単著	昭和 61 年 12 月	大阪大学情報処理教育センター「広報」, 第 3 号, ISSN 0911-5706	教養部の特別科目の中に, 情報処理教育センターを利用したコンピュータリテラシーのための「情報処理演習」があり, 昭和 56 年度から 3 年間の受講学生の声をアンケート調査から得て分析した結果を報告した。 pp26～33
3. 情報処理教育センターでの 7 年間を振り返って	単著	平成 2 年 8 月	大阪大学情報処理教育センター「広報」, 第 7 号, ISSN 0911-5706	昭和 58 年 7 月から 7 年間, 大阪大学の情報処理教育センターでのセンター運用はじめ計算機システムのリプレースや予算要求などについてまとめた。情報処理教育環境の充実のための出来事を 4 期に分けて総括を行った。第 1 期:センターの状況把握と体制の充実(MELCOM COSMO 900Ⅱ), 第 2 期:次期システムの準備と導入, 第 3 期:新システムでの運用(IBM3090 システムと IBM5550), 第 4 期:センター設備の充実と次期システムの準備開始。 pp99～125
4. インターネットにおける情報倫理	共著	平成 9 年 1 月	奈良工業高等専門学校, 電子計算機室広報, 第 17 号	本稿では, 肉体的ならび精神的に急成長する年代の学生を扱う高専でのインターネット利用における情報倫理の必要性について述べた。さらに, コンピュータネットワークにおけるリテラシーの研究を目的としている日本情報倫理協会(JANL)の活動と情倫マークについて紹介した。 共同執筆者:工藤英男, 下村満子 担当部分:情報倫理の啓蒙 pp16～17
5. 大学・高専におけるインターネット利用と情報倫理	単著	平成 11 年 3 月	豊橋技術科学大学 情報処理センター, レポート 1999, 第 11 号	大学・高専における情報処理教育・研究でのインターネットの利用状況についての概要と情報倫理に関する最近の話題について特別講演を行った報告記事である。 pp9～13
6. 研究会活動を振り返って	単著	平成 16 年 5 月	教育システム情報学会関西支部 20 周年記念誌「教育、研究、支部活動を振り返って」	教育システム情報学会関西支部における研究会活動を振り返って、初期のEDBS研究会ならびに「大学・高等教育機関研究会」を中心に過去の記録を報告した。 pp37～38
7. 情報処理教育とコンピュータにおける四方山話	単著	平成 18 年 11 月	「情報教育の課題と展望」情報教育学研究会（ＩＥＣ）例会 200 回記念論集、情報教育学研究会	情報教育学研究会での研究会活動を振り返って、「情報教育」というより「情報処理教育」におけるコンピュータと人との関わりを歴史的に概観し、今後の方向を模索してみた。 pp41～43
8. 「創造性とチャレンジ精神を涵養する起業家養成プログラム」の実践と今後の展望	共著	平成 23 年 3 月	大阪成蹊大学現代経営情報学部研究紀要, 第 8 巻第 1 号（通巻第 8 号）	「創造性とチャレンジ精神を涵養する起業家養成プログラム」の実践と今後の展望』という題目で、今までの起業塾の活動を総括して、次年度以降のカリキュラム化を目指した内容を研究ノートとしてまとめることする。 共同執筆者：工藤英男, 西郡晃雅, 鹿島　　啓, 児山俊行, 寺田勝紀, 井上敬

				介 担当部分:全般 pp169～182
9.「三人の女性起業家」	単著	平成 23 年 4 月	財団法人ベンチャーエンタープライズセンター関西支部「VEC　てんこもり」67 号（2011 年 5 月）	元気で素敵な社長さん 3 人を紹介。つるちゃんことザ・レジェンド・ホテルズ＆トラスト㈱の鶴岡秀子さん、㈱プロアシストの代表取締役の生駒京子さん、㈱ハートギフトの代表取締役の池田文子さんは日本 CHR コンサルティング㈱の代表取締役社長と起業塾の講座での「君も社長になろう」について書いた。
10. コンピュータにまつわる四方山話	単著	平成 23 年 12 月	第 256 回ＩＥＣ研究会記念論集「情報教育の進展と再構築」、情報教育学研究会	筆者が体験したコンピュータと人との関わりを歴史的に概観し、今後の方向を模索してみた。pp132～135
11. 写真で振り返るＩＥＣの活動	単著	平成 23 年 12 月	第 256 回ＩＥＣ研究会記念論集「情報教育の進展と再構築」、情報教育学研究会	これまでに開催された情報教育フォーラムの記録を、第 8 回から第 19 回まで、古い順に写真とともに要約する。筆者が参加して撮影した写真やIECのホームページから編集して、IECの活動の歴史をスナップ的にまとめたものである。pp154～159
12. 「細川信義先生を偲んで」	単著	平成 25 年 3 月	財団法人ベンチャーエンタープライズセンター関西支部「VEC　てんこもり」102 号（2013 年 3 月）	エンゼル証券株式会社の代表取締役で公認会計士の細川義信先生が、かねて病気療養中のところ、平成 24 年 11 月 18 日に逝去(享年 72 歳）された。あり日の思い出を偲んでの寄稿である。
13. 起業塾を通じての起業家養成に関する研究と実践	共著	平成 25 年 3 月	大阪成蹊大学現代経営情報学部研究紀要,第 10 巻第 1 号（通巻第 10 号）	平成 20 年度の学部における特徴ある取り組みとして、大阪成蹊塾の発足に伴い、その 1 つとして「起業塾」が誕生し、特別講座としてビジネスプラン作成講座「めざせ起業家！」シリーズを開催してきた。これらの平成 22 年度までの活動については、“「創造性とチャレンジ精神を涵養する起業家養成プログラム」の実践と今後の展望“で紹介をした。本稿では、その後の平成 23 年度と 24 年度の活動を中心に、特別講座の概要と活動の最終回のビジネスプランコンテストの模様を、活動の経緯とそれらの成果について報告した。 共同執筆者：工藤英男, 西郡晃雅,児山俊行,寺田勝紀 担当部分:全般 pp185～193
14. 情報とコミュニケーションに関わる戯言	単著	平成 25 年 6 月	情報コミュニケーション学会誌,Vol.9,No.1	情報コミュニケーション学会誌にエッセイとして依頼原稿で、学会創立 10 周年を記念して、情報とコミュニケーションに関わる事項を述べた。 p.37
15.各地で活躍している郷土の人達「人生をふり	単著	平成 28 年 3 月	機関紙「郷土をさぐる」第 33 号、上富良野町郷土をさぐる会	幼少から高校生のころ、大阪でのくらし（学生時代、大阪大学での思い出、奈良高専での思い出、大阪成蹊大学での

返り…そして今」				思い出)、異業種交流会について記述した。 Pp12～26
5.富良野のワインとメロン	単著	平成 29 年 6 月	財団法人ベンチャーエンタープライズセンター関西支部「VEC てんこもり」153 号	北海道のワインと言えば、余市や十勝のワインが有名でるが、富良野では、富良野市ぶどう果樹研究所の「ふらのワイン」が 1975 年に、富良野スキー国体で試作ワイン提供されました。 本稿では、従兄弟が人参農家からワイナリーを創った話と弟が栽培してきた「ふらのメロン」について紹介した。
6. 巻頭言 最近の新聞記事などから思うこと	単著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会誌,Vol.13,No.1	学生時代から半世紀を振り返ってみると、電車の中での模様は、子供に限らずサラリーマンまでが「週刊少年マガジン」、「週刊少年サンデー」、「週刊少年ジャンプ」などの漫画本を読んでいる時期があった。つぎには、ポケットベル（ポケベル）でのメッセージのやり取りや「たまごっち」などのゲームに熱中する人が増えた。今やスマートフォン（スマホ）や携帯電話を操作している人が大半を占めている。このような状況はいつまで続くのだろうかと、気になる今日この頃である。新聞、テレビなどでは、ＡＩ、ＩｏＴ、ロボット、ドローン、ビックデータ、自動運転、量子コンピュータなどのキーワードを、目にしない日はない。そこで、最近の新聞記事からの話題について述べた。

（経営）小倉　哲也

教　育　研　究　業　績　書

平成　29 年　　2 月　24 日

氏名　小 倉　　哲 也　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
社会科学	

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1）福島県産青果物の売り場提案 （産学連携による教育） 大阪成蹊大学マネジメント学部 食ビジネスコース 3 回生専門演習での取り組み	平成 26 年前期	業連携する大阪府中央卸売場と平成 26 年度食ビジネスコース 3 回生とのアクティブラーニング型教育。 福島県大阪事務所や JA 全農福島から学生への課題「いかにして福島県産青果物を（安心・安全性含めて）PR するか?」を、グループに分かれて問題解決に取り組む。 関連企業からの講義や試食をしグループで議論し、成果として実際に売り場を製作する。 また作製した売り場を、学内・学外の関係者向けに「売

		り場コンテスト」を開催し、プレゼンテーションを大会も実施した。
2）大阪池田チキチキ探検隊（地域活性化事業） （産官学連携による教育） 大阪成蹊大学マネジメント学部 食ビジネスコース 4 回生専門演習での取り組み	平成 26 年 4 月～ 平成 28 年 3 月	大阪府池田市や観光協会、日清食品 HD、池田青年会議所、地元まちづくり会社、地元商店街、地元各種団体と大阪成蹊大学マネジメント学部食ビジネスコースのゼミで取り組む地域活性・観光活性プロジェクトである。 インスタントラーメン発祥の地である池田市で、チキンラーメンを食材とした創作料理を販売する「一店一品運動」を企画。参加する店舗のメニューや店舗情報を集約しスマートフォンサイトや食べ歩き MAP を企画・提案・作製に携わり情報を発信し、地域の観光活性化を試みる。大学側は、実際に店舗を取材し市内を歩き情報発信のためのネタさがしを行う。 また、この活動を卒業研究として現在取り組んでいる。 出来あがったスマートフォンサイト http://www.chiki-chiki.com/sp/
3）熊本県産青果物の売り場提案 大阪成蹊大学マネジメント学部 食ビジネスコース 3 回生専門演習での取り組み	平成 27 年前期	事業連携する大阪府中央卸売場と平成 27 年度食ビジネスコース 3 回生とのアクティブラーニング型教育。 熊本県大阪事務所や JA 熊本経済連から学生への課題「県産夏野菜をいかにして冬に PR するか?」を、グループに分かれて問題解決に取り組む。 関連企業からの講義や試食をしグループで議論し、成果として実際に売り場を製作する。 また作製した売り場を、学内・学外の関係者向けに「売り場コンテスト」を開催し、プレゼンテーションを大会も実施した。
2　作成した教科書，教材		
1）創造の場と都市再生（共著）発行:晃洋書房	平成 22 年 4 月	(著書 4)大阪市立大学院講義で使用した教科書
2）経験の社会経済（共著）発行:晃洋書房	平成 22 年 6 月	(著書 5）大阪市立大学大学院講義で使用した教科書
3）創造経済と都市地域再生（共著） 発行:大阪公立大学共同出版会（OMUP）	平成 23 年 3 月	(著書 6）大阪市立大学大学院講義で使用した教科書
4）経済効果入門（共著）発行:日本評論社	平成 24 年 6 月	(著書 7）大阪市立大学大学院講義で使用した教科書
5）顧客部席論　（共著） 発行:大阪公立大学共同出版会（OMUP）	平成 25 年 3 月	(著書 10）大阪市立大学大学院講義で使用した教科書
6）経営統計学講義ノート	平成 27 年度	太成学院大学講義で使用した教材
7）わかる統計学講義ノート	平成 27 年度	太成学院大学講義で使用した教材

8) 社会調査法講義ノート	平成 27 年度	太成学院大学講義で使用した教材
3　教育上の能力に関する大学等の評価 特になし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 特になし		
5　その他 特になし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許		
1)　日本商工会議所簿記検定試験　3 級合格		
2)　全国経理学校協会主催簿記能力検定　2 級合格		
3)　高等学校教諭 I 種免許状 工業　取得		大阪府教育委員会　平 16 高 1　第 6693 号
（その他）		
4)　財団法人全日本剣道連盟主催昇段審査　二段取得		
5)　普通自動車第一種免許取得		
2　特許等		
特になし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		
1)　兵庫県宍粟市 地域情報化計画検討委員	平成 18 年 2 月～平成 19 年 3 月	市町村合併前にそれぞれの地域が取り組んできた地域情報化施策をいったん整理し、地域情報化の現状や市民のニーズの束握をしたうえで、地域情報化を具体的にどう推進するかについて、地域情報化計画策定プロジェクト並びに地域情報化計画の議論を行い助言。
2)　特定非営利活動法人 KOBE Creative 協会　理事長 （NPO での活動）	平成 20 年 4 月～平成 28 年 3 月	学術・ICT・文化・伝統芸能・芸術をもって地域の人々や地域の振興や創造に、広く公益の増進に貢献することを目的とする活動。
3)　大阪工業大学工経会　理事 （工学部経営工学部 OB 会）	平成 27 年 4 月～	大阪工業大学工学部経営工学会の OB 会の活動。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1 まちづくりと創造都市 -基礎と応用-	共著	平成 21 年 3 月	晃洋書房	地域再生の手法はいろいろとあるが、デジタルコンテンツをキーワードとして、地域に眠る文化資本を掘り起こし、様々な都市づくりや産業の活性化に利用しようという試みの提案である。 様々な地域で、地域文化のデジタル化として「デジタルアーカイブ」が注目されてきた。そのような事業では、各地域の文化資本や自然資本、物的資本などをデジタル化しデータベースに格納された。今後は、コンテンツを記録や貯蓄するだけではなく、幅広く発信していくことが重要となる。さらには、それらを地域の資産として活用し

				ていくことが必要である。特に、地域の物産や土産物、食品産業などとのコラボレーションは注目すべきところである。 　デジタルアーカイブは、きわめて多面的な社会的価値を本来もっている。デジタルアーカイブが社会発展に対していかなる経済的意義を持っているかを検証した。 　そこで、デジタルアーカイブが社会発展に対していかなる経済的意義を持っているかについて述べた。 塩沢由典、小長谷一之 編著 11 章 デジタルアーカイブの社会経済効果 P. 110～115 小倉哲也
2 まちづくりと創造都市 2 -地域再生編-	共著	平成 21 年 3 月	晃洋書房	成熟期にある現経済下の伝統産業に対するニーズは、ますます低下している。本文で事例に挙げた「石州半紙」（島根県石見地域で作られた半紙）の場合、日本人の生活様式の変化により、需要量が大きく減少したことや、後継者の不在、職人の高齢化に伴う廃業などがあげられる。その他にも、内外ともに和紙業界を取り巻く課題は山積している。 　そこで、「石州半紙」の事例をもとに伝統産業の構造を分析し、経済学的かつ経営学的視点から今後の戦略を述べた。 　今後、地域の伝統産業を守っていくためには新たなコンテンツを活用し、利潤を高めていくと同時に、価格も高めていくような戦略が必要である。 　また、その方法についても述べた。 塩沢由典、小長谷一之 編著 12 章 石州半紙(和紙)のデジタルコンテンツ化による経済価値 P. 138～144 小倉哲也
3 デジタルコンテンツ白書 2009 ［依頼著書］	共著	平成 21 年 9 月	経済産業省 商務情報政策局 財団法人デジタルコンテンツ協会 大日本印刷	地域を題材とした映画やテレビドラマなどの映像コンテンツが地域経済の発展に大きく貢献することが考えられる。特に、それに伴う観光産業や飲食産業への影響は極めて大きい。 　日本放送協会（NHK）が製作する大河ドラマに関する地域経済波及効果を中心に論じた。 　このようなコンテンツの特徴として、収穫逓減の傾向がある。 　そこで、放映後の効果が持続するための、地域コンテンツ戦略を提言した。 経済産業省 商務情報政策局　監修 財団法人デジタルコンテンツ協会 企画編集 5 章 コンテンツの多面的な地域経済効果の分析 －NHK 大河ドラマの地域経済波及効果を中心として－ P. 166～170 近勝彦、小倉哲也
4 創造の場と都市再生	共著	平成 22 年 4 月	晃洋書房	厳しい経済社会環境下におかれている中小企業は、設備投資や従業員数を拡大することは極めて困難である。もともと大企業と比して、その保有資源や技術が劣位で

				あるうえに、その競争優位を高める経営資源を拡大充実させることは現実的には厳しい。 そこで、資源ベースの戦略ではなく、他社の資源を共有するなどの戦略が必要となる。具体的には、地域おける中小企業がとりうる発展戦略として、融合化・提携化が有力な企業戦略である。その融合化・提携化戦略の具体的で実践的な、事例をもとに有効性を論じた。 事例では、地域再生を試みる島根県にある食品産業にフォーカスした。一つ目は、㈲奥出雲椎茸の事例。二つ目は、にちはら総合研究所（冬虫夏草の培養）の事例である。両社の、都市へ向けた新たな物流方法やパッケージ方法に着目した。 大阪市立大学大学院創造都市研究科 編集 8 章 都市と地域における中小企業の連携化 －その事例分析を通じて－ P.127～145 近勝彦、小倉哲也、梅原清宏、船越亮
5 経験の社会経済 -事例から読み解く感動価値-	共著	平成 22 年 6 月	晃洋書房	経済・経営・情報・社会領域において、「経験」が大きな意義を持っていることを、様々な事例を用いて紹介した。「経験」がもたらす社会経済現象や価値について述べた。 近勝彦、福田秀俊 編著 14 章 地域コンテンツの経験価値石州和紙の試み P.150～160 小倉哲也
6 創造経済と都市地域再生	共著	平成 23 年 3 月 31 日	大阪公立大学共同出版会（OMUP）	不確実性下での意思決定は、企業の事業活動また我々の日常生活おいて大変困難である。 そこで、新古典派経済学が想定する「経済合理人」（ホモエコノミカス）の仮説（前提）を批判し、より現実的な経済人の行動および意思決定を考えた。 本文では、行動経済学の基礎的な理論の一部の紹介とその実証を実際の調査から試みた。 第 3 章 行動経済学による起業家の認知に関する実証分析 P.20～25 近勝彦、小倉哲也、梅原清宏
7 経済効果入門	共著	平成 24 年 6 月 25 日	日本評論社	博覧会やコンサートなど大イベントなどの経済波及効果は測定されることがあっても、地域の活動やイベント等が、測定される事例は少ない。その理由として、「測定方法が分からない（ブラックボックス）」、「それほど大きな効果が期待できない」などの理由がある。 そこで、地域にもたらす経済波及効果の測定方法を分かりやすく基本から事例（特定非営利活動法人 KOBE 鉄人プロジェクト）とともに説明した。 何かイベントを行えば、イベントに関連する産業に需要が発生する。さらには、その地域の飲食業や運輸業などの需要が発生する。このように、最初の産業にだけ需要がうまれるのではなく、関連するする産

				業や地域の商店へまで伸びていく。 震災で大きな被害を受けた長田のまちの復興をアピールに、地域のコンテツを活用したプロジェクトであったが、長田のまち全体に活力を与えた。 小長谷一之、前川知史 編 11 章 「KOBE 鉄人 PROJECT」の経済波及効果 P.199～225 前川和史、小倉哲也
8 地域活性化ニューズレター第 2 号	共著	平成 24 年 3 月 30 日	大阪市立大学創造都市研究科 「3 セクター協働の地域活性化教育プログラム」委員会編	日本は周知の通り、いわゆる「バブル崩壊」以後、何回かの小さな好況期はあったものの、総じていうと、長期停滞の中にいる（実際、実質 GDP はこの 20 年余りの間わずかしか拡大していない）。 そのような経済状況下、東日本大震災が発生した。東北地方の経済社会の早期の復興を祈らざるを得ないが、日本の資源の配分が東北地方に傾斜することで、西日本の社会投資はますます減っているという報告もある。東北地方の復興を成し遂げ、他地域の再生のためにも、日本経済の新しい仕組みづくりや、新たな付加価値づくりのための施策や戦略の再構築が喫緊の課題となっている。 かつてのマクロ経済学的手法として、拡張的財政政策による地域経済の需要創出が可能であった。しかし、OECD 諸国のなかでもっとも悪いと言われている日本の財政状況（巨額の長期債務残高の存在）では、そのような政策はとれない。事実、毎年、地方の公共事業投資額は減少している。 このような地域の社会経済（大都市も同様）の中で出来る数少ないオプションの 1 つが、「多様なセクターが協働することによる社会事業の推進や付加価値づくり」なのである。 その実例として、島根県浜田市の NPO 法人・「A-GENER いわみ」をフォーカスし読み解いた。 大阪市立大学創造都市研究科 「3 セクター協働の地域活性化教育プログラム」委員会編 3 章 多様なセクターの協働による地域活性化事業の基盤形成 - 島根県浜田市の NPO 法人・「A-GENER いわみ」の軌跡を通じて - P.9～13 川神裕司、小倉哲也、近勝彦
9 創造社会のデザイン	共著	平成 24 年 9 月 22 日	ふくろう出版	日本の高度経済成長期や好況下ではモノがよく売れ、経済成長が鈍化・停滞している時や不景気の時はあまりモノが売れない。 この理由として、不景気の時は所得が伸びないかマイナスとなり需要は低下する。また、不況が予測されるときは、原則的にモノの価格が低下する。さらに、日本の総人口が減少し、国内における総販売量は縮小している。これらをまとめると、「消費の成熟化」が始まっている。これらは、マクロ的で合理的な消費傾向を作り出す。 他方、日本人の「嗜好の変化」があげられる。人口構成の変化や消費の成熟化も影響するであろうが、人々の好みも変化して

				いく。 　企業にとっては、チャンスでもあるが、リスクでもある商品開発や販売をどのように行っていけば良いかを、実証実験とブランド理論から提案した。 松田貴典、近勝彦、川田隆雄　編著 10 章 ブランドにおける非合理的購買行動に関する研究 －再生と再認の実証研究－ P.99～107 小倉哲也
10 顧客分析論	共著	平成 25 年 3 月 31 日	大阪公立大学共同出版会 (OMUP)	日本の経済社会は、ほとんど経済成長が止まったままで、国家財政の悪化が進行し続けている。そのため、「消費の成熟化」が始まっている。これらは、マクロ的で合理的な消費傾向を作り出す要因といえる。それに対応するために、各企業では様々な商品を毎年作り出している。しかし、顧客の本当の購買需要を満たすモノを作っていない。また、これまで築きあげたブランドに頼ったモノづくりも目立つ。 　企業側の顧客ニーズの把握と顧客の本当のニーズの間にギャップが生まれているのである。これを考えるために、実証実験から人々の行動を分析し、新たなフレームの提案を行った。 近勝彦、谷本和也、金野和弘、西堀俊明 編著 4 章 ブランドにおける行動経済学的分析 P.43～49 小倉哲也
（学術論文）				
1 中山間地域におけるコミュニティ・ビジネスの課題と方向性 [修士論文]	単著	平成 18 年 3 月	大阪市立大学大学院 創造都市研究科 （大阪市立 第 262 号）	コミュニティ・ビジネスは、地域住民や地域企業等が中心となって地域資源を活用しつつ、地域の抱える課題や満たされない住民ニーズをビジネスにより解決する事業モデルである。 コミュニティ・ビジネスを起点とする地域再生の可能性について述べた。 　実例として、兵庫県多可町にある田舎のコンビニとも呼ばれる「マイスター工房八千代」を取り上げた。当団体は、公共施設の跡地をリニューアルし活用するなど、開発（地元食材を使った特産品）・加工・物流・販売まで、全て地元の資源を活用するマネジメントシステムを行っている。 　これらを研究し、特に地域の中小企業への適用の可能性を示した。 小倉哲也
2 デジタルアーカイブにおける社会経済的価値に関する考察 －地域文化資本をデジタル化する意義とその新しい体制の提言－	単著	平成 19 年 12 月 20 日	大阪市立大学大学院創造都市研究科 システム・ソリューション研究分野 紀要第 2.3 合併号	デジタルアーカイブにされたコンテンツは、社会経済発展のために応用し社会経済の多面的価値を生み出すに至っていない。 　そこで、どのようにすれば具体的な社会的価値を実現できるかを考えた。地域文化資本をデジタル化する意義と多面的に応用した新しい価値作りのフレーム、そのときに地域社会の中で生み出される、デジタルコンテンツの著作権管理を行う体制が必要であることを提案した。

				小倉哲也
3 デジタルコンテンツの展示会における総合価値評価の研究	単著	平成 21 年 3 月 20 日	大阪市立大学大学院創造都市研究科 システム・ソリューション研究分野 紀要第 4 号	社会実験として、日本の重要文化財の複製コンテンツ展示会を行った。そこで、市民がデジタルコンテンツに対してどのような評価をするのかを、展示会を開催することを通して検証した。その分析手法として、CVM (Contingent Valuation Method：仮想評価法)手法を用いてデジタルコンテンツの展示会における価値評価を行った。そして、CVM の結果や各種アンケート調査から、デジタルコンテンツを総合的に評価し、デジタルコンテンツの今後の可能性や課題を明らかにした。 小倉哲也、伴みずほ、田中浩子
4 ブランド理論における再生と再認の研究 -再生と再認の実証研究- [編集後記]	編集・単著	平成 23 年 3 月	大阪市立大学大学院創造都市研究科 システム・ソリューション研究分野 紀要第 5 合併号	人間は、過去の経験や直感、手元にある限られた情報から、物事を単純に判断しようとする。つまり、合理的な意思決定や論理的な意思決定よりも、主体的で簡便な意思決定を優先してしまう。その一つに、何かを購買しようとしたときにブランドというシグナルを活用する。 人々の非合理な行動を、ブランド論における「再生と再認」に関する実証実験を実施し消費者における購買行動の本質を解明した。 小倉哲也
5 感性を考慮した青果物売場づくりに関する考察 - SD 法を用いた野菜売場のイメージ分析 -	共著 （筆頭）	平成 27 年 3 月 20 日	平成 26 年度「大阪成蹊大学紀要」 大阪成蹊大学マネジメント学部・芸術学部・教育学部、研究紀要委員会	消費者が小売店舗で野菜を購入する際に、その売場がイメージに及ぼす影響について検討することを目的として、Osgood らの SD 法 (Semantic Differential Method：意味微分法) による印象評価実験を行う。 実験対象として福島県産の青果物を取り上げた。福島県産の農作物出荷に際しては、十分な安全検査が行われているにも関わらず、販売額は震災前までには回復していな状況である。自身の先行研究の結果と、消費者の記憶プロセス (二重貯蔵モデル)を考慮し風評被害を払拭させるというより、ポジティブな記憶に注意の向く売場作りについての検討を行った。 小倉哲也、伴みずほ、田中浩子
6 感性を考慮した青果物売場づくりについての一考察 - 売り場が消費者に与えるイメージ分析 - [査読論文]	単著	平成 28 年 3 月	日本産業科学学会 研究論叢 第 21 号 平成 28 年 3 月	本稿では青果売り場を事例に、消費者が商品を購入しようとした際、その売り場がイメージに及ぼす影響について分析を試みる。 一つ目は、売り場のディスプレ・レイアウトに着目した、SD 法による印象評価実験である。 二つ目は、POP 広告のイメージに着目し、手書きで作製した POP 広告とパソコンで作製した POP 広告の売上の比較調査である。 これらの実験結果から、消費者の感性に訴えかける売り場づくりについての検討を行なった。 小倉哲也

7 レンタサイクルの今後の動向に関する一考察 -「うめぐるチャリ」を事例に-	共著 （筆頭）	平成 28 年 3 月 20 日	平成 27 年度「大阪成蹊大学紀要」 大阪成蹊大学マネジメント学部・芸術学部・教育学部、研究紀要委員会	観光行動の消費の一つに「レンタサイクル」がある。レンタサイクルは自転車により歩行よりも広範囲に移動することができ、いつでも止まることができる。 利用者は利用中に買い物や飲食など消費行動をおこすことも想定される。また、レンタサイクル利用者は自転車を利用する際にビジネス利用・観光利用などいくつかの目的が考えられる。 そこで本研究では、グランフロント大阪のレンタサイクル『うめぐるちゃり』を事例に特に観光利用目的のレンタサイクル利用者に着眼し、利用者に対しインタビュー調査をおこなうことで利用者の特性を明らかにした。 小倉哲也、林恒宏、田村匡
8 日本におけるサイクルツーリズムの現状と可能性 ーしまなみ海道サイクリングの外国人観光客に対するプロモーションに着眼してー [査読論文]	共著	平成 29 年 3 月	日本産業科学学会 研究論叢 第 22 号 平成 29 年 3 月	本論文では、広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶ「しまなみ海道サイクリング」を事例とし、整備された経緯や利用状況などの現状について特に尾道市を中心に整理をおこない、インバウンドへのプロモーションの現状について明らかにすることで、サイクリングによる外国人観光客誘客に有効な手法を検討を行った。 林恒宏、小倉哲也
9 サイクルツーリズムの経験価値に関する研究 -飛騨古川里山サイクリングを事例に-	共著	平成 29 年 3 月	平成 28 年度「大阪成蹊大学紀要」 大阪成蹊大学マネジメント学部・芸術学部・教育学部、研究紀要委員会	観光庁が主導する「スポーツツーリズム推進基本方針」によると、サイクリングもスポーツツーリズムのコンテンツの一つであることを述べている。 そこで、本論文では、岐阜県飛騨市古川町の株式会社美ら地球が提供している外国人向けのガイド付き里山サイクリング事業を事例に、地方型サイクリングの経験価値について分析検討を行った。 里山サイクリングには、5 つの顧客経験価値（SENSE、FEEL、THINK、ACT、RELATE）という視点で様々な価値が存在することが明らかになった。 林恒宏、小倉哲也
(学会発表)				
1 コンテンツの多面的な地域経済効果に関する研究 - NHK 連続テレビ小説の経済波及効果を中心として -	単著	平成 21 年 9 月 12 日	日本生産管理学会 第 30 回全国大会 開催校:愛媛大学	日本放送協会（NHK）の大河ドラマの事例からも、コンテンツは地域振興の有力なツールである。このような、製作投資に対して、多面的効果を生み出すのは間違いなく、コンテンツは地域のブランドの形成にも重要視されている。しかし、目に見えない（形が無く重さを持たない）部分のコンテンツの地域経済効果を、実証（実測）することは簡単なことではない。 そこで、NHK が製作する連続テレビ小説に関する地域経済波及効果と、筆者らが 2008 年 8 月に行ったデジタルコンテンツを活用した展示会(社会実験)から考える。 小倉哲也
2 電子商取引における顧客価値創造の一考察 -コモディティ化への対応-	共著	平成 22 年 9 月 12 日	日本生産管理学会 第 32 回全国大会	消費者の価値観や消費スタイルが多様化し、いくら優れた機能やデザインであっても売れるとは限らなくなっている。このような状況の中でも、電子商取引における BtoC 市場は、規模を拡大し続けている。しかし、市場の中はというとコモディティ

			開催校:名城大学	化と呼ばれる現象が進行している。そこでは、商品による差別化は困難になっている。このコモディティ化から脱却するために注目したのが、顧客経験価値である。今後は、電子商取引の中にもこの経験という価値を導入していく必要がある。 小倉哲也、斎木克幸、丁井雅美、下左近多喜男
3 地域にある中小企業の新しいメタ経営理論	共著	平成 22 年 1 月 22 日	日本社会情報学 第16回社会情報システム学シンポジウム（日本社会情報学会第121回定例研究会）発表論文 開催校:電気通信大学情報システム学研究科棟	経営理論には、大きく 2 つのタイプがある。一つは、個別企業の経営資源をベースにした主体的な経営マネジメント論。他方、地域全体の企業間ネットワークを、一般的・全体論的に分析するものである。前者は、主体の経営戦略がわかるものの企業環境を形作る他社などとの関係性はあまり問われないことになる。後者は、そのネットワーク関係は明らかになるものの個別企業の主体的な戦略行動を規定できないという欠点がある。そこで、個別主体の資源のあり方とステイクホルダーとの関係性を同時に把握・理解する、「中位ネットワークの理論」を提唱し、その有効性をいくつかの地域にある事業の事例を通じて明確にした。 小倉哲也、近勝彦
4 ブランド理論に対する行動経済学的アプローチ -再生と再認の実証研究-	共著	平成 23 年 1 月 21 日	日本社会情報学 第17回社会情報システム学シンポジウム（日本社会情報学会第125回定例研究会）発表論文 開催校:電気通信大学情報システム学研究科棟	人間の消費行動においては、財の機能や性能面だけではなく、ブランドの認知やロイヤリティなどの要因が大きな影響を及ぼしている。つまり、財を購入する時の意思決定にあたって、十分な情報を収集し、客観的・合理的な分析に基づく判断をしていない。むしろ、行動経済学が述べるヒューリスティックに物事を考えている。 ブランド論における「再生と再認」に関する実証実験を実施し、消費者における消費行動の本質を解明する。 小倉哲也、寺地一浩、名淵浩史、金野和弘、近勝彦
5 インターネットにおける購買行動の非合理性に関する一考察 -情報探索と購買意思決定におけるヒューリスティックの介在について-	共著	平成 23 年 1 月 21 日	日本社会情報学 第17回社会情報システム学シンポジウム（日本社会情報学会第125回定例研究会）発表論文 開催校:電気通信大学情報システム学研究科棟	ネット上の情報量は膨大であり、アクセス方法が多様化・複雑化していることから、その購買プロセスにはヒューリスティックな行動が介在している可能性が大きい。このことから、ネットショッピングにおける購買行動は、実店舗と同様に、非合理な情報探索や購買の意志決定がなされていると考えられる。行動経済学における「近道選び」の観点から、ネットショッピングを行う消費者の情報探索と購買の意志決定プロセスの非合理性を実証的に分析した。 寺地一浩、名淵浩史、小倉哲也、金野和弘、近勝彦
6 フリクエンシー・プログラムのポイントに対する消費者行動	共著	平成 23 年 1 月 21 日	日本社会情報学 第17回社会情報システム学シンポジウム（日本社会情報学会第125回定例研究会）	ポイントは、疑似通貨、企業通貨、おまけ・サービスとして消費者に受け入れられているが、その行動は必ずしも合理的ではなく、消費者のポイントに対するアノマリーな行動が多数みられる。本研究では、プロスペクト理論の価値関数がもたらす影響のひとつである損失回避性を取り上げ、ポイントに対する行動を理解するうえでの有効性を検証した。

			発表論文 開催校：電気通信大学情報システム学研究科棟	寺地一浩、小倉哲也、名淵浩史、金野和弘、近勝彦
7 購買状況における情報探索と意思決定の課題 -顧客の行動経済学的課題を意味ネットワークで分析する-	共著	平成 23 年 1 月 21 日	日本社会情報学 第17回社会情報システム学シンポジウム（日本社会情報学会第125回定例研究会） 発表論文 開催校：電気通信大学情報システム学研究科棟	これまで経済学は、合理的経済人の前提のもと、ヒトの情緒性や状況的要因を無視してきた。そこで、購買状況を調査し、そこにおける合理性と情緒性のあり方を解明することを試みた。 具体的には、何がどこでどのように購買され、それはどれだけの情報探索と評価がなされたかを調査した。 金野和弘、小倉哲也、名淵浩史、寺地一浩、近勝彦
8 ブランドにおける非合理的購買行動に関する一考察 -再生と再認の実証研究-	単著	平成 23 年 9 月 11 日	日本生産管理学会 第 34 回全国大会 開催校：関西学院大学	我々消費者がある何かを購入する場合、財やサービスの価格や機能、性能面だけではなく、ブランドの認知やロイヤリティなど目に見えない要因がきわめて大きな影響を及ぼしている。すなわち、ある何かを購入する時の意思決定にあたって、十分な情報を収集し、客観的・合理的な分析に基づく判断をしているわけではなく、むしろ、行動経済学が述べるヒューリスティックに物事を考えているといえる。 そこで、本研究では、ブランド論における「再生と再認」に関する実証実験を実施し、ブランドの本質を解明する。 小倉哲也
9 ものづくり感性の有効性と今後の課題	共著	平成 23 年 9 月 11 日	日本生産管理学会 第 34 回全国大会 開催校：関西学院大学	1980 年代は、良い品質のモノを作れば売れる時代であった。いわば大量生産の中で、如何に品質の良いものづくりをしていくかが生産管理の課題であった。ものづくりにおいて、利用者の感性に働きかけ共感を得ることによって顕在化する感性価値を提案する。必要なことは、感性に優れた日本独特のものづくり文化の伝統のもとに、第一に新しい感性で価値創造をすることである。提供する側の視点で価値を考えるだけではなく、利用する側の視点で、利用者が自身のソリューションを行う上で役立つかどうかの視点で、提供側も感性価値を創造することと考える。第二に、組織は従来の大量生産や品質を重視した PDCA だけでなく、感性品質を重視した PDCA を回していくことと考える。第三に、教育は感性価値の価値分析の方法論や評価制度を確立するとともに、その教育を従業員やデザイナーに行うことである。 斎木克幸、小倉哲也、高橋昌憲、下左近多喜男
10 CSR から CSV への展開 -社会影響を配慮した見直し-	単著	平成23年11月 12 日	システム監査学会 設立 25 周年記念 第 24 回公開シンポジウム 開催校：大阪成蹊大学	CSR 活動をコストと考える企業が多い。そのように考えた場合、お金がないと使命を果たさせないということになる。したがって、自社の事業に利益が出ている場合は CSR 活動を行い、利益が出ていなければ CSR 活動の縮小や取組み自体をやめるまたは休止してしまうことになる。これは CSR の本質からかけ離れた考え方である。この局面を打開するには、CSR 活動に対する発想の転換が必要である。現在のような受動的な CSR 活動の考え方は、企業にとっ

				ても社会とってもあまりに断片的であり部分的すぎる。今後は各企業で自社の事業や戦略に適した形で、具体的な活動を考えるべきである。そうすることによって、CSR活動はコストや制約でなく自社のビジネスチャンスやイノーベーション、競争優位につながる有意義な活動となる。長期的な視点で CSR 活動を行うことによって企業にも社会にも価値が高い。 今後は、企業のブランドを向上させるCSR 活動が必要である。 小倉哲也
11 購買行動に対するポイントの影響	共著	平成 24 年 1 月 26 日	日本社会情報学 第18回社会情報システム学シンポジウム 発表論文 開催校:電気通信大学情報システム学研究科棟	ポイントに対する不合理な消費者行動を検証するため、ポイント利用の購買と、それと対比する割引購買の購買行動の分析を行った。有効期限等のポイントを利用するうえで制約があるにも関わらず、ポイント利用の購買は、割引購買に比べて高い購買度を検証した。購買度においては、消費者属性の「性別」と「年代」による状況依存は認められなかったが、ポイントに対する「主観的経験」は購買行動に影響を与えることを実証した。 寺地一浩、小倉哲也、近勝彦
12 CSV の視点から CSR の見直し	単著	平成 26 年 3 月 9 日	日本生産管理学会 第 39 回全国大会 開催校:大阪成蹊大学	CSR活動をコストと考える企業が多い。そのように考えた場合、お金がないと使命を果たさせないということになる。したがって、自社の事業に利益が出ている場合はCSR活動を行い、利益が出ていなければCSR活動の縮小や取組み自体をやめるまたは休止してしまうことになる。 これはCSRの本質からかけ離れた考え方である。この局面を打開するには、CSR活動に対する発想の転換が必要である。現在のような受動的なCSR活動の考え方は、企業にとっても社会とってもあまりに断片的であり部分的すぎる。今後は各企業で自社の事業や戦略に適した形で、具体的な活動を考えるべきである。 そうすることによって、CSR活動はコストや制約でなく自社のビジネスチャンスやイノーベーション、競争優位につながる有意義な活動となる。長期的な視点でCSR活動を行うことによって企業にも社会にも価値が高い。 今後は、企業のブランドを向上させるCSR活動が必要である。 小倉哲也
13 感性を考慮した売場づくりに関する考察 - SD 法による売場のイメージ分析 -	共著 （筆頭）	平成 26 年 9 月 20 日	情報コミュニケーション学会 第 14 回研究会 CIS2014(2014.9.20) 会場:㈱内田洋行 九州支店 （福岡県福岡市中央区大名 2-9-27 赤坂センタービル）	売場作りは、マーケティングの中のプロモーションの 1 つであり、同じ商品であっても、並べ方、テーマ性によって売上げは大きく変わる。 本稿では、学生グループが作製した 6 つの売場について、SD 法（Semantic Differential Method：意味微分法）による印象評価を行った。調査データを因子分析したところ、「評価性因子」、「活動性因子」、「力量性因子」の 3 つの因子が抽出された。それぞれの因子を「第一印象」、「イベント性」、「本質・売場スキル」と解釈したうえで、消費者が買いたくなる売場づくりについて検討を行った。

				小倉哲也、田中浩子、伴みずほ、工藤英男
14　SD 法を用いた野菜売場のイメージ分析 - 福島県産の野菜を事例に - 	単著	平成 26 年 11 月 1 日	グローバル経営学会 第 5 回シンポジウム 開催校:大阪工業大学	費者が小売店舗で野菜を購入する際に、その売場がイメージに及ぼす影響について検討することを目的として、Osgood らの SD 法（Semantic Differential Method：意味微分法）による印象評価実験を行う。 実験対象として福島県産の青果物を取り上げた。福島県産の農作物出荷に際しては、十分な安全検査が行われているにも関わらず、販売額は震災前までには回復していな状況である。自身の先行研究の結果を考慮し、東日本大震災による風評被害を打開する福島県野菜の売場作りについての検討を行った。 小倉哲也
15　購買意思決定における「感情」の働き -「覚醒」の調査と分析-	単著	平成 27 年 2 月 27 日	グローバル経営学会 第 1 回 ICT&サービスマーケティング研究部会 開催校:大阪市立大学サテライト校 104 教室	本研究では、小売店舗（食料品売場）における感情を考慮した実証研究を行うことで、実務的に有効なマーケティング戦略を提示することを目的とする。 したがって、売場で生起する感情が分析対象である。売場自体を広い意味で刺激と捉えたうえで、感情に立脚した売場の戦略の一般化について述べた。 小倉哲也
16 SD 法を用いた青果物売場のイメージ分析	単著	平成 27 年 3 月 9 日	日本生産管理学会 第 41 回全国大会 開催校:福岡工業大学	消費者が小売店舗で野菜を購入する際に、その売場がイメージに及ぼす影響について検討することを目的として、Osgood らの SD 法（Semantic Differential Method：意味微分法）による印象評価実験を行う。 実験対象として福島県産の青果物を取り上げた。福島県産の農作物出荷に際しては、十分な安全検査が行われているにも関わらず、販売額は震災前までには回復していな状況である。自身の先行研究の結果と、人間の情報処理プロセスの直感的部分と分析的部分（二重プロセス理論）を考慮しネガティブな情報を払拭させるような、感性に訴えかける魅力ある売場作りについての検討を行った。 小倉哲也
17 感情心理学の基礎分析	単著	平成 27 年 3 月 27 日	グローバル経営学会 第 2 回 ICT&サービスマーケティング研究部会 開催校:大阪市立大学サテライト校 104 教室	感情によって意思決定の内容が左右される場面が多く存在する。感情が行動に影響を与える作用を、売場そのもののから模索する。 そこで、感情を理解するための先行研究に、「快楽－不快」の快楽次元と「覚醒－眠気」の覚醒次元の 2 軸に様々な感情を位

				置づけたRussell(1980)の『感情円環モデル』がある。 この覚醒の水準こそが購買の意思決定に大きな影響を及ぼすのではないかと仮説を立て、ミクロ経済学の効用理論からシミュレートを行った。 小倉哲也
18 売場イメージの数値化に関する考察	単著	平成27年5月2日	日本産業科学学会中部・関西合同部会 開催校:芦屋大学六麓荘キャンパス 5号館4階第1会議室	先行研究として、消費者が小売店舗で野菜を購入する際に、その売場がイメージに及ぼす影響について検討することを目的として、OsgoodらのSD法（Semantic Differential Method：意味微分法）による印象評価実験を行った。今回の報告では、POP広告（Point of purchase advertising)に絞った、調査を試みた。 小倉哲也
19 リーダーシッププログラムによる教育効果測定に関する一考察 -スポーツビジネス専攻学生に対してのコンピテンシーテストを活用して-	共著	平成27年 7月25日～26日	日本スポーツ産業学会 第24回学会大会 開催校:東京大学伊藤国際学術研究センター	2014年12月、大阪成蹊大学マネジメント学部マネジメント学科スポーツビジネスコースの学生60名を対象に、一泊二日の「リーダーシップ研修」を行った。 本研究では、「リーダーシップ研修」が参加学生の成長にどのような影響を及ぼしたのか、コンピテンシーテストを実施して、教育効果の測定と検討を行った。 林恒宏、小倉哲也
20 レンタサイクル利用者の特性に関する研究 ー「うめぐるチャリ」を事例にー	共著	平成27年11月20日～21日	グローバル経営学会 第6回シンポジウム 開催校:大阪市立大学サテライト校	本論文では、移動手段であるがその移動自体も観光コンテンツとして商品化できる「レンタサイクル」に注目した。 自転車での移動は、他の交通手段とは異なりスピードが緩やかで、止まりたい時に自由に止まることができ、街並みを自身のペースで楽しむことができる。また「歩く」こと以上に体力を消費せずに行動範囲が広がる。

				そこで、大阪駅を拠点として運営されているレンタサイクル「UMEGURU-CHARI」に注目し、利用者に対するインタビュー調査を実施し利用者の特性を明らかにした。 小倉哲也、林恒宏、田村匡
21　フットサル部男性におけるマグネシウム（Mg）摂取量	共著	平成27年11月28日	日本マグネシウム学会 第35回学術集会 開催校:京都大学学友会館	スポーツ選手のパフォーマンスの向上には、食事の内容と摂取タイミングが重要である。トレーニングによる身体活動量がもたらすエネルギー需要の増加に応じて、3度の食事に加えて補食や食事回数を増やす頻回食が行われる。今回我々は、骨の形成ならびにエネルギー産生に寄与し、疲労回復にも関係するとされるマグネシウム（Mg）に着目し、運動部男子学生の食事調査を実施し、Mg摂取について調査した結果を報告した。 伴みずほ、尾形希、柴沼真、小倉哲也、植田真司、羽藤文彦、山名美奈子、齊藤舜
22 日本におけるサイクルツーリズムの現状と課題-しまなみ海道サイクリングの外国人観光客に対するプロモーションに着眼して-	共著	平成28年3月14日～16日	日本体育・スポーツ経営学会 開催校:第39回大会 立命館大学大阪いばらきキャンパス	本論文では、広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶ「しまなみ海道サイクリング」を事例として、整備された経緯や利用状況などの現状について整理をおこない、インバウンド（外国人観光客）へのプロモーションの現状について明らかにすることで、サイクリングによる外国人観光客誘客に有効な手段を検討した。 林恒宏、小倉哲也
23 本におけるサイクルツーリズムの現状と可能性ーしまなみ海道サイクリングの外国人観光客に対するプロモーションに着眼してー	共著	平成28年7月16～17日	日本スポーツ産業学会 第25回学会大会 開催校: 順天堂大学本郷・お茶の水キャンパス　他	本研究では、広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶ「しまなみ海道サイクリング」を事例とし、整備された経緯や利用状況などの現状について特に尾道市を中心に整理をおこない、インバウンドへのプロモーションの現状について明らかにすることで、サイクリングによる外国人観光客誘客に

				有効な手法を検討することを目的とする。 林恒宏、小倉哲也
24 自転車産業の価値創造によるパラダイムシフトの一考察	単著	平成 28 年 9 月 9 日～11 日	日本生産管理学会 第 44 回全国大会 開催校:北海道科学大学	近年、自転車を通勤、通学、買い物、レジャー等の目的以外に、健康増進、環境保全等の理由から利用が増加している。そのような中、わが国における完成車の生産台数は、1973 年をピークに減少し、輸入台数は、1990 年以降に大幅に増加している。 日本の自転車環境には、独特の文化があり、俗にいうママチャリが主流である。そのママチャリも海外から安価なものが大量に輸入され、ママチャリに依存してきた国内産業は、厳しい環境にある。そこで、台湾の自転車メーカーである「ジャイアント社」の取り組み事例から、新たな展開を考える。 小倉哲也
25 自転車製造業のサービス化に関する研究 -ジャイアント社の事例より-	共著	平成 28 年 11 月 18 日～19 日	グローバル経営学会 第 7 回シンポジウム 開催校:常翔学園・大阪センター	近年、多くの製造業は、原材料や部品を外部から調達して加工や組立などの作業を行って完成品を作り出すことに特化するだけでなく、アフターサービスの収益モデルを開発して製品と組合せた価値づくりに努めている。 そこで、台湾最大の自転車メーカーである「ジャイアント社」の取り組み事例から、自転車製造業の新たな展開を考察する。 小倉哲也、林恒宏、今野一彦、田村匡
26 日本におけるサイクルツーリズムの現状と可能性 -琵琶湖一周サイクリング「ビワイチ」により誘客をはかる守山市に着眼して-	共著	平成 28 年 11 月 18 日～19 日	グローバル経営学会 第 7 回シンポジウム 開催校:常翔学園・大阪センター	近年、サイクリングによる観光客誘致を図る事例はいくつか見られる。 例えば、広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶ「しまなみ海道サイクリング」がある。また、岐阜県飛騨市古川町では、株式会社美ら地球が外国人向けのガイド付き里山

				サイクリングをサービスとして提供している。 本研究では、滋賀県守山市として「ビワイチ」サイクリングを活用し誘客をはかる背景を明らかにする。 林恒宏、小倉哲也、今野一彦、田村匡
27 IT の急速な発展が不動産賃貸仲介業にもたらした構造変化についての研究	共著	平成 28 年 11 月 18 日～19 日	グローバル経営学会 第 7 回シンポジウム 開催校:常翔学園・大阪センター	不動産賃貸仲介業界は、この四半世紀の間に空家の増加や高齢化、IT の進展等の波にもまれ、大きくその構造が変化した。 本論文では、そのような不動産賃貸仲介業の構造変化の様子と方向性について、特にインターネット・テクノロジー(IT)が及ぼした影響を中心に検証し、考察した。 田村匡、小倉哲也、林恒宏
28 生涯スポーツとしての競技スポーツの振興についての研究 -バドミントン競技を事例として-	共著	平成 28 年 11 月 18 日～19 日	グローバル経営学会 第 7 回シンポジウム 開催校:常翔学園・大阪センター	近年、成人の週 1 回以上のスポーツ実施率は緩やかな上昇傾向にある。 一方、社会人になってから競技スポーツを初心者から始めようとしても、現状では身近に競技スポーツを始めるための機会や相談窓口がほとんどない。 本論文では、生涯スポーツとしての競技スポーツについて、日本における法律上の位置づけや政策との関係性を検証し、大阪府下のスポーツ関連団体とバドミントン協会等について調査し、その実態と問題点を抽出した。今後の生涯競技スポーツの振興を図るための方向性等について考察をおこなった。 田村匡、林恒宏、小倉哲也
29 日本におけるサイクルツーリズムの現状と課題 -琵琶湖一周サイクリング「ビワイチ」により誘客をはかる守山市に着眼して-	共著	平成 28 年 12 月 3 日～4 日	日本観光研究学会 第 31 回全国大会 開催校: 江戸川大学駒木キャンパス	本論文では、「ビワイチ」のキャッチコピーで誘客を図る滋賀県・守山市の取り組みを事例として、ビワイチによる取り組みの経緯や事業などのげんじょうについて整理をおこない、サイクルツーリズムによ

				る誘客の可能性を検討した。 林恒宏、小倉哲也、今野一彦
30 コミュニティサイクルの現状と課題	共著	平成 29 年 2 月 25 日	平成 28 年度 日本産業科学学会 第３回関西・中部合同部会 開催校：大阪学院大学 17 号館 1 階レセプション B	近年、移動手段の一つとして、コミュニティサイクルが注目されている。そのため、大都市を中心に、コミュニティサイクルの導入が始まっている。 そこで、コミュニティサイクルの課題を抽出し、今後のあり方について検討をおこなう。 小倉哲也、林恒宏
31 サイクルツーリズムの経験価値に関する研究 -飛騨古川里山サイクリングを事例-	共著	平成 29 年 3 月 21 日～23 日	体育・スポーツ経営学会 第 40 回学会大会 開催校：鹿児島大学	2016 年に経済産業省とスポーツ庁が共同で取りまとめた「スポーツ未来開拓会議中間報告」ではスポーツ産業の推進に向けた基本的な考え方の一つとして「モノ」から「コト」へ」とある。 そこで、今後のスポーツ産業発展のための経験価値の重要と考える。 「飛騨古川里山サイクリング」の事例を基に、サイクルツーリズムにおける経験価値について検討した。 林恒宏、小倉哲也
(学会部会研究報告)				
1 日本生産管理学会 生産・物流・販売システム研究会	共同研究 (主査)	平成 23 年度	日本生産管理学会 関西支部	①サプライ・チェーン・マネジメント 原材料の調達・生産・物流・販売・消費まで、全体プロセスの顧客満足を高める、マネジメントシステムのあり方と中小企業への適応の研究。 ②生産管理の支援技術生産･物流のための管理技術と IT 支援技術 ものづくりの現場、複雑かつ不確実で高度な管理技術も必要になる。生産管理における技術のトレンドを追い、その管理を支える情報技術のあり方の研究。 ③事例研究 成功または失敗事例を取り上げた研究。 以上の研究テーマで、研究した内容で学会に報告・発表を行う。 小倉哲也、斎木克幸、丁井雅美、高橋昌憲、下左近多喜男

(助成金獲得)				
1 地域文化資本のデジタル化における社会効果測定の研究	共同研究 (主査)	平成 23 年 4 月 1 日～ 平成 24 年 3 月 31 日	平成 20 年度 (財)電気通信普及財団助成	デジタルコンテンツ化することによって、伝統技術や伝統技能を残すことの価値を考える。そこで、目に見えない技能や製造ノウハウなどを抽出し、それをデジタルコンテンツ化する。その後、新しく作ったデジタルコンテンツを見せたうえ、アンケートやヒヤリングを行い、分析し、その社会経済価値を実証的に測定評価した。 小倉哲也、川神裕司、久保田彰
(大学内共同研究)				
1 学生生活活性化のための学生支援の構築とその分析	共同研究	平成 23 年 4 月 1 日～ 平成 24 年 3 月 31 日	平成 23 年度 大阪成蹊大学 マネジメント学部共同研究	入学前教育から初年次・二年次の教育、また就職意識形成と、それぞれの学年の状況に応じた学生の意欲や満足度を測り分析することにより、入学した学生が充実した学生生活を過ごすためにどのような支援が必要であるかを、個別的また総合的に行った研究である。 [学内] 中村隆嗣、柴沼真、鍛治致、小倉哲也 [学外] 中村映美
2 学生生活活性化のための学生支援の構築とその分析（継続）	共同研究	平成 23 年 4 月 1 日～ 平成 24 年 3 月 31 日	平成 24 年度 大阪成蹊大学 マネジメント学部共同研究	平成 24 年度は、コース制導入ということを考慮した、入学前教育から初年次・二年次の教育、また就職意識形成と、それぞれの学年の状況に応じた学生の意欲や満足度を測り分析することにより、入学した学生が充実した学生生活を過ごすためにどのような支援が必要であるかを、個別的また総合的に行った研究である。 [学内] 中村隆嗣、柴沼真、鍛治致、庄子博人、小倉哲也 [学外]

				中村映美
3 スポーツ選手の食事および水分補給の実態と栄養教育に関する研究	共同研究	平成 24 年 4 月 1 日～ 平成 25 年 3 月 31 日	平成 25 年度 大阪成蹊大学 マネジメント学部共同研究	新体操は体型の美しさが有利となり、選手は日常的な減量をしている場合、貧血等の発症リスクが高まる。このようなリスクを高めないためにも、食のセルフマネジメントが早期から習得できるような食教育は大切になる。研究代表者として、幼稚園から高校生までの女子新体操ジュニア選手 31 名に対し、1. 食事介入および栄養教育、2. 水分補給の実態調査、3. 実践的栄養教育－食育バイキングーを行った。 伴みずほ、田中浩子、植田真司、羽藤文彦、小倉哲也
4 スポーツ選手の食事および水分補給の実態と栄養教育に関する研究	共同研究	平成 26 年 8 月 1 日～ 平成 27 年 3 月 31 日	平成 26 年度 大阪成蹊大学 マネジメント学部共同研究	女子新体操ジュニア選手、男子陸上選手、男子フットサル選手に対し食育を行った女子には補食の支援を強化しシーズン最後には菓子育を行った。男子選手に対しては昼食時を利用し、どんな環境でもバランス良く食べられるかを確認した。睡眠時間が短い者のうち血圧が高い目の者がいた。 伴みずほ、植田真司、羽藤文彦、小倉哲也
5 スポーツ・ツーリズムとしてのレンタサイクルの環境調査 －関西圏の事例を中心として－	共同研究	平成 27 年 9 月 1 日～ 平成 28 年 3 月 31 日	平成 27 年度 大阪成蹊大学 マネジメント学部共同研究	近年、環境の確保に対する社会的要請や健康志向の高まり、観光振興および地域活性化のツールとしての高い利便性を有している等の理由で、自転車が注目されている。これに伴い、近畿各地でもレンタサイクルが本格的に導入されている。そこで、本研究ではレンタサイクル利用者の特性および利用に伴う消費行動を明らかにする。 具体的には、関西を中心としたレンタサイクル事業者を取り上げ、レンタサイクルの利用者へのアンケート調査と事業者へのヒヤリングを実施し、レンタサイクルの

				利用実態や経済効果、導入効果を検証する。 林恒宏、小倉哲也、田村匡
（その他） 1 デジタルで甦る歴史絵巻展 in HAMADA 2008 （社会実験・展覧会開催） 2 『石州半紙』保存振興プロジェクト実行委員会 （企画・設計） 3 京都平安祭実行委員会 （社会実験・制作・企画・設計）		平成 20 年 8 月 1 日～8 月 21 日 平成 21 年 6 月 14 日 平成 24 年 3 月～9 月 23 日	後援:島根県浜田市、 財団法人 デジタルコンテンツ協会 NPO 法人 A-GENER いわみ 財団法人、 京都国際文化交流財団 NPO 法人、 KOBE Creative 協会、 株式会社虎の穴 会場:浜田市世界こども美術館 島根県、浜田市、石州和紙協同組合、株式会社 大広、大阪市立大学大学院創造都市研究科 会場:島根県立西部情報化センター 一般社団法人京都音協、島根県、浜田市、石州和紙協同組合、株式会社大広、他 会場:平安神宮、 岡崎地区	デジタルコンテンツの発信とデジタル著作権管理の意義と可能性を人々に周知することを目的とした展示会。（文化財の保管や教育） 実証実験として、本物と日本最先端のデジタル複製技術の価値分析を、来館者や市民から調査を行った。文化財の商業利用（食品産業、観光業、など）につても調査した。 実行委員会　委員:運営全般に関わる業務 『石州半紙』ユネスコ無形文化遺産登録（2009 年 9 月予定）時における各種権利保護及び情報発信における基本的な考え方について。今後、考えられるイベントとリスク管理について。 石州半紙と地元日本海酒造のコラボレーションのユネスコ無形文化遺産登録記念のお酒を製作した 実行委員会委会　委員:運営全般に関わる業務 日本に元気をもたらすため、新規性と創造性をもったイベントを、京都という国際観光文化都市で、日本全国や世界に向けて、発信・開催。世の中の平和と安寧を祈るとともに、京都を代表する文化交流ゾーンである岡崎地区を中心地として、東日本大震災の追悼と復興記念を込めて開催した。

第 2 回開発と平和のためのスポーツ国際デー（IDSDP）記念シンポジウム 「開発と平和のためのスポーツ国際デー記念シンポジウム in 京都」 (実行委員)		平成 27 年 4 月 6 日	会場：立命館大学朱雀キャンパス 主催：日本スポーツ振興センター 共催：スポーツ庁、外務省、国際協力機構、国際交流基金、日本オリンピック委員会、日本障がい者スポーツ協会、日本アンチ・ドーピング機構、他	実行委員会委会　委員:運営全般に関わる業務 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの開催国として世界のより良い未来を目指し、スポーツの価値を世界中に広げていくことを目的に「スポーツ・フォー・トゥモロー」というスポーツを通した国際貢献事業。 本シンポジウムは、「開発と平和のためのスポーツ国際デー」を記念した関西ではじめてのイベント。

（経営）福田　真規夫

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年　3 月　19　日

氏名　福田　真規夫　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
総合系：情報学：人間情報学：ヒューマンインターフェース・インタラクション	ヒューマンインターフェース，ロボット，ソフトコンピューティング，拡張現実感
総合系：情報学：情報学フロンティア: 学習支援システム・ゲーム情報学	知的学習支援システム，シリアスゲーム
人文社会系：社会科学：経営学	意思決定支援システム，経営情報システム

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1.外部講師による実践的知識の教授	2001 年 4 月より 2013 年 8 月に至る	人間健康科学科の授業「健康科学特論」と「健康関連ビジネス特論」において，5 コマ～6 コマ程度を健康に関連する分野で活躍されている一般の社会人の方々に講義をいただき，学生らに実践的かつリアルタイムな情勢を理解させている．
2.食生活アドバイザー検定試験対策講座	2004 年 4 月より現	人間健康科学科の学生を対象とした「食生活アドバイザー検定試験」の対策講座を四

	在に至る	谷教授（当時）が中心となって課外時間に行っているが，その講座の「流通」部分3コマを講師として担当している.
3.日本赤十字社救急法救急員講習の運営管理	2004年6月より2008年6月まで	日本赤十字社の救急法救急員資格の講習会・検定試験を，年に1回，日本赤十字社・守口市防災課と共同で本学にて実施している．受講学生の募集・各関係機関との調整，講習会の運営管理を行っている.
4.e-learningによる資格対策講座の実施	2006年5月より現在に至る	「福祉住環境コーディネイター」の資格対策講座を e-learning で行っている．この方法により，学生は自身の都合の良い時間に対策講座を受講できる.
5.コンピュータ演習室を使ったゼミナール授業	2006年4月より現在に至る	ゼミナール授業をコンピュータ演習室で行うことにより，情報機器を文具のように使いながら討論や発表を行う経験を積ませる.
6.ロボットの製作およびプログラミング演習の実施	2011年9月より現在に至る	所属学科である情報デザイン学科では，2年生の学生を対象とした「ものづくり合宿」を，毎年1回1泊2日で行っている．平成23年9月においては，ロボットのハードウエアの組み立てから，動作を行うソフトウエアの開発までの演習を行った．この演習により，受講学生にとっては，ハードウエアとソフトウエアの有機的なつながりについて体験を通して学べることになる.
2　作成した教科書，教材 1.e-learningコンテンツ 「福祉住環境コーディネイター2 級検定対策講座」	2006年2月より2009年3月に至る	著者のビデオによる講義とスライドをシンクロさせて通常の授業のように編集したもの.
2.教科書「経営情報論」	2007年4月より2008年3月に至る	科目「経営と情報」用として、企業経営とそのための情報処理について記したもので、実践例などを用いて理解しやすいようにしている.

3.教科書「教科書 ICT」	2008 年 4 月 よ り 2009 年 3 月に至る	科目「情報処理のしくみ」用として、情報処理の実践例などを用いて、コンピュータやネットワークが使われている意味や意義を理解しやすいようにしている.
4.e-learning コンテンツ 「IT パスポート試験対策講座」	2008 年 4 月 よ り 2009 年 3 月に至る	情報処理技術者向けの国家試験「IT パスポート」の受験対策として，自習形式で学べる e-learning コンテンツを制作した.
5.e-learning コンテンツ 「健康科学特論における福祉住環境コーディネイターの解説」	2011 年 4 月 よ り 2011 年 8 月まで	科目「健康科学特論」の補講授業 1 コマに相当する講義内容を e-learning コンテンツとして製作し，実際に補講に使用した. 学生が学習したかどうかの確認については, 小テストをコンテンツ内に設けるなどの工夫をした.
6.e-learning コンテンツ 「ヒューマンインターフェースにおけるロボットインターフェースの解説」	2011 年 4 月 よ り 2011 年 8 月まで	科目「ヒューマンインターフェース」の補講授業 1 コマに相当する講義内容を e-learning コンテンツとして製作し, 実際に補講に使用した. 学生が学習したかどうかの確認については, 小テストをコンテンツ内に設けるなどの工夫をした.
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1.2008 年度後期授業評価	2008　年 10 月より 2009 年 3 月まで	科目「レジャースポーツ概論」およびセミナーⅢ・Ⅳについての授業評価アンケートを行った結果、授業の運営（私語の抑制）や視覚教材（ﾋﾞﾃﾞｵ）の活用について高い評価を得た.
2.2009 年度前期授業評価	2009 年 4 月 よ り 2009 年 9 月まで	科目「健康科学特論」およびセミナーⅡ・Ⅲについての授業評価アンケートを行った結果、授業の運営（私語の抑制）や社会で活躍されている方を講師に招いた点について高い評価を得た.

3.2009 年度後期授業評価	2009 年 10 月より 2010 年 3 月まで	科目「レジャースポーツ概論」およびセミナーⅢ・Ⅳについての授業評価アンケートを行った結果、授業の運営（私語の抑制）や視覚教材（ﾋﾞﾃﾞｵ）の活用について比較的高い評価を得た．一方で，レジャースポーツの種目について，もっと幅広い範囲を求める意見も有った．
4.2010 年度前期授業評価	2010 年 4 月 よ り 2010 年 9 月まで	科目「ヒューマンインターフェース」および「健康科学特論」についての授業評価アンケートを行った結果，留学生の要望もあったルビをふった配布資料や視覚教材（ﾋﾞﾃﾞｵ）の活用について比較的高い評価を得た．
5.2010 年度後期授業評価	2010 年 10 月より 2011 年 3 月まで	科目「エンターテイメント産業論」およびセミナーⅢ・Ⅳについての授業評価アンケートを行った結果、最新かつ先端的な事例（文献やビデオ）の紹介について高い評価を得た．一方では，エンターテイメント産業について，もっと多くの分野について学びたいとの要望もあった．
6.2011 年度後期授業評価	2011 年 9 月 よ り 2012 年 3 月まで	科目「視聴覚教育メディア論」および「健康科学特論」についての授業評価アンケートを行った結果，ビデオ教材などを通して最新の事例を活用したことについて高い評価を得た．また，授業の運営方法（出席のカウント，私語の抑制）についても高い評価を得た．
7.2012 年度前期授業評価	2012 年 4 月 よ り 2012 年 9 月まで	科目「ヒューマンインターフェース」および「エンターテイメント産業論」についての授業評価アンケートを行った結果，多種類教材（プリント，ビデオ，インターネット）を通して最新の事例を活用したことについて高い評価を得た．また，授業の運営方法（出席のカウント，私語の抑制）についても高い評価を得た．
8.2012 年度後期授業評価	2012 年 9 月 よ り	科目「エンターテイメント産業論」および「健康科学特論」についての授業評価アン

	2013 年 3 月まで	ケートを行った結果，多種類教材（プリント，ビデオ，インターネット）および外部講師の起用を通して最新の事例を活用したことについて高い評価を得た．また，授業の運営方法（出席のカウント，私語の抑制）についても高い評価を得た．
9.2013 年度前期授業評価	2013 年 4 月 よ り 2013 年 9 月まで	科目「コンピュータシミュレーション」および「ヒューマンインターフェース」についての授業評価アンケートを行った結果，多種類教材（プリント，プログラミングソフト）および外部講師の起用を通して最新の事例を活用したことについて高い評価を得た．また，授業の運営方法（出席のカウント，私語の抑制）についても高い評価を得た．
10.2013 年度後期授業評価	2013 年 9 月 よ り 2014 年 3 月まで	科目「情報科学特講」および「情報メディア社会学」についての授業評価アンケートを行った結果，多種類教材（プリント，ビデオ，ロボット）および外部講師の起用を通して最新の事例を活用したことについて高い評価を得た．また，授業の運営方法（出席のカウント，私語の抑制）についても高い評価を得た．
11.2014 年度前期授業評価	2014 年 4 月 よ り 2014 年 8 月まで	科目「エンターテイメント産業論」および「ヒューマンインターフェース」についての授業評価アンケートを行った結果，DVD やインターネット動画などの教材を多用し，最新の事例を活用したことについて高い評価を得た．また，授業の運営方法（出席のカウント，受講態度への注意励行）についても高い評価を得た．
12.2014 年度後期授業評価	2014 年 9 月 よ り 2015 年 3 月まで	科目「情報学入門」,「情報メディア社会学」においては，情報に関する幅広い分野を対象とするため，教材としてテキストや各種統計資料だけでなく，ネット動画などを多用して理解の促進を測った．また，「食品

		流通論」は，資格試験対応の科目であるが，内容の理解を図るため，フードビジネスに関する最新のデータを使った．そのため，概ね高い評価を得た．
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1.立正大学サイバーキャンパスネットワークプロジェクト 第３回報告会」－次世代大学教育を考える－	2009 年 12 月 5 日	「問題解決能力向上を目的とした次世代の大学教育の提案～ゲーム制作演習を通して～」と題して，問題解決能力を向上させる演習として学習動機を向上させるためにゲーム制作を採りいれる方法について，次世代の大学教育の方法の一つとして提案した．
2.大阪国際大学教養講座	2010 年 2 月 19 日	「人と機械の間を取り持つ技術」という題目で，ヒューマンインタフェース技術の歴史や現況および未来に予想される技術について講演した．
3.関西文化学術研究都市推進機構「市民公開講座 2010」	2010 年 11 月 13 日	「ゲーム業界が求める人材」と題して，一般的にイメージされているゲーム業界の人材像を覆すようなゲーム業界の求める人材像について解説した．
4.立正大学地球環境学部での講演	2012 年 5 月 20 日	立正大学地球環境学部の学生約 150 名に対して，「最先端ヒューマンインタフェース技術」について，SF 映画内に展開される事例を通して説明した．学生達は興味深くかつ熱心に聴講してくれた．
5.門真市市民講座	2013 年 2 月 16 日	「東日本大震災の復興ボランティア活動」と題して，門真市の市民の方々を対象に，学生とともに行った被災地域で行った復興ボランティア活動の内容と現地の模様をスライドや動画を用いて講演した．
6.門真市教育委員会「子ども理科講座『ノーベル』」	2013 年 8 月 9 日	門真市教育委員会が主催する小学生向けの夏休み理科講座において，門真市在住の小学生約 20 名を対象にセンサー付ロボッ

		トのプログラミングの講座を主宰し，センサーで盤上に描かれた黒い線をトレースして走行するロボットカーのプログラミングを指導した.
7.門真市教育委員会「子ども理科講座『ノーベル』」	2014 年 8 月	門真市教育委員会が主催する小学生向けの夏休み理科講座において，門真市在住の小学生約 20 名を対象にセンサー付ロボットのプログラミングの講座を主宰し，センサーで盤上に描かれた黒い線をトレースして走行するロボットカーのプログラミングを指導した.
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1.ｽｸｰﾊﾞｰﾀﾞｲﾋﾞﾝｸﾞﾗｲｾﾝｽ	2003 年 9 月	PADI のスクーバーダイビングライセンスで「オープンウオーター」クラスを取得．人間健康科学科の授業の「レジャースポーツ」に関連する.
2.福祉住環境コーディネイター検定 2 級	2003　年 11 月	東京商工会議所検定で，バリアフリーなどの福祉リフォームのコーディネイターの能力を見る検定．学生への資格取得対策講座に関連する.
3.日本赤十字社救急法救急員	2004 年 6 月	日本赤十字社の講習を受けて検定試験に合格すると取得できる資格で，課外授業「救急法救急員」講座に関連する.
4.厚生労働省特別教育の修了証	2011　年 10 月	大学が派遣する災害復興ボランティアにおいて活用する目的で，労働安全衛生法による小型車両系建機操縦についてコマツ教習所大阪センタにて受講し修了した.
2　特許等		

3　実務の経験を有する者についての特記事項 1.他大学との共同研究	2009 年 6 月 よ り 2012 年 3 月	平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）の交付を受けて、立正大学（東京都）、千葉商科大学（千葉県）の研究者と、「卒業研究の指導を支援するシステム」について共同研究を行った.
2.枚方市との共同研究	2014 年 4 月より現在に至る	枚方市役所総務部情報推進課との共同研究として，枚方市の観光情報を Web にて配信し，それをスマートフォンにて受信できるシステムを大学院生の研究指導も兼ねて開発している.
4　その他 1.科学研究費補助金（基盤研究 C）の受領	2009 年 4 月 よ り 2012 年 3 月	科学研究費補助金基盤研究 C（一般）を「問題解決型演習の支援システムの研究」をテーマに約 496 万円を受けた.

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1.『情報科学シリーズ(7)「ＳＥの世界」』	共	1988 年 3 月	パワー社 pp.64-67 （第 7 章メーカ SE の仕事）	企業の経営情報システムの開発を担当するシステムエンジニア（ＳＥ）の仕事の内容を紹介するとともに、システム構築にあたっての留意点などを実践的に解説したものである．著者は、第２編第７章「メーカＳＥの仕事」の部分を担当し、あるシステム開発事例を通してコンピュータメーカによるアプリケーションシステムの構築の実態や留意点などについて記述した. 有田雅一、上田昭夫、福田真規夫，他 10 名
2.『情報社会と情報基礎副題：情報学入門』	共	1990 年 4 月	第一法規出版 pp.128-136 （第 5 章 2 節　ストア・オートメーション）	大学及び短大生を対象とした情報学の入門書であり、身近な事例を通して、情報を活用しながら問題解決を行っていく過程や有効

				な方法について記述している．また、社会で一般的に運用されている各種の情報処理システムの機能や概要についても述べている． 著者は、第３部・第５章・２節の「ストアオートメーション」の部分を担当し、小売業の経営情報を処理する、ストアオートメーション・システムの導入の背景や実態、その将来性などについて記述した． 赤松辰彦、石桁正士，福田真規夫他 27 名(情報学教育研究会)
3.『上級ＳＥ心得ノート』	共	1995 年 1 月	日刊工業新聞社 pp.157-190 (6 プレゼンテーション技法，7 プロジェクト管理)	本書は、上級ＳＥ（システムエンジニア）になるための、純粋に基盤とされる能力についてと、ＳＥ業務の中で、基盤能力を適用する項目について述べている．著者は、第二部の「6 プレゼンテーション技法」でプレゼンテーションを行う際の注意点やビジュアルドキュメントの作り方を述べ、また「7 プロジェクト管理」では、システム開発プロジェクトのコスト面、納期面の管理方法について述べている． 石桁正士、金澤孝行、福田真規夫他５名
4.『人間健康科学入門』	共	1995 年 2 月	信山社 pp.273-287	本書は、人間健康科学を学ぶ上での基礎となる事柄について取り上げたもので、著者の属する学科の教員がそれぞれの専門分野から人間健康科学について述べたものである．著者は、「4 章健康に関わる諸要因」の中の「8 節人間の知的行動とコンピュータ」において、人間の考えたり、識別したりする知的行動とコンピュータ

				を中心とする情報技術の関係について述べている．徳原康彦、藤本雅彦、福田真規夫他 15 名
5.マルチメディア時代と情報教育	共	1995 年 4 月	パワー社 pp.66-75 （第 1 部第 9 章ハイパーメディアの特徴と教育への利用）	マルチメディアの時代を迎え、これからの学習者には「情報活用」や「メディア活用」が重要であるとの考え方から、特に教職に就こうとする方へマルチメディア時代における情報教育のあり方について述べたものである．著者は、「第 9 章ハイパーメディアの特徴と教育への利用」の部分を担当した． 赤松辰彦、石桁正士、福田真規夫他 13 名
6.情報社会で役立つ情報教育の知恵	共	1997 年 6 月	パワー社 pp.39-42 （§7．モデルチェンジが必要な従来型の情報教育）	本書は，情報教育について，著者らが提案する新しい情報教育案，推薦する情報教育の方法，著者らが行っている情報教育の実践例から構成されている．現在および今後に情報教育を担当する教師にとっての参考書となることを目的として著述されている． 今田彬，福田真規夫他 15 名．
7.演習形式で学ぶマルチメディア	共	1997 年 4 月	海青社 pp.1-24 （第 1 章マルチメディアとは） pp.87-120 （第 5 章ホームページを作成してみよう）	本書によって，マルチメディアコンテンツを情報の媒体として使いこなしていくための基本的な知識を獲得し，それらを活用していくリテラシーを育成することを目的としている．そのため，マルチメディアの概念を，PowerPoint，G．CREW，Paint Shopp.ro，HTML を使い実際にコンテンツを制作する演習を通して経験的に学ぶための教科書である． 山尾正之，福田真規夫

8.創造する SE	共	2000 年 4 月	ＣＱ出版社 pp.9-26 （第 1 章 SE と創造） pp.85-99 (第 5 章開発各フェーズの創造的な SE 活動)	ＳＥ、つまりシステムエンジニアの仕事は、さまざまな目的を持った情報処理システムを開発することにある．著者は、本書において、「創造性を持つために」という章を担当した．ここでは、どのようなシステムを開発するかを企画する際の創造力、また実際に開発作業に入った段階で必要とされる創造力についてまず述べ、次にそのような創造力を持つためにはどのような方法や考え方が必要なのかについて述べた． 石桁正士，福田真規夫，水島章弘他２名
9.ＳＥのための仕事術心得ノート	共	2004 年 2 月	日刊工業新聞社 pp.174-182 （第 3 部第 1 章健康だからできる良い仕事)	本書は、上級のＳＥ（システムズエンジニア）になるためには、どのような心がまえや学習が必要かについて、実際に現役のＳＥとして活躍している方々からの意見を集約したものである．著者はその中で、「ＳＥと健康」という章について担当し、長時間労働で健康を害しがちなＳＥにとって、冷静で正確な仕事をするためには、健康管理面でどのような点に注意し、自己を向上させていけば良いかについて述べている． 石桁正士，福田真規夫，他 19 名．
10.経営情報論	共	2007 年 2 月	日科技連 pp.146-163 （第 4 章 4-2 ビジネスシステム)	本書は、文科系学生を対象にした企業経営と情報との関係についての講義のテキストとして執筆したもので，具体例を中心に編集してあるので、学生にとって理解しやすい内容としている．また，初級システムアドミニストレータ試験、基本情報技術者試験の受

				験を目指す学生、社会人のための自学書としても活用できるようにしてある．内容は，情報戦略，企業会計，経営工学，情報システムの活用，関連法規から成っている． 山下倫範，上山俊幸，福田真規夫他２名
11.教科書 ICT	共	2008 年 3 月	日科技連 pp.48-66 （第 3 章パソコンの周辺機器）	本書は，パーソナルコンピュータについての基礎的知識について説明したもので，大学の講義用テキストに使えるとともに初級システムアドミニストレータ試験、基本情報技術者試験の受験を目指す学生、社会人のための自学書としても活用できるようにしてある．内容は，パソコンのハードウェア，周辺機器，ソフトウェア，インターネットの活用，ＬＡＮの活用，ネットワークの仕組み，マルチメディアから構成されている． 山下倫範，上山俊幸，福田真規夫他２名
12.「おたく文化」の様相―クール・ジャパンの現状と国際化―	共	2011 年 9 月	大阪国際大学研究叢書 pp.103-132	本書は，日本における「おたく」の文化の様相について，各著者の専門性の視点から述べたもので，福田の担当したのは「第４章ゲームおたくのコミュニケーション能力向上に関する試案―ゲーム挿入によるコミュニケーション能力の開発―」である．この中で，いわゆる「ゲームおたく」とされる若者のコミュニケーション能力の向上をはかる手段として，テーブル・トーク・ロールプレイングゲームを活用した例を中心に述べている． 山本勇次，景山佳代子，有田亘，

				福田真規夫，稲泉綾二.
13. コンピューターと情報システム	共	2017年4月	日本理工出版会	本書は，大学および短期大学の学生を対象に， 情報に関する基本的な知識や認識をもってもらい，社会で生きていくための正しい知識と技術の基本を学んでもらうことを目的としたものである．コンピュータのハードウエアやソフトウエアなどの基本的な事柄から，情報システムと社会の関わりやこれからの情報社会についてなどについて述べている． 福田真規夫監修，多田憲孝・前川武・矢島彰.
（学術論文） 1.業種ノウハウを活かしたシステム導入（査読有り）	単	1988年11月	富士通(株)ＳＥ論文集	業種ノウハウを最大限に活かし、業務のコンサルティングを行いながらシステム導入作業を進めた著者の事例を紹介すると同時に、将来求められるＳＥ像について提言した．（発表賞を受賞）
2.問題解決能力向上のためのコンピュータ利用(1) 副題：アパレルショップマネジメントゲームの開発	共	1990年12月	帝国学園紀要 第16号 pp.53-64	企業において経営・管理を担当するものにとって問題解決能力の向上は重要な課題であり、コンピュータを用いたマネジメントゲームはそのための有効な手法である．本研究ではアパレルショップの経営者を想定したマネジメントゲームの開発を行い、その概要について述べている． 福田真規夫、黒田勝明、三木正伸
3.上級ＳＥ育成のための教育の研究 副題:教育内容の検討と教育の試行について	共	1991年12月	帝国学園紀要 第17号 pp.297-308	経営情報システムなどのシステム開発の上流工程に携わる上級のＳＥ（システムエンジニア)を育成するための教育カリキュラム

				教育方法の開発について述べたもので、特に本論文では、上級ＳＥの基礎能力である情報理解力やコミュニケーション能力などの向上に重点をおいた教育について研究し、実際の上級ＳＥ候補者に試行的に教育を行ったが、その結果などについて報告している. 福田真規夫、石桁正士、中村民明、福島健彦、吉川直史
4.情報活用のための概念チャート図の開発とその教育への応用（査読有り）	共	1992年11月	日本教育情報学会誌「教育情報研究」第8巻2号 pp.38-43	我々は、情報活用能力の向上を図るための教育方法を開発するため、まず情報活用能力の概念を「概念チャート図」という形に表した．本論文では、特にこの概念チャート図」をワープロ演習の課題作成時に学生に掲示し、この図を理解させながら課題作成時における情報活用行動の参考にさせた結果について報告し、この図の汎用性について論じている. 渡辺寛二、福田真規夫、石桁正士
5.情報活用能力向上を目的とした教育の研究(1) 副題：コンピュータゲームの作成演習の試行	共	1992年12月	帝国学園紀要第18号 pp.193-205	我々が考案した情報活用能力の「概念チャート図」を「情報活用のしくみ」であるコンピュータシステムの企画、設計および製作をする演習授業に適用した．本論文では、このような演習における行動が、「概念チャート図」に示された概念を満足させるという仮説を持つに至った理由と、この演習の状況について述べている．　福田真規夫、渡辺寛二
6.上級ＳＥセミナー受講生選別のためのコンピュータ・テスティングの試み（査読有り）	共	1993年 3月	大阪電気通信大学研究論集(自然科学編)第 28号 pp.87-95	我々は、上級ＳＥ(システムエンジニア)を育成するための教育方法の研究の一環として、研究成果を適用するセミナーを実際のＳＥ

				に対して行っている．本論文では、セミナーを受講するＳＥのシステムセンスを探るための方法として､オーサリングシステム製作用のソフトウエアを用いたコンピュータテスティングの試みについて述べている． 石桁正士、木下真也、明賀保仁、福田真規夫
7.手書き入力装置を使用した漢字学習システムの開発(1)	共	1994年12月	大阪国際女子大学紀要 第20号-2 pp.101-110	非漢字圏に居住し日本語を学ぶ人々にとって､漢字の学習は困難な課題であるが､これをコンピュータの支援により行うシステムを我々は開発している．本論文では､最適な漢字の学習方法の仮説を立て､その仮説を実践するためのシステムの開発に至るまでの過程やシステムの概要について述べている． 福田真規夫、木村真治
8.情報カードを活用した情報教育の実践に関する研究（査読有り）	共	1995年 3月	大阪電気通信大学研究論集(人文･社会科学編) pp.121-135	我々は､情報処理教育の中に課題解決学習の手法を採り入れ､学習者に主体的な意識･態度を持たせながら情報活用能力や問題解決能力を育成しようとしている．本論文では､特に表計算ソフトウエアの習熟を目的とする演習授業において､ソフトウエア操作上の疑問点やその解決方法などを学習者自らに｢情報カード｣として記入させ、また他者が作成した｢情報カード｣を活用させたことについて報告している． 渡辺寛二、横山宏、福田真規夫、石桁正士
9.上級システムエンジニアの基盤能力育成法（査	共	1995年 6月	日本教育工学協会会誌 ｢工学教育｣第43巻3号	システム開発の上流工程に携わる上級のＳＥ(システムエンジニ

読有り）			pp.11-16	ア)を育成するための教育カリキュラムや教育方法の開発について述べたものである．特に、上級ＳＥの基盤能力について分析し、各種の調査結果との比較を行った結果をもとに教育カリキュラムを開発し、それを実践した結果について報告している． 福田真規夫、石桁正士
10.手書き入力装置を使用した漢字学習システムの開発(2)	共	1995年12月	大阪国際女子大学紀要 第21号-2 pp.135-145	非漢字圏に居住し日本語を学ぶ人々を対象とした漢字システムを我々は開発している．前報（1）では、システムの開発に至るまでの過程やシステムの概要について述べたが、本報では、そのシステムの試行結果にもとづく教育効果の展望や、このシステムを手書き入力機能の付属した電子手帳に移植した結果について述べている． 福田真規夫、石桁正士
11.学習支援システムにおける知的学習ナビゲーションの研究（査読有り）	共	2003年3月	東亜大学大学院総合学術研究科修士論文	本論文は、e-learningにおいて、主にドリル型学習支援システムとして用いられるWBTで、学習者が回答した内容に対して、単に正解か否かを自動的に判定するのでなく、学習者に対して助言や学習方向の示唆を与える学習ナビゲーションについて述べたものである．このナビゲーションは、コンピュータが出した課題に対して、学習者の回答結果からファジィ推論を行い、推論結果から人間の教授者に替わって知的に評価結果や学習の指導を行うしくみになっている． 福田真規夫

12.e-learning における知的学習支援構造の設計	単	2006 年 5 月	大阪国際大学 紀要国際研究論叢 第 19 巻 2 号 pp.129-140	e-learningが普及され始めているが，学習者に対して知的に学習の支援を行うしくみついてはまだ研究が進んでいない．本論文では，このような状況に対して，簡易的な手法で，学習者に対してメッセージを出力し，学習支援を行える仕組みを開発したことについて述べている． 福田真規夫
13.e-learning における学習ナビゲーション（査読有り）	単	2007 年 2 月	パーソナルコンピュータ利用技術学会論文誌 Vol.1 No.1 pp.6-13	e-learningを使って学習している学習者の理解状況を把握し，それに適合した評価メッセージや今後の学習課題などを，「学習のナビゲーション」として学習者に掲示するシステムを開発し試行した結果について述べている． 福田真規夫
14.課題研究授業支援システムの研究 ～総合系学部における卒業研究の上流工程の支援～（査読有り）	単	2007 年 11 月	大学教育学会誌 第 29 巻 2 号 pp.122-130	総合系学部においては，その指導教員の専門分野や経験が大きく異なるため，卒業研究の指導方法や到達目標に大きな違いでるという問題がある．本論文は，このような問題を解決するために卒業研究の計画書を支援するシステムを開発し，試行した結果について述べている． 福田真規夫
15.計画書作成支援システムにおける問題解決型演習の効率化（査読有り）	単	2008 年 2 月	産業教育学会誌「産業教育学研究」第 38 巻 1 号 pp.15-22	卒業研究のような問題解決型演習の効率化を図るため，本論文では特にテーマを決定することを支援する仕組みを開発したことについて述べている． 福田真規夫

16.学習支援インターフェースの研究	単	2008年3月	大阪大学大学院基礎工学研究科博士論文	コンピュータによる学習支援を行う場合，における学習者とコンピュータとの間をとりもインターフェースに，従来は人工知能技術を使うなど　高度な技術を適用する研究が進められてきているが，煩雑で使う側の負担が大きい．本論文では，人工知能技術を適用する場合と比較して，簡易なファジィ制御の考えを学習者の理解状況に適合し，学習支援（学習のナビゲーション）が実現できる手法について述べている． 福田真規夫
17.時代やニーズの変化に対応した大学図書館の在り方	共	2010年10月	大阪国際大学紀要「国際研究論叢」第24巻第1号	大学図書館を取り巻く現状への考察と本学図書館における利用者アンケート調査結果およびその他の統計を基に，大学図書館が今後どのような方向へ力を注いでいく必要があるかを検討したことについて述べている． 福田真規夫，中井哲夫，吉岡肖治
15.計画書作成支援システムにおける問題解決型演習の効率化（査読有り）	単	2008年2月	産業教育学会誌「産業教育学研究」第38巻1号 pp.15-22	卒業研究のような問題解決型演習の効率化を図るため，本論文では特にテーマを決定することを支援する仕組みを開発したことについて述べている． 福田真規夫
16.学習支援インターフェースの研究	単	2008年3月	大阪大学大学院基礎工学研究科博士論文	コンピュータによる学習支援を行う場合，における学習者とコンピュータとの間をとりもインタ

				ーフェースに，従来は人工知能技術を使うなど　高度な技術を適用する研究が進められてきているが，煩雑で使う側の負担が大きい．本論文では，人工知能技術を適用する場合と比較して，簡易なファジィ制御の考えを学習者の理解状況に適合し，学習支援（学習のナビゲーション）が実現できる手法について述べている． 福田真規夫
17.時代やニーズの変化に対応した大学図書館の在り方	共	2010年10月	大阪国際大学紀要「国際研究論叢」第 24 巻第 1 号	大学図書館を取り巻く現状への考察と本学図書館における利用者アンケート調査結果およびその他の統計を基に，大学図書館が今後どのような方向へ力を注いでいく必要があるかを検討したことについて述べている． 福田真規夫，中井哲夫，吉岡肖治
18.ゲームと社会-ゲーム業界が人材に求める要素とゲーム業界を目指す学生のギャップ-	単	2011年3月	大阪国際大学紀要「国際研究論叢」第 24 巻第 3 号 pp.59-75	普段の生活の中でビデオゲームなどをプレイする時間が多く占める学生は，将来はゲーム制作などの仕事に就くことを希望する者が多い．一方で，ゲーム関連企業は，求人するにあたって，第一の条件としてコミュニケーション能力をあげる．しかしながら，このような日頃から一人で自室に籠ってゲームに興ずる学生は，このコミュニケーションに難がある者が多い．本研究はこのようなギャップについて記すととも

				に，コミュニケーション能力を向上させる方法として，ゲームを用いた事例について述べている． 福田真規夫
19.The Supporting System for the First Process of PBL（査読有り）	共	2011 年 12 月	Vol12, Number2, ISSN1525-9293, ACIS International Journal of Computer & Information Science pp.8-13	PBL を実施する場合, 最初の計画を策定する段階があるが，この作業は, PBL を経験したことの無い者にとっては，知識も少ないため困難な作業になる．また，成果物である計画書もあいまいなものになりがちである．本研究では，このような計画書段階での作業を，データベースに格納されている PBL の工程に関する知識をユーザに掲示し，ユーザはそれを基に計画書の各項目を埋めていくことで，計画書が完成させていくことができるシステムを開発した. 福田真規夫, 山下倫範, 上山俊幸, 西本実苗
20. グローバル化と上流工程に注目した新たな情報処理教育の研究（査読無し）	共	2018 年 4 月 発行予定	太成学院大学紀要　第 20 巻 37 号	本稿は，日本の得意分野である ICT 産業のグローバル化を進めていくためには，特に大学などの高等教育機関におけるソフトウエアの開発教育の改善が必要と考え，教育の内容および実践について研究するものである。 福田真規夫，工藤英男，吉川博史
（その他） 国際会議での発表 1.Designing of Computer Game for Managing an Apparel Retail Store （査読有り）	共	1991 年 7 月	ISAGA'91: 22th Annual International Conference of International Simulation and Gaming Association (Kyoto,Japan)	コンピュータゲームによって衣料品を取り扱う小売り店舗の経営を学ぶシステムを開発したが、その概要について述べた. 福田真規夫、黒田勝明、三木正伸

2.Developing Competence of Utilizing Information by using Authoring Software for Creating Computer Games （査読有り）	共	1993 年	ED-MEDIA'93: World Conference on Education Multimedia and Hypermedia (Orlando, USA) pp.634-634	コンピュータゲームを企画から設計、製作に至るまでの過程を体験させ、問題解決能力の向上を図る教育の試みについて、その具体的な方法やアンケートの分析による考察結果について述べた. 福田真規夫、木村真治、黒田勝明、渡辺寛二、 家本修
3.The Role of Hand Writing Input System in Learning Japanese Writing （査読有り）	共	1994 年 9 月	LETA'94: Learning Environment Technology (Adelaide, Australia) pp.72-72	パーソナルコンピュータに手書き入力装置を接続し、コンピュータ上で書き取り学習ができる漢字学習システムを開発したが、その概要やこのようなシステムを開発するに至った経緯について述べた. 福田真規夫、木村真治
4.The Japanese Learning System on Hypermedia by using Handwriting Input System （査読有り）	共	1995 年 3 月	ICTE'95: 12th International Conference on Technology and Education (Orlando,USA) pp.531-533	既に開発している漢字学習システムにハイパーメディア形式を導入し、学習時に様々な知識と容易に関連させるしくみとした. このシステムの概要と特長について述べた. 福田真規夫、木村真治
5.The Hypermedia System for Japanese Learning by using Hand Writing Input Device （査読有り）	共	1995 年 7 月	WCCE'95: 6th IFIP World Conference Computer in Education (Birmingham, UK) pp.531-533	既に著者らが開発しているパーソナルコンピュータ上で稼働する手書き入力による漢字学習システムをＰＤＡ(携帯情報端末)に移植した結果について報告した. 福田真規夫、木村真治
6.The Japanese Learning System Using 2 Difference Types of	共	1995 年 12 月	ICCE'95: International Conference on	著者らが開発した手書き入力装置を接続したパーソナルコンピュータで稼働する漢字学習シス

Handwriting Input System （査読有り）			Computer Education 1995 (Singapore) pp.541-548	テムと、手書き入力機能が備わっているＰＤＡ（携帯情報端末）で稼動する漢字学習システムの２つのシステムを紹介・比較し、それぞれのシステムの特長について報告した. 福田真規夫、木村真治、石桁正士
7.The Japanese Learning System on PDA using Handwriting Input System （査読有り）	共	1996 年 3 月	ICTE'96: 13th International Conference on Technology and Education (New Orleans, USA)	著者らが、日本語を学ぶ外国人の漢字の自習用として開発したＰＤＡ（携帯情報端末）で稼動する漢字学習システムの、概要や操作方法について発表し、また教師側の教材データのメンテナンスについても報告した. 福田真規夫、木村真治、石桁正士
8.CAI for the System Engineer Improving the Problem Understanding Ability （査読有り）	共	1996 年 4 月	AEESEAP'96: International Conference on Engineering Education (Chiba, Japan) pp.T3-15-1---T3-15-4	上級システムエンジニアの教育システムとして、システム開発の上流工程における問題把握および問題発見能力を高めるためのシュミレーション型のハイパーメディアシステムの考え方について発表した. 福田真規夫、石桁正士
9.The Attempt of the Japanese Learning System for Australian Students （査読有り）	単	1997 年 8 月	ICTE97: International Conference of Technology & Education 1997 (Oslo, Norway)	著者は日本語教育システムを開発しているが、これを日本で日本語学ぶオーストラリア人学生に試行的に適用した結果について、一定の教育効果があったことについて、学習効果やアンケート結果をもとに説明した. 福田真規夫
10.The Development of the Japanese Learning	単	1998 年 3 月	WebNet98: Web Net World	コンピュータによる日本語教育システムについて、手書き入力機

System which used PDA（査読有り）			conference (Orlando, USA) pp.42-42	能のついた PDA(Personal Digital Assistance)に学習支援ソフトウエアを組み込むことで完成させ、試行的に運用した結果について報告した. 福田真規夫
11.The Reduction Curriculum to Train the Elderly Engineer（査読有り）	単	1999年10月	ICTE99: International Conference of Technology & Education 1999 (Tampa, USA) pp.199-199	世界的に高齢化が進んでいるが、多くの業務経験を持つ高齢者を情報処理システムの開発エンジニアとして活用することで、この分野のみならず、社会の活性化につながることについて提案した. 福田真規夫
12.The Self Learning System to Support the Teacher of Japanese Language Education（査読有り）	共	2001年3月	SITE2001: Society of Information Technology & Education 2001 (Orlando, USA) pp.2199-220	日本語学習システムについて、人工知能技術を使い、日本語教員を支援するためのしくみについての考え方について述べた．具体的には、個々の学習者の強化ポイントなどについて、コンピュータから教員に対してアドバイスするしくみである. 福田真規夫，矢鳴虎夫
13.The Intellectual Indicating of the Question in WBT（査読有り）	共	2002年10月	E-learning 2002 (Montreal, Canada) pp.2597-2598	E-learningにおけるWBT(Web Based Training System)で、コンピュータが学習者の学習結果に応じて自動的に課題を与える知的学習支援システムの考え方について報告した. 福田真規夫，矢鳴虎夫
14.The Research of The Intellectual Learning Navigation in WBT（査読有り）	共	2004年3月	SITE2004: Society for Information Technology & Teacher Education 2004 (Atlanta, USA) pp.2872-2874	E-learning における WBT(Web Based Training System)で、学習者に対して課題に対する評価結果からアドバイスをファジイ推論を使い知的に掲示するシステムの研究について報告した. 福田真規夫，矢鳴虎夫
15.Research of Guidance Support System that aims	単	2008年3月	SITE2008: Society for Information	総合系学部における問題解決型演習の卒業研究について，その標

at Standardization and Efficiency Improvement for Project Based Learning（査読有り）			Technology & Teacher Education 2008 (Las Vegas, USA)	準化および効率化を支援するシステムを開発し試行した結果について報告した. 福田真規夫
16.The Support System for the Project Based Learning（査読有り）	単	2009 年 3 月	e-SOCIETY 2009: IADIS International Conference (Barcelona, Spain) pp.120-124	卒業研究などのプロジェクト学習の最初の段階において、研究計画書を正確かつ効率よく作成することを支援するシステムのプロトタイプを開発したことについて報告した. 福田真規夫
17.The Trial Result of System that Supports PBL（査読有り）	共	2010 年 8 月	IEEE-IWEA2010 (4th IEEE International Workshop on e-Activity) (Yamagata, Japan) pp.351-356	卒業研究などのプロジェクト学習を支援する対話型のシステムを開発し，試行を行ったが，当初の目的を達成できるような評価が得られたが，多くの問題点もあることが分かったことについて報告した. 福田真規夫, 山下倫範, 上山俊幸, 西本実苗
18.The Research of Supporting System for PBL Trial and Result of the System（査読有り）	共	2011 年 3 月	e-society 2011 IADIS International Conference (Avilla, Spain) pp.577-579	プロジェクト学習を支援するシステムについて，以前に試行した結果から改善を施し，再び試行したが，その結果と今後の展望について述べた. 福田真規夫, 山下倫範, 上山俊幸, 西本実苗
19.The Development of the System to Solve the Problems of PBL（査読有り）	共	2011 年 3 月	Global Learn 2011 (Melbourne, Australia) pp.1320-1325	プロジェクト学習で起こる様々な問題を解決し，学習を円滑に進めるための新たな支援システムについて，過去の事例も含めて述べた. 福田真規夫, 山下倫範, 上山俊幸, 西本実苗
20.PBL Supporting	共	2011 年 5 月	CNSI 2011	プロジェクト学習を支援するシ

System Based on the Range of Teacher's Guidance			(Jeju, Korea) pp.431-434	ステムについて，学習の指導を担当する教員の指導可能範囲を予めデータベースに設定しておき，指導の効率を高めることを目指したことについて述べた. 福田真規夫, 山下倫範, 上山俊幸, 西本実苗
21.The Simulation Game for Learning PBL	共	2012 年 3 月	ICAST2012 (Penang, Malaysia) pp.12308-12311	PBL に取り組む学生が，事前に PBL の概念を獲得していなかったり, PBL の中で行う具体的な作業の内容を理解していないなどの問題があり，研究計画時にスケジュールの策定や管理ができない．我々はこれらの問題を解決するために, PBL についてゲームを通して学ぶための学習システムを構築したことについて報告した. 福田真規夫, 山下倫範, 上山俊幸, 山本勇次
22.Improvement in the Fun of the Board Game By A.R. Introduction	共	2013 年 10 月	GCCE2013(Global Conference on Consumer Electronics) (Chiba, Japan) pp.334-338	ボードゲーム（すごろく）に AR(拡張現実感)技術を導入することにより，抽象的であるボードゲームを３次元 CG による具体的なゲーム環境を実現し，より楽しいゲームとすることが可能になるということを述べた. 福田真規夫，堀岡久喜
23. The Sightseeing Information Website which the Game is Utilized	共	2015 年 10 月	GCCE2013(Global Conference on Consumer Electronics) (Osaka, Japan)	大阪のある街を対象とした観光情報システムを位置情報 AR を組込んだ Web システムとして開発した。観光情報のデータは，総務

				省が推奨している自治体オープンデータを利用した。 福田真規夫，Hou Chou
（学会口頭発表）				
1. 問題解決能力向上のためのコンピュータ利用	単	1990 年 8 月	ＣＡＩ学会 第 15 回研究発表大会論文集	企業において経営及び管理を担当する者の問題解決能力の向上を図ることを目的としたコンピュータによるマネジメントゲームを開発し、その開発意図とゲームの概要について述べた.
2. 問題解決能力向上のための研究(1)	共	1990 年 9 月	日本教育工学会 第 6 回大会 講演論文集	企業において経営及び管理を担当する者の問題解決能力の向上を図る教育を展開しようとする場合に､まず問題解決能力の定式化を図る必要がある．本研究では､問題解決能力の内最重要部分を占めると思われる情報活用能力に注目し､その定式化の過程について述べた. 福田真規夫、渡辺寛二
3.問題解決能力向上のための研究(2)	共	1990 年 9 月	日本教育工学会 第 6 回大会 講演論文集	上記２.の研究の成果として得られた情報活用の概念チャート図を教材として実際の教育に試行的に適用し､その効果について検討した. 渡辺寛二、福田真規夫
4.問題解決の最上流工程の教育方法の研究	共	1990 年 9 月	日本教育工学会 第 6 回大会講演論文集	システムエンジニアがシステムの開発を通じて問題解決を行う際に、その最上流工程つまり「問題意識を持つ」工程がその後の工程に大きな影響を与える．本研究は、この問題意識を持たせる方法としていくつかの考え方を述べている. 石桁正士、渡辺寛二、松村幸輝、

				横山宏、 福田真規夫
5.上級ＳＥ育成のための教育工学的研究(1)	共	1991年 7月	電子情報通信学会教育工学研究会研究報告書	経営情報システムなどのシステム開発の最上流工程を担当するシステムエンジニアに要求される能力は何かを分析し、その能力を育成する教育方法を開発し、その方法を試行した状況について発表した. 福田真規夫、石桁正士
6.問題解決の最上流行程の教育方法の研究(3)	共	1991年10月	日本教育工学会第8回大会講演論文集	問題解決の概念を構成している下位の概念を育成するための教育を行い、問題解決の対象となる問題の把握や分析を行う最上流工程において要求される能力を育成する方法について発表した. 石桁正士、福田真規夫
7.問題解決能力向上のための研究(4)	共	1991年11月	教育工学関連学協会連合第3回全国大会講演論文集	問題解決能力の中で最も重要な能力である情報活用能力の概念を分析し、いくつかのサブ概念に分けた. このサブ概念を具体的事例に結びつけて、この事例に類似したことを行うことによって、情報活用能力の向上が図れ、結果的には問題解決能力の向上につながるとの研究発表を行った. 福田真規夫、渡辺寛二
8.コンピュータゲームを作らせることによる情報活用能力育成教育	共	1992年 8月	ＣＡＩ学会第 17 回全国大会講演論文集	情報処理を専攻する学生に対して、情報活用のしくみの一種であるアドベンチャー型のコンピュタ-ゲームの企画から設計､製作までの全工程を体験させることにより、動機づけを行いながら情報活用能力の育成が可能になるという発表を行った.

				福田真規夫、渡辺寛二、石桁正士
9.問題解決能力向上のための研究(6)	共	1993年 8月	ＣＡＩ学会第 18 回全国大会講演論文集 pp.271-274	表計算用のソフトウエアを使用した情報処理の演習において、学生にソフトウエアを使用する上での問題点・疑問点およびその解決策を「情報カード」というものに記入させる．そして、その情報カードを学生全員が演習中に参照しながら問題の解決を行っていく．このような演習により、学生の問題解決能力の向上を図ることが可能になることを発表した． 渡辺寛二、福田真規夫、石桁正士
10.情報活用能力育成を目的とした情報システム構築演習（1）	共	1993年 9月	1993 年電子情報通信学会秋季大会講演論文集	システムの設計を学生に行わせる演習をすることにより、情報の入力・出力および情報の蓄積のしくみを深く考察させることになる．このことは単にシステム設計の技術を教授することでなく、学生の情報を活用する能力を育成することになるとの解釈を発表した． 福田真規夫、石桁正士
11.問題解決能力向上のための研究（7）	共	1994年10月	教育工学関連学協会連合第 4 回全国大会講演論文集	表計算用のソフトウエアを使用した情報処理の演習において、学生にソフトウエアを使用する上で発生する問題点・疑問点およびその解決策をカードに記入させ、それを他の学生が活用しているが、これを学習メディアとして有効に活用するためには、活用するための充分な時間的余裕を学生に与えることが必要であると、演習の試行結果からわかったことを報告した． 渡辺寛二、福田真規夫、石桁正士

12.外国人のための漢字学習システムの開発	共	1994年10月	教育工学関連学協会連合第4回全国大会講演論文集	非漢字圏の外国人にとって、日本語を学ぶ際に大きな障害が漢字を習得することであるが、この漢字学習を手書き入力機能をもつコンピュータで行うことにより、漢字学習もためのＣＡＩシステムが実現できると発表した. 福田真規夫、木村真治
13.外国人のための漢字学習システムの開発（2）	共	1995年 8月	教育システム情報学会第 20 回全国大会講演論文集	パーソナルコンピュータ上で稼働するように開発した漢字学習システムを電子手帳に移植し、超小型で携帯に便利な漢字学習システムを開発したことを発表した. そして、このシステムの自習システムとしての有効性や今後の多用途での使用の可能性について考察しことを発表した. 福田真規夫、木村真治
14.ＣＡＩや疑似体験を組み合せたスポーツ教育システムの開発	単	2001年11月	日本教育工学会	事前に複雑な知識を要求され海洋スポーツ種目について、動画を設定した CAI を使うことでスムーズな授業展開ができることを目的とした CAI システムの開発について報告した. 福田真規夫
15.運動療法について学ぶシステムの開発	単	2002年8月	教育システム情報学会第 27 回全国大会講演論文集	生活習慣病などの処方として、最近、運動療法が注目されている. 医師の指示の下でそれを担当するトレーナーは、体育教員養成系の出身者が多く、運動療法の基本となる医学的な知識や、栄養指導などの知識について乏しいのが現状である. 本システムは、これ

				らのトレーナーに対して、運動療法の総合的かつ体系的な知識や手法を獲得させることを目的としたもので、現状の問題を解決して運動療法の今後の普及を狙うものである. 福田真規夫
16.ＣＡＩにおける知的学習ナビゲーションの研究	共	2002年10月	バイオメディカル・ファジイシステム学会平成14年度大会講演論文集	CAI における学習ナビゲーションをファジィ処理により知的に行うしくみを開発する研究について発表した. 福田真規夫，矢鳴虎夫
17. CAIにおける知的学習ナビゲーションの研究（2）	共	2003年10月	バイオメディカル・ファジイシステム学会平成14年度大会講演論文集	CAI における学習ナビゲーションシステムの設計をペトリネットを使って行ったことを明らかにする．また、ファジイ推論の方法をよりシンプルなファジイシングルトン法を採用したことを報告した. 福田真規夫，矢鳴虎夫
18.ビジネスゲームにおける評価の研究（1）	共	2003年12月	ゲーム学会第2回全国大会	ビジネスゲームにおいては、プレイヤーがゲームの過程で行った意思決定の評価が重要で、これをプレイヤーである学習者にフィードバックすることで、より多くの学習効果をあげることができる. 本研究では、この方法を使い、より教育効果を向上させようとするものである. 福田真規夫，矢鳴虎夫
19.教育用ビジネスゲームにおける意思決定の総合評価を求める方法の研究（1）	共	2004年8月	教育システム情報学会第 29 回全国大会講演論文集	企業経営を擬似的に体験できるビジネスゲームは、従来から教育目的でよく使われているが、ゲームの評価が、決算データによって行われているため、ゲームの過程で繰り返した意思決定について

				の評価が不明確な場合が多い．本研究は、ファジイ推論を使って総合した評価を学習者にフィードバックさせることで学習効果を向上させることを目的としたものである． 福田真規夫，矢鳴虎夫
20.ビジネスゲームにおける評価の研究（2）	共	2004年12月	ゲーム学会第3回全国大会	ビジネスゲームにおいてプレイヤーがゲームの過程で行った意思決定の評価を基にしたファイジィ推論を使い総合評価を求める方法について報告した． 福田真規夫，矢鳴虎夫
21.教育用ビジネスゲームにおける意思決定の総合評価を求める方法の研究（2）	共	2005年8月	教育システム情報学会第 30 回全国大会講演論文集	企業経営を擬似的に体験できるビジネスゲームの過程で繰り返した意思決定についての評価をもとに総合評価を算出し，さらにその値からプレイヤーに対して評価メッセージを出力する機能について報告した． 福田真規夫，矢鳴虎夫
22.学習支援システムにおける知的学習ナビゲーションの研究	共	2006年8月	教育システム情報学会第 31 回全国大会講演論文集	e-learningなどのオンライン型学習支援システムにおいて，学習者の理解度についてリアルタイムにフィードバックし，今後の学習課題のメッセージを出力するシステムについて開発したことを報告した． 福田真規夫，矢鳴虎夫
23.評価および学習指導機能を付加したビジネスゲーム	単	2007年2月	パーソナルコンピュータ利用技術学会第1回全国大会講演論文集	企業経営を体験できる既存のビジネスゲームに対して，プレイヤーに対して評価メッセージを出力する機能を追加して試行した結果を報告した．

				福田真規夫
24.研究計画工程を支援するシステムの研究	単	2007年10月	情報処理学会関西支部第 19 回支部大会講演論文集	総合系学部においては，その指導教員の専門分野や経験が大きく異なるため，卒業研究の指導方法や到達目標に大きな違いでるという問題がある．本論文は，このような問題を解決するために卒業研究の計画書を支援するシステムを開発し，試行した結果について報告した． 福田真規夫
25.プロジェクト学習における計画書作成支援システムの研究	単	2007年12月	パーソナルコンピュータ利用技術学会第 2 回全国大会講演論文集	卒業研究のような問題解決型演習の効率化を図るため，本論文では特にテーマを決定することを支援する仕組みを開発したことについて報告した． 福田真規夫
26.自閉症療育を支援するシステム ～アドベンチャーゲームの適用の試み～	共	2008年7月	ゲーム学会第6回合同研究会	自閉症児等に対する療育方法として一定の効果を上げている方法として「構造化」がある．この方法は，通常療育のための施設内で行われるが，家庭内で行うには，困難な面が多い．本研究では，コンピュータを使った療育を支援するシステムを開発し，さらに療育者の負担を少なくしたアドベンチャーゲームを開発するものである． 福田真規夫　森津誠
27.プロジェクト学習支援システムの開発	共	2008年11月	平成 20 年度情報教育研究集会	卒業研究などのプロジェクト学習におけるテーマ決定や研究計画を策定する工程について支援するシステムを開発することで，卒業研究が抱えるさまざまな問題を解決し，効率の良い指導が実現できることを目的とするもの

				である. 福田真規夫，前川武，足立恭和
28.研究計画書データベースによるプロジェクト学習支援	共	2008年12月	第3回パーソナルコンピュータ利用技術学会大会	プロジェクト学習の上流工程で計画書がデータベースとして構築されるしくみを使うことにより，中流や下流工程での効率化や標準化が実現できる見通しを得た．福田真規夫，山下倫範，上山俊幸，西本実苗
29.LMSを使ったプロジェクト学習における上流工程支援システム	共	2009年8月	教育システム情報学会第34回全国大会	開発工数が低いLMSを使うことによって，プロジェクト学習の上流工程を支援するしくみを短期に開発し，比較的容易に研究計画書などを作成するしくみを開発したことを報告した. 福田真規夫, 山下倫範, 上山俊幸, 西本実苗
30.次世代大学情報教育のうち問題解決能力向上を目的とした一方法の提案 ～ゲーム制作演習を通して～	共	2009年12月	第4回パーソナルコンピュータ利用技術学会大会	問題解決能力を向上させる演習として学習動機を向上させるためにゲーム制作を採りいれる方法について，次世代の大学教育の方法の一つとして提案した. 福田真規夫, 西本実苗, 山下倫範, 上山俊幸
31.ゲーム業界が求める人材と教育機関の教育像のギャップ (1)	共	2010年7月	ゲーム学会第7回合同研究部会	ゲーム業界が現状や未来を見据えて，その人材に要求する能力と，教育機関が人材を養成するためのカリキュラムに大きなギャップがあることについて報告した. 福田真規夫，山本勇次，稲泉綾二
32.ゲーム業界が求める人材と教育機関の教育像のギャップ(2)	単	2010年12月	ゲーム学会第８回全国大会	ゲーム業界が人材に要求する能力と，ゲーム業界を、目指す学生が持っている能力との間の最大

				のギャップはコミュニケーション能力である．本研究では，このコミュニケーション能力を向上させるために，テーブルトークゲームを用いた例について報告した． 福田真規夫
33.大学生のための人生ゲーム～社会にソフトランディングするために～	単	2011年7月	ゲーム学会第8回合同研究部会	これから就職活動をしていこうとする学生に必要な社会の常識や企業や職業についての知識を獲得させる方法として，人生ゲームを開発する構想について報告した． 福田真規夫
34.PBL について学ぶためのシミュレーションケーム	共	2011年11月	第6回パーソナルコンピュータ利用技術学会大会	PBL についてシミュレーションを伴いながら学ぶことができるゲームを開発し，PBL 取組む学生にプロジェクトの概念を持たせる試みを行った． 福田真規夫，山下倫範，上山俊幸，西本実苗，下條善史
35.シミュレーションゲームの導入による PBL 学習システム	共	2011年12月	ゲーム学会第9回全国大会	PP.BL に取り組む学生が，事前に PBL の概念や PBL の具体的な作業を理解していないために，さまざまな障害となっている．我々は，これらの問題を解決するために PBL の工程を疑似体験するシミュレーションゲームを採り入れた学習システムを構築した． 福田真規夫，山下倫範，上山俊幸，下條善史
36.AR のゲームへの適用の可能性～ボードゲームを例として～	単	2014年3月	パーソナルコンピュータ利用技術学会第2回合同研究会	ヒューマンインタラクション研究会代表として以下の内容を発表した．ゲームに A．R．(拡張現

				実感：Augmented Reality,以下AR とする．)の技術を適用することにより，ゲームのリアリティを向上させつつ，より立体的かつエキサイティングなゲームにすることが可能になるかどうかについて研究を行っている状況について報告した． 福田真規夫
37.国際会議からゲームの研究の現況や動向を探る	単	2014 年 8 月	ゲーム学会第 9 回合同研究部会	世界におけるゲームの研究の全体知を探るための方法として，大量の研究論文データを分析する必要があるが，その前段階として，どのような分類が存在するかを国際会議のプログラムなどから探る試みを行ったことについて述べた． 福田真規夫
38.グローバルなシステム開発を想定した学習支援システムの研究	共	2014 年 12 月	第 9 回パーソナルコンピュータ利用技術学会大会	ソフトウエアのオフショア開発は，我が国は欧米先進国に比べあまり普及していない．本研究は，このような問題を解決するため，我が国の技術者や学生に英語でプログラミングなどを学ぶしくみを開発するものである． 福田真規夫，山下倫範，上山俊幸
39.国際的な協働を意識した情報処理演習の教材の研究	共	2015 年 3 月	ゲーム学会第 13 回全国大会	オフショア開発は，我が国においては，遅々として進んでいない．一方，外国人留学生は，和製英語が多用される情報処理系の授業では．理解が困難な学習を強いられている． 本研究は，英語を併記した情報処理演習の教材を開発し，これらの問題を解決しようとするものである． 福田真規夫，山下倫範，上山俊幸
40. オープンデータお	共	2016 年 11 月	国際 ICT 利用研究学会	本研究では，観光情報のコンテン

よび位置情報アプリを活用した課題制作			第 1 回大会	ツを総務省のオープンデータから取得し，さらに現地で詳細な情報が得られる位置情報 AR として，Layer を採用した．本稿では，観光情報を大学などの演習で構築するための情報収集のしくみに総務省のオープンデータを活用したこと，さらに現地の詳細な情報を得るため活用した位置情報 AR について述べる． 福田真規夫,Hou Chou
41. UML による設計工程を組込んだ問題解決学習用教材の開発	共	2017 年 11 月	国際 ICT 利用研究学会大会第 2 回大会	本研究では，問題解決の上流工程である問題の把握・分析から，中流工程である設計工程を経て，下流工程であるプログラミングおよびテスト工程までの一連の流れについて学ぶことが可能になる教材を開発することについて述べる。 福田真規夫，山下倫範，上山正幸
42. AI の基礎を教育しよう	単	2018 年 3 月	国際 ICT 利用技術学会第 3 回研究会	本研究では， AI に対する正しい認識を学生や教員が持つために，概略レベルの知識や見識を持たせることが必要であるという前提で，現在行われている情報教育の中に，スポット的に AI に関する教育を組込むことを提案するもので， AI 教育の必要性と、具体的にどのような教育をすべきかについて述べたものである。 福田真規夫
:				

■看護学部

（看護）東出　崇

（看護）石澤　靖子

（看護）勝丸　博信

教　育　研　究　業　績　書

年　月　日

氏名　勝丸　博信　印

研究分野	研究内容のキーワード
神経科学・発生生物学	神経回路形成・神経発生・細胞生物学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				

（学術論文） 1 Contacts between the commissural axons and the floor plate cells are mediated by nectins. 2 Halteria grandinella: a rapid swimming ciliate with a high frequency of ciliary beating. （その他） ：	共著 共著	2004 年 2005 年	Dev Biol. 2004 Sep 15; 273(2) :244-256. Cell Motil Cytoskeleton. 2005 Apr; 60(4): 214-221.	

（看護）山口　眞由

教　育　研　究　業　績　書

28 年 2 月 25 日

氏名　山口眞由　印

研究分野	研究内容のキーワード
基礎医学	DNA 型、遺伝子多型　薬物

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1．太成学院大学看護学部における生化学、薬理学、解剖学、遺伝学、ヘルスセスメントの基礎医学系の科目の講義について	平成19年4月 ～現在	看護学部における担当科目の教育方法として常に学生には一般目標(GIO)と行動目標(SBO)を示しながら教授している。一例として、授業開始時にその授業内容に添った看護師国家試験問題を数題まずパワーポイントで提示のみ行い、授業終了時に再度、それらの問題を提示し、学生の理解度を確認し、必要に応じて解説を加えるようにしている。また、基礎学力不足を補うため、学生が興味を示すような生命現象などと結びつけてより分かりやすく講義をするようにしている。

２．太成学院大学人間学部における運動生理学、機能解剖学の講義について	平成19年4月～現在	人間学部における担当科目の教育方法として講義内容を理解する上で必要な基本的な基礎知識について常に学生に問い掛けながら授業を行うようにしている。学生間には基礎学力に差がるため、学生全員が理解できるように、極力、基礎知識がまりないと思われる学生に質問をするようにしている。また講義に対するモチベーションを向上するように学生誰もが興味を示す事象と講義内容を関連づけて教授するようにしている。
３．私立大学医学部4学年における社会医学系の講義とテュートリル教育	平成4年４月～平成19年3月	数多くの実例を含む独自の資料・データをもとに作成したパワーポイントおよびプリント教材を用いて個人識別、血液型、ＤＮＡ鑑定、薬物などについてわかりやすく教示した。また、学生に質問を適宜行なうとともに学生からの質問も促がし、学習意欲の向上を図るようにした。なお、平成12年度からテュートリルシステムの導入により、自学自習が効果的に行えるようにオリジナルの事例シートを作成し、学生には一般目標(GIO)と行動目標(SBO)および講義内容を記した小冊子(ユニットガイド)を配布し、グループ担当教員には、ユニットガイドに各事例の詳細な解説を加えた小冊子(テュータガイド)を配布し、テュートリル教育を行なった。
４．私立大学医学部2学年における基礎医学系テュートリル教育	平成 10 年 4 月～平成 19 年 3 月	2学年のテュートリル教育のグループ担当教員として、人体の構造と機能、病因・病態の各ユニットを担当し、テュータとしての効果的なドバイスや適切な指導を行い、各学生のモチベーションを高め、問題発見・問題解決、自学自習能力が向上するように学生をサポートした。
５．私立大学医学部1学年における医学総論	平成 10 年 4 月～平成 19 年 3 月	医学総論ではテュートリル教育の準備段階として、医学に関するテーマを提示し、テュートリル方式による問題解決型の学習方法を習得するように学生に指導した。また、その学習内容と学習成果のレポート作成と口頭発表に際し、論文形式によるレポートのまとめ方や文献検索方法の指導およびパワーポイントによる効果的なプレゼンテーションのやり方についても学生に指導した。
６．私立大学医学部6年生における基礎医学系講座実習	平成17年4月～平成19年3月	社会医学系の教室に配属された6学年12名を対象に、1名1週間の期間で計12週にわたり、授業では行えなかった法医学の実務研修(法医解剖など)および実験・研究の進め方や考え方などを血液型やＤＮＡ鑑定、遺伝子多型解析などの実例を提示しながらわかりやすく教示した。
７．看護専門学校２学年における遺伝学	平成10年4月～平成19年3月	イラストを多用して独自に作成したプリント教材を使用し、看護職として必要な遺伝学の基礎知識と最近の遺伝医学・分子遺伝学に関するトピックスをわかりやすく教示した。小テストを実施し、理解度を確認しながら授業を行なった。また生命の尊厳や生命倫理と遺伝の関わりについても教示した。 指定教科書に加え、生化学に興味を持てるように日常生活

８．看護専門学校１学年における生化学	平成15年4月 ～平成19年3 月	で身近にる生化学的な知識、話題を取り入れながら、独自に作成したプリント教材を使用し、生化学の基礎的知識から臨床的知識までわかりやすく教示した。
９．医療系専門学校における解剖学および解剖見学実習	平成12年4月 ～平成19年3 月	平成12年度から、解剖学の講義を行い、解剖見学実習も行なった。

2　作成した教科書，教材 1．基礎医学のテュートリル教育 2．オリジナルプリント教材		学生には一般目標(GIO)と行動目標(SBO)および講義内容を記したユニットガイドを作成し、グループ担当教員のテューターには、それらに各事例の詳細な解説を加えたテュータガイドを作成した。 担当したすべての講義において、最新のトピックスも取り入れたオリジナルのプリント教材を作成した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許 薬剤師免許		
2　特許等 該当なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 看護学部教務主事	平成 23 年 4 月～	
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1 2 3				
（学術論文） 1.ポリグルタミン病 SCA1 責任遺伝子の多型解析	共著	平成 19 年 3 月	太成学院大学紀要	CAGリピート病SCA1の責任遺伝子の多型性とCAT配列の挿入および遺伝様式について健常日本人の四世代からなる家系および他に血縁のない健常日本人のDNA試料を用いて検討を行った

				。この家系においてはすべてのリルにCAT配列の挿入がCAGリピート中に認められ、構造多型も含め、10種の異なるリルが存在し、いずれもメンデル遺伝に従うものでった。血縁のない他の健常者からはCAGリピート中にCAT配列の挿入がないリル2種とCAT配列の挿入がる新たなリル1種を見出した。本研究で検出したリルはトリプレットの繰り返し数が20～31回の範囲内の計13種で、ヘテロ接合度は0.83でり、多型性に富むことが明らかとなった。また、CAT配列の挿入したリルは制限酵素SfaN Ⅰによる RFLP分析で容易に識別することが可能でった。
2.毛髪の引張強度と伸張率に関する研究	共著	平成19年3月	太成学院大学紀要	毛髪は個人識別を行う基本的事項として極めて重要でる。今回は毛髪の物理学的性状について引張強度と伸張率について年齢群別正常標準値の算出を行った。引張強度については10-19歳の年齢群を最高値に、以降の年齢群については加齢にともなって漸減の傾向がみられ、60歳以上では最低値を示した。伸張率については正常標準値の結果から10歳未満から加齢にともなって増大し、60歳以上では最高値を示した。加齢が進むにつれて水分の吸収がよくなり、しなやかで弾力性が増すのではないかと推測された。今回の引張試験により個人識別が容易にできる可能性を示唆するものでった。
（その他） 1. 日本人女性肋骨超軟X線像からの画像処理による年齢推定	共同	平成16年6月	第88次日本法医学会総会 旭川	肋骨の海綿質骨梁部に着目し、その超X線撮影像を画像解析することにより年齢推定式の算出を 180 例の女性の肋骨を用いて試みた。肋骨海綿質骨梁部の一定面積たりの骨梁量を百分

				率にて表示し、統計処理をすることにより、Y=-0.937X+101.911（γ=0.983）という年齢推定式が得られた。〔担当部分〕解剖実務、試料採取、統計計算(野田裕司, 山口眞由, 巽 信二, 杉山静征) 日本法医学雑誌 第58巻1号 p.103 日本法医学会 平成 16 年 4 月
2. 近年 40 年間におけるヒト肝重量の経年的変化	共同	平成16年6月	第88次日本法医学会総会 旭川	約50年前、大阪府下の法医学資料からみた成人の平均肝臓重量は男性で約1,400～1,450g、女性で約1,200～1,250gでった。その後、日本人の体格向上、飲食料の変化や消費量の増加等で肝臓重量の増大が予測された。そこで、40年前(1962・63年)と30年前(1972・73年)と20年前(1982・83年)と10年前(1992・93年)の肝臓重量と現在(2002・03年)の肝臓重量との変動について、年度別・男女別・年齢群別に比較検討を試みた。〔担当部分〕解剖実務、肝重量測定 統計計算 (巽 信二, 野田裕司, 山口眞由, 杉山静征) 日本法医学雑誌 第58巻1号 p.107 日本法医学会 平成16年4月
3. 経腸栄養剤の静脈内注入による肺梗塞死例	共同	平成16年11月	第51回日本法医学会近畿地方会 京都	治療中の事故で胃瘻管から投与すべき栄養剤を静脈内に投与した事故という単純なケレスミス例を経験したので報告する。75歳男性、脳梗塞の既往歴がり入院加療中でり、内服薬と経腸栄養剤を取るために胃瘻管を造設していたが看護師が間違えて点滴用の静脈ルートに経腸栄養剤を注入し、18日目に死亡したもの。剖検後の病理組織学検査の結果、肺胞中隔線維化・肥厚および広範囲凝固壊死、肺組織内に異物（でんぷん小体・食物線維物）の存在を認め、静脈内異物混入による肺動脈栓塞による呼吸不全を惹起せしめたものと推認した。〔担当部分〕

				解剖実務、検体採取 （巽 信二, 野田裕司, 山口眞由, 杉山静征） 日本法医学雑誌 第59巻2号 p.205 日本法医学会 平成17年10月
4. EnVision+ による O 型臓器からの H 型抗原の検出	共同	平成17年4月	第89次日本法医学会総会 高松	O型の臓器を試料とし、H型抗原の検出にEnVision+を用いた高感度免疫染色を行ったところ良好な結果が得られ、EnVision+は組織血液型抗原の検出に極めて有用でることを明らかにした。〔担当部分〕解剖実務、試料採取 （横田 信, 野田裕司, 巽 信二, 山口眞由, 杉山静征） 日本法医学雑誌 第59巻1号 p.53 日本法医学会 平成17年3月
5. 巨大心を呈した乳児急死例	共同	平成17年4月	第89次日本法医学会総会 高松	乳児の突然死は月齢2～3ヶ月が好発でるが、今回月齢11ヶ月でり、心奇形のない巨大心を伴う急死例を経験したので、報告した。組織学検査の結果、1.心筋炎および拡張肥大、左房心内膜の高度線維肥厚 2.間質性肺炎 3.肝うっ血と中心性出血と肝細胞索萎縮の所見を得た。〔担当部分〕解剖実務 （巽 信二, 野田裕司, 山口眞由, 杉山静征） 日本法医学雑誌 第59巻1号 p.73 日本法医学会 平成17年3月

（看護）三井　京香

（看護）吉岡　由喜子

教育研究業績書

平成　30　　年 3 月　7 日

氏名　　吉岡　由喜子　　印

研究分野	研究内容のキーワード
看護教育学	看護大学生、キー・コンピテンシー、看護師に必要な人間力、学習力 看護師の困難感　看護師が看護基礎教育に求めていること
老年看護学	看護的なレクリエーション　　高齢者の主体性を引き出す関わり　　認知症 パーソンセンタードケア　　老年看護学授業研究

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 (1) 学習習熟度別学習支援	平成 10 年から 現在まで	知識の理解が不十分な学生に対して面談をし、 知識の理解が不十分な学生に対して面談をし、どこでつまずいているのかを分析したうえで、理解力や意欲に応じて対応の仕方を工夫した。特に、理解力の低い学生には少人数での学習サポートを行い、自己学習できる基盤づくりを行った。　これらの働きかけの結果、学生の学習意欲が増加し、自立して学習に取り組み始めるという成果があった。 老年看護学概論・援助論についても学生の要望に沿い、複数回、補講授業を行った。 国家試験対策としての集合授業以外に、成績が伸び悩んでる学生を対象に少人数のミニ講義や学習支援を繰りかえし行った。
(2)　国家試験対策	平成 25 年～現在	国家試験対策としての集合授業以外に、成績が伸び悩んでる学生を対象に少人数のミニ講義や学習支援を繰りかえし行った。 今年度の国家試験は,より思考力を要求する内容に変化してきている。それを受け、解剖学・生理学・疾患の知識を図示できる力の育成に力を注いだ。また、問題を読み込み何が問われているのか、それはどんな知識を組み合わせることで解けるのか考えさせた。思考力育成には少人数での対応に加えてタイムリーな対応が要求される。そのため 4 年生全員を対象とし、メールで質問を受付け、場合によっては回答を全 4 年生に送付するなど、対面での指導に加えて、メールでの学習支援を行った。
	平成 28 年	
	平成 29 年	昨年度に引き続き思考力を高めるための支援に加えて、正確な知識の理解と学生の主体的学習支援に重点をおい

		た。具体的には外部講師と連携し各業者模試後、外部講師が作成した「やり直しプリント」の模範解答を学生が作成するよう働きかけ、その内容を基に筆記中心の試験問題を作成した。また、今年度からはチューター制を導入して国家試験対策を行ったため、学年のアドバイザーと連携した国試への取り組みに加えて、チューター教員からの意見を聞く、チューター教員への連絡・報告（国試の出題傾向の説明、4年生の国試への取り組みの連絡、模擬テストの結果など）を行うことを心掛けた。国家試験終了後は4年次生、教員双方にアンケート調査を実施し、今年度の国試対策を様々な視点から振り返りを行う資料とした。　　さらに前年度まで国家試験に合格できていない既卒生に対しても定期的に連絡をし、状況の把握と精神的支援を行った。
(3) 技術習得支援	平成10年から平成22年	昼休み・放課後など空き時間に実習室を開放し技術力向上の支援を行った。練習時は常に患者を想定して行うよう働きかけ、実践に生かせる技術が身につくよう配慮した。　実習室開放中は巡回し、練習を見守ると共に適宜根拠や配慮についての発問をすることで学生を刺激し、意欲的に学習・練習するための働きかけをおこなった。その結果、自主的に技術練習する学生数が増加した。また練習中、患者役の学生に頻繁に声をかけ、自分の援助が相手にどんな影響を与えているのか確認しながら行っている学生を多く見かけた。基礎実習Ⅰの後の振り返りでは、患者に対して細やかな配慮がさらに必要だと発言する学生が大半であった。これは、基礎実習Ⅰの段階で患者に何らかの配慮をしたということであり、このような取り組みが、患者への配慮ができた原因のひとつにあげられると考える。
(4)　知識関連付け支援・知識、技術統合支援	平成22年	基礎実習Ⅱ前の2年次生に対し、解剖学・生理学・病理学・疾病論・を関連付けて理解する学習方法を指導した。またそれを生活援助技術に生かした内容での技術練習を支援した。
	平成23年～28年	実習時、学生のカンファレンスを支援し、学生のおぼろげな理解を言語化し、理解したことと、不明確な部分を明確化した。 思考の硬さや偏りから学生が苦手としやすい情報の関連付け（関連図作成）に対して、ポストイットを使用して、複数の方向から情報を捉え、組合わせる働きかけをし、適切に対象者の全体像を捉える能力を向上させた。

	平成 29 年	看護過程の展開に必要な情報とそうではない情報のより分け、必要な情報と既習の知識を用いたアセスメントの仕方について演習を通して説明した。その結果、実習でのアセスメントの構成、内容が向上した
(5)　アドバイザーとしての取り組み	平成 25 年～現在まで	担当ユニットの学生はもちろん担当学年の学生の学習支援、就職支援、個人的な問題の相談など、タイムリー、かつ細やかに対応できるよう心掛けた。
	平成 28 年～29 年	担当しているユニットにこだわらず学年全体に目を配り、支援を必要としてる学生に気づき、教員間の連携を強め、また保護者とも連携し、学生が円滑に学校生活を送れるよう支援した。
2）各授業での取組		
(1) 基礎看護学・看護方法論	平成 22 年	看護方法論において、看護職として日常生活を援助する意味、環境や他者の働きかけが人間に与える影響について学生が気づくよう、患者体験を頻繁に取り入れた。
(2) 生活援助技術論講義・演習	平成 22 年	患者役を頻繁に体験させることで配慮の必要性に気付かせる・答えを提示するのではなく学生にグループで試行錯誤させ、自分たちで答えを導き出せるよう工夫した。授業時間以外にも自由練習できる環境を整えた。放課後の実習室は、ほぼ毎日全てのベッドが練習に使われた。
(3) 年看護学　老年看護学概論・講義	平成 25 年～現在	高齢者を援助するにあたって必要な様々なスケールとその効果的な用い方、加齢現象が高齢者の生活にどう影響するのか、さらに援助方法の概要について説明した。
	平成 28 年	老化現象の理解には知識の関連付けが必要になる。国家試験が高い思考力を要求してきていることを踏まえ、各臓器の本来の機能の復習を簡単に行い、それがどのように低下するのかを周辺領域の知識を関連させ、昨年までよりもさらに丁寧に説明した。また、模型や図を用い、さらに学生に高齢者の姿勢をまねるなど視覚や体感に働きかける工夫を行った。
	平成 29 年	平成 29 年度は、前年までの取り組みに加えて、様々な老化現象が重なった状況が高齢者の生活に及ぼす影響をイメージさせ、老化現象を遅延させるために高齢者自身や看護師ができることについて言及し、老年看護学援助論への橋渡しをより明確にした。
(4) 老年看護学援助論　講義・演習	平成 26 年	この科目は、老年看護学実践実習Ⅰ・Ⅱに臨むための基盤である。そのため、学生にとって難易度が高い、加齢現象に加えて脳梗塞で高次脳機能障害があり、さらに糖尿病、高血圧、高脂血症、前立腺肥大が合併している後期高齢者、そして高齢の配偶者が介護する、子どもは自らの孫の面倒を見ている、という実際の臨床場面を想定

		した詳細な事例を使用し、看護過程に 10 時限を用いて複合的な学習力を養うことを目標とした。そのために事例を読み込ませ、演習時間は、学生が老年体験装具を身に着けて事例の患者になりきり、演習に臨むという授業形態にした。そのことで、加齢や疾患が実際の生活にどのように影響するのか、高齢になって新たな疾患を発症する高齢者の気持ちや家族への影響を体感でき、自己学習も進んだ。そして、そのような高齢患者にどう関われば、高齢者が無理なく主体的に治療に向き合えるのかについて積極的なディスカッションが繰り広げれられていた。学生が苦手とする関連図についても、授業中に学生に発問しながら大型模造紙にポストイットを張り付け、さらに各項目間の関連を考えさせる方法をとったことで理解が進んだ。また、この授業の成果は、老年看護学実践実習Ⅰでの学生の理解度や積極性の向上に大いに影響した。
	平成 27 年	昨年の事例の患者の状態をさらに実習で学生が高頻度に受け持つ「動けない患者」の設定に変更した。また、人形や小道具を用いて患者の状況を可視化しイメージしやすいよう工夫し授業をおこなった。実習前の学生の目標の中にこの授業での学びを生かして実習に望む、という意見が多くあり、また、実習でも円滑に患者理解が進んでいた。そのことから、授業に関して一定の効果があったと判断した。現在この授業の効果についての研究を進めている。この授業の効果についての研究を行い検証した。
	平成 28 年	昨年の授業から演習を行う時間を増加させ、また演習に講義・説明を組み入れる授業構成にし、アクティブラーニングの視点で学生がより主体的に授業に取り組め、かつ行動レベルで知識の理解が進むよう工夫した。
	平成 29 年	前年度の授業が実習に及ぼした影響について研究を行い効果と課題を検証した。その結果、学生は授業と実習での受け持ち患者が似ているほど授業で学習した内容を活かした援助が行えていることが分かった。反面、疾患が事例と異なると戸惑うことも分かった。そのため自ら高齢者の看護を行うためのヒントが見つけられるよう授業ガイド（ルーブリックに類似したもの）作成し取り組んだ。
(5) 老年看護学実践実習Ⅰ・Ⅱ ①看護大学生のキー・コンピテンシーを開発する働きかけ	平成 24 年～現在	高齢者･家族･施設の３視点から現状を捉え、3者の思いはどんな方向を向いているのかを整理し、広い視野で3者それぞれが win win になる働きかけを工夫し、さらにそれを実行に

		移すための計画･相談･調整などを学生が行えるようにサポートした。
発言を図式化するカンファレンス	平成 24 年～現在	附箋を用いて、発言を図で表すことで、各発言を関連づける・広い視野に立ち発言方向が偏っていないかを確認するカンファレンスを行っている。
看護的なレクリエーションを行うための支援	平成 24 年～現在	学生が出し物をして、高齢者が楽しむレクリェーションではなく、高齢者の持てる力を生かし、また、小さなチャレンジになるレクリェーションを学生が企画・運営できるようサポートした。
②実習支援	平成 26 年～現在	担当する授業時間数が増加したこともあり、直接学生を指導することに加えて、兼任教員に学生への授業内容や実習の狙いと指導方法を伝えること、兼任教員が効果的な指導ができるよう支持することにも力を注いだ。その結果、兼任教員の指導の方向やレベルが整い、学習が苦手な学生、理解に時間がかかる学生にきめ細やかな指導ができるようになった。さらに「評価」の意味やあり方についても協議が進み、総括的評価に加えて形成的評価の視点も持ち、意図的な指導がなされるようになったことで、学生の最終段階の修得レベルが向上した。
	平成 28 年	学習方法、思考力、メンタル面など特別な支援を要する学生に対し、兼任教員と連携しながら個々の学生の状況に応じた指導を重ねた。
2　作成した教科書，教材		
基礎技術のチェックリスト	平成 22 年	従来の看護技術のチェックリストに接遇・配慮を加え、より実践的なチェックリストを作成した。
老年看護学援助論	平成 26 年	その人の性格、生き方、家族の状況、経済状態、加齢現象、複数疾患、多岐にわたる治療、本人と家族の思いなど実際に実習や仕事で出会う患者の状況をリアルにかつ詳細に示した事例集
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
看護方法論	平成 22 年	授業終了後のアンケートでは、根拠を持って専門職として生活援助する重要性についての学びの記録が多く書かれていた。
生活援助技術論	平成 22 年	授業後のアンケートでは、技術がスムーズにできることが大切なのではなく患者に配慮すること、患者の持てる力を生かすことが大切であり、援助に科学的根拠がいか

老年看護学援助論	平成 26 年	に重要であるかを学んだという評価を大半の学生から得た。 授業アンケートでも１回の授業に２時間以上学習をしたという学生が 40%以上いた。また、演習をすることで看護過程の意味と方法がわかるようになったという意見が書かれていた。「この授業を受けて達成感をえられましたか」の問いに「思う」と答えた学生が AB クラス 89%・CD クラス 94%であった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
	平成元年４月～ 平成５年４月まで	新人教育担当として、新人の教育プログラム、及び実務指導を行った。また、就職後１年間は新人看護師全員とノートでの交流をし、個別的な精神的サポートを心掛けた。
1）模擬授業	平成 22 年	オープンキャンパスにおいて「睡眠と休息を科学する」という模擬授業をし、来校者に看護学部での学習がイメージできるよう工夫した。
	平成 26 年度	オープンキャンパスにおいて、「大正・昭和の遊び」を通して老年看護学の学習のイメージがつくよう説明した。
	平成 27 年	高大連携事業の取り組みの一環として大学を訪問した高校 1 年生 10 数名に対して、「嚥下のしくみ」というテーマで演習を取り入れた模擬授業を行った。
	平成 28 年～	オープンキャンパスで積極的に模擬授業を行っている（嚥下、老化、脳血管障害の症状、認知症など）
2）出張授業・市民講座	平成 24 年	大学の広報の一環として、高校の福祉コースの 1 年生に「睡眠と休息を科学する」というタイトルで講義を行った。
	平成 26 年度	はびきの市民大学において「老後を生きる」というテーマで高齢者の加齢現象と、高齢者を家族が介護することでの成長について話した。
	平成 28 年	はびきの市民大学において、「認知症高齢者と共に生きるために知っておきたいこと」というテーマで①認知症の症状、②認知症による生活への影響、③家族の関わり方による本人への影響、③無理なく介護していくための社会制度について講義した。
3）ＦＤ	平成 28 年	学内の FD 研修会で「老年看護学援助論におけるアクティブ・ラーニングの取り組み」というテーマで授業での取り組みを発表した。
５　その他		

		なし

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 看護師免許 介護支援専門員免許	 昭和 63 年 5 月 平成 13 年 6 月	
人間学修士	平成 24 年 3 月	
認知症ケア専門士	平成 28 年 1 月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項	平成3年4月～平成 6 年 4 月 平成 8 年 12 月	病棟主任および新人教育担当 平成 8 年度大阪府看護教員養成講習会終了
4　その他	平成 11 年 12 月	ファーストレベル認定

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし				
（学術論文） 1．看護大学生の職業意識の特徴 ―1・2 年次生の自我同一性と看護職の就業動機の調査	共著	平成 24 年 3 月	太成学院大学紀要 255-266	看護大学生 1･2 次生の自我同一性と就業動機の調査から、職業意識の特徴を明らかにした。その結果、自我同一性は、確立過程であることが示唆された。就業動機は、資格に関する意識傾向が高く、そのために努力しようとは考えているが、専門性の高い仕事は求めていなかった。ｔ検定による学年の比較では、自我同一性は、確実性に高い有意な差が認められ、就業動機では対人志向で有意な差が示されたが、その他は差がなかった。 吉岡由喜子・山本純子・髙木みどり
2.老年看護学実習のレクリエーション体験における学生の QOL の学習効果	共著	平成 24 年 3 月	太成学院大学紀要 161-168	老年看護学実習後の看護大学生にレクリエーション体験の学びのレポートの内容分析を行い、QOL の学習効果を明らかにした。その結果、「活動に

―レポート分析よりー				よる心身及び生活の変化」、「よりよく生きるための力」の2つの様相が示された。 山本純子・小林菜穂子・三井京香・吉岡由喜子・秦康代・森田婦美子
3. 看護大学において学生のキー・コンピテンシーを開発する必要性について	単著	平成25年3月	修士論文	複雑で激動する医療現場で看護師が生き抜くためには、看護基礎教育のなかでキー・コンピテンシーを開発しておく必要がある。
4.看護系大学3年次生の高齢者に対するコミュニケーション力についての一考察 吉岡由喜子・山本純子・三井京香・小林菜穂子・原希代	共著	平成25年3月	太成学院大学紀要 149～155	老年看護実習Ⅰ終了後の3年次生の高齢者とのコミュニケーションに関する自由記載文を質的帰納的に分析し、この時期の学生における高齢者に対するコミュニケーション力を明らかにした。その結果、高齢者や障害の特徴を踏まえた関わりができていたが、一方で、高齢者を庇護する対象と捉えている可能性が示唆された。今後、学生の老年観を育成する取組みの必要性が示唆された。 吉岡由喜子・山本純子・三井京香・小林菜穂子・原希代
5. 現在の看護師がおかれている状況と看護基礎教育とのギャップについての一考察	単著	平成25年3月	太成学院大学紀要 137～148	伝統的に看護基礎教育が重要視してきた態度、及び文部科学省が掲げる「学士看護師の卒業時の到達目標」と、現実の医療現場で起きていることを、各種データや文献により整理・考察した論文である。伝統的に看護基礎教育は、患者を中心に考える姿勢を重要視してきた。また、大学での看護基礎教育は、文部科学省の掲げる「卒業時の到達目標」に照らして、広い視野での深い思考を基盤とした看護実践力の育成と、人間的成熟を目指している。しかし、疾病構造の変化や繰り返される診療報酬制度の改定などにより、看護は、思慮深さより速さを要求されるようになってきている。その影響で新人看護師のみならずベテラン看護師までも疲弊し、人間関係を歪ませ、仕事についての意欲の低下やメンタルヘルスの不調を引き起こしている。現在の医療現場の中でも人間的な成熟を目指していける力の育成が急がれる。
6. 現代の医療現場を生き抜くために、看護師に求められる人間力の検討 ―「生きる力」・社会人基礎力・	単著	平成 26 年 3 月	太成学院大学紀要、16	複雑化した現代の医療現場を生き抜くために看護師に求められる人間力を検討する目的で、既存の人間力である「生きる力」、「社会人基礎力」、「キー・コンピテンシー」の

「キー・コンピテンシー」の比較考察を通して―				3 つの力の比較考察した。その結果、広く長期の視点で状況を捉え、自己と他者の両方の利益を探求する「キー・コンピテンシー」と働く力に特化し、具体的な指標がある、「社会人基礎力」を組み合わせることで、現代の看護師に求められる人間力に近づく可能性が示唆された。今後、具体的な教授方法の検討が必要である。
7．認知症の症状が高齢者本人、家族介護者、医療・介護施設職員に及ぼす影響についての文献研究	単著	平成 27 年 3 月掲載予定	太成学院大学紀要、17、	文献を用いて検討した結果、初期の認知症高齢者は、認知症症状の自覚があり、ゆらぎながらもその変化に適応し、他者への配慮の他、自己の可能性を見出す力をも持っていた。しかし、それは家族と職員が感じている負担感とギャップがあった。その要因は、知識不足により認知症高齢者の力を過小に認識している可能性、認知症になった高齢者の変化に関して家族の適応が遅れている可能性、［世間一般のあるべき姿の枠内での行動］を認知症高齢者にも自己にも要求している可能性、ゆとりの無い援助、否定的感情が安全に表出できていないこと、などが示唆された。今後の看護基礎教育では、それらに対応できる力を養う必要がある。
8．4 年目までの看護師が看護基礎教育に望んでいること	共著	平成 28 年 3 月	太成学院大学紀要、18 掲載予定	4 年目までの看護師 87 名に対して，看護基礎教育に対して望んでいることを調査した。その結果，4 年目までの看護師は，【看護に必要な判断力の育成】，【早期に適応するための学習機会の増加】という看護するための実践的な教育と【社会人としての力の向上】，【看護師として生きていくための姿勢の準備】の基本姿勢に関する教育を看護基礎教育に求めていた。それらは，看護師として働くうえで基盤なるものであった。そして，それらの項目は互いに関連していた。この結果から今後の看護基礎教育に関する多くの示唆が得られた。 吉岡由喜子　石橋佳子　金木美保　今宮弘子　石澤靖子
9．3 年過程の看護専門学校卒後 3 か月と 10 か月の看護師が感じていることの比較	共著	平成 28 年 3 月	太成学院大学紀要、18 掲載予定	本研究は、看護師が仕事を続けていく力について検討するにあたり、就職後 1 年未満の看護師が就労上感じている困難と対応についての実態を明らかにしたものである。卒後 3 か月では知識不足や機敏に動けないことに対して、また 10 か月では多

				重課題や急変時の対応に困難を感じていた。その対策として勉強する、プリセプターに聞く、勤務を振り返る、先輩に積極的に聞くという行動をとっていることが明らかになった。　　石橋佳子　金木美保　吉岡由喜子　藤本美鈴　泉文子　埜口笑美子
10.　事例・高齢者体験装具を使用した高齢者の看護過程の演習効果	共著	平成 29年 3 月	日本看護学会 第47回学術集会 論文集 掲載予定	詳細な事例および高齢者体験装具を用いた老年看護学援助論の授業研究を論文にまとめた。研究の結果、演習は学生に、わかった、と感じさせる学習効果がある程度あることが示唆された。事例・高齢者体験装具を用いた演習は高齢患者の理解向上に繋がっていた。学生はこの演習を難しかったと感じながらも学習に取り組み続ける学習意欲があったことが示唆された。学生がわかったことには高齢者看護において重要な内容が含まれていた。しかし、難しかったという回答も多く、今後の教育方法の検討の必要性も明らかになった。吉岡由喜子　三井京香　秦康代　須山浩代　日詰佳世　岡本祐佳里
11. 大学病院看護師の卒後 1 年から５年までの仕事上の困難感と継続意思	共著	平成 29 年 3 月	埼玉医科大学短期大学紀要掲載予定	大学病院で働く 1 年目看護師の８割以上は、仕事上の困難を一番多く感じており、２年目以降も半数以上の看護師に困難感があった。 また、２年目看護師はプリセプターからの自立の移行期であり、３、４年目は【仕事や役割が増加】し、5 年目になるとさらに【役割が高度化】している。そして、３～５年目看護師は【多忙】と【人間関係】の悩みのため時間的・精神的ゆとりがないなかで役割を遂行しており【自信がない】ことが看護師の困難感を緩和できない原因の 1 つになっている。 仕事上に困難なく働ける理由の特徴は、【職場の雰囲気】の良さは【職場の人間関係】が充実し、【ワーク・ライフ・バランス】が維持され【休日のリフレッシュ】が働き続ける要因となっている。原嶋朝子　吉岡由喜子　武藤光代
12. 卒後 1～5 年目の看護師の仕事上の困難感の比較	共著	平成 29 年 3 月	太成学院大学紀要, 19 掲載予定	卒後 1～5 年目の看護師の仕事上の困難感を調査した。その結果、卒後 1 年目の看護師は 85%、それ以外の卒後年数の看護師も半数以上が困難感を感じていた。そして、人間関係、多忙、仕事内容についてのカテゴリーが全ての卒後年数の看護師

				の困難感の内容にあがっていた。また、現在の仕事の量や質と自分の能力に差を感じており、自信がない、というカテゴリーも卒後 2～5 年目の看護師にあがるなど、卒後 1～5 年目の看護師の困難感は類似項目が多かった。その年度に特徴的なカテゴリーとして、卒後 3 年目、4 年目の看護師に離職・転職への想い、があがっていた。 吉岡由喜子　石橋佳子　金木美保　原嶋朝子　今宮弘子　石澤靖子
13. 事例と高齢者体験装具を使用した高齢者看護過程の授業研究　―実習での効果と課題―	共著	平成 30 年 3 月	第 48 回日本看護学会論文集, 看護教育, 63-66	この授業は、実習前の不安の緩和や円滑に実習できる要因になっており、実習で役に立つ内容を含んでいることが示唆された。しかし一方で、様々な受け持ち患者に生かせる授業にして欲しい、実習に生かせる授業ではなかった、と授業が不十分であったことも示唆された。授業での学びを応用し別の状況で生かす力を高めるためにはさらなる検討が必要である。 吉岡由喜子　三井京香　日詰佳代　岡本裕佳里　須山浩代
14. 卒後 5 年目までの看護師が仕事上の困難感が無いと思える要因	共著	平成 30 年 3 月	太成学院大学紀要, 20　掲載予定	卒後 5 年目までの看護師の仕事上の困難感が無いと思える要因について調査した。困難感が無い看護師は 32%であり, その要因は卒後 1 年目の看護師では『周囲の配慮』,『相談できる環境』, 2 年目は『働きやすい環境』,『成長できる環境』,『ワーク・ライフ・バランスがとれている』であった。また, 3 年目は『協力体制』,『適応できてきた』,『ワーク・ライフ・バランスがとれている』, 4 年目は『協力体制』,『成長できる環境』,『ワーク・ライフ・バランスがとれている』, 5 年目は『協力体制』,『働きやすい環境』だという結果が得られた。　吉岡由喜子　石橋佳子　金木美保　今宮弘子　石澤靖子
（その他） 学術学会発表 1．　総合大学の看護系大学生 1・2 次生における自我同一性と就業動機の関連	共同研究	平成 23 年 8 月	日本看護学教育学会 第 21 回学術集会	総合大学の看護系学生の 1･2 年次生の自我同一性が就業動機に与える影響を検討した。自我同一性は、1 年生では、自己肯定が見られ、自分が何者であるかを認識していた。2 年生は、1 年生とほぼ同様だが、傷つきやすくもろい傾向があった。

				就業動機は、1・2年生共に上昇志向は低いが、資格取得の意欲は高いことが分かった。このことから、総合大学の看護系学生は、資格を取得する目的で入学していると考える 山本純子　髙木みどり　　吉岡由喜子
2. 老年看護学実習におけるレクリエーションとQOLの関連ー学生のレポート分析よりー	共同研究	平成24年3月	日本看護研究学会 第25回近畿･北陸地方会 学術集会	レクリエーション支援における学生の実習後のレポート分析により、 QOLの学びの効果について検討した。その結果、学生が捉えていたレクリエーション活動とQOLの関連は、楽しさ、関係性、ADL 維持・向上、変化、充実感、尊厳が明らかになった。また、学生は、レクリエーションを老年期の発達課題とも結びつけており、個人の尊厳を保つことが QOL の向上につながると認識していた。
3.老年看護学実習Ⅰにおけるコミュニケーションスキルの検討	共同研究	平成24年8月	日本看護学教育 第22回学術集会 口説発表	コミュニケーションスキルを高めるための教授方法を検討するために看護大学３年次生の老年看護学実習Ⅰ終了後のコミュニケーションスキルの現状を明確化した。その結果３年次生のコミュニケーションは、まだ初期の関わりの段階であった。今後、高齢者に関心が持てるように支援し、意図的なコミュニケーション言葉の奥ので気持ちを推察できるトレーニングの必要性が示唆された。
4. 複雑で激動する現代の医療現場を生き抜くために、看護大学生に求められる人間力の検討	単独研究	平成25年8月	日本看護学教育学会第 23回学術集会　口説発表	まず、現在の看護師の状況を文献により整理し、その結果から、看護師が現在の医療現場で働いていくために必要な力を考察した。看護師を取り巻く状況は、繰り返される診療報酬制度改定により、看護師はモニタリングにかける時間が増加していること、多くの職種と連携が必要になっていること、反面、患者とゆっくり関わる機会が減少していることがわかった。 また、一般病床に入院している患者の43.3%が後期高齢者であり、看護師のするべきこと、注意することは増加していた。そのため、看護師の7割がストレスを自覚し、看護のやりがいをも低下させていた。これらから、現在の看護師に必要なのは、高度な知識・技術と共に、複雑な状況の中で自分と他者の両方を守りながら生きていく力ではないかと考えた。

5. キー・コンピテンシーの考え方を用いたレクリエーションの実践 ―高齢者施設実習での取り組み―	共同研究	平成 25 年 8 月	日本看護研究学会第 39 回学術集会　口説発表	キー・コンピテンシーの考え方を用いて、状況の整理とレクリエーションの実践を実施したことの影響を検討した。ここでは、キー・コンピテンシーの「社会的に異質な集団の中で、交流する」、他者と補完的な関係を築き「自律的に活動する」ことを実習を通して理解することが可能かを検討した。結果、高齢者・家族・施設スタッフの立場で高齢者の状況を感じてみることで、同一の状況でも立場が異なることでとらえ方が異なることの理解を進めることができた。そして家族やスタッフも参加するレクリエーションを実施することで、高齢者の正確な状況の理解が進み、それが高齢者の持てる力を発揮できることに繋がるという学びになった。このことから、実習が、キー・コンピテンシーが育成できる機会に成り得る可能性が示唆された。 吉岡由喜子　小林菜穂子　三井京香　山本純子
6. 看護学実習におけるポートフォリオとルーブリックの効果	共同研究	平成 25 年 8 月	日本看護研究学会第 39 回学術集会　示説発表	パフォーマンス評価の典型的な方法であるポートフォリオ評価にルーブリックを用いた目標管理を加えることの効果について検討した。結果、ポートフォリオでは、自己の振り返りや教員とのやり取りが増えたとの意見があり、ルーブリックでは、目標を明らかにすることで自己の到達度や課題が明確になったという意見が得られた。ポートフォリオとルーブリックを併用することでより効果的な評価になる可能性が示唆された小林菜穂子　吉岡由喜子　山本純子　三井京香
7. 4 年目までの看護師が看護基礎教育に望んでいること	―	平成 27 年 8 月	日本看学会第 46 回学術集会(教育)　示説発表	この発表の内容を基に論文をまとめたのが上記の学術論文 8 である。 吉岡由喜子　石橋佳子　金木美保　神田さつ樹　石澤靖子　今宮弘子
8. 卒後 1 年目の看護師が感じている仕事上の困難感に関する実態調査	―	平成 27 年 8 月	日本看護教育学学会第 25 回学術集会　示説発表	卒後 1 年目の看護師は、『気疲れ』、『スムーズに仕事ができない』という現在の困難と、『早期に戦力になることの圧迫感』や『円滑に自己を成長させられない』という今後に向けての困難を感じていた。それに対して自己努力をしているが、困難を乗り越えるためには「経験を重ね、慣れ」るための「気持ちのゆとり」を持つことや、「精神的な支え」など他者の支援も必要としていた。

				吉岡由喜子　石橋佳子　金木美保
9. 3年過程の看護専門学校卒後3か月と10ヵ月の看護師が感じていることの比較ー困難感に焦点を当ててー	―	平成27年9月	全国自治体病院学会第54回学術集会　示説発表	この発表の内容を基に論文をまとめたのが上記の学術論9である。　石橋佳子　金木美保　吉岡由喜子　藤本美鈴　泉文子　埜口笑美子
10. 4年目までの看護師が看護基礎教育に望んでいること	―	平成28年2月	平成27年度　看護協会堺支部事例検討会	7で示説発表した内容を加筆、修正したうえで、要約したものである。 吉岡由喜子　石橋佳子　金木美保　今宮弘子　石澤靖子
11. 詳細な事例と高齢者体験装具を使用した高齢者の看護過程の演習効果	共同研究	平成28年8月	日本看護学会第47回学術集会(教育)示説発表	この発表内容をもとにまとめたのが上記学術論文10である。 吉岡由喜子　三井京香　秦康代　須山浩代　日詰佳世　岡本祐佳里
12. 卒後1～5年目の看護師の仕事上の困難感の比較	共同研究	平成28年8月	日本看護学教育学会　第26回学術集会　示説発表	この発表をもとにまとめたのが上記学術論文12である。 吉岡由喜子　石橋佳子　金木美保　原嶋朝子
13. 事例と高齢者体験装具を使用した高齢者看護過程の授業研究　―実習での効果と課題―	共同研究	平成29年8月	日本看護学会第48回学術集会(教育)示説発表	この内容を基にまとめたものが上記論文13である。吉岡由喜子　三井京香　日詰佳世　岡本祐佳里　須山浩代
14. 卒後5年目までの看護師が仕事上の困難感が無いと思える要因	共同研究	平成29年8月	日本看護学教育学会　第27回学術集会　示説発表	この内容を基にまとめたものが上記論文14である。　吉岡由喜子　石橋佳子　金木美保　原嶋朝子
その他				
科研費申請		平成28年10月		「卒後5年目までの看護師の仕事上の困難感について」という研究テーマで基盤研究C申請中

（看護）屋敷　久美

教　育　研　究　業　績　書

28 年　2 月　28 日

氏名　　屋敷　　久美　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
基礎看護学 母性看護学	看護学生、技術、教育方法、タクティールタッチ（触れる、なでる）親役割満足、夫婦関係、子育て

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年 月 日	概　要
1　教育方法の実践例 1）大阪府立千里看護専門学校	平成 3 年～	＊母性看護学全般を担当すると共に、基礎看護学の一部を担当した。 ・講義では教科書だけでなく資料の工夫・グループワークを取り入れ、人にとっての「環境」「コミュニケーション」「排泄」の意味を考えながら、学生が自分自身の場合に置き換えてイメージでき、健康障害のある患者の場合に変換して考えられるようにした。
＊個別指導方法の検討、改正、実践		基礎看護学技術の学内演習は、教員全体で取り組むとともに、十分な個別指導の実践を提案し、協議・実践化を図った。 その結果、学生の基礎看護技術の学年における段階的成長は、実習病院からの評価も高かった。 ・基礎看護学：看護過程の展開については担当制を取り入れ、個別指導を中心に、病気を持つ対象の背景・状況をどう捉え考えたらよいのかなど、実習で活用できるような指導を心がけた。
＊妊婦体験棟腹帯の考案		・母性看護技術については、（妊婦体験ジャケットがなかったため）妊婦体験用腹帯を考案し、学生が妊婦体験する機会（学習）を重視し、妊産婦の思い・不安に気づけるよう指導した。
＊医師に代わり疾病治療論の教授担当		・疾病治療論の教授：学校の方針でそれまで講義していた医師に変わり各教員が担当することとなったため、内分泌・アレルギー疾患・看護を担当。初めての教科であり、解剖生理と疾患・症状が関連付けて理解できるよう、講義を工夫した。

2）大阪警察病院看護専門学校 ＊3 年課程完成年度における成人看護学領域学習指導案、臨地実習指導案の修正・作成。 ＊基礎看護学領域において、担当制を敷き看護過程の展開について指導、および臨地実習指導を担当。	平成 13 年～	・成人看護学全般を担当： 3 年課程開講し完成年度の時期において、学習指導案の見直し修正に取り組んだ。 講義は、成人看護学概論、成人看護学Ⅱの急性期、回復期、慢性期を担当、臨地実習は、周手術期実習、慢性期実習、回復期実習などを担当。基礎看護学は看護過程演習、学内看護技術演習、臨地実習を担当。精神看護学の看護過程演習を担当。
＊母性看護学担当に変更 学習指導案の作成 ウエルネス思考に基づいた看護過程の展開指導	平成 16 年～	**・母性看護学担当に変更**：1 年次：母性意識形成・人の成長発達（特に乳幼児期の発達課題との関連）に母性の担う役割の重要性について理解できることを最初の課題として教授、自身の親とのかかわりを想起しつつ学習を進めた。 その結果、学習指導に対する学生評価では、親との関係の意味・親の思いに気づけたという多くの評価を得ることができた。 ・ウエルネス思考に基づいた看護過程展開を取り入れ、従来の問題解決思考との違いを含む講義、個別指導、臨地実習での実践指導。病気ではない対象の強みを見つめ、行動化につなげる看護の重要性の理解に学生が気づき実践に生かせるようにした。学生からはウエルネス思考を学び、「問題」を探していた考えを改め、その人の強みに目を向けるとの重要性に気づけ、病気を持つ対象の場合にも活かしたいという評価を得た。
＊保健健康管理担当となる。 学生の健康管理および感染予防に関する 新たなシステム作り 感染予防教育の段階的、継続的実施	平成 18 年～	**・保健健康管理担当となる**。 系列の大阪警察病院感染予防センター長（学校の保健担当医兼務）の指導のもと、学校における学生の感染予防に対するシステム作りを行う。 学生の健康管理はもとより、入学時から全員に対して抗体検査の結果に沿って計画的に予防接種の実施計画を立案、実行。検査結果および予防接種施行のデータは、すべて学生の個人表に記載し管理するとともに、卒業に際しては、就職した施設に提出できるよう書類を作成した。 学生に対しても、上記医師と役割分担し、感染予防意識を高めるために、学年ごとの段階的・継続的 教育指導を計画し実施した。

2　作成した教科書、教材 1）妊婦体験用腹帯の考案	平成 5 年～	＜母性看護学＞ ・妊婦体験用の腹帯を考案作成し、学生がリアルに妊婦体験ができるようにした。 学生に承諾を取った上で、腹帯着用のまま普段通りの日常生活（1 日間）を送るという体験課題を提示し、その気づきを発表し合うことで体験してない学生をも含め共通理解できるよう指導した。 ・妊婦体験ジャケット・検診用モデル・乳房マッサージモデルなど乏しく、十分な体験できないため、レンタル教材の活用により学内演習の充実につなげた。 ・教科書だけではイメージしにくい点の補充、社会情勢などの情報を視覚的に取り入れた講義資料の作成をした。 ・母性看護における倫理問題など様々な課題についてのグループ学習・討議･発表
3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成 21 年 4 月～ 23 年 3 月	＜藍野大学＞ 大学が出している前期・後期授業評価については、学生から高い評価を受け、下級生へも受講を薦めたい強化の一つに挙げられていた。
4 実務の経験を有する者についての特記事項	平成 3 年 9 月～ 平成 13 年 4 月～ 平成 16 年 4 月～ 平成 20 年 4 月～ 平成 21 年 4 月～ 平成 21 年 4 月～ 平成 23 年 4 月～	大阪府立千里看護専門学校　　母性看護学担当 大阪警察病院看護専門学校　　成人看護学担当 　同専門看護学校　　母性看護学担当 西大和学園白鳳女子短期大学　成人看護学講師 京都府医師会看護専門学校　　母性看護学非常勤講師 藍野大学医療保健学部看護学科　基礎看護学講師 太成学院大学　看護学部　　基礎看護学講師

5　その他 1）看護技術マトリックス作成	平成 21 年～	＜藍野大学医療保健学部看護学科＞ ・看護学士課程におけるコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標の作成を目指した「看護技術マトリックス」作成チームのサブリーダーを務める。文科省から示された「看護学教育の在り方に関する検討会報告書」に基づいて、「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」を参考にし、看護技術マトリックスを検討・作成した。それにより、看護専門領域間における看護技術教育の関連を明らかにするとともに、各領域における技術教育への役割分担や責任を明らかにすることができ、学生への技術教育に活用できるようにした。 平成 21 年末　完成
2）大学における初年次教育検討ワーキングへの参加	平成 22 年 3 月～	・「大学における初年次教育検討ワーキンググループ」の看護学科代表委員として選出され、参加活動した。大学進学率 50%と急速に向上する中、ゆとり世代と言われる学生たちが進学してくる時代となり、大学での学習に対応できる学力の不足から、入学したものの学習についていけない等、大学における問題状況を話し合い、入学希望している学生たちに対し、学習姿勢を育てる工夫、入学後の学習への補助となり得る事前教育の内容等などについて検討した。（理学療法学科、作業療法学科、臨床工学学科、看護学科合同委員会） 翌年からの実施に向けて準備に取り組んだ。
3）教員免許状更新講習会　講師を担当	平成 22 年 12 月	藍野大学が担当した教諭、養護教諭を対象とした教員免許状更新講習会の講師を担当し、「学校における感染症の予防と対策」について講義、および実技演習を実施した。 講習に参加した教諭に対するアンケート結果からは、非常に分かり易く、明日からの教育の場ですぐに実践につなげることができそうだとの評価を受けた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年　月　日	概　　要

1　資格、免許	昭和 55 年 4 月 昭和 56 年 10 月 平成 7 年 12 月 9 年 7 月 15 年 2 月	看護師免許　382333 号 助産師免許　80581 号 大阪府看護教員養成講習会(厚生省認定)修了 財団法人関西カウンセリングセンター カウンセリング基礎コース修了 大阪府看護協会看護管理者研修 ファーストレベル修了
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項	昭和 55 年 4 月 昭和 45 年 9 月 昭和 61 年 2 月 昭和 63 年 4 月	日本生命済生会付属日生病院産婦人科病棟勤務 同病院　同病棟に助産師として勤務 同病院　産婦人科外来師長 同病院　産婦人科病棟師長
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1				
（学術論文） 1. 育児に取り組む夫婦の親役割満足感と夫婦関係の関連に関する研究 ―文献研究からの学び―	共著	2008 年 9 月	インターナショナ Nursing Care Research 第 7 巻第 1 号 79-88	文献研究により、「親発達」「親役割に対する満足度」「夫婦関係」との関連について天候研究論文から概観、親性発達は母親のほうが発達因子の得点が高く大きな価値観になっている、親役割満足が低くストレスや背景などから閉塞感を招きやすい、夫婦の役割認識のあり方、夫婦の対話のあり方など育児する上で重要な意味を持つことが示唆された。 屋敷久美、谷田恵美子 小島賢子、斉藤智恵
2．自閉症スペクトラム児の	共同研究	2009 年 8 月	日本看護研究学会学術集会	自閉症スペクトラム児の食に対するこだわり行動に影響する要因を、定型発

食行動に対する保護者支援に関する研究	発表			達児と比較検証した結果、食のこだわり行動が行動障害と関連していると点、「好悪程度が強い」に特徴があることが示唆。保護者に対しては、子供が食べやすいものを増やす偏食指導だけではなく、個々のこだわりを分析していくことが食問題行動への支援になると考える。 小島賢子、屋敷久美
3．「ベナー　看護ケアの 臨床知　行動しつつ考えること」からの学び	共著	2008 年 2 月	看護･保健科学研究誌 第 8 巻第 1 号 175－167	「ベナー　看護ケアの臨床知　行動しつつ考えること」を読み、具体的実証場面から学んだことをまとめた。 谷田恵美子、小島賢子、屋敷久美、斉藤智恵
4. 医療関連学生のワクチン接種について	共著	2008 年 5 月	感染と消毒 vol.15　no.1 7-10 幸書房	医療系学生が臨地実習等で医療現場に入ることによる学生のウイルス暴露の危険ひいては患者・医療スタッフへの感染の広がりを防止する対策としてのワクチン接種の考え方を、平成 15 年から検討・改正に至った看護専門学校のワクチンプログラムを元に、そのワクチン接種の実際を紹介し、現状での課題を提示した上で、行政主導のガイドライン作成による防止策の一般化の必要性を呼びかけている。 水谷哲、屋敷久美、 寺地つねこ
5. 高齢者の介護保険に対する認識　－2001，2003，2006 年の比較―	共著	2007 年 3 月	吉備国際大学大学院 社会学研究科論叢 第 9 号 105-116	高齢者が介護保険をどのように捉えているのかについて、65 歳以上の高齢者を対象に調査した結果、介護保険の認識は低下、虐待・拘束の認識は高い。因果関係が強いのは成年後見人制度で介護保険における車の両輪といえるが十分活用されていない。高齢者が求めているのは人と人とのつながりであってこそ介護システムが充実していくことが示唆されているように考えられ

				る。 谷田恵美子、屋敷久美
6. 家族機能低下の有無から見た「高齢者が持つ家族機能」	共著	2008 年 9 月	インターナショナル　Nursing Care Research 第 7 巻　第 1 号 ４９－５７	家族機能・機能低下等に関する調査を行い。家族機能低下群は『家』を中心とした考えや家族関係と家族機能に関してゆれていた。家族機能 7 項目では情緒安定が大きく影響していた名との結果を得た。 共同研究者 谷田恵美子、林みつる、小島賢子、屋敷久美 斉藤智恵
7. 自閉症スペクトラム児の食行動支援に向けた研究	共同研究 発表	2008 年 3 月	インターナショナル　Nursing Care Research 第 7 巻第 2 号 51－60	発達障害が食の問題行動や離乳期の食発達行動と関連があるのかを検証した結果、定型発達児に比べて、発達障害が食のこだわり行動や離乳期の発達行動に有意に高く関連することが認められた。 谷田恵美子、小島賢子、屋敷久美、斉藤智恵
8. 「高齢者と家族への看護」 ―受講前後の比較―	共著	2008 年 9 月	吉備国際大学保健科学部紀要 第 13 号 1－10	吉備国際大学２年次の「家族看護」開港の学習効果を探るため「高齢者と家族への看護」に関する調査を受講前後に実施。受講することで家族機能への影響力を比較すると、養護・対外的な交流・文化の継承と家事などの項目に大きな差があり、また低下に影響した項目も多かったことより、受講することによる効果があったが、家族が変化していく経過は認識されていない。実習での指導が必要。 谷田恵美子、林みつる 小林相、屋敷久美

9. 製油の主成分リモネンによるｐ３８ＭＡＰＫ経路を介したＰＣ１２ｍ３細胞の分化	共著	2008 年 3 月	吉備国際大学　保健福祉研究所研究紀要 第 9 号、15-19	アロマテラピーが医学的治療として認められるために、アロマテラピーの効果をもたらす作用機序を明らかにするために細胞内情報伝達経路について神経細胞を用いた実験を行い、抗ストレス効果をもたらす製油の主成分リモネンは細胞の分化・保護に働く、細胞死を抑えストレスを回避する働きもつことが明らかになったことより、アロマテラピーは感染から身を守り、自然治癒力を促進、心身の安定を促し疾患治療や予防の効果があると考える。 四宮美佐恵、加納良男、河村顕治、谷田恵美子、 屋敷久美
10. 第 1 子出産直後の夫婦における親としての捉え方に関する研究	単著	2009 年 2 月	吉備国際大学大学院 保健科学研究科 修士論文	第 1 子を出産し子育てを開始した夫婦が、『親』になった自分自身、および配偶者をどのようにとらえているのかについて、その影響要因との関連や夫婦による捉え方の違い等が明らかになった。今後、この研究で得られた知見を元に、夫婦が互いの親としての成長発達を目指して支え合うためには、夫婦の捉え方の違いを踏まえた上で夫婦が相互調整を図っていけるよう支援していくことが重要であると考えた。 屋敷久美
11. 自閉症スペクトラム児の食行動に対する保護者支援に関する研究	共同研究 発表	2009 年 8 月	日本看護研究学会学術集会	自閉症スペクトラム児の食に対するこだわり行動に影響する要因を、定型発達児と比較検証した結果、食のこだわり行動が行動障害と関連していると点、「好悪程度が強い」に特徴があることが示唆。保護者に対しては、子供が食べやすいものを増やす偏食指導だけではなく、個々のこだわりを分析していくことが食問題行動への支援になると考える。 小島賢子、屋敷久美

12．看護基礎教育における看護技術を習得するための教育方法の検討	共同研究 発表	2011 年 4 月	日本看護研究学会第 24 回近畿・北陸地方学会学術集会	複数の教育機関で学ぶ学生を対象に、同時に同じ技術演習を行ったことによる満足度の内容分析を行った。その結果、それぞれの教育機関で学んだ原理原則を見直しながら、さらに他校の学生の気づきや学びも吸収し、違った側面から多くの学びをしていることが明らかになった。 今後の技術教育の上で このような環境設定も新たな教育方法の一つとして効果があると考える。 菅野典子、小島賢子、 屋敷久美、駒井幸子、南部登志江、若村智子
13．看護におけるタッチ	共著	2011 年 6 月	藍野大学医療保健学部紀要　第 24 巻 p 67－73	タクティールタッチのエビデンス研究に先駆け、従来からある指圧やマッサージと、看護者自身の手を使った対象者へのタッチがどのようにしてリラクゼーションや不安・疼痛の緩和をもたらすのかについて文献検討から学んだ内容をまとめた。 さらに近年言われているオキシトシン分泌ん関与と持関連付けてその効果への影響についてまとめ、看護におけるタッチの効果と意義について考える。 南部登志江、小島賢子、屋敷久美
14．幼児期における自閉症スペクトラム児の保護者の思い　－定型発達児に保護者との比較検討―	共同研究 発表	2012 年 9 月	第 43 回日本看護学会 小児看護　学術集会	自閉症スペクトラム児の幼児期（離乳期）における保護者の思いやその時期の状況がどのようなものであるのかについて、定型発達児の保護者と比較し検討した。 結果、障害児を持つ保護者は多岐にわたる悩みや不安を抱えており、自分の時間のやりくりができなかったという思いが強く、子どもの障害に気づき大きな心理的葛藤の時期と重なる。そして子どもの行動を理解し、自身の心の安定を取り戻すことが困難であること
15．同			同　看護学会論文集	

				が示唆された。そのため、自分の時間をやりくりや、子育てへの積極的な考えがもちにくくストレスを高くしていることが考えられた。 小島賢子、屋敷久美 南部登志江
16. タクティールタッチ施行前後のローレンツプロット情報および主観情報における効果の検討	共同研究	2013 年 1 月 投稿予定	太成学院大学紀要 第 15 巻	自律神経活動を評価する指標であるローレンツプロット情報に着目し、タクティールタッチ施行前後の変化から自律神経活動に影響したのかについて検討することを目的に研究した。結果、タクティールタッチ施行による副交感神経活動の亢進、および交感神経活動の低下状態がコントロール群と比較して明らかになった。しかし、本研究の限界も明確になったため、今後、条件設定の変更工夫、および全身に対する施行等を検討しタクティールタッチのエビデンスを追求して行きたい。 屋敷久美、小島賢子 南部登志江
17. 第 1 子出産直後の夫婦における親役割満足、夫婦関係に対する満足感、育児に対する感情との関連 ―夫婦における比較検討―	共同研究	2013 年 2 月 投稿予定	インターナショナル Nursing Care Reseach Vol.12	初めて育児に取り組み始めた夫婦の親役割満足、夫婦関係に対する満足度、子どもや子育てに対する思いについての夫婦の違いおよび関連を研究することで、親としての目標設定の違いが明らかとなり、それが配偶者の子育てに対する要求や求める支援の違いなどと関連していることが示唆された。親として互いの成長発達を夫婦が支え合う為の支援に繋げたい。 屋敷久美、小島賢子
18. 第 1 子の子育てを開始した夫婦における親としての捉え方に関	共同研究	2013 年 2 月 投稿予	日本看護研究学会 第 39 回学術集会 に投稿予定	第 1 子を出産し子育てを開始した夫婦が、『親』になった自分自身、および配偶者をどのようにとらえ、それがど

する研究 -縦断研究による夫婦の比較-		定		う変化しているのかについて、出産直後、6ヶ月後、1年後に渡って縦断的に調査した結果、夫婦による捉え方の違いは時間経過による変化にも大きく影響していること等が明らかになり、今後の親としての成長を支えて行く上でその指導に対する多くの示唆を得ることができた。 屋敷久美、小島賢子
19. 保育所実習の意義 ～学生のアンケート結果による内容分析～	共同研究	2013年2月 投稿予定	日本看護研究学会 第39回学術集会 に投稿予定	小島賢子、屋敷久美 南部登志江
20. 看護職と配置転換と 職業アイデンティティとの関連	共同研究	2012年11月 申請書提出済み 結果待ち	平成25年度 科学研究費補助申請 申請中	喜多ひとみ、小島賢子 屋敷久美
（その他）				

教育研究業績書

平成 26 年 12 月 14 日

氏名　城内　貴代美　　印

研究分野	研究内容のキーワード
看護の専門職化、看護の歴史	専門職、アイデンティティ、キャリアアップ、フェミニスト

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
①小児看護学おもちゃ作成	平成 14 年 4 月～平成 19 年 3 月	奈良県三室病院附属看護専門学校（以降三室）小児看護学担当、小児看護学援助論安静を強いられる児の遊びを考えるテーマとしておもちゃ作りをさせた。おもちゃは発達の応じたもの、安全性、子どもらしさを考え作成させた。遊びは子どもの生活の一部であることを認識させた。
②小児看護学子どもとあそび体験	平成 14 年 4 月～平成 19 年 3 月	三室、小児看護学担当小児援助論夏休みを利用し、子どもとな遊びを課題とし子どものもつイメージを体感してもらった。子どもと接する機会の少ない学生にとっては今後実習導入へのステップとなり効果を上げた。
③小児看護学技術演習	平成 14 年 4 月～平成 19 年 3 月	三室、小児看護学担当、小児看護学援助論（1 単位）小児に必要な生活援助技術、診療補助技術を清拭、食事、点滴ルート固定、採尿技術を学生にデモンストレーションさせ発表させた。実習への導入をスムーズにした。
④小児看護過程紙上事例展開添削指導	平成 14 年 4 月～現在にいたる	三室、奈良県病院協会看護専門学校（以降奈病協）小児看護学援助論（看護過程の展開）小児看護を理解するためにネフローゼ症候群の児事例を用い 14H, 7 回にわたり実施した。グループによる面接をし個々にレポートの添削、また、グループごとに発表させ理解を深めた。小

		児看護学実習へ導入が容易となり理解も深まった。
⑤小児看護学実習終了時確認小テストの実施	平成 14 年 4 月～現在にいたる	三室、奈病協、小児看護学実習担当、実習終了時、学生の理解度がわかるために小テストを作成、不足部分は面接し指導行った。考え方などを指導することで次の実習に生かせるようにした。
⑥看護ゼミナール	平成 12 年 4 月～現在	三室、奈病協「人間」「環境」「健康」「看護」「倫理」「看護史」「看護専門性」について 1 年から 3 年まで文献検索、グループディスカッション、プレゼンテーションをさせ終了時に個々にまとめさせた。看護の本質を学ぶと共に検索方法、リーダーシップ、メンバーシップの在り方発表方法など自ら取り組み自主性・向上性がみられる。一項目 10h～15h 目安とし実施している。
	城内一1	
⑦3 分間スピーチ	平成 12 年 4 月～現在	三室、奈病協、3 分間スピーチは自分の意見や感じたこと、行ったこと等 3 分間にまとめ発表させるものである。自己表現の場所にしている。自己を理解し他者理解に役立っている。集中力なども養われている。
⑧フィシュ哲学導入	平成 19 年 10 月	奈病協　その人の良いところを見ていきましょうという考え方です。ありがとうメッセージボードを作成し感謝の言葉をカードに記載しボードに張り付けるようにした。クラスでは毎夕礼時フィシュの発表させよいところを意識づけるようにしている。
2. 作成した教科書、教材		
①ゴードンの機能別をもとに基礎Ⅰ・Ⅱ、成人・老年実習記録の作成	平成 12 年 4 月～平成 13 年 3 月	三室、実習調整者、基礎、成人・老年看護学実習の記録用紙作成に取り組んだ。看護診断を取り入れ看護過程の展開を思考のプロセスを理解しながら問題抽出、計画立案、実施、要約と結びつくようにすることで思考過程のプロセスがわかりやすくなった。

②ゴードンの機能別をもとに小児・母性実習記録の作成	平成 13 年 4 月～平成 14 年 3 月	三室、実習調整者、小児・母性看護学実習記録用紙あ作成に取り組んだ。小児は成長発達、家族・地域との関係性をもりこんだ。母性は女性のライフサイクル家族の協力、地域子育てなど盛り込み特徴づけた。
③ゴードンの機能別をもとに精神・在宅実習記録の作成	平成 14 年 4 月～平成 15 年 3 月	三室、実習調整者、精神・在宅看護論実習の記録用紙作成に取り組んだ。精神看護の特徴、社会復帰に向けて、在宅は本人と家族の関係性、社会資源有効活用など取り入れた。
④小児看護学実習要領作成	平成 13 年 4 月～現在	三室、奈病協、小児看護学担当、小児看護学 2 単位 90 時間、小児看護の考え方、目的、目標から学生が小児看護学実習を履修にあたり指針となるようにした。具体的な実習内容・方法、評価基準を記載した。毎年加筆修正を加え活用しやすいように工夫している。
⑤小児看護過程展開のための紙上事例作成	平成 13 年 9 月～平成 19 年 3 月	三室、小児看護学担当、小児看護学援助論 30h（1 単位）看護過程のための紙上事例展開をさせプロセスをわかりやすくした。ポイントがわかるよう実習では自ら取り組めるようにした。病院とも連携し工夫した。
⑥ゴードンの機能別をもとに成人・老年・小児・母性・精神・在宅実習記録用紙作成	平成 19 年 4 月～現在	奈病協　教務主任 成人・老年・小児・母性・精神・在宅実習の記録用紙作成に取り組んだそれぞれの特徴を踏まえ学生に思考プロセスがわかるように工夫した。
⑦成人看護過程の展開のためにの紙上事例作成	平成 19 年 4 月～現在	奈病協　看護過程 30h 1 単位担当　看護過程の基本から内容を事例を用いながら看護診断をツールに紙上事例を用いて、学生に看護過程のプロセス導いた。

⑧学生レディネス把握用紙作成	平成 15 年 4 月 ～平成 19 年 3 月	三室、実習調整者、臨床指導者に学生のレディネスを理解し指導を円滑にするための用紙を作成した。記載は学生自身にさせ、得意なところ、自分の弱点、指導を強化してほしい点を記載させ指導者に理解を得た。学生の反応は指導者から理解してもらっている、指導者からは短期間だから早く理解できるとよい評価を得ている。
⑨医療安全授業科目立て	平成 15 年 4 月 ～現在	三室、実習調製者、奈病協教務主任、　医療安全を科目立てとし、1 年次は医療安全の原則、2 年はビデオ、ディスカッション、危険予知能力を高めるための手法、3 年はデモンストレーションを行い在学中は医療の安全を常に考えられるよう構築し取り組んでいる。学生の意識を高めている。
⑩医療安全デモンストレーション内容作成	平成 15 年 4 月 ～現在	三室、模擬患者を用いたシュミレーションの作成し類似性、タイムプレッシャー、行為の中断、巻き込まれ等設定し、より病棟の環境に近いようにし事故が起こりやすい状況が常にあることを体験させた。自分も事故を起こす可能性を持っていることがわかり何に注意をしなければならないか効果を上げている。
⑪看護研究指導用サッシ作成	平成１３年４月 ～平成１４年３月	三室実習調整者、グループ看護研究に取り組んだ。学生のための看護研究の取り組み方、方法、論文のまとめ、発表の仕方、進行方法など一連の流れを冊子にまとめ指導した。また、教員間の指導内容の偏りがないようディスカッションを繰り返し統一できるようにした。卒業後、看護研究に興味を持ち活発に学会発表し効果をあげている。
3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成 14 年 2 月 平成 16 年 2 月 平成 18 年 2 月	小児看護学 105h,4 単位終了時、学生より授業評価を受けている。5 段階評価 3 以上で特に授業の工夫では 3.5～4.5 と高い評価を得ている。これを基に次年度の授業の工夫をしている。
	平成 14 年 12 月	小児看護学実習終了時学生より評価を受けて

	平成16年12月 平成18年12月 平成24年10月 平成25年10月	いる。5段階評価3以上で学生との面談、指導者間との調整では3.0～4.5と高い評価を得ている。この評価を次年度に生かすようにしている。 成人看護学概論の学生評価はほとんどの項目で良い、やや良い両者で80%以上の評価を得ている。特に狙いが分かった、内容が良かった、達成感があった、後輩に進めたいは86%の学生が良いとしていた。意見として教科書のどのページなのか、プリントなのかが分かりにくかった。があり、次回はこの意見を活かしたいと思っている 成人看護学概論の学生評価はほとんどの項目が良い、やや良い両者合わせて80%以上の評価を得ている。今年は体のしくみなど取り入れ学生にわかると面白いと意識づけた。昨年のの反省を踏まえ説明しているところを明示し進めていった。成人看護学援助論Ⅱ循環器機能と代謝障害のある患者の看護を担当した。パンフレットを作成、患者役、看護師役をしロールプレイをしイメージつくようにした。自己血糖測定や自己注射の演習も実施し患者の毎日の痛みを理解するきっかけとなった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
平成21年度カリキュラム改正教育課程	平成20年4月 ～9月	奈病協の理念を基に臨床と教育が乖離しないようコミュニケーション技術、エビデンス、診療補助技術の強化など盛り込み作成した。平成21年3月認可を得た。
5　その他		
①奈良県看護師等学校専任教員研修会	平成9年4月～ 平成19年3月	奈良県内の専任教員との学習会、小児看護学研修会に所属した。ほぼ月1回の割合で学習会、カリキュラム、授業案、研究発表に自己研鑽を図った。また、他校との交流を図り学生にとって良い教育とは、学生理解の場にもなり有意義な活動であった。学会発表も積極的に取り組み奈良県看護学会2題、日本看護学会3題発表した。
②看護師国家試験対策	平成9年4月～ 現在にいたる	学生の学習方法、計画立案、模擬試験、補講の企画、精神的な支援など全般にわたりかかわった。全教員の共通意識を図るために学生の状況

		報告など積極的に行った。予備校などに研修を受け動向と傾向を把握し、状況に応じた指導に取り組んだ。100～95%と高い合格率をキープしている。
③奈良県立三室病院看護専門学校における教育実績	平成7年4月～平成19年3月	[基礎看護技術食事、排泄 30h,1 単位] 1年次前期から後期にかけて担当、生理的理論を中心に人間が食べること、排泄することの意味合い、生活習慣、文化の違いなど教授し理解を深めた。演習前の事前学習は目隠しをして食事をしてくての感想、排泄では片手でトイレットペーパを使用など実体験を元に演習に取り組ませた。自主的に工夫を凝らし問題解決に取り組ませた。
	平成12年9月～平成15年3月	[基礎看護学技術、看護過程の展開 30h、1単位]2年次後期にかけて担当、看護過程の考え方方法、実践に向けて紙上事例を使いながら教授した。情報収集のツールはゴードンの機能的看護診断を利用し理解を深めた。問題解決方法について理解を深めた。実習と連動させながら学習効果をはかった。
	平成16年～平成19年3月	[看護学概論 30h1 単位] 1年次前期にかけて担当、看護の考え方、看護の役割、看護理論を踏まえ教授した。DVD などの視聴覚教材の利用、グループディスカッションをしながら看護を考える基礎づくりをした。
	平成12年4月～平成19年3月	[看護研究実践 15h]、3年次、学生の興味のあるテーマを追求し、研究計画、実施、まとめ方、プレゼンテーション、掲載論文まで実践を通して関わり研究の理解を深めた。
	平成7年9月～平成19年3月	[小児看護学対象論 30h,1 単位] 1年次後期、子どもの特徴を踏まえ、子どもを取り巻く環境、権利、家族、教育、福祉などディスカションを踏まえながら理解を深めた。小児看護師としての在り方について教授した。
	平成7年6月～平成19年3月	[小児看護学健康論 30h、1 単位] 2年次前期、経過別、症状別、技術など具体的な援助論を教授した。技術は演習を踏まえ発表形式をとり理解を深めた。

	平成 7 年 9 月～平成 19 年 3 月	［小児看護学援助論 30h,1 単位］ 2 年次後期、疾患別看護小児の特徴的な疾患を取り上げ教授した。援助方法は成長発達からくる症状と特徴、安楽などの理解を深めた。
	平成 7 年 12 月～平成 19 年 3 月	［小児看護学援助論看護過程の展開、15h,1 単位］、2 年次後期 紙上事例を利用し問題解決に向けての援助方法を理解することができた。
	平成 7 年 6 月～平成 19 年 3 月	［基礎看護学実習Ⅰ45h1 単位］、2 年次前期 健康障害を持つ患者の日常生活援助を目的とし既習しことを想起させながら取り組ませた。初めての実習で教員のかかわりはその行為が看護であることを告げ職業人として意識させた。
③奈良県立三室病院看護専門学校における教育実績	平成 7 年 12 月～平成 19 年 3 月	［基礎看護学実習Ⅱ 90h1 単位］、2 年次後期、健康障害を持つ患者の看護過程の展開をさせながら問題解決方法、記録の方法など面接をしながら指導し理解をさせた。
	平成 7 年 6 月～平成 19 年 3 月	［小児看護学実習 90h,2 単位］ 3 年次前期～後期 小児の特徴を踏まえて保育園実習で健康な子どもの生活を理解し小児科病棟の実習に取り組んだ。看護過程の展開、技術、看護計画発表、中間面接など取り入れ指導を行い看護師としての意識を深めていった。
	平成 16 年 2 月～平成 19 年 3 月	［医療安全実践８h］ 3 年次卒業前講義 模擬患者を用いたシュミレーションの作成し類似性、タイムプレッシャー、行為の中断、巻き込まれ等設定し、より病棟の環境に近いようにし事故が起こりやすい状況が常にあることを体験させた。自分も事故を起こす可能性を持っていることがわかり何に注意をしなければならないか効果を上げている。
④奈良県病院協会看護専門学校における教育実績	平成 19 年 4 月～平成 24 年 3 月	［看護学概論 30h1 単位］ 1 年次前期にかけて担当、看護の考え方、看護の役割、看護理論を踏まえ教授した。DVD などの視聴覚教材の利用、グループディスカッションをしながら看護を考える基礎づくりをした。
	平成 19 年 4 月～平成 24 年 3 月	［小児看護学Ⅰ対象論 30h, 1 単位］ 1 年次後期、子どもの特徴を踏まえ、子どもを取り巻く環境、権利、家族、教育、福祉などディスカシ

		ョんを踏まえながら理解を深めた。小児看護師としての在り方について教授した。
	平成 19 年 4 月～平成 24 年 3 月	[小児看護学Ⅰ健康論 30h、1 単位] 2 年次前期、経過別、症状別、技術など具体的な援助論を教授した。技術は演習を踏まえ発表形式をとり理解を深めた。
	平成 19 年 4 月～平成 24 年 3 月	[小児看護学Ⅱ援助論 60h,1 単位] 2 年次後期、疾患別看護小児の特徴的な疾患を取り上げ教授した。援助方法は成長発達からくる症状と特徴、安楽などの理解を深めた。紙上事例を利用し問題解決に向けての援助方法を理解することができた。
	平成 19 年 4 月～平成 24 年 3 月	[看護研究 30h、1 単位]2 年次後期 研究の考え方から研究の種類、研究方法、研究計画、実施、まとめ方の教授をした。実践では事例検討をし、自分の行った看護を振り返り、プレゼンテーション、掲載論文まで実践を通して関わり研究の理解を深めた。
	平成 19 年 4 月～平成 24 年 3 月	[基礎看護学技術、看護過程の展開 30h、1 単位]2 年次後期にかけて担当、看護過程の考え方方法、実践に向けて紙上事例を使いながら教授した。情報収集のツールはゴードンの機能的看護診断を利用し理解を深めた。問題解決方法について理解を深めた。実習と連動させながら学習効果をはかった。
	平成 20 年 4 月～7 月	[論理学 30h,1 単位]、1 年次前半文章構築の理論編から応用編迄小論文を書かかせながら教授した。論文としてかける文章を意識しケーススタディのまとめに繋げ理解を深めた。
	平成 19 年 10 月～平成 20 年 2 月	[医療安全 15ｈ、]2 年次後期、医療安全理論、法的、予防方法、危険予知等、診療の補助でおこる問題、日常生活援助で起こる問題を取り上げ注意しなければならないことを教授し理解を深めた。
⑤学校法人天満学園太成学院大学看護学部における教育実績	平成 24 年 4 月～現在に至る	[成人看護学概論 2 単位]2 年次春学期にかけて担当、成人期の複雑多様化した現代社会で大きな役割を示す特徴を踏まえ、急性期、慢性期、終末期の病期の理解をした。また、イメージが付きやすいように DVD の利用、個人、家族などに置き換え意見交換をし成人看護学の理解を深

		めてた。
	平成24年4月 ～現在に至る	[看護研究法領域別成人看護学2単位]4年次春学期にかけて担当、先行研究の文献を調べ、文献討議を実施した。お互いに研究テーマを理解し研究の在り方を理解し卒業研究テーマにつなげた。
	平成24年4月 ～現在に至る	[看護研究領域別成人看護学選択2単位]4年次秋学期　看護研究法で学んだことを活かし、自分のテーマにどのように取り組むか一連の過程を教授し体験させた。関わりの時間が少なかった点が今後の課題である。
	平成24年4月 ～現在に至る	[成人看護学実践実習Ⅰ(急性期) 3単位]3年次秋学期より担当、成人看護学概論、援助論を踏まえ手術を受ける対象を身体、精神、社会的に変化することを理解させた。個別的な健康問題を解決するには根拠提示し具体的な実践で学ぶことにした。
	平成24年4月 ～現在に至る	[成人看護学実践実習Ⅱ(慢性期) 3単位]3年次秋学期より担当、成人看護学概論、援助論を踏まえ慢性的な健康障害を持つ対象を身体、精神、社会的に変化することを理解させた。生活指導では個別のセルフケア能力応じた援助を中心に具体的な実践で学ぶことにした。
	平成25年4月 ～現在に至る	[成人看護学援助論Ⅱ]循環機能障害４ｈ、代謝機能障害のある患者4hの看護を担当した。演習、ロールプレイをしながら患者心理がわかるように工夫した。疾患の機序も復習しながら看護につなげるため学生にわかりやすく教授した。
	平成27年4月 ～現在に至る	「成人看護学援助論Ⅰ」手術患者の前、中、後の看護を演習計画し実施した。実習につなげるために看護過程の展開も踏まえ胃がんの患者、大腿骨置換術の患者を想定し授業とリンクしながら実施した。
	平成27年4月 ～現在に至る	「成人看護学援助論Ⅱ」ターミナル期看護事例を多く使い学生には臨床とほぼ同じように、ロールプレイをしながら患者の心理、家族の心理に添うようにして教授した。
職務上の実績に関する事項		

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
①看護婦免許	昭和 51 年 5 月	第 301772
②臨地実習指導者	昭和 61 年 10 月	奈良県指導者講習会修了
③看護婦長・看護主任	平成元年 10 月	自治体病院婦長・主任研修会修了
④看護教員	平成 9 年 1 月	兵庫県看護教員養成講習会修了
⑤看護管理ファーストレベル	平成 9 年 3 月	看護管理ファーストレベル奈良県看護協会認定
⑤看護学士	平成 11 年 8 月	グリフィス大学保健学部看護学科卒業
⑥統計士	平成 12 年 11 月	文部省認定社会通信教育現代統計実務講座修了
⑦看護診断	平成 13 年 1 月	看護診断トレーニングコース修了
⑧看護学修士	平成 15 年 10 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士課程卒業
⑨リスクマネージャ	平成 16 年 1 月	医療現場におけるリスクマネージャー養成コース修了
⑩予防医学リンパ健康セラピスト養成講師	平成 21 年 7 月	予防医学リンパ健康セラピスト養成講師講座修了
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
①看護師	昭和 47 年～平成 7 年 3 月	消化器内科では終末期の患者が多く、患者の不安、苦痛の緩和、家族へのサポートへのかかわりを主においていた。循環器は急変時、回復期のケア、患者の生活指導へ力をつくした。小児病棟では健康を害しても成長し続ける小児の関わり方、家族を含め他ケア、遊びへの工夫も看護師の大きな役割としてかかわっていた。
②臨床指導者	昭和 54 年 4 月～平成 7 年 3 月	天理よろず相談所病院では天理看護学院 2 年課程学生、奈良県立三室病院では信貴山看護専門学校 3 年課程の学生、平成 5 年から三室病院附属看護専門学校 3 年課程の学生を対象とした。患者の選択、看護教員との連絡、学生受け持ち患者のＤｒ講義依頼などかかわりを持ち学生に疾患の理解、患者との関係性、ケア技術、態度など配慮しながら指導を行った。
③看護専任教員	平成 7 年 4 月～	奈良県立三室病院附属看護専門学校小児看護

	平成 19 年 3 月	学を専門に授業と臨地実習にかかわった。授業では学生がイメージができるよう文献、DVD、モデル人形など用い小児の特徴を教授した。基礎看護技術では体験学習、ロールプレイや自分の経験を活かし技術演習に取り組んだ。実習では臨床指導者と連携をとり学生の実習が円滑に進むよう配慮した。特に子どもと接する機会の少ない学生が多いため夏休みを利用し、近所の子どもと接する機会をもうけ、また、保育園実習など入れ工夫している。
④実習調整者	平成 12 年 4 月 ～ 平成 19 年 3 月	実習が円滑に進むように施設との交渉、時間配分、学生のグループ調整、臨床指導者との会議、実習病院との協議会の計画、学生と指導者の調整役、教員の調整・指導を行った。また、医療安全を意識させ、セクハラなど起こさせないよう学生の態度、身なりも十分注意した。メンタル面の弱いな学生は担当教員と連絡を取り面接を繰り返しサポートした。
⑤教務主任	平成 19 年 4 月 ～平成 24 年 3 月	学校運営がスムーズに図れるようにする。年度目標を立て、教員、学生に浸透させる。カリキュラムの進行、講師との調整、各クラス・委員会の運営がうまくいくよう調整をする。教員には役割認識の指導や研修会・看護研究の推進を図る。学生には学生の本分を忘れないようにけじめをつけ、看護職を目指している自分に誇りが持てるようにする。他施設の調整や要請があれば積極的に受けるようにしている。
⑥成人看護学教授	平成 24 年 4 月 ～現在に至る	成人看護学は基礎を土台とした領域で学習を深めていけるようにする。また、看護職専門職業人としての意識を持たせるようにした。知識は 1 年次で学んだことを活かし教授した。3 年次の実践実習は思考過程を大切にした。専門職業人としてふさわしい礼儀、態度、言葉使いなども意識させた。やる気を維持させるためにフィシュ哲学を導入し維持した。
⑦実習主事	平成 25 年 4 月 ～平成 27 年 3 月末	各領域と連絡を取り施設と打ち合わせをしながら実習が支障なくできるよう組み立てた。今年度で高田病院が終了となった。新たに橋本市民病院と市立堺病院、ＰＬ病院が協力していた

		だくことになった。平成 27 年度中野こども病院、平成 28 年度枚方小児科が実習断られた。要因は：」就職がないということで、他の教員に働きかけた。
⑧三室病院看護部　次期臨床指導者育成　講師 テーマ　看護学生を理解するために	平成 10 年 2 月	指導者になると自分の受けた教育をそのまま学生にあてはめてしまう傾向がある。それは、すべてが良いとは限らない。現在の学生気質や実習ではその場に行くだけでもストレスを感じている。良い実習場所は指導者だけでなくスタッフからもよく話を聞いてくれる。いやな実習場所は学生を邪魔者扱いをされ疎外感を感じることである。そのままの学生を受け入れ、学んでいる途上であることを理解していただき、看護職という仕事が楽しいと思わせてほしいと締めくくった。
⑨三室病院　指導者会　講師 テーマ　看護基礎教育における本校の技術教育の現状	平成 15 年 3 月	厚労省「基礎看護技術における技術教育の在り方に関する検討会」の資料に沿って本校の技術教育の現状を把握し実習ｊに向けて学生指導の在り方について示したものである。生活技術援助は学生同士演習の実施可能であるが、診療援助技術はビデオ、模型にのみでとどまっており実施までは難しい現状である。実習においても免許を持たない学生の実習は患者擁護の立場から課題として残る。
⑩済生会中和病院　指導者会　講師 テーマ　新カリキュラムに向けて実習の在り方	平成 20 年 10 月	平成 21 年度カリキュラム改正は臨床と教育の乖離、そのための新人看護師の離職を軽少させるためである。カリキュラムの変遷から現在に至った経緯、本校のカリキュラムでは技術力の強化とコミュニケーション技術を重視している。臨地実習では統合分野ではチーム医療の中の看護師の役割、複数患者の受け持ちなど考慮している。
⑪奈良社会保険病院　新卒研修会修了講師 テーマ　看護哲学　専門職にむけて	平成 21 年 3 月	看護職の専門職化について理論を交え説明し、知識と自立性に欠けている。日本の看護職は被抑圧集団の理由説明。特に医師からの抑圧で

		す。脱却するためには看護職しかできない仕事をすることです。しかし、看護の仕事はシャドーワークといわれ見えにくい。その典型が日常生活援助です。誰でもできる、やって当たり前、賞賛をあびるほどでもない。しかし、自分のことができないことが人間の尊厳をゆるがす大きな分野であること、そのことを看護師が気づきゆるぎないものにしなければ専門職とはいえない。
⑫奈良県看護師等教務主任研修会伝達講習 テーマ　政治力をもつために	平成 21 年 3 月	看護の地位を上げるためには政治力を持ち制度を変えなければ何も変わらない。看護職が専門職と認めてもらうには組織・自助努力では限界があり制度改革をなさねば変化は見られない。少子化のため 18 歳人口の減少、学生確保の必要性、看護大学化の促進、需要と供給のアンバランスをきたしている。与えられるのを待つのではなく自分たちで改革を進めていく必要がある。
⑬関西看護学生研究大会　実行委員	平成 21 年 4 月 から 11 月	看護を担う看護学生の研究的態度を養い、相互研鑽や構造の交流を図り、看護職への期待を持ってもらうことを目的に企画、運営を行った。
⑭大阪府教員養成講習会講師 看護教育課程、専門領域別、看護教育方法論演習、 看護教育実践	平成 21 年 9 月 から 12 月	看護教育方法演習および看護教育実習、看護教育に必要な基礎的知識、技術、態度を習得し看護教育者として主体的に活動しうることを目的に看護過程から小児専門領域、模擬授業活動にかかわった。
⑮はびきの市民大学	平成 26 年 5 月 21 日 平成 26 年 6 月 4 日	自分でできるリンパマッサージ社会活動にかかわった 子育てこどものあそび社会活動にかかわった
⑯オープンカレッジ	平成 21 年 8 月 4 日	セルフリンパマッサージ地域市民の方々に実践した。
4　その他		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等	概要

	共著の別		又は発表学会等の名称	
（著書） なし :				
（学術論文） 1．日本における看護の地位の検証ー文化的展望の構造、権力の構造、保健制度の体制	単著	平成 10 年 6 月	グリフィス大学保健学部看護学科学士課程コースワーク合格	日本の看護の地位は決して高いものではない。その要因は女性の職種であること、伝統的専門職ではないこと、制度的なこと、医師に養成された経過があること、白衣の天使と間違った印象を植え付け厳しい労働条件に強いられたことなど権力に翻弄された看護の姿が浮かび上がった。
2．食生活習慣の基礎づくり 現代っ子は生活習慣予備軍　5 人に一人は要注意	単著	平成 10 年 7 月	グリフィス大学保健学部看護学科学士課程 コースワーク合格	食生活の変化から子どもの体をむしばみ多くの疾病の要因になっている。しかし、子どもの責任ではなく親が正しく食生活を見直さなければならない。
3．組織構造、組織文化、リーダシップ、看護管理の役割	単著	平成 10 年 11 月	グリフィス大学保健学部看護学科学士課程 コースワーク合格	組織の中で特に病院は看護職が一番多い。しかし、意見主張は十分に取り入れられていない。このことは患者の療養環境をゆるがすもので看護職はしっかり意見を言えるようにしなければならない。
4．ヘルスケアシステムの一員としての看護職がとるコミュニケーションの現状	単著	平成 10 年 11 月	グリフィス大学保健学部看護学科学士課程 コースワーク合格	組織で働くための動機づけは達成、承認、責任、興味、可能性、昇進である。これらをコントロールするためにタイミング、速場の雰囲気、人間関係に大きな影響を及ぼす。
5．エゴグラムの変動と看護学実習評価との関連についての研究的観点からの批評	単著	平成 11 年 1 月	グリフィス大学保健学部看護学科学士課程 コースワーク合格	研究症例をクリティークするものである。研究目的、研究デザインの在り方、仮説の出し方、結果、考察を基準に照らし合わせ批評した。このことが研究の必要な内容の基礎構築になった。

6．A・マズローの欲求論を用いて子供の終末期の看護過程を検証	単著	平成 11 年 3 月	グリフィス大学保健学部看護学科学士課程コースワーク合格	終末期を迎えた児の自己実現について述べたものである。自己実現はあり得るのかという疑問である。児の卒業式に出たいという欲求は児にとって児の自己実現であった。
7．小児科病棟における遊び環境の問題点とその改革	単著	平成 11 年 4 月	グリフィス大学保健学部看護学科学士課程コースワーク合格	病院は治療が優先となり遊びは重要視されにくい。看護師は改革しようとするが、治療優先になりがちである。遊びはチームとして取組、遊び環境は組織として取り組まなければ改善しない
8．フェミニズムからみた看護教育の問題点　専門職化を阻んできたもの	単著	平成 13 年 1 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士ディプロマ課程合格	専任教員は隠れたカリキュラムとして学生に女性性を強調したり、医師への忠誠をはかろうとしている。このことは内面的のところから専門職化を阻む要因である。
9．入院している子どもの遊びに対する看護婦の認識	単著	平成 13 年 3 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士ディプロマ課程合格	この調査は看護スタッフの遊びの実態を明らかにしたものである。子どもへの関心が高い看護婦は子どもの遊びのかかわりが高かった。
10. 子どもの入院による母親のストレスに対するコーピングの分析	単著	平成 13 年 4 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士ディプロマ課程合格	ラザルスのストレスコーピングをあてはめ、子どもご入院しても自ら対策を取ろうとすろ母親はうまくストレスを発散症としている。しかし、サポート要因が大きくかかわっている。
11. ケアリングとテクノロジー	単著	平成 13 年 7 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士課程コースワーク合格	テクノロジーが発達すると人々はそちらを優位にとらえがちである。しかし、人のケアは人がしなければ解決しないことが多い。
12. 小児看護婦が子どもの遊びに関われない要因の探求 : グラウンデットセオリーを用いて	単著	平成 13 年 10 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士課程コースワーク合格	グランデッドセオリーを用いての質的研究である。これは遊びの重要性は理解しているが、多忙な時期、仕事をしていないように見られる、葛藤があることがわかった。
13. 思春期におけるインスリン依存型糖尿病患児の発達上の問題	単著	平成 14 年 1 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士課	思春期はアイデンティティの確立の時期であり、友達関係は発達を促すうえでも重要な存在である。慢性疾患は状況危機、発達危機を抱え

			程コースワーク合格	ておりコントロールが難しいとされている。看護師のサポートが非常に重要な時期であることがわかった。
14. ゴードンの機能的健康パターンに基づく脳血管障害痴呆症のアセスメント	単著	平成 14 年 2 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士課程コースワーク合格	事例をゴードンの機能的健康パターンを利用しアセスメント計画立案を導き出したものである。身体的ケアのみでなく家族を含めたケアを実施結果を導き出した。家族の面会を強いるのではなく、家族の生活パターンも重視し本人とのかかわりを持つことで負担感を持つことなく過ごすことができた。
15. 看護専門学校における看護技術教育の検討	単著	平成 14 年 12 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士課程コースワーク合格	看護技術教育は職業訓練とする域を脱し切れていない。徒弟式訓練法を基盤とするところである。この方法は専門職として疑問視するところが多くある。人を対象とする技術は知識を土台に技と人間心理を理解した上で看護師の研究態度から成り立つものである。
16. EBM からみた全身清拭の検証	単著	平成 15 年 2 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士課程コースワーク合格	看護ケアの判断基準の中で清拭は日常に良くされるケアである。施設の 9 割は蒸しタオルが主になっており、入浴の代行という視点からかけ離れている。生理学的にみると石鹸使用のほうが汚れは落ち皮膚の免疫能が高まり心理面でも入浴している気分になる。効率を求めるのではなく専門職であるならばその方法を見極める必要がある。
17. 医療安全教育、転倒転落防止	単著	平成 15 年 3 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士課程コースワーク合格	事故防止は注意喚起では有効ではなく組織的な取り組みが必要である。本院の問題点を抽出し改善点を挙げた。患者には昼と夜の環境が違うことを認識させる。動けると思っても看護師に見守ってもらう。ベッド周囲は全員が周知できるよう張り紙など利用する。
18. 看護基礎教育における安全な静脈注射の基礎プログラム	単著	平成 15 年 4 月	ラトローブ大学保健学部看護学科修士課程コースワーク合格	静脈注射の教育プログラムの立案である。1 年から 3 年までのプログラムを作成、医療安全とつなぎ 3 年次はモデル人形を使い実施までいたるようにした。この計画は実際看護教育カリキュラムに導入している。
19. 教員と指導者が共有できる看護技術水準に基づいた学習内容と分類と指	筆頭論文共著	平成 17 年 1 月	日総研発行	看護技術水準を用いて講義、DVD、学内演習、を踏まえ経験録を作成した。学生が経験した技術の抽出を行い傾向をまとめた。診療の技術が

導・評価表				どの実習上においても少なくVS,環境整備は毎日行っていた。城内貴代美、船瀬孝子他4名：2005.Vol.2（2）p14-27
20.日本の看護の歴史	単著	平成10年10月	奈良県三室病院看護学雑誌	日本の看護がどのように発達し、現在に至ったかをフェミニズム、制度、教育の視点から論述した。
（その他） 1.臨床指導者の不安の分析とその解決方法	筆頭 論文 共著	昭和61年9月	奈良県指導者講習会報告会	学生指導をするには学生の気質、レディネスがわからない。何をどの程度まで教えればよいのか、指導者としての在り方などの不安が上がった。解決は教員・学生とよく話し合うことがよい。
2.乳幼児点滴シーネ固定方法考案	筆頭 論文 共著	平成8年10月	三室学会	従来のシーネは重く児にストレスが強かった。そこでダンボールを使用し軽く安価なシーネを考案した。毎日交換できることから清潔面、児のストレス軽減を図れた。
3.小児看護学の対象理解を深めて	共著	平成9年8月	第8回奈良県看護婦等学校専任教員研修会報告	小児の理解を深めるため成長発達の理解、情緒面、身体面、法律など幅広くとらえ学生指導の一端とした。村嶋敬子、城内貴代美他p19.
4.奈良県内の子どもの療養環境における実態調査	筆頭 論文 共著	平成10年8月	第9回奈良県看護婦等学校専任教員研修会報告	子どもにとって遊びは生活そのものであり奈良県内の小児科病棟の遊びの環境の実態を調査した。その結果プレイルームはあるものの物置になっていたり、病室として扱われていたりじゅぶんではなかったことがわかった。城内貴代美、原田真由美他3名p.20.
5.奈良県内の子どもの療養環境における看護婦の遊びの関わり	筆頭 論文 共著	平成13年8月	第12回奈良県看護師等学校専任教員研修会報告	この調査は看護スタッフの遊びの実態を明らかにしたものである。子どもへの関心が高い看護婦は子どもの遊びのかかわりが高かった。城内貴代美、高塚ゆかり他2名p21
6.小児看護学実習の学び看護学生アンケート調査から	筆頭 論文 共著	平成14年8月	第13回奈良県看護師等学校専任教員研修会報告	この調査は看護学実習で学生が学んだこと学びえなかったことを抽出した。この結果看護過程の展開、慢性疾患、急性期では差が見られた。急性期では展開が早く学生がついていけない

				状況がわかり示唆を得た。城内貴代美、原真由美他 2 名 p. 27
7. 小児看護学実習評価における教員と学生の差異 看護過程を中心に	筆頭論文共著	平成 15 年 12 月	第 14 回奈良県看護師等学校専任教員研修会報告	看護過程の評価を学生自己評価、教員の評価の差異を比較し問題点の抽出に取り組んだ。結果展開が早く教員は学生に多くのことを求めすぎ差が生じていると示唆を得た。城内貴代美、川村一世他 3 名 p 20-24
8. 看護学生が患児の母親の及ぼす影響アンケート調査から	筆頭論文共著	平成 16 年 10 月	第 15 回奈良県看護師等学校専任教員研修会報告	看護学生が患児を受け持つことで母親に負担を与えることが懸念される。そこで調査をしたところ児を受け持ちをしている母親は学生を肯定的にとらえていた。しかし、受け持ちナシは何をしているのかが分からない状態であることがわかった。城内貴代美、熊谷江利子他 3 名 p 17-22
9. 受け持ち患児の母親が思う看護学生	筆頭論文共著	平成 17 年 10 月	第 16 回奈良県看護師等専任教員研修会報告	学生に受け持ちをされた母親は児の症状がある時、不安な時は学生の存在が苦痛である。しかし入院が長期化する児は学生のかかわりに助けられている。城内貴代美他 2 名 p 20-22
10. 看護学生レディネスのリーフレット作成患児の母親に理解を得るために	筆頭論文共著	平成 18 年 8 月	第 17 回奈良県看護師等学校専任教員研修会報告	母親に学生レディネスの理解を得るためリーフレットを作成した。学生の特徴、実習とは何をしているのか、学んできた学習、守秘義務についてなど盛り込み理解を得るもので色遣い、文字の大きさ、A4 サイズ、ラミネートシート使用し床頭台のところに置いき目のふれるところにおいた。入院時案内で説明の依頼をした。城内貴代美、石川章子他 2 名 p19-24
11. 入院中の幼児の母親のおやつに対する認識	筆頭論文共著	平成 5 年 2 月	近畿地区看護研究学会（大阪）	患児の母親が病院食以外のおやつを食べさせるところがあり、本来のおやつの意味をどのように理解しているか調査を行った。手づくりおやつが良いと認識しているが実際はつくれない。しかし、時間、量、回数を決め食べさせていることが多かった。入院すると食欲不振のため口に入るものを食べさせていた。城内貴代美、藤本恵子他 2 名 p120

12. 奈良県内における小児科施設遊び 環境の実態調査第一報	筆頭 論文 共著	平成 14 年 2 月	奈良県看護研究学会	施設の遊び環境を小児科病と混合病棟で比較すると小児科病棟は有していたが混合病棟はフロワーを遊ぶ場所にし工夫を凝らしていた。遊び道具は寄付などつのり一定の場所に保管していた。城内貴代美、原田真由美他 2 名 p33-36
13. 奈良県内における小児科施設遊び看護師の関わり 環境の実態調査第二報	筆頭 論文 共著	平成 14 年 2 月	奈良県看護研究学会	この調査は看護婦の遊びのかかわりの実態を明らかにしたものである。月 1 回のお楽しみ会、行事は行われていたが、日々の遊びは十分ではなかった。仕事の一部として組み込む必要性を感じた。城内貴代美、高塚ゆかり他 p 37-40
14. 看護学生から見た実習評価	筆頭 論文 共著	平成 16 年 12 月	三室学会	看護学生が実習上で環境面、人間関係、受け入れ、学習効果を見たものである。受け入れの良い病棟は学生の意欲も高く、看護婦が忙しい層にしていると邪魔をしていると感じている。城内貴代美、他 4 名
15. 看護学生の実習へのストレス	共同 研究	平成 17 年 12 月	三室学会	看護学実習で学生のストレスの状況を調査した。人間関係にストレスを感じており、特に看護師に強く感じていた。山下陽子、城内貴代美他 4 名
16. 看護基礎教育における安全教育内容の検討、卒業後5か月目の新人看護師のアンケート調査より	共同 研究	平成 18 年 12 月	平成 18 年度近畿地区看護研究学会（和歌山）	医療事故防止に必要な知識・技術・演習を実施しその習得状況を明らかにするためアンケート調査を行った。確認項目の知識・技術の習得率が低かった。注射の知識の習得率は全国平均と変わらず、知識技術は各看護学にとりいえくりかえる必要性があった。薬理学は実習を踏まえ学ばす必要性があると示唆を得た。谷村友子、城内貴代美他 4 名：p173-175
17. 患児の母親が看護学生について受ける印象	筆頭 論文 共著	平成 18 年 9 月	第 37 回日本看護学会（広島）小児看護学	患児の母親は看護学生が何をしているのかよくわからない状態である。受け持ちをした患児の母親は学生は一生懸命していると印象をうけている。城内貴代美、他 2 名 p294-296

18.看護学生が受け持ちをした患児の母親に与える影響	筆頭論文共著	平成19年9月	第38回日本看護学会（つくば市）小児看護学	受け持ちをした患児の母親のみに学生が与える影響を調査した。母親の時間が制約される。気がつかない。休みたいとき休めない。子どもと遊んでくれる。助かるなどがあった。治療、検査の説明は学生は重要視されていない。城内貴代美、他2名 p170-172
19.奈良県内で従事する小児看護師のキャリアアップについて実態調査	筆頭論文共著	平成20年7月	第39回日本看護学会看護総合（金沢）	小児科に従事する看護師は年代が若く、経験年数の少ない看護師が多くみられた。キャリアを中止する可能性が高く、自分の看護をサポートしてくれる人も少ないため将来自分ぬ進む道がわからない状況であった。城内貴代美、熊谷江利子他1名 p51-53
20.看護学生レディネスの理解を得るために患者の母親にリーフレットの使用を試みて	筆頭論文共著	平成21年9月	第40回日本看護学会（高知）小児看護学	小児看護学実習をするにあたり看護学生が患児の受け持ちをすることで母親の負担感がある。そこで母親に学生のレディネスを理解してもらうためにベッドサイドにリーフレットおいた。学生が何を学習し、実習しているのか興味を持ち理解を得ることができた。城内貴代美他3名
21.A県内で従事する小児看護師のキャリアアップに向けて職場サポート無記名質問紙調査	筆頭論文共著	平成21年10月	第40回日本看護学会（大阪）看護管理	A県では看護師が若く、経験年数も少ない。職場研修はなされているが、小児看護に特定すると少ない。看護学会の参加はまずまず参加できていた。しかし、長期研修は少なく経済援助はほとんど見られない。人的サポートは上司は理解を示していたが、多忙のため同僚に気を使うなどの問題が抽出された。城内貴代美他3名
22.看護学生の防災総合参加を取り入れた災害看護教育実践ー医療救護訓練参加後の学び	共同研究	平成22年7月	第41回日本看護学会（山口）看護総合	災害看護は学生にイメージしにくい学科で机上の学習に限定されやすい。そこで災害訓練に参加することでイメージが付きやすく学生の学びが大きいのではないかと思われる。列車事故を想定した車内に閉じ込められた傷病者役として参加した。心理面では不安感・孤独感を感じた。救護者から適切な声掛けで安心感を得た。しかし、医療関係者の連携があまりなされていまかった。確かな訓練と知識の必要性を感じ取っている。北村美穂子、城内貴代美

教　育　研　究　業　績　書

平成　28　年　4 月　29 日

氏名　福岡　珠美　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
成人看護学 看護研究	看護学生　周手術期　慢性期看護　ターミナルケア 成人看護学実践実習

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 看護学生に、礎看護学の基礎知識を踏まえた上で演習を行う事で、体験と知識の統合を図った。 （関西学研医療福祉学院／奈良文化高等学校）	平成 19 年 4 月～平成 23 年 5 月	解剖学・生理学の基礎知識を想起させ、学生自身が身体的問 題に気づきを持てる様に、助言を行った。その上で、基礎看護が必要であるかを考えさせることで、看護の役割を学生は知ることができた。また演習を学習直後に行うことで、さらに理由づけができ、また理解を深めることで、達成感や意欲を高めることができた。
成人看護・老年看護・看護学研究では、社会状況や事例を用いて、イメージ化を行うとともに、学生の思考過程の向上に努めた。 （関西学研医療福祉学院／奈良文化高等学校／藍野大学）	平成 19 年 4 月～平成 26 年 2 月	基本的な概論を学び時代の流れを知ることで、現在との違いに気づき、問題を学生に検索させた。その問題が起こってくる機序や事例展開をグループワークさせ、レポート化し発表もさせた。この行動は学生の協調性を高め、文章力・発表により他者への効果的な伝達方法を学ぶことと、学生の自信にもつながる目的があった。その結果学生の成長がみられた。
マルチメディア器具を活用した授業方法 看護学生教育 （関西学研医療福祉学院／奈良文化高等学校／藍野大学）	平成 19 年 4 月～平成 26 年 2 月	基礎看護学・成人看護学・老年看護学の講義においてイメージができ、学生の興味を引き出し、知識を深めた。スライドを使用し、また動画が効果的な場合はＤＶＤなどを臨機応変に使用し、教授内容の円滑な推進を図った。また、視覚効果による理解力の幅を広けると共に、学生が退屈しない授業内容構成ができた。 学生はＰＣを使用したレポートのまとめや発表などを行うことで視覚効果について学ぶこともできた。また、現在使用能力を必用とされている

		ＰＣの理解も深まり、情報処理能力も高まった。
看護研究（藍野短期大学）	平成23年6月～平成26年2月	一般的事例、看護的な事例を用いてグループワークを行い講義する。看護研究の必要性について教授する。量的・質的事例研究について教育した。
成人看護学講義・実践実習 （急性期・慢性期・終末期）（太成学院大学）	平成26年4月～	急性期では周手術期をメインにアクティブ・ラーニングを用いた講義展開を行った。特に術後合併症については強化し教授し学生の知識の習得が出来た。各論では学生が実践実習で関わる疾患など周手術期の問題などを教授した。看護過程や退院指導のパンフレット作りも行い、周手術期の看護を学生は学ぶことが出来た。その結果実践実習おいても講義内容とリンクしており、成人看護学の学びの統合が出来た。 慢性期もアクティブ・ラーニングを用いた講義展開を行った。疾患を持ち社会生活を送る患者の看護について教授し、講義後半で学生が身近に感じる事例を作成し、事例から慢性期の患者の看護を理解させると共に講義の復習を行ない実践実習にも活用出来た。 終末期では、教員の体験談を話すことで、人の死について考える。看護師の役割など考えられる講義内容を展開した。
看護学研究法・看護学研究	平成26年4月～	研究法では、基礎知識として、質的・量的など一般的な事例を用いて学生に説明し（学生の興味があるスターの話など）まず研究は楽しいものであることを印象づける講義内容とした。 研究では、学生が興味を持ち、学生で進めていける内容にポイントを置き、論文ができるまで意欲が減退しないように励ましながら指導・助言を行った。常に一緒に考え、学生の精神状態の把握も行い、論文作成・発表まで行うことが出来ている。
２　作成した教科書，教材 学生に理解できる性教育の教材作成 視力障碍者が触れてわかる性教育の教材作成	平成10年	全国の小学校・中学校・高校・大学の講演依頼があり、その時に学生の「思春期の性教育」の講演時に学生がイメージしやすく、理解できる様に布などで教育教材を作成し講演を行った。学生は非常に興味を持ち、解りやすい性教育と評判とな

		り、学校からは教材作成の方法を教えてほしいと言う依頼もあり、簡単な物は指導した。
「呼吸循環を整える看護技術」のスライド集・立体模型作成 （関西学研医療福祉学院）	平成21年4月～平成23年3月	呼吸循環を整える看護を詳説した資料を作成し、看護学生１年に配布し、教科書内容と併用している。 立体的模型を使用する（例えば、ビンと風船・ストローを使用し、呼吸の状態を作り出す）ことで、呼吸方法を科学的に学ばせる。
「コミュニケーション技術」のスライド集 （関西学研医療福祉学院）	平成21年4月～平成23年3月	コミュニケーション技術の内容の概説し、人物の表情をスライドすることで、学生自身の偏り、思い込み、それによりコミュニケーションの弊害を考えさせた上で、コミュニケーション技術の必要性を学ばせる。
「創傷管理技術」のスライド集 （関西学研医療福祉学院）	平成21年4月～平成23年3月	創傷管理技術を詳説した資料を作成し、看護学生１年に配布し、教科書内容と併用している。特に褥瘡のスライド集を作成し、時間とともに悪化していく様子を知ることで、看護の必要性を深刻に考えさせる機会としている。
「褥瘡予防のグッズ」教材の作成 （関西学研医療福祉学院）	平成21年4月～平成23年3月	日常にあるものを使用し、褥瘡予防グッズを作成し、学生と実験を行ったり、学生と共にグッズを考えたりする。そのことにより、褥瘡発生機序を理解すると共に、学生の感性豊かな発想を引き出すことをねらいとしている。
「感染防止対策の技術」のスライド集 感染防止方法のビデオ作成し教材とする （関西学研医療福祉学院）	平成21年4月～平成23年3月	呼吸循環を整える看護を詳説した資料を作成し、看護学生１年に配布し、教科書内容と併用している。 実際使用する実習室で、清潔方法のビデオ撮影を行ない、そのビデオを使用することで、知識の統一を図るとともに、学生のイメージ化を明確させ学びを深める。
成人の看護過程の事例教材を作成する （関西学研医療福祉学院）	平成21年4月～平成23年3月	学生が事例展開をする場合、ペーパーペーシェントを使用するが、そのペーパーペーシェントをより現実に存在する、また学生が「あるある」と思えるペーパーペーシェントの教材作成をすることで、学生の思考過程にヒントを与える状況をつ

		くり、事例展開が理解しやすい状態にした。 また、苦手な事例展開も楽しめる内容を取り入れることで、勉学意欲も高まる内容構成にした。
「救命救急処置看護技術」「与薬の技術」 「症状生体管理技術」のスライド集 （関西学研医療福祉学院）	平成21年4月～平成23年3月	救命救急処置看護技術・与薬の技術・症状生体管理技術の看護を詳説した資料を作成し、看護学生１年に配布し、教科書内容と併用している。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 看護専門学の学生授業評価結果 （関西学研医療福祉学院）	平成21年12月	講義過程のダイナミクスと講義の意義・価値の伝達４点満点中3.7 学生への対応4点満点中3.7 教材の活用・工夫方法4点満点中3.4点 具体と抽象の関連と教員意見の織り込みの程度４点満点中3.5点 内容の質と独自性4点満点中3.5点 内容の難易度と時間的ゆとり4点満点中3.4点 教員の話術4点満点中3.6点 教員平均3.2点で平均点を上回り高評価を受けている。
看護研究（藍野短期大学）	平成23年6月～平成26年2月	授業を終了して、学生たちは看護研究は難しいものであり、拒否的であったが、講義を受けて、研究のイメージが変わり、研究に興味が持て、研究をしてみたと考えの変化が見られ講義評価も高評価を受け、毎年大学から依頼があった。
太成学院大学 成人看護学（急性期・慢性期・終末期） 成人看護学実践実習（急性期・慢性期） 看護学研究法・看護学研究	平成26年4月～	すべての教科・実践実習においても終了後の大学のアンケートで、ほとんど高評価を受けている。 学生からも講義内容は面白く、解りやすい、講義の資料は実習においても、とても役に立つとの言葉が多く聞かれる。 また講義最終日のアンケートで「先生の様な看護師になりたい」とうれしい言葉を書いてくれる学生も多い。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 大学病院に受け入れた看護学生に対する指導 （大阪医科大学付属病院）	平成元年4月～平成10年3月	病院実習の看護学生に対して、看護理念・看護師のあり方倫理観・理論を用いた看護技術・個別性を生かした看護・チーム行動する意味づけ、など留意しながら指導を行った。 また学生の自主性を高め、褒めることを忘れず、

		感性教育をも行なった。その結果、実習終了時、学生が涙を流すほど（喜びの涙）充実した実習になった。
病院内での指導（大阪医科大学付属病院）	平成元年4月～平成10年3月	主任勉強会を２週間に１回行い、病院内で起こっている問題を共有し問題解決を検討し、病棟スタッフに指導をした。その結果、病院内の意識が高まり、再三の問題が少なくなった。
	平成元年4月～平成10年3月	主任メンバーでスタッフ教育に関してのアンケート調査や効果的な指導方法などの研究を行い発表した。その結果、主任間で指導行動に改善や自信ができ、余裕をもってスッタフ指導が行える様になり、早期離職者を少し減らすことができた。
	平成元年4月～平成10年3月	新人指導のアドバイザーと新人の定期的面談を行い、指導内容の軌道修正や、それぞれの思いを聴くことで、ストレスを減らし、感情的にならず、円滑に指導が行われ、両者、それを取り巻くスタッフの成長につながった。
	平成元年4月～平成10年3月	卒後３年目に院内の発表担当に、卒後５年目を指導役にし、院内研究を定着させた。その結果、勤務状況と照らし合わせながら、計画的に行動ができるようになった。 研究内容は自由に決めさすことで、最後まで意欲低下は少なかった。また結果的に失敗で終わっても、プロセスを大切にさせ、振り返りを行わせ、何故失敗したかをスタッフ自身が気づくことで成長につながり、それを見ている次年度のスッタフの教訓にもなった。その結果、定着につながり研究意欲も高まった。
	平成元年4月～平成10年3月	ターミナルケアについて、スタッフに常に考えさた。 時には私と訪床をさせ、患者の接し方の違いを学ばせたり、患者さんの喜びの言葉や、笑顔が見られた時の状況をカンファレンスさせて、ターミナルケアについて考えさせた。 その結果、個別性を踏まえたケアを考えることが

		でるようになり、病棟全体の雰囲気で積極的にケア参加する姿が見られるようになった。
関西学研医療福祉学院　地域福祉学科　専任教員	平成16年2月	ヘルパー1級・2級の資格修得を目的とする学生に対して、介護技術、医療一般、実習指導などの教育を行なった。また海外の福祉状況の学びのためオーストラリアの研究旅行も計画した。海外の福祉施設の状況、介護士の必要性を学ばすことが出来た。
関西学研医療福祉学院　介護福祉学科　専任教員	平成17年3月	介護福祉士の資格修得を目的とする学生に対して介護技術、医療一般、介護過程、実習指導などの教育を行なった。また海外の福祉状況の学びのためハワイの研究旅行も計画した。海外の福祉施設の状況、障碍者の自立支援などを学んだ。ハワイに在住の日本人高齢者が学生の顔を見て日本語で喜びを表現してくれたことに対して学生は、介護の喜びと必要性を学ばすことが出来た。また感性教育に力を入れ過去に問題を抱えている学生が多く存在していたが、その学生が卒業時には社会的に適応できるまで成長出来ていた。
関西学研医療福祉学院　看護学科　専任教員	平成19年4月～平成23年3月	看護師の資格修得を目的とする学生に対して、基礎看護学、成人看護学、実践実習の教育を行った。看護教育の厳しさの中、学習意欲を落とす学生を個人面談や指導を行い、教員は身近な存在である様にした。厳しさの中でも看護は楽しいものであることを講義やフリー時間を使い伝え、看護師になる希望が持てるように教育を行った。
矢木脳神経外科病院　教育カウンセラー 看護師のカウンセリング 藍野短期大学生の実習指導	平成23年6月～平成26年2月	平成24年度から、初めて藍野短期大学生の成人看護学（急性期）実践実習を受け入れるにあたり、病院内の実習受け入れ環境を整え、実習指導者への指導も行い教育環境を整えた。またスタッフ指導も行って看護学生の実習を受け入れ、さらに実習指導者の地位をこの病院で確立した。学生の評価も高く、その後も実習を受け入れている。 看護スタッフの心理的問題時カウンセリングを行った。仕事に来ることが出来なくなった看護師を、部長室を巻き込んでその看護師に行動療法を用とカウンセリングを行うことで復帰できるよ

		うになった。
看護研究（藍野短期大学）	平成23年6月～平成	講義内容として、学生が研究に興味が持てるように一般的内容を用いて研究は普段でも出来る内容であることを印象付けた。学生達ならどんなことに興味を持って調査したいかを考えさせて、その内容を深める講義展開を行った。学生も研究に興味を持ち、やってみたいと思ったと学生が話す講義内容となった。
5　その他 全国の小学校・中学校・高校・大学に性教育の講演・父兄への最近の子供との接し方・相談員に効果的な電話相談の受け方などの講演活動	平成9年6月～平成18年3月	全国の小学高学年・中学生・高校生・大学生・教員・医療従事者・父兄・相談を受ける者などを対象に、「思春期の性教育」「思春期の問題行動」「いまどきの子供たちと向き合うのは？」「性感染症について」「エイズ教育」などの講演活動を行っていた。また教材を布などで作成し、見た目を優さしく感じさせる工夫を行なった。 学生がなかなか性教育講演を真面目に聴かず困っている学校から、この講演は学生が真面目に訊いているとの反響もあり好評をもらった。また毎年依頼されるようになった。 講演後は相談・カウンセリングを行った。
アセンブリ（太成学院大学）	平成26年4月～	学士を授与される学生として、楽しさの中で思考過程の強化と社会人基礎力の強化を目的としている。大学行事であるさつきの祭への参加、下級生とのつどい・球技大会などを計画することで、学生は楽しく、主体的に考え行動を起し、他者への配慮など出来るようになってきている。 またさつきの祭の参加は就職時の役に立っている様である。
オープンキャンパス模擬授業（太成学院大学）	平成26年4月～	成人看護学領域として、現在社会でも問題とされておりメディアなどで取り上げられている生活習慣病について模擬講義を行うことで興味を誘う内容としている。また内容も一般的なことを入れ、参加型の授業を行う事で来校父兄も学生も楽しく受講されている。
オープンキャンパス体験学習（太成学院大学）	平成26年4	成人看護学領域として、点滴に触れてみようを行

	月～	っている。来校学生は非常に興味を持ち、看護師になった気分で楽しく行っており、説明すると看護の大切さを少し感じることが出来た様子である。また母親が看護師で積極的に参加してくださる方に意見を求めると話して下さり、来校した父兄と学生は楽しい時間を過ごされているようである。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
看護師免許	昭和56年6月13日	
看護教員資格	平成20年12月19日	
介護福祉教員資格	平成20年3月31日	
認定看護管理者制度教育課程ファーストレベル	平成20年1月19日	
認定心理士	平成16年4月17日	
思春期保健相談員	平成5年1月24日	
心理相談員	平成5年9月22日	
受胎調節実地指導員	平成3年7月13日	
ＣＡＰスペシャリスト	平成10年1月25日	
ＨＩＶ相談員	平成7年9月3日	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
ボランティアで思春期の電話相談	平成6年5月～平成12年7月	神戸を拠点にしてボランティアで思春期の電話相談を行っていた。
電話相談員の育成・普及	平成7年7月～平成	相談育成指導者への助言

	12年7月 平成 13 年 10 月～平 16年10月	 家庭で教える性教育」「電話相談について」のセミナーを年4回行った
オーストラリアでのボランティア活動	平成10年8月 ～ 平成 11年3月	高齢者の配食サービス 一人暮らしの高齢者、疾病をもって食事準備ができない人、ホスピスに入所している方などに、州からのボランティアで食事を配達していた。 オーストラリアでのボランティアで、留学者のカウンセリングをしていた。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1ハートブレイクからあなたへVOL1 聴いてもええん？性のこと	共著冊子	発行1999年5月31日	発行所ハートブレイク	思春期の男性にむけたメッセージ 電話相談から見えてきた内容を冊子にし、悩みを解決の方向に導くための内容である。 担当P28－P33海外旅行と留学の前に性教育を！
2ハートブレイクからあなたへVOL2 もっと知ろうよ、私の性	共著冊子	発行2000年6月30日	発行所ハートブレイク	海外旅行中・留学中での日本思春期の人たちの行動や、性教育に無知な状況と、海外に住む現地の人々の日本の思春期の人の印象や現状をインタビューして見えて来た内容を、簡単にエッセイとしてまとめた。
（学術論文） 1 電話相談から見えてくる思春期の相談内容1	共著 発表	平成9年8月	思春期学会	3 年間での電話相談件数を統計し、思春期の悩みの内容を分析して発表した。 特に男性、高校生の相談が多く、内容は男性性器の問題が圧倒的

				に多く、女性と比べ友達に相談できない状況が見えて来た。 女性は妊娠した相談があり、一応友達に相談しており、医療従事者から専門知識の情報収集になっている。関西と関東での違いは認められなかった。
2 2 電話相談活動がなぜボランティアとし成り立つのか	共著 発表	平成 10 年 8 月	思春期学会	全国で電話相談活動がなぜボランティアとし成り立つのかと常に疑問視されていたので、スタッフの意識調査を行った。 ストレス度が低く、またマズローの生理的欲求での段階で、欲求が満たされているスタッフが多く、自己実現の欲求段階のスタッフが多いため、ボランティア活動が維持できるのだと調査でわかった。結論ボランティア活動を維持できるのは、まず個々の自尊の欲求までなど満たせてなければ維持できないと分かった。
3 ターミナ期の 子宮がん患者の 事例を通して	単著 発表	平成 11 年 9 月	大阪医科大学病院研究会	ある患者を初回の入院から、再発を繰り返し最後期を病院で迎え、看取りを来なった。告知を行った患者の精神状態を把握しながら、その患者のライフスタイルを大切にし、家族看護をも行い、看護者である前に、原点である人と人の関わりの大切さを発表することができた。
4 婦人科病棟の 思春期患者の 退院指導	共著	平成 12 年 9 月	大阪医科大学病院研究会	思春期の患者に対して、性教育の知識が少ないため、今後再度、起こる疾患や不妊へとつながる可能性があるため、思春期の子供の状況や心理状態を知り、効果的な退院指導について検討した事例を発表した。
5 思秋期の性教育について	単著	平成 15 年 2 月	学士論文	全国の高等学校の講演時、現在の性教育についてのアンケートを

				教員用（アンケート用紙）学生（インタビュー）で調査を行なった。結果、学生が求める性教育は出来ておらず、「先生は正直に性教育に向き合っていない」学生は不満足の状態であった。またほとんどの教員は「自分には性教育は出来ない」と答え過去の性教育の内容が意味のないもであったと結果がでる。このことから、学生が理解できる求められる性教育を行わなければ、学生の知識にもならず、性犯罪や、間違った意識の中で性を捉えると考える。また教員が不得意とするなら外部講師の協力などが必要である。しかし教員自身も、性教育の正しい知識を習得し、学生の対応を行っていく必要がある。
6 退院調整の現状	共著	平成 25 年 12 月	退院調整学会	中規模のＹ病院が看護師やソーシャルワーカーなどでチームを作り地域連携課を設立した。病棟に看護師の退院調整の委員も設け、医療従事者のチーム力で、開始１年間でも患者・患者家族の満足が行く退院調整を行うことが出来た。退院調整を行う上で、入院前、外来からの患者・患者家族との信頼関係がたいせつであり、また医療従事者間での情報効果や方針を統一し、患者、患者家族も参加できる退院調整の話ができる場面を多く持つことが大切であることが分かった。 今後も継続が必要であり、社会問題とされている、独居の方や、家族関係が複雑な時の対応などは臨機応変な対応は必要であり、地域との連携を常に持っておくことが大切であると考えることを

				発表した。
７Ａ病院における臨地実習改善の試み	単著	平成 26 年 2 月	修士論文	看護教育において、実習施設の確保が難しいがその中、A 病院は成人領域での実践実習受け入れることを承諾した。 しかし教育体制が出来ていないため、成人看護学実践実習施設としての教育体制を作り上げた。内容として、臨地実習の過去の臨地実習の体験を、現役の看護師と現役看護学生にアンケートを行い、臨地実習での問題点を明確にし、そのアンケート結果とコーチング理論を用いて、院内で臨地実習指導者の教育をおこない、その教育をもとに、臨地実習指導者がスタッフの指導を行う体制を作った。 その指導体験からの課題を提示し解決策を考えた後に、看護学実践実習での学生の指導を行わせた。その結果、看護学生の臨地実習での満足度が高く、臨地指導者の自己成長評価も高く、今後学生に関わりたいと感じるようになっていた。また病棟の看護師も今後も臨地実習を受けることは、忙しいが良い刺激を与えるものであり、協力的な姿勢が多く見られた。 改善された実習環境では、学生、指導者、看護師に笑顔があり、互いに相手を認め、褒め、理解し合い、心が自然に暖かくなって互いに嬉しく涙さえ流す、一種の共同体的空間を形成することができた。特に、学生だけでなく、指導者や看護師が共に成長できるという事に気づき、病院全体が活性されたことは注目に価した。

8 成人看護学実践実習における看護対象の実態	単著	平成 27 年 12 月	太成学院大学紀要第 18 巻	成人看護学実践実習では，成人期の社会背景を踏まえながら，急性期・慢性期の疾患を持つ対象者の看護を臨地で体験を通して学ぶことが目的とされている。しかし，社会の現状により，高齢化，入院の在院日数の短縮化の理由によって，入院患者の状況に変化が出現している。学内での講義内容として，成人期の社会背景をとらえた看護をポイントに講義内容を展開してきているが，今日の入院患者の状況の変化に伴い，成人看護学実践実習での目的とする対象者に違いが生じていると考えられる。そこで，今回実態調査を行い，成人看護学実践実習でどのような対象者の年齢を受け持ち，どのような疾患が多いのかを調査した。その結果，成人看護学実践実習での対象者は，成人期の実践実習でありながら，対象者の約 7 割が高齢者を学生が受け持ち，実践実習を行っていた。疾患に関しても年齢と比例して高齢者が罹患する疾患を多く受け持って実践実習を行っていることがわかった。
9 成人看護学（急性期）の講義評価と実践実習との関係	共著	平成 28 年 12 月	太成学院大学紀要第 19 巻	成人看護学援助論Ⅰ（急性期）では，周手術期をメインの授業展開を行っているが，周手術期の患者が手術を受けるまで，以前は 1 週間前に入院して手術を受ける患者が殆どであったが，近年の急性期の在院日数の減少により手術が行われる 1 ～2 日前や当日に入院して手術を受けられる患者が殆どである。本学の実習病院でも在院日数が平均 11.8 日との説明も受けている。学生が急性期病棟

				での実習を行う時，患者を受け持った日が手術であったり，次の日の手術であったりなど，実習開始から受け持ち，手術までの期間が非常に短く，その中で患者を理解して，術後の看護問題を考え看護展開を行っていく事は，学生のとって過酷な状況である。そのため学生が理解できる講義，実践実習に活かせる講義内容の工夫が不可欠であった。今回アクティブ・ラーニングを強化し，専任教員も兼任教員も学生と一緒に考え，タイムリーな教育環境つくりが教育効果を上げることが出来る。そしてそれが学生に取って、安心して実習が行える環境になり更に教育効果の向上につながることがわかった。
10 成人看護学実践実習での手作りパンフレット作成による 自己効力感の関係と教育効果	共著	平成 29 年 12 月	太成学院大学紀要第 20 巻	成人看護学では,講義・演習や実践実習でヒューマン・ケアに重点を置き教授し,パンフレットを学生に作成をさせているが生活体験が少ない学生が実習中に患者を理解し個別性に応じたパンフレット作成には苦悩があると考えられる。しかし学生は患者のために何かできないかと考えて退院指導や運動指導や治療意欲を高める目的や入院生活に活気が出るよう考え,何回も作り直して手作りパンフレットを作成している。そのパンフレットは患者さんの趣味を取り入れたり,患者の顔を書いたり,イラストを入れたりして個性豊かな物で世界に 1 つしかない工夫を凝らした手作りパンフレットになっている。そしてそれを患者や患者の家族に説明し渡す時に,感謝の言葉を受け

（その他） ：				ることで,「この患者さんのために役に立つことができた」と言う学生の成功体験となり自己効力感が高まり,実践実習の一場面ではあるが自己有用感が高められ教育効果に繋がったと考えられた。

（看護）江崎　薫世

教　育　研　究　業　績　書

平成 28 年　3 月 2 日

氏名　　江崎　薫世　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
看護学	母性看護学、教育力、授業リフレクション、教育実践評価

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1）近畿大学医学部附属病院	昭和63年9月～平成6年3月	・臨床実習指導者
	平成 5 年度	・産休中教員の代行として、母性看護学総論・各論の授業を担当。
2）近畿大学附属看護専門学校　看護学科	平成 6 年 4 月～平成 19 年 3 月	・看護教員として 13 年間母性看護学を主に担当し、学生に分り易い授業の研究や臨床実習場面をイメージできるよう妊婦体験・沐浴演習等、シラバスの再構築・教材の工夫に努めた。また、学生状況から授業・演習・実習の相互作用を活かし、授業改善（特に授業リフレクション）・実習学生指導力の向上に努めた。　＊平成 16 年度以降、毎年授業評価（学生・教員）実施し改善に務めた。
3）近畿大学附属看護専門学校　助産学科	平成19年4月～平成25年4月	・助産学科準備室責任者として学科立ち上げから開設、開設後は学科教務主任として 6 年間カリキュラム関係、助産学教育実践・教育評価、教育分野別の認証評価準備に携わった。＊平成 20 年度以降、毎年授業評価（学生＋自己評価 ＋他教員：

		FD）を実施、改善に努めた。 注１）授業評価には講義・演習と実習評価を含む。
４）太成学院大学　看護学部看護学科	平成26年4月～ 現在に至る	・講師として母性看護学領域を担当し、シラバス・学生のレジネス・他領域との連携等の確認を行いながら、大学教育の中での母性看護教育を実践した。また、本学の「社会人基礎力」強化への取組みの一環として、母性看護学ではのどの場面で意図的に強化できるかという視点でシラバスを再構築中である。＊平成 26 年度より本学授業評価・FD 実践 注２）教材の工夫は、項目２「作成した教材」参照 注３）担当科目に関する自己評価・点検については、本学「教育改善プラン報告書(2014 年度）参照
２　作成した教科書，教材		
１）母性看護学実習指導要項　作成	平成 8 年 3 月	近畿大学附属看護専門学校　看護学科用
２）助産学実習指導要項　作成	平成 19 年 12 月	近畿大学附属看護専門学校　助産学科用
３）教育要項：助産学科　作成	平成 19 年 12 月	近畿大学附属看護専門学校　助産学科用
４）母性看護学領域： 「新生児のフィジカルアセスメント」 「新生児の沐浴」 ①動画 Web 教材の作成 ②母性看護技術チェックリストの作成 ＊①・②は連携内容	平成 26 年度～ 継続使用	太成学院大学　看護学部　　看護学科用 母性看護学援助論：演習Ⅰ 専門看護学演習：母性看護技術 母性看護学実践実習：学内日の技術練習
３　教育上の能力に関する大学等の評価 ・太成学院大学　看護学部	平成26年4月	看護学部講師採用
・教員による相互評価の結果	平成26年7月	看護学部春学期授業 FD 結果参照
・学生による授業アンケート結果	平成 26 年 10 月	看護学部春学期結果参照
４　実務の経験を有する者についての特記事項		

1）助産学：妊娠の生理と看護　授業 90 分×3 2）助産学：分娩介助技術試験　試験監　4 コマ 3）助産学実習：愛仁会高槻病院　助産学生指導 6 週間	平成 19 年 4 月～ 同年 11 月	1）～3）共通 近畿大学附属看護専門学校 助産学科開設に伴い、愛仁会看護助産専門学校（助産学科）にて６ヵ月の実務研修を実践した。
5　その他 A．近畿大学附属看護専門学校　看護・助産学科		
1）大阪府：看護教員養成講習会修了	平成 8 年 4 月～ 同年 12 月	看護管理者研修：大阪府看護協会を含む
2）文部科学省：助産学科開設申請	平成 19 年 5 月～ 平成 20 年 3 月	申請書類作成・ヒアリング、建物設計案作成・申請、 臨地実習施設確保他　　関連施設実習指導者会議、カリキュラム作成　テキスト決定　講師依頼　授業計画　年間行事計画　図書・備品他
3）大阪府：受胎調節実地指導員養成講習会開催の許可申請	平成 19 年 5 月 ～ 同 年 12 月	受胎調節実地指導員取得のため
4）助産学科：入学試験問題出題者	平成 19 年 10 月～平成 24 年 10 月	入試科目：母性看護学出題者担当
5）助産学臨床指導・教員講習会修了	平成 19 年 12 月～平成 20 年 3 月	全国助産師会主催
6）厚生労働者：国庫補助事業申請・事業計画実施と報告書作成・提出	平成 20 年 8 月 ～ 平 成 21 年 3 月	厚労省より新設校への事業申請 ①　演会開催：助産師教育の今日的課題 ②　助産学科備品・教材強化
B．太成学院大学　看護学部看護学科 1）オープンキャンパス ①展示ブース ①　模擬授業・体験学習	平成 26 年度	母性看護学領域の模型・学生授業風景写真等 展示 「赤ちゃんの持ってる能力ってすごい！」 「赤ちゃんをお風呂に入れよう！」＋沐浴体験他
C．学会・研修・セミナー参加	平成 16 年	母性衛生学会・母乳学会・看護教育学会・国師対

	度～現在に至る	策 参加状況は別紙参照

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）看護師免許 2）助産師免許 3）受胎調節実地指導員資格 4）看護教員資格 5）看護管理者資格：ファーストクラス 6）労務管理士資格：二級		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）東邦大学医学部附属大森病院	昭和57年4月～　昭和59年4月	２年間ＮＩＣＵ勤務
2）近畿大学医学部附属病院	昭和63年5月～平成 6年3月	産婦人科病棟・外来勤務：看護学生指導を担当 ６年間病院勤務後、附属看護専門学校へ配属となる
3）近畿大学附属看護専門学校　看護学科	平成 6 年 4 月 ～ 平 成 18 年 3 月	母性看護学担当教員
助産学科	平成 18 年度	助産学科準備室責任者
	平成19年4月～	助産学科教務主任
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 該当なし （学術論文）				

1. 卒業前看護技術フォロー実習の効果（査読付）	共　著	平成 16 年 10 月	第３回日本看護技術学会学術集会収録集　p 79（東京）	・当校では、就職時のリアリティショックによる新人の早期離職予防の一環として、卒業前に看護技術フォロー実習を行っている。まず、知識の確認テストを行い、自己学習後に学内で担当教員の指導のもと、点滴のミキシングや輸血セットの作成、IVH 挿入の介助・観察点等や、輸液ポンプの操作まで実践さながらのリアルな内容となっている。　約９割の学生が就職する附属病院の看護師も参加してくださり、実習では見学のみで実践でていない学生状況が理解できた様子であった。学生にとっても、臨床での実施留意点など新人看護師として働く時に役立つ有用的な内容との結果が明らかになった。　学校教育現場での質の保証と、卒後教育への橋渡しの役割を担う責任を感じた。 菊池美鈴　森川晶子　江崎薫世　上田真知子　平松幸子
2. 卒業前実習フォロー実習における学生の変化（査読付）	共　著	平成 17 年 8 月	第 36 回 日本看護学会収録集　p 「看護教育」（宇都宮市）	・継続研究。フォロー実習を継続して実施し、学生の知識面や技術面で具体的にどのような変化（行動変容）がみられか、追跡研究した。 ・発表後の論文集投稿論文は、修正論文の再選考の結果：検定方法の妥当性に疑問が残るという理由で不採択となった。比率の差の検定および検定方法の明記が必須であった。
2.　看護技術の教え方　技術経験の機会の少ない中ですべきこと	共　著	平成 17 年 9 月	「看護教員と臨床指導者」日総研　９月号 巻２、号２　P38～49	３年前に卒業前看護技術フォローを導入し、技術経験の機会の少ない中で卒後を視野に入れた取り組みとその効果を明らかにした。毎年学生・教員評価を振り返り卒業前看護技術フォロー実習の進め方を修正し、より効果的な実施方法について検討した。 森川晶子　江崎薫世　米原由美子　上田真知子　小川知子
4．臨地実習における看護技術の経験状況一考	—	平成 18 年 7 月	第 18 回日本看護学校協議会収録集　p 42（大	「優秀賞受賞」

察			阪市）	
5. 看護学生の医療事故に関する意識の変化	共　著	平成 18 年 8 月	第 38 回日本看護学会論文集　p「看護教育」（松山市）	医療安全・リスクマネージメント 片山美子　江崎薫世　小川知子　米原由美子　平松幸子
（その他）				
1. 入院患者の外来受診時の実態調査	—	平成 3 年 12 月	近畿大学医学部附属病院院内看護研究発表会（看護部主催）	・外来受診患者数は平均約 2000 人/日で、その内、入院中患者の外来受診者数は平均約 50 人/日である。各科では、病棟患者の待ち時間が最少となるよう配慮している。しかし現状をみてみると、病棟看護師が付き添って来ているにも関わらず、初・再診室を間違えたり、特殊検査室への行き方（迷路状）迷っていることがある。そこで、詳細外来配置・案内図を作成し各病棟に配布した。活用状況調査結果と改善点を明らかにした。
2. 看護サマリーの活用	共　同	平成 6 年 12 月	院内看護研究発表会（看護部主催）	・継続研究：前年度の先行研究において、退院後外来を受診する際に、入院中の患者情報の要約「看護サマリー」が提供されてくるが、半数以上の外来で活用されていない事実が判明した。そこで、看護サマリー活用の推進、しいては外来継続看護実践のためのチエックポイント表を作成・試用し、一定の効果・改善が見られた。
3. 母性看護実習における実習対象不在時の実習状況調査１	—	平成 14 年 3 月	近畿大学附属看護専門学校：校内 看護研究発表会	・分娩件数の減少により、学生１人で母子１組を受け持ち、看護過程の展開や看護実践が困難な状況をきたしている。・現状、学生２人で母子１組を受け持つか、それでも不在時には入院中妊婦を受け持ち、看護過程の展開を行っている。
4. 母性看護実習における実習対象不在時の実	—	平成 14 年 3 月	校内 看護研究発表会	・継続研究：本年度取組み結果と実習病院の分娩数の変化状況の

習状況調査２				報告
5.助産学科設置準備状況報告	—	平成 20 年 3 月	校内 看護研究発表会	・設置目的と経緯、助産学科教育の目的・目標、カリキュラムの特徴・ねらい、実習概要と施設・入学手続き他進捗状況、看護学科教員との各種委員会共同業務の依頼など
6.入学時基礎看護技術確認の実施結果報告	—	平成 21 年 3 月	校内 看護研究発表会	・設置目的と経緯、助産学科教育の目的・目標、カリキュラムの特徴・ねらい、実習概要と施設・入学手続き他進捗状況、看護学科教員との各種委員会共同業務の依頼など
6.入学時基礎看護技術確認の実施結果報告	—	平成 21 年 3 月	校内 看護研究発表会	・実施目的・項目、現状把握と次年度実施に向けて具体的改善策の抽出
7.卒業時助産技術到達状況の報告	共　同	平成 22 年 3 月	校内 看護研究発表会	・助産技術教育における教育内容・方法の改善を明確化するため：ミニマム・リクワイアメンツを用いた現状評価の報告。
8.分娩介助数 10 例後の技術到達状況報告	共　同	平成 23 年 3 月	校内 看護研究発表会	・助産師教育における助産技術の質保証、自己点検・評価の一環として実施・報告した。・学生 1 人当たり平均 11 例を介助。助産学実習Ⅰ～Ⅲの時期を段階的に到達目標・評価基準を設定しているが、学生個々での力量差大きく、教員による細やか指導を再認識した。
9.助産学科：自己点検・自己評価結果と改善点の明確化	共　同	平成 25 年 3 月	校内 看護研究発表会	・評価目的：教育水準の維持・向上、個性的で多様な教育の発展のため。 ・評価方法：日本助産教育評価機構（分野別）大項目(8)中項目(17)小項目(37)を用いた。評価指針に基づき根拠データの収集分析した。 ・評価上の注意点：カリキュラム上教育目的・目標が教育課程に反映しているか。科目間の相互連携評価を含む。助産師の倫理綱領に

				沿った専門性や卒業時到達度、新人助産師教育ガイドラインを参照し、卒後教育を視野に入れて当校の現状を評価した。 ・評価結果：37 項目中基準に適合したのは 4 割程度で、部分的には適合しているが改善を要する項目が 6 割であった。 ・展望：自己点検・評価結果をもとに、早急に改善点の重要度と具体的改善点の抽出・基準達成時期を設定した。恒常的に自己点検評価を検証するシステムの確立が急がれる。

（看護）西山　円

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 14 日

氏名　　西山　円　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
看護学	成人看護学、急性期、看護教育、実践実習

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 院内での臨床指導者主任としての活動	平成 24 年～平成 26 年	臨地実習指導者主任として看護学実践実習での学生の指導を行ったその結果、看護学生と大学側の臨地実習での満足度が高く、また関わった臨地指導者の自己成長評価も高く、今後学生に関わりたいと感じるようになっていた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 母性看護学実習の臨地指導	平成 19 年～平成 22 年	院内の臨地実習指導者委員会に参加し、実習指導に携わった

臨床実習指導者主任として 成人看護学急性期実習の臨地指導	平成 24 年 ～平成 26 年	平成 24 年、院内で臨地実習指導者委員会が発足され、その立ち上げで臨地実習指導者主任として携わった。実習環境や物品など、実習の受け入れ準備を行った。実習では体験を多くしてもらいその中で一つでも気づきがあればそれを伸ばすように指導を行い学生と関わった。 平成 25 年、臨地実習指導者主任として責任を担う。受け入れグループが増えたため、自分の病棟で初めて実習を受け入れることとなり、実習準備を行った。スタッフに学生を受け入れてもらえるよう、実習の内容や学生について講習を行い、また、看護技術の勉強会を行った。実習指導者講習で学んだことを踏まえ、実習指導者マニュアルの作成を行った。実習では、完全専任性の指導者体制を取り、学生のそばにいるようにして学生とともに学ぶ姿勢で取り組んだ。学生からは指導者が常にそばにいてくれるので安心したという感想が聞かれた。 平成 26 年、臨地実習指導者主任として責任を担った。委員会内容を院内外に知ってもらうために指導者ニュースを開始した。月一回作成し院内の掲示板や病棟に掲示した。また、系列グループ全体で作成されている新聞に、実習指導者委員会の内容を記事にしてもらい、院外にもアピールした。 実習指導は責任者として全体を仕切り、学校側との調整を行い、実習指導を行った。また、実習指導未経験のスタッフに指導者として参加してもらい、指導方法を教えた。実習では学生ともに受け持ち患者の看護の方向性を考えて、学生から思いを引き出すようにいろいろ話しをしながら考えていくような関わりをした。また、学生・指導者とスタッフとの調整役を行い、実習環境が満足行くようなものにするために話し合いながら実習をすすめるように取り組んだ。

大阪府保健師助産師看護師実習指導者講習修了	平成 25 年	演習のまとめを発表者として取り組んだ。発表内容は、「看護のハートに火をつけよう～知識・やる気・潜在能力を引き出そう！～」 成人看護学急性期は病態変化の早い周手術期を短期間で対象を理解して看護展開することが求められている。しかし、展開が早く学ぶ内容も多いため、実習についていくことが困難で後追い学習になりやすい。そのため、達成感を得ることなく実習を終えてしまう。 また、近年学生の背景は様々であるため、幅広い学生背景を活かしグループダイナミクスを発揮させそれぞれの成長につなげるような指導をすること、そして実習時期に応じた指導をおこない、看護の達成感を感じる実習ができるように指導案を考えた。
院内での教育委員長としてスタッフ教育	平成 24 年～平成 26 年	当院のありたい看護師の姿を考え、その看護師像に近づくようにとスタッフに伝達講習し、詰所内に掲示して広めた。 また、脳卒中の患者で社会復帰を果たした３０代の人に、体験談を語ってもらうというイベントを企画した。患者の体験談を語ってもらうことで、患者の心理を知り、患者家族の心理面に配慮するという当院のありたい看護師像と結びつけてスタッフの理解が得られるようにした。そのイベントの企画運営と実施を行った。
高校生１日看護体験研修の講師	平成 24 年～平成 26 年	受け入れの企画準備から実施まで責任者として関わった。高校生に看護の興味をひくように体験を多く取り入れたプログラムにした。スタッフへの協力や環境調整を図り、高校生がスタッフに質問できるように配慮した。
高校生への出張講義	平成 25 年～平成 26 年	看護師とはについて講義をした。高校生の興味をひくように、普段の看護師の仕事している所の写真を撮り、看護師ムービーを作成した。また、自分の看護師しての体験談をエピソードムービーにして視聴して

		もらった。
院内での教育委員長として 看護大学学生と病院で交流会を主催	平成 25 年 ～平成 26 年	看護学生１回生に病院に来ていただき、スタッフを交えて、看護師になったきっかけややりがい、良かったこと辛かったことなどをサイコロトークで語った。 交流会を企画運営し実施した。
院内での教育委員長として 病棟スタッフに対し勉強会を主催	平成 25 年 ～平成 26 年	病棟内で、毎月脳神経外科の特有な疾患や症状についての勉強会を開催した。事前にスタッフから、勉強したい内容をアンケート実施し、その中からプログラムを修正しながら継続させた。 また、看護倫理に対し、日本看護協会の倫理要項に沿って、事例をもとに看護師側の思いと患者家族側の思いの両面で考え、どうすればよかったのかを話し合う勉強会も並行して毎月開催した。何気なく行っている普段の看護業務の中で、倫理的にどうなのだろうとおもった事をスタッフから無記名で投書できるような目安箱を詰所休憩室内に設置してスタッフから出た意見をもとに話し合いを行った。勉強会で倫理面を考えるようになってから、患者や家族に対しての接遇に配慮するような関わりができるようにスタッフ全体が変化してきた。
院内での教育委員長として 看護助手に対し勉強会を主催	平成 26 年	院内の看護助手に対し、毎月勉強会の開催を行い、スタッフ教育を行った。また、看護助手が働きやすいよう、助手マニュアルの作成を行った。
成人看護学の周手術期の看護　講義	平成 26 年 10 月	術前看護・術中術直後の看護・術後の看護等、後期授業を行う。
基礎看護学実習Ⅰの非常勤で実習指導 (太成学院大学)	平成 27 年 1 月	
アドバイザー (太成学院大学)	平成 27 年 ～現在	ユニット学生の状況を把握して関係性を深めた。 個人面談を実施し、学生の学修上や生活上での悩みや相談に応じた。
成人看護学援助論Ⅰの授業・演習補助 成人看護学援助論Ⅱの授業・演習補助	平成 27 年 ～	シラバスに基づき、演習時には担当グループの指導を行った。また、授業内でのグループ学習時には、看護過程の指導を行った。
基礎看護学領域の授業・演習の補助	平成 27 年	看護技術・看護過程等の演習に対して、シラバス

	～	に基づき担当学生のグループ指導を行った。
成人看護学実習Ⅰ・Ⅱの実習指導 基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱの実習指導 老年看護学実習Ⅱの実習指導 総合看護学実習の実習指導	平成 27 年 ～	実習での到達目標を達成するために、実習指導を行う。実習で思考力を育む関わりを行い、学生の成長がみられた。また、実習で困難な状況になった学生の面談や対応を行った。 総合看護学実習では、4 年間の集大成として知識を統合させて看護専門職としての自覚を育み卒後との隔たりを少なくする関わりを行った。
専門看護学演習の演習補助(成人)	平成 27 年 ～	成人看護学の領域の専門看護学演習の補助を行った。内容は、BLS, ドレーン挿入中の看護
ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽでの模擬授業	平成 29 年 ～	成人看護学領域において、急性期の模擬授業として、手術前の患者訓練・練習について講義・演習を行った。実際と同様に呼吸訓練を演習で行い、参加者・保護者が楽しく参加していた。
4 年生 Tutor 看護研究	平成 29 年 ～	4 年生の国家試験・就職相談等を実施した。また、看護研究を春学期中に指導し、成果発表を学内で実施した。
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 看護師免許 BLS ヘルスケアプロバイダー 看護職キャリア開発アドバイザー PEARS プロバイダー 臨床教育学修士	 平成 17 年 4 月 平成 28 年 12 月 平成 29 年 2 月 平成 29 年 4 月 平成 30 年 3 月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 大阪府保健師助産師看護師実習指導者講習会修了	 平成 25 年 7 月	

4　その他				
研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 2 3				
（学術論文） 1 急性期病院における視点の差について	共著	平成 25 年 7 月	日本病院脳神経外科学会	口頭発表の共同演者 リハビリ科と看護部での共同企画で、それぞれの視点の差があることから、チームで行う医療の意味をまとめた
2 小集団活動による退院調整	共著	平成 26 年 9 月	固定チームナーシング全国研究集会	口頭発表の共同演者 平成 25 年 11 月から病棟で固定チームナーシングを導入した。また、病棟内で小集団活動を実施し、退院支援グループを設けた。退院支援グループの活動と、重症で在宅療養困難と思われた患者が在宅退院に繋げられた事例報告を行った。
3 成人看護学（急性期）の講義評価と実践実習との関係	共著	平成 28 年度	太成学院大学紀要	成人看護学援助論Ⅰ（急性期）では，周手術期をメインの授業展開を行っているが，周手術期の患者が手術を受けるまで，以前は 1 週間前に入院して手術を受ける患者が殆どであったが，近年の急性期の在院日数の減少により手術が行われる 1 ～2 日前や当日に入院して手術を受けられる患者が殆どである。本学の実習病院でも在院日数が平均 11.8 日との説明も受けている。学生が急性期病

				棟での実習を行う時，患者を受け持った日が手術であったり，次の日の手術であったりなど，実習開始から受け持ち，手術までの期間が非常に短く，その中で患者を理解して，術後の看護問題を考え看護展開を行っていく事は，学生のとって過酷な状況である。そのため学生が理解できる講義，実践実習に活かせる講義内容の工夫が不可欠であった。今回アクティブ・ラーニングを強化し，専任教員も兼任教員も学生と一緒に考え，タイムリーな教育環境つくりが教育効果を上げることが出来た。
4 成人看護学実践実習での手作りパンフレット作成による自己効力感の関係と教育効果	共著	平成 29 年度	太成学院大学紀要	成人看護学では,講義・演習や実践実習でヒューマン・ケアに重点を置き教授し,パンフレットを学生に作成をさせているが生活体験が少ない学生が実習中に患者を理解し個別性に応じたパンフレット作成には苦悩があると考えられる。しかし学生は患者のために何かできないかと考えて退院指導や運動指導や治療意欲を高める目的や入院生活に活気が出るよう考え,何回も作り直して手作りパンフレットを作成している。そのパンフレットは患者さんの趣味を取り入れたり,患者の顔を書いたり,イラストを入れたりして個性豊かな物で世界に１つしかない工夫を凝らした手作りパンフレットになっている。そしてそれを患者や患者

5 看護学生における座学と実習との関連性について	単著	平成 30 年 2 月	修士論文	の家族に説明し渡す時に,感謝の言葉を受けることで,「この患者さんのために役に立つことができた」と言う学生の成功体験となり自己効力感が高まり,実践実習の一場面ではあるが自己有用感が高められ教育効果に繋がったと考えられた。 実習を体験する中で、臨床の場での判断力を高め、学習意欲を高め、座学との関連性を促すにはどうしたらよいかを考えていく。学生の失敗体験や成功体験から、学生がどのように振り返り乗り越えていったのかを明らかにし、４年間の実習を振り返り、今までの実習での経験から学生の実習体験の目標到達がどの程度か、学生との関わりや教員の指導の課題を明らかにした。
（その他） ：				

（看護）市森　裕章
（看護）柏原　米男

（看護）大熊　淳子

教　育　研　究　業　績　書

平成　　３０　年　3月１９日

氏名　大熊淳子　印	
研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 【小児看護学】 ①小児看護学　概論　絵本を使った幼児体験の想起学習から発達段階を理解させる学習 ②小児看護学概論　実写　わが子との歴史「誕生から就学に至る６年間の記録から」ＤＶＤ学習 ③小児看護学概論　発達段階別にみた事故防止 リスクセンス演習　乳児期と学童期のシミュレータ使用 ⑤虐待・災害・在宅療養など、子どもの世界における子どもの理解　ドキュメンタリー映像や絵本を活用した教材活用。 ⑥小児看護学方法論　小児看護技術演習 レサシベビーを使ったＢＬＳ体験 ⑦小児看護学方法論　　小児看護過程の展開	2008～2013年 2014～2016年	① 小児看護学では、子どもとの触れ合いがない若者世代にいかに対象を印象づけ看護学に興味関心を抱かせるかが重要となる。概論は、その主軸になる部分である。小児看護学における発達段階を踏まえ、こどもの姿として幼児における発達段階エリクソンのライフタスクをとり上げ、幼児期前期の自律性対　恥・疑惑イメージできる絵本を活用した。学生が自ら歩んできた子ども時代の心理的な葛藤を読み聞かせの中から想起し、内面世界から発達段階ごとの子どもの姿が理解できるよう創意工夫する。 ② 自身の子育ての歴史（ＤＶＤ）より 生まれてから就学に至るわが子の実写映像を通して、子どもの成長発達のありようを、視覚的に記憶に落とせるように努力した。その後に続く新生児期・乳児期・幼児期・学童期・思春期の特徴と看護の理解につなげた。 ③ 小児看護学概論においての総括として 乳児期・幼児期の児の入院環境を再現、あえて危険な環境を設定させ、危険箇所を見つけるという課題発見演習を行い、リスクセンスを磨きこれまでの講義を振り返り、子どもの発達段階を理解できるよう工夫した。 ④ 方法論は、概論を基礎に位置づけられる。概論の理解をベースに、病気の子どもをどう理解したらよいか、発達段階に合わせたインフォームドアセントを、子どもへのプレゼンテーションを通して理解させた。 ⑤ 方法論は様々な状況下にある親と子ををどのように支援し看護したらよいかをおさえる。現代、社会問題化する小児虐待については、加害者の証言（密室の親子）被害者である子どもの内面世界を、体験者の立場から視覚化した。絵本（わかってほしい・・クレヨン社）（あなた

		はちっとも悪くない・・岩崎書店）を使い理解を深められるように講義した。
【統合分野】 医療安全演習		″●看護と安全については、看護学生に医療事故を防ぐための知識と技術および看護倫理について理解させる目的で、医療安全教育の講義６コマ（合計９時間）を終了した時点で、看護学校教員とリスクマネージャーとの演習の打ち合わせを実施、看護師が臨床上のリスクが大きい酸素の残量や注射薬の速度計算、多重課題発生時におけるマニュアルの遵守の必要性、ならびに優先順位を決める時の看護倫理などに焦点を当てたシミュレション実習を３パターン実施した（１） 看護業務に必要な計算の考え方 （２） 複数患者への投薬（３） リスクを意識した経管栄養における管理 これらを通して事故防止におけるＫＹＴや薬剤投与時の５Ｒについて、ヒューマンエラーについての理解として集中を切らせた時の対処法やリスクについて、多重課題発生時の優先度と倫理の理解としてて安全を優先すべきか患者ニーズを優先すべきかの倫理的ジレンマを体験から学ばせた。これらは、統合実習における複数受け持ち時の多課題への対処に多いに役立てられた。 ″
【統合分野】 基礎教育と臨床を繋ぐチームチャレンジ演習	2013～ 2014 年	●看護の統合と実践 ①導入として 統合分野についての意味付け ②チームチャレンジ演習として、臨場感あふれる環境下で、４人の患者を受け持ち グループで演習に取り組む。その様子のビデオ撮影を行い。終了後患者・家族・新人看護師フォロー看護師・リーダー看護師・医師・ファシリテーター・撮影者それぞれの立場から振り返るなかで、多重課題・時間切迫・業務割り込み状況への対処について組織の権威勾配のなかでどのようにマネジメントしていくことが必要か自らの行動を客観視し考えさせた。 ③看護師として専門職としての責任感を育み これから臨床のなかで看護師としての行動規範となる看護における倫理観を、小説や事例検討か

		ら考えさせた。〃
【小児看護学援助論】	2016年4月 ～7月	①小児看護学におけるピア・エデュケーションを使った体験演習（授乳・調乳・離乳食の試 ②学童期の喘息の子どもと家族への看護過程展開におけるアクティブ・ラーニング 事例をグループで検討しながらグループディスカッションおよびグループワークを実施 少人数のなかでの討議を通しながら、データーベースを作成し対象理解、情報分析解釈・看護問題の抽出・計画立案の一連を考えさせ発表後、最終的に個人ワークを提出
	2017年4月 ～7月	① 小児看護における倫理 ② 様々な状況下にある子どもと家族の看護（入院や外来、虐待、災害・在宅・障がい） ③ 小児看護技術の演習 ④ 急性期・慢性期・回復期・終末期・周手術期にある子どもの看護について消化器・循環器・呼吸器・造血器・内分泌などの疾患・先天性異常と組み合わせ看護について学習を深める。症状に関しての看護はグループ学習としプレゼンテーションを実施させた。 ⑤ 終末期の子どもの看護については、DVDを視聴し全員でテーマについて考えさせる。 ⑥ 看護過程の展開は川崎病の乳児、気管支喘息の学童を事例に挙げて看護過程展開をグループで追究した。最終的にこの事例をもとにシナリオを作成し子ども役（モデル人形または学生）を使用し、母親役・看護師役で臨床場面を再現し、学生全員で観察し 省察し看護を振り返らせた。直近の隣床実習のための具体的なイメージ作りに有効であ

		った。 ⑦ 国家試験を想定し、小テストを計5回実施し形成的評価を行うなかでそれまでの学習内容をどの程度学習者が理解したかを自己評価・他者評価（教員）し、理解の足りていない部分を講義のなかで説明し補足した。 ⑧ 講義前の課題、講義後にはまとめプリントを作成し、学生が学習内容を集約できるように工夫した。これを実習に持参させた。
【小児オムニバス演習】	2016年 5月	小児看護学におけるオムニバス演習 バイタルサイン測定・点滴の再固定・吸入・環境整備（リスクセンストレーニング）・乳児・幼児のBLS・子どもの安全（チャイルドビジョン・チャイルドマウス）
	2017年7月	オムニバス演習では援助論の2017年4月～2017年7月の概要⑥のとおり川崎病の乳児、気管支喘息の学童を事例に挙げて、バイタルサインの測定・環境整備・全身清拭・点滴の固定・指導の場面から1つ選択し4人グループで発表させる。病態や発達段階、また事例の子どもの個別性から看護計画（O-P, T-P, E-P）の根拠を考えさせ、全員で共有する。またそれぞれ模擬的に演じてもらった各役割からの意見を交流させどのような看護が必要であったのかを共有することで小児看護を深めることができた。
【小児看護学実践実習】	2016年9月～2017年3月 2017年9月～2018年3月	① 実習配置表の作成、（2016年9月～2017年3月に至る小児看護学実践実習生　84名（19グループ）実施（2017年9月～2018年3月に至る小児看護学実践実習生　78名（20グループ）実施 ② 各施設の調整（７施設２０箇所）学生オリエンテーション、実習記録の検討整備・感染症抗体価や腸内細菌の確認 ③ 教員配置･連絡調整、学内開始時のオリエンテーションおよび学内最終の事例検討会運営

【小児看護学実践実習前学内演習】	2016年 9月～ 2018年3月	①　子どものフィジカルアセスメント体験学習 子どもの腹部・胸部のアセスメントを説明 その後CDを使い聴音し、実習を想定した体験学習を取りいれた。 ②　ロールプレイングとVTRを使った省察学習 “検査や処置を受ける子どもと家族”を想定した場面から子ども・母親・看護師のそれぞれの立場からの気持ちを交差させながら行為の中の知をもとに、小児看護における認知的情動的な側面から共感するという事を考えさせた。
【小児看護学概論】	2017年9月 ～2018年 12月	①　小児看護の倫理 ②　小児の成長と発達の原則 ③　小児の形態的・機能的･心理的特徴 ④　発達理論からみた小児の姿 ①　～④に関して事前課題を行わせ講義 ⑤　新生児期・乳児期・幼児期・学童期・思春期の形態的特徴・身体生理の特徴・養育と看護について学生が絵や文字で紙芝居を作成し、プレゼンテーションを行う。プレゼンに使用した紙芝居は各期の順序でファイリングし実習や国家試験に活用できるように配布した。 ①　～⑤を踏まえ子どもの成長や発達の特徴を踏まえた安全な環境についてリスクセンストレーニングを行う。このトレーニングを通じて、小児看護における安全や安楽を踏まえた環境整備のあり方について学習を深めることが出来た。 ⑥　小児を取り巻く社会と小児の健康を守る仕組みについて、学生が在住する市町村における小児保健・福祉・行政のしくみについて調べさせた。 ⑦　国家試験を想定し、小テストを計5回実施し形成的評価を行うなかで、それまでの学習内容をどの程度学習者が理解したかを自己評価・他者評価（教員）し、理解の足りていない部分を講義のなかで説明し補足した。 ⑧　講義前の課題、講義後にはまとめプリントを作成し、学生が学習内容を集約できるように工夫した。これを実習に持参させた。

		⑨　成果物として小児の成長と発達について新生児から思春期にわたる特徴をまとめた冊子を完成させ、概論の内容を集大成させた。小児看護実践実習に活用できる個人の学びとしては価値の高い内容になった。
２　作成した教科書，教材 ・小児看護学援助論におけるオムニバス演習プログラム ・小児看護学援助論における看護過程演習シミュレーションプログラム ・小児看護学実践実習前におけるフィジカルアセスメント演習プログラム ・ロールプレイング・ＶＴＲによる省察による小児看護学実践実習事前演習プログラム ・小児看護学実践実習　関連図を用いた事例共有学習 ・小児看護学実践実習ガイドライン ・学内開始時オリエンテーションスケジュール ・学内最終事例検討会の運営スケジュール ・小児看護学実践実習記録の再考、ヘンダーソン理論に基づく看護実習記録作成 ・小児看護学援助論授業カリキュラム構築	2016年5月 2016年4月～7月 2016年4月～7月 2016年9月 2016年9月 2017年9月 2017年5月～2017年9月 2017年4月～9月	太成学院大学FD対象プログラム 2016年9月～2017年3月に至る小児看護学実践実習生　84名（19グループ）実施 ・情報収集の枠組みを、看護理論を用いた方法へ改変、常在条件・病理的状態、１４の基本的欲求が充足されているかという視点で情報を収集しアセスメント（解釈・判断）を行い、看護上の問題を明確化し計画立案・実施・評価を行わせた。 ・アクティブラーニングとして、発達段階に合わせた小児へのプレパレーションのプレゼンテーション ・症状別看護の学生によるプレゼンテーション（定義・メカニズム・アセスメント・小児の発達特性・看護の実際をふまえて） ・川崎病（乳児）気管支喘息（学童）の小児のペーパーシミュレーション（情報の整理・分析看護問題明確化・計画立案）⇒これをもとに演習し、ロールプレイ・省察学習

・小児看護学概論の授業カリキュラム構築 ・小児の成長発達の特徴についての紙芝居を用いたグループプレゼンテーション ・臨床実習を想定した子どもの成長や発達を踏まえた安全な環境を考える為のリスクセンストレーニング、小児看護学概論におけるリスクセンス演習マニュアル ・小児の成長発達に関する学び冊子 ・小児看護実践実習におけるルーブリック評価の作成 ・総合看護学実習におけるルーブリック評価の作成	2017年9月～12月 2017年9月～2018年3月	・いずれも（小児・総合）具体的な評価項目を設けることで学生が現在の自分の学習の段階を常に確認することが出来るよう、次のステップをめざすために何をすればよいかを自ら考えて行動することができるように出来るだけ学生が考えて行動化できるよう項目を考えた。評価基準が明確である為の指導する側も自己の責務も明らかになり十分な根拠をもって学生に評価の詳細を説明できるよう検討をした。
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他	2017年3月	2016年度　秋学期 アクティブラーニング・パイロット授業 事例発表　　教育方法としての アクティブ・ラーニング “ロールプレイングとVTRを活用した省察を基盤とする小児看護学実習事前プログラム実施

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 看護師免許証 看護教員養成講習会修了同　認定看護管理者ファーストレベル修了 大阪教育大学教育学研究科　修士号（学術）取得	 1987年4月 2008年1月10日 2016年3月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 小児専門施設での看護実践能力獲得 ＮＩＣＵ・小児科病棟の管理職として病棟管理 看護教育（厚生労働省管轄の看護師養成校） 看護教育の中での実習に関する組織との調整・連携 看護教育（文部科学省管轄の3年課程短期大学）	 1987～1997年 1994～2004年 2004～2006年 2006～2007年 2007～2014年 2014～2016	 実績を活かした小児看護学に関連する職務の着任・実践 ベルランド総合病院ＮＩＣＵ開設準備 ″立ち上げに参画、専門的知識スタッフ教育、ベルランド総合病院ＮＩＣＵ看護マニュアル作成管理職着任　平成１６年小児科病棟　管理職着任″ 小児科病棟管理職着任（NICUより異動） ベルランド看護助産専門学校異動・専任教員 ベルランド看護助産専門学校・実習調整者 ″●カリキュラム進度に合わせた総実習の年間配置表作成、参入関連施設との調整●実習計画・運営 ●各実習オリエンテーション　●臨床指導者会議　運営進行総括　●実習教育研修会　企画運営　●実習要綱の作成統括●教務主任補佐●全実習施設への依頼・調整●実習指導における指導体制の明確化″ 小児看護学領域　講師

		教務部会副部長 ・カリキュラム委員ＷＣ担当 ・ハラスメント委員
看護教育（（文部科学省管轄の４年制大学）	2016～2017	小児看護学領域　講師（援助論・実践実習担当） 1 回生指導担当 国家試験対策委員 オープンキャンパス委員会担当 看護研究
看護教育（（文部科学省管轄の４年制大学）	2017～2018	小児看護学領域　講師（概論・援助論・実践実習） 2 回生指導担当 国家試験対策委員 オープンキャンパス委員会担当 実習調整委員
４　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　「子どもたちが教えてくれたこと」	単著	2003 年 3 月	メディカ出版 Neonatalcare	２００３年第１６巻１６号（通巻第２０８号） 巻頭
2　「小児が医療行為を受け入れるための試み」ホスピタルドールを導入して	共著	2006 年	月刊ナーシング　学研	２００６年４月号第２６巻４号 通巻３２９号
3　NICU のちいさないのち新生児集中治療室からのフォトメッセージ	共著	2011 年	メディカ出版	２０１１年第１版　Ｐ９３
（学術論文） 1 ロールプレイングと VTR を活用した省察を基盤とする 小児看護学実習事前プログラムの開発	単著	2016 年 3 月	大阪教育大学 教育学研究科	大阪教育大学教育学研究科 修士論文

2 ロールプレイングと VTR を活用した省察を基盤とする小児看護学実習事前プログラム実施における学生の気づき	単著	2016 年 7 月	小児看護学学会 口演発表（H28, 7 月 22 日～24 日　於　別府国際コンベンションセンタービーコンプラザ)	口演発表 小児看護学学会発表論文投稿
3 看護学生の共感性の育成 ～社会的スキルとの関連からの検討～ Nursing student 's empathy development ~ Consideration from relation with social skills ~	単著	2017 年 3 月予定		太成学院大学紀要論文投稿
（その他） ：				

（看護）錦織　史子

教　育　研　究　業　績　書

年　月　日

氏名　錦織　史子　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
発達障がい　被害者心理　レジリエンス	大人の発達障がいの理解　被害者のレジリエンス　看護教育

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 看護研究方法論Ⅱ 研究計画　テーマ設定方法　データ収集	平成 19 年～20 年	神戸市看護大学 4 回生に対して、看護研究方法論Ⅱにおいて、学生が研究とは何かという具体的な内容を理解するために、自身の修士論文を基に、内容の発表を行いながら、研究テーマ設定、研究計画書の作成、半構造化面接によってのインタビューに基づくデータ収集の方法と研究デザ

		イン(グランテッド・セオリー・アプローチ)について講義を行った。講義資料は自身の修士論文の要約と講義内容をパワーポイントにまとめた。感想を提出した学生の反応は研究の具体的な進め方、難しさなどの理解に繋がった。
文献検索の方法	平成 19 年～20 年	神戸市看護大学 4 回生に対して、看護研究方法論Ⅱにおいて、看護研究を行うにあたっての文献検索の方法を講義した。CiNii、医学中央雑誌、Webcat Plus 、NACSIS-CAT などについての検索をパソコンを用いて講義し、学生の文献検索に活かせるように努めた。
卒業論文		神戸市看護大学 4 回生に対して、看護研究方法論Ⅱにおいて、基礎看護学領域のゼミ学生に対して、卒業論文の指導を行った。学生は研究テーマとして、ハンドクリームの使用で微生物の発生が時間単位でどの程度繁殖するのかを調べ、ハンドクリームの清潔な使用についての方法をまとめた。結果は微生物の繁殖は時間単位においてほとんど変化がなく、有意差は見られなかった。学生に対し、研究デザイン、統計分析の方法、論文の執筆において指導を行った。学生は卒業論文としてしっかりまとめられた事に対して研究の学びに繋がっていた。
基礎看護学技術演習 I	平成 19 年～20 年	神戸市看護大学 1 回生に対し、看護技術演習 I 全般においての技術指導を担当した。特に清潔援助技術において学生のピアサポートの指導計画を立案し、毎回変わるグループリーダーの学生が、メンバーの学生に清拭や洗髪の技術を指導できるような指導内容を計画し実施した。学生の反応は人に指導するという自分の責任を自覚し、放課後に練習時間を設けるなど、熱心に演習に取り組み、グループのメンバーにしっかり教えることができていた。また演習の振り返りを行い、次につながる指導法を考える事が出来た。
基礎看護学実習	平成 19 年～20 年	神戸市看護大学 1 回生に対し、神戸市市民病院群(神戸市医療センター中央市民病院)において

		基礎看護学実習指導を 3 週間務めた。学生は実習を通して看護者に求められる基本的姿勢や態度、対象理解とは何かを、コミュニケーションや基本的な日常生活の援助を技術指導を受けながら実施し、記録にまとめた。教員は受持ち患者とのコミュニケーション指導や、看護技術指導、振り返りの記録指導を行い、看護実践の基礎的能力を養う事に努めた。
精神看護学実習	平成 19 年	神戸市看護大学 3 回生において、関西サナトリウム病院での精神看護学領域実習指導を務めた。精神に障がいのある患者の特徴を、患者と看護者の関係を通して理解する事を目的とした。患者とのコミュニケーションを通しての理解だけでなく、現れる症状や行動に対し、精神分析やプロセスレコードを用いて、症状が現れる根拠を考え、それに対し看護者に求められる適切な対応は何かを捉えられるような指導を行った。
総合実習　3 回生	平成 19 年 ～20 年	神戸市看護大学 3 回生において、神戸市市民病院群(神戸市医療センター中央市民病院)での総合実習指導を務めた。複数患者を受け持つことにより、時間配分や優先順位を考え、看護チームの一員として看護者としてどのような責任を果たすのかを、各領域実習での学びを統合し、看護実践能力を養う事を目的とした。神戸市で総合実習の先駆け的な実習であったため、学生は初めて総室を受け持つことや、夜勤実習も経験し、看護職者としての責任と自覚を持って実習に取り組む事が出来、看護者としての自己の課題も明確にし、学びの多い実習となった。
基礎看護学Ⅱ 日常生活援助技術　排泄	平成 21 年 ～24 年	河内長野看護専門学校 2 年生において、基礎看護学Ⅱの講義の一部である、日常生活援助技術：排泄の講義を担当した。排泄の意義と基礎知識(メカニズム)の理解、基本的な排泄の援助方法、排泄障害のある患者の援助の理解を目的とし、教科書・参考文献を用いてレジメを作成し、パワーポイントで講義を行った。排泄は自尊感情に深く影響するため、心理的意義の説明には特に力を注ぎ、排泄に障がいのある患者理解に努めた。
日常生活援助技術　活動と休息	平成 21 年 ～24 年	河内長野看護専門学校 2 年生において、基礎看護学Ⅱの講義の一部である、日常生活援助技術:

		活動と休息を担当した。人間にとっての活動と休息の意義と、活動・運動の基礎知識を、活動の効用としてまとめた。休息は疲労と休息・睡眠の基礎知識(睡眠のメカニズム)を睡眠の効用としてまとめた。健康の保持・増進や、患者が健康な生活を取り戻すためには、活動と休息のバランスを取りながら、適切な運動を課すことが必要であることを理解できるように取り組んだ。資料作成としてレジメを作成し、活動の基礎知識においては活動と休息の関係を図示したり、骨格筋や関節可動域訓練などの内容を取り入れながら行った。
精神看護学Ⅱ 精神看護学看護過程　紙上事例作成看護過程の展開	平成 21 年～24 年	河内長野看護専門学校 2 年生において、精神看護学Ⅱ看護過程を担当し、事例の作成と看護過程の展開について講義を行った。慢性期の統合失調症患者を対象にし、ゴードンの機能的健康パターンに基づいたアセスメント方法と、事例に則した看護診断を考える事が出来るように講義を行った。身体的理解はもとより、患者理解として特に認知・知覚、自己知覚・自己概念、コーピング・ストレス耐性など、精神看護に影響が深い内容については特に力を注いだ。精神障がいのある患者理解は学生にとって非常に難しく、自己概念などの自己の境界のあいまいさなどは、特に捉え方の難しさがあり、精神病理学や心理学理論も講義に取り入れながら、症状を理解し、適切な看護に結びつくように行った。
プロセスレコード	平成 21 年～24 年	河内長野看護専門学校 2 年生において、プロセスレコードの講義を担当した。ペプロウから始まる記録の歴史、基本的知識、記述方法、分析・解釈の方法までを講義し、学生に実際に関わった患者を事例にして(架空)レポート課題として記述し、提出を求めた。学生は講義の内容を理解し、患者とのコミュニケーションにおいて、必要な解釈と分析(考察)が出来ており、事例の患者理解に努める事が出来ていた。学生自身の精神科看護学実習に活かせるものになった。
国家試験対策　精神看護学	平成 21 年～24 年	河内長野看護専門学校 3 年生において、国家試験対策として、過去5年間の出題問題を対象にし、

		精神看護学の問題として出題されやすい内容を選択し講義を行った。特に統合失調症、うつ病、アルコール依存、ＰＴＳＤ、虐待など近年に出題傾向の多い疾患の基礎的知識と看護について講義形式でまとめた。国家試験においては非常に役立つものになった。
臨地実習指導　3回生 (主病院においての臨地実習指導・精神看護学実習指導・母性看護学実習・統合実習指導) 近畿大学医学部堺病院(基礎看護学実習　小児看護学実習) 大阪府済生会富田林病院 医療法人 杏和会 阪南病院(精神看護学実習) 医療法人 彰療会 大正病院(母性看護学実習) 研究方法論　ケースレポート指導　3回生	平成 21 年 ～24 年	河内長野看護専門学校3回生に対し、臨地実習指導を担当した。精神看護学実習を主要とし、基礎看護学実習、小児看護学実習、母性看護学実習、統合実習の指導を担当した。学生が実習病院で看護師としての基本的な知識、看護技術、安全管理、チームの一員として必要な報連相の重要性などを学ぶために、全般に渡って指導を行い、卒業後、専門職業人としての看護実践能力を養えるように指導を行った。
基礎看護学Ⅰコミュニケーション論	平成 24 年 ～26 年	大阪府医師会看護専門学校1年生において、基礎看護学Ⅰコミュニケーション論を担当した。教科書通りの講義だけでなく、心理学の理論や研究を用いた講義を通して、患者に対する接近的行動や受容・傾聴・共感について深く講義を行った。またワークやロールプレイを積極的に取り入れながら、効果的なコミュニケーションの実際を理解する事を目的とした。さらに看護職者としての基本的姿勢・態度を重んじながら、一人の人間として誠意ある対人関係のあり方についても重点を置いた。学生は講義とロールプレイを通して看護職者としての基本的姿勢とコミュニケーション技術を学び、学生生活だけでなく、臨地実習においても活かせるものとなった。
基礎看護学Ⅰ生活援助技術論　安楽・睡眠 罨法・氷枕の看護技術	平成 24 年 ～26 年	大阪府医師会看護専門学校1年生において、前任校の活動と休息の講義内容を参考に、生活援助技術論Ⅰ：安楽・睡眠の講義を行った。安楽につ

		いては安楽の概念の理解と、安楽をもたらす看護技術として、罨法と氷枕の講義とデモンストレーション、技術実習を行った。特に罨法においては単なる安楽だけでなく、治療の一つとしての意味も踏まえ、温罨法と冷罨法の効果と禁忌などもしっかり講義を行った。学生は実習において温罨法を取り入れる事が多くあり、根拠をもって看護技術を提供する事に繋がった。
基礎看護学Ⅰ生活援助技術論　　食事の援助技術	平成 24 年～25 年	大阪府医師会看護専門学校 1 年生において、生活援助技術論Ⅰ：食事の援助技術を担当した。人間にとっての食事の意義と目的を始め、食事援助の基礎知識、食事介助の技術、嚥下訓練、非経口的栄養摂取の援助まで、食事援助についての全ての講義を行い、看護技術として視力障害のある患者を想定し看護技術の実習を行った。学生に視力障害のある患者の食事援助について、事前学習と看護計画を考えさせ、学生の考えた方法で実施し、グループで評価を行った。様々な意見交換と振り返りができ、学びに繋がった。
基礎看護学Ⅱ　看護記録　指導・教育	平成 26 年	大阪府医師会看護専門学校 1 年生において、基礎看護学Ⅱ看護記録・指導教育を担当した。看護記録の構成・記載方法・記録の管理の必要性と留意点などを、看護業務手順や法律に含まれる事柄も含めて講義を行った。また報告の意味と必要性、報告の方法など、チームで関わる看護職において報告の重要性と責任についても講義を行った。さらに患者教育・指導という点では、患者の自立に向けた退院指導・生活指導に焦点を置き講義を行い、ロールプレイを取り入れ、各グループで発表を行った。これらを通し、記録の重要性や、報連相、患者指導についての理解につながった。
臨床看護総論　周手術期	平成 25 年～26 年	大阪府医師会看護専門学校 2 年生において、臨床看護総論：周手術期看護を担当した。術前・術中・術後の看護として講義だけでなく、学生が周手術期をイメージできるようにビデオなどの視聴覚機材を用いながら行い、特に術後の看護については、学生が苦手とする侵襲における生体反応と輸液管理に対し in, out バランスを計算し、循

		環動態を捉えられるように重点的に講義を行った。結果、急性期の看護過程の学習ではそれらの内容に対し、期待していた内容が記述され、非常に学習効果が見られた。
精神看護学各論　看護過程の展開	平成 24 年～26 年	大阪府医師会看護専門学校 2 年生において、精神看護学看護過程を担当した。慢性期の統合失調症の事例を作成し、ヘンダーソンの 14 領域別に、アセスメントの視点と、事例に則した看護問題を考える事が出来るように講義を行った。身体的理解はもとより、患者理解として特に認知・知覚、自己知覚・自己概念、コーピング・ストレス耐性など、精神看護に影響が深い内容についてはこれまで自身が行ってきたように、特に力を注いだ。精神障がいのある患者理解は学生にとって非常に難しく、精神病理学や心理学理論も講義に取り入れながら、対象理解に結びつくように行った。また学生の思考が偏らないように、グループワークを取り入れながら、患者を様々な視点から理解できるように進めた。これは病態生理だけでなく、患者の発達段階や心理的・社会的側面や疾患の受容などをグループでアセスメントし、看護計画を立案することで、同じ疾患であっても、患者の苦しみを学生がどのように捉えるのかは各グループで異なっており、それを共有することが、固執や偏見などの患者理解を予防し、精神を病むということにしっかりと向き合う心や、思いやりの心を育てることに繋がったと考える。
研究方法論　ケースレポート指導	平成 24 年～26 年	大阪府医師会看護専門学校３年生に対し、研究方法論を担当し、臨地実習で受け持った患者を対象にケースレポート作成を行う指導を行った。先行研究や文献検索の方法、学校で定められた書式に基づいた記述方法を指導し、学生が自分の看護を振り返る事が出来るように指導を行った。学生は初めてケースレポートを作成したため、文章構成が難しく、時間を要した学生もいたが、ケースレポートを通して自分の看護を振り返る事が出

		来、自分の看護観にも繋がる物となった。
臨地実習指導 (主病院においての臨地実習指導・精神看護学実習指導) ＮＴＴ西日本大阪病院 大阪市立総合医療センター (基礎看護学実習　成人看護学実習　小児看護学実習　統合実習) 医療法人 微風会 浜寺病院 養心会 国分病院 総合病院 浅香山病院 (精神看護学実習)	平成 24 年 ～26 年	大阪府医師会看護専門学校 3 年生に対し、臨地実習指導を担当した。精神看護学実習を主要とし、基礎看護学実習、成人看護学実習、小児看護学実習、統合実習に対しても指導を行った。学生が実習病院で看護師になるための基本的な知識、看護技術、安全管理、チームの一員として必要な報連相の重要性などを学ぶために全般に渡って指導し、卒業後専門職業人としての看護実践能力を養えるように指導を行った。
精神看護学方法論Ⅰ	平成 27 年	藍野大学短期大学部第二看護学科において、2 回生に対し精神看護学方法論Ⅰに対しての講義を行った。医学書院の教科書を基に、対象理解と精神看護に対しての講義を中心にグループワークと発表を適宜取り入れ、学生が自分達で精神看護を考える事が出来るように取り組んだ。またプロセスレコードの記載では、特に受容と傾聴を中心に患者とのプロセス及び看護者と患者の相互作用を考察できるように、それに見合った事例を準備し提出を求めた。1 人 1 人コメントを返してやり取りを行い個別指導にもあたった。
精神看護学方法論Ⅱ(看護過程の展開)	平成 27 年	藍野大学短期大学部第二看護学科2回生において、看護過程の展開を担当した。統合失調症、感情障害、摂食障害の 3 事例を準備し、各 8 人～9 人の小グループに分かれ、グループワークを中心に指導を行った。学生はこれまでの精神看護学の内容を参考に自分達で対象理解と疾患、看護を調べ、最終講義日に各グループによる発表を行い、意見交換を行った。学生は自分たちが調べた事を基に様々な視点から患者象と看護問題を考え、看護計画を挙げていた。それを意見交換し共有できたことは、様々な症例の患者理解に繋がったと考える。
臨地実習指導 医療法人 恒昭会 青葉丘病院(精神看護学実習) 医療法人 寿会 富永病院(統合実習 基礎看護学実	平成 27 年	藍野大学短期大学部第二看護学科 3 回生に対し、精神看護学領域の実習を中心に統合実習、基礎看護学実習Ⅱを担当した。学力や精神面の弱さ

習Ⅱ）		が目立つ学生が多く、難しい指導もあったが、学生の学力や性格気質などの個別性に合わせた指導を重点的に行い、時間をかけて学生の成長に繋げた。これにより看護師チームの一員として必要な知識・技術の習得につなげることが出来たのではないかと考える。
精神看護学実践論Ⅰ	平成 28 年 4 月～8 月	天理医療大学医療学部看護学科において、3 回生に対し講義を行った。主に統合失調症、うつ病、不安障害、パーソナリティー障害、てんかん、発達障害の単元を担当し、医学書院の教科書をもとに、疾患の病態生理と治療、看護について講義を行った。視覚教材として統合失調症の患者の事例や、映像、てんかん発作の映像などを用い、学生が精神障害者の具体的なイメージがつかめるように取り組んだ。毎回感想用紙を用い、学生の理解度の確認と、自身のフィードバックを行った。学生の理解度は良好であった。
精神看護学実践論Ⅱ	平成 28 年 4 月～8 月	天理医療大学医療学部看護学科において、3 回生に対し講義を行った。実践論Ⅰの続きであり、Ⅰで疾患の理解をした上で、Ⅱでは精神障害を持つ患者の理解と看護を中心に取り組んだ。精神看護原則、患者の権利、ケアの方法を中心に行った。
研究方法論Ⅱ（卒業論文指導）	平成 28 年 4 月～8 月	天理医療大学医療学部看護学科において、4 回生に対し卒業研究の指導にあたった。卒業論文作成のための研究計画書までの作成について、文献検索、クリティーク、計画書のまとめ方について前期は単位認定となった。自身の研究テーマであるレジリエンス、被害者心理に興味のある学生に対して指導を行った。
臨地実習指導 天理よろづ相談所病院　分院　精神科病棟	平成 28 年 4 月～8 月	天理医療大学医療学部看護学科において、4 回生に対し、精神看護学実習の指導にあたった。学生の個別性に合わせ、細かい指導を行った。看護過程を用いず、アセスメントを通しての対象理解に努め、プロセスレコードから、コミュニケーション技術の獲得と振り返りを重視し、そこから患者を思いやる看護の心を育てられるように指導指導を行った。
精神看護学概論	平成 29 年 4 月～現在	大成学院大学において 2 回生に対し、精神看護学概論の講義を行っている。前半は精神医学、心理学から対象を捉え、精神障がいの歴史、法律の

		概要などを含め精神看護の基本的な考え方を中心とした学習に努めた。後半は対象理解、精神に障がいを持つことの意味、精神症状、疾病の概要を中心とし、特に対象理解に努め、アクティブ・ラーニングとして精神障がいに関しての映画鑑賞や当事者の語りを通してグループワークを取り入れ、対象理解と思いやりや共感性を養い、看護に必要な援助を考えられる授業展開とした。
精神看護学援助論	平成28年9月～現在	大成学院大学において2回生に対し、精神看護学援助論の講義を行っている。前半は概論の内容をより具体化し、疾病治療と看護援助を中心に講義を行った。さらにアクティブ・ラーニングとしてコミュニケーション技術やプロセスレコード演習、当事者の家族をゲストスピーカーに迎え、概論から引き続き、対象理解の深まりに取り組んだ。後半はオレム・アンダーウッドを用いて、統合失調症の看護展開をセルフケアの視点からグループワークで捉えさせた。またロールプレイを取り入れ、コミュニケーショ技術の学習と対象の対応方法を学生自身で考え演じることで、実際の看護展開のイメージ促進につながる授業展開にした。
精神看護学実践実習 医療法人　丹比荘　丹比荘病院 医療法人　以和貴会　金岡中央病院	平成28年9月～現在	大成学院大学において精神看護学実践実習の指導にあたっている。オレム・アンダーウッド理論を用いて看護過程を展開しながら、学生の個別性に合わせて対象理解が進むように、指導者の協力を得ながら丁寧に指導を行っている。
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 ・小学校における発達障がい児教室での教員補助	平成 17 年～19 年	・京都市立常盤野小学校において 2 回/週、発達障がい児教室での教員補助を行った。実際に始業から終業まで授業や学校行事に参加し、授業にお

		ける担任の補助業務と、子どもたちと関わりながら学童期の発達障がいの子どもの理解に努めた。またダウン症児の子どもを事例に「ダウン症児の手の発達と心の発達」としてリサーチペーパーをまとめた。
・地域子育て支援	平成 19 年～20 年	・西宮市子育て相談として「ゆうきっこクラブ」という発達障がいを抱える親と子供が参加している団体に所属し、就学前の広汎性発達障がいの子どもを抱える親と子どもを対象に毎月 1 回程度、発達に応じた生活指導や、子供の障がいに応じた遊びの提供などを行った。ここでは親にとっては悩みを打ち明け合う事が大きな救いとなり、子供にとっても自分のペースで活動出来る居場所として機能できるように関わった。
・NOP 活動としての DV 被害者とその子供に対して、心理的なサポート	平成 21 年	・NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティーづくりネットワーク団体に参加し、DV 被害者支援として養成講座を受け、DV 被害者とその子供に対して、心理的なサポートを行った。特に被害者の子どもに対しての心理的ケアに重点を置く取り組みで、1 回/月シェルターを訪れ、子供の遊びと遊び場を提供し、子供が抱える心理的ストレスやトラウマについてのサポート活動を行った。
5　その他 5　その他 学内勉強会企画・運営担当　第 2 土曜日実施 春季研究会　企画・運営担当　事例検討会	平成 25 年～26 年	大阪府医師会看護専門学校において、教員の学生理解を深める目的のため、学内において心理学を用いた勉強会を取り入た。内容は対人関係に困難を持つ、また特徴的な行動パターンを持つ学生理解として、対人関係論、自己愛理論、障がい論などの視点で、大人の発達障害やパーソナリティー障がいについて基本的な知識と対応について講義を行った。春季研究会では事例検討などを通して意見交換を行い、年間を通して教員の学生理解に努めた。実施後アンケートを行い評価した。学生理解や指導方法について、これまで分からなかった事が講義を通して理解できたという反応

		が非常に多く見られた。
臨地実習指導者会　企画・運営担当	平成 25 年 ～26 年	大阪府医師会看護専門学校において、毎年開催されている臨地実習指導者会での企画・運営を担当した。実習指導者に向けて近年の若者の特徴として、臨床心理士に講演を依頼し、講演とワークを取り入れながら実習指導者の学生理解に取り組んだ。終了後のアンケートでは実習指導に対しての学生理解に繋がり、また指導者自身の振り返りも見られ、今後の実習指導に非常に活かせる内容になった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 看護師免許	 平成 21 年	
臨床発達心理士　受験資格 学校心理士　受験資格	平成 18 年	臨床発達心理士に関する必要単位を取得(臨床発達心理士資格認定委員会受講証明書) ・臨床発達心理学の基礎に関する科目 〈基礎理論〉No.611128 〈評価と支援〉No.621216 ・社会・情動発達とその支援に関する科目 〈発達の基礎〉No.553121 〈評価と支援〉No.553217 ・言語発達とその支援に関する科目 〈発達の基礎〉No.564134 〈評価と支援〉No.564223 ・認知発達とその支援に関する科目 〈発達の基礎〉No.642153 〈評価と支援〉No.642250 ・育児保育現場での発達とその支援に関する科目 〈育児支援〉No.655127 〈保育支援〉No.655226 学校心理士に関する必要単位を取得(立命館大学大学院での講義において必要単位を取得)
大阪府医師会災害・外傷初期診療研修修了	平成 25 年	災害・外傷初期診療の分野
ストレスチェック実施者養成研修修了	平成 29 年	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 ・研修・研究委員委員長	 平成 25 年 ～26 年	 大阪府医師会看護専門学校において、各年度においての年間計画の作成。学内の研究者に対して

		倫理審査の実施。研究計画・方法に対しての助言などを行い、研究活動がスムーズに実行できるように取り組んだ。また勉強会の企画・運営や臨地実習指導者会の企画・運営などを担当した。
・国家試験対策委員会	平成 27 年	藍野大学短期大学部第二看護学科において、国家試験対策委員として、主に学生の成績データの分析を行い、国家試験対策の年間・月間計画、予想問題の作成、模試対策やチューター制を取り入れた。チューター制では各教員の学生に対する精神面に対する個別指導の推進を積極的に行い、学習面では委員を通して専門講師の派遣や教材(問題集)の選択を行い、積極的に学習支援を行うなど国家試験合格に向けて対策を講じた。
・ハラスメント委員会副委員長	平成 27 年	藍野大学短期大学部第二看護学科において、様々なハラスメント事例に対し、双方の事実確認を行い、本校のハラスメント規定に基づいて厳正に取り組んだ。また被害にあったと考えられる被害者の面談を継続的に行い(カウンセリング)、心的外傷からの回復を意識した心のケアに努めた。加害者に対して暴力についての教育と、暴力行為に対して振り返り学習を行い、再犯予防に努めた。また学生、教員に対し暴力被害から起こる心的外傷について及びハラスメントに対する対応についての資料作成と啓発活動に努めた。
・ハラスメント対策委員会　委員	平成 28 年 4 月～8 月	天理医療大学医療学部看護学科において、ハラスメント対策委員として、教職員全員を対象とした、ハラスメント研修の企画、運営にあたっている。ハラスメントの基本的な知識の理解、被害者の心理的反応と初期的な対応の方法などに対して講師による講演を依頼し、教職員全員が対応できるように取り組んでいる。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				

（学術論文） 1.DV スクリーニングを用いた看護面接法の研究 (修士論文) (学会発表) 1. 看護学生の性格傾向と「情緒不安定」「社会的不適応」がレジリエンスに及ぼす影響について	単著 共同	平成 19 年 平成 27 年	立命館大学大学院 修士論文 日本看護学校協議会学会 (大阪府 メルパルク大阪) 抄録集　p 32	各病院での DV 支援に対し、DV スクリーニングを実践している看護職者を対象に、どのような看護面接を行い、被害者に質の高い看護を提供しているのかを看護職者の語りから分析し、具体的な援助の視点を考察した。半構造化面接を用いて、グランテッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。結果は被害者を支援する 9 個の概念が抽出され、中でもチームで取り組む「円滑な援助を提供する流れ作り」が核となり、それを軸に援助展開がなされていた。これらから院内での DV 支援にはチームワークの強化の必要性や、DV スクリーニング理解のための研修の必要性、社会資源の受け皿作りなどが必要であり、今後の病院などにおける DV 支援の課題を導き出せた。 看護学生の性格傾向と、資質的レジリエンス、獲得的レジリエンスの関連について調査を行った。学生の性格傾向としてＹＧ検査を用い、レジリエンスについては先行研究に用いられている質問紙を用いた。155 人を対象に、結果はＹＧ検査から 30%の学生に軽度の抑うつ～重度の抑うつが見られる事が分かり、ＹＧ検査の気分の変化項目との相関が見られた。また情緒不安定、社会的不適応の性格傾向と、資質・獲得レジリエンスとの関連は、どれにも 5%水準で有意差が見られ、これらの学生は、成長過程で獲得していく自己理解や他者理解、問題解決能力の獲得が低く、レジリエン

				ス(精神的回復力)に負の影響を与えている事が推測され、学生教育として上記の 3 点(自己理解・他者理解・問題解決能力)の教育支援の必要性が示唆された。 本人担当部分：データ分析、論文の記述、抄録全てを担当した。その他については共同研究者と共同で行い、本人担当部分は分離できない。 共同研究者：錦織史子　新田弘子
（その他） 講演： 心理的的問題を抱える看護学生の対応について(レジリエンスの獲得支援について)		平成 27 年 8 月	大阪府医師会主催 臨地実習指導者会	平成 27 年の自身の看護学生のレジリエンスの研究を基に、臨地実習指導者、教員など約 250 人を対象に、心理的な問題を抱える学生の理解及び具体的な対応、教育方法についてレジリエンスを高める教育を中心に講演を行った。具体的な内容を多く取り入れ講義を行ったため、看護学生だけでなく、新人看護師のレジリエンス教育にも非常に役立つという感想を多くいただき今後の教育に役立てられるものを提案出来たと考える。
講演： 発達障害と愛着障害の理解とかかわり方について		平成 28 年 2 月	大阪府西浦支援学校	大阪府西浦支援学校において、小学校から高等学校までの自閉症児、軽度発達障害児について、教職員約 100 名を対象に、対応が困難な生徒に対して発達障がいの観点だけでなく、愛着障がいの観点も含めて、その理解と対応について講演を行った。最近の精神医学、教育学、心理学研究の動向や具体的なカウンセリング技術、行動分析の考え方などを紹介しながらの講演であったため、教職

				員が今後参考にできる内容であり、感想用紙からも子どもたちの理解やかかわり方の見直しにつながったという意見も多く、非常に役立てられたと考える。
講演： 個人特性へのアプローチ		平成 28 年 7 月	医療法人 協和会 看護職対象 トピックス研修 千里中央病院研修室	新人看護師教育の担当者が、近年の新人看護師に対する理解をより深めることを目的とし、性格傾向や大人の発達障がい、レジリエンスの理解を中心に講義を行った。参加者の多くが年齢層が若い、プリセプターであり、新人に対し、対応に悩んでいたが、講義を聞いて理解につながったという感想を多く頂いた。
講演： 発達障がいの傾向がある大人に対する理解と対応		平成 28 年 7 月	大阪府 高石市教育委員会	新人教師の発達障がいの傾向や、モンスターペアレントの傾向がある保護者など、非常に対応が困難な場合において、管理職の方を中心に、その対応や解決策について講義を行った。主に大人の発達障がい、パーソナリティー障がいの特徴、対象理解について講義し理解に努めた。質問も多く頂き、参加者の反応から理解につながったと考える。
講演： 個人特性へのアプローチ		平成 29 年 9 月	医療法人 協和会 看護職対象 トピックス研修 千里中央病院研修室	近年の新人看護師に対する理解を目的とし、一昨年行った内容をさらに深め、メンタルが弱い人、偏りが強い人、パーソナリティ―が未熟な人など、それぞれの特徴を中心に具体的な指導について講義を行った。様々な性格や特徴のタイプ分けを考え、例を用いて説明し、参加者の理解と具体的な指導方法の見直しに努めた。昨年同様に参加者の多くがプリセプターであり、新人看護師の理解につながったと考える。

（看護）田中　俊明

教　育　研　究　業　績　書

平成 28 年　3 月　3 日

氏名　田中　俊明　印

研究分野	研究内容のキーワード
家族看護	障害の子どもをもつ父親,父親役割,夫婦の一致,自己効力感

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 看護専門学校非常勤講師 （週 2 回：精神看護学概論・コンサルテーション学）	平成 16 年 4 月 ～17 年 6 月	看護専門学校非常勤講師 精神看護学概論・精神看護学・コンサルテーション学 ・各項目事に教材を作成し講義を実施した。 ・視聴覚教材を活用し、精神学視点から患者理解につとめ精神看護学の特性を特徴づけた ・コンサルテーション学を通して精神学領域の多職種連携や退院支援について事例を紹介しながら講義した。
1）精神看護学概論講義	**平成 29 年 5 月～8**	知識注入型学習から脱却し、学習終了前には、毎回学習評価におけるフィードバックを個々に行う。本科目では、授業内容の評価を学生に言ってもらい次回の講義に活かす。 次回の授業形式を教員・学生相互で意見を出し合い、教からの助言がなくてもほぼ組み立てられることができるうに試みた。
2）　看護学研究法　講義（1 回～15 回　2 単位）	**平成 29 年 5 月～8**	看護領域において、学生が自分の興味や関心に基づいて、学習を深めることを目的とする そのために資料となる先行研究の文献を調べ、収集し、読み込むとともに、文献について討議することによって、更なる理解を深める。また、収集した資料の取り扱い方についての基本的知識を習得する工夫を試みた。
3）精神看護学援助論	**平成 29 年 9 月～1**	教員による一方通行の講義形式の講義形式とはことなる、学生主体となる参加型授業を展開する。 看護研究方法の授業として、研究は何故必要なのか。看護学は環境と絶え間なく相互作用している個々の人間と健康に焦点をあてており、研究・理論・教育の発展が本質に繋がる。この理念をもとにした、学生参加型授業を構築する。

4)**専門看護学演習授業** **SST を通して自己のコミュニケーション技を通して学生間で、分析共有**	**平成 29 年 4 月**	オムニバスにて、「SST」導入計画に伴い、コミュニケーションスキルの向上となる示唆を得るために実施。 5 月オムニバスにて、3 年生対象に、「SST」を導入し、言語コミュニケーションの本質について、考察できる授業をする。 6 月～9 月学生からのレポート及び協力を得た学生からの語りを分析作業。 10 月 11 月知りえたデータの分析後、概念化作業に入り、学生がコミュニケーションスキルを習得できる授業の示唆を得る
2　作成した教科書，教材	平成 23 年 4	心理教育テキスト作成：対象は、病院医療職及び当事者家族に実施する。 ・主に、統合失調症、気分障害（MDI）人格障害・アスペルガー症候群とその当事者家族を対象として作成。 本テキストは、国府台方式に基づいて作成した。 ・当事者家族に「病気・症状に関する知識」「薬物療法などの治療法」「利用できる社会資源」「当事者への病状と症状対処方法と生活の工夫」「当事者家族のストレスマネージメント方法」などの情報伝達講義形式を行い、別にグループワークによる対処技能習得プログラムを行う場とグループワークと同時時間内に合わせて教育プログラムを短時間で行う場があり、相互交流が多いことで家族システムの健康な側面を引出すことができ、相互にエンパワメントが期待でき、比較的短時間で実施できることが、特徴である。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		なし
4　実務の経験を有する者についての特記事項	平成 19 年 4	・精神保健福祉士所得後は、精神・認知症家族の相談業務・障害手帳の申請・自立支援法の申などの相談業務及び介護支援 導入相談など週 2 回 PSW 不在時実施 ・スーパー救急病棟での急性期当事者対象に認知行動療法・SST・薬物依存回復プログラムの実施を行う。
5　その他	平成 23 年 7	東日本大震災にて京都府「心のケアーチーム」の一員として、二次避難場所の福島県会津若松に 精神的サポートと避難場所近隣 病院への治療療継続の調整とサポート任務

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許	平成 14 年 4 月 平成 19 年 4 月	看護師免許 精神保健福祉士免許

	平成 20 年 4 月 平成 26 年 4 月 平成 27 年 1 月	SST（ソーシャルスキルストレーニング） インストラクター認定 認知行動療法講習受講終了 日本心理教育・家族教室ネットワーク学会 インストラクター認定
2　特許等		なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)看護協会研究発表評議委員 2)滋賀県障害者家族会特別講演 3)国試対策委員 4)アセンブリ教員 5)倫理委員会	平成 19 年 4 月 **平成 29 年 11 月** **平成 30 年 4 月** **平成 29 年 4 月～** **平成 30 年 3 月** **平成 29 年 4 月～** **平成 30 年 3 月** **平成 29 年 4 月～** **平成 30 年 3 月**	精神保健福祉士所得後は、精神・認知症家族 の相談業務・障害手帳の申請・自立支援法の 申請などの談業務及び介護支援導入相談など 週 2 回 PSW 不在時実施週 2 回 PSW 不在時実施。 スーパー救急病棟での急性期当事者対象に 認知行動療法・SST・薬物依存回復プログラム の実施を行う。 看護協会堺支部看護研究発表会にて総評者 滋賀県守山市精神障がい者家族会第 40 回総会会記念 演会講演依頼にて講演予定 国家試験対策委員として、4 年生の学習支援とメンタル サポート アドバイザーとしての就職活動および、メンタルサポート チューター制導入により、学生支援に尽力できる。少人 制により、グループ間で教員が介入し、ゼミ形式となり 学生個々で「強み」「弱み」「成長期目標」が共有でき、自 の気づきとなる アセンブリ担当者としての看護学部 4 年生の社会人基 礎力・倫理観の最終段階の達成及び自己実現にむけて 尽力 看護研究方法の授業として、研究は何故必要なのか。 看護学は環境と絶え間なく相互作用している個々の人 間と健康に焦点をあてており、研究・理論・教育の発 展が本質に繋がる。この理念をもとにした、学生参加 型授業を構築する。 人を対象とする研究倫理審査への申請について．太成 学院大学では、 全学的に統一した「人を対象とする研 究」に関する倫理基準を定めるため必要。また，「太 成学院大学における人を対象とする研究倫理指針」を 制定された。また、指針に基づいた研究の実施を推進 し，これにより人を対象とする研究倫理審査の発展が 今まで以上に期待され、今後の学生教育等の指導に寄 与されると考えた。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要

（著書） 1 精神障害の子どもをもつ父親の家族心理教育による役割再構築	単著	平成 27 年 3 月	滋賀医科大学院医学部看護学科修士論文	精神障害者の家族にとって、父親の治療参加は重要にもかかわらず、母親任せになっている現状がある。 父親は、子どもの発病初期にはケア場面から撤退する傾向があり、父親によるケア撤退は、家庭内おける母親の負担は増大になることは明らかである。 父親が、母親任せにしたことで母親が疲弊していく姿に、手立てを講じる決意をして行動したのが、家族心理教育参加であった。 父親が、精神障害の子どもを正面から向き合うことで、母親の精神的支えにもなり、母親に余裕が障害受容にも影響を与えることが明らかになる。 このことから、父親の役割再構築していくことを明らかにすることで、有効な父親支援の一助となり、父親は、妻に対する影響が父親の自己効力との関係が大きく、再構築に影響を受けることが明らかになる。
（学術論文） **（学術論文）** **1 精神障害の子どもをもつ父親の家族心理教育による役割再構築**	**単著**	**平成 28 年 2 月**	**日本精神保健看護学会誌 23 巻 1 号**	上記と同様であり、雑誌投稿規定に準じて凝縮して投稿する
2 電気けいれん療法に代理同意する家族の心理	**単著**	**平成 27 年 12 月**	**日本看護学会誌 第 46 回論文集**	家族は、突然の医師からの治療方針の説明による代理同意はあまりにも時間的余裕がないことや準備性もなく精神科特有の風土・風潮により相談できない決断への苦悩を共有し、常に揺らいでいることを理解し支援することは、患者の権利擁護することにもつながるまた、代理同意する家族を支援していくためには、現代の社会背景に応じた家の個々の理解したうえでの援助を対象とする家族の代理同意は、常に治療の期待と不安との狭間で両価性の思いの中で心理的揺らぎがしょうじていることが、明らかとなる。
3 精神科看護実習前後に学生期待と不安に対する思い関連 した文献検討	**単著**	**平成 28 年 2 月**	**日本看護学会誌 第 47 回論文集**	精神科看護実習において看護学生（以下学生とする）は、精神障害者に対して様々なイメージやそれにともなう実習への期待と不安の両価性の思いを持って実習に臨んでいる。しかし、一方では、精神障害者に対するイメージは、新聞、テレビによるマスコミで報道される事件などに関連した認識と実際に接触したことがなく、想像から膨らんだ負のイメージが身についてしまっている現実がある。また、実際に接触体験がなく親や知人、講義な

				ど他者からの情報でイメージ形成しているとの報告もある。先行研究では、実習前後の意識前後の意識は、実習1週目では､恐怖は肯定から否定へ、親近感は否定から肯定へと変化すると言っている（斎二ら；2006)。 また、指導の工夫が必要でもあると言っている（斎二；2006)。このように精神科実習におけるイメージに関する先行研究を集約し文献検討することで、今後精神科実習前における指導のあり方についての一助となり、学生にとっても有効に学べる機会となることが考えられ意義があると考えた。
4・障害をもつ子どもの父親と なり、妻の影響により父親をする要因 **－父親となり父親をする行為－** **：**	**単著**	**平成 28 年 2 月**	**日本質的心理学会誌** **2016 Vol 7**	近年、精神障害の子どもをもつ家族の現状において、家族の中心的役割多いと推測する父親の治療参加が,重要であるとされている。現状は妻任せになる現状の報告もあり、父親のケア場面の撤退は、母親の負担は増大になることは明らかである。父親は、突然の発病に受け入れがたい葛藤があり、今まで構築していた父親の認識が一気に崩れてしまい、戸惑いを感じていると推測される。戸惑いを感じて仕事に専念していたが、子どもの対応に疲弊している妻の姿を見て支えることの必要さを認識し、何か手立てを講じる決意をする。父親は、精神障害の子ども特に、統合失調症の発病が青年期に多いことから、父親の第 1 子になる年齢 32 歳（厚生労働省人口動態調査；2010)。であることを想定すると、50 代にして始めて障害の子どもの父親となる。さらに、生涯発達での中年期に該当する父親が、青年以上になった子どもと向き合うのに戸惑いがある。しかし、精神障害のなかでも統合失調症は慢性化しやすく、長期的な経過のなかで家族の協力が必須となることが予測される。このように、困難で長期にわたる子育てや支援は母親だけでは無理であり、父親の支えが重要である。子育てをする母の大変さに対する察知、子への愛情を妻と共有することなど、人間ならではの心理機能が、男性に「親をする」ことを推進させると言っている（柏木ら；2011)。今回父親は、妻の疲弊する姿を見て藁をも掴む思いで心理教育に参加し、グループセッションの場で、気づきを通して認識変容が見られ、父親が変化することで、妻との一致した思いが未来への希望となることが、共有できた。30 代で子どもができ初めて父親となり、中年期になって障害の子どもをもつ父親になることを知り受容できづ、逃避していた父親が、妻が疲弊する姿を

				見て、「父親になる」から「父親をする」行為と変化となる要因を明らかにすることで、家族全体の機能や構造が可視化できる一助となり、有効な父親支援となるものと考えた。
5. 精神看護学実習に学生が抱く不安と偏見をもつ心理的特徴を知るための文献検討	**共著**	**平成 29 年 11 月**	**滋賀県立大学紀要** **(人間文化 43 巻 5 号)**	本研究の目的は、精神看護学実習において看護学生がもつ不安や偏見の特徴と、それを指導教員や実習現場の対応を含めてどのように取り扱っているのかを知ることであった。2001 年から 2015 年の間で、医中誌・CiNii・など主要な検索サイトによって抽出された精神看護学実習における学生の不安などについての先行研究 111 件のなかで「不安」「偏見」のキーワードに焦点をあてた 35 件の論文を抽出し、そこから重複等を除いた 23 論文について、文献検討を行なった。その結果 A,【学生個人要因】B,【大学教員要因】C,【社会的環境要因】の 3 要因へとまとめることができた。A は、学生が精神看護学実習において、学びの対象となる精神障がい者に不安や偏見をいだく背景にある、未来への過剰な懸念や、精神障がいについての情報不足、あるいは精神障がい者とのコミュニケーションが不足していることといった、個人が備えている属性についてのものである。次に B は、そうした学生の指導にあたる側である大学教員に関わるものである。すなわち、現在の大学のなかではマンパワーが不足するため、実習指導の役割を十分に果たすことができない現状がある。C は学生が精神障がい者に対するイメージを形成するにあたって、それを阻害する社会的要因についてである。学生の身の回りにおける友人及び家庭環境においては、まだまだ健全な認識に至ることが難しいことがあげられた。 実際の論文記述に即して詳細に分析した結果、これら 3 要因は相互に関連しあっていることが明らかとなった。こうした要因間の関係について考察したことによって、今後の精神看護学実習において不安を感じたり、偏見をもつ学生に対して、より効果的な実習指導をおこなうための一助にする知見がえられたと思われる。
6. 意思能力と医療代理同	**単著**	**平成 30 年 3 月**	**太成学院大学紀要**	我が国では，医療行為に対する同意の規定がなされていないままに，同意能力がないと判断された者に対して，誰が本人に代わって行なうべきかに

意家族の心理動向 -インフォームドコンセント-			(20 巻 37 号)	ついても明白となっていない現状がある。 石田(2014)は,「現実的に家族が行なっているものの,多くの問題を抱えているのが現状」と言っている。 特に, 精神障がい者の場合には,精神保健福祉法により,家族及び成年後見に対して,入院に関しての手続き全般, 代理同意権を委ねられている現状がある。 つまり,代理同意者は入院から退院まで,過剰な責務が課せられる現状は,代理者にとって, 過度な心理的負担が予測される。 また,民法においても「精神障がい者や,成人年齢に達していない場合等の,制限行為能力を欠く者には,親権者や成年後見人の法定代理に代って判断する」と明記されている。 しかし,原則患者本人の同意が基本であるにもかかわらず,代理同意に関しては,今だ,議論がされておらず,本人が置き去りにされている現状がある。この現状を鑑み,権利擁護のうえからも示唆を得ることは意味があり,本研究により代理同意者における心理動向の示唆が得られた。
7. 精神看護学実習の環境要因における学生のレジリエンス －概念分析－	共著	平成 30 年 3 月	太成学院大学紀要 (20 巻 37 号)	近年,看護系大学が増加しつつある現状は, 実習施設の確保が,困難となる場合が少なくなく,複数施設や遠隔地にて実習を行うことがある。そのため短期間で実習施設に適応し,複数の実習施設への通学に伴い,施設の数だけ初めて接する指導者と受け持ち患者を通しての看護援助に戸惑を生じる。 この現状は,学生にとって内的及び外的環境とともにストレスの要因となり,臨地実習に臨む学生は, 精神的にも身体的にも疲労する可能性が高いことであろう。 奥(2011)は,「近年の同世代若者同様、看護学生の基本的な生活能力や,常識,学力の低下が問題視されている」と言っている。つまり,奥が言う近年の学生は,あらゆる分野で低下を問題視しているが,学生にとって, 将来の目標達成のために,跳ね返す力と回復するレジリエンス能力は少なからず存在する。 つまり,看護学実習はストレッスフルな環境である現象を意識し, 問題を共有するには,意識したいことの内容,意味を的確に伝えることのできる概念が重要であり,本研究において,精神看護学実習の環境要因における学生のレジリエンス概念モデルとなる示唆が得られた。

8. 精神障害のある子どもをもつ父親の夫/父親役割再構築過程 **－家族心理教育参加を通して－**	**共著**	**平成 30 年 3 月**	**日本質的心理学会誌**	精神障害の子どもをもつ父親は、生涯発達論によると中年期の父親でもあり、人生における最終課題を残した父親である。しかし、受容できなかった父親も妻の疲弊していく姿をみて、手立てを講じるなかで、紹介を受けて家族心理教育に参加する。参加を通して色々な知識と情報が共有でき、何よりも仲間ができたことが父親にとって一時的な孤立から回避できたと考えられる。また、疲弊する妻の支えになることで、妻より期待と称賛を受けることができ、父親の自己効力感の向上と、妻への信頼回復を得た。さらに、妻との関わりが増すにつれて、子どもの将来についての目標が一致する。夫婦にとっての一致は、子どもに対するケア意識を向上し、より絆を強固になることも示唆された。その反面、父親としてではなく「夫」として、妻との孤立を嫌い、なんとか折り合いをつけたい気持ちをもつことがあり、これが自らの在り方と変えなければという認識に結びつけることが、役割再構築をもたらす。父親が役割を再構築していくプロセスには、こだわりが強く再構築を阻み、子どもを受容できない父親の諦めがある。しかし、この父親/夫は妻に認められたくて、なんとか折り合いをつけでも孤立を嫌い、ジェンダー的要因である「夫」と「父親」の間で、揺らぎながらも役割を再構築できることに期待したい。
（その他） （その他） 1 精神科救急病棟における個室逆戻り現象の要因分析	共著	平成 20 年 10 月	日本精神科救急学会 第 16 回京都会場 演題発表（15－4）	精神科救急病棟は、24 時間の救急体制であり、毎日ベットコントロールを余儀なくされ、救急受け入れ体制を行う責務が与えられている。このような現状の中病状がまだ安定していない患者様に対して，仕方なく個室から総室へとベットコントロールを行う。 このことで，あまりにも早くからでることは，まだ刺激に弱く思考障害が残る病状である。 患者に外的刺激を与えることで，病状悪化となり個室へと逆戻り現象を起こしてしまう。このことにより入院期間が長引かすことは、社会参加を遅らす決果となることは、明らかである。 このことの誘因は、医療者の責任は免れないことは予測される。また，今後も同様の現状は継続されることは危惧され，精神救急体制の改善が急務である。

2.**看護学実習における精神的レジリエンス** **－概念分析－**	**共著**	**平成 29 年 8 月 8 日**	日本看護協会 精神看護学術学会 **第 16 群　第 1 席** **口頭発表**	柳川は「学生は,不安・偏見が大きい場合対象者と向き合う姿勢が消極的となり、看護計画に創意・工夫や自決定ができる働き掛（か）けができない傾向がある」と言っている。 そして、対象者にネガティブイメージを持った学生は、関わりを持っこことで背一杯であると推測する。 このような時期には、学生は実習のなかでの気づきや、自らの気持ちに耳をかたむけていくことが変化をうむことにつながる。 また、そのプロセスを教員が理解し,理解しているという姿を学生に示すことが重要なことであろう。 学生目標を遂行するには,看護学実習に携わる教員が,変化する学生のレジリエンスに対する過程を把握し、状況に応じた対応を教員には,求められることである。 つまり,教員がうまく学生の環境をバランス良く補正ができれば,学生学生のレジリエンスに、影響を与え学生に係わる指導者及び受け持ち患者などの「人的環境」大学履修に係わる「物理的環境」にも影響を与えることになるであろう。

（看護）岡本　祐佳里

（看護）長田　律子

教　育　研　究　業　績　書

平成　30 年　　3 月　　12 日

氏名　　長田　律子　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
看護学・社会学	高齢看護学・在宅看護・社会福祉学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 ・在宅生活の中で看護師として対象を支える難しさややりがいを感じ取る在宅看護論実習の実習指導	平成 24 年 2 月～平成 27 年 3 月	専門学校大阪医専「在宅看護論実習」実習指導教員として在宅療養者や家族の生き方や思いに寄り添った支援を考える難しさや楽しさを実習の場で体感できるように訪問看護ステーションの管理者や指導者と協力して行ってきた。将来は訪問看護師になりたいと言う学生や保健師を目指す学生の育成に貢献してきた。
・基礎看護学方法論の事例を活用した在宅看護概論	平成 24 年 4	専門学校大阪医専「在宅看護概論Ⅱ」科目担当者

Ⅱ（在宅看護の展開）の教授	月～平成 26 年 3 月	として基礎看護学方法論にて利用した看護過程の事例対象が退院し在宅に戻った状況を設定し在宅看護の展開を考える指導を行う。在宅看護の展開を学習する中で退院支援や継続看護の重要性を感じたという発表が多くみられるという成果が上がった。
・健康な高齢者、健康を障がいされた高齢者を 3 側面から理解し看護を実践する老年看護学実習の実習指導	平成 24 年 5 月・9 月/平成 26 年 5 月・9 月	専門学校大阪医専「老年看護学実習」実習担当者として施設実習では、施設で生活する高齢者の特徴を身体面、精神面、社会面から捉える事ができ、生活を支え向上できるような援助が行えるように関わってきた。病院実習では健康を障害した高齢者の特徴を理解し、健康問題を解決するために必要な看護は何かを学生と共に考え、対象にあった看護が実践でき、達成感を得ることができるように指導を行ってきた。
・療養生活を送る対象の生活環境を理解し看護の実際を学ぶ基礎看護学実習Ⅰの実習指導	平成 24 年 7 月/平成 25 年 7 月/平成 26 年 7 月	専門学校大阪医専「基礎看護学実習Ⅰ」の実習指導教員として対象が生活する療養環境を学び、対象にあったコミュニケーションが図れるように指導を行ってきた。
・チームの一員として看護職の機能と役割を理解する統合実習の実習指導	平成 24 年 7 月/平成 25 年 7 月/平成 26 年 7 月	専門学校大阪医専「統合実習」実習指導教員として実習病院の看護師長や実習指導者と協力して学生が委員会活動や看護部以外の部門の見学にできるだけ入れるように調整をし、多職種、他部門の理解を行い多職種連携における看護師の役割を学ぶことができるように指導を行ってきた。
・実際の事例を通し生活者としての対象を捉える在宅看護方法論Ⅱ（在宅看護の実際）の教授	平成 24 年 9 月～平成 27 年 3 月	専門学校大阪医専「在宅看護方法論Ⅱ」科目を担当した。在宅療養者や家族の生活や思いを踏まえた看護ケアの在り方について実際の事例の活用や演習を行い対象の立場に立ってグループ間でお互いに意見を述べ合い考えるように授業の組み立てを行った。最初は「疾患があるからしてはいけない」「障がいがあるからできない」という意見を出し合っている状況であったが、授業が進むにつれ「こんなことが出きる」「それならやるかもしれない」とストレングスの視点を持って療養者をみる大切さに気付く機会となった。
・健康に障がいをもつ対象の基本的欲求を理解し看護を実践する基礎看護学実習Ⅱの実習指導	平成 24 年 11 月/平成 25 年 11 月/平成 26 年 11 月	専門学校大阪医専「基礎看護学実習Ⅱ」実習指導教員として様々な健康状態にある対象について理解し必要な看護は何かを学生と共に考え、対象にあった看護を展開する基礎となる知識と技術、

		看護師としての態度を学ぶことができるように指導を行ってきた。
・専門学校大阪医専におけるケーススタディの指導	平成24年12月～平成25年1月/平成25年12月～平成26年1月/平成26年12月～平成27年1月	専門学校大阪医専において「看護研究」科目の「ケーススタディ」において4名の学生の指導を担当した。担当した症例に対する自己の看護を振り返り、残された課題を明確にすることで学びを深めることができるように指導を行った。また考察をするにあたり看護理論家の理論を再度読む機会を与えることで「看護とは何か」を考える機会を与えるきっかけを作った。
・専門学校大阪医専における在宅看護論国家試験対策講座	平成24年12月/平成25年8月・12月/平成26年8月・12月	専門学校大阪医専における国家試験対策授業を担当（在宅看護論）し、95%以上の看護師国家試験合格率に貢献してきた。
・体験学習やグループワークを取り入れチームで共に考える在宅看護方法論Ⅰ（在宅看護技術）の教授	平成25年4月～平成26年8月	専門学校大阪医専において「在宅看護方法論Ⅰ」科目を担当した。在宅という療養の場の看護ケアの在り方を考えるには療養環境を知る必要があることから大阪府看護協会桃谷センター生活体験館GOKANを利用した体験学習を授業の中で取り入れた。体験学習を行ったことで療養環境を整える重要性やそのための制度活用、対象に合わせた環境の中での看護に興味をもつ機会となった。
・成人期にある対象を3側面から理解し看護を実践する成人看護学実習（慢性期）の実習指導	平成25年5月・9月	専門学校大阪医専における「成人看護学実習（慢性期）」実習指導教員として慢性期にある患者および家族に対し、セルフケア能力が維持向上できるために必要な看護は何かを学生と共に考え、対象にあった看護が実践でき、達成感を得ることができるように指導を行ってきた。
・地域で暮らす対象を支えるチームの中の訪問看護師の役割と機能を学ぶ在宅看護概論の教授	平成27年4月～平成27年7月	藍野大学短期大学部第二看護学科における「在宅看護概論」の科目担当者として超高齢社会における在宅医療と在宅看護の役割とそのしくみについて最新のニュースやドキュメントなどのテレビ番組や近年のデータから資料を作成し学生が看護師を取り巻く社会に興味を持つことができるように授業を組み立て実施した。
・体験学習を取り入れ、事例の生活環境をイメージしながら看護過程を学習する在宅看護方法論の教授	平成27年9月～11月	藍野大学短期大学部第二看護学科における「在宅看護方法論」科目担当者の一人として外部講師2名（訪問看護ステーション管理者、訪問看護ステ

		ーションの支援を受けて両親を看取られた他校看護学校教員）と協力しそれぞれの立場から在宅という療養環境で看護を行う難しさとやりがいが伝わるように授業を進めた。またＡＴＣエイジレスセンターにおける体験学習を取り入れ療養の場をよりイメージできるように授業の組み立てを行った。結果、看護過程では療養の場を考えた分析内容や療養者や家族の価値・信念を支える必要性を述べた分析の記載が多くの学生で見られた。
・藍野大学短期大学における国家試験対策チューター	平成 27 年 5 月～平成 28 年 2 月	藍野大学短期大学部第二看護学科における国家試験チューター制にて 4 人の学生を指導している。こまめな面接と模擬試験後の相談会を実施し国家試験合格に向けて計画的に学習できるようサポートを実施した。
・藍野大学短期大学における看護研究の指導	平成 27 年 7 月～平成 27 年 8 月	藍野大学短期大学部第二看護学科において「看護研究」科目の「症例研究」において 4 名の学生を担当し、担当した症例に対する自己の看護を振り返り、残された課題を明確にすることで学びを深めることができるように指導を行った。また考察するにあたり看護理論家の理論を再度読む機会を与えることで「看護とは何か」「看護の本質とは何か」を考える機会を与え自己の看護観を育て統合実習に向かうきっかけを作った。
・体験学習を取り入れ、事例の生活環境をイメージしながら看護過程を学習する在宅看護方法論の教授	平成 27 年 9 月～11 月	藍野大学短期大学部第二看護学科における「在宅看護方法論」科目担当者の一人として外部講師 2 名（訪問看護ステーション管理者、訪問看護ステーションの支援を受けて両親を看取られた他校看護学校教員）と協力しそれぞれの立場から在宅という療養環境で看護を行う難しさとやりがいが伝わるように授業を進めた。またＡＴＣエイジレスセンターにおける体験学習を取り入れ療養の場をよりイメージできるように授業の組み立てを行った。結果、看護過程では療養の場を考えた分析内容や療養者や家族の価値・信念を支える必要性を述べた分析の記載が多くの学生で見られた。
・在宅生活の中で看護師として対象を支える難しさ、やりがいを感じ看護の在り方を考える在宅看護論実習の実習指導	平成 27 年 5 月～平成 27 年 10 月	藍野大学短期大学部第二看護学科における「在宅看護論実習」実習担当者として在宅療養者や家族の生き方、思いに寄り添った支援を考える難しさ

		や楽しさを実習の場で体感できるように訪問看護ステーションの管理者や指導者と協力して行い、地域における看護活動を目指す学生の育成に貢献してきた。また退院支援の重要性を実習の中で感じられるように訪問対象を指導者と調整を行うことで継続看護の大切さを理解できるように実習指導を行った。
・チームの一員として看護職の機能と役割を理解し看護師としての自分をイメージする統合実習の実習指導	平成 27 月 11 月	藍野大学短期大学部第二看護学科における「統合実習」実習担当者として実習病院の看護師長や実習指導者と協力して学生が委員会活動や看護部以外の部門の見学にできるだけ入れるように調整をし、多職種、他部門の理解を行い多職種連携における看護師の役割を学ぶことができるように指導を行ってきた。またリーダーへの申し送りの実施などを経験させ、リアリティショックの軽減にむけての指導を行った。
・対象の基本的ニードを理解し看護を実践する基礎看護学実習Ⅱの実習指導	平成 27 年 12 月	藍野大学短期大学部第二看護学科「基礎看護学実習Ⅱ」実習指導教員として受け持ち患者の基本的ニードを捉え必要な看護について共に考え、対象看護を展開することができるように指導を行ってきた。
・藍野大学短期大学における在宅看護論国家試験対策講座	平成 28 年 1 月・2 月	藍野大学短期大学部第二看護学科国家試験対策授業を担当（在宅看護論、社会保障）看護師国家試験平成 28 年 96%の合格率に貢献した。
・地域で暮らす対象を支えるチームの中の看護師の役割と機能を学ぶ広域発展看護学概論の教授	平成 28 年 4 月～平成 28 年 7 月	天理医療大学医療学部看護学科における「広域発展看護学概論」の科目を担当する。訪問看護ステーション管理者の経験を生かした訪問看護制度の説明や地域包括支援センターの仕組みなどを講義する。それらの資料については実習や国家試験対策においても使用できるように作成している。毎回の講義のはじめには前回の講義の国家試験に関連する質問を学生に対し行う振り返り学習を実施、国家試験合格を見据えた授業展開を実施した。
・実際の事例を通し生活者としての対象を捉える広域発展看護学実践論Ⅱの教授	平成 28 年 4 月～平成 28 年 7 月	天理医療大学医療学部看護学科における「広域発展看護学実践論Ⅱ」の科目を担当している。訪問看護師や訪問看護ステーションで働く理学療法士をゲストスピーカーに招き、学内演習を取り入れ療養者の在宅生活をイメージできるように講義の組み立てを行った。また認知症サポーター養

		成講座を授業内に取り入れ天理市地域包括支援センターの方々や学生も一緒に寸劇などで認知症についての理解を促す試みを実施した。認知症に対する印象の変化が実施前後のアンケートに見受けられ患者理解に向けての効果的な学習となった。
・対象を支えるチームの中の訪問看護師の役割と機能を学ぶ広域発展看護学実践論Ⅰの教授	平成28年10月～平成29年2月	天理医療大学医療学部看護学科における「広域発展看護学概論」の科目責任を担当した。複雑な介護保険や訪問看護制度などの保険や制度の理解ができるように事例やクイズを取り入れるなどの工夫を行った。また資料についても実習や国家試験対策においても使用できるように作成した。毎回の講義のはじめには前回の講義の国家試験に関連する質問を学生に対し行う振り返り学習を実施、国家試験合格を見据えた授業展開を実施した。
・事例の生活環境をイメージしながら看護過程を学習する広域発展看護学実践論Ⅲの教授	平成28年10月～平成29年2月	天理医療大学医療学部看護学科における「広域発展看護学実践論Ⅲ」の科目責任を担当した。在宅療養者や家族の生活や思いを踏まえた看護展開を実施でき、且つ訪問看護ステーションでの実習を踏まえる目的で訪問看護ステーションのカルテから情報収集を行うように資料を作成した。また老年看護学領域の教員と連携し、統合分野としての看護過程の展開ができるよう教授を行った。
・地域で働く看護師をイメージするパブリックヘルスケア論の教授	平成28年4月	天理医療大学医療学部看護学科における4年生選択科目「パブリックヘルスケア論」の科目を担当した。公衆衛生学の教員や保健師と協力し地域で働く看護師の役割や機能が学べるように講義の組み立てを行った。
・卒業後の看護実践への影響を狙う看護実践能力の探究の教授	平成28年10月～平成28年12月	天理医療大学医療学部看護学科における4年生必修科目「看護実践能力の探究」の科目を担当した。シュミレーション授業であるこの科目は、最終評価として事例展開をもとに多重課題場面を発表する。学内演習ではグループの学生同士で話し合い主体的な学びができるように演習や講義を組み合わせて進めた。
・在宅生活の中で看護師として対象を支える難しさや喜びを感じ取る広域発展看護学実習Ⅱの実習指導	平成28年5月～平成28年8月	天理医療大学医療学部看護学科における「広域発展看護学実習Ⅱ」の実習担当者を行った。在宅で生活する対象の特徴を身体面、精神面、社会面、環境面から捉える事ができ、健康問題を持ちなが

		ら療養する本人と家族を支える看護とは何かを学生と共に考え、対象にあった看護が実践でき、達成感を得ることができるように指導した。
・地域で暮らす対象を支えるチームの中の看護師の役割と機能を学ぶ広域発展看護学実習Ⅰの実習指導	平成 28 年 10 月～平成 28 年 12 月	天理医療大学医療学部看護学科における「広域発展看護学実習Ⅰ」の実習担当者を行った。外来看護、地域連携室、入院案内センター、地域包括支援センターなどで実習を行い、地域で暮らす対象を支えるチームの中の看護師の役割と機能を学ぶことができるように指導を行った。
・チームの一員として看護職の機能と役割を理解する統合実習の実習指導	平成 28 月 11 月	天理医療大学医療学部看護学科における「総合実習（広域発展看護学領域)」の実習担当者として２週間の訪問看護ステーションでの実習を指導した。在宅における看護過程の展開と実施を行い、在宅という環境での援助の難しさを学び、看護技術の向上につなげるよう指導を行った。
・天理医療大学医療学部看護学科における看護研究Ⅱの指導	平成 28 年 4 月～平成 29 年 2 月	天理医療大学医療学部看護学科における「看護研究Ⅱ」科目において 4 年生 3 名の学生を担当した。こまめな指導や相談会を実施し学生の学習をサポートした。
・天理医療大学医療学部看護学科における看護研究Ⅰの指導	平成 29 年 1 月～平成 29 年 3 月	天理医療大学医療学部看護学科における「看護研究Ⅰ」科目において 3 年生 4 名の学生を担当した。こまめな指導や相談会を実施し学生の学習をサポートした。
・天理医療大学医療学部看護学科における 4 年生チューター	平成 28 年 9 月～平成 29 年 3 月	天理医療大学医療学部看護学科における 4 年生チューターとして学生達を指導していた。こまめな面接を実施し学生の学習をサポートした。
・天理医療大学医療学部看護学科における国家試験対策チューター	平成 28 年 12 月～平成 29 年 2 月	天理医療大学医療学部看護学科における国家試験対策チューターとして 11 月時点で合格圏内に達していない学生達を指導していた。こまめな面接と模擬試験後の相談会を実施し学生の学習をサポートし担当した学生全員を合格に導いた。
・病棟管理の実際を学び看護師としての自覚と責任感を養える総合看護学実践実習の実習指導	平成 29 年 7 月	太成学院大学看護学部における「統合看護学実践実習」実習担当者として指導を行った。看護師長や実習指導者と指導の方向性を日々話し合い協力して学生が看護師の役割を学ぶことができるように指導を行い、最終カンファレンスでは看護師としての自覚と責任感を実感したという発言が見られた。
・老年期の特徴を踏まえ生活の質を高める援助方法を理解する老年看護学援助論の教授	平成 29 年 7 月	太成学院大学看護学部「老年看護学援助論」の演習においてペーパーペイシェントである事例を

		実際の患者として疾患や生活背景を踏まえた看護計画の実施が出来るように学生の気づきや思考過程を整えるサポートを行い、対象の状況を捉えた援助の発表を学生は行うことが出来た。
・保健医療福祉の現状を知り高齢施設での生活の場を意識した看護の実践を行う老年看護学実践実習Ⅱの実習指導	平成 29 年 7 月	太成学院大学看護学部「老年看護学実践実習Ⅱ」において施設主催の祭りの引率指導を行った。祭りが高齢者と家族にもたらす影響を知り、多くの高齢者と関わることで高齢者への理解を進めることが出来る実習となった。
・太成学院大学看護学部におけるアドバイザー活動	平成 29 年 8 月～平成 30 年 3 月	太成学院大学看護学部における 2 年生 B ユニットアドバイザーとして学生達と関わってきた。こまめな面接やメールでのやり取りを行い、学生の気持ちに寄り添い大学生活をサポートした。
・老年期を理解し高齢者看護の基本を学ぶ老年看護学概論の教授	平成 29 年 9 月～平成 30 年 1 月	太成学院大学看護学部「老年看護学概論」において高齢者の置かれている社会背景、や社会保障の問題、虐待や身体抑制について訪問看護での経験を踏まえ学生に教授を行った。
・老年期にある人の生活障害や疾患、価値観や生き方を踏まえた看護を考えることが出来る老年看護学実践実習Ⅰの実習指導	平成 29 年 9 月～平成 30 年 2 月	太成学院大学看護学部「老年看護学実践実習Ⅰ」実習担当者として入院している高齢者の疾患や身体面の特徴を捉えるだけでなく、生きてこられた人生や価値観を理解し関わる看護のする大切さ学生が感じられるように指導に関わってきた。学生が対象にあった看護が実践でき、達成感を得ることができるように指導を行ってきた。
・太成学院大学看護学部における国家試験対策チューター	平成 29 年 9 月～平成 30 年 2 月	太成学院大学看護学部における国家試験対策チューターとして学生達を指導していた。こまめな面接と模擬試験後の相談会を実施、またメールでのやり取りを通じて学生の学習をサポートした。
・健康に問題を持つ対象の基本的ニードを理解し生活過程を整える看護を実践する基礎看護学実践実習Ⅱの実習指導	平成 30 年 2 月	太成学院大学看護学部「基礎看護学実践実習Ⅱ」実習指導教員として学生が受け持ち対象者のニードを捉え必要な看護について共に考え、看護を展開し必要な看護ケアの実践をすることができるように指導を行ってきた。
2　作成した教科書，教材 ・専門学校大阪医専における在宅看護方法論Ⅱ（在宅看護の実際）資料	平成 24 年 9 月～平成 27 年 3 月	在宅看護過程に用いる事例紹介の教材を実際に訪問看護業務で使用している書類や訪問看護ステーション勤務時の資料等を用いて作成する。
・専門学校大阪医専における在宅看護方法論（在宅看護の実際）教材	平成 24 年 9 月～平成 27	訪問看護業務で使用している書類や訪問看護ステーション勤務時の資料等を用いて作成した。

	年3月 平成27年9月～平成28年11月	
・専門学校大阪医専における在宅看護論国家試験対策講座教材	平成24年12月/平成25年8月・12月/平成26年8月・12月	専門学校大阪医専における国家試験対策授業を担当（在宅看護論）の資料として看護師国家試験の過去問から高正答率問題集の作成、過去5年の問題から頻出問題の解説教材を作成した。
・藍野大学短期大学における在宅看護論国家試験対策講座教材	平成28年1月・2月	藍野大学短期大学部第二看護学科国家試験対策授業（在宅看護論、社会保障）の資料として看護師国家試験の過去問から高正答率問題集の作成、過去5年の問題から頻出問題の解説教材を作成した。
・天理医療大学医療学部看護学科における広域発展看護学実践論Ⅱ教材	平成28年4月～平成28年7月	訪問看護業務で使用している書類や訪問看護ステーション勤務時の資料等を用いて作成した。
・天理医療大学医療学部看護学科における広域発展看護学実践論Ⅱ認知症サポーター養成講座教材	平成28年5月	天理市地域包括支援センターの看護師の方々と共に話し合い認知症サポーター養成講座に向けての事前学習、認知症サポーター養成講座講義内容資料の作成を行った。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他 ・藍野大学短期大学部第二看護学科における活動 「入試委員会副委員長」 ・天理医療大学における活動 「安全委員会委員」 ・天理医療大学における活動 「入試委員会委員」	 平成27年4月～平成28年3月 平成28年4月～平成29年3月 平成28年4月～平成29年3月	 入試に関する活動（学生募集、オープンキャンパス、入学試験、入学前教育）に関わる委員会において委員長を補佐し事務部との連絡調整等を実施した。 天理医療大学安全委員会において「天理医療大学防災マニュアル」の作成を委員会メンバーと共に行い完成にさせ、大学の防災対策に貢献した。 天理医療大学入試委員会において入試に関する活動（入学試験、センター試験）の運営、実施を委員会メンバーと共に行い、大学の募集活動に貢献した。

・天理医療大学における活動 「学生委員会委員」	平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月	天理医療大学学生委員会において学生の学内活動（学内美化活動、学園祭活動など）のサポートを委員会メンバーと共に行い、学生の学内活動を通した学びに貢献した。
・天理医療大学における活動 「人権委員会委員」	平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月	天理医療大学人権委員会において人権擁護活動の一環として人権擁護ポスターと標語の募集活動を行い、大学の人権啓発活動に貢献した。
・太成学院大学看護学部における活動 「オープンキャンパス委員」	平成 29 年 9 月～平成 30 年 3 月	太成学院大学オープンキャンパス委員会においてオープンキャンパスの運営と実施を委員会メンバーと共に行い、学生募集活動に貢献した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 正看護師 養護教諭１種 修士（社会福祉学） 認知症ケア指導管理士	 平成5年4月 平成8年3月 平成 27 年 3 月 平成 28 年 9 月	 日本福祉大学大学院社会福祉学研究科
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 セコム医療システム(株)主催・セコム訪問看護ステーション「訪問看護セミナー」企画、運営、セミナー司会担当	 平成 19 年 8 月～平成 23 年 3 月	 セコム訪問看護ステーション看護部において全国での訪問看護セミナーを企画、全国各地の看護大学の在宅看護・老年看護を専門領域の教員と協力し開催、参加した多くの看護大学生に対し在宅看護や退院連携の重要性を伝えた。
第 18 回　阪大フォーラムー患者の QOL をはかる病院・在宅の担い手　パネリスト	平成 20 年 3 月	病院主治医、病棟看護師、連携室のソーシャルワーカーらと共に訪問看護師としてパネリストの一員に参加した。事例患者の退院支援時の状況から訪問看護師として率直に感じたことや退院後の本人と家族の状況や思いと行動の変容、在宅医療や福祉の支援について述べ、早期の退院支援の必要性、病院と在宅医療のこまめな連携の重要性、本人の望む生き方を支援していく重要性を伝えた。
千里金蘭大学在宅ケア論講演（於千里金蘭大学）	平成 21 年 11 月	在宅看護の実践者として千里金襴大学の学生に対し講演を行った。訪問看護制度の紹介を行うと

		共に事例患者と家族に対する訪問看護の支援について説明を行い、在宅死を取り巻く医療と今後求められる看護について講演した。
・セコム訪問看護ステーション看護部管理者フォーラム　セコム〇〇訪問看護ステーションにおける在宅死を支える看護の検証報告	平成 22 年 9 月	「エンドステージに必要な看護の視点（セコム訪問看護部作成）」を用いて実施した看護の報告
・「共同退院支援勉強会」企画、運営	平成 21 年 2 月～3 月	セコム〇〇訪問看護ステーション管理者としてステーションのスタッフとともに地域の病院の地域連携室と共同で勉強会を開催する。入院～在宅を通しての退院支援の在り方について病院スタッフと訪問看護師が学習する場を作った。
・アクシデント報告担当	平成 22 年 9 月～平成 23 年 11 月	セコム訪問看護部西日本統括所長としてアクシデント報告を回収調査、リスクマネジメントにおける指導を行い事故の減少に貢献してきた。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 学位論文　修士 「福祉医療系専門学校における多職種間の連携教育に関する研究－福祉と医療の連携教育を受けた卒業生の実践への影響－」	単著	平成 27 年 3 月	日本福祉大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻修士論文	福祉医療系専門学校における福祉系学科と医療系学科の連携教育の現状の調査を実施し、実践校の協力を得て福祉系学科と医療系学科の卒業生に対し専門学校という環境で受けた連携教育が実践にどのように影響を与えているかを調査分析し、連携教育の在り方について考察を行い、福祉医療系専門学校における今後の連携教育の在り方、福祉と医療における基礎教育機関における連携教育の在り方について述べている。
2　報告「福祉医療系専門学校における連携教育の現状―実施校へのインタビュー調査から―」	単著	平成 30 年発行予定	太成学院大学紀要	全国の連携教育を実施している福祉医療系専門学校の連携教育の現状を把握することを目的とした。福祉系学科と医療系学科があり連携教育を目的に合同授業

				や合同演習を行っていることを条件とした。対象校は6校であった。学校への訪問調査により専門学校のカリキュラム構成では学科間の時間調整が困難であることや，基礎教育の学習過程に沿った連携教育の継続を難しくしていると考えられた。
3　論文「福祉医療系専門学校における連携教育に関する研究―卒業生へのインタビュー調査を通して―」	単著	平成30年発行予定	太成学院大学紀要	専門学校で連携教育を受けた卒業生が，連携教育の成果をどのように実感しているか明らかにし，改善すべき課題を探ることを目的とし医療系専門学校の卒業生に半構造化インタビュー調査を実施した。卒業生は連携教育を通じて他職種の専門性への関心を持ち，チームワークの重要性を実感していた。しかし他職種への理解が不足している部分があり、背景には、継続的，横断的，包括的な連携教育の体系が取れていない現在の専門学校の連携教育の課題が明らかとなった。
（学術論文） （その他） 1学位論文　修士 「福祉医療系専門学校における多職種間の連携教育に関する研究－福祉と医療の連携教育を受けた卒業生の実践への影響－」	単著	平成 27 年 3 月	日本福祉大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻修士論文	福祉医療系専門学校における福祉系学科と医療系学科の連携教育の現状の調査を実施し、実践校の協力を得て福祉系学科と医療系学科の卒業生に対し専門学校という環境で受けた連携教育が実践にどのように影響を与えているかを調査分析し、連携教育の在り方について考察を行い、福祉医療系専門学校における今後の連携教育の在り方、福祉と医療における基礎教育機関における連

				携教育の在り方について述べている。
2　報告「福祉医療系専門学校における連携教育の現状―実施校へのインタビュー調査から―」	単著	平成 30 年発行予定	太成学院大学紀要	全国の連携教育を実施している福祉医療系専門学校の連携教育の現状を把握することを目的とした。福祉系学科と医療系学科があり連携教育を目的に合同授業や合同演習を行っていることを条件とした。対象校は 6 校であった。学校への訪問調査により専門学校のカリキュラム構成では学科間の時間調整が困難であることや，基礎教育の学習過程に沿った連携教育の継続を難しくしていると考えられた。
3　論文「福祉医療系専門学校における連携教育に関する研究―卒業生へのインタビュー調査を通して―」 :	単著	平成 30 年発行予定	太成学院大学紀要	専門学校で連携教育を受けた卒業生が，連携教育の成果をどのように実感しているか明らかにし，改善すべき課題を探ることを目的とし医療系専門学校の卒業生に半構造化インタビュー調査を実施した。卒業生は連携教育を通じて他職種の専門性への関心を持ち，チームワークの重要性を実感していた。しかし他職種への理解が不足している部分があり、背景には、継続的，横断的，包括的な連携教育の体系が取れていない現在の専門学校の連携教育の課題が明らかとなった。

（看護）田山地　麻里

教　育　研　究　業　績　書

平成　　３０年　　3月　　１９日

氏名 田山地　麻里　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
公衆衛生活動	保健活動・生活習慣病

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ①　看護学生への授業 「ヘルスプロモーションによる住民参加型のまちづくり計画策定」	2003～2015	①県立看護大、医科大学看護学部学生への授業 ・小・中学生、20 代、30 代、40 代へのグループインタビューや市民アンケート（3，500 名対象）を企画・実施後、分析・評価を行った。また、市民参加型のまちづくり活動を実践するために、国の健康日本２１計画策定方針を基軸に、ヘルスプロモーションによる住民参加型のまちづくり計画策定を行ったことより 2 大学より講義依頼あり。学生には市総合保健計画策定のプロセス及び保健事業をモデルに学校指定の教科書に沿って講義・グループワークを実施した。 ・地域包括ケアシステムについて これからの医療政策の一環としての医療介護総合確保推進法としての地域包括ケアシステムの構築を目指して各分野が連携して取り組んでいる現状についての講義依頼が担当部署にあり。動向や実際の取り組み事例について、学校指定の教科書に沿って講義・グループワーク・発表を実施した。
②市立小学校での生活習慣病予防授業	2013～2016	②小学５年生を対象に学校での授業の一環として生活習慣病予防の授業を実施。また、事前に希望者に血糖自己測定を行い、2 型糖尿病予防の早期発見と生活習慣改善のための動機づけとして学校・学校医・保健所・学校保健課と連携して実施した。H26～継続事業（公衆衛生学会にて「小学校での生活習慣予防教育において血糖自己測定を用いる有用性に関する研究」にて発表）
③専門看護学演習（在宅看護援助論）	2017	③看護学実践実習前の準備として専門看護学演習にて訪問時のマナーやバイタルチェックをグループ毎に実施。教員の助言の下実施したところ、実施後の評価では、相互に学べており、社会人基礎力でも実力が伸びていた。ほとんどの学生はこれらの演習の成果が秋学期の実習に反映できていたが、拘縮のある利用者さんのバイタル測

健康教育・講座（市民対象）		定が出来ない、緊張から挨拶が出来ない等で指導者から指摘を受ける学生がいた。昨年度に比べ、在宅領域の単位を取得出来なかった学生の数は減少している。個々の学生が自信を持って実習に取り組めるよう指導方法について再検討していく。
①個別健康教育（厚生労働省）高脂血症講座	2001～2007	①厚生労働省指定のカリキュラムに沿い特定健診受診後の個別健康教育を実施。 半年間の集団及び個別相談・教育にて、高脂血症対象者が改善。半年後のフォローを実施。 骨粗鬆症予防教室も開催。生活習慣改善の諸問題が浮き彫りになり、その分析・評価を行い、次年度の改善に繋いだ。 ⇒３②
②いきいきママの子育て学級（企画・実施） （子育てママの健康相談・健康講座）	1995～	②担当者として企画・運営 核家族社会の中でも子育て中の母親が育児や健康づくりについて学べる体制（保育あり）を整えた子育て講座を実施。卒業したママ同士の交流あり、孤立防止やママの生きがいづくりとなった。
③小・中学生への健康教育（麻薬・ドラック等薬物対策・タバコ・おさけ対策・生活習慣病予防講座）	2000～	③担当者として企画・実施 毎年依頼あり。ワーキンググループでマニュアルを作成し、ＰＰ、ＤＶＤ等を作成。学校に出向いて授業の一環として実施。 実施後のアンケートや学生の声から、たばこや薬物は絶対やりたくないと思った」との声多く、早期教育が抑止力に繋がると考える。煙草対策については、既に吸っている学生にも効果があった。
④県立高校（普通・夜間・定時制）への性教育講座	2000～	④担当者として企画・実施 庁内ワーキンググループでマニュアルを作成し、ＰＰ、ＤＶＤ等を作成、学校に出向いて授業の一環として実施。 講義終了後も沢山の質問、相談があり、養護教諭からタイムリーな教育の必要性の声を伺う。
⑤保育園・幼稚園保護者への講座 （子どもの発達と保護者の関わり）	2000～	⑤園長より子どもの発達について、保護者の子どもへの関わりについて、生活習慣についての講

		座依頼あり実施。子どもの代弁、発達障害の可能性のある子供に対する関わり方など、園長の立場でなかなか言えない部分を専門的な立場で伝える機会となることから、毎年依頼あり。
⑥健康づくり大学の企画・運営 （メンタルヘルス・死生観・食のまちづくり・ アロマと健康・自己開示・環境とまち等）	2001～	⑥住民参加型まちづくりの実現に向けてコーディネーターである順天堂大学の島之内教授を学長に健康づくり大学を開校し、各分野の実践者に講師として参加してもらい、参加者にもまちづくりの実践者になってもらうもの。 受講終了者が計画策定のメンバーや評価委員になるなど、積極的にまちづくりに参画いただいた。
2　作成した教科書，教材 ①　学校指定の教科書 ②　厚生労働省指定のテキスト「高脂血症予防」	 2003～2015 2005～2007	 「ヘルスプロモーション」「地域包括ケアシステム」テキスト、GW、体験型学習
3　教育上の能力に関する大学等の評価 ①　継続して依頼あり ②　効果及び要因を分析したため論文にて発表	 002003.3	 単著 生活習慣改善の諸問題（慶應義塾大学紀要2003．3）
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
看護師	S59.4.	看護師
保健師	S60.4	保健師
助産師	S60.4.	助産師
養護教諭（２種）	S60.4	養護教諭（２種）
衛生管理者	S60.4	衛生管理者
受胎調節実地指導員	S60.4	受胎調節実地指導員
思春期保健相談員	H12.4	思春期保健相談員
介護支援専門員	H11.	介護支援専門員

文学部（Ｉ類　哲学・心理学・文学）学士 人間関係学修士	H15.3 H17.3	文学部（Ｉ類　哲学・心理学・文学）学士 人間関係学修士
２　特許等 特になし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 市町村保健事業を実施 農業者年金受給者健康講座講師（毎年）	S60～H11	６５歳に該当する年度に農業者年金受給者を対象に健康講座を実施。生活習慣病予防について講義。
産業保健関係担当（主査） メンタルヘルス研修の企画・実施	H22～24	職員（約 3000 名）対象のメンタルヘルス研修を企画・実施。精神科医師（嘱託医）と連携し、役割分担。講義またはグループワークやＰＰによる演習。終了後アンケートでは、初めて受けた職員の反応が大きく、理解に繋がっており、何かあったときに気軽に相談できると好評であった。（正職員、嘱託職員、それぞれに実施）
保健センター係長（センター管理） 防災訓練時講師	H25～27	自治区主催の防災避難訓練にて避難時の対応や窓口紹介など、健康管理面から講話
地域包括支援センター主催研修講師		地域包括ケアシステムに関する都道府県の動きや国のねらいなどについて講話
H28 年　医療介護連携課主幹として地域包括ケアシステム構築に向けた推進事業担当		所内における各種会議、全体研修会、保健・医療・福祉等各団体の連携会議における研修会を企画・開催
４　その他 ※（H12～20） 福祉のまちづくり条例策定委員、 日本ヘルスプロモーション学会理事 健康なまちづくりネットワーク会議委員 市総合保健計画策定プロジェクトチーム委員 健康づくり大学事務局 （H21～28） 大型台風による避難所被災者支援（避難所）、 口蹄疫災害派遣（消毒・負傷者支援・被害調査） 口蹄疫によるメンタルヘルス対策、研修の実施 東北大震災被災者支援派遣（避難所）		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　住民参加型保健活動 2　地域づくり型保健活動の展開 3　みやざき健康読本	 共著 共著 共著	 2004．1 2005．1 2004．1	 社会法人全国保健センター連合会　Monthly 保険センター４ 順天堂大学 HP ﾘｻｰﾁ center（国際シンポジウムさくら）WHO 指定研究協力機関 宮崎市	 ヘルスプロモーションの視点に立った住民参加型の保健活動の展開方法についての対談 ヘルスプロモーションの視点で策定した総合保健計画の策定過程と展開 市民協働で作成した健康づくり読本
（学術論文） 1 生活習慣改善の諸問題 2 アロマセラピーによる心身の相関関係について 3 ｵｰﾄﾚﾌﾗｸﾄﾒｰﾀｰ導入後の3歳児健診における視覚検査の結果について	 単著 単著 共著	 2003．3 2007．3 2012．6	 慶應義塾大学紀要 人間総合科学大学紀要 Welchallyn．Japan	 生活習慣を改善する際の問題に関する研究 アルマセラピーの心身の相関関係を生理学的、統計的に分析 保健所等保険予防関係業務発表会にて発表。最優秀賞取得
（その他） :住民参加型の保健活動と健康づくり総合計画 学校での生活習慣予防教育において血糖自己測定を用いる有用性に関する研究	 単著 共著	 2003．11 2015．11	 日本公衆衛生学会誌 日本公衆衛生学会誌	 自由集会にてシンポジストとして参加 小学校での生活習慣予防教育において血糖自己測定を用いる有用性に関する研究ポスター発表
:				

（看護）熊谷　桂子

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 12 日

氏名　　熊谷　桂子　　印

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
社会医学，看護学	疫学，基礎看護学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1）国家試験対策講座の実施	平成 21 年 4 月 ～平成 22 年 3 月 平成 27 年 4 月 ～平成 29 年 3 月	基礎看護学分野の国家試験頻出問題を中心としてリメディアル授業を担当した．過去の出題傾向に沿って基礎知識の復習～重要箇所の再確認をし，特に看護技術における根拠については確実に理解し得点に繋がるよう様々な文献を用い，学生にとって親しみやすく理解しやすい資料を作成し，授業を実施した．国家試験合格率は 98～100%であり，指導に携わった基礎看護分野の得点率は約 90%と高い結果を残している．
2）学生の理解度に応じた授業構成	平成 21 年 4 月 ～平成 22 年 3 月	「公衆衛生学」講義において，社会環境の状況と変遷を捉え，健康課題に着目し看護職者としてどのように対応すべきか，具体例やカンファレンス等を交えながら実践の場でも活かしていけるよう指導した．また，学生が敬遠しがちな疫学の基本的知識については，学生個々の理解度をその都度確認しながら進め，論文を読む際の基礎的な内容，臨床に出てからの研究にも抵抗なく取り組めるような段階まで理解できるように指導した．
3）学生参加型の授業の取り組み	平成 22 年 4 月 ～現在に至る	生活援助技術・診療補助技術の授業では，理解度に応じた内容で進めるだけでなく，学生が主体的に授業参加できるよう，講義による学びと演習での体験を連動させて実施した．演習では事例を用いることで看護の対象となる人に考えを常に巡らせるよう意識し，より良い看護援助に繋げるための工夫や配慮について学生間で意見交換し，学びを深められるようグループカンファレンスの時間を有効活用した．
4）臨床実習における学生指導	平成 22 年 4 月 ～現在に至る	基礎実習は1年生にとって初めての臨床実習であるため，学生と良好な関係性を構築し，安心して実習に臨んでもらえるよう取り組んだ．2 年次の実習では看護過程の展開の習得を目的とし，学生にとってハードルの高い実習となるため，学生の思考を整理しながら個々のレベルに応じて段階

		的に進め，学生が理解できた喜びを感じ取れるような指導を心掛けた．4年次の統合実習では看護管理の講義内容と実践が結び付くよう臨地での説明，指導を細やかに実施した．養護実習は学生が単独で臨むため，特に事前指導を丁寧に実施し，実習がスムーズに進むようサポートした．
5）学生の技術自己学習のサポート	平成22年4月 ～現在に至る	看護学生は講義の空き時間を利用し技術練習を実施することが多いが，学生同士の練習だけでは課題に気付かず上達しづらいことがあるため，自己学修を促し，授業以外にも個別対応で指導を行っている．自己学習の時間帯に指導を受けた学生は技術の上達が早く，また，教員にとっても学生の理解度，技術習得度が把握できるため，双方にとって良い効果をもたらしている．
2　作成した教科書，教材		
1）生活援助技術デモンストレーションDVD作成（学内用）	平成23年4月 ～平成24年3月	生活援助技術のデモンストレーション動画を作成した．当時市販されていた教材DVDでは細かな動きが確認しづらいものや，内容に一長一短があったが，学内の環境に合わせて作成することにより，学生にとって伝わりやすいものとなった．「繰り返し見て確認，練習できる」「具体的な説明に沿って動きを見られる」と学生の反応は高評価であり，具体的に視覚化し伝えることで理解もより高まっていた．
2）演習指導の手引き（学内教員・非常勤講師用）	平成24年4月 ～平成29年3月	演習指導は非常勤講師を含む複数の教員で担当するため技術や指導内容に差異が生じる場合がある．これを防ぎ，学生に対し全教員が統一した指導を実施できるよう生活援助技術および診療補助技術の指導要領を作成した．演習目標に沿って細部まで具体的に方法を統一することにより学生の混乱がなくなり，技術習得度が上昇した．
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）学生による授業評価	平成22年4月 ～現在に至る	担当科目全てにおいて毎回，学生が行う授業評価アンケートの点数は平均を上回っている．特に「学生の理解度に応じた説明」と「明確な資料提示」については5点満点中4.5点以上を維持しており，安定した授業評価を得ている．実習指導評

		価についても各項目の点数は常に 4 点以上あり，中でも「学生が安心して実習に集中できる環境調整」では高い評価を得ることができていた.
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）教育実習および養護実習における学生指導	平成 3 年 4 月 ～平成 13 年 3 月	教育実習・養護実習において，小児の成長発達，養護教諭の役割や職務に関する講義，救急処置の演習指導を担当した．幼児期の心身発達の特徴，起こりやすい怪我や病気とその対応等について，実例を交えながら学生が理解しやすい内容にまとめ，指導した.
5　その他 なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 看護師免許 養護教諭二種免許	平成 2 年 5 月 8 日 平成 10 年 6 月 13 日	
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）実習委員会	平成 22 年 4 月 ～平成 27 年 3 月	基礎・領域実習のスケジュール調整，病院との調整，学生配置の検討を主に担当し，全実習が滞りなく進むよう体制を整えた．学生配置については，初学者が臨地に出向く基礎実習では特に慎重に検討する必要があるため，基礎領域の教員がグループ編成することによりグループダイナミクスが活きるケースが多かった.
2）非常勤演習助手（TA)の技術指導	平成 22 年 4 月 ～現在に至る	技術演習に参加している TA の看護技術には，その方法やレベルに開きがあり，学生が混乱することがあるため，各単元の演習前には TA の技術指導を行い，一定のレベルに引き上げ，学生に不安が生じないように努めた．技術指導を行うことで教育の統一化を図ることができ,TA にとっても自信に繋がるという相乗効果が得られている.
3）高大連携促進のための体験型授業	平成 26 年 3	高校 1 年生約 50 名を対象に，「呼吸器・循環器

	月	系のヘルスアセスメント」体験授業を実施した．看護職に少しでも興味を抱いている生徒に，大学で学ぶ授業をより伝わりやすくアレンジし，関心を高めてもらえるよう工夫した．同時に，看護師の役割については臨床での事例を取り上げ，高校生でもイメージしやすい授業設計に整えた．その後のアンケート結果では，授業を通して看護師に関心を持てた，という声が寄せられ，大学への入学を希望する生徒が昨年度に比して増加した．
4）国家試験・就職委員会委員	平成27年4月 ～現在に至る	国家試験対策の計画，実施にあたった．学生の国家試験委員と連携を密に取りながら，効果的な模試の実施や学習方法について検討，導入した．その結果，看護師国家試験合格率は98～100％を維持していた．就職については養護教諭希望者への情報提供や採用試験対応に尽力し，100％の就職率を誇っている．
5）教務委員会委員	平成27年4月 ～現在に至る	学生の履修指導や時間割調整，非常勤講師の依頼を主に担当．教職課程を専攻する看護学生の履修に関しては特に，各学生に最適な方法で履修計画を練り，免許取得に向けて万全なサポート体制を整えた．
6）看護教育セミナーの企画・運営	平成 27 年 11 月， 平成28年2月	「大学と臨地実習病院連携による基礎看護技術教育プログラムの開発と実施」キックオフセミナーとして，藤沢市教育文化センター主任研究員目黒悟先生を講師にお招きし，「看護教育を拓く～教える人の学びと成長～ 指導力向上ためのリフレクション」とのテーマで臨床指導者と教員対象のセミナーを2回に渡り開催した．計画段階から運営に至るまでの全てを担当し，滞りなく有意義なセミナーを開催することができた．
7）大学教職課程委員会委員	平成28年4月 ～平成 29 年3月	学生の履修，教員免許取得がスムーズに運ぶよう教育環境を整えた．在任中の主な活動は，養護実習指導の充実に関する検討，教員採用試験対策講座の担当，教育委員会との情報交換・連携等である．都道府県からの採用情報をチェックし，学生への情報伝達，試験対策を緻密に講じることにより，教員採用試験に合格する学生数が昨年度に比し増加した．
8）フィジカルアセスメントセミナーの企画・運営	平成29年2月	「大学と臨地実習病院連携による基礎看護技術教育プログラムの開発と実施」第2回教育セミナ

		ーとして，名古屋大学大学院医学系研究科 基礎・臨床看護学講座教授 山内豊明先生を御招きし「教育・臨床現場に活かせるフィジカルアセスメント」とのテーマで臨床指導者と教員対象のセミナーを開催した．臨床現場でもフィジカルアセスメントの活用が難しいと感じている看護師はまだ多く，本セミナーを受講した参加者のほとんどが「わかりやすかった」「アセスメントの重要性が理解できた」等，肯定的な意見を挙げていた．
4　その他 1）日本防菌防黴学会	平成29年2月	日本防菌防黴学会からの依頼を受け，学会誌Vol.45，No.2，会員の声欄に「地域に働きかける学生の力」とのタイトルで寄稿した．文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」に採択された大学で開講されている授業「つながりプロジェクト」として尼崎市をフィールドに2年生が演習に臨む中での学びと成長について記載した．

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1．米国疫病管理センター（CDC）予防接種諮問委員会（ACIP）勧告「インフルエンザの予防と対策」2008年版（翻訳）	共著	平成21年1月	日本公衆衛生協会	「インフルエンザワクチンの有効性と安全性」の章で，不活化インフルエンザワクチン接種により防御レベルの抗体を獲得すること，ただし9歳未満の若年小児においてはワクチン接種を初めて受けるシーズンには2回接種が必要であることについて記載した．
2．米国疫病管理センター（CDC）予防接種諮問委員会（ACIP）勧告「インフルエンザの予防と対策」2009年版（翻訳）	共著	平成21年12月		ワクチン接種を推奨すべき対象集団は6ヶ月～18歳の小児，インフルエンザ関連合併症のハイリスク者とその同居家族，保険医療従事者，免疫不全者との濃厚接触者，妊娠・授乳中の女性であるこ

				と，診療施設等で接種勧告を実施し，ワクチンが供給され次第すみやかに接種を開始する必要性について記載した.
3. 米国疫病管理センター（CDC）予防接種諮問委員会（ACIP）勧告「インフルエンザの予防と対策」2010 年版（翻訳）	共著	平成 23 年 3 月	日本公衆衛生協会	診療・長期療養施設等で接種勧告を実施すること，不活化インフルエンザワクチン接種の副反応は軽微であることを被接種者に説明し，ワクチン入手次第すみやかに接種を開始する重要性，また，将来的に総ての人々に一律にワクチンを接種できるよう（universal vaccination）公衆衛生活動や研究が必要であることについて記載した.
（学術論文） 1. A Guide to Clinical Management and Public Health Response for Hand, Foot and Mouth Disease (HFMD) （手足口病の臨床管理および公衆衛生対策ガイドライン （査読付）（分担執筆）	共著	平成 23 年 8 月	世界保健機関西太平洋地域事務局（World Health Organization, Western Pacific Region)	東南アジアにおける手足口病の流行状況に関する疫学調査を実施した. 1997 年，マレーシアにおいて手足口病が流行し，30 例を超える死亡が報告された. それ以降も台湾やシンガポール等で断続的な流行がみられ重篤例も多数出ている. 手足口病の流行は東南アジアに多く，流行のピークは夏季，罹患者は 2 歳以下の幼児が大半を占めること，原因となるウイルスはコクサッキーA16，エンテロウイルス(EV)71 が主であるが，EV71 によるものは重篤な経過を辿る例が多いことを報告した（p.3-14, 54-61「Section I. Epidemiology」）.
2. 基礎看護教育における模擬患者参加型演習による学生の学び - 対象理解のためのコミ	共著	平成 30 年 10 月掲載予定	インターナショナル Nursing Care Research	A 大学看護学部 2 年次生 82 名を対象に，模擬患者（Simulated patient: SP）参加型演習の効果

ュニケーション -				について検討した．分析の結果，SP 参加演習の利点として【コミュニケーションの重要性が分かる】，【自己課題の明確化】，【実習で活用できる】，【学生に必要な態度の理解】など計 11 カテゴリーが抽出された． SP が参加することにより患者を実在の人物として捉えることができ，対象像のイメージ化が促進されたことが学びに反映したといえる．
（その他） ＜学会発表＞				
1．西太平洋地域における手足口病流行状況と重症例の特性	共同	平成 22 年 8 月	第 80 回 日本衛生学会	マレーシア，台湾，シンガポールにおける手足口病の流行状況および重症例の特性について文献考察を実施した．手足口病は小児に多く発生し，1997 年以降，東南アジアで数年毎に大流行が発生している．重症例の約 90%は 5 歳以下であり，中枢神経症状や肺水腫を呈していた．重症例から EV71 が多く分離されていたことから EV71 との関連が示唆されたが，標準的な疾病定義が存在しなかったため統一的な手法により EV71 感染例の発生状況を把握する必要性が示唆された．
2．在宅療養高齢者におけるインフルエンザ発症に関連する因子	共同	平成 22 年 10 月	第 69 回 日本公衆衛生学会	在宅療養高齢者におけるインフルエンザワクチンの有効性と発病修飾因子を明らかにするため前向き研究を実施した．結果指標を「呼吸器症状を伴う 38 度以上の発熱（インフルエンザ様疾患：ILI）」と定義し解析した結果，発病修飾因子として経管栄養（調整オッズ比＝10.5，95%＆信頼区

				間＝2.76-39.6），ステロイド・免疫抑制剤の使用が示唆された．ワクチンの有効性については，インフルエンザの流行が小規模であったため検出されなかった．
3. 重症心身障害児者施設に就職した新人看護師の職業適応に関する思い	共同	平成 25 年 8 月	第 17 回 日本看護管理学会	重症心身障害児者施設への就職は動機づけが重要であり，介護福祉士との協働，看護技術に対する不安を抱えていることを明らかにした．
4. A challenge to enhance education on nursing techniques in Japan:The development and implementation of an educational program on nursing techniques in collaboration with university academics and clinical nurses	共同	平成 26 年 3 月	Sixth Pan-Pacific Nursing Conference and First Colloquium on Chronic Illness Care	看護学生の指導にあたっている実習病院臨床スタッフが，学内での授業（生活援助および診療の補助技術演習指導）に加わることによる効果について調査し，大学と臨床現場が連携した看護技術教育プログラムの開発と実施に向けて考察した．1 年間に渡り計 6 名の臨床スタッフが演習指導に加わった結果，全ての技術において学生の理解度，技術習得度が高まること，指導者間の連携が強化されたことが示唆され，臨床スタッフが大学教育に参加する意義が窺えた．
5. 地域に向けた手洗い指導の拠点の構築	共同	平成 28 年 9 月	第 43 回 日本防菌防黴学会	A 市内の公民館 6 施設において地域住民を対象に，蛍光ローションを用いて普段の手洗い状況を観察した後，衛生学的手洗い方法について指導した．対象者にアンケートを実施した結果，手洗いの重要性について認識した人は講習会実施前の 67%から 99%に有意に増加し，正しい手洗い方法について家族や知人に伝えたい意向があることも窺えた．住民が利用しやすい場である公民館を拠点として設けることで知識の伝達

				を継続し，地域ぐるみで感染対策を講じる一助になるであろうことが示唆された.
6. 地域における手洗い指導の拠点構築 ～学生の参加がもたらす効果～	共同	平成 29 年 9 月	第 44 回 日本防菌防黴学会	A 市内の公民館 6 施設において地域住民を対象に，手洗い講習会を実施した．講習会の計画・運営は全て学生が行い，①蛍光ローションを用いて普段の手洗い状況観察，②衛生学的手洗い方法の指導，を実施した．講習会終了後にアンケートを実施した結果，手洗いの重要性と方法について理解できた対象者が 33%増加した．また，学生に指導を受けることで「熱心さが伝わる」「学生の教育に貢献できる」という反応がみられ，異世代間交流による効果が地域住民への手洗い指導に相乗効果をもたらすことが示唆された.
＜報告書＞				
1. 百日咳ワクチン有効性研究に関する文献的考察，および奨励対照研究の実施に向けた質問票の開発	共同	平成 20 年 3 月	厚生労働科学研究費補助金　新興・再興感染症研究事業「インフルエンザ及び近年流行が問題となっている呼吸器感染症の分析疫学研究」	百日咳ワクチンの有効性について検討する多施設共同症例対照研究実施に際し，実施計画および質問票作成のため過去 20 年間に報告された百日咳ワクチンの有効性研究について系統的レビューを実施した．該当論文の多くは小児を対象としており，症例定義で咳嗽の持続期間を長く設定するほどワクチン有効性が高く検出されていたワクチン有効性に影響を与える交絡因子として，年齢，性，人種，出生時以上の有無，百日咳既往，通園などが挙げられていた．これらの結果を踏まえて独自に開発した質問票を情報収集に利用することとなった.
2. 介護老人保健施設に	共同	平成 21 年 3	厚生労働科学研究費補	高齢者は若年健常成人と比較し

おけるインフルエンザワクチンの有効性，免疫原性，副反応に関する調査		月	助金　新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業「インフルエンザ及び近年流行が問題となっている呼吸器感染症の分析疫学研究」	ワクチンに対する免疫応答が低下し，免疫の持続期間が短い可能性があることから，連続した 3 シーズンに渡って高齢者施設入所者 78 名と同職員 46 名を対象に，季節性および新型インフルエンザワクチンの有効性，免疫原性，安全性を検討するため前向きコホート研究を計画した．1 年目の研究結果として，新型インフルエンザワクチン接種後の副反応について，24 時間以内の眼呼吸器症候群，重篤な副反応を入所者，職員ともみとめず，ワクチンの安全性が示唆されたことを報告した．
3. 呼吸器感染症の予防因子とリスク因子の文献的考察（中間報告）	共同	平成 21 年 3 月	厚生労働科学研究費補助金　新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業「インフルエンザ及び近年流行が問題となっている呼吸器感染症の分析疫学研究」	呼吸器感染症の予防因子とリスク因子に関する小冊子作成のため，肺炎およびインフルエンザに関する文献的検討を行った．肺炎に関する文献 2296 件，インフルエンザに関する文献 630 件を選出，そのうち 300 件の抄録レビューを実施結果から，本文レビューを行う論文を選定する際の除外基準等について検討した．記述疫学，Letter，遺伝子に関する文献，経済分析に関する文献，結果指標が人工呼吸器関連肺炎あるいは術後肺炎等を除外することを定め，報告した．
4. 健常成人における新型インフルエンザワクチンの免疫原性，安全性について	共同	平成 21 年 3 月	厚生労働科学研究費補助金 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業「インフルエンザ及び近年流行が問題となっている呼吸器感染症の分析疫学研究」	健常成人を対象に，新型インフルエンザワクチンの免疫原性および安全性について調査した．対象者 25 名の免疫応答は良好で，ワクチン接種による重篤な副反応を呈した者もいなかった．副反応の報告は接種部位の腫脹など軽微なものであったことを報告した．

5. 介護老人保健施設におけるインフルエンザワクチンの有効性，免疫原性，副反応に関する調査	共同	平成 21 年 3 月	厚生労働科学研究費補助金　新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業「インフルエンザ及び近年流行が問題となっている呼吸器感染症の分析疫学研究」	高齢者施設入所者 73 名と同職員 46 名を対象に，新型インフルエンザワクチン接種を行い，接種前後・接種後 3 週間の時点で採血，HI 抗体価を測定した．その結果，同シーズンにおいて入所者のインフルエンザ感染は認められず，接種前後の幾何平均抗体価は，入所者，職員とも有意な上昇を示し，免疫応答が良好であることが確認された．しかし，シーズン後の抗体価は入所者，職員とも有意な低下を認めており，アジュバントの添加等で免疫効果を維持させるよう検討する必要性が示唆された．
6. 介護老人保健施設におけるインフルエンザワクチンの有効性，免疫原性，副反応に関する調査	共同	平成 22 年 3 月	厚生労働科学研究費補助金　新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業「インフルエンザ及び近年流行が問題となっている呼吸器感染症の分析疫学研究」	高齢者施設入所者 78 名と同職員 46 名を対象に，季節性インフルエンザワクチン接種を行い，接種前後・接種後 3 週間の時点で採血，HI 抗体価を測定した．また，研究班で作成した共通の副反応調査票を用い，接種後 24 時間の眼呼吸器症候群，前進反応・局所反応について調査した．同シーズンのインフルエンザ発症者はいなかったが，接種前後の幾何平均抗体価は有意な上昇を認め，増加率も 2.5 倍を超えていた．また，接種後の抗体陽転率もほとんどの群で 40%を超えていた．副反応調査については，全対象者で重篤な副反応を呈した者はおらず，安全性が確認された．
:				

（看護）広瀬　正和
（看護）大浦　清
（看護）肥後　恵美子
（看護）森下　尚美